

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書468集

だい た ろう
台太郎遺跡第51次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

岩 手 県 盛 岡 市

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

台太郎遺跡第51次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されており、それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要とされます。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれその土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところであります。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の事前の緊急発掘調査を行ない、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査に関連して、平成15年度に調査した台太郎遺跡第51次調査の成果をまとめたものであります。このたびの調査では古墳時代末から平安時代に営まれた集落跡が姿をあらわし、貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時にその保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成17年1月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 合 田 武

例 言

1. 本書は、岩手県盛岡市向中野字八日市場 8-4 ほか^{いわてけんもりおかしむかいなかのあざようかいちば}に所在する^{だいたろういせき}台太郎遺跡第51次調査の成果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、盛岡南新都市土地区画整理事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は盛岡市都市整備部盛岡南整備課と岩手県教育委員会との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 岩手県遺跡登録台帳に記載されている遺跡番号はLE16-2269、遺跡略号はODT-03-51である。
4. 発掘調査の期間／調査面積／担当者は以下のとおりである。

野外調査 平成15年4月11日～11月10日／6,616㎡／中村絵美・石崎高臣・
阿部眞澄・早坂 淳

室内整理 平成15年11月1日～平成16年3月31日／中村絵美・石崎高臣
5. 本報告書は、I～III、IV章の概要及び各遺構の遺物は中村、その他のIV・V章は中村・石崎が分担して執筆した。各執筆分担は、IV章は表4 遺構一覧、V章は文末に明記している。編集は中村が担当した。
6. 遺物の分析鑑定は次の機関に委託した。(敬称略)
 - (1) 火山灰分析 パリノ・サーヴェイ株式会社
 - (2) 樹種同定 パリノ・サーヴェイ株式会社
 - (3) 赤色顔料分析 パリノ・サーヴェイ株式会社
 - (4) 骨類同定 熊谷 賢 (海と貝のミュージアム)
 - (5) 炭化材同定 早坂松次郎 (社会法人岩手県木炭協会)
 - (6) 石質鑑定 花崗岩研究会
7. 本報告書作成にあたり、次の方々にご協力・ご指導いただいた。(敬称略)

宇部則保 (八戸市教育委員会)、佐藤敏幸 (宮城県矢本町教育委員会)、千葉孝弥 (多賀城市教育委員会)、鳥羽政之 (埼玉県岡部町教育委員会)、長島栄一 (仙台市教育委員会)、平川南 (国立歴史民俗博物館)、村田晃一 (宮城県教育委員会)、八木光則 (盛岡市教育委員会)
8. 野外調査では、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会、遺跡周辺の住民の方々にご協力いただいた。
9. 土層の観察は、『新版標準土色帖』(小山・佐竹：1989)によった。
10. 遺跡内の基準点測量は、(株)吉田測量設計に委託した。
11. 基準点及び調査区内のグリッド杭の打設には、平面直角座標第X系(日本測地系)を用いた。
12. 調査成果の一部は、現地説明会資料や調査略報にその時点の概略を公表しているが、本書との記載事実が異なる場合は、すべて本報告書優先する。
13. 本遺跡の出土遺物及び諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターが保管・管理している。

目 次

序
例言

[本 文]

I. 調査に至る経過	2
II. 遺跡の立地と環境	
1. 遺跡の位置	2
2. 周辺の地形と立地	2
3. 基本土層	4
4. 周辺の遺跡	4
5. 過去の調査	4
III. 野外調査と室内整理の方法	
1. 野外調査	10
2. 室内整理	13
IV. 検出遺構と出土遺物	
1. 概要	17
2. 竪穴住居跡	18
3. 住居状遺構	75
4. 土坑	79
5. 焼土遺構	97
6. 井戸跡	106
7. 溝跡	108
8. 柱穴状土坑	129
9. 遺構外遺物	129
V. まとめ	
1. 遺構	207
2. 遺物	208
3. RA580竪穴住居跡出土関東系土師器について	214
付編 1. 火山灰分析	220
付編 2. 樹種同定	222
付編 3. 赤色顔料分析	225
付編 4. 動物遺存体	227

報告書抄録

〔 表 〕

表 1	周辺の遺跡……………	6・7	表 6	出土遺物一覧……………	179～204
表 2	過去の調査……………	8	表 7	溝跡出土遺物一覧……………	205・206
表 3	基準点・区画割付杭一覧……………	10	表 8	墨書土器一覧……………	210
表 4	柱穴一覧……………	130	表 9	溝跡出土遺物重量一覧……………	213
表 5	遺構一覧……………	131～134			

〔 図 版 〕

第 1 図	岩手県全図・遺跡の位置……………	1	第31図	RA593竪穴住居跡……………	50
第 2 図	周辺の地形分類図……………	3	第32図	RA594竪穴住居跡……………	52
第 3 図	基本土層図……………	4	第33図	RA595竪穴住居跡……………	54
第 4 図	周辺の遺跡……………	5	第34図	RA596竪穴住居跡……………	56
第 5 図	周辺地形と調査範囲図……………	9	第35図	RA597竪穴住居跡……………	59
第 6 図	グリッド設定図……………	11	第36図	RA598竪穴住居跡……………	61
第 7 図	実測図凡例……………	14	第37図	RA599竪穴住居跡……………	62
第 8 図	調査区全体図……………	15・16	第38図	RA215竪穴住居跡……………	62
第 9 図	RA580竪穴住居跡 (1)……………	19	第39図	RA293竪穴住居跡……………	64
第10図	RA580竪穴住居跡 (2)……………	20	第40図	A区北東部全体図 (縄文)……………	65
第11図	RA581竪穴住居跡 (1)……………	22	第41図	RA600住居跡……………	67
第12図	RA581竪穴住居跡 (2)……………	23	第42図	RA601住居跡……………	69
第13図	RA581竪穴住居跡 (3)……………	24	第43図	RA602住居跡 (1)……………	71
第14図	RA582竪穴住居跡 (1)……………	27	第44図	RA602住居跡 (2)……………	72
第15図	RA582竪穴住居跡 (2)……………	28	第45図	RA603住居跡・RE063住居状遺構 (1)……………	73
第16図	RA583竪穴住居跡 (1)……………	30	第46図	RE063住居状遺構 (2)……………	74
第17図	RA583竪穴住居跡 (2)……………	31	第47図	RE062住居状遺構……………	75
第18図	RA583竪穴住居跡 (3)……………	32	第48図	RE064住居状遺構……………	78
第19図	RA584竪穴住居跡 (1)……………	33	第49図	RD土坑 (1)……………	98
第20図	RA584竪穴住居跡 (2)……………	34	第50図	RD土坑 (2)……………	99
第21図	RA585竪穴住居跡……………	36	第51図	RD土坑 (3)……………	100
第22図	RA586竪穴住居跡 (1)……………	38	第52図	RD土坑 (4)……………	101
第23図	RA586竪穴住居跡 (2)……………	39	第53図	RD土坑 (5)……………	102
第24図	RA587竪穴住居跡……………	41	第54図	RD土坑 (6)……………	103
第25図	RA588竪穴住居跡……………	42	第55図	RD土坑 (7)……………	104
第26図	RA589竪穴住居跡……………	43	第56図	RD土坑 (8)・RF焼土遺構……………	105
第27図	RA590竪穴住居跡……………	45	第57図	RI017井戸跡……………	107
第28図	RA591竪穴住居跡……………	46	第58図	A区全体図……………	117・118
第29図	RA592竪穴住居跡 (1)……………	47	第59図	A区R G溝跡……………	119
第30図	RA592竪穴住居跡 (2)……………	48	第60図	A区旧河道・基本層序……………	120

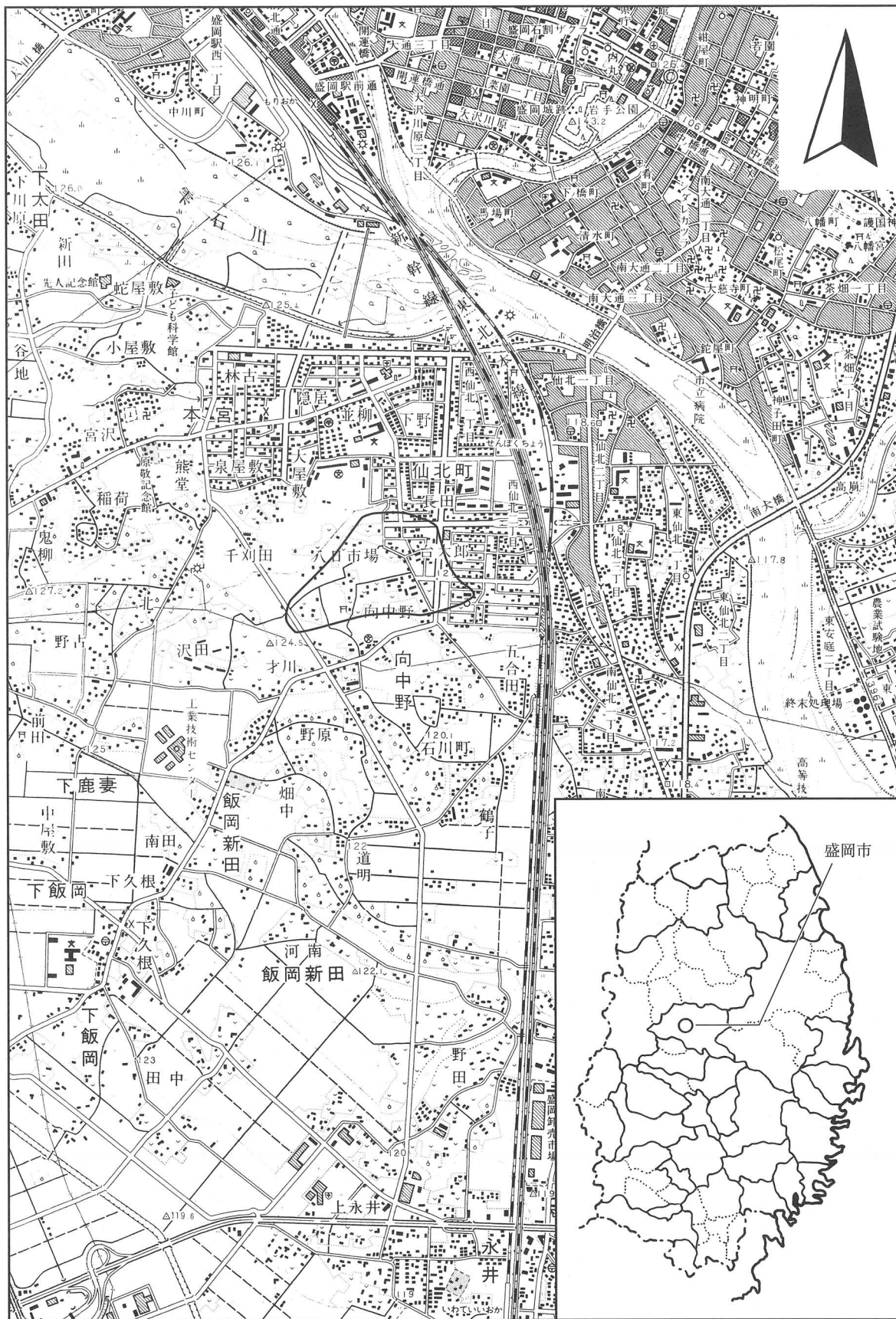
第61図	B区全体図	121
第62図	C区全体図	122
第63図	D区全体図	123・124
第64図	E区全体図	125
第65図	F区全体図	127・128
第66～91図	RA竪穴住居跡出土遺物 (1)～(26)	135～160
第92図	RA竪穴住居跡(27)・ RE住居状遺構出土遺物	161
第93～95図	RD土坑出土遺物(1)～(3)	162～164
第96・97図	RI井戸跡出土遺物(1)・(2)	165・166

第98～105図	RG溝跡出土遺物(1)～(8)	167～174
第106図	RG溝跡(9)・遺構外出土遺物・ 銭貨・土製品	175
第107図	縄文・弥生土器(1)	176
第108図	縄文・弥生土器(2)	177
第109図	石器・石製品、近世陶器	178
第110図	岩手県出土の関東系土師器	214
第111図	RA580出土土師器坏(左)熊野遺跡 第60次調査1号住居出土土器(右)	216
第112図	御駒堂遺跡第12号住居跡出土土器	217

[写真図版]

写真図版1	RA580竪穴住居跡	231
写真図版2	RA586・RG498出土遺物	232
写真図版3	空中写真(1)	233
写真図版4	空中写真(2)	234
写真図版5	空中写真(3)	235
写真図版6	調査前風景・検出・基本層序	236
写真図版7	RA580竪穴住居跡(1)	237
写真図版8	RA580竪穴住居跡(2)	238
写真図版9	RA580竪穴住居跡(3)	239
写真図版10	RA581竪穴住居跡(1)	240
写真図版11	RA581竪穴住居跡(2)	241
写真図版12	RA582竪穴住居跡	242
写真図版13	RA583竪穴住居跡	243
写真図版14	RA584竪穴住居跡	244
写真図版15	RA585竪穴住居跡	245
写真図版16	RA586竪穴住居跡(1)	246
写真図版17	RA586竪穴住居跡(2)	247
写真図版18	RA587竪穴住居跡	248
写真図版19	RA588竪穴住居跡	249
写真図版20	RA589竪穴住居跡	250
写真図版21	RA590竪穴住居跡	251
写真図版22	RA591竪穴住居跡	252
写真図版23	RA592竪穴住居跡	253

写真図版24	RA593竪穴住居跡	254
写真図版25	RA594竪穴住居跡	255
写真図版26	RA595竪穴住居跡(1)	256
写真図版27	RA595竪穴住居跡(2)	257
写真図版28	RA596竪穴住居跡	258
写真図版29	RA597竪穴住居跡	259
写真図版30	RA598・599竪穴住居跡	260
写真図版31	RA215竪穴住居跡	261
写真図版32	RA293竪穴住居跡	262
写真図版33	RA600住居跡	263
写真図版34	RA601住居跡	264
写真図版35	RA602住居跡	265
写真図版36	RA603住居跡	266
写真図版37	RE063住居状遺構・A区北端部	267
写真図版38	RE064住居状遺構	268
写真図版39	RE062住居状遺構	269
写真図版40～52	RD土坑(1)～(13)	270～282
写真図版53	RD土坑(14)・ RF065焼土遺構	283
写真図版54	RI017井戸跡	284
写真図版55～66	RG溝跡(1)～(12)	285～296
写真図版67～100	出土遺物(1)～(34)	297～330



第1図 岩手県全図・遺跡の位置

盛岡・矢幅 1 : 25,000

I. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市として発展していくことを目指し、現在の既成市街地の他に南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都市を形成するために策定された土地区画整理事業である。

この事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が地域振興整備公団に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間に事業予定期間とし、面積約313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、本調査に関しては盛岡市教育委員会が試掘を行い、調査を必要とする範囲を確定し、財団法人岩手県文化振興事業団の受託業務とすることとなった。

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

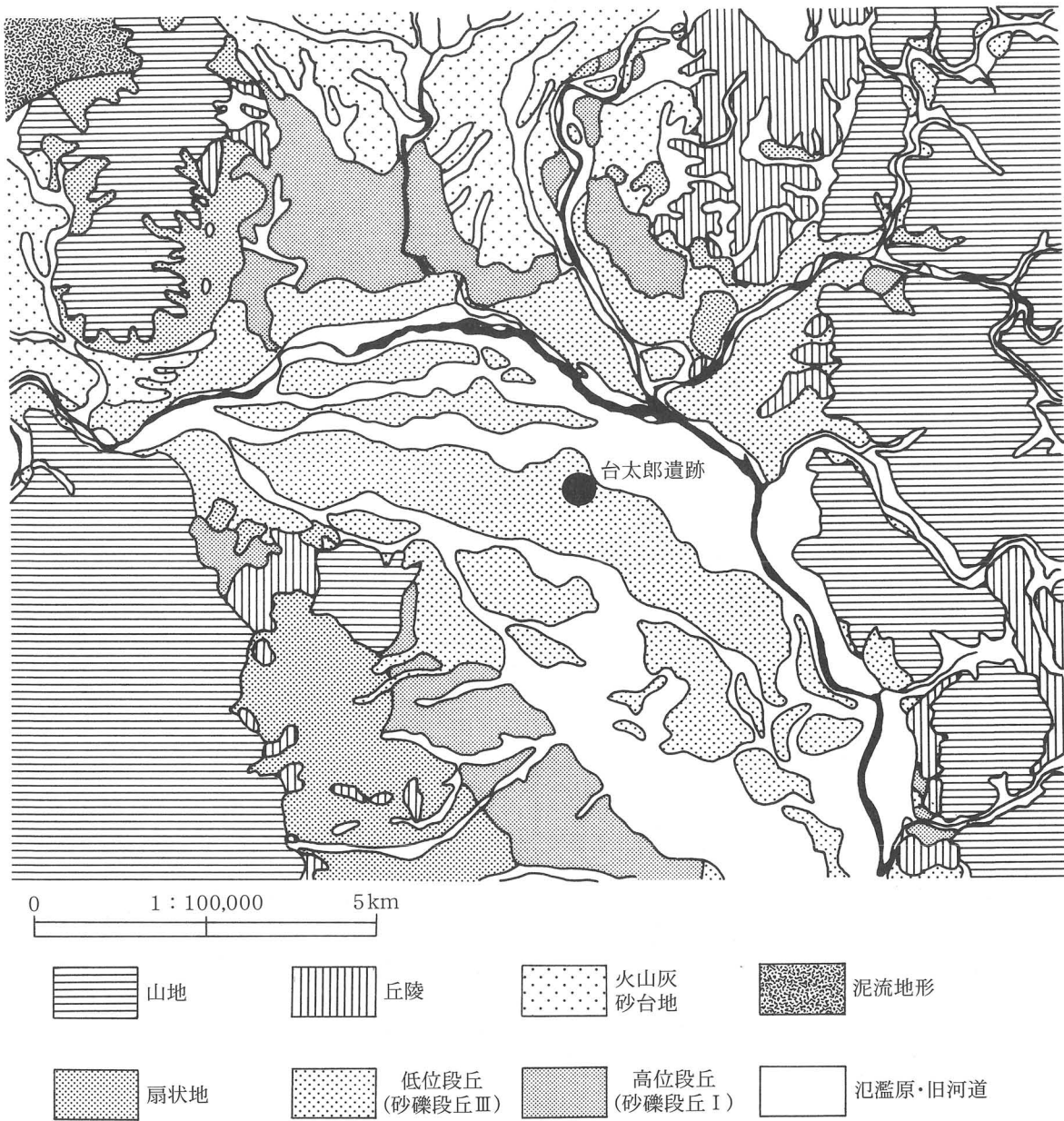
台太郎遺跡の所在する盛岡市は、県のほぼ中央に位置する。東は下閉伊郡岩泉町・川井村、西は岩手郡滝沢村・雫石町、北は玉山村、南は紫波郡矢巾町・紫波町、稗貫郡大迫町に接する。岩手県の県庁所在地で、総面積489.15㎡、人口約28万8千人（平成15年）を有する。遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から西900mに位置する。国土地理院発行の2万5千分の1の地形図「小岩井農場」NJ-54-13-14-4（盛岡14号-4）及び「南昌山」NJ-54-13-15-3（盛岡15号-3）の図幅内に含まれ、北緯39°40′56″、東経141°08′28″（世界測地系）付近である。

2. 周辺の地形と立地

遺跡の立地する盛岡市は、北上盆地の北部に位置し、市内を南流する北上川を本流に、西から雫石川、東から中津川・梁川が合流する。北上川は、主流部の延長249km、流域面積10,250㎡、支流数216を有する東北地方最大の河川である。岩手県岩手郡御堂観音境内にその源を発し、西側に連なる奥羽脊梁山脈と東側に広がる北上山地の間の低地帯を涵養しながら宮城県石巻市で太平洋に注ぐ。この流域は上・中・下流に分かれており、盛岡市北部の四十四田峡谷と一関市狐禅寺を境とする。盛岡市は中流域の上流部に当たる。

北上川中流域の地形は背後の山地構造の違いによって対照的な様相を呈している。新第三系および火山岩を主体とする褶曲山地である奥羽山脈は、各支流に大量の土砂を供給し、大小の扇状地が複合する広い平野部を西岸に作り出している。これらの扇状地は更新世中・後期に形成されたもので、支流によって解析され段丘化していく。これに対して、老年期山地がその後地殻変動によって隆起順平原化した北上山地側では、山地に続く丘陵辺縁部に小規模な段丘と沖積地が観察されるにすぎない。中流域には砂礫段丘Ⅰ（高位）、

砂礫段丘Ⅱ（中位）、砂礫段丘Ⅲ（低位）の段丘面が形成されている。古代集落が多く立地する低位段丘面は雫石川の度重なる氾濫を受けており、旧河道や自然堤防が複雑に入り組んでいる。



第2図 周辺の地形分類図

3. 基本土層 (第3図・写真図版8)

調査区内の地形は現況ではほぼ平坦であるが、宅地や農地として利用されてきた結果、旧地表面の改変が著しい区域もみうけられる。したがって、表土から下位の地層について一様ではないが、総じては、過去の調査における知見とほぼ同様のあり方を示している。

I層. 10YR3/2黒褐色粘土質シルト 現表土。田や畑の耕作土。層厚は10~30cmである。

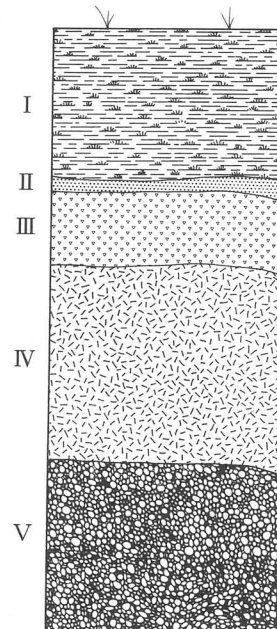
II層. 10YR4/4褐色粘土 旧水田の床土。下部には赤褐色の水酸化鉄の集積がみられる。層厚は2~3cm。

III層. 10YR2/2黒褐色シルト 褐色土と黒色土の漸移層で、層厚は10~20cmである。本来的には本層が古代の検出面となると思われる。

IV層. 10YR4/4褐色シルト 層厚は地点によって異なる。本次調査の遺構の大半は本層上面で検出した。

V層. 10YR4/6褐色砂礫層 低位沖積段丘の基盤をなす層。層厚は不明である。

なお、各区の現況及び部分的な層序の相違については「IV章の1.概要」にて述べたい。



第3図 基本土層図

4. 周辺の遺跡 (第4図・表1)

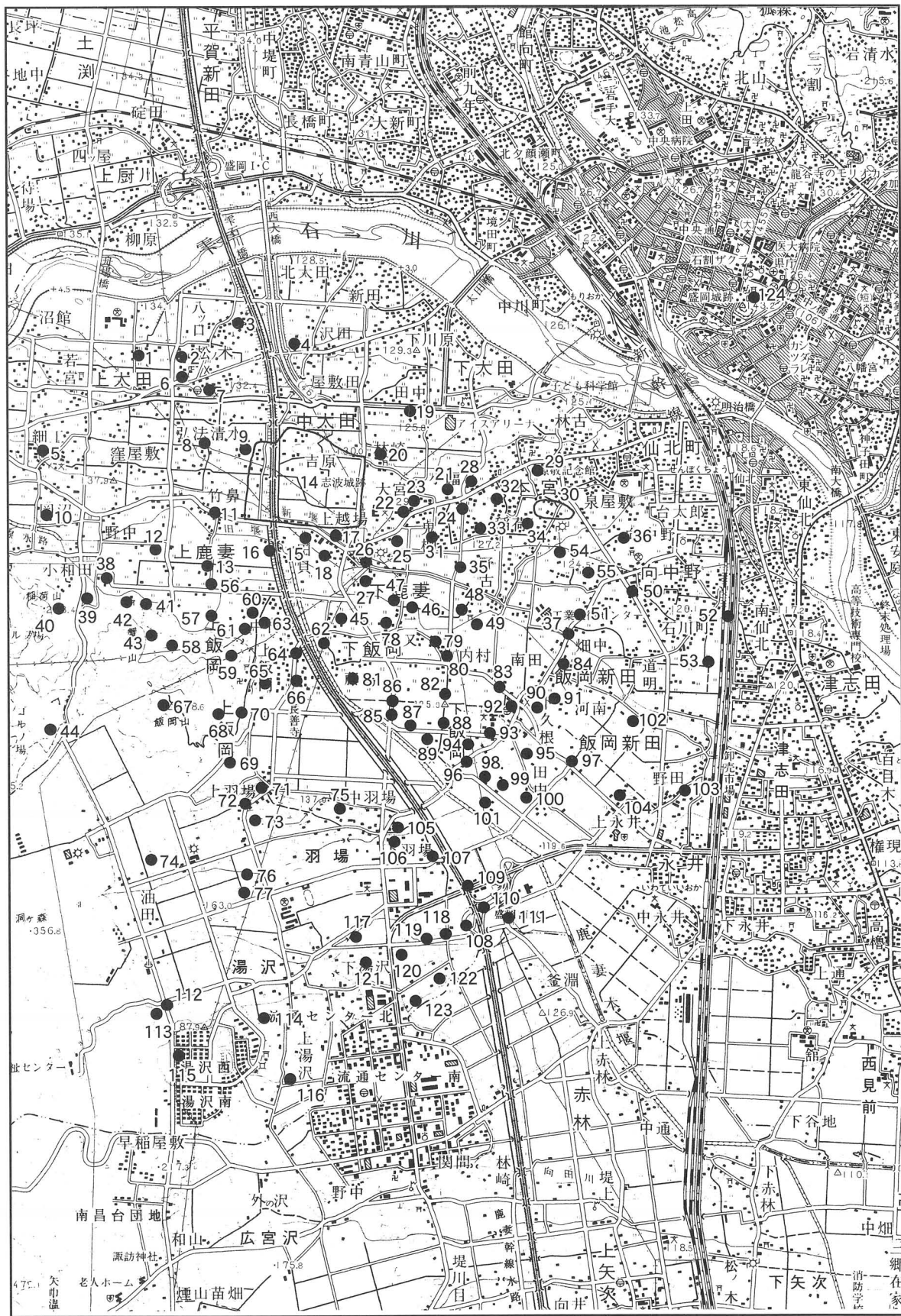
平成12年度の岩手県教育委員会のまとめによると盛岡市内の遺跡は、約500ヶ所確認されている。第4図には雫石川右岸を中心とする範囲に所在する遺跡の分布を示した。

これらの遺跡の分布状況を見ると、縄文時代では、雫石川左岸の台地上には大館遺跡群をはじめ多くの集落遺跡が分布するのに対し、右岸の沖積段丘面には極僅かの遺跡が散見されるにすぎない。だが、近年本遺跡を始め本宮熊堂A遺跡、本宮熊堂B遺跡などで、縄文時代晩期の遺構が確認されるようになり、今後当地域における縄文時代の様相が次第に明らかになるものと思われる。

一方で古代の遺跡は縄文時代の分布状況とは異なり、雫石川右岸に集中し、八掛遺跡などの8世紀代の集落遺跡や、太田蝦夷森古墳群、803年に造営された城柵遺跡である志波城、林崎遺跡などの集落遺跡が数多く分布している。近年さらに本事業に伴い、本宮熊堂B遺跡・飯岡才川遺跡・飯岡沢田遺跡・野古A遺跡など古代遺跡の調査例が増加している。これらの遺跡は7世紀後半~8世紀代および9世紀後半~10世紀前半に集中し、志波城存続期間と併行する時期の集落跡は少ない。

5. 過去の調査 (表2)

台太郎遺跡は昭和60年に第1次調査が始まる。当初は遺跡として把握されておらず、土地区画整理事業の進行に伴い新たに発見された。以降、平成15年度末までに52次の調査が行われ、調査面積の合計は13万㎡を超える。竪穴住居跡は合計600棟にも及び、古代を中心とした一大集落であることが判明している。今回はそのうち第51次調査についての報告である。



第4図 周辺の遺跡

盛岡・日誌 1:50,000

表1 周辺の遺跡(1)

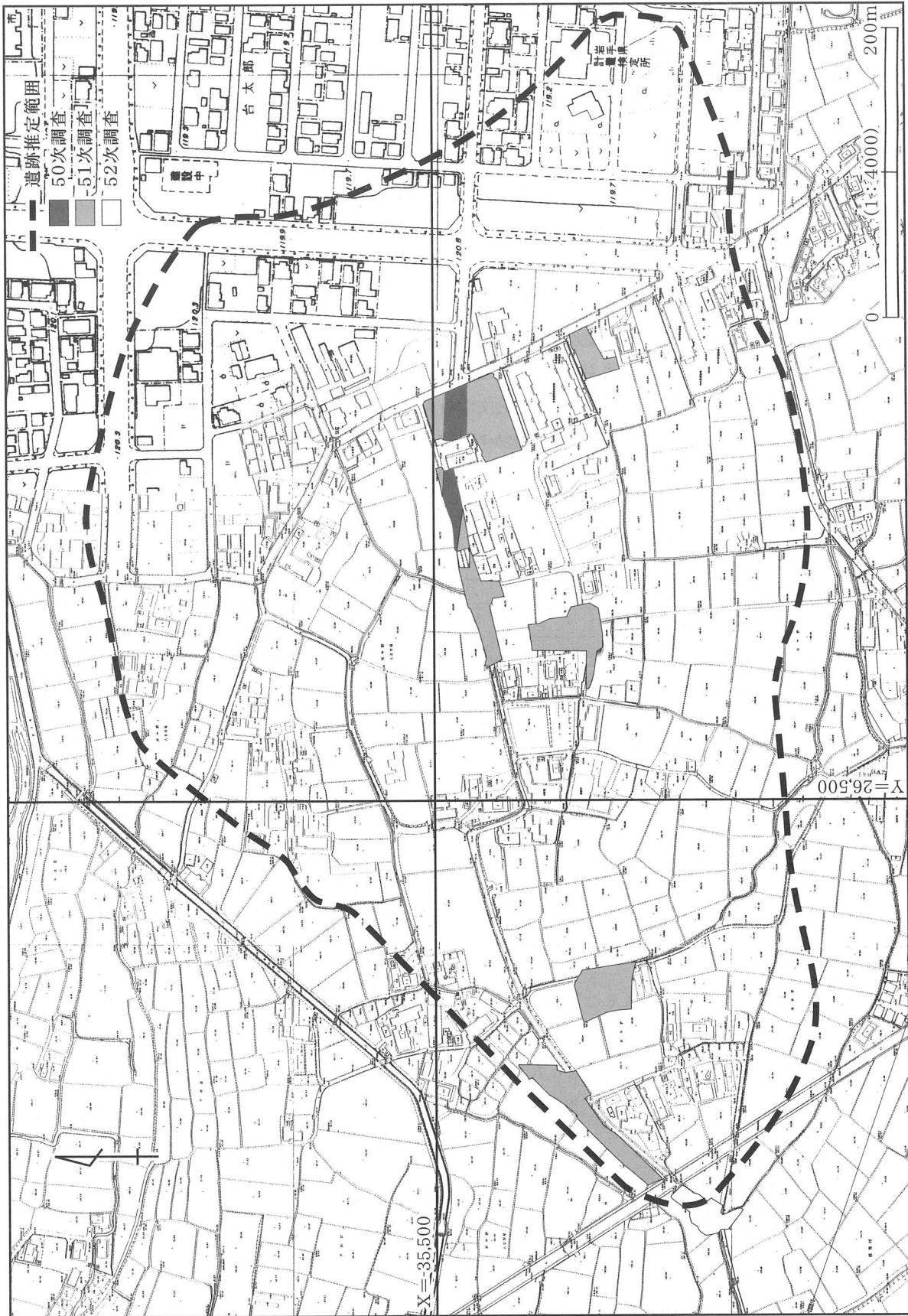
No.	遺跡名	種別	時代/備考
1	細田	散布地	平安/土師器
2	松ノ木	集落地	平安/土師器
3	八ツ口	散布地	古代/土師器/住居跡
4	八掛	集落跡	古代/土師器/住居跡/土坑
5	太田蝦夷森古墳	古墳	奈良/土師器/刀・玉/和同開珎
6	館	集落跡	平安/土師器/住居跡/城館跡/堀
7	上野屋敷	散布地	古代/土師器
8	畑中	集落跡	古代/土師器
9	小沼	集落跡	平安/土師器・緑釉陶器/住居跡
10	一本木	集落跡	平安/土師器/住居跡
11	五兵衛新田	集落跡	古代/土師器
12	天沼	集落跡	古代/土師器
13	竹鼻	集落跡	古代/土師器
14	志波城	城柵跡	平安/土師器/掘立柱建物跡/門跡
15	田貝	集落跡	古代/土師器/住居跡
16	竹花前	集落跡	平安/土師器・緑釉陶器/住居跡
17	新堀端	城柵跡	縄文・古代/縄文土器(晩)・土師器
18	石仏	集落跡	古代/土師器
19	田中	散布地	平安/土師器
20	林崎	集落跡	平安/土師器/掘立柱建物跡
21	小幡	集落跡	平安/土師器/住居跡/掘立柱建物跡
22	大宮	集落跡	古代・中世/土師器/住居跡
23	大宮北	散布地	平安/土師器/住居跡/土坑/溝跡
24	鬼柳A	集落跡	古代/土師器
25	小林	集落跡	古代/土師器
26	水門	集落跡	古代/土師器
27	上越場	集落跡	古代/土師器
28	宮沢	散布地	平安/溝状遺構
29	本宮熊堂A	散布地	縄文/縄文土器(晩)/住居跡等
30	本宮熊堂B	集落跡	奈良～近世/土師器/住居跡/掘立柱建物跡/土坑
31	鬼柳B	集落跡	古代/土師器
32	稲荷	集落跡	平安/土師器・須恵器/溝跡
33	鬼柳C	集落跡	古代/土師器
34	野古A	集落跡	古墳末～平安/土師器・須恵器/住居跡/土坑/溝跡
35	野古B	散布地	古代/土師器
36	台太郎	集落跡	縄文・古墳末～近世/土師器/住居跡/掘立柱建物跡/溝跡
37	矢盛	集落跡	平安/土師器/住居跡/土坑/溝跡
38	蟹沢下	散布地	古代/土師器
39	二ツ沢	散布地	縄文・古代/土器(中・後)/土師器
40	小和田館	城柵跡	中世/堀/郭
41	蟹沢	散布地	縄文・古代/縄文土器・土師器
42	へび堂	散布地	縄文・古代/縄文土器・土師器
43	オミ坂	散布地	縄文・平安/縄文土器・土師器
44	大ヶ森	散布地	縄文・古代/縄文土器・土師器
45	辻屋敷	集落跡	古代/土師器
46	西田A	集落跡	古代/土師器
47	上越場B	集落跡	古代/土師器
48	西田B	集落跡	古代/土師器・須恵器
49	前田	集落跡	古代/土師器
50	向中野館	城柵跡	中世/堀/土塁
51	細谷地	集落跡	平安/土師器/住居跡/陥穴状土坑/溝
52	南仙北	集落跡	縄文・古代/縄文土器・土師器
53	向中野幅	集落跡	古代/土師器
54	飯岡沢田	集落跡	古墳末～中世/土師須恵/古墳/周溝/環濠/住居跡
55	飯岡才川	集落跡	平安/土師器・須恵器/円形周溝/掘立柱建物跡/住居跡
56	中村	散布地	平安/土師器・須恵器
57	月見山	散布地	縄文・古代/土師器
58	山中	散布地	縄文・古代/縄文土器・土師器
59	飯岡館	城柵跡	中世・縄文/縄文土器(中)/空堀
60	堤	散布地	縄文・古代/縄文土器・土師器
61	高館古墳群	古墳	奈良～平安/土師器・蕨手刀
62	藤島Ⅱ	散布地	平安?/土師器

表1 周辺の遺跡(2)

No.	遺跡名	種別	時代/備考
63	高館	集落跡	縄文/縄文土器(中)・石器
64	大柳Ⅰ	散布地	古代/土師器・須恵器
65	大柳Ⅱ	散布地	古代?/土師器
66	館野前	散布地	縄文/縄文土器(後)
67	飯岡山館	城館跡	中世
68	飯岡赤坂	散布地	古代
69	いたこ塚	祭祀跡	近世
70	赤坂Ⅱ	散布地	平安?/土師器
71	羽場館	城館跡	中世/空堀
72	羽場百目木	散布地	縄文/縄文土器(中)
73	砂子塚	散布地	古代/小塚
74	アイノ野	散布地	縄文/縄文土器(晩)
75	因幡	散布地	縄文・古代/縄文土器・土師器
76	木節	集落跡	平安
77	福千代	集落跡	奈良
78	二又	散布地	古代/土師器・須恵器
79	内村	集落跡	平安/土師器・常滑
80	中屋敷	散布地	古代/土師器
81	藤島Ⅰ	集落跡	縄文・古代/縄文土器・土師器
82	深淵Ⅰ	集落跡	平安/住居跡
83	高屋敷	散布地	古代/住居跡
84	法領権現塚	祭祀跡	時代不明
85	飯岡林崎Ⅱ	集落跡	平安/土師器・須恵器/住居跡/掘立柱建物跡/土坑/溝跡
86	飯岡林崎Ⅰ	集落跡	平安/土師器
87	上新田	集落跡	平安/土師器/住居跡
88	深淵Ⅱ	集落跡	平安/住居跡
89	上新田Ⅰ	集落跡	平安/住居跡/上新田と重複
90	下久根Ⅰ	散布地	縄文・古代/縄文土器・土師器
91	石持	散布地	古代/土師器・須恵器
92	高屋敷Ⅱ	散布地	平安/土師器・須恵器
93	西	集落跡	平安/土師器/住居跡
94	西田	集落跡	平安/須恵器
95	下久根Ⅱ	散布地	縄文・古代/縄文土器
96	熊堂Ⅰ	集落跡	縄文・古代/縄文土器・土師器
97	松島	集落跡	古代/土師器・須恵器
98	熊堂Ⅲ	集落跡	平安/土師器・須恵器/住居跡
99	熊堂Ⅱ	集落跡	平安/土師器・須恵器/住居跡
100	田中	集落跡	平安/土師器・須恵器・石器
101	南谷地	集落跡	平安/土師器・須恵器/住居跡
102	夕覚	散布地	古代/土師器
103	横屋	集落跡	古代/土師器・須恵器
104	葛本	散布地	古代/土師器・石器
105	新井田Ⅰ	散布地	古代/土師器・須恵器
106	新井田Ⅱ	散布地	古代/土師器・須恵器
107	新田	集落跡	平安/土師器・須恵器
108	間渡Ⅰ	散布地	古代/土師器
109	下羽場	集落跡	平安/土師器・須恵器・緑釉陶器
110	下湯沢	散布地	古代/土師器・須恵器
111	大島	散布地	古代/土師器・須恵器
112	湯壺	散布地	縄文/縄文土器(晩)・石器
113	湯壺経塚	経塚	中世/常滑
114	後島	散布地	縄文/縄文土器・石器
115	湯沢	散布地	縄文/縄文土器(前・中・後)
116	島	墳墓	時代不明/小塚
117	小田Ⅰ	散布地	古代/土師器
118	間渡Ⅱ	散布地	古代/土師器・須恵器
119	間渡Ⅲ	散布地	古代/土師器・須恵器
120	森子	散布地	古代/土師器
121	小田Ⅱ	散布地	平安/土師器
122	湯沢大館	城館跡	古代～中世/土師器・須恵器
123	猪沢	散布地	古代/土師器
124	盛岡城	城館跡	中世～近世/瓦・陶磁器・その他

表2 過去の調査

次数	所在地	面積(m ²)	期 間	調 査 原 因	調 査 機 関
1	向中野1丁目地内		85.05.24～06.25	仙北西地区区画整理	盛岡市教育委員会
2	向中野1丁目地内	515	85.07.01～07.31	仙北西地区区画整理	盛岡市教育委員会
3	向中野2丁目3番地内	125	85.11.13～11.30	倉庫改築	盛岡市教育委員会
4	向中野2丁目4番地内	100		共同住宅新築	盛岡市教育委員会
5	向中野1丁目地内	50	89.05.10～05.11	個人	盛岡市教育委員会
6	向中野1丁目地内	302	90.05.07～05.26	個人	盛岡市教育委員会
7	向中野字向中野36-3	138	91.04.25～05.08	新築住宅	盛岡市教育委員会
8	向中野2丁目7番	830	91.06.17～06.27	タクシー会館新築	盛岡市教育委員会
9	向中野字向中野40	50	93.05.11	農作業小屋新築	盛岡市教育委員会
10	向中野字八日市場地内	1,200	95.04.04～04.06	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
11	向中野1丁目9番地内	320	95.06.19～06.27	倉庫改築	盛岡市教育委員会
12	向中野字八日市場地内	5,176	95.09.01～11.30	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
13	向中野字八日市場地内	4,064	96.10.14～10.25	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
14	向中野2丁目3番地内	25	96.11.25～11.29	下水道引込管工事	盛岡市教育委員会
15	向中野字八日市場地内	12,906	97.04.04～11.26	盛南開発関連	県埋文センター
16	向中野字八日市場地内	790	97.08.10～08.29	盛南開発関連	県埋文センター
17	向中野字向中野地内	10	97.08.23	個人下水配管工事	盛岡市教育委員会
18	向中野字八日市場地内	26,404	98.04.15～11.20	盛南開発関連	県埋文センター
19	向中野字八日市場地内	4,755	98.07.02～08.31	盛南開発関連	県埋文センター
20	向中野字向中野地内	1,400	98.09.17～12.21	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
21	向中野2丁目4番地内	324	98.09.25	倉庫新築	盛岡市教育委員会
22	向中野字向中野地内	2,500	99.09.01～11.02	盛南開発関連 (県警待機宿舎)	県埋文センター
23	向中野字八日市場地内	27,800	99.04.16～11.15	盛南開発関連	県埋文センター
24	向中野字向中野地内	3,425	99.05.06～07.16	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
25	向中野字八日市場地内	2,141	99.07.07～12.15	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
26	向中野字向中野地内	14,229	00.04.19～10.31	盛南開発関連	県埋文センター
27	向中野字八日市場地内	2,513	00.06.12～11.14	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
28	向中野字八日市場地内	460	00.06.29～09.08	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
29	向中野字向中野地内	125	00.07.19～08.25	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
30	向中野字八日市場	35	00.07.25～07.31	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
31	向中野字八日市場	128	00.08.01～08.08	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
32	向中野字八日市場地内	1,030	00.09.18～10.20	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
33	向中野字八日市場地内	694	00.09.22～10.13	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
34	向中野2丁目	156	00.11.20～11.22	共同住宅新築	盛岡市教育委員会
35	向中野字向中野地内	4,394	01.04.17～08.02	盛南開発関連	県埋文センター
36	向中野字向中野地内	290	01.05.22～06.05	盛南開発関連	県埋文センター
37	向中野字向中野20他	872	01.05.28～06.22	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
38	向中野字向中野地内	309	01.06.01～06.15	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
39	向中野字八日市場地内	1,096	01.08.01～11.02	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
40	向中野字八日市場	300	01.08.01～09.19	住宅建替	盛岡市教育委員会
41	向中野字八日市場	220	01.08.02～09.19	住宅建替	盛岡市教育委員会
42	向中野字八日市場	123	01.11.26～12.12	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
43	向中野字向中野	112	01.11.26～12.12	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
44	向中野字八日市場地内	2,907	02.04.09～08.05	盛南開発関連	県埋文センター
43補	向中野字向中野	42	02.04.22	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
45		1,618	02.05.07～08.09	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
46		334	02.10.11～11.12	共同住宅	盛岡市教育委員会
47		483	02.11.06	店舗	盛岡市教育委員会
48		326	02.11.21～11.22	共同住宅	盛岡市教育委員会
49		48	02.12.24～12.25	盛南開発関連	盛岡市教育委員会
50	向中野字向中野地内	540	03.06.10～06.30	盛南開発関連	県埋文センター
			03.10.21～11.10		
51	向中野字八日市場地内	6,616	03.04.11～11.10	盛南開発関連	県埋文センター
52	向中野字向中野地内	540	03.08.01～09.03	国道46号バイパス関連	県埋文センター



第5図 周辺地形と調査範囲図

Ⅲ 野外調査と室内整理の方法

1. 野外調査

(1) 調査面積

調査開始前は、9箇所9,466㎡を調査範囲として予定していたが、最終面積は6箇所6,616㎡となった。

(2) グリッドの設定・区割 (第6図)

①グリッドの設定

グリッドの設定については、平面直角座標第X系(日本測地系)を用いた。盛岡市教育委員会の方針に順じ、 $X = -35,500$ 、 $Y = 26,500$ に調査座標原点を設けた。この原点を起点として調査区全体を覆うように、一辺50mの大グリッドを設定し、さらにこれを一辺2mの小グリッドに区割した。大グリッドは原点から西に算用数字の1・2…、南にアルファベット大文字のA・B・C…として「1A」「1B」と表した。小グリッドは、東から西へ算用数字の1～25、北から南へアルファベット小文字のa～yとして、「1A1b」「3B2c」と大グリッドと組み合わせて表現した。実際の区画設定には、下表の基準点2点・区画割付杭6点を打設し、これを用いた。

表3 基準点・区画割付杭一覧

	日本測地系		世界測地系		H	グリッド
	X	Y	X	Y		
基1	-35600.000	26300.000	-35,292.3054	26,000.4178	121.895	3-D1a
基2	-35510.000	26750.000	-35,202.3039	26,450.4091	120.753	1F6a
補1	-35570.000	26300.000	-35,262.3050	26,000.4184	123.385	2-D11a
補2	-35600.000	26390.000	-35,292.3052	26,090.4158	121.669	3-C1u
補3	-35630.000	26390.000	-35,322.3057	26,090.4155	121.602	3-C16u
補4	-35560.000	26628.000	-35,252.3048	26,328.4111	121.019	2C6o
補5	-35590.000	26628.000	-35,282.3058	26,328.4107	120.990	2C21o
補6	-35510.000	26780.000	-35,202.3038	26,480.4085	120.705	1F6p
補7	-35600.000	26800.000	-35,292.3053	26,500.4065	120.795	2G6a
補8	-35600.000	26820.000	-35,292.3052	26,520.4063	120.799	2G6k

②区割

調査区が遺跡内6箇所に分かれることから、便宜的に、西側から順にA～F区と命名した。

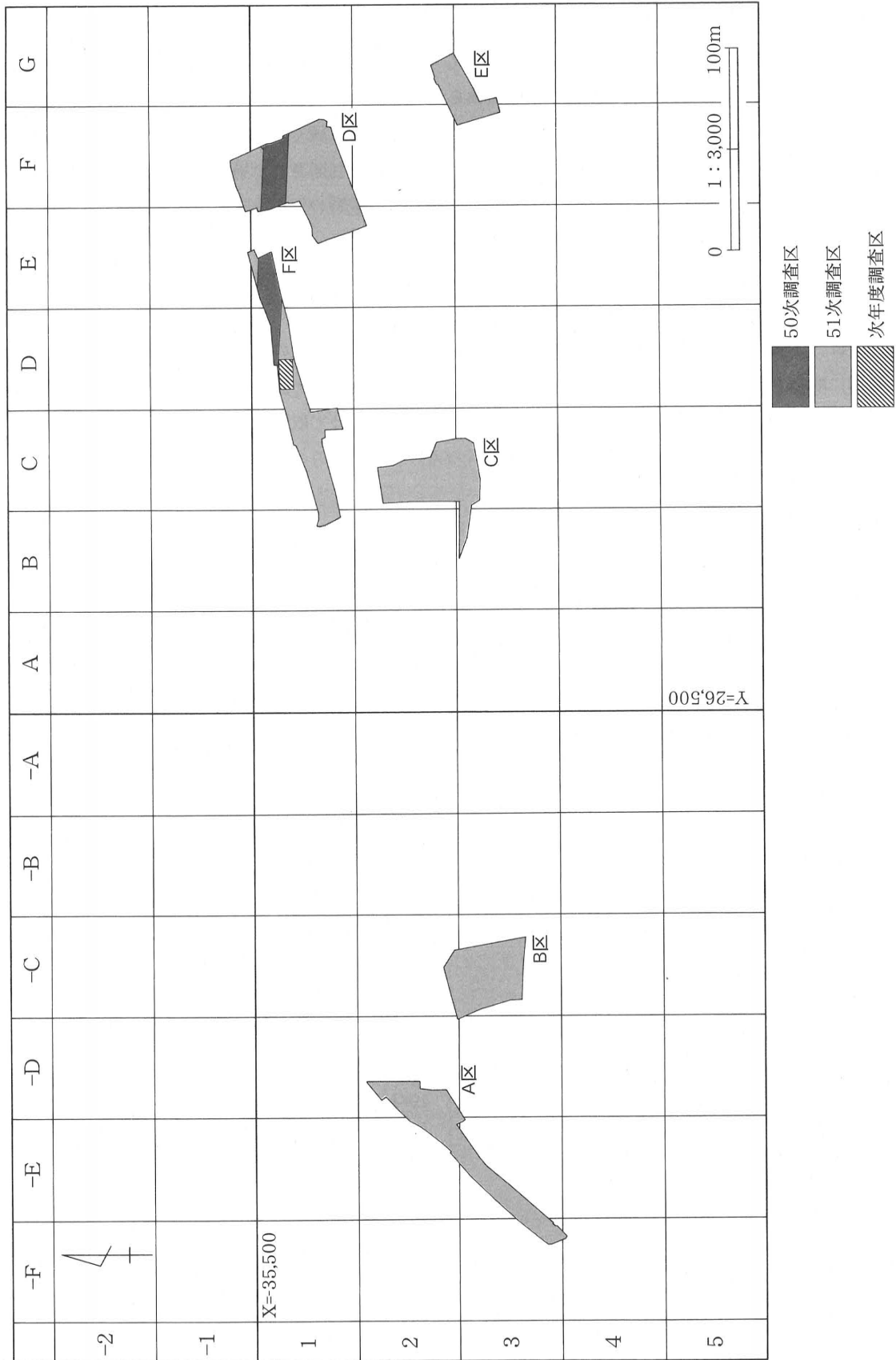
(3) 粗掘り・遺構検出

調査区内に任意に試掘トレンチを設定し人力掘削を行い、土層の堆積状況と遺構検出面を観察した。その結果ほとんどの区域で地山層(IV層)上面まで後世の掘削が及んでいることが判明し、表土を重機で除去した。表土除去後、鋤簾・両刃草刈り・移植ベラを用いて遺構検出作業を行った。

(4) 遺構名のつけ方

①野外調査

遺構種類ごとに仮名称をつけた。「略号・番号」の順で、竪穴住居跡は「RA001」、土坑は「RD050」と言うようになる。柱穴状土坑については「区域名・遺構略号(p)・番号」の順で、「A区p1」「D区p10」というように命名した。住居内の柱穴については遺構略号をppとして上記のものと区別した。



第6図 グリッド設定図

②報告書掲載

野外調査時および室内整理時には、検出時に命名した仮名称を変更することなく（遺構種類が異なっていた場合も含めて）、報告書掲載時に新たに掲載名称をつけた。命名については、盛岡市教育委員会と同様に行い下記の略号を用いて行った。各遺構の番号は、過去の調査から続く通し番号を採用した。またこれまでの調査区から本次調査区へ続く遺構のうち、明らかに同一遺構と判断された場合は、過去の調査時に命名された名称をそのまま用いた。なお柱穴状土坑に関しては野外調査時の仮名称をそのまま使用している。

竪穴住居跡…RA 掘立柱建物跡…RB 柱穴列…RC 土坑…RD 住居状遺構…RE
炉・焼土遺構…RF 堀・溝跡…RG 井戸跡…RI その他の遺構…RZ

(5) 遺構精査・遺物の取り上げ

精査は、遺構の規模に応じて2分法・4分法を用いて断面を残し埋土の堆積状況を記録した。遺構内遺物は層別に取り上げることはできず、上部（・中部）・下部・埋土一括と区分した。カマド周辺及び床面～下部にかけて出土したものは可能な限り出土状況を記録し番号をつけて取り上げた。遺構外の遺物は区域ごともしくは区域南部・北部といった大まかな区分を行った。

(6) 実測

遺構の実測は平面図及び断面図の作成を行った。平面実測は、1m方眼を基準にした簡易遣り方測量を主に採用し、遺構配置図・溝跡などについては光波トランシットや平板による実測も併用した。縮尺は1/20を基本としたが、竪穴住居跡のカマドでは1/10を用いる等、必要に応じて任意の縮尺で実測した。土層注記は層中混入物の量の表現が統一されていないが、おおむね極微量1%以下、微量1～5%、少量5～10%、やや多量10～30%、多量30～50%、大量50%以上としている。

(7) 写真撮影

写真撮影は、メインカメラとして中判カメラ（モノクロ）、サブカメラとして35mm判カメラ（モノクロ・リバーサル）、メモ用にデジタルカメラを使用した。これらのカメラでは、各遺構の全景・断面・遺物出土状況を中心に撮影を行い、遺跡全体は小型飛行機により空中からの俯瞰写真を撮影した。

(8) 野外調査の経過

4/11 野外調査開始(中村・石崎調査員、作業員21名)	7/17 B区調査開始
4/14 D区(北部)試掘開始	8/19 C区試掘
4/15 A区試掘開始	9/2 D区南東部調査開始
4/22 重機による表土除去開始(D区～)	9/4 C区調査開始
4/24 検出開始(D区～)	9/16 F区調査開始
6/2 50次調査(公団分)開始。作業員10名派遣。	10/1 F区堀跡調査、歩道設置の協議
6/9 D区北部精査開始。	10/3 10年研修 半澤氏
6/10 部分終了確認(A区)	10/14・15 城西中学(4名)職場体験
6/20 A区北東部で縄文晩期の遺構が検出されたため調査区拡張決定。	10/21 本宮熊堂B遺跡より阿部・早坂調査員・作業員合流
6/24 E区調査開始。	10/25 現地説明会
6/30 50次調査一時中断のため作業員戻る。	10/25 空撮
7/1 A区拡張部について協議	10/27 部分終了確認(E区)
7/3・4 A区拡張部盛土除去	10/27 鹿児島県立埋蔵文化財センター 池畑氏(他2名)遺跡見学。
7～8月 A区雨天の度に水没。排水作業に半日から2日程度を要する。	11/6 終了確認
7/14 B区土捨て場協議	11/10 調査終了

2. 室内整理

(1) 遺物の処理

①選別基準

〈土器〉

- a. 口縁部から底部まで残存しているもので口径または底径が算出できるもの。
- b. 口縁部破片で口径が算出できるもの。
- c. 底部破片で底径の算出できるもの。(ロクロ使用土器は底部の切り離し技法がわかるもの)
- d. 胴部破片で反転実測の可能なもの。
- e. 破片で反転実測が困難なもの。

坏類はa～c、甕・瓶類はa～d、墨書土器・陶磁器はa～eから選択した。以上の基準で一次選別を行い、その後一遺構内に器形が類似する個体が複数存在する場合は二次選別をした。一方で出土遺物の少ない遺構に関しては器種構成を示すためにeのものも積極的に選別した。

〈その他の遺物〉

基本的に全点登録し実測掲載したが、石器・鉄製品の一部、鉄滓類は写真掲載もしくは表掲載のみとした。

②遺物番号・掲載順序

遺物登録時に土器・石器・木製品・鉄製品など、遺物の種類ごとに仮番号を付した。室内整理中は仮番号のまま作業を行い、その後編集段階で全ての遺物に改めて掲載順の番号を付し、これを掲載番号とした。

(2) 遺構の処理

遺構の実測図は整理及び点検を行った後に、必要に応じて図面を合成し第二原図を作成し、これをもとにトレースを進めた。

(3) 図版について

竪穴住居跡・住居状遺構・土坑・焼土遺構・井戸跡については遺構ごとに平面・断面図を作成し掲載した。遺構図版には縮尺率を表すスケールと方位を付し、断面図についてはポイントのアルファベットが大文字のものは1/50、小文字のものは1/25とした。溝跡・柱穴状土坑は、平面図を各区の全体図内にまとめて表し、縮尺率は平面図1/250、断面図1/50とした。

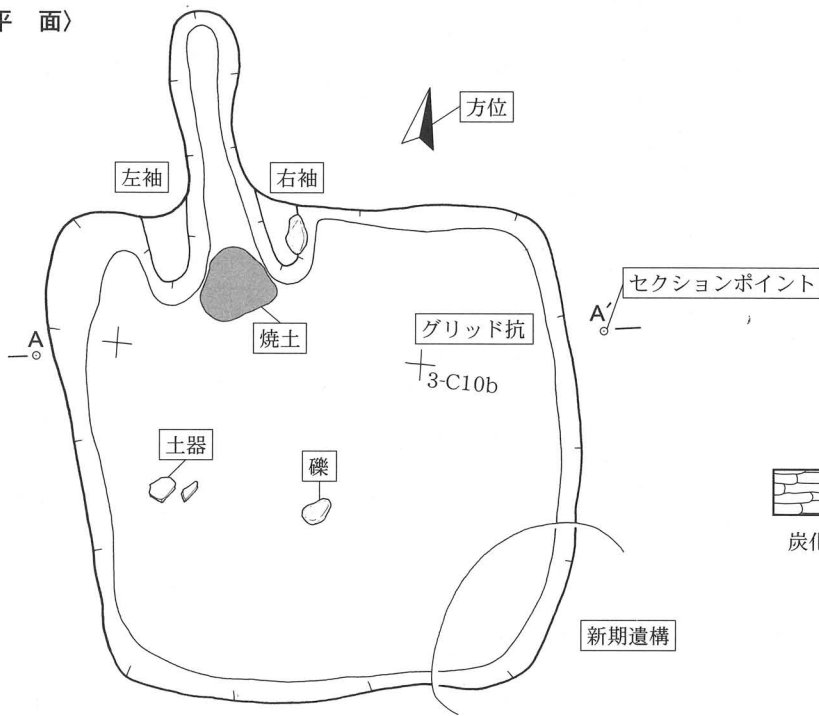
遺物は、基本的に遺構別に掲載したが、銭貨・陶磁器など一部種類毎に掲載したものもある。縮尺は土器・礫石器・木製品を1/3とし、極端に大小のあるものに関しては縮尺を変えた。この他の遺物の縮尺率は、鉄製品・土製品・石製品を1/2、剥片石器を2/3、銭貨を1/1とした。

なお遺物写真図版の掲載番号は遺物図版と統一している。

(4) 室内整理

平成15年11月4日、調査員2名、整理員8名で室内整理を開始した。その後12月の1ヶ月間、調査員1名、整理員6名となるが、この期間以外は平成16年3月31日まで上記の体制で作業を行った。出土遺物の洗浄後、土器の接合・復元、写真撮影、選別した個体の実測・トレースの順に進めた。記名は一次選別した遺物のみ行った。これに並行して遺構の第二原図作成・トレースも進め、その後図版組の作業へと移った。

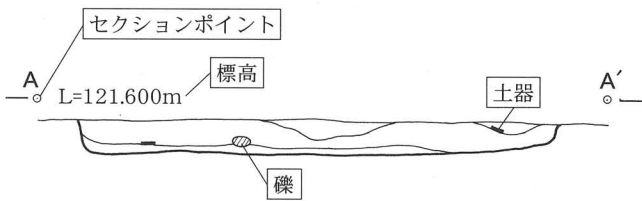
〈平面〉



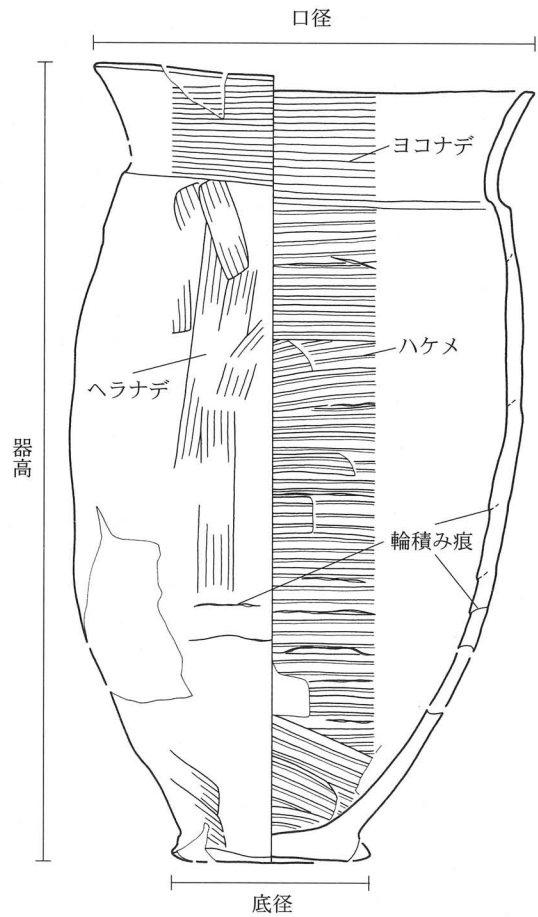
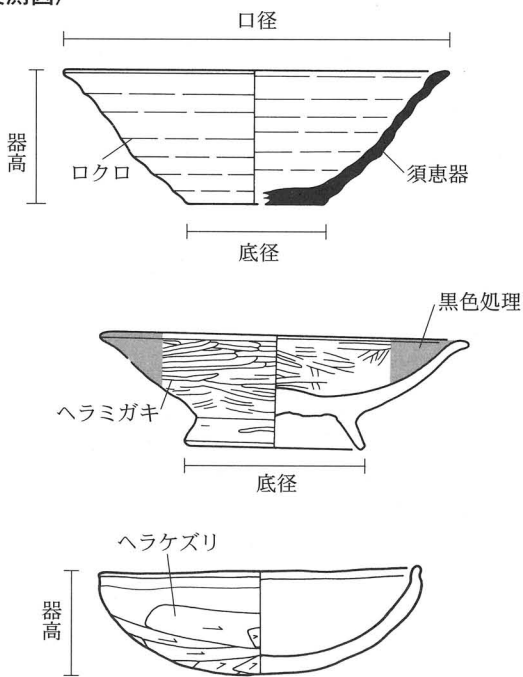
〈その他の凡例〉



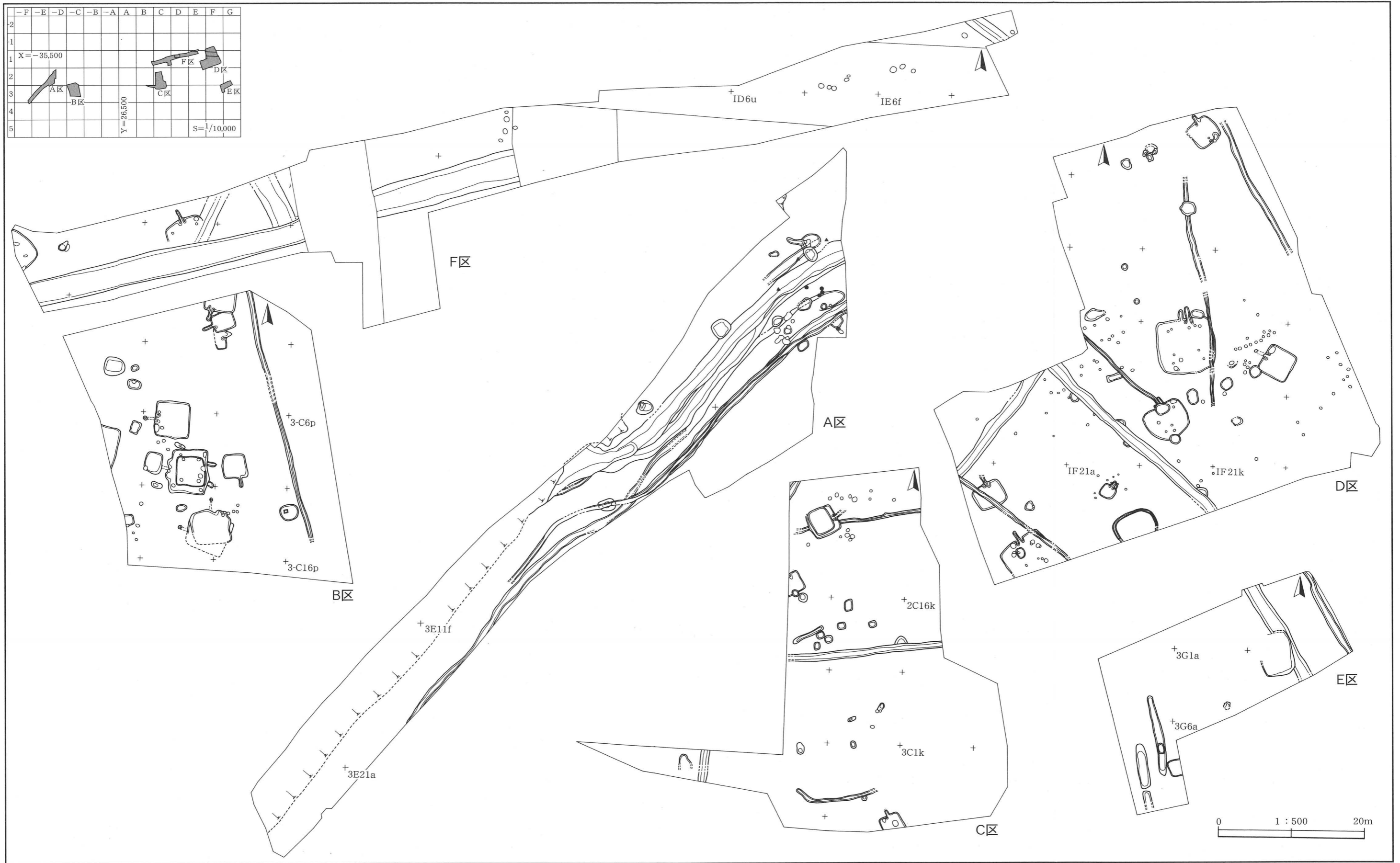
〈断面〉



〈実測図〉



第7図 実測図凡例



第8図 調査区全体図

IV. 検出遺構と出土遺物

1. 概要

検出した遺構は、竪穴住居跡26棟（縄文晩期4棟、古墳末～平安時代22棟）、住居状遺構3棟、土坑67基、溝跡29条、井戸跡1基、柱穴状土坑約130基である。以下各区の概要を述べたい。

〈A区〉現況は水田として利用されていた。調査区の南境が段丘の縁となり、ここから北側の旧河道に向かって下がる地形となる（第58図、写真図版65）。基本層序は他の区域と異なり、Ⅳ・Ⅴ層を切るように砂礫・粘土・砂の互層（⑤層）、その上に10YR5/6黄褐色砂質シルト層（④層）が堆積する（第60図、写真図版6・66）。上部は旧表土と思われる③b層、これが掘削された③a層、旧耕作土の②層、造成時の盛土①層の順となる（第58・60図）。住居跡4棟、住居状遺構2棟、土坑15基、溝7条が検出された。なお26次調査RG338溝跡も本区域へ延びるが、調査区南西部が攪乱されているため消失したものと思われる。また本区域北東部より縄文時代晩期の遺構が検出され、これが調査区外へと延びることが判明したため、当初予定していた範囲より北東方向へ拡張して調査を行った（「拡張部」と記載）（第40図）。

〈B区〉現況は宅地として利用されていた。このため、建物の基礎部分が遺構検出面下にまで及んでいる箇所もあり、調査区の大半はⅢ層より上位層が削平されていた。竪穴住居跡9棟、土坑10基、溝跡1条、井戸跡1基を検出した。なお、26次調査RG325溝跡も本調査区へと延びるものと思われる。事実、RG223溝跡の東側に黒い溝状のプランを確認していたが、すでに調査済みである23次調査RG244溝跡と誤認したため、掘り下げることは行わなかった。

〈C区〉現況は宅地として利用されており、Ⅰ・Ⅱ層は削平されている。Ⅲ層は部分的に残っているものの、造成による攪乱がⅣ層面に達するものが大半をしめるためⅣ層上面を検出面とした。竪穴住居跡3棟、土坑15基、溝跡5条が検出された。なお、23次調査RB024掘立柱建物跡、RD360土坑も本調査区へと延びると思われるが、付近が攪乱されており確認できなかった。

〈D区〉現況は倉庫や工場など比較的大規模な建物が建てられていたため、調査区内には建物の基礎と思われる溝状の攪乱が基盤の目のように走る。本区域では部分的にⅠ・Ⅱ層を確認できるものの大半は消失している。Ⅲ層は10～20cm程度残存するが、造成攪乱が多いためⅣ層上面で検出した。また本区域ではⅣ層がさらにⅣa～d層まで4つに分層される（第30図a-a'）。そのため事実記載時に細分可能な際は「Ⅳa」、「Ⅳb」と明記し、はっきりしない場合は「Ⅳ」層とした。検出された遺構は、竪穴住居跡7棟、土坑23基、溝7条である。なお、23次調査RG266溝跡は本調査区でも検出されたが、出土遺物などから現代に属するものと判断した。

〈E区〉調査区西半は畑地で、Ⅲ層下面付近まで削平されておりⅣ層上面を検出面とした。一方東半は黒褐色層（Ⅲ層）が厚く残っており、この層上面を検出面としたが、宅地として利用されていたために攪乱が多く遺構の残存状態は不良であった。本区域はⅣ層が薄くRG273堀跡の掘方で確認したところ、厚さ30cm程度で下位の砂礫層（Ⅴ層）に達した。竪穴住居跡・住居状遺構・土坑・焼土遺構各1棟（基）、溝跡5条検出された。なお22次調査RG276～278溝跡は本次調査区では検出されなかった。

〈F区〉現況は道路として利用されていた。調査区の南側には、道路に沿うように側溝がはしり遺構の多くを消失する。また調査区中央部は現在利用されている水道・ガス管が埋設されているため調査不可能と判断した（23次調査R A 244も調査不可能）。竪穴住居跡2棟、土坑1基、溝跡4条が検出された。

2. 竪穴住居跡

(1) 古代以降

R A 580 竪穴住居跡 (第9・10図、写真図版7～9)

〈位置・検出状況〉 D区、-1 F 21 i グリッドに位置する。IVa層上面で黒褐色の方形の広がりを検出し、その部分を若干掘り下げたところ形状が明確になった。

〈規模・形状〉 中央部と北西角が攪乱を受けている。規模は、北壁3.3m以上、東壁3.4m、南壁3.6m、西壁2.8m以上、平面形は隅丸正方形であるが、西壁の南側が若干外に張り出している。主軸方向はN-35°-Wである。

〈埋土〉 10YR2/2 黒褐色シルトを主体として5つの層に分けられる。おおむねレンズ状に堆積しており、自然堆積によって埋没したものと考えられる。A-A'断面では5層が両壁際に見られるものの、4層は西側に見られず、また2層は中央より西側のみに堆積している。このことから、四周からまんべんなく堆積していったのではなく、東側から埋没していったものと推測される。

〈床面〉 掘方埋土(6層)上面を床とする。床面は、平坦である。掘方埋土は大量の10YR4/4褐色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトで構成されており、厚さは最大約15cmである。

〈壁〉 外傾しながら立ち上がり、20cmが残存する。

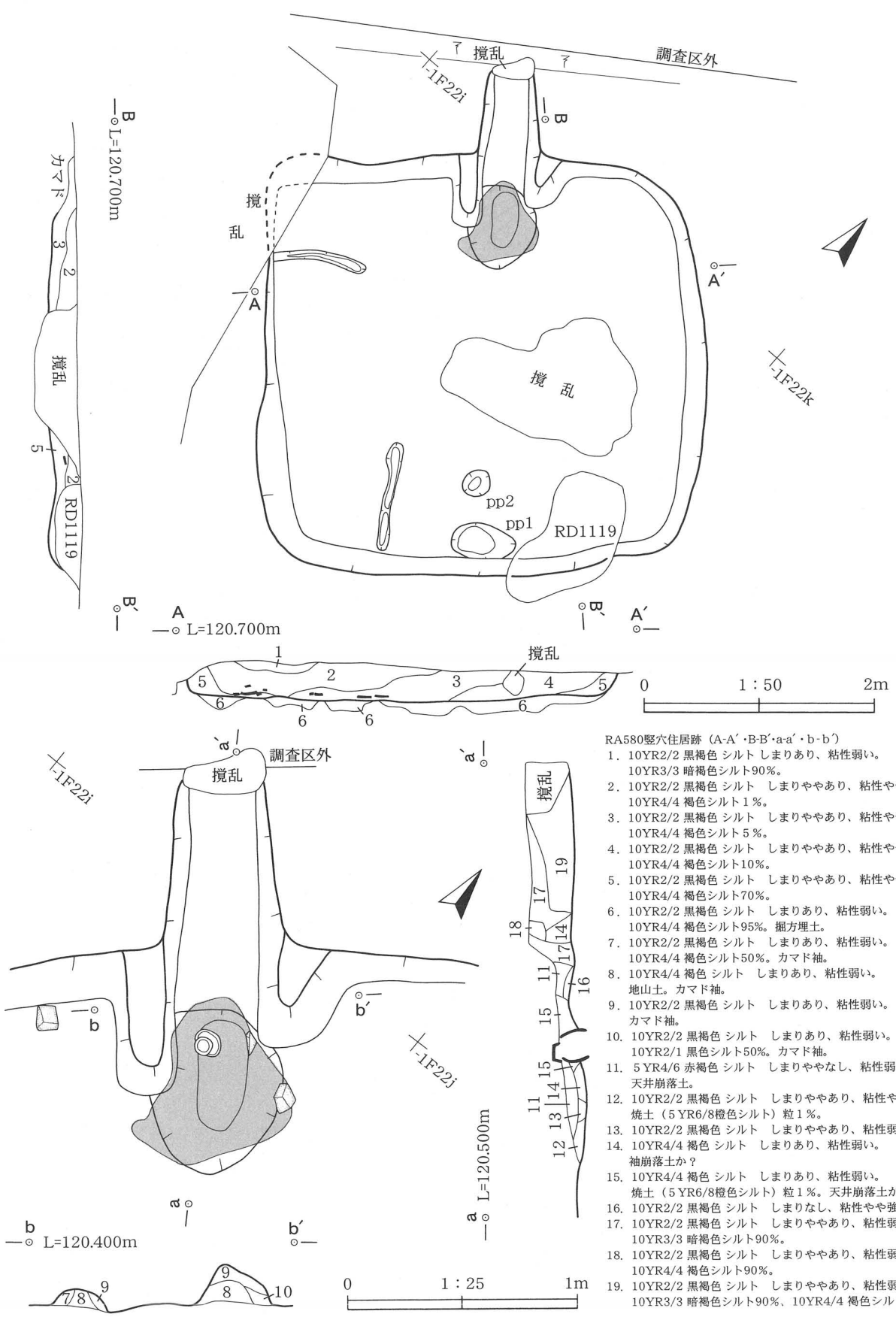
〈土坑・柱穴〉 南壁際で2基検出された。pp 1は開口部直径20cm、床面からの深さ6cm、pp 2は50×30cm、深さは10cmである。その位置や対応するピットが検出されていないことから、性格については不明である。

〈カマド〉 北壁の中央に位置する。煙道の方位は、N-35°-Wである。袖は比較的良好に残存しており、地山IV層相当の土を芯として(8層)、10YR4/4褐色シルト・10YR2/2黒褐色シルト・10YR2/1黒色シルトを貼り付ける形で構築されている。残存部分を観察した限りでは白色粘土が貼り付けられた痕跡は見いだせなかった。燃烧部は床面より若干掘り込んだ程度で、70×65cmの焼成面が形成される。残存する袖の南側(住居中央側)にまで被熱範囲が広がることから、袖はもう少し南に延びていたものと考えられる。燃烧部からは、支脚として転用されたのであろうと思われる、土師器甕が倒立した状態で出土している。土師器甕は燃烧部の中央部分から若干西寄りに設置されており、その東側には土師器甕とほぼ同じ高さの細長い礫が燃烧部に突き刺さる状態で出土している。この細長い礫は被熱した痕跡があったことから、これも支脚として使用されていたものと推測され、カマドは二つ掛けだったと見られる。煙道は住居奥壁から0.7m延びたところで攪乱を受けている。煙道部の構築方法は上部が削平されているため不明である。埋土内にも天井崩落層は確認できなかった。

〈周溝・その他〉 西壁の北側と南壁の東側から、壁に直交する形で溝が延びている。前者は若干弓形で全長90cm、後者は全長100cmの一直線である。両者とも幅10cm程度、深さ5cm前後としっかり掘り込まれているわけではない。間仕切りの可能性がある。

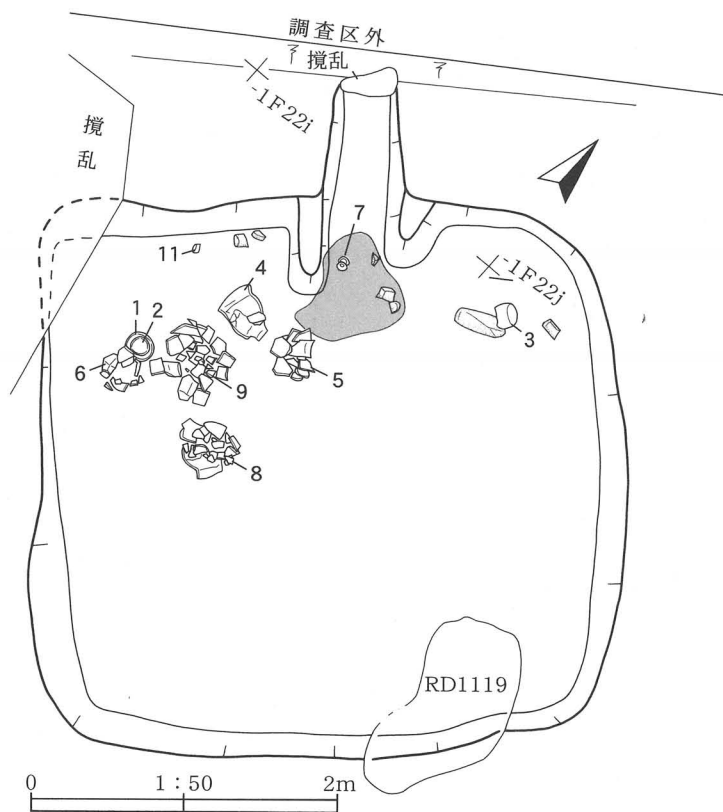
〈重複〉 R D 1119土坑と重複し、これに切られる。

〈遺物〉 床面～埋土下部にかけて遺物が集中する。3・10が埋土下部に位置し、これ以外はすべて床面または床から僅かに浮いた状態(数cm程度、表では「床上」と記述)で出土したものである。坏類は2点のみで、この二つが正位で重ねられ入れ子状をなしていた(2の上に1が重なる)。甕類は割れて小破片となるが、出土時に器形を把握することができ、離れた層位・地点で接合しないことから、器形を保ったまま横位に倒れ、そのまま土圧などで押しつぶされたものと思われる。また3(片口)も横位に倒れるがこれは器壁が厚



- RA580竪穴住居跡 (A-A'・B-B'・a-a'・b-b')
1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。
10YR3/3 暗褐色シルト90%。
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
10YR4/4 褐色シルト1%。
 3. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
10YR4/4 褐色シルト5%。
 4. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
10YR4/4 褐色シルト10%。
 5. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
10YR4/4 褐色シルト70%。
 6. 10YR2/4 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト95%。掘方埋土。
 7. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト50%。カマド袖。
 8. 10YR4/4 褐色シルト しまりあり、粘性弱い。
地山土。カマド袖。
 9. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。
カマド袖。
 10. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。
10YR2/1 黒色シルト50%。カマド袖。
 11. 5YR4/6 赤褐色シルト しまりややなし、粘性弱い。
天井崩落土。
 12. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
焼土 (5YR6/8 橙色シルト) 粒1%。
 13. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
 14. 10YR4/4 褐色シルト しまりあり、粘性弱い。
袖崩落土か？
 15. 10YR4/4 褐色シルト しまりあり、粘性弱い。
焼土 (5YR6/8 橙色シルト) 粒1%。天井崩落土か？
 16. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりなし、粘性やや強い。
 17. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR3/3 暗褐色シルト90%。
 18. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト90%。
 19. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR3/3 暗褐色シルト90%、10YR4/4 褐色シルト2%。

第9図 RA580竪穴住居跡(1)



第10図 RA 580竪穴住居跡(2)

有する。口縁部は外傾して開くが上半がやや内湾するもの(5・6)も含む。いずれも端部は平坦である。体部下端は短く直立し、内側は丸底となる。調整は内外面ともハケメ後ヘラミガキ、もしくはヘラミガキのみで、口縁部はヨコナデ、もしくはこれにかわって横位に磨かれているものもみられる。8・9は球胴甕である。丸みを持つ球胴状を呈し、胴部のほぼ中央に最大径を測る。頸部に明瞭な段を有し、9はこの頸部に穿孔される。8の口縁部はやや内湾気味に外傾して立ち上がる。調整は、内面がヘラナデ(摩滅したハケメの可能性もあり)、外面胴部下半にはヘラケズリが施される。外面胴部上半は、8がヘラミガキ、9がハケメ調整である。10~12は土製紡錘車で、10の上面と下面の稜部に擦痕のようなものがみられる。(第66・67図、写真図版67・68)

〈時期〉出土遺物から7世紀中頃~末に位置づけられる。

R A 581竪穴住居跡 (第11~13図、写真図版10・11)

〈位置・検出状況〉D区、1F12hグリッド付近に位置する。IVa層上面で検出した。

〈規模・形状〉形状は方形、規模は、北壁6.7m、東壁6.8m、南壁7.0m、西壁6.8mである。南壁及び東壁が丸みを帯び張り出しているため、最大幅は8.0×7.4mとなり、本次調査の中で最も規模が大きい。主軸方位はN-10°-Wである。

〈埋土〉グレー味のある10YR3/4暗褐色シルトが床面上に2~5cm程度の薄層をなして面的に広がる(14層)。地山(IVa)ブロックがやや横につぶれて混入しており、A-A'東側では地山(IVa)ブロック少なくなり黒

いためか破碎していない。坏2点、片口1点、甕類6点、土製紡錘車3点を掲載した。1は口径17.2cmの大形の土師器坏で、口縁部が内湾気味に開き、口縁・底部との境に内外とも段を有する。調整は、外面体部にハケメを施したあと体部に横位のヘラミガキ、内面は、放射状にヘラミガキ後黒色処置される。2は底部から丸みを持って立ち上がり、口縁部は緩いくの字状を呈する。外面下半がヘラケズリされるが、内面はナデ調整のみである。器形・調整方法とも1のような在地のものとは異なり、黒色処置も施されていない。胎土も1に比べ赤味が強い橙色を呈し、いわゆる関東系土師器といわれる非在地系のものである。(詳細はV章3)

3は片口で、内外面とも縦方向のナメにヘラミガキが施される。このヘラミガキは外面の口縁部付近では横位になり、片口付近では調整単位を確認できない。

4~7は甕で、すべて頸部に明瞭な段を

味が増す。壁際には暗～黒褐色土(4～13層)が堆積する。この上に西側は地山ブロックを少量含む、10YR3/4暗褐色シルト層(3層)、東側が地山ブロックを全体に斑状に混じる10YR3/4暗褐色シルト層(2層)、これに10YR2/2黒褐色シルト層(1層)と、東西では異なった埋土の様相を示す。

〈床面〉掘方埋土(16層)上面を床とする。床面は東側に向かって傾斜し、西側より20cm低くなる。特にC-C'を境に東側は急激に下がり、硬化面はこの境西側に顕著に認められる。掘方埋土は10YR3/4暗褐色シルトブロックと地山(IVa)ブロックの混土で構成されており、ほぼ全面でみられる。しかし南西端でやや途切れ、東側の床面が低くなる付近では他の箇所よりも深くなっており、全体の様相と異なることから南東方向に拡張した可能性も考えられる。床面直上層の14層は上記のように地山ブロックが横につぶれた形状をしており、貼付けたような堆積状況を示す。カマドが2基あることから16層上面が旧カマドに伴う床面で14層上面が新カマドに伴う床面とも想定される。

〈壁〉外傾または直立するが直線的ではなくややえぐれ湾曲する。崩落に伴う可能性があるが、埋土中に地山ブロックの混入は顕著にはみられない。地山IVb層上面より数cm下まで掘り込まれ、残存する壁高は最大35cm程度である。

〈周溝〉住居跡中央に南北に走る攪乱の西側でのみ検出され、東半では確認できなかった。北壁破線部分にも認められたものの、調査中の不手際により記録を欠いた。幅は5～10cm程度、深さ5cm以下である。堆積土は10YR2/2黒褐色粘土質シルトを主体とし、地山ブロックを極微量～少量含む。主体土は地山IVb層と類似するが、埋土はややしまり・粘性がやや弱い。

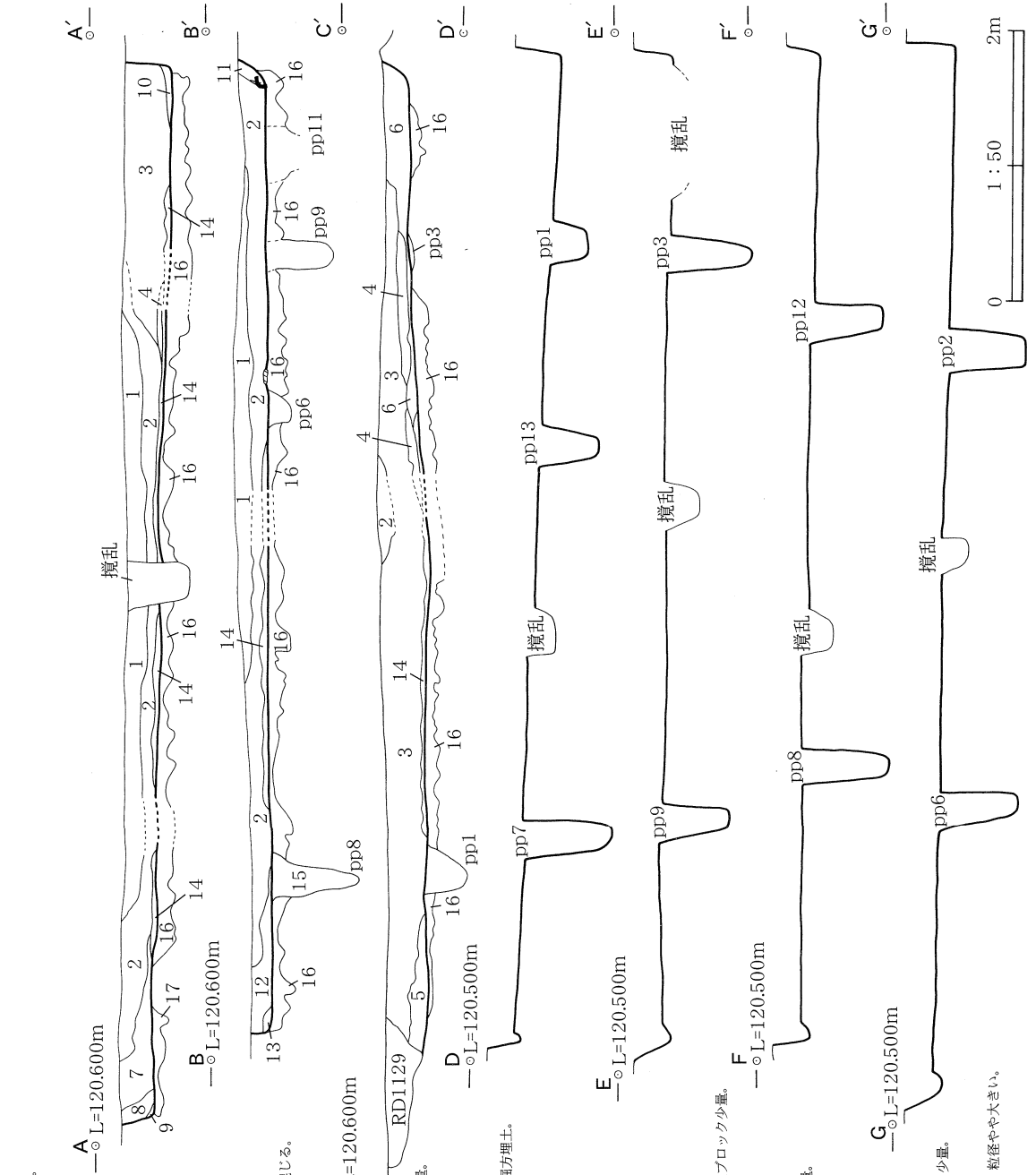
〈炭化材・焼土ブロック〉南東隅床面直上に、70×50cmの炭化物・焼土ブロックの広がり認められた。これらを除去したが被熱した痕跡は確認できず、上位の埋土中にも炭化物・焼土ブロックの混入はみられなかった。

〈土坑・柱穴〉13基検出した。pp2・6・8・12(以下a)とpp1・3・7・9(以下b)の各4基は方形に配置された主柱穴の可能性が高く、2時期の建て替えが想定される。aは東西・南北とも約3.5m、ほぼ正方形の配置を持ち、各柱穴の開口部径は約30cm、床面からの深さは50～60cm程度と比較的規模も揃う。bは東西4.3m、南北4.5mとやや南北に長い長方形の柱配置となる。各柱穴の規模は、開口部径30～40cm、深さはpp1・9が浅く40cm前後、pp3・7が深く60cmを超える。柱間はaよりもbの方が広がるが、柱穴の規模にはほとんど差異が認められなかった。埋土はa・bとも10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、aは地山ブロック混入量が比較的多く、大きい斑状で混ざるが、bは、地山ブロックの混入量が少なく、細かく含むというように混入物の様相が異なる。しまりはbが弱く、aがよくしまる。南壁際中央部で検出されたpp4底面から白色粘土塊が出土した。径28×22cm厚さ10cm程度で、肉眼で観察した限りでは混和材等の含まれていない粘土塊と思われる。

〈カマド〉北壁ほぼ中央に2基検出した。両基とも煙道方向はN—8°—Wである。西側のカマドは袖が残存していないが、燃焼部と思われる辺りが僅かに窪み、68×50cmの焼土が形成されている。焼成は良く、被熱の及ぶ深さは最大7cmである。煙道は、全長150cm、底面はほぼ平坦だが、住居奥壁付近で段を持ち一段低くなる。上部削平され煙道の構築方法は確認できないものの、煙道埋土中に天井崩落土と思われる地山ブロックを多量に含むことから、刳抜式の可能性がある(22～26層)。燃焼部上位には10YR3/4暗褐色シルトを主体とし炭化物・焼土ブロックを混入する層(28層)、さらに10YR3/4暗褐色シルトブロックと地山ブロックが薄く層状に堆積する(21層)。この上面が東側カマドの床面となり、焼土が形成されていることから西側が古期カマドで、東側は新期カマドと判断される。21層上面が新期カマドの床面であるとすると、古期(西

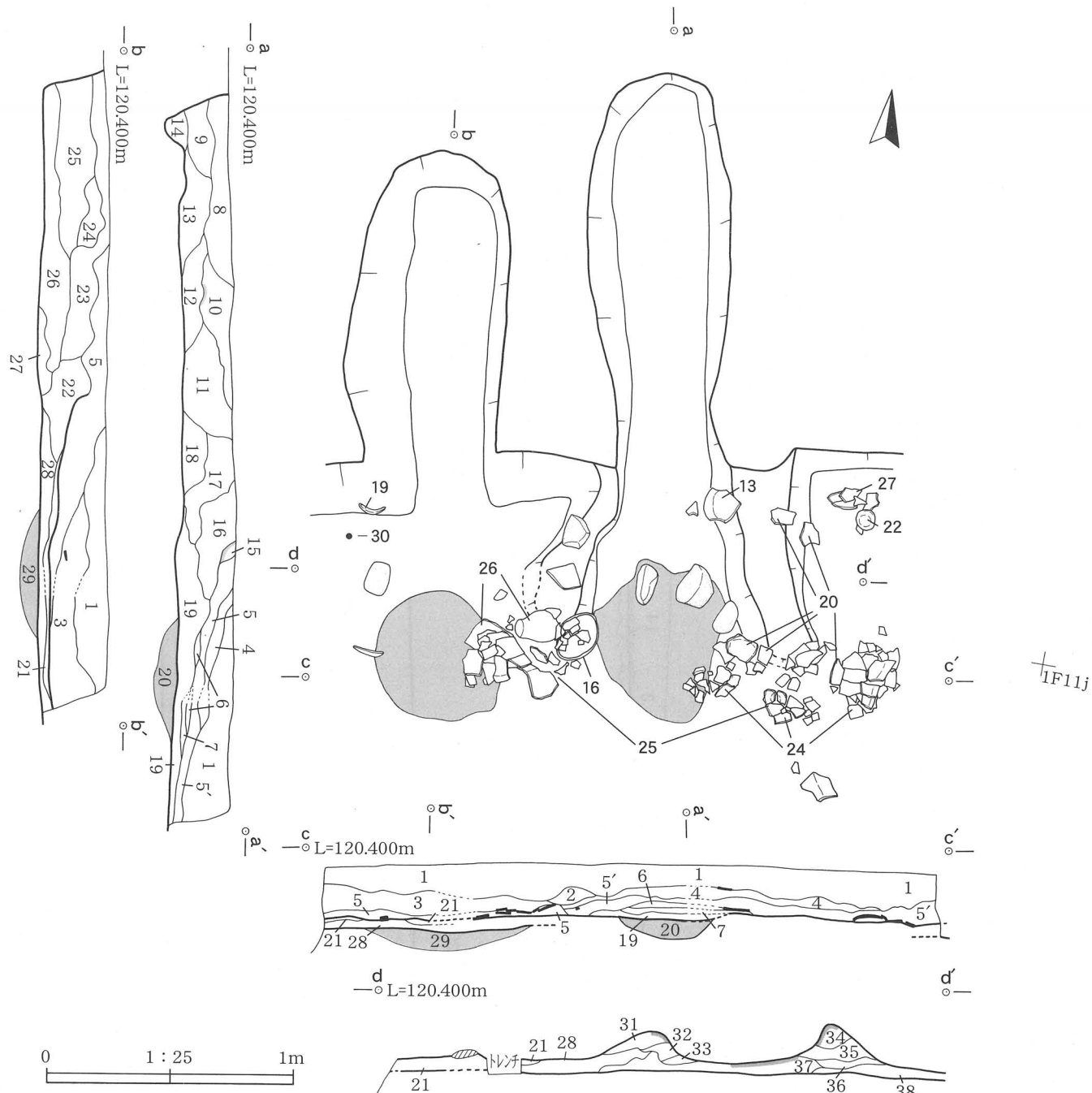


第11図 RA581豎穴住居跡(1)



- RD581 竪穴住居跡 (A-A' ~ C-C')
1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 10YR3/4 暗褐色シルトとの混土。地山ブロック微量。ブロック大きい。
 2. 10YR3/4 暗褐色 シルト 地山ブロック微量。1層より粒径大きい。
 3. 10YR3/4 暗褐色 シルト 地山ブロック少量。2層より地山ブロック少く細かい。
 4. 10YR2/2 黒褐色 シルト。主体土・地山土・10YR3/4 暗褐色シルトとの混土。1層より地山ブロック多くブロックの粒径大きい。4層に似るが炭化物・粘土ブロック微量含む。カマドに近いためか？
 5. 3層に似るが地山ブロックさらに細かく微量。
 6. 6層に似る。
 7. 10YR2/2 黒褐色 シルト きれいな層。
 8. 10YR2/2 黒褐色 シルト 主体土・地山ブロック・10YR3/4 暗褐色シルトが細かく混じる。層境の土と似る。
 9. 10YR2/2 黒褐色 シルト 近い黒いきれいな層。層中最も薄い。
 10. 10YR2/2 黒褐色 シルト 10YR2/1 黒色シルトに近い黒いきれいな層。層中最も薄い。
 11. 9層に似るが地山ブロック微量。色やや明るい。
 12. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック微量。きれいな層がやや白味。
 13. 10YR3/4 暗褐色 シルト 地山ブロック少量。
 14. 10YR3/4 暗褐色 シルト クレー味強い。地山ブロック少量。やや横につぶれた感じが、粘土のようには固くない。
 15. 10YR2/2 黒褐色 シルト 10YR3/4 暗褐色シルト地山ブロックとの混土。pp1に似るがややしまりありか？ pp8 埋土。
 16. 10YR3/4 暗褐色 シルト 主体土と地山ブロックの混土。掘方埋土。
 17. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック大量。掘方埋土。
- pp1 10YR2/2 黒褐色 シルト しまり弱い。地山ブロック少量。炭化物極微量。土器含む。
- pp2 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり。主体土と地山ブロック基状に大きい粒径で混じる。
- pp3 10YR2/2 黒褐色 シルト pp1と似る。
- pp5 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック微量。10YR3/4 暗褐色ブロック少量。大きく混じる。土器含む。
- pp6 pp2と似るが地山ブロックやや少ないか。
- pp7 10YR3/4 暗褐色 シルト きれいな層。地山ブロック下部に微量。他の柱穴とやや縁相が違つ。
- pp9 10YR2/2 黒褐色 地山ブロック少量。
- pp10 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり。地山ブロック微量。細かく入る。
- pp11 10YR2/2 黒褐色 シルト 10YR3/4 暗褐色大量。地山ブロック少量。10YR2/2 黒褐色極微量。
- pp12 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりやや弱い。地山ブロック少量。粒径やや大きい。
- pp13 10YR2/2 黒褐色 シルト pp2と似る。

第12図 RA581竪穴住居跡(2)



RD581竪穴住居跡カマド (a-a'~d-d')

全体にしまりややあり。粘性やや弱い。

1. (=A-A'1層)
2. 10YR3/4 暗褐色シルト きれいな黒層。
3. (=A-A'2層)
4. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック大量。
5. 10YR3/4 暗褐色シルト グレー味あり。
地山ブロック極微量。炭化物微量。
- 5'. 5層に似るが同一か不明。やや地山ブロック多いか。
6. 地山ブロック層。天井崩落？
7. 炭化物層。焼土ブロック微量。
8. 10YR3/4 暗褐色シルト 10YR2/2 黒褐色微量。地山ブロック少量。
9. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック微量。
10. 地山ブロック層。天井崩落。下面やや被熱するか？
11. 9層と似る。
12. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック極微量。
13. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック大量。
14. 10YR3/4 暗褐色シルト 9層と似る。
15. 地山ブロック (地山?) 層。下面被熱。天井 (崩落している?)。
16. 地山ブロック層。下面所々被熱する。
17. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト しまり、粘性強い。きれいな層。
18. 12層に似る。
19. 10YR3/4 暗褐色シルト 焼土ブロックやや多量。細かく入る。
20. 5YR6/8 橙色シルト 焼土層。
21. 地山ブロックと10YR3/4 暗褐色シルトが層状に堆積する。上面が新期カマド床面。
22. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロックやや多量。焼土ブロック微量。
23. 地山ブロック層。10YR3/4 暗褐色シルト微量含む。天井崩落。
下面に10YR3/4 暗褐色シルトをブロックで含む。
24. 17層に似る。
25. 地山ブロックと10YR2/2 黒褐色シルトの互層。
26. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック多量。
27. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック・炭化物・焼土ブロック極微量。
28. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック極微量。炭化物・焼土ブロックやや多く、19層より粒径大きい。
29. 5YR6/8 橙色シルト 焼土層。20層より焼成良い。
30. 欠番。
31. 10YR4/4 褐色シルト 地山ブロック層。燃焼側被熱。以下袖構築土または掘方埋土。
32. 10YR4/4 褐色シルト グレー味あり。地山ブロック層。
33. 地山ブロック層。
34. 32層に似る。
35. 33層に似る。
36. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック極微量。黒い層。
37. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック少量。炭化物・焼土ブロック少量。
- 28層と似るが炭化物・焼土ブロック少ない。
38. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック大量。

第13図 RA581竪穴住居跡(3)

側) カマドの煙道部埋土は21～28層で、5層より上は新期カマドの廃絶時に伴う埋土と判断される。新期カマドは床面に多く遺物が散在する。両袖とも残存しており、地山IVaブロックを積み上げて構築している。袖の燃焼部側は被熱が認められるため、ほぼ原形をとどめているものと思われる。燃焼部底面には65×58cmの焼土が形成されており、焼成は良く被熱の及ぶ深さは最大9cmである。燃焼部内には礫が柱状に立った状態で2個並列する。両者とも被熱しており、支脚として使用されていた可能性があるが、礫底面は床面から浮いており、これらが埋土堆積途中に流入したのか、土を盛って設置されたものかが確認はできなかった。煙道は全長160cm、底面は住居壁際で僅かに立ち上がるものの概ね平坦、煙出し部は摺鉢状に窪み、その手前の煙道部は周囲より一段高くなる。煙道構築方法は天井土と思われる地山ブロック層が数度にわけて崩落しており、削り抜き式と考えられる。崩落土下面(煙道天井部)が被熱している例もみられる。

〈解釈〉床面及び柱配置、カマドの検出状況から新旧2時期の建て替えが想定できる。西側のカマド燃焼面(旧住居床面?)の上に盛土貼床し東側に新期のカマドを設置している。柱配置はaが西側カマド(古期)、bが東側カマド(新期)に伴う可能性が高い。また16層上面とその上位14層上面に床面が存在したと仮定すれば、それぞれ古期カマド、新期カマドをもつ住居跡の床面の可能性がある。カマドの焼成面と住居中央部の床面との対応関係及び柱の掘込み面などは確認できなかったが、古期から新期への立て替え時に柱間が広がっていること、東・南の堀方形状が中央部とやや異なることから住居跡の拡張も想定される。

〈重複〉RD1129土坑、RG487溝跡と重複しこれに切られる。

〈遺物〉新期カマド周辺の床面または住居壁付近埋土下部からの出土が多い。一方で古期カマド床面、住居中央部からは少ない。器種別の出土状況は、坏類が新期カマド右袖(東袖)から住居北東隅、甕類はカマド袖南側、燃焼部周辺に集中する。坏10点、高坏1点、甕類6点、玉1点を掲載した。13～21は坏で、内面はいずれも、ヘラミガキ後黒色処理される。底部の形態は丸く口縁との境に段を持つものが主体を占める。平底も認められるが、21の盤状の坏以外法量が小さい。13は内外面に段を有し、口縁部はやや肥厚し外傾して立ち上がる。外面は、底部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ調整される。14・15は外側にのみ段を有し、これを境に口縁部がヘラミガキ、底部はヘラナデ(15はその後ヘラケズリ)が施される。15は口径20cm、器高7.7cmと、本次調査で出土した非ロクロ土師器坏のなかで最大のものである。16は外面のほぼ全体にヘラミガキ調整がみられ、体部下半の段は僅かに窪む程度である。18・19は口径12cm以下の小形の坏で、18は外面に、19は内外面に段を有するが、19の内面の段は外面より上位にみられ他と異なる。20・21は、口径は広いが器高は低く平べったい形をしており、21は盤状を呈する。22は平底で中央部がへこみ内湾して立ち上がり、内外面とも段はみられない。23は高坏の脚部である。24～27は甕で、頸部に明瞭の段を有し、内面ハケメ、外面はハケメもしくはヘラナデ(摩滅したハケメの可能性もあり)調整される。24・25は、口縁部が外傾して開き、胴部下端は短く外傾する。底部内面は平底に近いがやや丸みを帯びる。一方、26は口縁部があまり外反せず、胴部下端は直立するが、底部内面は平底である。28・29は球胴甕で、28は外面ヘラナデ、内面ハケメ、29は内外面ともヘラナデ調整される。29は胴部下半に最大径を持つものと推定される。30は土製の勾玉である。(図66・67、写真図版67・68)

〈時期〉奈良時代

R A 582 竪穴住居跡 (第14・15図、写真図版12)

〈位置・検出状況〉D区、1F18gグリッド付近に位置する。IVa層上面で検出した。

〈規模・形状〉規模は、北壁4.9m、東壁3.9m、南壁4.0m、西壁4.3m、方形～逆台形に近い歪んだ形状を

持つ。東西壁、南壁が丸みを帯び張り出しているため、最大幅は6.0×4.9mとなる。主軸方位はN-32°-Wである。

〈埋土〉床面近くまで削平されており、埋土はほとんど残存していない。10YR3/4暗褐色シルトを主体とする単層で地山ブロックを少量混入する。

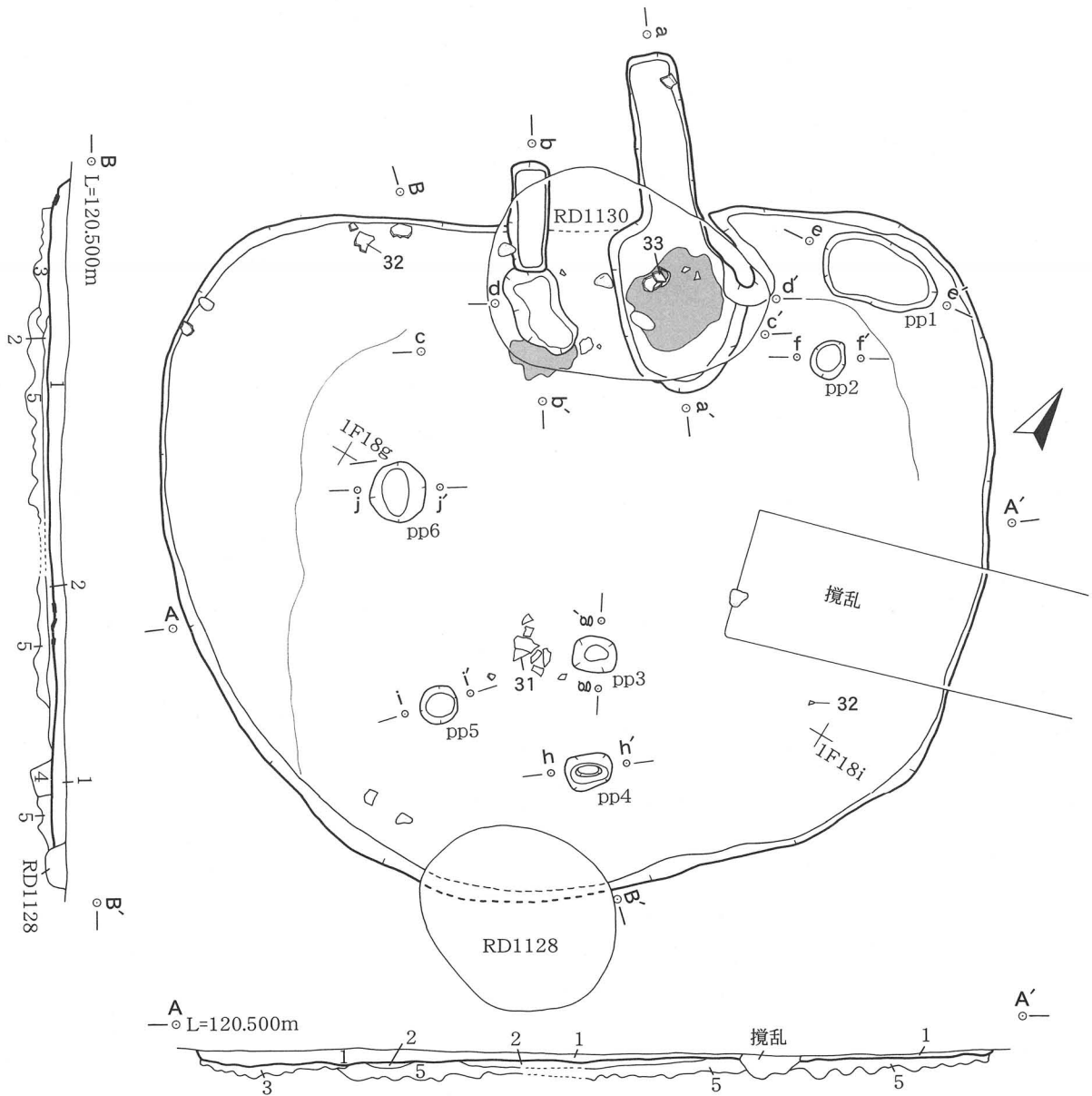
〈床面〉掘方埋土（5層）は、大量の地山ブロックと10YR3/4暗褐色シルトブロックの混土で構成されており、同じ主体土で地山ブロックの混入量の少ない3層がこれを切るように北西部にのみ認められる。中央部にはこれらの層の上位に2層が貼られ、上面は非常に固くしまる。2・3層下面まで掘り下げて、5層の残る平面範囲（掘方範囲）を記録したのが住居内の実線部分である。以上の状況から5層上面と、2・3層上面と床面が2面存在し、住居跡の拡張を行っている可能性が考えられる。

〈壁〉ほぼ直立して立ち上がる。壁崩落に伴うものか部分的に内湾する箇所も認められる。IVa層まで掘り込んでおり残存する壁高は13cmである。

〈土坑・柱穴〉6基検出した。pp1は住居北東コーナーに位置する。開口部径86×50cmの楕円形を呈する。底面は西側が浅く床面から6cmの深さで平場を形成し、東側は深さ11cmと一段下がる（平面範囲記録できず）。埋土は下部（2・3層）が暗褐色土、上部（11層）が黒褐色土を主体とし、焼土ブロックを多く混入する。上部の下面には白色粘土が薄く堆積する。主体土の暗褐色土もやや赤味を帯びており、カマド燃焼部内の焼土を廃棄した可能性がある。pp2～6は柱穴を思われるが、pp3・4は30cm前後、それ以外は15cm前後と比較的浅く、主柱穴とは確認できなかった。

〈カマド〉北壁ほぼ中央に2基検出された。煙道方位は、西側がN-30°-W、東側がN-36°-Wである。西側のカマドの袖は残存しておらず、燃焼部と思われる辺りに50×30cmの焼土が形成されている。焼成は良く、被熱の及ぶ深さは最大3cmである。焼土の北側には64×34cmの楕円形の掘込みが検出されておりこれと接する付近で焼土は最も厚みを持つ。焼土が焼成面から下方へ皿状に形成されるという性質を考えると、楕円形の小土坑は焼土形成後に新たに掘られたものと判断される。また、この掘込みが検出面まで立ち上がらないことから、焼土形成後、住居埋没以前に掘られたものと考えたい。煙道全長は、外側の壁から北側が44cm、内側（5層掘方範囲）からは、約110cmである。上述の通り南半（住居側）の底面は削平されているが、北半から判断すると床面より緩やかに下がり、煙出し部でさらに窪む形状を持つ。堆積土は10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、上部に地山ブロックを多く混入する。煙道の構築方法は不明であるが、煙出し付近に天井崩落と思われる地山ブロック層（14層）がみられるため刳抜式の可能性がある。東側のカマドは東袖のみ残存し、10YR3/4暗褐色シルトブロック・地山ブロックで構築する。燃焼部は浅皿状に窪み、74×70cmの焼土が形成されており、焼成は良く被熱の及ぶ深さは最大7cmである。煙道は全長120cm、底面はほぼ平坦で煙出し部付近で僅かに立ち上がり、再び平らになる。煙道の構築方法は、天井崩落土と思われる下面が被熱した地山ブロック層（8層）が堆積することから刳抜式の可能性が高い。燃焼部側にも天井崩落層（地山ブロック層・3層）がみられる。堆積土は焼土上位には焼土ブロックを含むものの、10YR2/2黒褐色シルトを主体として混入物が少ない。両カマドはほぼ同一の床面上につくられており、堆積状況からは新旧関係を把握することはできなかったが、カマドの位置、袖の残存状況から西側が古期、東側が新期と想定される。

〈解釈〉以上のことから、掘方埋土5層上面を床面とする住居跡（住居内実線範囲）に西側のカマドが設置され、その後拡張（3層掘方）・貼床（2層）を行って、東側にカマドを作り替えたものと思われる。このとき、主に北西方向に広げられた。西カマド（古期）燃焼部北側の小土坑は柱穴または掘方としてを掘り込まれた可能性も考えられる。



RA582竪穴住居跡 (A-A'・B-B')

全体的にしまりややあり、粘性は弱い。

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック少量、細かくはいる。
2. 2.5YR7/6 明黄褐色シルト しまりあり。地山ブロック多量。
横に押しつぶされるように入る。貼床？
3. 10YR3/4 暗褐色シルト しまりやや弱いか？地山ブロックやや多量。貼床？掘方埋土？
4. 3層に似る。pp4埋土。
5. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック多量。掘方埋土。

- pp2
1. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック少量。

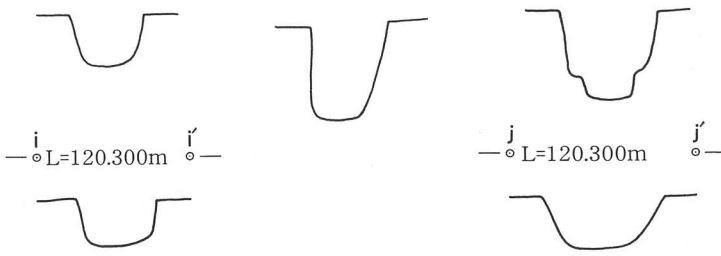
- pp3
1. 10YR2/2 黒褐色シルト きれいな層。

- pp4
1. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック少量。

- pp5
1. 10YR2/2 黒褐色シルト きれいな層。

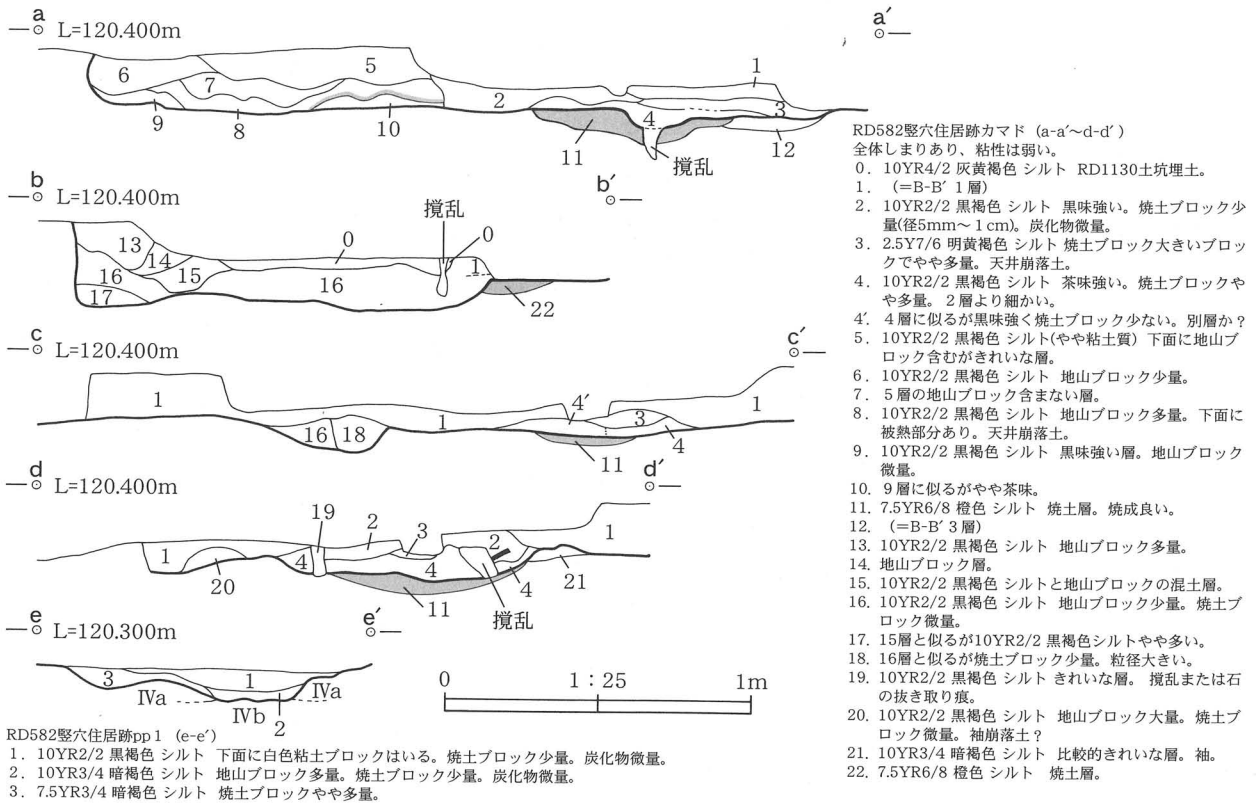
- pp6
1. 10YR3/2 黒褐色シルト 上部きれいな層。
下部地山ブロックやや多量。

f L=120.300m f' g L=120.300m g' h L=120.300m h'



0 1:25 1m

第14図 RA582竪穴住居跡(1)



第15図 RA 582竪穴住居跡(2)

〈重複〉 RD1128土坑、RD1130土坑と重複しこれに切られる。

〈遺物〉 床面近くまで削平されているため、床面~埋土下部の遺物しか残存していない。32はカマド燃焼部内焼成範囲の際という出土位置からカマド支脚の可能性がある。甕類のみ3点掲載した。31は頸部に段を2段有し、口縁部は外傾して立ち上がり上半がやや内湾ぎみになる。端部は平坦である。調整は外面がヘラナデ、内面はハケメ調整される。32・33は胴下端が短く外反し、底部内面は平底風であるがやや丸みを帯びる。調整は内外面ともハケメ調整である。(第70図、写真図版70)

〈時期〉 奈良時代

R A 583竪穴住居跡 (第16~18図、写真図版13)

〈位置・検出状況〉 D区、2E2Vグリッドに位置する。南部は調査区外へと続く。IV層上面で検出した。

〈規模・形状〉 南部が調査区外に位置するため全形を把握することができないが、概ね方形を呈している。規模は、北壁6.0m、東壁5.1m以上、西壁3.0m以上、主軸方向はN-32°-Wである。

〈埋土〉 壁際に地山ブロックを多く含む層(5~6'層)、黒味の強い層(4層)が堆積し、住居全体には床面から暗褐色土、黒褐色土、暗褐色土と互層になる。1層下面に炭化物が貼付いており、2層上面では層となり、3層上面では部分的に確認できる。この他埋土中に炭化物・焼土ブロックはみられないものの、これらの炭化物層が比較的広範囲で認められたことから、本遺構は故意または事故により焼失・倒壊した可能性が高い。

〈床面〉掘方埋土(12層)上面を床とする。ほぼ平坦だが東側がやや低くなる。硬化面は特に認められなかった。掘方埋土は10YR2/2黒褐色・10YR3/4暗褐色・地山ブロックが細かく混じる。

〈壁〉やや外傾して立ち上がる。IV b層まで掘り込まれており、残存している壁高は30cm程度である。

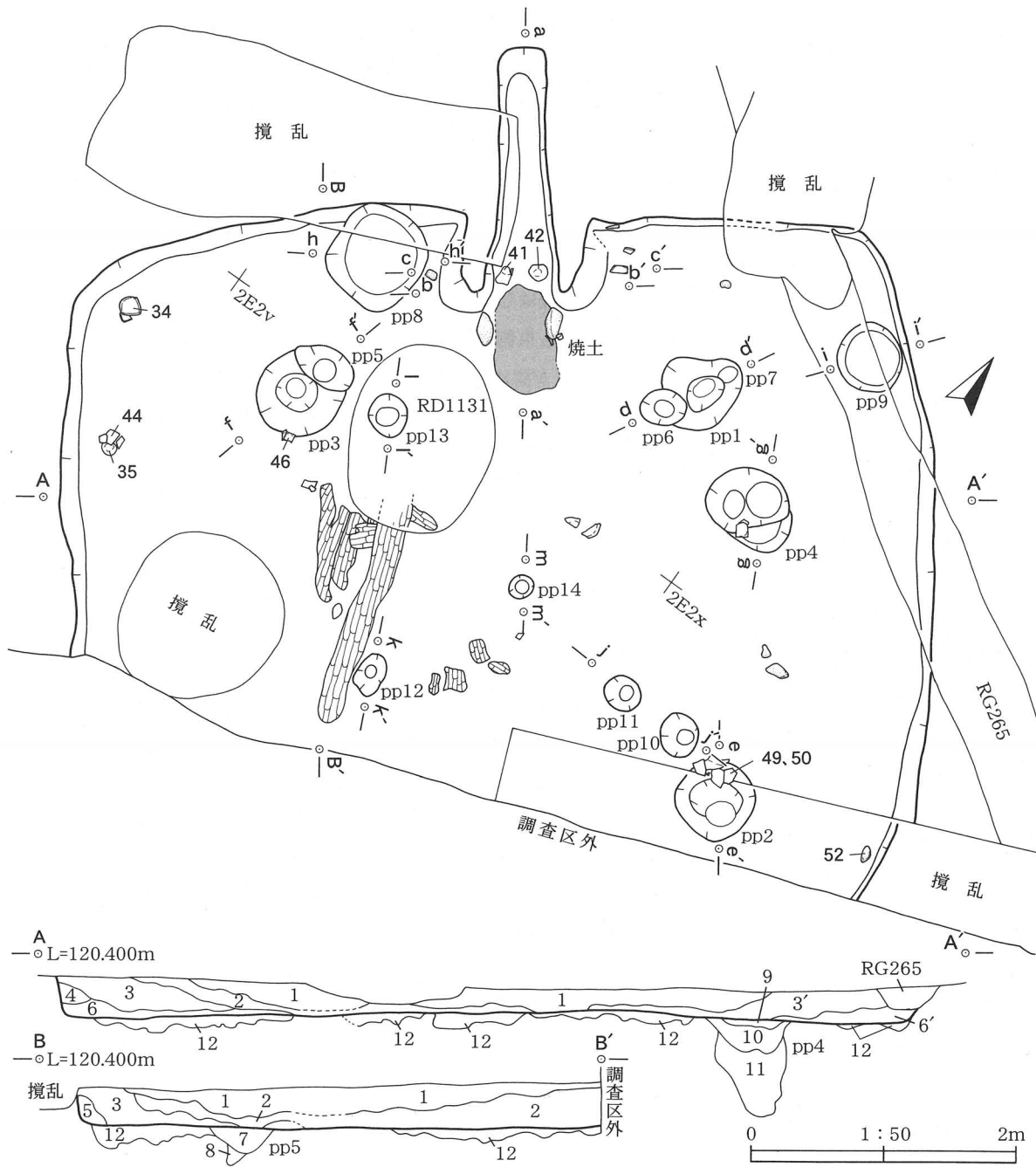
〈土坑・柱穴〉14基検出された。pp 1・2・3(5)が主柱穴となると思われる。柱間は約3.0m、ほぼ正方形の配置を持ち、南西部は調査区外に位置すると推定される。これらの柱穴は住居床面まで掘り下げたところ円形に窪む空洞として検出した。当初攪乱と誤認し記録を欠くが、恐らく住居埋没後柱が腐食し空洞化した柱痕跡であろう。この空洞の周囲には円形の掘込みが認められ、いずれも10YR2/2黒褐色シルトを主体とする埋土が堆積する(柱穴掘方埋土)。柱痕の周囲はしまりが弱く(柱痕部に埋土が崩落したもの?)、その外側は良くしまり床掘方埋土とよく似る。pp 4も東側の南北軸にのるため上屋構造を支える柱の可能性が高い。またこの内側に一辺2mの正方形の柱配置が認められる(pp 6・11~13)。外側の柱穴に対し規模・深さとも小さく(外:径約60cm、深さ70cm前後、内:径約30cm、深さ55cm前後)、埋土も10YR3/4暗褐色シルトが堆積しており主体土が異なる。柱を切り取った可能性も否定できないが、外側の柱穴に柱が抜き取られずに残存していたことから、内側から外側への立て替えが想定できる。そして柱間・柱規模が単純に住居規模に比例するならば拡張した可能性が考えられる。カマド西側にはpp 8が検出された。開口部径80cmの円形、床面からの深さは約60cm、壁はやや袋状を呈する。埋土は10YR3/4暗褐色シルトを主体とし、地山ブロックを微量含む。位置から貯蔵穴と推定される。

〈炭化材・焼土ブロック〉埋土1層下面に炭片が散在し、住居南西部でまとまって検出された。南北方向に長いものとこれとはほぼ直交するものがみられるが、両者の切り合いは不明である。RD1131土坑重複部にも炭化材が続いていたが、土坑調査時に取り除いてしまい記録を欠く。埋土中から出土のため、壁または屋根などの上屋を構築する材の一部と考えられる。これらは木皮のみのため樹種の同定は不可能であったが、木皮を付けたままの材の使用、または木皮のみを使ったかいずれかの可能性が想定される。また北東隅でも炭化物・焼土ブロックが散在する範囲が認められた(第17図)が、やはり床面よりやや高い位置に広がるため1層の相当するものと思われる。

〈カマド〉北壁ほぼ中央部に位置する。煙道方位はN-35°-Wである。袖の残存状態は良くIV a層相当の地山ブロックで構築されている。燃焼部は僅かに窪み、底面には80×50cmの焼土が形成され、両袖の内側(燃焼部壁)も被熱する。両袖の南側(住居内側)には礫が被熱範囲に沿って横倒しの状態で出土している。これらの礫には被熱の痕跡は認められないため、焚口付近は石を土で覆って袖として利用していた可能性がある。また焼成面の上位層中に下面が被熱する地山(IV a)ブロック層(5層)が認められることから、燃焼部天井も袖と同様の土で構築されていたものと考えられる。燃焼部内には甕の底部が東西に並んで倒位で設置されていた(40・41)。支脚として利用されていたものと推定される。煙道は全長120cm、底面はほぼ平坦な状態で煙出し部へと続く。天井部は上部が削平されてしまっているが、埋土中に焼土ブロックが点在する地山(IV a層)ブロック層(10層)がみられ、刳抜式の可能性がある。埋土は10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、煙り出し側から流入する。煙道底面を地山ブロックの少ない層(14層)が覆いその上に天井崩落に伴う地山ブロック層(10~13層)、その後燃焼部の天井(5層)も崩落し、住居内に埋土が堆積する(1~4層?)。

〈解釈〉柱配置から建て替え及び、拡張が行われた可能性があるが、この他(床面・掘方埋土、カマド等)からこれらを認める要素は確認されなかった。

〈重複〉RD1131土坑、RG265溝跡と重複しこれに切られる。



RD583竪穴住居跡 (A-A'・B-B')

全体にややしまりあり、粘性弱い。

1~6'・12層 住居跡埋土、7・8層 pp5、9~11層 pp4

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 10YR2/1 黒色シルトブロック微量。地山ブロック少量。

2. 10YR2/2 黒褐色シルト グレー味強い。地山ブロック極微量のきれいな層。上面に薄く炭化物層はいる。

3. 10YR3/4 暗褐色シルト やや茶味。1層と接する面は上面にとぎれとぎれで炭化物はいる。地山ブロック微量、細かい。

3'. 3層に似るが茶味ない。10YR2/2 黒褐色に近い。

4. 10YR2/1 黒色シルト 混ざりものないきれいな層。

5. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロックやや多量、粒径大きい。

6. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック5層より多い。粒径は5層より小さい。

6'. 6層に似るが地山ブロックやや少なく焼土ブロック極微量。

7. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりやや弱い。地山ブロック微量。10YR3/4 暗褐色シルト大量。

8. 10YR3/4 暗褐色シルト しまりやや弱い。地山ブロック微量。

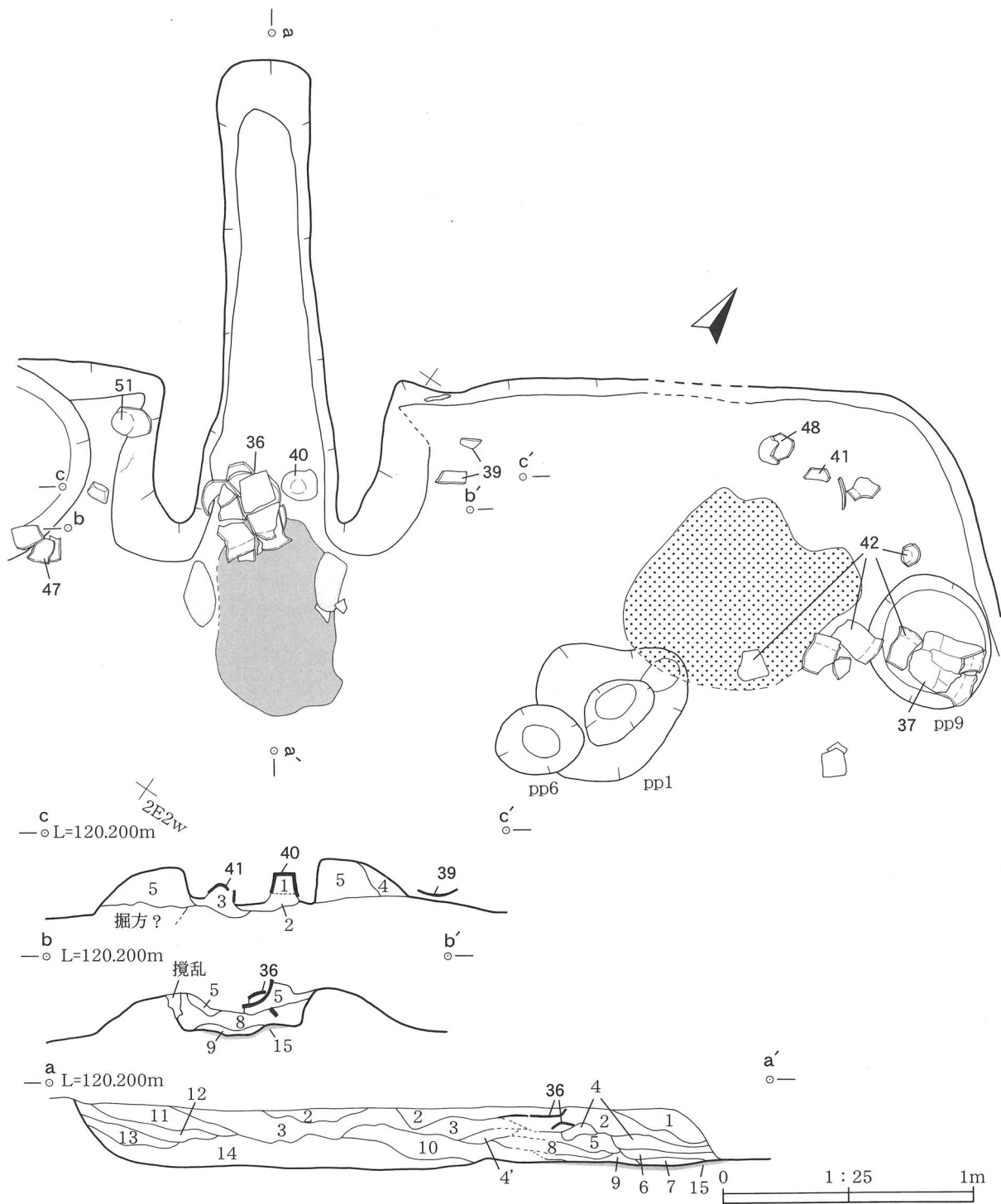
9. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりやや弱い。地山ブロック微量。炭化物極微量。

10. 10YR3/4 暗褐色シルト しまりやや弱い。地山ブロックやや多量。

11. 10YR3/4 暗褐色シルト しまりやや弱い。地山ブロック微量、粒径大きい。

12. 10YR2/2 黒褐色シルト 主土土・10YR3/4 暗褐色シルト・地山ブロックの混土。細かく混じる。掘方埋土。

第16図 RA583竪穴住居跡(1)



RD583竪穴住居跡カマド (a-a'~b-b')

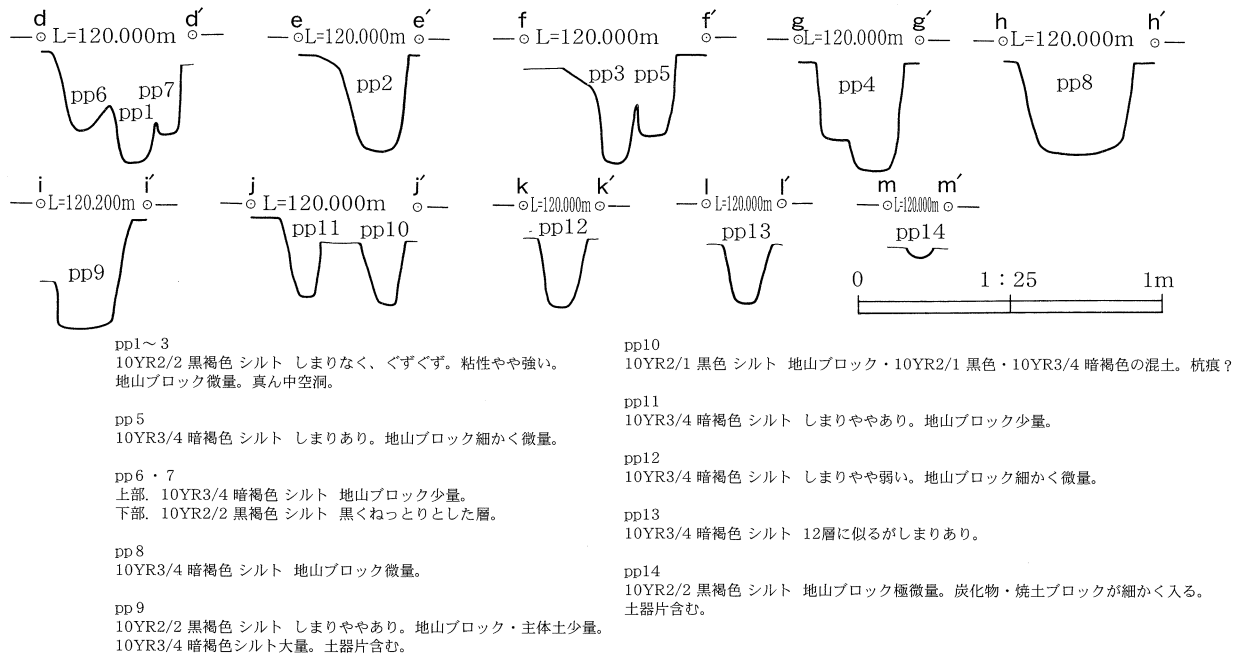
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック少量。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト きれいな層。遺物含む (断面記載)。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック全体にやや多量、粒径大きい。
4. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック極微量。
- 4'. 10YR2/2 黒褐色シルト 4層に炭化物・焼土ブロック極微量含む。
5. 地山ブロック層。下面に被熱ブロック含む。
6. 1層に炭化物・焼土ブロックやや多量含む。上面に炭化物のる。
7. 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土ブロックやや多量。6層より炭化物多い。
8. 7層に似るが焼土ブロックやや少ない。
9. 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土ブロック大量。
10. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック大量。
被熱ブロックはいるが面的ではない。天井崩落土?

11. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック大量。
12. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック少量。
13. 地山ブロック層。10YR2/2 黒褐色シルト極微量含む。
14. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック極微量。
15. 2.5YR5/8 明赤褐色シルト 焼土層。焼成良い。

RD583竪穴住居跡カマド (c-c')

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック極微量。上面被熱? 支脚内の土。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック・焼土ブロック少量。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック多量。
4. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロックやや多量。
袖構築土? 崩落土の可能性もあり。
5. 地山ブロック層。

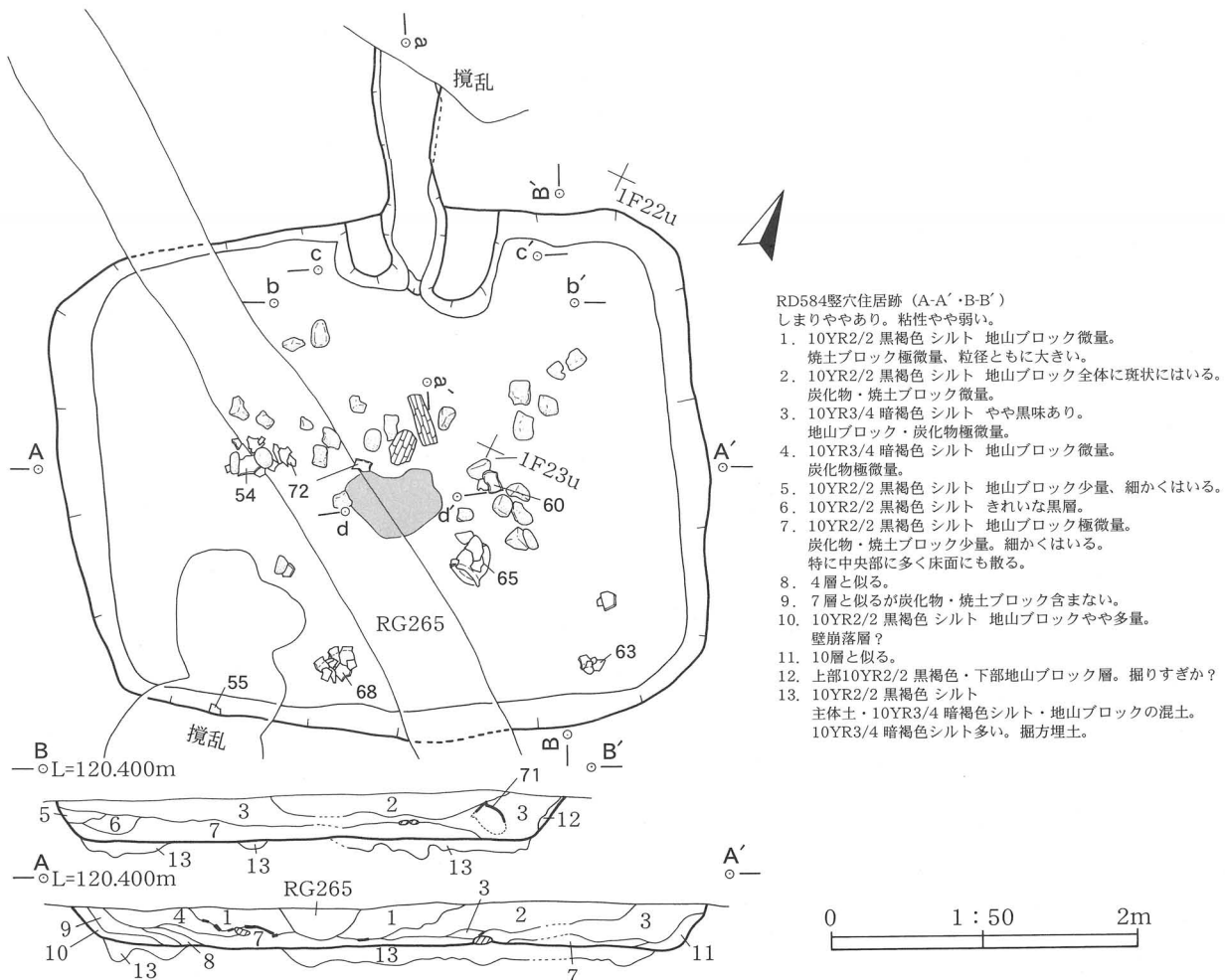
第17図 RA583竪穴住居跡(2)



第18図 RA583竪穴住居跡(3)

〈遺物〉床面から埋土下部にかけて多く出土する。特に北東隅の焼土ブロックが広がる付近に甕類が集中する(第17図:37・41・42・48)。40・41は甕胴部下端をカマド燃焼部内に倒位で並置されており、支脚と考えられるが、両者とも埋土中の破片と接合し胴部上半まで復元された。坏2点、甕類16点、石器1点を掲載した。34・35は坏で丸底、外面に段を有す。34は底部から内湾気味に開いて立ち上がり、外面調整は段部を除きハケメ、内面はヘラミガキが施されるが、黒色処理はされていない。35は、外面の段を境に底部はヘラケズリ、口縁部はヨコナデ後部分的にヘラミガキ調整である。内面はヘラミガキ後黒色処理される。36から44は甕で、頸部に明瞭な段を有し(36~38・40・42~44)、体部下端は短く外反し内面は平底である(36・40・42・43)。38は口縁部にもう一段、39は沈線状の段を持つ。端部の形状は比較的大きいもの(37~42)は平坦だが、小形のものは丸くなる。また36は端部に沈線状の窪みがみられる。調整は、内外面ともハケメもしくはヘラナデが施される(外面は摩滅が著しく、ハケメがナデ状にみえるものも含まれる)。45・46は器高10cm以下の小形の甕(鉢)である。45は内面調整がしっかりと行われておらず輪積み痕が残り、外側の器面も凹凸がある粗雑な作りである。46は頸部に段を持つ45に比べるとしっかりとした器形(通常の甕と類似する形)を持ち、外面はヘラナデ、内面はハケメ後部分的に擦痕に近いヘラミガキがみられる。47は甕で、頸部に段を有するが口縁部まで直線的に開く器形を持つ。胴部下端のはほぼ180°対称位置に小穴が2箇所穿孔される。穴の周囲はきれいに調整されており、穿孔方向は不明である。48は小形の球胴甕で、頸部に小穴が内側から外側へ穿孔される。49~51は球胴甕で、内外面ともハケメ調整される。調整方向は外側が縦、内側が横だが、50は最大径付近では外面も横方向となる。49の外面には煤が付着していた。(図70~72、写真図版70~72)

〈時期〉奈良時代



RD584竪穴住居跡 (A-A'・B-B')

- しまりややあり。粘性やや弱い。
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック微量。焼土ブロック極微量、粒径ともに大きい。
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック全体に斑状にはいる。炭化物・焼土ブロック微量。
 3. 10YR3/4 暗褐色シルト やや黒味あり。地山ブロック・炭化物極微量。
 4. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック微量。炭化物極微量。
 5. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック少量、細かくはいる。
 6. 10YR2/2 黒褐色シルト きれいな黒層。
 7. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック極微量。炭化物・焼土ブロック少量。細かくはいる。特に中央部に多く床面にも散る。
 8. 4層と似る。
 9. 7層と似るが炭化物・焼土ブロック含まない。
 10. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロックやや多量。壁崩落層？
 11. 10層と似る。
 12. 上部10YR2/2 黒褐色・下部地山ブロック層。掘りすぎか？
 13. 10YR2/2 黒褐色シルト
主体土・10YR3/4 暗褐色シルト・地山ブロックの混土。
10YR3/4 暗褐色シルト多い。掘方埋土。

第19図 RA584竪穴住居跡(1)

R A 584竪穴住居跡 (第19・20図、写真図版14)

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 23 u グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 規模は北壁4.0m、東壁3.1m、南壁3.9m、西壁2.7m、概ね方形を呈する。主軸方位はN-30°のWである。

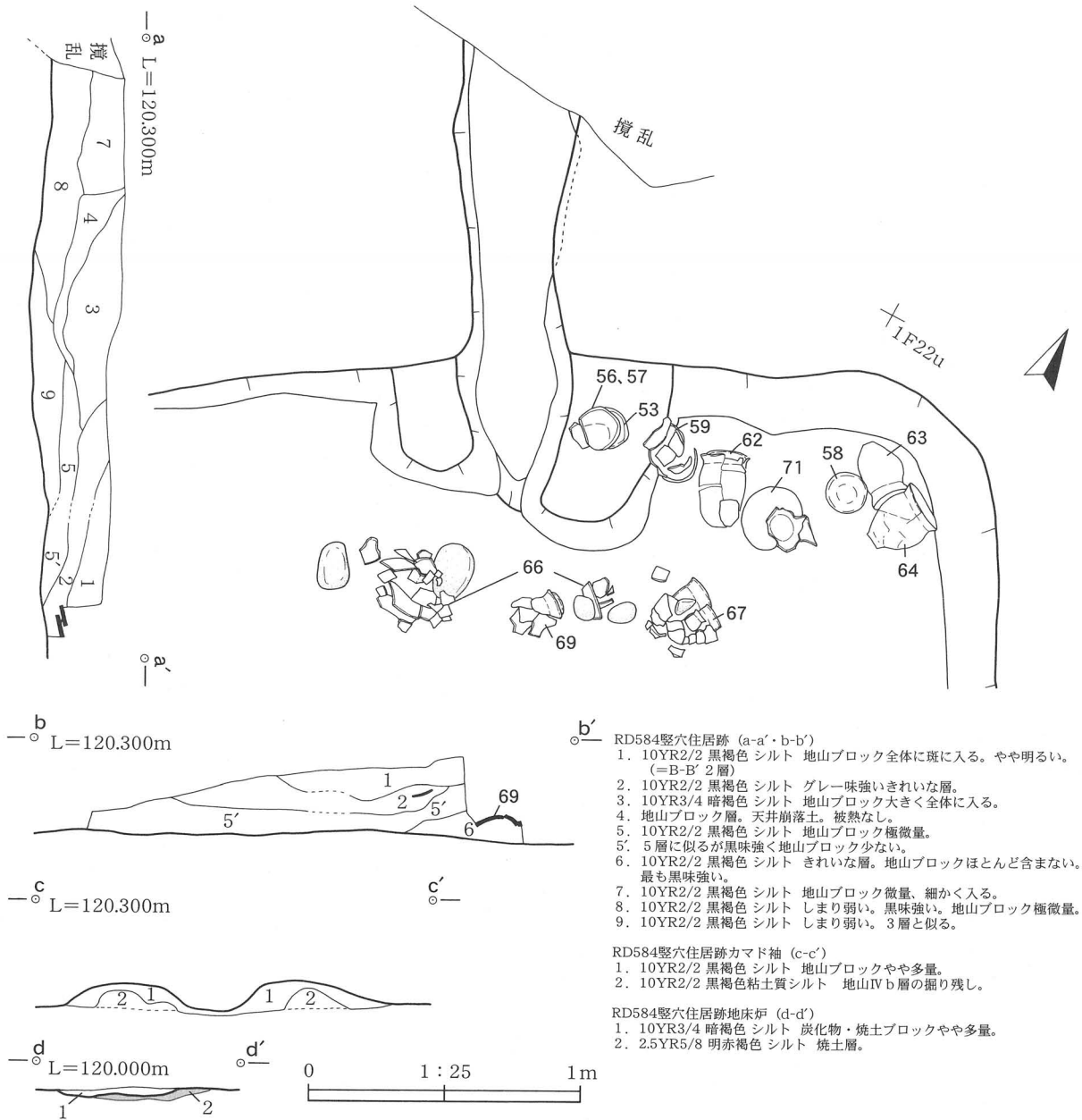
〈埋土〉 3層に大別される。床面直上(7層)と上部(1・2層)は10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、両者の間に10YR3/4暗褐色シルト層(3・4層)が挟まれる。混入する地山ブロックの粒径は、上部では大きい、それ以下は細くなる。埋土全体に炭化物・焼土ブロックを含み、下部に行くに従って量が多くなる。床面にも炭化材が貼付いていることから、本遺構は故意・または事故により倒壊・焼失した可能性が高い。

〈床面〉 掘方埋土上面及び地山IV層を床とする。硬化面などは認められなかった。掘方は地山IV b層まで達しており住居北西部で深くなる。埋土は10YR2/2黒褐色シルト・10YR3/4暗褐色シルト・地山シルト(a層)との混土となる。

〈壁〉 壁は外傾して立ち上がる。残存する壁高は約30cmである。

〈土坑・柱穴〉 検出されていない。

〈カマド〉 北壁やや東寄りに設置されており、北端を攪乱によって消失する。煙道方位はN-30°-Wである。袖は地山bを削り出し、これを地山(a)ブロックと10YR2/2黒褐色シルトブロックで覆うように構築して



第20図 RA584竪穴住居跡(2)

いる。燃烧部は床面より僅かに窪みを持つが、焼土は確認されなかった。煙道は残存長110cm、底面は住居奥壁付近からやや窪んでわずかに上がる。煙道部の構築方法は、天井部（4層）が崩落してしまっているものの、剝抜式と思われる。埋土は10YR2/2黒褐色シルトを主体とする。煙道南半（住居側）の天井部は早い段階で崩れたものと考えられ（9層）、その後煙出し部から埋土が流入、北半天井が崩落し住居内が埋没している。埋土中に炭化物・焼土ブロックは含まれない。燃烧部内にも焼土が検出されず、袖・煙道天井部にも被熱部分が認められず、カマドは火を焚き使用した痕跡がみられなかった。

〈地床炉〉住居跡ほぼ中央部床面に60×40cmの焼土が検出された。焼成はやや弱く被熱の及ぶ深さは2cm程度である。焼土形成面は浅皿状の窪み上位には炭化物・焼土ブロックが大量堆積する。

〈重複〉 R G 265溝跡と重複しこれに切られる。

〈遺物〉 坏類はカマド右袖の上 (53・56・57) およびカマド右側(東側)、甕類はカマド手前(南側) から右側にかけて散在する。いずれも床面からの出土である。一方、住居中央部から南側にも遺物が集中するが、これらは埋土中のものが多い。坏7点、高坏・小形壺各1点、甕類11点を掲載した。53から59までが坏である。内面はすべてヘラミガキ調整であるが、55・58・59は黒色処理されていない。底部は丸みを帯び、外面に段を有するものは53~56、このうち54は段が沈線に省略されている。53~54は底部に「×」のヘラ記号がみられる。58・59は口縁部に縦方向のシワが確認できる。ヨコナデ前(整形段階か?)に幅広の工具で横方向ナデた結果、細かい凹凸が残ったものか、縦方向に密にナデたものかと思われるがはっきりとしなかった。いずれにせよ両者は、器形・調整とも酷似している。60は高坏で外面体部下半に1条、脚部に2条の沈線を持つ。61は小形の壺で、外面体部はヘラナデ頸部より上は内外面ともヘラナデ調整されるが、内面体部は輪積みを指で押さえた程度である。62~70は甕で頸部に段を有する。62~64は、口縁部が外傾して開き、端部は平坦で沈線が施される。体部下端は短く直立し、内面は64が丸底、62・63も丸みを帯びる平底を呈する。調整はいずれもハケメ後ヘラミガキされている。65以下はハケメ調整(一部ヘラナデ)のみとなり、口縁端部はやや丸味を帯びる。66は頸部から口縁部下半は外反して開くがへの字状に屈曲し内彎して立ち上がる。71・72は球胴甕で、いずれも頸部に段を有する。71はさらにもう一段沈線状の段を持つ。調整は外面がハケメ、内面はハケメ・ヘラナデ・ヘラミガキが混在する。外面のハケメは体部全体に縦方向に施されたあと、胴部最大径の上部と下部に帯状に横方向の調整がみられる。72は口唇部付近がつまみ挙げられる。調整は、外面がタテ、内面がヨコ方向のハケメであるが、やはり胴部最大径付近では、外面は横方向に調整される。(第73~75図、写真図版72~75)

〈時期〉 奈良時代

R A 585竪穴住居跡 (第21図、写真図版15)

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 22 d グリッドに位置する。IV層上面で方形のプランが検出されたがカマド煙道部分は把握できず、規模から土坑と判断し調査を開始した。その後遺構底面(床面)まで掘り下げたところ焼土が検出され、焼土の北側の壁が黒く煙道部が存在することが判明し住居跡と認識した。

〈規模・形状〉 規模は、北壁1.6m、東壁1.6m、南壁1.8m、西壁1.7m、形状は隅丸方形を呈する。北壁カマド煙道西側に一辺40cm程度の方角の張り出しを持つ。主軸方位はN-35°-Eである。

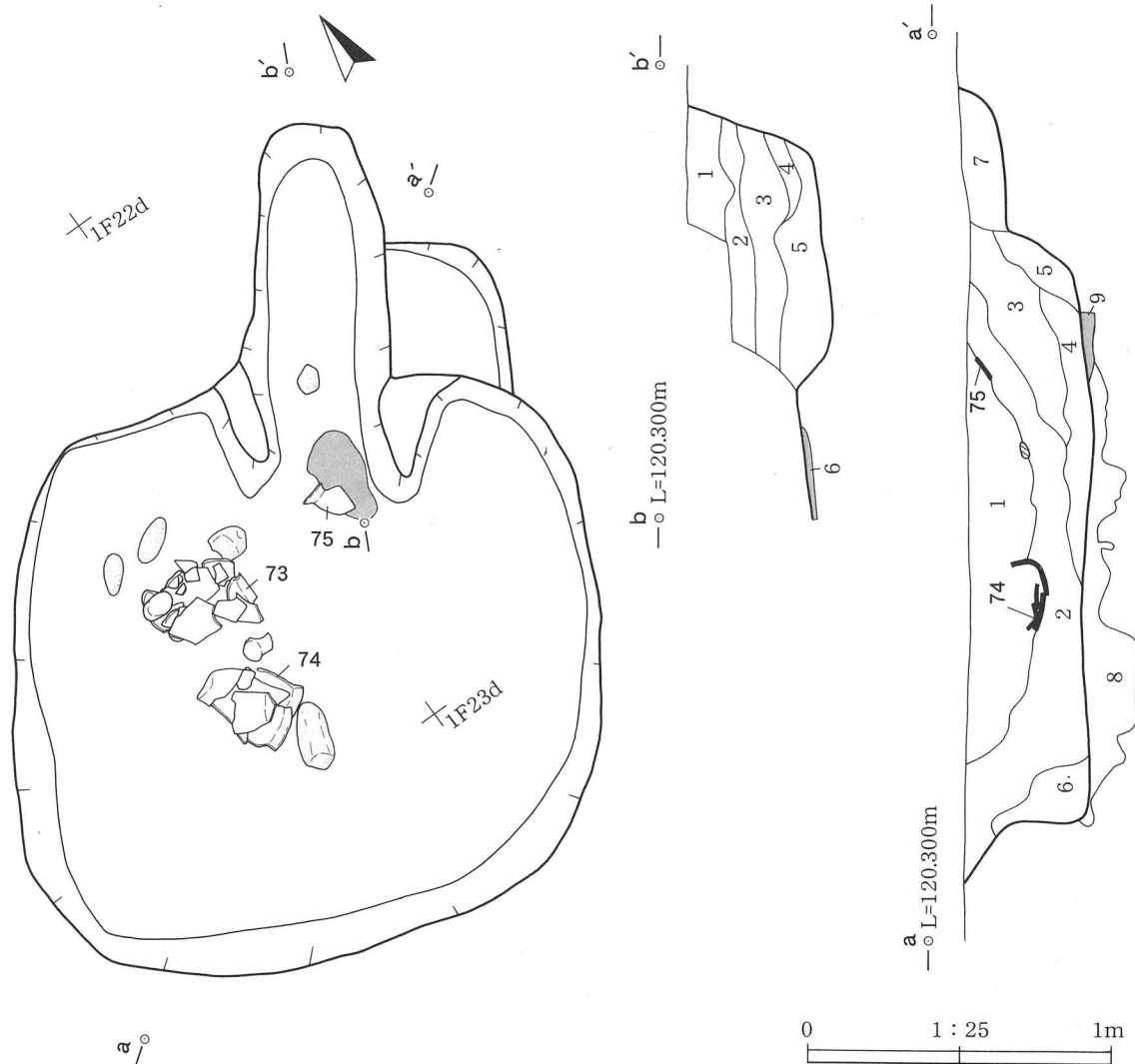
〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とする。壁際は主体土と地山土(a)との互層(3・6層)となり、北側(カマド側)は茶味が弱い。カマド煙道東側の張出部にはややグレー味の強い10YR2/2黒褐色シルトが堆積する。カマド煙道、拡張部、住居内の順で埋没するため、拡張部は本遺構に伴うものと判断される。

〈床面〉 掘方埋土上面を床とする。床面は南へ向かって若干低くなる。掘方は南側が深く10YR3/4暗褐色シルト大量と、10YR2/2黒褐色シルト・地山ブロック(a)少量との混土となる。

〈壁〉 壁はほぼ直立するが、南壁・西壁南半の上部は外反する。地山IV層まで掘り込まれ、残存する壁高は約40cmである。

〈土坑・柱穴〉 検出されなかった。

〈カマド〉 北壁、僅かに東に寄って設置される。煙道方位はN-34°-Eである。袖の残存状態は良く、地山IVc(10YR3/4暗褐色シルト)を削りだす。燃焼部は平坦で、底面には60×15cmの焼土が形成されている。焼成はやや弱く、被熱の及ぶ深さは2~3cm程度である。記録は欠いているが、燃焼部の上位には炭化物・



RD585竪穴住居跡 (a-a')

全体ややしまり、粘性やや弱い。

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック・炭化物極微量。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック細かく微量含む。
3. 10YR3/1 黒褐色シルト 地山がブロックでレンズ状に入り主体土と互層になる。
4. 10YR2/2 黒褐色シルト 2層に似るが茶味強い。炭化物微量。
5. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック多量。斑状に混じる。
6. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロックやや多量。水平に主体土と互層になる。
7. 10YR2/2 黒褐色シルト グレー味強いきれいな層。(=b-b'1層?)
8. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック・主体土少量。
- 10YR3/4 暗褐色シルト大量、大きいブロックで混じる。
9. =b-b'6層

RD585竪穴住居跡カマド (b-b')

全体的にグレー味。しまり、粘性やや弱い。

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック少量。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック極微量。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック全体。1層より多く粒径大きい。
4. 10YR2/2 黒褐色シルト 黒味強いきれいな層。
5. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロックやや多量。
6. 2.5YR5/8 明赤褐色シルト 焼土層。

第21図 RA585竪穴住居跡

焼土ブロックが混入する地山ブロック層が堆積し、天井もしくは袖崩落土の可能性ある。煙道は全長90cm、住居壁付近で急激に落ち込み、僅かに立ち上がりながら煙出し部へと続く。埋土に天井崩落土は確認できず、煙道の構築方法は不明である。埋土は、底面直上が10YR3/4暗褐色シルト、その上位は10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、地山ブロックを含む層（1・3・5層）とほとんど含まない層（2・4層）が交互に堆積する。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 甕を3点掲載、いずれも1層下面からの出土である。頸部に段を持ち、73・75は口縁部が外傾して

開き、端部は平坦で沈線状の窪みが巡る。74は口縁部上半が内湾し端部は丸くなる。73・74の内面は平底である。調整は73・74が内外面ともヘラナデ、75はハケメ（一部内面ヘラナデ）が施される。（第76図、写真図版75）

〈時期〉 奈良時代

R A 586 竪穴住居跡（第22・23図、写真図版16）

〈位置・検出状況〉 F区、1 C 15 g グリッドに位置する。IV層で検出した。

〈規模・形状〉 南壁を攪乱、北東壁をR G 043溝跡に切れ消失する。北壁は2.4mを測り、東壁と西壁はそれぞれ0.25m、0.75mが残存しているのみである。全形は不明だが、隅丸方形を呈していた可能性が高い。主軸方向はN-17°-Wである。

〈埋土〉 黒褐色シルトを主体として4つの層に分けられる。住居跡の端から端まで断面を観察できる地点がほとんどないが、A-A'ベルトを観察する限りではレンズ状に堆積しており、自然堆積によって埋没したものと考えられる。3層は西側だけで観察される。

〈床面〉 掘方埋土（5層）上面を床とする。床面は平坦で、あまり硬化した様相は見られなかった。掘方埋土は10YR4/4褐色シルトと10YR2/2黒褐色シルトの混土で構成される。

〈壁〉 外傾しながら立ち上がり、25~40cmが残存する。

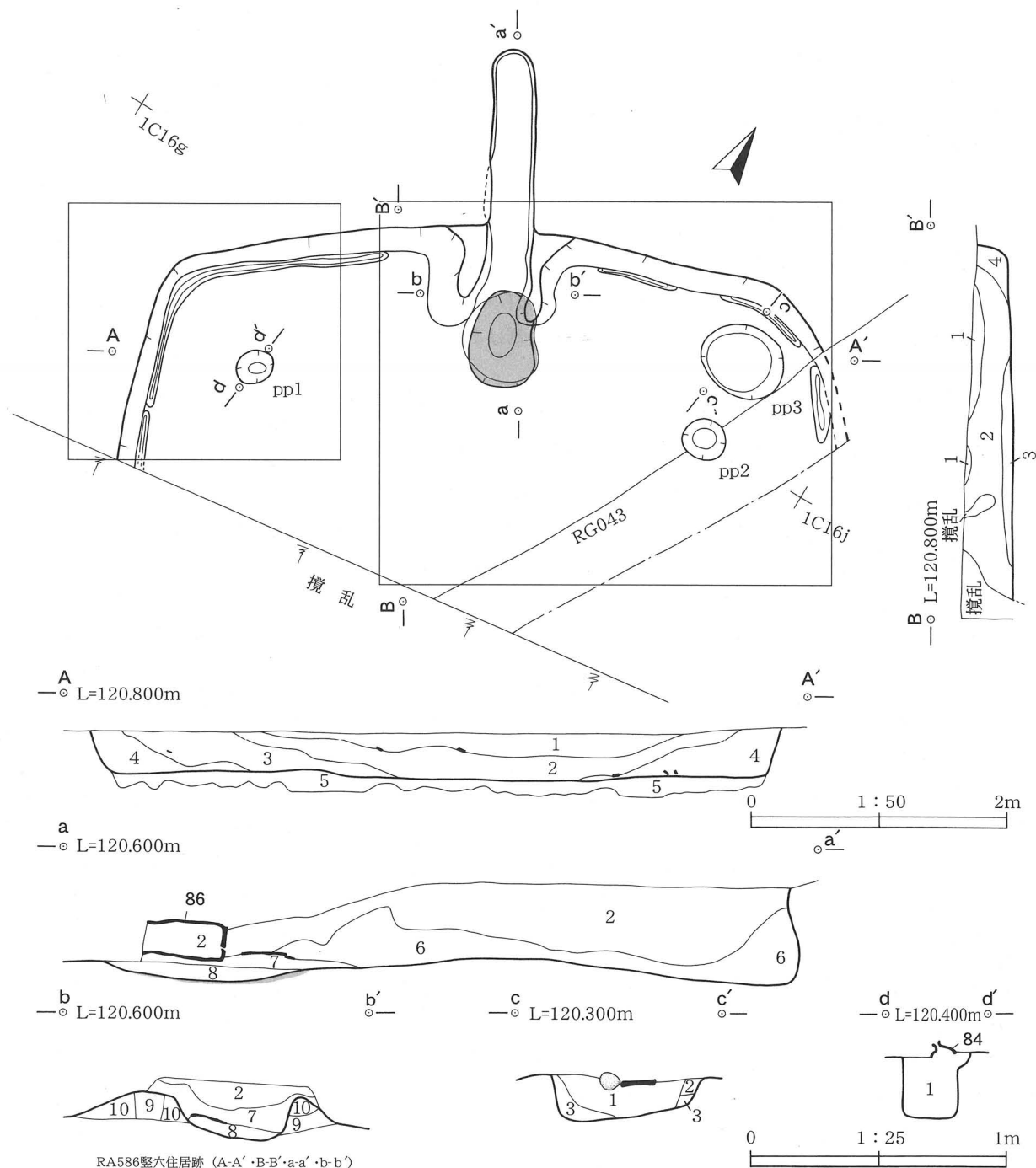
〈周溝〉 壁際に幅5~20cm、深さ6~9cmの溝が巡らされている。壁が残存するほとんどのところで確認できるが、ひと続きでなく、ところどころ切れている。

〈土坑・柱穴〉 小穴が2基、土坑が1基検出されている。pp 1・2は、その位置から上屋を支える柱を据えるための柱穴と考えられる。pp 1は径30cm、深さ25cm、埋土は10YR2/2 黒褐色シルトの単層である。pp 2は径35cm。pp 3は径70×55cm、深さ30cm、埋土は10YR2/2黒褐色シルトを主体とし3層に分層される。遺物が出土するのは埋土の大部分を占める1層からである。

〈カマド〉 北壁の中央に位置する。煙道方向はN-28°-Wである。左右の袖はよく残っており、地山土に暗褐色シルトを貼り付けて構築したようである。燃焼部は、深さ15cmの浅皿状の窪みをもち75×55cmの焼成面が形成される。燃焼面直上には赤褐色土が見られ（8層）、その上に10YR2/2黒褐色シルトが堆積している（7層）。7層は10YR4/4褐色シルトを大量に含むことから、崩落した天井部のもと考えられる。煙道は全長140cm、煙出し部へと緩やかに下る。上半が消失しているため煙道の構築方法は不明である。

〈重複〉 R G 043溝跡と重複し、これに切られている。

〈遺物〉 pp 1とpp 2を結んだ線より北、特にカマド燃焼部から住居北東隅pp 3付近床面から集中して出土する。カマド燃焼部からはほぼ完形の甕（85・86）が横向きに並ぶ。カマド天井崩落土上面にのっているため、掛け口に置いたものが天井崩落に伴い倒れ込んだか、カマド廃絶後に使用可能のものを意図的に置いたかいずれかであろう。pp 3は埋土中に多量の土器と共に礫が混じる。朱塗りの壺（84）は、斜位の状態で出土し、体部はpp 1の埋土に食い込み、口は南西方向を向いていた。体部下半から底部が欠損しているが、pp 1の埋土中から同一個体と思われる破片は出土していない。pp 1の埋土中に含まれる理由としてもとと床面にあったものが土圧でくいこんだか、埋没途中（人為的埋没も含む）に入った（置かれた？）ものかと判断される。坏8点、壺1点、甕類14点、紡錘車2点を掲載した。76~83は坏で、丸底と平底が混在し、外面の段は、沈線もしくは、不明瞭なものが目立つ。76は底部から内湾して開く器形を持ち外側に段を持ち、調整は外面口縁部がヘラナデ、底部がハケメ、内面がヘラミガキを施す。器形・調整とも一般的なも



RA586竪穴住居跡 (A-A'・B-B'・a-a'・b-b')

1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性やや強い。10YR3/3 暗褐色シルト80%。炭少量。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR3/3 暗褐色シルト40%。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。10YR2/1 黒色シルト・10YR4/4 褐色シルト各20%ずつ。
4. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性強い。10YR4/4 褐色シルト2%。
5. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや強い。10YR4/4 褐色シルト80%掘方埋土。
6. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性やや強い。焼土粒2%。
7. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
8. 5YR4/8 赤褐色土 しまりあり、粘性弱い。焼土ブロック層
9. 10YR4/4 褐色シルト しまりあり、粘性弱い。カマド軸。
10. 10YR3/3 暗褐色シルト しまりあり、粘性弱い。カマド軸。

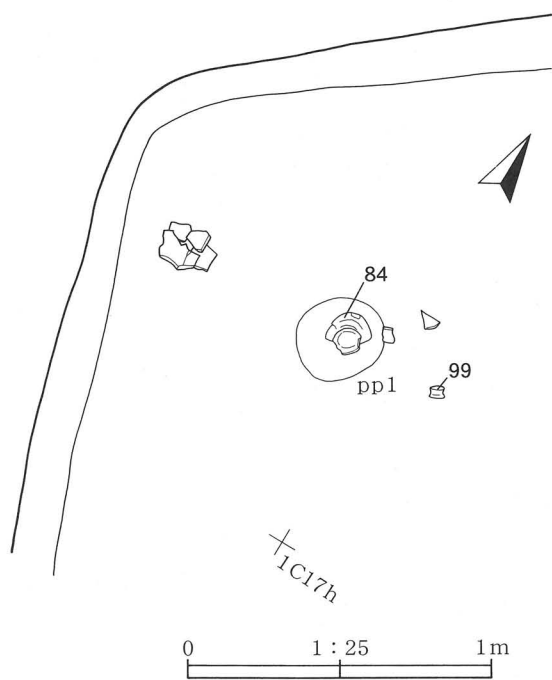
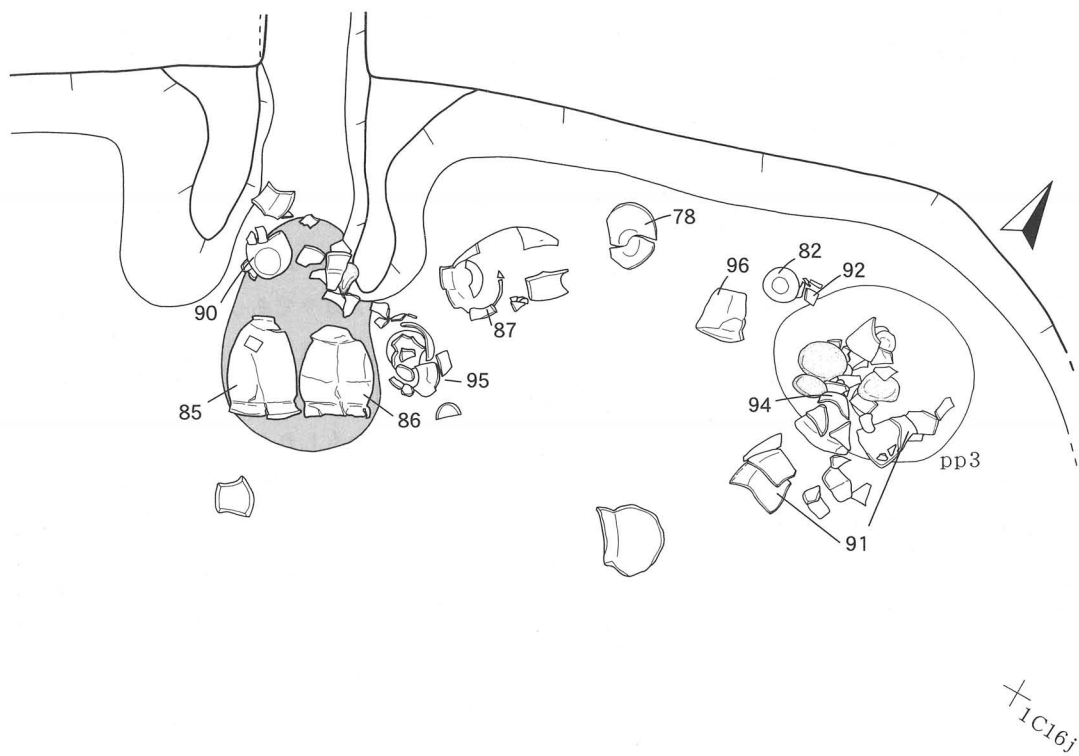
RA586竪穴住居跡pp3 (c-c')

1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性やや弱い。10YR3/4 暗褐色シルト90%。焼土粒1%。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性やや弱い。10YR3/3 暗褐色シルト80%。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト80%。

RA586竪穴住居跡pp1 (d-d')

1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性やや弱い。10YR2/1 黒色シルト30%。

第22図 RA586竪穴住居跡(1)



第23図 RA 586 竪穴住居跡(2)

のであるが、内面に黒色処理ではなく、外面に赤色塗彩される。77も平底の坏で僅かに顔料が付着している痕跡がみられ赤色塗彩の可能性がある。78～80はいずれも黒色処理されたもので、78には段が確認できるが、79は沈線、80においては何となくへこむ程度ではっきりとした段はみられない。81も外面の段は沈線化しており、こちらは黒色処理がされていない。81・82は口径10cm以下の小形のもので、平底で体部から口縁部にかけて直線的に開く器形を持つ。82が外面底部ヘラケズリ、内面ヘラナデ、83が外面体部下端にヘラナデと調整技法は異なるが、両者は法量・器形・色調等、酷似する点が多い。84は壺で、外面に赤色塗彩される。外面は口縁から頸部まではヨコナデ、体部との接合部には縦方向のハケメがみられる。体部は砂粒が動く箇所も認められヘラケズリされていた可能性があるが、その後摩滅したかもしくはナデ仕上げられたものと思われるが、調整単位がはっきりしない。内面は口縁～

頸部ヨコナデ、体部は最大径より上が横位、下が縦斜めのハケメが施される。体上部の調整は、頸部が狭く作業が困難だったためかはっきりとついておらず、輪積みの単位、接合痕などが確認できる。また頸部には絞り込んだ痕跡も認められる。胎土は他の土器と比べ非常に軟質で、色調は灰黄味が強い。外面には頸部を中心に多数の擦痕がみられるが、意図的、もしくは使用・廃棄などに伴いついたものかは判断できなかった。赤色範囲は、はっきりと確認できる範囲のみ図示した。しかし、器面が露出している箇所でも、上記の砂粒の動いた溝には僅かに顔料が残っており、もともとは外面体部全体に塗布されていた可能性が高い。内面は口縁付近にのみ顔料が残存する。76と84の赤色顔料は分析の結果いずれもベンガラであった。85～96は甕で頸部に段を有す。85・86は口縁部が外反して開き端部は平坦、85はこれに沈線が巡り窪む。85の体部外面は摩滅が著しく体下半は調整がはっきりしない。86は、摩滅しているわけではないが外面体下部ツルツルして調整工具及び単位が読みとれない。きれいにナデ（ミガキ？）られているのかもしれない。87・88も上記の甕同様口縁部が外反して開くが端部が丸みを帯びる。一方で91・92は口縁部が内彎して開く。外傾して開くものが丸底から丸みを帯びた平底であるのに対し、これらは平底を持つ。また後者は口径器高に対し底径が前者より大きくなる。24・25は器高20cm前後のやや小形の甕で、頸部から口縁部にかけて段を2つ持つ。また97の球胴甕も頸部から口縁部まで4段もの段を持つ。99・100は土製紡錘車である。（第77～79図、写真図版75～78）

〈時期〉 奈良時代

R A 587 竪穴住居跡（第24図、写真図版18）

〈位置・検出状況〉 F区、1 B16 v グリッドに位置する。IV層上位で黒褐色の広がりを検出し、さらに若干下げた時点で形状が明確になるとともに、北側の土器群も出土した。

〈規模・形状〉 北西部は調査区外へと続くため規模は不明である。調査範囲内では、東壁が4.8m、南壁が2.9mを測る。全形も今後の調査に待つしかないが、南東角を見る限りでは隅丸方形を呈するものと推測される。主軸方向はN-45°-Wである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として、3つの層に分けられる。住居跡の端から端まで断面を観察できる地点はないがレンズ状に堆積していたと見られ、自然に埋没したものと推測される。

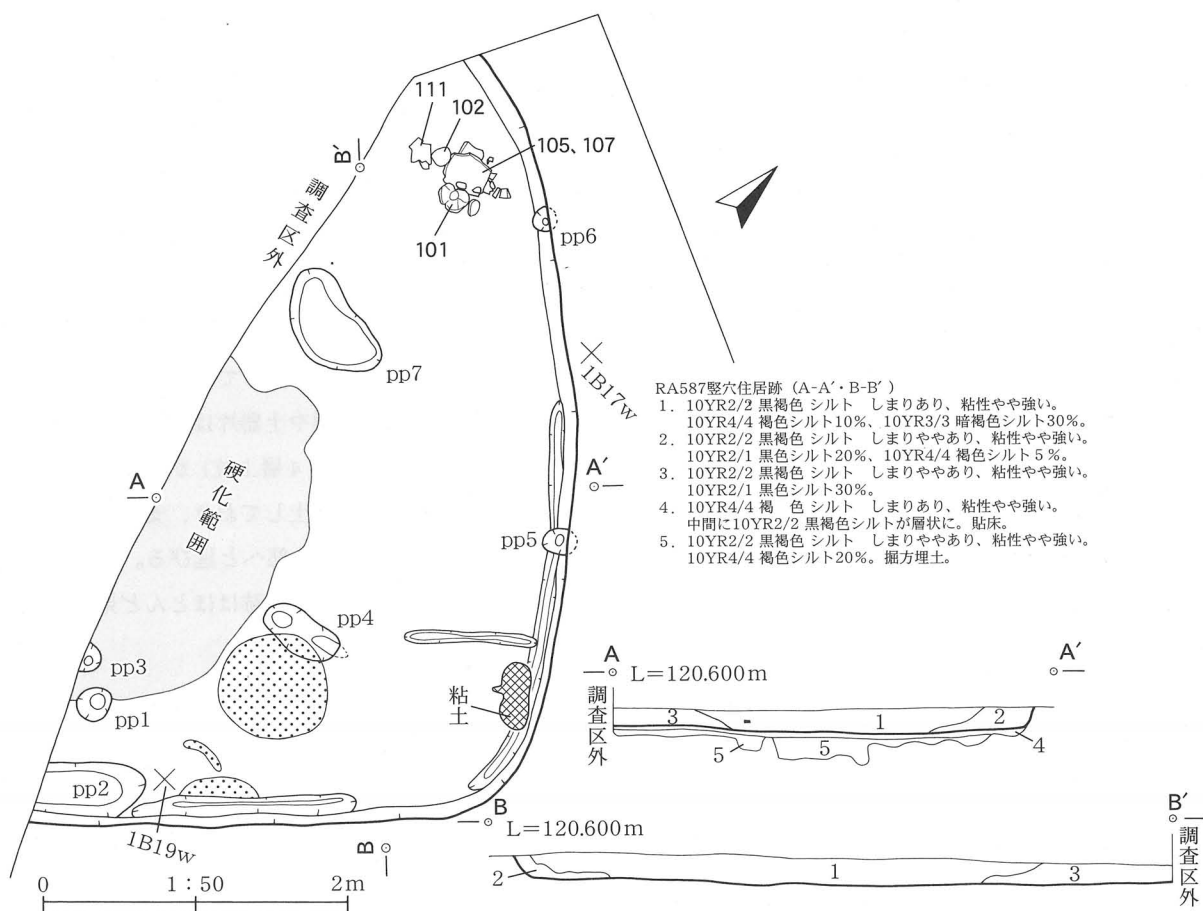
〈床面〉 掘方埋土（5層）上位に貼床（4層）を施し床とする。床面は平坦で、住居中央やや南寄りに非常に固く締まっている部分が広がる。その東側には焼土ブロックが確認された。掘方埋土（5層）は10YR2/2黒褐色シルト、層厚は5～20cm、貼床（4層）は、10YR4/4 褐色シルトに挟まれて黒褐色シルトが1cmほど層状に混入しており、意図的に交互に貼ったものと推測される。層厚は5cm程度である。

〈壁〉 外傾して立ち上がり、15～20cmが残存する。

〈周溝〉 壁際には幅10～15cm、深さ5cm前後の溝が巡る。全周せず、東壁では南側のみに見られる。南壁のものは焼土ブロックの上ののる形で構築されている。

〈土坑・柱穴〉 土坑が2基、小穴が5基検出されている。pp4は開口部で50×25cmを測り、その位置から支柱穴と思われる。2基重複しており、東側は壁の一部がオーバーハングしていることから、斜めに柱を据えた可能性がある。pp5・6は壁際に位置しており、pp4より規模が小さいことから支柱ではなくそれを補う役割の柱を据えたものと考えられる。

〈その他〉 前述のpp4が2基重複していること、南壁の壁溝の下に焼土ブロックがあること、固く締まっている床面を掘り込むpp1・2があることから、本住居跡は一度屋根を架け替えられた可能性がある。



第24図 RA587 竪穴住居跡

〈カマド〉 検出されていない。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 住居北東隅床面に集中する。坏3点、高坏1点、甕類8点を掲載した。101～103が坏ですべて黒色処理される。101は底部からやや内湾して立ち上がり、内外面とも段を持たない。外面は口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、底部ハケメ調整、内面はヘラナデ・ハケメ・ヘラミガキが混在し新旧が明確でない。102は外面体部下半が僅かに窪む。調整は内外面ともヘラミガキである。103は平底で体部はやや内彎して開く。体部下端に沈線が巡る。104は高坏の脚部で外面下端にやはり沈線を有する。105～111は甕である。頸部にははっきりとした段を持つもの(105・110)もあるが、全体的に不明瞭のものが多い。口縁端部も前者は平坦だが、後者は丸みを帯びる。105はさらにもう一つ段を持つ。調整はヘラナデもしくはハケメで、ヘラナデの方が目立つ。112は球胴甕で、頸部と口縁部に段を持ち内外面ともハケメ調整が施される。(第80・81図、写真図版78・79)

〈時期〉 奈良時代

R A 588竪穴住居跡 (第25図、写真図版19)

〈位置・検出状況〉 C区、3C4jグリッドに位置する。IV層上面で検出した。

〈規模・形状〉 南半は用水路により消失する。北壁2.9m、西壁1.5m以上、東壁2.5m以上を測る。平面形は残存部から隅丸方形を呈していたものと推測される。主軸方向はN-30°-Wである。

〈埋土〉 10YR4/4褐色シルトと10YR2/1黒色シルトを微量含む10YR2/2黒褐色シルトの単層である。

〈床面〉 地山土を床とし、掘方・貼床は認められない。床面は平坦である。

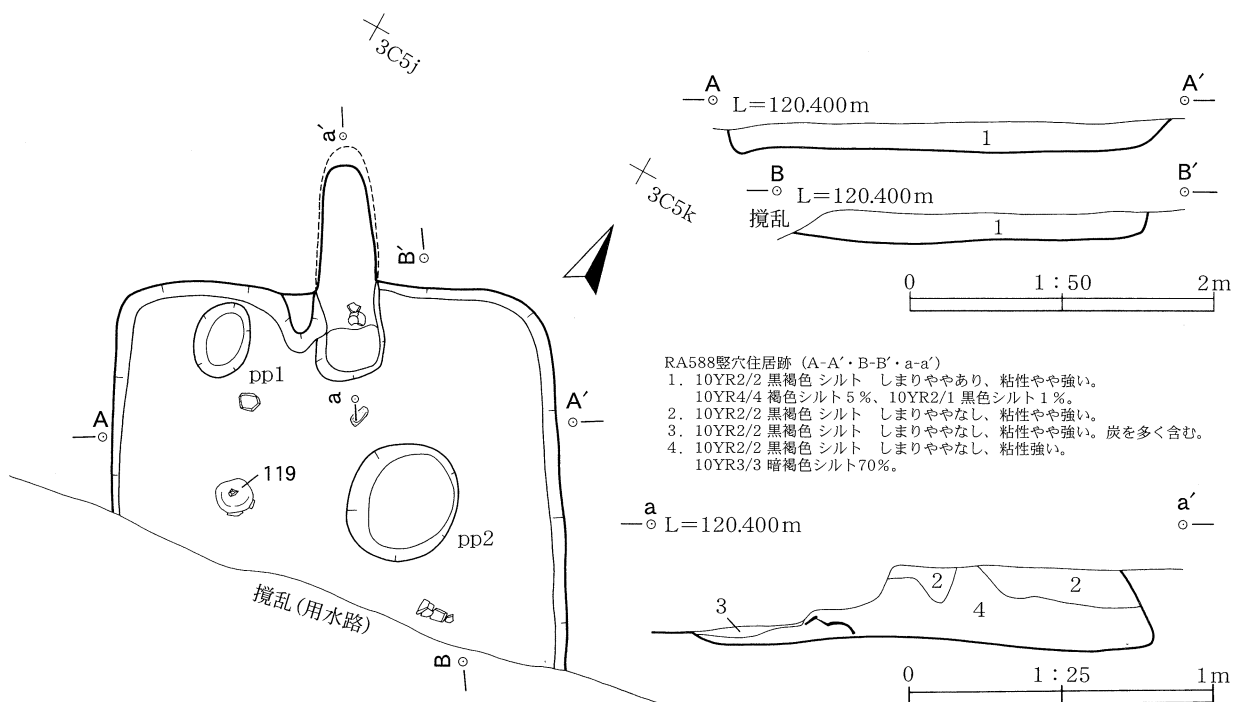
〈壁〉 北壁・西壁は直立するが、東壁は外傾しながら立ち上がる。壁高は20cm残存している。

〈土坑・柱穴〉 土坑が2基検出された。pp1は50×40cm、深さ11cmを測る。カマドの西側という位置からすれば、貯蔵穴の可能性はあるが掘込みは浅い。pp2は直径70cmのほぼ円形を呈し、深さ16cmを測る。床面を若干下げた時点で形状が明確になったことと住居跡のほぼ中央に位置することからすれば、RA022竪穴住居跡に伴うものではない可能性が高く、地山掘込みとも考えられる。

〈カマド〉 北壁のほぼ中央に位置する。煙道方向はN-33°-Wである。左袖はよく残っていたが、右袖を検出することはできなかった。袖は地山土で構築されており、芯材となるような礫や土器片は出土していない。燃烧部は床面よりやや窪むが、焼土や被熱した痕跡は見られなかった。埋土中(4層上位)からは径30cmの範囲で炭化材を含む層(3層)を検出している。この奥(北側)からは土器が出土しており、支脚として使用された可能性がある。煙道は全長100cm、底面は燃烧部とほぼ同じ高さで煙出し部へと延びる。上半を削平されているため構築方法は不明である。煙道部分でも焼土ブロック及び被熱した痕跡はほとんど見られないことから、それほど使用されなかったとも推測される。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 119は倒位でやや傾いた状態で埋土下部より出土した。底部は輪積み面で欠く。甕類のみ7点掲載



第25図 RA588 竪穴住居跡

した。頸部には段を有し、口縁部は外側に開き上半はやや内彎して立ち上がる（113・115・116）。内面底部はやや丸みを帯びるが平底に近い（114・117・118）。器面調整は116が外面にハケメが施されるのを除き内外面ともヘラナデ、外面は摩滅するものも目立つ。113・114は、器形・胎土・色調など非常に類似しており恐らく同一個体と思われる。復元すると器高11cm程度となる。しかし両者とも残存率が低く反転実測を行ったため、径は対応しなかった（特に113が歪む）。116は、口縁から頸部まで計4条の段を持つ。119は球胴甕で、頸部に段を有する。体部下端は輪積みで剝離するが、僅かに立ち上がっており、短く直立する底部を持つ可能性が高い。（第81・82図、写真図版79）

〈時期〉 奈良時代

RA 589 竪穴住居跡（第26図、写真図版20）

〈位置・検出状況〉 C区、2C14cグリッドに位置する。IV層で検出した。

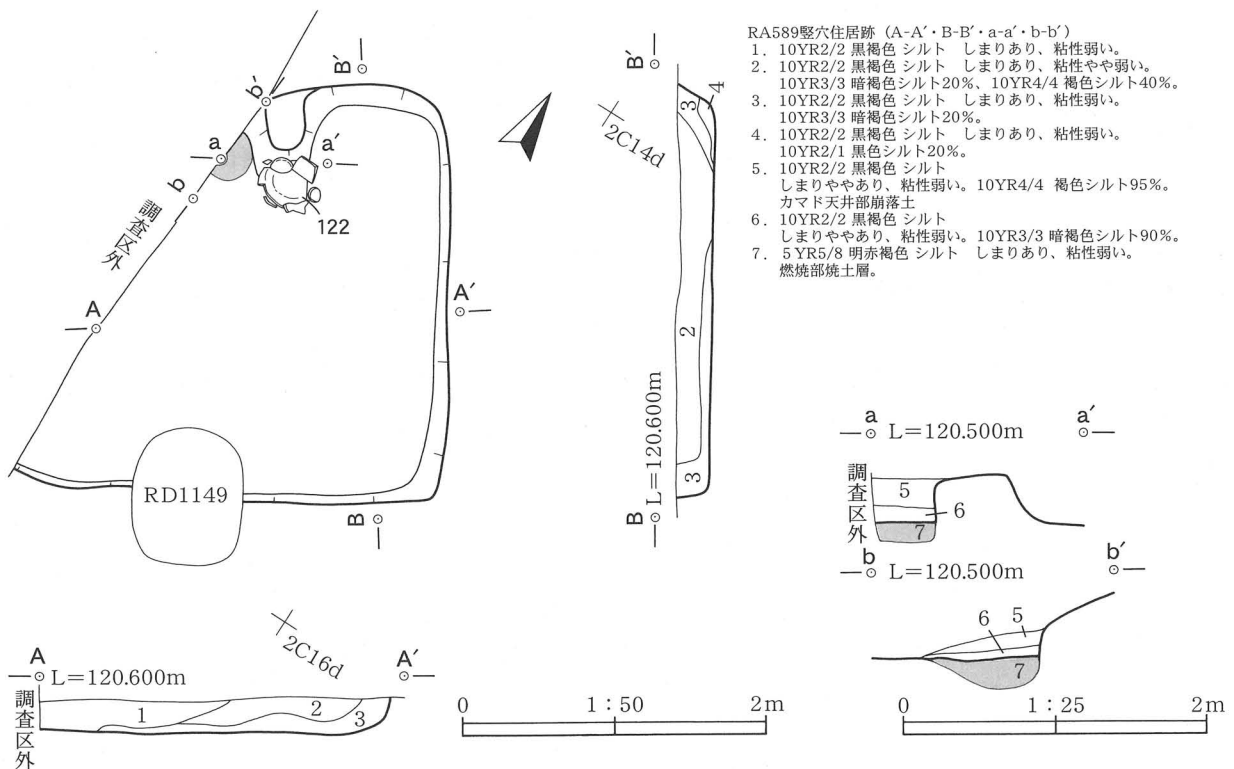
〈規模・形状〉 西側が調査区外へと続いたため全形は不明である。東壁2.7m、北壁1.2m以上、南壁2.9m以上を測り、残存部分から隅丸方形を呈していたものと推測される。主軸方向はN-35°-Wである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として4つの層に分けられる。4層は北壁際でのみ観察される。本次調査に限って言えば、これら4つの層はレンズ状に堆積しており、自然に埋没したものと推測される。

〈床面〉 地山土上面を床とし、掘方・貼床は検出されなかった。床面は平坦である。

〈壁〉 ほぼ直立しており、高さは25cm前後残存している。

〈土坑・柱穴〉 検出されていない。



第26図 RA 589 竪穴住居跡

〈カマド〉北壁で燃焼部東半、右袖を検出した。煙道部は調査区外へと延びる。袖は地山土で構成されており、芯材となるような礫や土器片は出土していない。燃焼部は平坦で焼土（7層）が形成される。被熱の及ぶ深さは最大10cmである。埋土は10YR2/2 黒褐色を主体とし、焼成面の上位層（6層）には10YR3/3暗褐色シルトを、さらにその上には10YR4/4褐色シルトを多く含む層（5層）が堆積している。この5層は袖土と類似しており、天井もしくは袖が崩落したものであろう。煙道は調査区外へ延び、方位や規模、構築方法などは不明である。

〈重複〉RD1149土坑と重複しており、これに切られている。

〈遺物〉すべて床面からの出土である。122はカマド袖の上にあったものがずり落ちたように右袖から床面にかけてひろがる。坏1点、甕類2点を掲載した。120は坏で、平底に体部は直線的に開く器形を持つ。口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリ調整、黒色処理は施されていない。121は甕、内面は平底である。調整は外面ヘラケズリ、内面ハケメ施こされる。また外面底部はクシ状のものでナデられている。122の球胴甕は頸部に段を有し口縁部は外傾、上半はやや内湾する。端部は平坦で沈線がめぐり窪む。胴部中央付近が最大径となり算盤玉のような器形を持つ。胴部下端は短く直立する。調整はハケメで内面は横方向、外面は縦方向に施されるが、最大径付近では、外面が横方向の調整に変わり、内面は無調整部分もみられ輪積み痕が残る。（第82図、写真図版79・80）

〈時期〉奈良時代

R A 590 竪穴住居跡（第27図、写真図版21）

〈位置・検出状況〉C区、2 C10dに位置する。IV層上面で黒褐色の方形の広がりを確認した。

〈規模・形状〉北半は攪乱を受けている。北壁推定3.6m、東壁3.6m、南壁3.7m、西壁推定3.6mを測る。西壁が若干張り出しており最大幅4.0m、平面形は隅丸方形を呈する。主軸方向はN-30°-Wである。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、5つの層に分けられる。このうち5層は南壁際で確認されるのみで、10YR4/4褐色シルトを多量に含むことから壁の崩落土と推測される。上部1・2層はしまりが密で、粘性もあまりない。これ対し、主に中央の掘り込み部分に堆積している下部の3・4層はあまりしまりがながい、粘性は強い。このように、上層と下層とでは埋土の性質が対照的である。

〈床面〉住居跡の中央部分が約15cm低くなっており、掘り炬燵状となっている。方形を呈しており、東西長が2.85mを測る。南北長は北側が攪乱を受け上部を消失するが、3.5m残存している。壁際は棚状を呈しており、西側が20~30cm、南側が30~50cm、東側が55~70cmの幅を有している。上記の埋土堆積状況から同一遺構の床面と思われる。床面は掘り込み部分にはやや凹凸が見られるが、棚状の部分は平坦である。地山土を床面としており、掘方埋土・貼床が施された痕跡は検出されていない。

〈壁〉外傾しながら立ち上がっている。遺構検出面から棚状部分までの深さは20~28cm、掘り込み部までは35cm程度である。

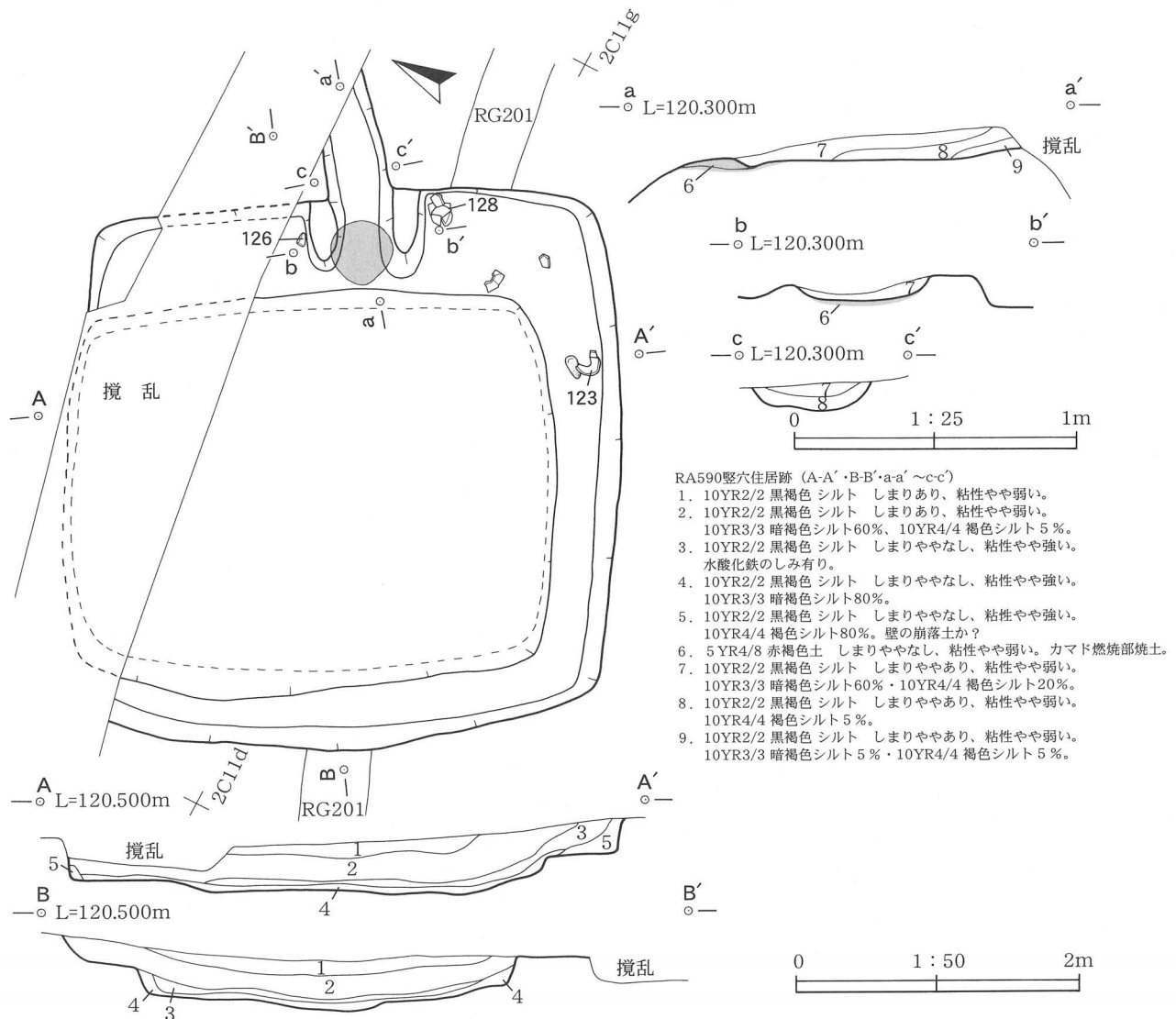
〈土坑・柱穴〉検出されていない。

〈カマド〉東壁の中央、やや南寄りに位置する。煙道方向はN-55°-Eである。袖は左右とも比較的よく残っている。地山土で構築され、芯材となるような礫や土器片は出土していない。燃焼部は掘り込みは持たず、床面と同じ高さとなっている。径45cmの焼土が形成され、被熱が及ぶ深さは約10cmである。煙道は残存長70cm、煙出し部へと緩やかに立ち上がるが先端は攪乱により消失する。煙道の構築方法は上部が削平されているため不明である。埋土は10YR2/2黒褐色シルトを主体として3つの層が確認された（7~9層）。

〈重複〉RG201溝跡と重複している。A-A'に溝跡が確認できなかったことから本遺構の方が新しいと判断されるが、23次調査では近世の遺構と報告されており矛盾する。周辺には攪乱が多く検出時に平面形で重複部分の切り合い関係を把握しておらず、溝跡が住居内で浅くなり部分的に消失した可能性もある。

〈遺物〉棚状部分の床面からの出土が多い。坏2点、高坏1点、甕類3点、紡錘車1点を掲載した。123の坏は外面体部に段を有し内湾して開く。内外面ともミガキ調整、底部にはヘラ記号が確認される。中央が欠損するが、残存部から推定すると「×」の可能性が高い。124は、外面体部に沈線を施しその後ミガかれる。125は高坏で脚部外面に2条の沈線が巡り段を有する。内面の体部との接合部分には指押さえ痕もみられる。126の甕は頸部に段を有し口縁部下半はほぼ直立、上半は内彎しながら開く。端部は平坦で中央に沈線が巡り窪む。127・128は甕の胴下半であるが、内面底部はやや丸みを帯びる。127の体下部は、外反する。126と127は胎土・色調及び胴部の径が類似し同一個体の可能性がある。129は土製紡錘車で、器面の表面が薄く剝離する。稜部には磨痕もみられる。(第83図、写真図版80)

〈時期〉奈良時代



第27図 RA590竪穴住居跡

R A 591 竪穴住居跡 (第28図、写真図版22)

〈位置・検出状況〉 E区、3 F 8 y グリッド付近に位置する。IV層上面で方形のプランを検出しそれとともに北壁際に焼土の広がりが認められた。

〈規模・形状〉 東側の一部は調査区外へと続いている。西壁が2.2mを測り、北壁が1.7m以上、南壁が1.3m以上を測る。全形は不明だが、隅丸方形を呈するものと推測される。主軸方向はN-25°-Wである。

〈埋土〉 10YR3/3暗褐色シルトを主体として6つの層に分けられる。

〈床面〉 地山土をそのまま床面としたようで、掘方埋土、貼床の痕跡は検出されていない。

〈壁〉 ほぼ直立する。10cm残存する。

〈土坑・柱穴〉 検出されていない。

〈カマド〉 前述のように北壁際に焼土が広がっていたことと、そこから北に本遺構のものと同じ埋土の細長いプランが検出されたため、前者をカマド燃焼部、後者を煙道と想定して掘り下げた。その結果、焼土の広がりはブロック状のもので床面まで達しておらず、その下にもカマドが構築された痕跡は認められない。後者の煙道様のプランもシミ状のものではっきりとした掘込みは確認されず、カマドと断定できなかった。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

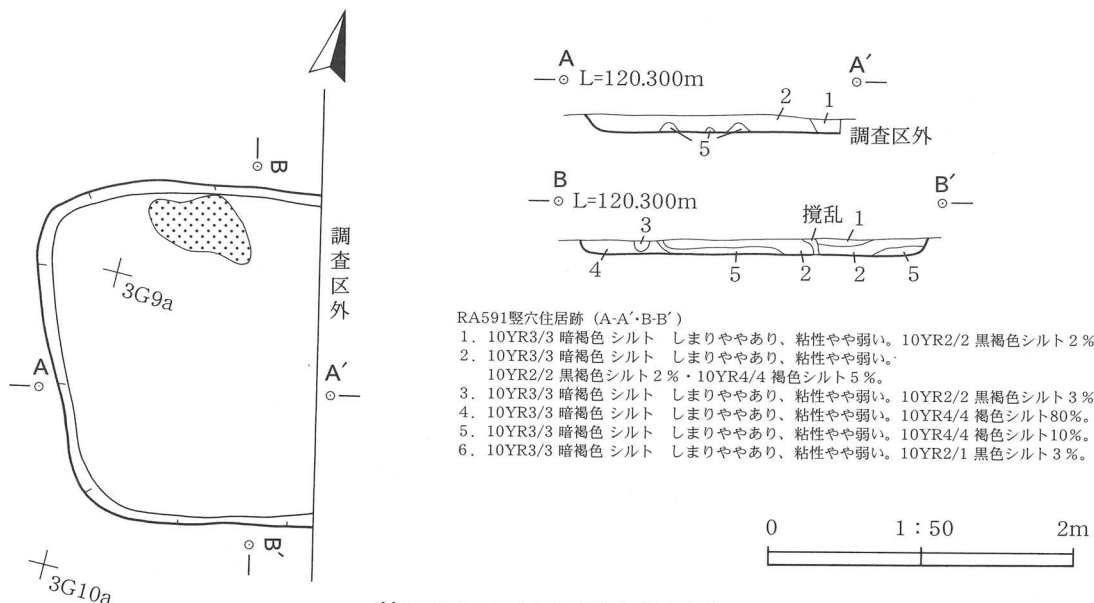
〈時期〉 埋土の様相から奈良時代と推測される。

R A 592 竪穴住居跡 (第29・30図、写真図版23)

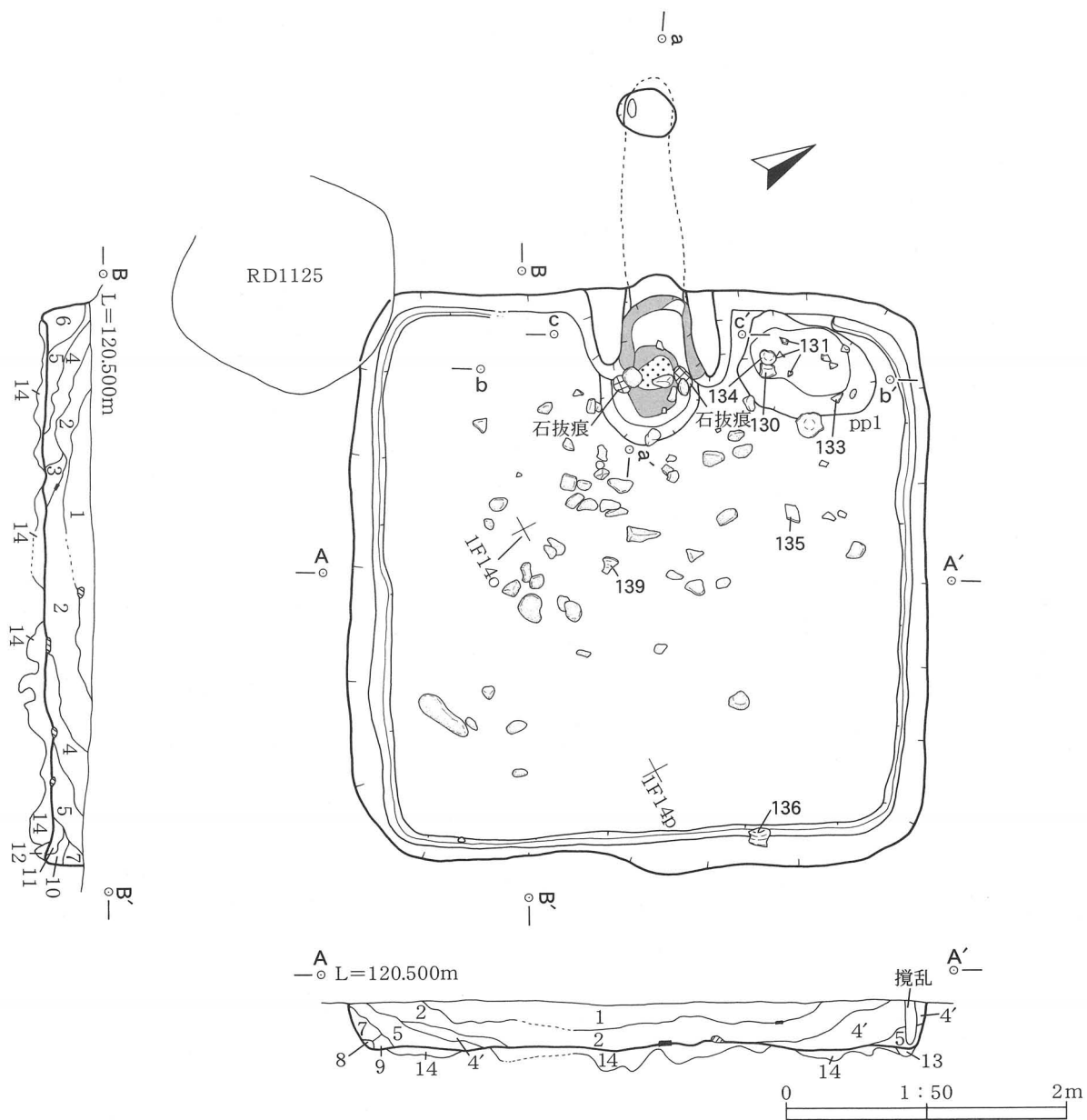
〈位置・検出状況〉 D区、I F 14 o グリッド付近に位置する。IV a層上面で検出した。

〈規模・形状〉 形状は方形を呈しており、規模は北壁3.9m、東壁4.0m、南壁4.1m、西壁3.9m。主軸方位はN-61°-Wである。

〈埋土〉 壁際は10YR2/2黒褐色シルトを主体としており(4~10層)、壁崩落に伴い地山(IV a~c)ブロックを混入する。その上位、遺構全体には10YR3/4暗褐色シルトを主体とする層(1~3層)が稚績する。混入物は少なく、上部へ行くほど粒径が細くなる。4層上面には焼土ブロックの広がりが認められたが、埋土中に炭化物等は含まれていない。



第28図 RA591竪穴住居跡

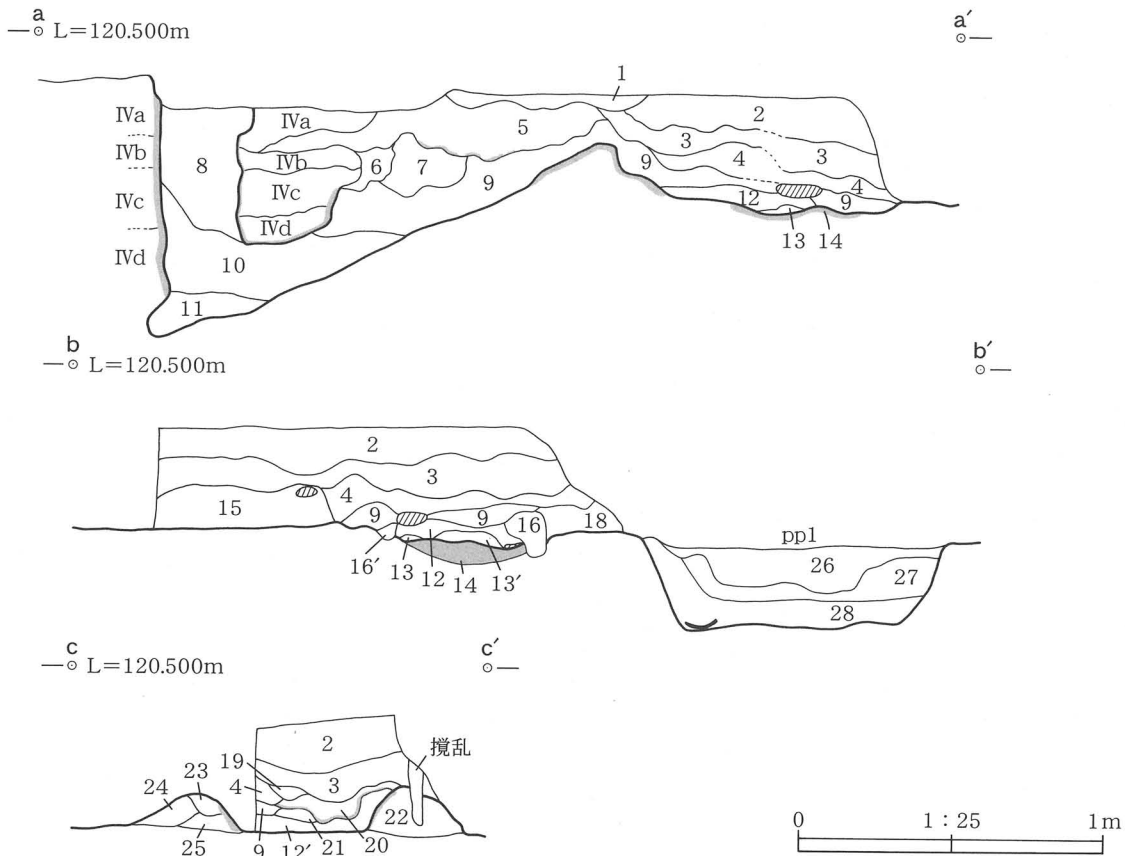


RA592竪穴住居跡 (A-A'・B-B')

全体にしまりややあり粘性やや弱い。

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック微量。細かく入る。
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック極微量。主体土1層と似る。粒径1より大きい。
3. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック極微量。2層より少ない。色も黒く10YR2/2 黒褐色に近い。
4. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック少量。上面に焼土ブロック、被熱がみられる。
- 4'. 4層に似るが主体土やや10YR3/4 暗褐色に近い。
5. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック極微量。
6. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロックやや多量。細かくはいる。
7. 地山ブロック層。
8. 地山 (10YR3/4 暗褐色) 粘土質シルトブロック層。8~10層壁崩落?
9. 10YR2/2 黒褐色シルト 5層に似るがしまり弱く地山ブロック少ない。
10. 10YR2/2 黒褐色シルト 9層に似る。
11. 10YR3/4 暗褐色シルト しまりなし。地山ブロック微量
12. 10YR3/4 暗褐色シルト 13層に似るがしまりない。
13. 10YR3/4 暗褐色シルト 14層より地山ブロック少ない。周溝?
14. 10YR3/4 暗褐色シルト しまりあり。10YR3/4 暗褐色シルトブロック大量、10YR2/2 黒褐色シルトブロック微量、地山ブロック少量の混土層。掘方埋土。

第29図 RA592竪穴住居跡(1)



RD592竪穴住居跡カマド (a-a' ~ c-c')

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック少量。
2. (=B-B' 2層)
3. (=B-B' 4層)
4. 10YR2/2 黒褐色シルト きれいな層。
5. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック多量。
下面に被熱している天井部が部分的に残る。天井崩落？
6. 2.5YR4/4 にぶい赤褐色シルト 焼土ブロック層。被熱した壁が崩落したもの。
7. 10YR3/4 暗褐色シルト 5層と似るが天井崩落した焼土ブロックが斑に混じる。
8. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山ブロック細かく少量。
9. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック微量。10層との境に地山ブロック多くたまる。
焼土ブロック微量、住居側に多い。被熱部分の上面に焼土ブロックたまる。
10. 10YR3/4 暗褐色シルト 9層に似るが焼土ブロック含まない。
11層の境で被熱ブロック (崩落層?) 含む。
11. 10YR3/4 暗褐色シルト 10層に似る。
12. 7.5YR2/2 極暗赤褐色シルト 焼土ブロック大量。16層と似る。
- 12'. 12層より焼土ブロック少ない。
13. 2.5Y7/4 明黄色 粘土質シルト 固くしまった層。天井崩落または灰層。
- 13'. 7.5YR7/8 黄褐色シルト 焼土ブロック層。13層とは全く別層。
14. 2.5YR5/8 明褐色シルト 焼土層。焼成非常によい。
15. (=B-B' 5層)

16. 7.5YR2/2 極暗赤褐色シルト 焼土ブロック大量。石の抜き取り痕？
- 16'. 16層と同様に石の抜き取り痕。底面に13層と同じ粘土貼り付く。
17. 欠番。
18. 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土ブロック極微量。内側被熱。カマド袖。
19. 10YR4/4 褐色シルト 地山ブロック層。天井崩落土。
20. 10YR4/4 褐色シルト 地山ブロック層。天井崩落土。下面被熱。
21. 13層に似る。粘土層。
22. 10YR3/4 暗褐色シルト 地山IVcブロックを袖とする。混ざりものなし。
燃焼部側被熱。
23. 22層と同じ。燃焼部側被熱すると思われるが、断面観察時に掘ってしまった。
24. 10YR2/2 黒褐色シルト IVb・IVdブロック極微量
25. 23層と似て区別つかない。間に24層挟む。
26. カマド(a-a') 2層に似る。
27. 10YR3/4 暗褐色シルト(やや砂質) 地山ブロック少量。
下部にやや炭化物・焼土ブロック多い。
28. 10YR3/4 暗褐色シルト(やや粘質) 地山ブロック少量。
炭化物・焼土ブロック極微量。

- IVa. 10YR4/4 褐色砂質シルト 基本層序IV層
 IVb. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
 IVc. 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト IVd層との漸移層
 IVd. 10YR5/6 黄褐色シルト

第30図 RA 592竪穴住居跡(2)

〈床面〉 掘方埋土 (14層) 上面を床とする。床面は硬化が認められるが、中央部がやや軟らかい。掘方埋土は10YR2/2黒褐色シルト、地山IV a~cの混土となる。

〈壁〉 やや外傾して立ち上がる。IV c層まで掘り込んでおり残存している壁高は35cm程度である。

〈周溝〉 住居壁際を周溝が巡るが、カマド付近では途切れる。カマド北側ではpp1の中央付近で立ち上がり、南側はサブトレンチを入れてしまったため立ち上がりが観察できなかったものの、A-A'の断面では観察できず、これ以北でも検出されなかった。幅は5~13cm、深さは5~10cm程度である。埋土は10YR3/4 暗褐色シルトが堆積し、掘方埋土よりしまりが弱く、地山 (IVa) ブロックの混入量も少ない。

〈土坑・柱穴〉 カマド北側にpp1が検出された。開口部径96×68cmの不整楕円形を呈する。床面からの深さは30cm程度である。底面は南側 (カマド側) が一段低くなっている。埋土は、10YR3/4 暗褐色シルトを

主体とし、炭化物・焼土ブロックの混入量が底面直上には微量の層（28層）、その上に多く含む層（27層）、そして、最上部にはカマド埋土2層に類似した層（26層）が堆積する。遺物は、3層中に多く、壁際から底面中心へ向かって傾いて出土するものが多く、埋土の堆積に伴って流入したような状況が見られる。以上の堆積状況から、本遺構は少なくとも住居廃絶時には開口していたものと考えられ、その位置から貯蔵穴と推定される。

〈カマド〉西壁ほぼ中央に設置される。煙道方向はN-60°-Wである。袖（22～25層）は、IV c層相当の地山ブロックを構築土とし、左側の袖はこの間にIV cブロックを微量含むIV bブロック層を挟む。両袖の内側（燃焼部側）及び奥壁は被熱している。燃焼部天井には、地山（IV a）ブロックを使用しており（19・20層）、やはり下面が被熱する。また、袖の手前側（住居中央側）には小穴がみられる。小穴内（16・16'層）には焼土ブロックが大量に混入し、12層堆積後に本層に埋土が流入している。袖の手前に位置すること、焼成面の範囲がこの小穴の外側に広がらないこと、堆積土に焼土ブロックが混入することなどから、この小穴は袖石の抜き取り痕と判断したい。周囲に礫が散在し、これらが袖石となる可能性が考えられるが、熱を受けた痕跡等を確認できなかった。燃焼部底面は浅皿状に窪み、50×35cmの焼成面が形成される（14層）。焼成は良く被熱の及ぶ深さは最大7cmである。焼成面の上面には固くしまった焼土ブロック層（13'層・平面斜線範囲）が堆積する。煙道部は全長150cm、25°の傾斜をもって開口部径42×35cm、深さ85cmの煙出し部へ削り抜かれる。天井部は、煙出し部を挟んで地山層がほぼ水平に堆積していること、壁も被熱していることから、6層より西側（煙出し側）は本来の形状をとどめている可能性が高い。一方、6層以東（住居側）は地山層に混入物が混じる上に、天井部下面の被熱も断続的なため、崩落しているものと思われる。このため、本来のカマドの断面形状は、住居奥壁に向かって立ち上がり、奥壁から煙出し部へ急激に下り、煙出し部の手前（住居側）でやや幅（高さ）を狭めていたものと思われる。煙出し部は下端が西側へ張り出しており、壁が被熱していないため、崩落により形成された可能性があるが、埋土中には焼土ブロックを含んでいない。埋土は、煙道部側から10YR3/4暗褐色シルト層（8・10・11層）、住居側から10YR2/2 黒褐色シルト層（4・9層）が流入、天井崩落後10YR3/4暗褐色シルト層（2・3層）が堆積する。

〈重複〉D区RD1124土坑と重複しこれに切られる。

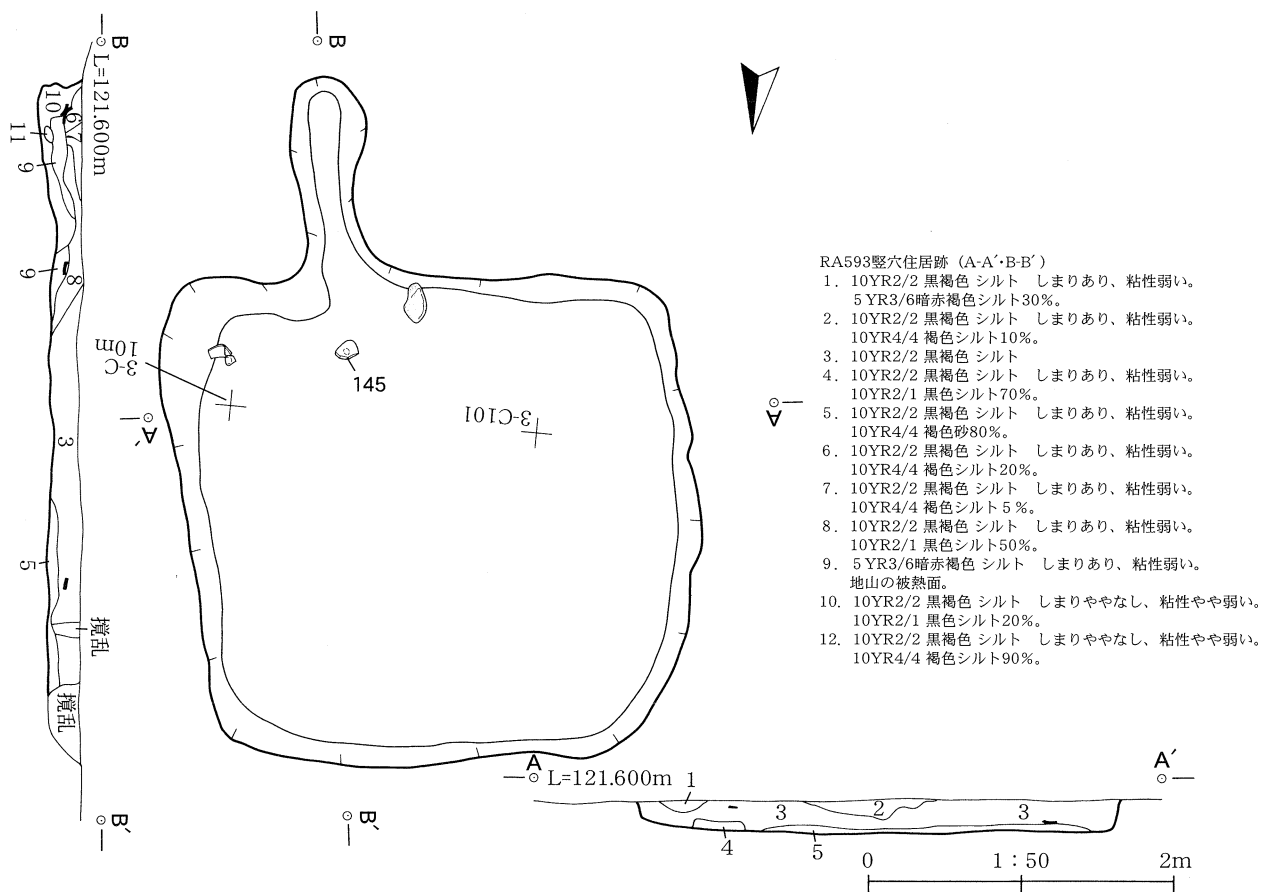
〈遺物〉底面及び1層下面に礫が散在する。遺物は、床面からの出土が多く、坏類はpp1内に集中する（130～132・134）。土師器坏4点、須恵器坏3点、甕類2点、須恵器長頸瓶1点を掲載した。土師器坏（130～133）は、体部から口縁部へ内湾して立ち上がり、須恵器坏（134～136）は内湾して端部が外傾、もしくは直線的に開く器形を持つ。130は内面ヘラミガキ後黒色処理が施される。底部はヘラケズリ、ヘラナデの再調整が行われている。132も摩滅してはっきりしないが再調整されている可能性がある。137の土師器甕は非ロクロ調整で頸部に段を持つ。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整される。138はロクロ調整土師器甕で、口唇部が短く立ち上がる。139は須恵器長頸瓶の口縁部から頸部である。頸部には環状突帯が巡る。（第84図、写真図版81）

〈時期〉平安時代

R A 593 竪穴住居跡（第31図、写真図版24）

〈位置・検出状況〉B区、3-C 9 k グリッド付近に位置する。IV層上面で検出した。

〈規模・形状〉北壁2.7m、東壁3.1m、南壁3.3m、西壁3.0m、平面形は3.2×3.3mの隅丸方形を呈する。カマドがある南側の東壁が若干開いており、やや歪んでいる。主軸方向は、N-15°-Wである。



第31図 RA593竪穴住居跡

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とする堆積土で、5つの層に分けられる。床面直上に地山相当の褐色砂が80%混入する5層が薄く堆積しているが、その上位は主体土である10YR2/2黒褐色シルトが大半を占める3層が覆う。1層は暗赤褐色土が30%混入しており、焼土ブロックと考えられる。

〈床面〉 地山土を床とし、堀方埋土、貼床が施された痕跡は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。

〈壁〉 東壁が直立している以外、外傾して立ち上がっている。壁高は30cm残存している。

〈土坑・柱穴〉 検出されていない。

〈カマド〉 南壁の中央よりやや東に位置する。煙道方向はN-165°-Eである。左右の袖は残存しておらず、床面よりやや窪んでいる部分が燃烧部と思われるが焼土は確認されていない。煙道は、全長1.5m、僅かに下り煙出し部へと続く。煙道の構築方法は、被熱した地山ブロック層（9層）が崩落していることから刳貫式と思われる。燃烧部から煙道部に向かってやや奥に被熱した地山が床面と同レベルで確認されている（8層）ことと、他にカマドが構築された痕跡がないことから、カマドは住居廃絶時に人為的に破壊されたものと推測される。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 カマドの燃烧部およびカマドが構築されている南東隅に床面に集中する。埋土上部からはほとんど出土していない。土師器坏9点（140～148）、土師器甕類4点（149～152）を掲載した。140から144は内面に黒色処理されており、内湾して立ち上がり端部が短く外反する。内面はヘラミガキ調整されるが、調整方向は底部から体部下半が縦方向、上半が横方向となる。140は体部に正位で「十万」とヘラ書きされる。144は体部下端に再調整としてヘラケズリが施される。145～148は内面調整のみられない坏で、底部が僅かに突

出し内湾して立ち上がるもの(145~147)と、端部が短く外反するもの(148)とがある。145は器高3.3~4.5cmと体部の傾きが一定せず口縁部の歪みが大きい。また器壁も他のものに比べ厚い。149は非ロクロ土師器甕で、口縁部が短く外反する。150~152はロクロ土師器甕でいずれも頸部から外反し端部が短くつまみあげられる。150は外面胴部ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整、151は外面胴下半にヘラケズリ調整される。(第84・85図、写真図版81・82)

〈時期〉 平安時代

R A 594 a 竪穴住居跡 (第32図、写真図版25)

〈位置・検出状況〉 B区、3-C12 i グリッド付近に位置する。IV層で検出したが、南側の大半が攪乱を受けており検出時点でプランをはっきりと確認できず掘り下げた。調査の過程で、平面形状、埋土の堆積状況、カマドが2基構築されていることから、2棟が重複する可能性が高いと判断した。しかし、両遺構とも全形が不明な上に切り合いを確認できる箇所も少なく、確実に重複しているとも認定できず新しい方をR A 594 a、古い方をR A 594 bとした。

〈規模・形状〉 東壁の中央部分が脹らみ、北壁もくの字状を呈し、しかも張り出し部分を有するなど、平面形はかなり歪んでいる。東-西の最大幅は5.4m、南-北は推定4.4mとなる。主軸方向はN-17°-Wである。北壁の張出部は1.6×0.7m、その内部には内側に向かって突出している部分がある。

〈埋土〉 前述のように攪乱が著しく、埋土はほとんど削平されており、全体の堆積状況は確認できなかった。残された埋土は、10YR2/2黒褐色シルトを主体として2つの層に分けられる(1・2層)。両層の違いは埋土中に炭化材が含まれるか否かで、2層はカマドに近い炭化物が混入したもので、本来同じ堆積土だったと推測される。

〈床面〉 地山土を床とし、掘方埋土、貼床が施された痕跡は確認されなかった。床面はR A 594 bとほぼ同じ高さまで掘り込んでおり、ほぼ平坦である。

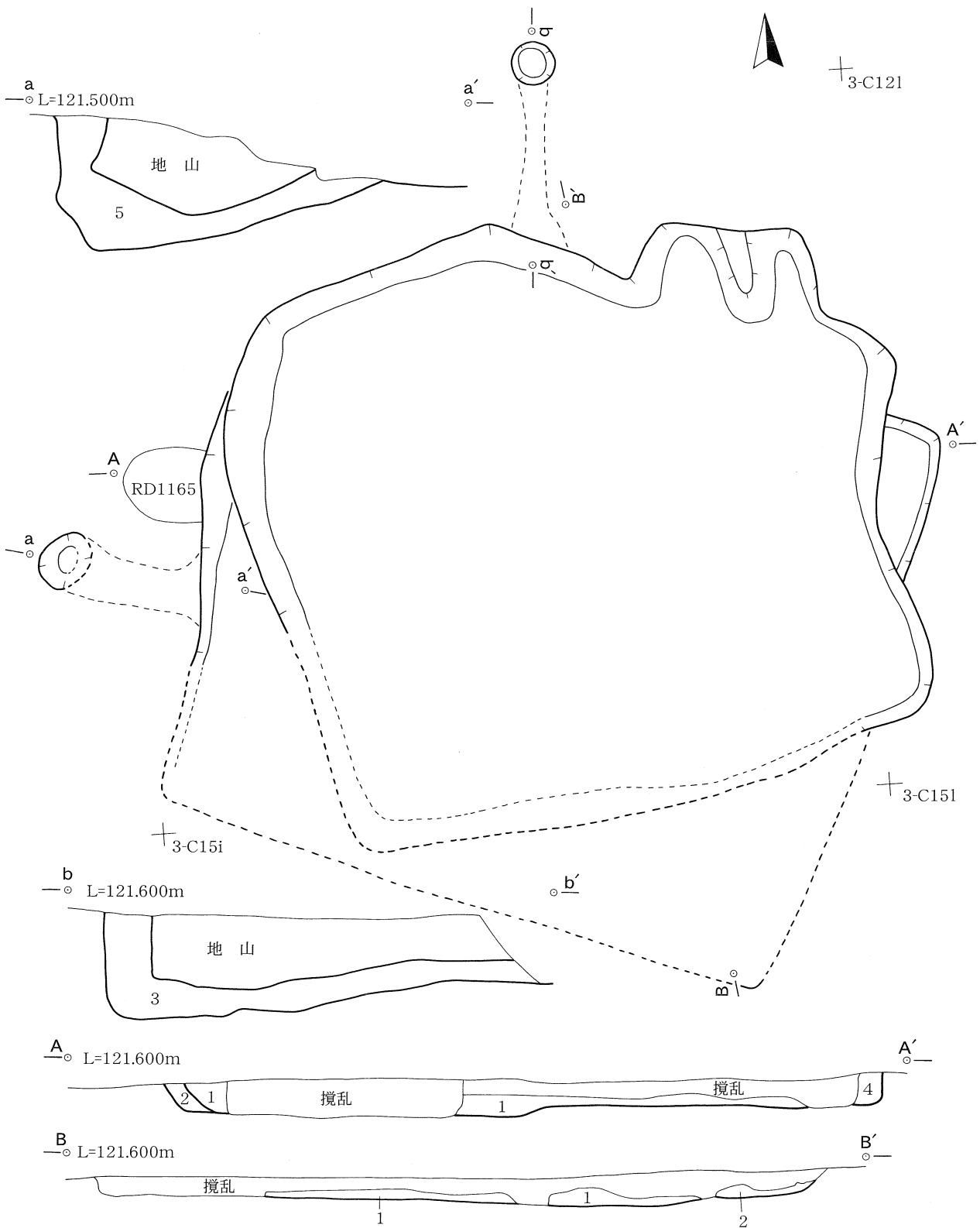
〈壁〉 ゆるやかに外傾しながら立ち上がり、高さは35cm残存している。

〈土坑・柱穴〉 検出されていない。

〈カマド〉 北壁の中央、くの字状の屈曲部分に位置する。煙道方向はN-3°-Eである。袖は残存せず、燃焼部と推定される部分は窪んではいるものの焼土は見られない。煙道は全長1.6m、徐々に下がりながら煙出し部へと削り抜かれる。煙道の埋土は10YR2/2黒褐色シルトの単層で、底面は被熱のため赤褐色を呈している。

〈重複〉 R A 594 b 竪穴住居跡と重複し本遺構の方が新しい。また柱穴状土坑3基に切られる。

〈遺物〉 出土位置を把握できたものがなく、本遺構もしくはRA594 b、及び攪乱に伴うと判断される。土師器坏14点、土師器高台坏2点、土師器甕類5点、須恵器瓶類6点、鉄製品1点を掲載した。153~157は内面ヘラミガキ後黒色処理される(154・155は内面も)土師器坏で、内湾して立ち上がる器形をもつ。153は「木」と墨書、154は「七」、155は「キ」と刻書される。155は底部、157は底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ再調整する。158~166はロクロ調整のみの土師器坏である。器形は、体部が内湾して端部が短く外反するものが多く、そのまま立ち上がるものも若干みられる。158は体部から体部下端にかけてヘラケズリ再調整される。167の高台坏は内外面とも黒色処理されるが、ヘラミガキ痕は確認できなかった。はっきりしないが外面体下半はヘラケズリ再調整の可能性がある。169~171は非ロクロ土師器甕で、169は頸部から口縁部にかけてくの字状に短く外反する。172・173のロクロ土師器甕は、両者とも口縁端部がつまみあげられる

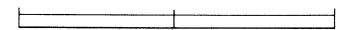


RA594竪穴住居跡 (A-A'・B-B'・a-a'・b-b')

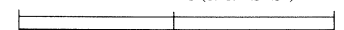
1～3層 RA594a竪穴住居跡、4・5層 RA594b竪穴住居跡

1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。10YR3/3 暗褐色シルト40%、10YR4/4 褐色砂20%。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性やや強い。10YR2/1 黒色シルト40%、炭化物含む。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。10YR3/3 暗褐色シルト90%。底面は赤褐色に被熱している。
4. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。10YR4/4 褐色シルト80%。
5. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりなし、粘性弱い。

0 1 : 50 2m



0 1 : 25(a-a'・b-b') 1m



第32図 RA594竪穴住居跡

が、172は真っ直ぐ、173内側に傾く。174～177は須恵器瓶類である。175～177にはタタキ目整形痕が確認でき、その後口縁付近はロクロ調整、胴部はヘラケズリ調整される。179は底部切り離しに糸切りが用いられている。180は釘である。(第85～87図、写真図版82・83)

〈時期〉 平安時代

R A 594 b 竪穴住居跡 (第32図、写真図版25)

〈位置・検出状況〉 B区、3-C12 i グリッド付近に位置する。IV層上面で検出した。前述の通り、新しい方をR A 594 a、古い方をR A 594 bとした。

〈規模・形状〉 攪乱を受けていることと、R A 594 a に切られていることから、東壁と西壁の一部がわずかに残存しているだけである。そのため全形は不明であるが、北東角は比較的良好に残存しており、そこから推測すれば方形となるようである。東西幅は5.5mを測る。

〈埋土〉 埋土の大半は攪乱及び新期遺構 (R A 594 a 竪穴住居跡) によって消失し1つの層を確認したにとどまる。10YR2/2黒褐色シルトを主体としたものだが、地山起源と推測される褐色シルトを多量に含んでおり、壁が崩落したものと推測される。

〈床面〉 床面の大半を上記の理由で消失する。残存している部分はほぼ平坦で、確認できた範囲では貼床・掘方埋土の痕跡は見いだせなかった。

〈壁〉 直立しており、高さは35cm残存する。壁際には壁溝となるような溝は確認できなかった。

〈土坑・柱穴〉 検出されていない。

〈カマド〉 西壁、やや南寄りに位置する。煙道方向はN-75°-Wである。袖は残存しておらず、燃焼部と想定される位置に焼土も検出されていない。煙道は全長135cm、煙道部ほぼ中央まで約25°とややきつい角度で傾斜し、その後ゆるやかに下り煙出し部へと続く。煙道の構築方法は刳抜式である。埋土は10YR2/2 黒褐色シルトを主体とした単層である。

〈重複〉 R A 594 a 竪穴住居跡、柱穴状土坑と重複し、両者にきられる。

〈遺物〉 上記のとおり確実に本遺構に伴うと判断できるものはないが、「観察表に南西部一括」とされているものは、本遺構埋土中からの出土の可能性が高い。

〈時期〉 平安時代

R A 595 竪穴住居跡 (第33図、写真図版26・27)

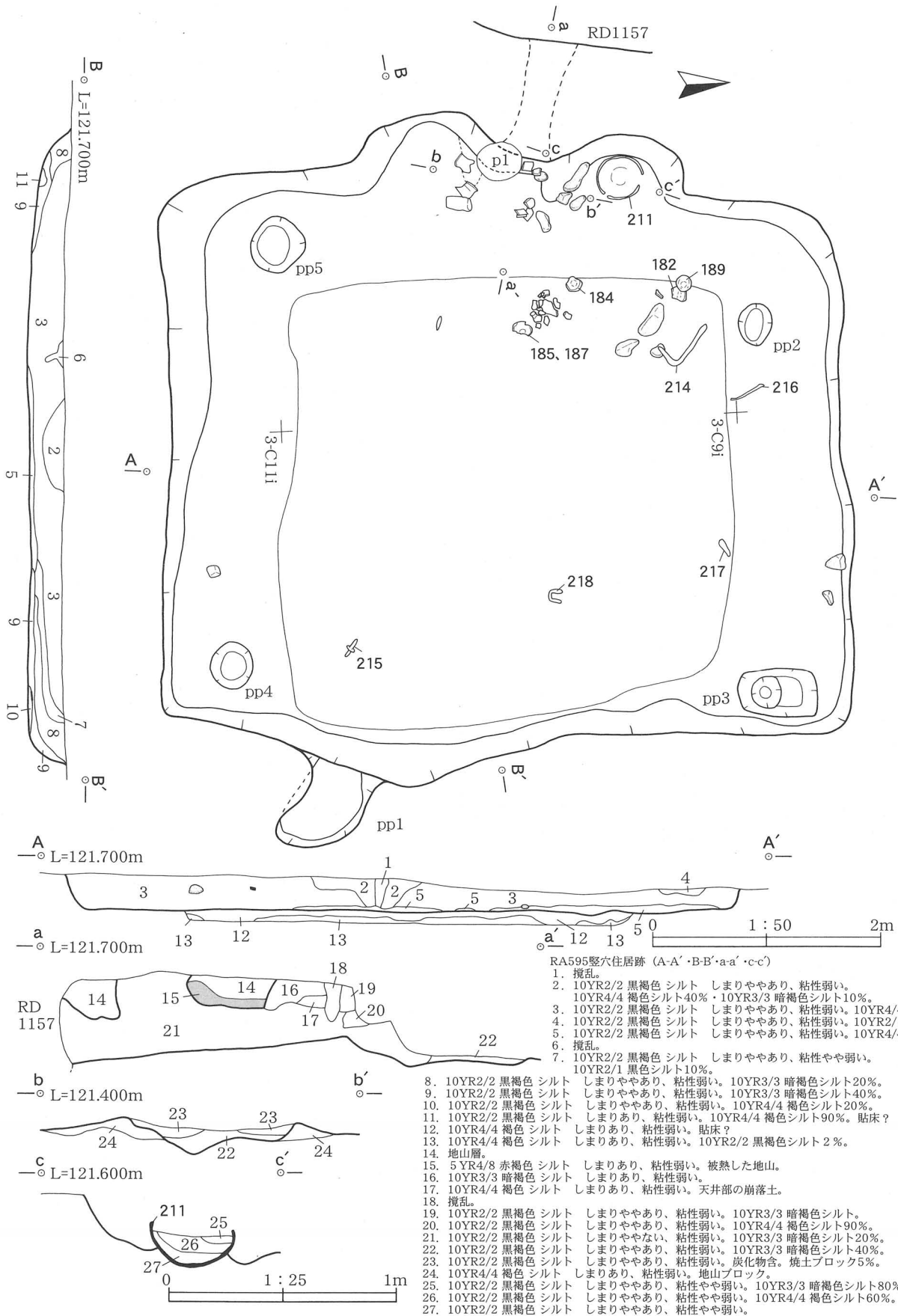
〈位置・検出状況〉 B区、3-C10 g グリッド付近に位置する。IV層上面で検出した。

〈規模・形状〉 規模は北壁4.7m、東壁6.1m、南壁4.8m、西壁5.9mを測る。平面形は隅丸方形を基調とするが、東壁南側が若干張り出し、西壁がカマドの左右で60cmほど張り出しており、不整形な部分も見られる。主軸方向はN-4°-Eである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とする。B-B'断面では壁際に10YR3/3暗褐色シルトを含む層 (8層・9層) と10YR4/4褐色シルトを含む層 (10層) がレンズ状に堆積している。この上に10YR4/4褐色シルトを少量含む10YR2/2黒褐色シルトが覆う。堆積状況から自然に埋没したものと思われる。

〈床面〉 R A 596 竪穴住居跡を10cmほど埋め戻し、さらにこれを拡張して構築される。床面は平坦である。貼床は10YR4/4褐色シルトによって構築され、R A 596 竪穴住居跡と重複部以外では地山土上面を床とする。

〈壁〉 直立気味に外傾しながら立ち上がっており、壁の高さは約30cm残存する。カマドの左右の壁が60cm程



第33図 RA595竪穴住居跡

張り出しており、右側の張り出し部分には須恵器甕が正立状態で出土した。須恵器甕はちょうど張り出し部分にはまっていることから、これらの張り出し部分は甕などの貯蔵具を据えるために作られたものだと判断できる。

〈土坑・柱穴〉土坑が1基(pp1)、小穴が4基検出された(pp2～5)。pp1は東壁の南側に位置している。0.8×0.5mの楕円形を呈しており、深さは46cmを測る。本遺構ないしはRA596竪穴住居跡にともなうカマドの煙道の可能性もあるが、袖、燃焼部、焼土等カマドと判断される痕跡は認められなかった。pp2～5は、その配置から支柱穴と考えられる。平面形は、円形・楕円形・方形と様々だが、床面からの深さは10cm前後と揃っている。埋土は、10YR3/3暗褐色シルトを含む10YR2/2黒褐色シルトである。

〈カマド〉西壁のほぼ中央に位置する。煙道方向は、N-77°-Wである。袖は、右袖が若干残っているが、左袖は重複するP1によって破壊されており、ほとんど検出できなかった。焼土は確認されなかったが、床面より窪んでいる箇所があり、そこが燃焼部と考えられる。燃焼部から住居奥壁に向かって立ち上がり煙出し部は緩やかに下る。煙道は煙出し部が土坑によって消失し、残存長1.0mである。煙道天井の構築方法は剝拔式で、一部崩落せず残存する。

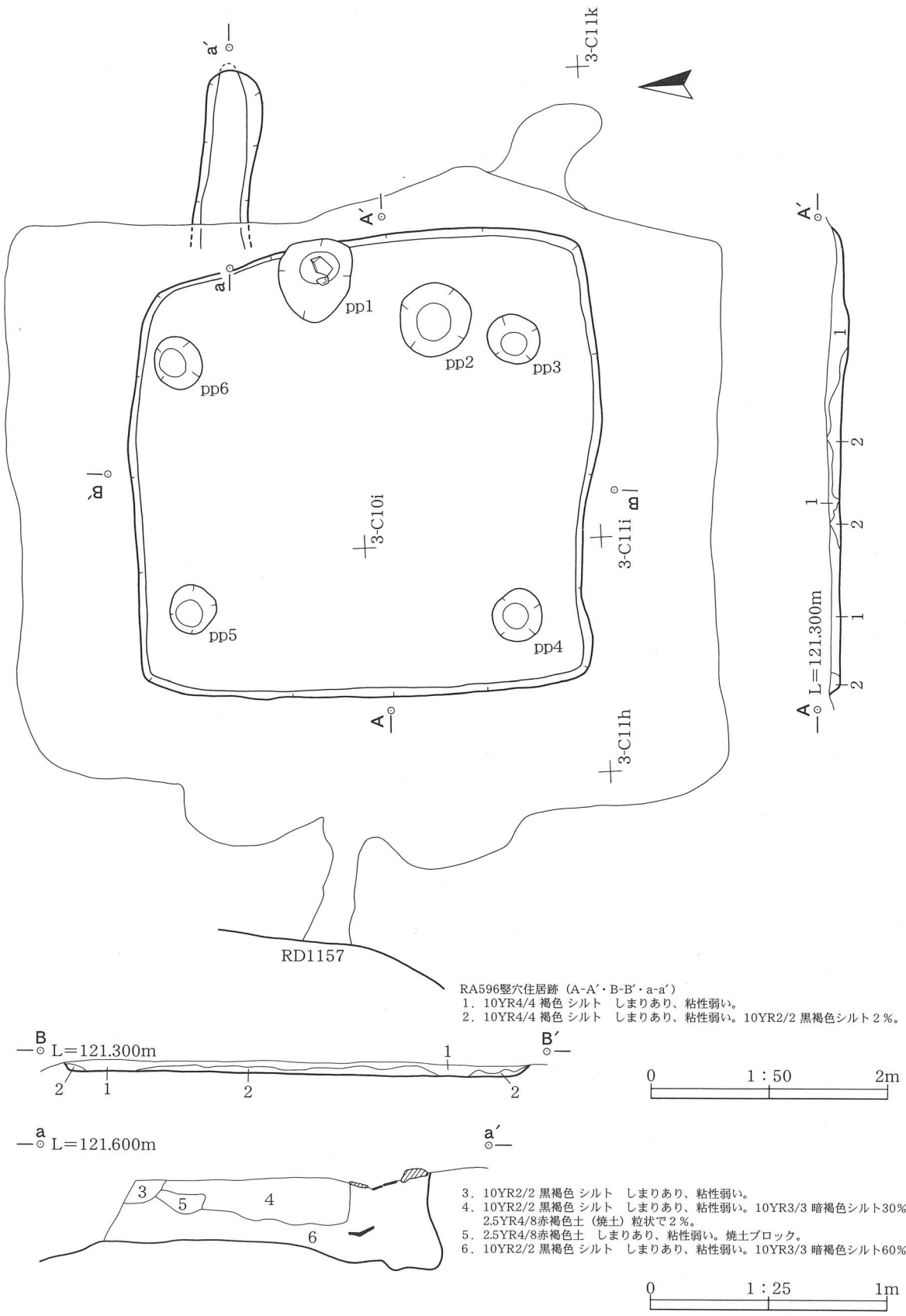
〈重複〉RD1157土坑・P1と重複し、これらに切られている。またRA596住居跡より新しい。

〈遺物〉埋土および床面から出土しており、床面からのものは本遺構北西部分に集中する。須恵器大甕(211)はカマド右側の張出部に据えられていたが、口縁部から体部上半を消失する。後世の削平により失われたか、もともと何かの事情で壊れて体部上半から上がなくなったものを選択して据えたかの二通り考えられる。いずれかを判断する材料には欠けるが、須恵器甕が比較的貴重なものであったことからすれば、後者の蓋然性が高いといえよう。鉄製品は、215が埋土中部から出土しているほかは床面からの出土である(212～214・216～218)。土師器坏16点、須恵器坏2点、土師器高台坏2点、土師器甕類8点、須恵器瓶類3点、大甕1点、鉄製品7点を掲載した。181・182は内面、183は内外面にヘラミガキ後黒色処理される土師器坏である。183は内湾してそのまま立ち上がるが、これ以外は端部が短く外反する。184～195はロクロ調整のみの土師器坏である。器形は内湾して開き端部が短く外反する例が大半を占め、一部そのまま立ち上がるものも見受けられる。底部が僅かに突出しているものもある。196・197は須恵器坏で、内湾して立ち上がると思われるが、両者とも上半が欠損するため詳細は不明である。197の底部は再調整された可能性があるが、摩滅のためはつきりしない。198・199は高台坏で、199は台部が貼付け部分で欠損するが、指で押さえて底部と接合していたようである。200～204は非ロクロ土師器甕で、頸部から短く外反する。外面はヘラケズリまたはヘラナデ、内面はヘラナデ調整である。205～207はロクロ土師器甕で、頸部からくの字状に外反して205・206は短くつまみあげられている。208・209は口径が割り出せないが、器形から瓶類もしくは大甕の口縁部と思われる。209は器壁を厚くするために粘土付け足し痕が観察できる。210は瓶類の底部で、タタキ後外面ヘラケズリ、内面はヘラナデされる。211は大甕の胴部で肩より上は欠損する。内外面とも平行タタキにより整形されている。212～213は鉄製品である。212～214。215は紡錘車の車輪と軸で軸の上下は欠損する。216もその形状から紡錘車軸と考えられる。217は鉄鎌、218は鏝である。(第87～90図、写真図版83～85)

〈時期〉平安時代

R A 596竪穴住居跡 (第34図、写真図版28)

〈位置・検出状況〉B区、3-C9hグリッド付近に位置する。RA595竪穴住居跡の床面に方形のプランが確認され、入れ子状に竪穴住居跡が重複していると判断し調査を開始した。



第34図 RA596竪穴住居跡

〈規模・形状〉北壁3.4m、東壁3.7m、南壁3.7m、西壁3.8mを測る。南壁の西側と東壁の北側がそれぞれ若干内側に入っていることを除けば、平面形はほぼ正方形を呈している。主軸方向はN-0°-Eである。

〈埋土〉10YR4/4褐色シルトを主体とし2層に分けられる。両層とも人為的に埋め戻したもので、R A 595 竪穴住居跡を構築する際の貼床となる。

〈床面〉地山土上面を床とし、掘方埋土、貼床が施された痕跡は検出されなかった。床面は、東壁際のpp 1・pp 2の周辺がやや窪んでいる以外は平坦である。

〈壁〉西壁がやや直立気味なのを除いて、外傾して立ち上がっており、壁高は10cm前後残存するのみである。

〈土坑・柱穴〉土坑が2基(pp 1・pp 2)、小穴が4基(pp 3～pp 6)検出された。いずれもR A 595 竪穴住居跡の貼床を除去した段階(本遺構床面)で検出したものである。pp 1は東壁の北側に位置し、径70×60cmの楕円形を呈し、深さは22cmである。底面からは土器片および拳大の礫が出土している。カマドの右側という位置から、貯蔵穴だった可能性が高い。pp 2はpp 1とpp 3の間にある。径60cmの円形で、深さは23cmを測る。規模形状ともpp 1とほぼ同じであるが、pp 2から遺物は出土しておらず性格は不明である。pp 3～pp 6は、いずれも直径40cm前後の円形を呈するもので、住居の対角線上に位置している。深さは、pp 3が29cm、pp 4が36cm、pp 5が60cm、pp 6が29cmとばらつきがあるが、その位置から主柱穴と考えられる。柱間は南北約3.0m、東西約2.3mである。

〈カマド〉北東角に位置する。煙道方向はN-95°-Eである。住居の拡張にともなって破壊されたのであろう、重複部分では天井部はもちろん左右の袖も完全に消失する。燃焼部に焼土の広がりも確認されなかった。したがって、煙道もR A 595 竪穴住居跡の壁外の部分のみが残存するだけで、全長は推定1.7m(残存部は1.3m)、壁から1.5mまではほぼ平坦で、そこより煙出し部まで徐々に下がる。煙道部の埋土は下部から煙道にかけて単一層で埋まっており、拡張の際に埋め戻されたものと考えられる。上部の4層は埋土もしくは天井崩落土の可能性が考えられ、後者であれば掘り込み式と推定される。またⅢ層を天井部とした刳り貫式の可能性も否定できないが、類例を確認できていない。

〈重複〉R A 595 竪穴住居跡と重複し、これに切られる。

〈遺物〉カマド煙道から出土している。土師器坏1点、土師器高台坏1点、甕類4点を掲載した。坏類は、内彎して立ち上がり端部が短く外反する。221・222は非ロクロ土師器甕で、頸部から口縁部にかけて短く外反する。221は屈曲が強く、くの字状を呈するが222は緩やかに立ち上がる。223はロクロ土師器甕で口縁端部はつまみあげられており稜がきつい。224は瓶類の胴下端で平行タタキ整形後外面ヘラケズリ、内面ハケメによって調整されている。(第91図、写真図版85)

〈時期〉平安時代

R A 597 竪穴住居跡 (第35図、写真図版29)

〈位置・検出状況〉B区、3-C 5 f グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。

〈規模・形状〉北東部分は建物の基礎が据えられ消失する。規模は北壁4.5m、東壁5.0m、南壁4.5m、西壁4.9mを測る。西壁の南側、壁際に土坑が掘り込まれている部分と、南壁の中央より東側が若干張り出しているものの、平面形はほぼ隅丸方形を呈している。主軸方向はN-4°-Eである。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトを主体として6つの層に分けられる。4・5層は北壁際で確認されるのみで2・3層が住居全体を覆う。これらの層はレンズ状に堆積しており、自然に埋没したものと考えられる。

〈床面〉地山土上面を床とし、掘方埋土、貼床が施された痕跡は検出できなかった。床面はほぼ平坦である。

〈壁〉 直立しており、壁高は35cm前後残存している。

〈周溝〉 壁際には幅10～20cm、深さ6～13cmの溝が巡っている。壁際をほぼ全周しているが、ひと続きになっているわけではなく、所々切れている箇所が見られる。西壁のカマドの左側には壁溝が確認されなかった（カマドの右側は袖際まで掘り込まれている）。この部分はちょうどpp1が位置する部分で、これに切られている可能性もあるが、一部南壁からの続きが確認でき、これとpp1の立ち上がりは明確で、両者は重複していない。したがって、カマドの左側のpp1が構築された箇所には最初から壁溝は掘り込まれなかったようである。

〈土坑・柱穴〉 土坑が1基（pp1）、小穴が2基（pp2・3）検出された。pp1は100×50cmの楕円形で、深さは5cmである。5cmと浅いことから断定できないものの、カマドの近くに構築されており、その位置から貯蔵穴と考えられる。pp2とpp3の規模は、それぞれ径30cm・深さ18cm、40×50cm、深さ12cmである。pp3は南西角と北東角を結ぶ線上にのっており、支柱穴の可能性はある（ただし、この位置に柱が据えられたとするとpp1が機能しなくなってしまう、両者は同時に機能していなかったものと推測される）。

〈カマド〉 西壁のほぼ中央に位置する。煙道方向はN-90°-Wである。袖は比較的良好に残存しており地山土で構築される。右袖の上には礫が置かれており、芯材に使用された可能性がある。燃烧部は浅皿状に窪み70×60cmの焼土が形成される（10層）。焼成は良く、被熱の及ぶ深さは最大20cmである。煙道は全長1.6m、奥壁付近では平坦で、その後きつく下がり煙出し部付近で再び平坦となる。煙道の構築方補は削り貫き式である。煙道部の埋土は10YR2/2黒褐色を主体とし2つの層に分けられる。下部（8層）は微量の暗赤褐色土（焼土ブロック？）が混入するが、上部は住居跡内の埋土と同様に微量の褐色シルトを含む層（3層）が堆積する。上部層の特に煙出し部分には直径20cmの球形の礫と、長さ30cm・幅10cmほどの扁平している礫が多く混入している。これらの礫には被熱の痕跡は見られない。

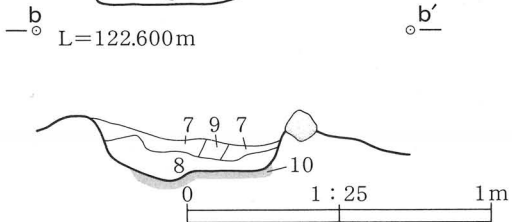
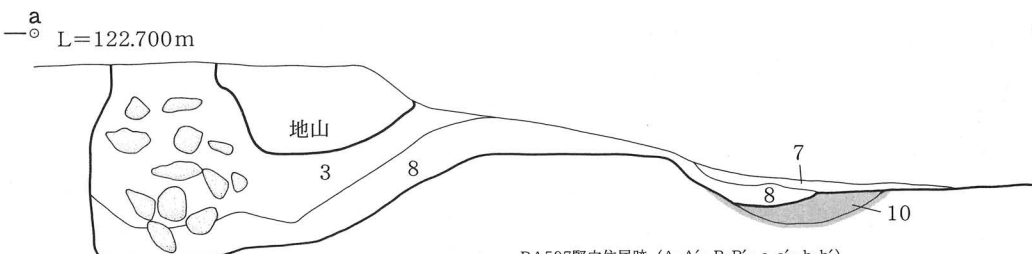
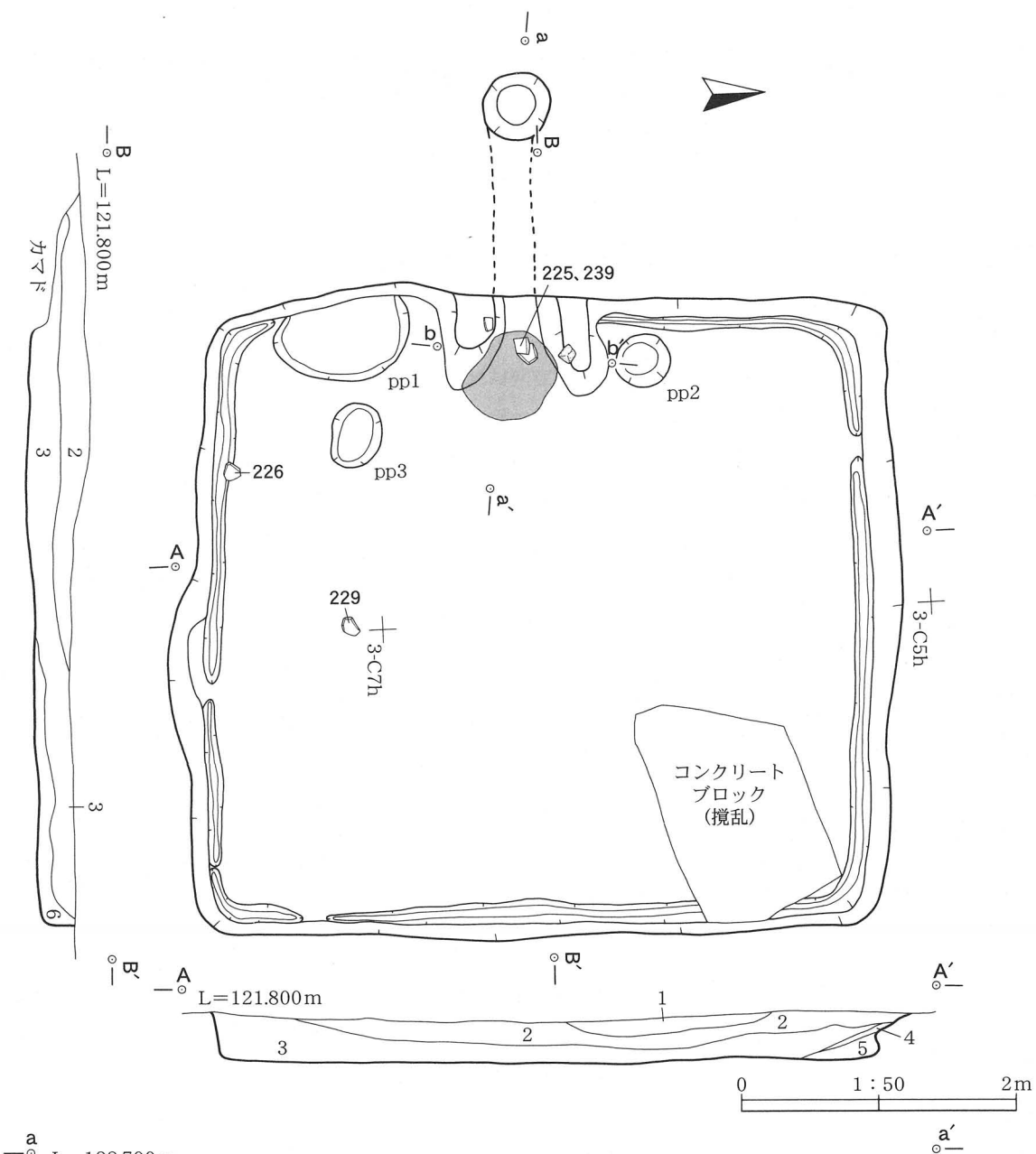
〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 埋土3層に集中する。226・229は床面から、225はカマド燃烧部から出土したものである。土師器坏4点、須恵器坏3点、土師器高台坏1点、土師器甕類7点、須恵器壺1点、瓶類2点を図示・写真、その他、鉄製品1点を写真でのみ掲載した。225から227の坏は内面ヘラミガキ後黒色処理される。いずれも内彎して立ち上がる器形を持ち、底部もしくは体部下端に再調整されている。225は体部下端に回転ヘラケズリ後、一部手持ちヘラケズリ、226は底部周辺と体部下端に回転ヘラケズリ、227は体部下端に手持ちヘラケズリが確認できる。228のロクロ整形のみの土師器坏は内彎して端部が短く外反する。須恵器坏も229・230は同様の器形を持ち、231は外反せず口縁部が少し肥厚する。233～236は非ロクロの土師器甕である。233は頸部から口縁部にかけてくの字状に大きく外反する。234は体部下端が短く外側に突出し、底部は砂底となる。胎土・器厚・色調等233と類似し同一個体の可能性がある。235も砂底土器で、外面の摩滅が著しい。238・239はロクロ土師器で、239は底部糸切り離し後、体部下端にヘラケズリ再調整される。（第91・92図、写真図版85・86）

〈時期〉 平安時代

R A 598 竪穴住居跡（第36図、写真図版30）

〈位置・検出状況〉 B区2-C24j グリッドに位置する。IV層上位で検出したが、ところどころ攪乱を受けていたためプランを把握できなかった。検出時より少し下げて形状が明確になるとともに、R A 599 竪穴住居跡・R A 215 竪穴住居跡と重複していることが判明した。



- RA597竪穴住居跡 (A-A'・B-B'・a-a'・b-b')
1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。小石を多量に含む。攪乱の可能性あり。
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。
 3. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト 5%、10YR2/1 黒色シルト 1%。
 4. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性やや弱い。10YR3/3 暗褐色シルト 50%。
 5. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR2/1 黒色シルト 20%、10YR4/4 褐色シルト 1%。
 6. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR3/3 暗褐色シルト 80%。
 7. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト 80%。
 8. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。5YR3/6 暗赤褐色土 5% 含む。
 9. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性やや強い。
 10. 7.5YR4/8 赤褐色土 しまりややあり、粘性弱い。焼土層。

第35図 RA597 竪穴住居跡

〈規模・形状〉北東隅、北西隅をRA013竪穴住居跡によって消失する。規模は北壁1.6m以上、東壁1.9m以上、南壁2.9m、西壁2.2mを測り、平面形は方形を呈する。主軸方向はN-25°-Wである。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトを主体として2つの層に分けられる。上部は10YR2/1黒色シルト、下部は10YR3/3暗褐色シルト・10YR4/4褐色シルトが混入する。これらの層はレンズ状に堆積しており、自然に埋没したものと考えられる。

〈床面〉地山土を床とし、掘方埋土、貼床の痕跡は検出されなかった。床面はおおむね平坦である。

〈壁〉直立し、壁高は20~30cm残存している。

〈土坑・柱穴〉検出されていない。

〈カマド〉西壁の中央やや南よりに位置する。煙道方向はN-110°-Wである。上述の通り、ところどころで攪乱を受け、残存状態は悪く、右袖は消失する。袖は地山土で構築され芯材と見られる礫や土器片は出土していない。燃烧部は浅皿状に窪むが、焼土の広がりには検出されていない。煙道は全長1.5m、煙道部中央付近が若干窪み煙出し部へと続く。煙道の底面には被熱の痕跡が見られなかった。上部が削平されているため構築方法は不明である。埋土は基本的に住居内のものに類似する層（1・2層）の他に、4つの層が観察される（3~6層）。このうち3層は地山ブロック（10YR4/4褐色）を多く含み天井部の崩落土と推測される。

〈重複〉RA215竪穴住居跡とRA599竪穴住居跡と重複する。前者に切られ、後者を切る。したがって、新旧関係は古いものからRA599竪穴住居跡、本遺構、RA215竪穴住居跡となる。

〈遺物〉小破片だが外面と段を有する土師器坏（内黒）が出土している。

〈時期〉平安時代

R A 599竪穴住居跡（第37図、写真図版30）

〈位置・検出状況〉B区、2-C25jグリッドに位置する。IV層上位で検出時には、焼土のひろがりか認められるものの攪乱を受けていたためプランを確認できなかった。そのため検出面より少し下げると形状が明確になり、住居跡が重複していることが判明した。

〈規模・形状〉北側をRA598竪穴住居跡、西側を攪乱により消失する。残存する壁は、東壁2.5m以上、南壁1.2m、西壁1.5m以上を測る。全形は不明であるが残存部から推定すると長方形を呈する。しかし西半は攪乱などにより立ち上がりか判然としない部分もあり、さらに西へ広がっていた可能性もある。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトを主体として2つの層に分けられる。

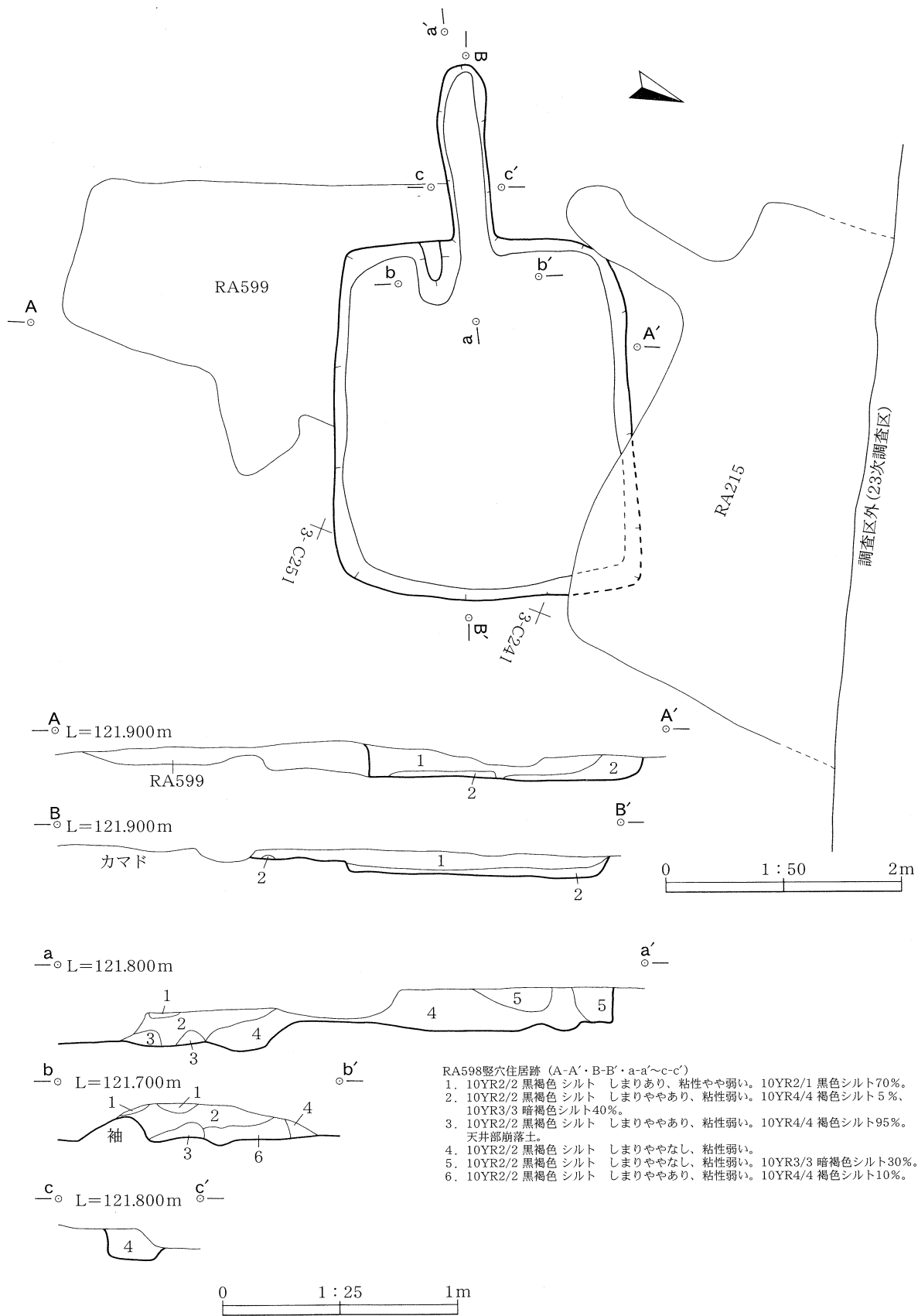
〈床面〉平坦である。掘方を床面としたようで、貼床が施された痕跡は確認されなかった。

〈壁〉明確に確認できた南壁に限るが、ゆるやかに外傾しながら立ち上がっているようである。壁高は10cm程度残存するのみである。

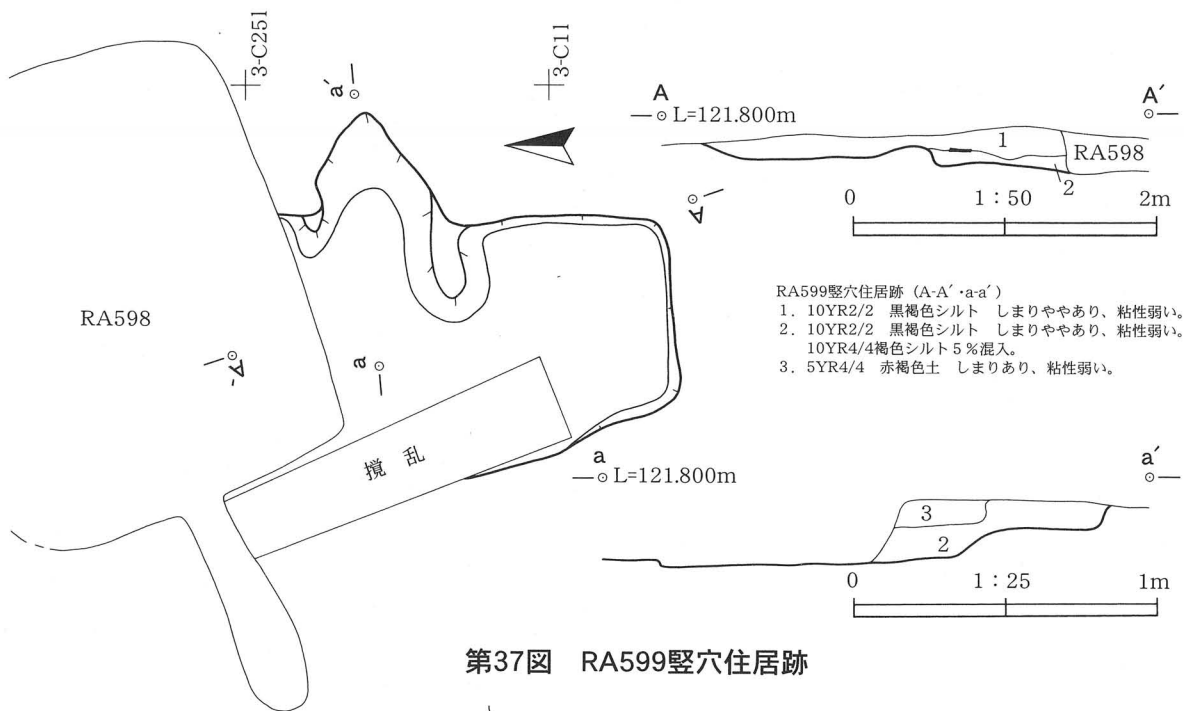
〈土坑・柱穴〉検出されていない。

〈カマド〉東壁に位置する。煙道方向はN-85°-Eである。右袖は比較的よく残っているが、左袖はほとんど消失する。一部はRA017竪穴住居跡に切られているものと思われる。地山土を用いて構築しており、礫や土器片などの芯材は出土していない。燃烧部は床面とほぼ同じ高さで、焼土は検出されていない。煙道は全長0.7mとごく短く、上部が削平されているため構築方法は不明である。検出時3層及び2層上面に焼土の広がりが確認されている。住居跡が埋没する途中で生じたもの、もしくはカマド天井部に形成されていたものと考えられる。

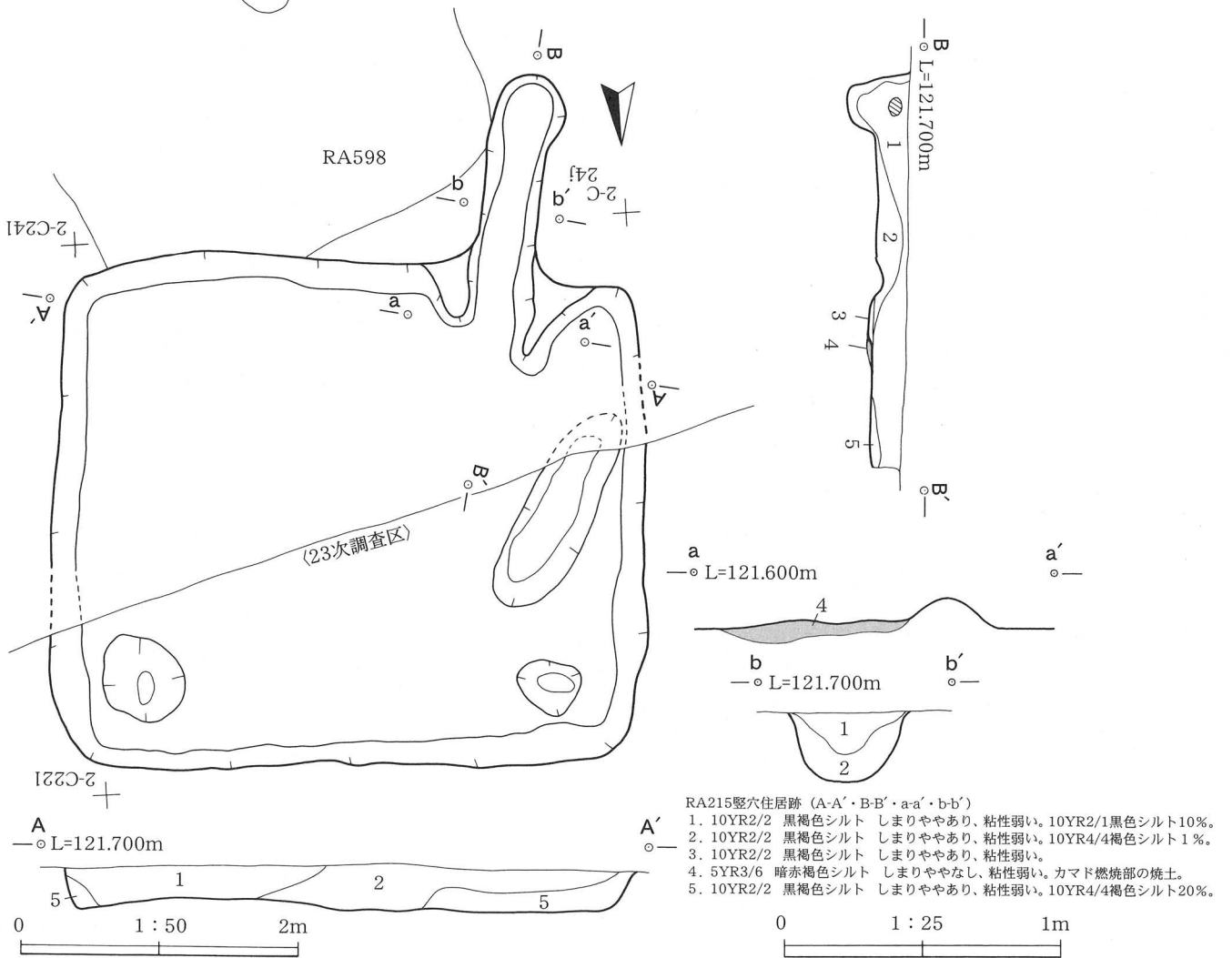
〈重複〉RA598竪穴住居跡と重複しており、それに切られている。



第36図 RA 598竪穴住居跡



第37図 RA599 堅穴住居跡



第38図 RA215 堅穴住居跡

〈遺物〉土師器甕胴部小破片が出土している。

〈時期〉平安時代

R A 215 竪穴住居跡 (第38図、写真図版31)

〈位置・検出状況〉B区、2-C24j グリッド付近に位置する。IV層上面で検出したが、プランが不整形であったため、さらに少し下げて住居跡が重複していることが明確になった。

〈規模・形状〉北半は調査区外まで延び、26次調査区において検出されている。本次調査分の規模は、東壁2.6m、南壁4.1m、西壁1.2mを測る。前調査分とあわせた全形は方形を呈しており歪みはほとんどみられない。規模は北壁3.9m、東壁3.5m、南壁4.0m、西壁3.3mである。主軸方向は、N-7°-Eである。

〈埋土〉26次調査と同様、10YR2/2黒褐色シルトを主体として3つの層に分けられる(1・2・5層)。東壁・西壁いずれの壁際にも5層が確認されるが、西側より東側での堆積量が多く、また次の埋土である2層は東側でしか観察されない。このことから、東側から埋没していったものと推測される。

〈床面〉地山土を床とする。掘方埋土、貼床が施された痕跡は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。

〈壁〉ほぼ直立しており、壁高は30cm残存している。

〈土坑・柱穴〉検出されていない。北半(26次調査)では両隅に柱穴となるような小穴が検出されているが、今次調査ではそれに対応するようなものは検出できなかった。

〈カマド〉南壁の西隅に位置する。煙道方向はN-168°-Wである。右袖に比べて左袖の残存状態はよくない。地山土を用いて構築しており、礫や土器片など芯材の出土はない。燃焼部は僅かに窪み焼土が形成されるが、調査手順の不備より平面形の記録を欠く。煙道は全長1.4m、燃焼部から奥壁付近に高まりがあり、そこから平坦のび、煙出し部で20cmほど深く掘り込まれる。煙道部に被熱の痕跡はみられなかった。上部が削平されているため煙道の構築方法は不明である。

〈重複〉R A 598 竪穴住居跡と重複し、これを切る。

〈遺物〉須恵器坏底部(糸切り)、瓶類胴部、非ロクロの土師器甕胴部小破片が出土している。

〈時期〉平安時代

R A 293 竪穴住居跡 (第39図、写真図版32)

〈位置・検出状況〉B区、3-C1c グリッドに位置する。IV層上面で検出した。

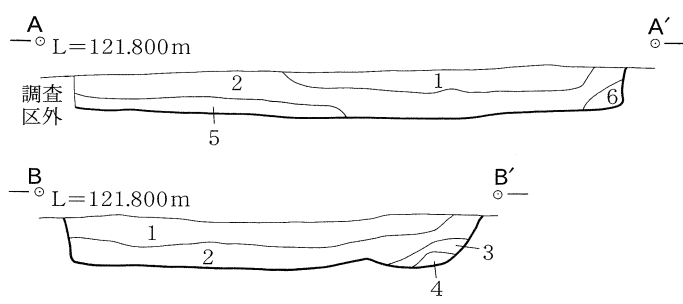
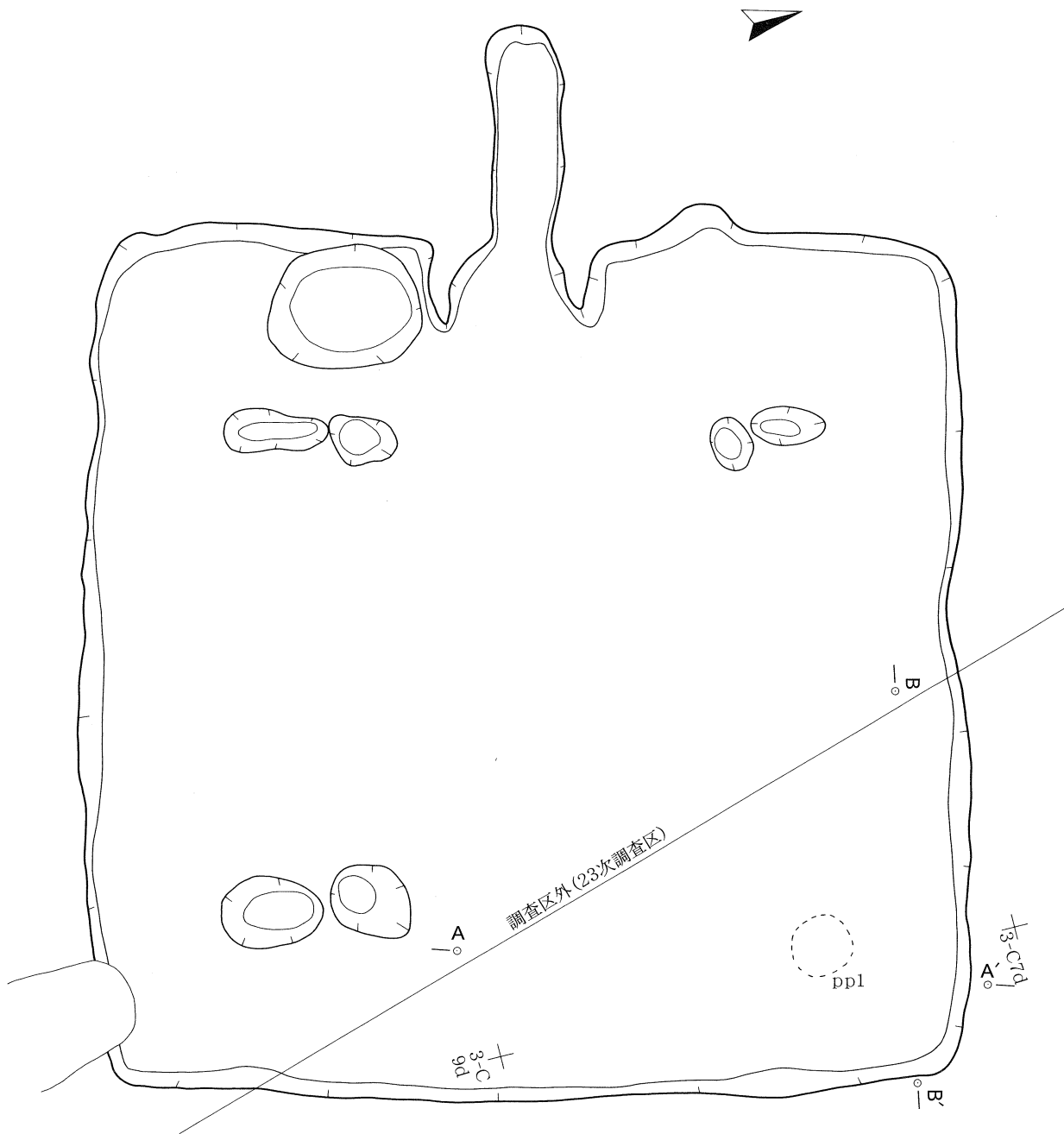
〈規模・形状〉西側は調査区外まで延び、すでに26次調査において検出されている。本次調査範囲は北壁3.0m、東壁5.0m住居跡の北東角の部分である。前調査分をあわせた全形は方形を呈し、規模は北壁6.4m、東壁6.2m、南壁6.6m、西壁6.2mとなる。主軸はN-10°-Eである。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトを主体として、6つの層に分けられる。3・4・6層が壁際にわずかに堆積し、1・2・5層が住居全体を覆う。住居全体の堆積状況を把握することはできなかったが、両次調査をあわせて考えると自然に埋没したものと思われる。

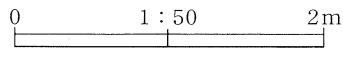
〈床面〉調査時の不手際により記録を欠くが、全体的に10cm程度の掘方埋土が確認されており、この上面を床とする。床面はほぼ平坦である。

〈壁〉北壁は直立しているものの、東壁は外傾しながら立ち上がる。壁高は30cm前後残存している。

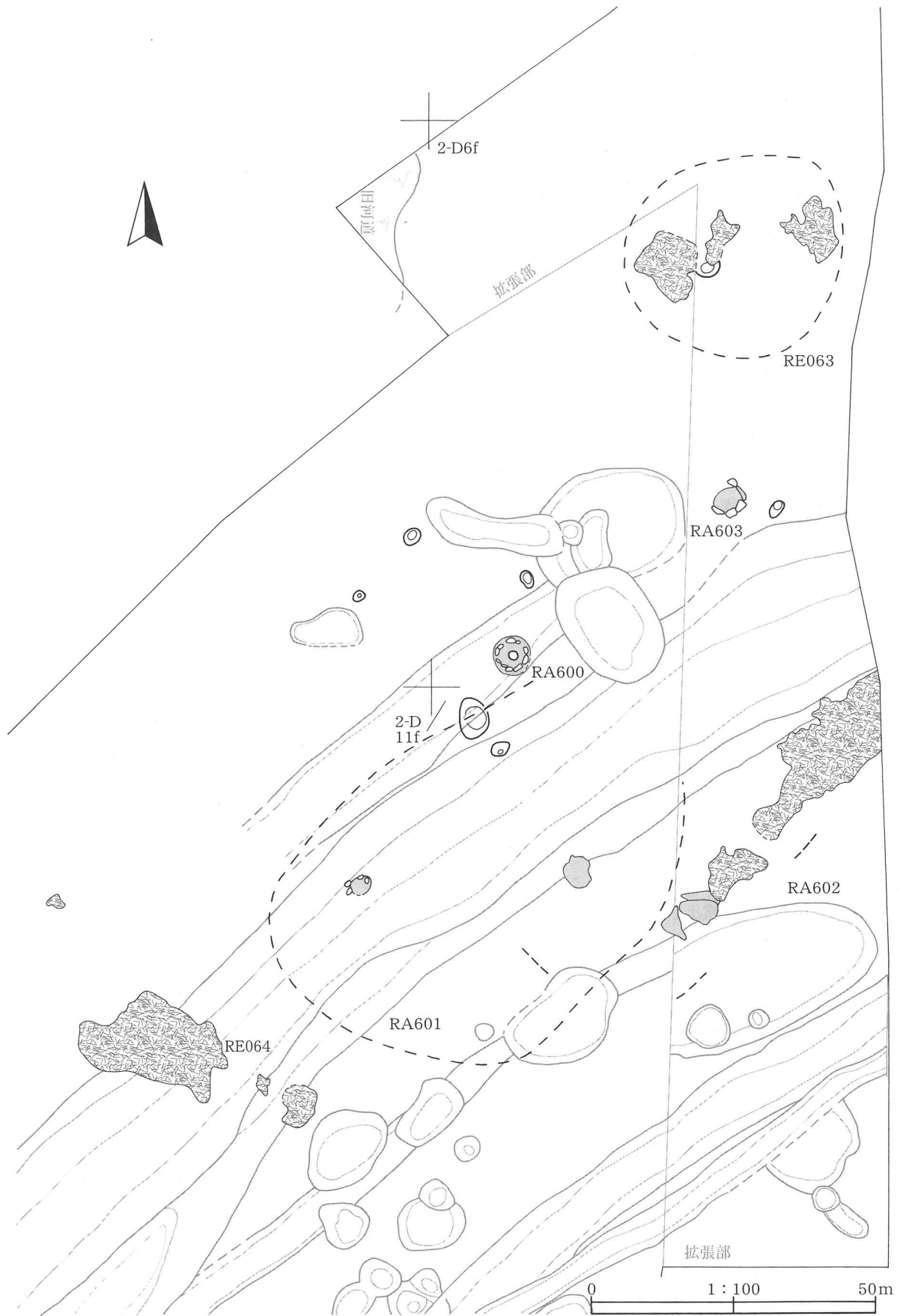
〈土坑・柱穴〉調査時の不手際により記録を欠くが、北東隅に、直径約0.45mで円形のピットが1基検出された。26次調査においても同様の小穴が各隅で2つずつ検出されており、主柱穴と報告されている。本次調



- RA293竪穴住居跡 (A-A'・B-B')
1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
10YR3/3 暗褐色シルト50%。
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
 3. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト90%。
 4. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
10YR3/3 暗褐色シルト20%。
 5. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR3/3 暗褐色シルト40%。
 6. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
10YR2/1 黒色シルト50%。



第39図 RA293竪穴住居跡



第40図 A区北東部全体図（縄文）

査では1基のみだが、その位置から同様の性格のものと思われる。

〈カマド〉 26次調査において検出されており、西壁ほぼ中央に位置する。

〈重複〉 本次調査においては重複する遺構はない。

〈遺物〉 土器は2層および5層からの、鉄滓は5層からの出土である。須恵器坏2点、高台坏2点（土師・須恵各1点ずつ）を図示及び写真、鉄滓を写真のみ掲載した。244・245は須恵器坏で内彎して立ち上がる器形を持つ。246は内外面黒色処理される高台坏である。（第92図、写真図版86）

〈時期〉 平安時代

(2) 縄文時代

R A 600住居跡（第41図、写真図版39）

〈位置・検出状況〉 A区、2-D10fグリッド付近に位置する。R A 601住居跡の範囲を確認するためにサブトレンチを入れたところ礫（炉石）が出土した。トレンチ断面を観察すると、礫の周囲が被熱し焼土形成面に沿って炭化物が点在していたため住居跡の炉と床面の可能性があると判断した。

〈埋土・床面〉 床面近くまで後世の削平を受けているため、埋土の残存状態は悪い。A区④層（地山層）相当の10YR5/6黄褐色を主体とする。3層は下位層よりしまり、下面に10YR4/1褐灰色シルトが層状に堆積している。4・5層下面にも、炭化物が点在するため、これらの層下面が、床と想定される。遺物もこの面に広がる。また、3・5層の下位でも、遺物と炭化物が点在する面が確認できる（9層下面）。しかしこれらを含まない地点においては地山土と全く識別できない。そのため、混入物のみられない箇所（A-A' 2・3層下位）及び壁（立ち上がり）は分層不可能であった。石囲炉は4層下面に形成されるが、炉より北側は3層下面もしくは9層下面のいずれかの床面に対応するものと思われる。このため、前者であれば浅皿状の後者であれば北側に傾斜する床面を持つ。

〈壁〉 2～5層下面を床とした場合明確な壁はなく、浅皿状に緩やかに立ち上がったものと考えられる。

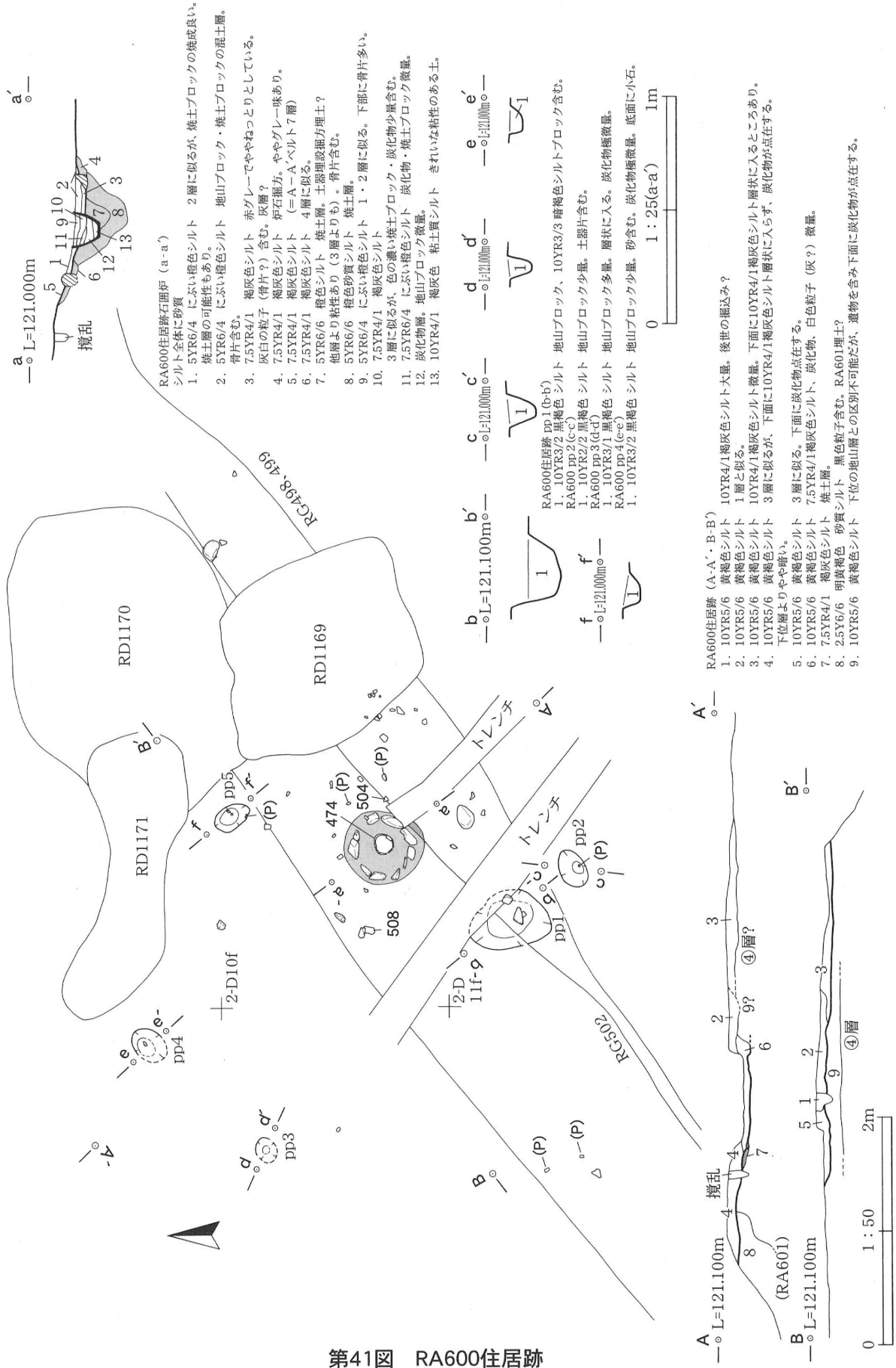
〈土坑・柱穴〉 pp 1～5の5基検出された。規模はpp 1が開口部径70cm、深さ23cmと大きく、これ以外は、径20～35cm、深さ5～10cm程度である。掘込みが浅く、本遺構に伴うものかはっきりと判断はできなかったが、pp 1・3からは縄文土器片、pp 4・5からは小礫が出土した。埋土はpp 1～4は黒褐色土を主体とする。

〈炉〉 石囲炉が1基検出された。礫で54×52cmの範囲を囲い、中央には土器が正位で埋設されていた。炉内には焼土が形成されている。焼成面は皿状に窪んでおり、南側の床面との差は最大12cm（北側からは5cm）ある。焼成は良く、被熱のおよぶ深さは最大18cm、焼成範囲は68×66cmと石囲炉の外側まで被熱する。焼土の上位には赤灰味の強い粘性のある層（灰層か？）が堆積し、灰白色の小破片（骨片？）を含み、その上は焼土ブロック層となる。中央に埋設された土器の内部には、底から、きれいな10YR2/3黒褐色粘土質シルト、炭化物層、炭化物・焼土ブロック層、骨片を含む焼土ブロック層の順に堆積し、被熱した痕跡は認められない。恐らく炉使用時には開口していたものと思われる（使用過程に堆積。置き火等？）。土器は火を受けていたため器面がボロボロでもろくなっている。

〈規模・形状〉 規模は、柱位置・遺物の広がりから直径4m以上と推定されるが、形状は不明である。

〈解釈〉 以上、石囲炉を中心として、焼成面（床面に）沿って炭化物・遺物が出土することから、竪穴住居跡と判断した。床面は2面もしくは、北側に傾斜するものと思われる。しかし、床面近くまで削平が及んでいる上に、古代の遺構が重複しているため、壁などの立ち上がりは確認できなかった。

〈重複〉 R D 1169～1171土坑、R G 498・499・502溝跡と重複し、これに切られる。縄文の遺構はR A 601住



第41図 RA600住居跡

居跡と重複し恐らく本遺構の方が新しいものと思われる。

〈遺物〉 炉を中心に礫・遺物が散在する（図中の遺物の中で（P）と示したものは土器片、それ以外は剥片である。礫は古代以降の遺構同様表面にドットを打ってある。（以下同じ）。474は炉内に埋設されており、火を受け器面がもろくなっている。（第107・109図・写真図版97・98）

〈時期〉 埋土の様相、出土遺物より縄文時代晩期と推定される。

R A 601住居跡（第42図、写真図版34）

〈位置・検出状況〉 A区、2-D13 f グリッド付近に位置する。R G 498・499溝跡の壁に焼土および炭化物がほぼ水平に入る面を確認したため、壁に直交するようにトレンチを設定し掘り下げたところ西側の石囲炉が検出された。その後炉周辺・溝対岸にベルトを設定し同様に掘り下げていったところ炉とほぼ同じ高さに炭化物・遺物が広がることから住居跡の可能性があると判断した。

〈埋土〉 10YR5/6黄褐色シルトを主体とする。主体土以外の混入土が認められないため、基本層土と埋土の識別、埋土間の相違を判断するのが非常に困難であった。さらに、後世に溝（R G 498・499）が構築されたことにより溝堀方に沿って酸化鉄が集積し（1・2層）本来の層の性質が変化してしまった部分が認められた。色調・10YR3/3暗褐色粒子（マンガンか？）、土質（砂の混入量）・炭化物・焼土ブロックの有無などを基準に分層を試みた。10YR3/3暗褐色粒子は酸化鉄集積付近に多く、下部へいくに従い減少する傾向が認められたため後世の溝の影響によるものが強いと考えられる。しかし、酸化鉄集積面からほぼ同じ距離でも量が異なるのは元々の土の性質が違う可能性があると思い判断基準とした。この点から考えると、10・11層の壁立ち上がりは溝の影響によるものかもしれない。しかし反対側では砂の入る層（7層と17層）が連続せず、A-A'ベルトは溝とほぼ並行に設定したにもかかわらず埋土と地山（15層）の暗褐色粒子量が異なる。南西側では立ち上がりに沿って酸化した層が層状にみられ、これを境に土質が異なるものと思われる。5・9・13層は炭化物が層下面に認められ、床面を形成していた可能性がある。また埋土中には砂層（7・19層）もはさまれており、水性堆積と思われる。

〈炉跡〉 2基検出された。西側の炉は北半に礫が埋め込まれており石囲炉と思われが、南半は溝堀方に削平され礫の有無は不明である。残存する焼成範囲は38×32cm、被熱の及ぶ深さは最大4cmである。東側の炉跡も焼土周辺に礫が出土しており石囲炉の可能性はあるが、床面埋め込まれている痕跡は確認できなかった。焼成範囲は54×50cm、被熱の及ぶ深さは最大4cmである。焼成面は浅皿状に窪み炭化物層に覆われ、周囲の床面よりも低いいためかやや粗い砂が堆積する。

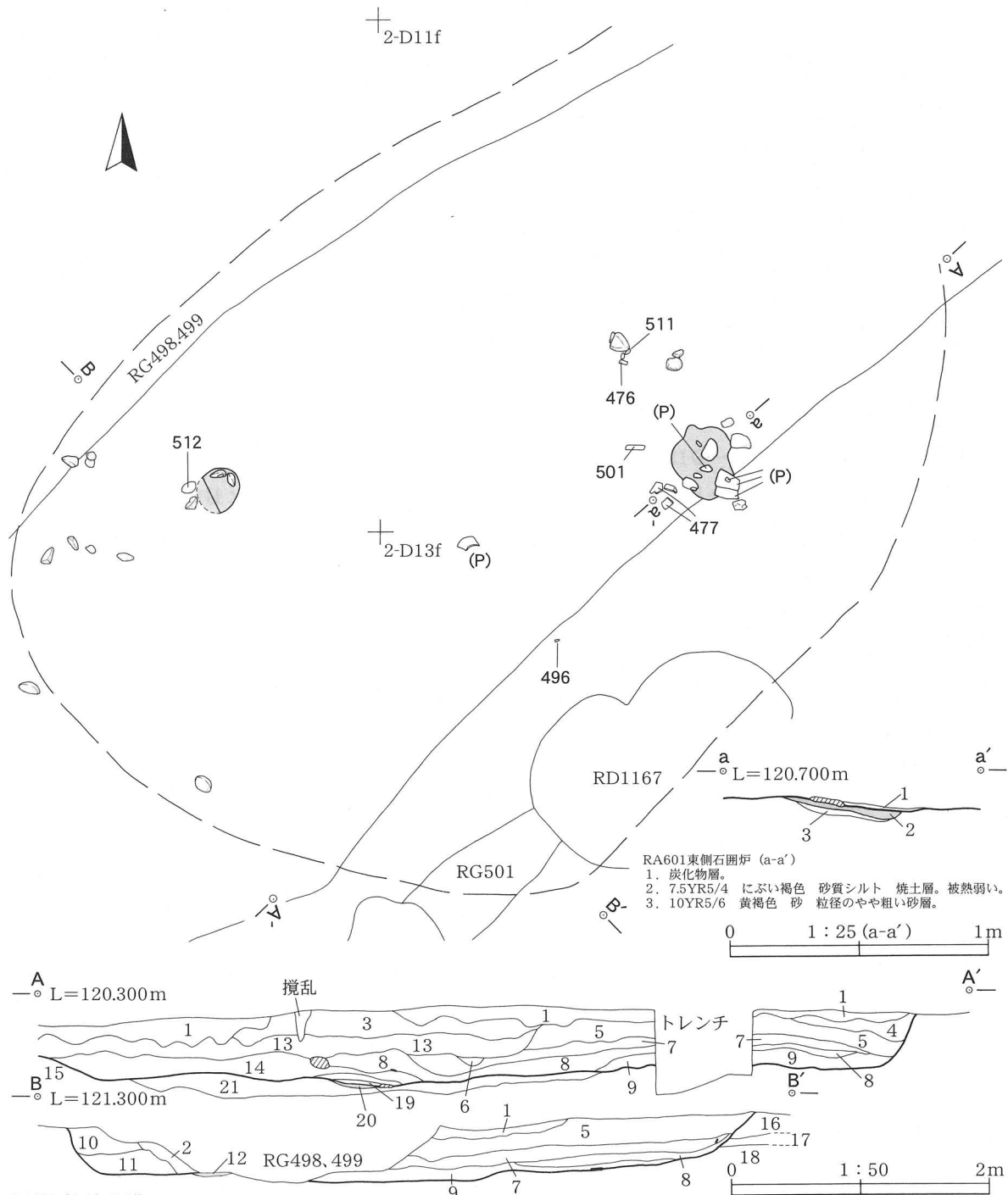
〈炭化物・焼土ブロック〉 5層・9層・13層下面に炭片が点在する。また溝跡北壁にも炉の焼土形成面である11層下面に対応する高さに炭化物層が認められ、さらに北側へ面的に点在する範囲が広がる。それぞれ床面の可能性が高い。また5層下面には、被熱箇所も確認されたが、平面形で把握できなかった。

〈床面〉 炉跡の焼成面、炭化物・遺物・礫の出土状況から、8・9・11・14層下面を床とする可能性が高い。東側炉を伴う床面は平坦ではなく炉を中心としてゆるやかに窪み、特に硬化面などは認められない。

〈壁〉 埋土と地山との相違を見分けることが困難で、断面でのみ壁を把握した。外傾して立ち上がり、検出面からの深さは50cm程度である。しかし、北西側は溝のプランとほぼ平行しており、上述のように後世の影響による結果分層した可能性もある。

〈土坑・柱穴〉 確認されていない。

〈規模・形状・解釈〉 平面から遺構プランを把握することができなかった。ベルトを残して断面で壁の立ち



RA601 (A-A'・B-B')

全体やや砂質。しまり粘性やや弱くさくさとする。酸化鉄全体にみられる。

1. 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト 下面の酸化鉄が溝の掘方に沿って入る。後世の水の影響で土質が変化した層？
2. 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト 下面に炭化物はいる。1層同様溝の壁に沿って酸化鉄はいる。
3. 10YR5/6 黄褐色シルト 5層より暗く、10YR3/3 暗褐色シルト粒子の粒径も大きい。
4. 10YR5/6 黄褐色シルト 10YR3/3 暗褐色シルト粒子極微量。他層より明るい。
5. 10YR5/6 黄褐色シルト 10YR3/3 暗褐色シルト粒子少量。最も多く含む層。やや暗い。下面に炭化物や10YR4/3 にぶい黄褐色シルトが層状にはいる。やや赤味を帯び被熱した土も層状にはいる。
6. 10YR3/3 暗褐色シルト やや粘性あるか？きれいな層。
7. 10YR5/6 黄褐色シルト 4層に似るが、やや10YR3/3 暗褐色シルト粒子多い。下面に砂層入る。
8. 10YR5/6 黄褐色シルト 10YR3/3 暗褐色シルト極微量。やや白味強い。東側下面では遺物挟む下面グレーの線はいる。
9. 2.5Y7/4 明黄色シルト 他層よりやや粘性あるか？比較的きれいな土。下面に炭化物含むところあり。

10. 5層に似る。
11. 7層に似るが下面に砂入らない。
12. 5YR5/2 灰褐色シルト 焼土層。焼成悪い。
13. 10YR5/6 黄褐色シルト 5層に似るが、ややしまりあり。5層の方が砂質。下面に炭化物入り拡張予定区域に延びる。下面に礫もはいる。床面？13・14層茶味強い。
14. 10YR5/6 黄褐色シルト 10YR5/6 黄褐色シルト 7層より茶味強い。
15. 9層に似るきれいな土。15～18層 地山層？
16. 5層に似るが10YR3/3 暗褐色シルト粒子ほとんど含まない層。
17. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト 7層の下面に入る砂と似る。
18. 8層に似るが10YR3/3 暗褐色シルト粒子ほとんど含まず、色がやや明るい。
19. 10YR5/6 黄褐色砂質シルト やや粗い砂含む。下面に炭化物層。
20. 焼土層。
21. 8層と似るが上面に炭化物が部分的に入るため分層。地山または掘方か？

第42図 RA601 竪穴住居跡

上がりを確認した地点を結ぶと、遺構の規模・形状は東西約7.5m、南北約5mの楕円形を呈するものと思われる。東西にやや長い形状を持ち、この範囲内には炉跡が2基検出されていることから、本遺構は2棟以上が重複している可能性も考えられる。床面の高さも2基の炉付近で10cm程度ことなる。しかし、遺構中央部を溝跡によって消失しており、残った埋土から切り合いは確認できなかった。また本遺構埋土上部は、5・13層を床面とする別遺構（R A 602住居跡？）の可能性が高い。

〈重複〉 R G 498・499溝跡、R A 602住居跡と重複しこれに切られる。

〈遺物〉 東西2つの炉を中心として遺物・礫が散在する。R A 603住居跡の深鉢（477）の破片が東側炉付近で出土しており遺構間接合している。（第107・109図・写真図版97・98）

〈時期〉 埋土の様相、出土遺物より縄文時代晩期と推定される。

R A 602住居跡（第43・44図）

〈位置・検出状況〉 A区、2-D12hグリッド付近に位置する。R A 601住居跡の範囲を把握するため、ベルトを設定し掘り下げていったところ、R A 601住居跡東側炉跡より東の埋土上部において炭化物・礫が点在する面（R A 601住居跡A-A'13層下面）が認められたため周囲を同一面で広げたところ、炉aを検出した。その後東側の拡張部調査時に炉aの上位にも炉を形成する面を確認し、床面が何面か重複していることが判明した。

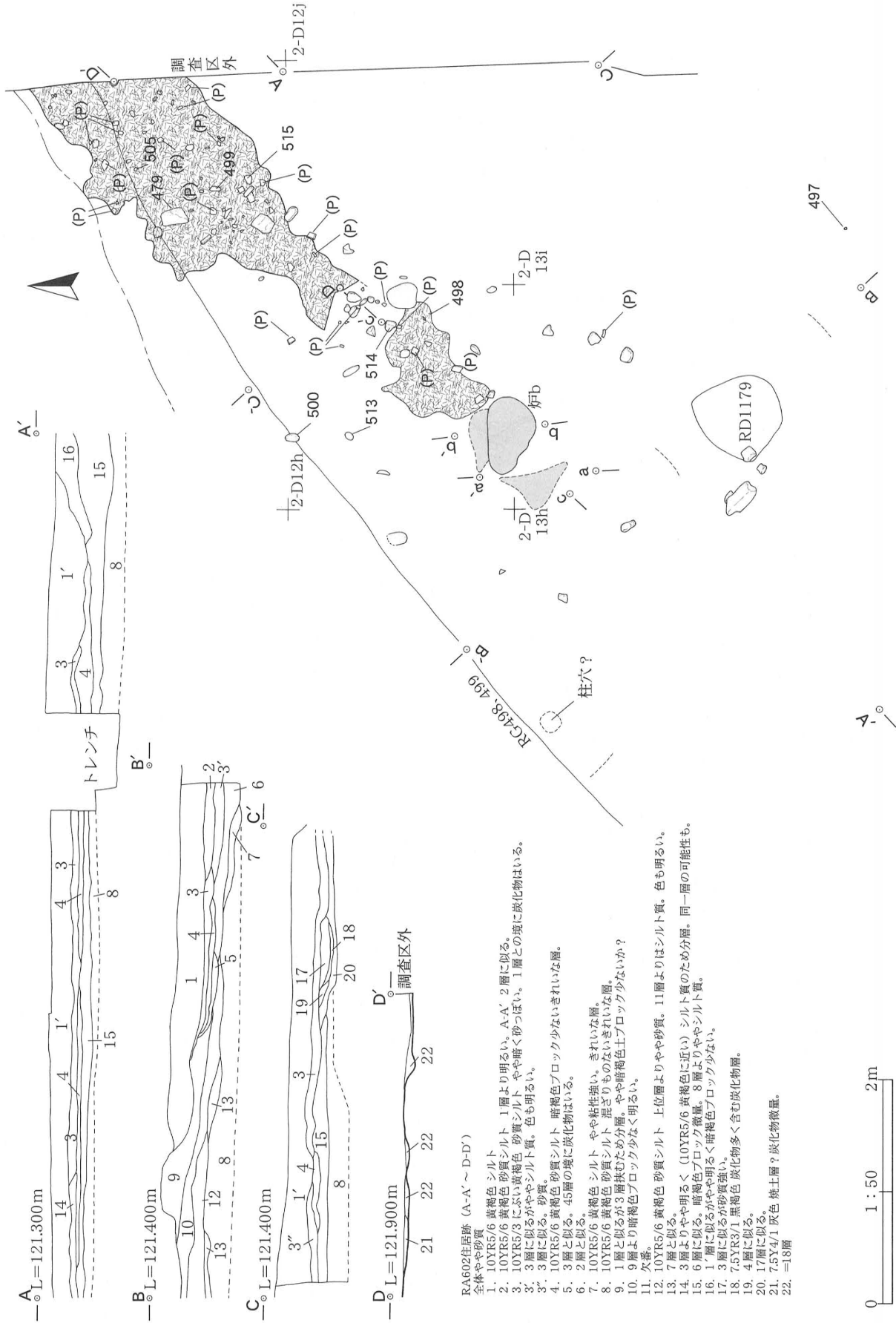
〈埋土〉 混入物の少ない10YR5/6黄褐色シルト～砂質シルトを主体とする。埋土と地山（④層）との識別・埋土の堆積状況の把握は困難であったが、砂量の違い、炭化物の有無などを中心に分層を試みた。炉に近い埋土下部（A-A'3層以下15層上位・B-B'3～7層）は、下面に炭片が見られる層（(1・)4層）、砂質の黒味の強い層（3層）などが薄層をなす。一方、上部および炉・炭化物集中部から離れる南側はやや厚い層となる。層厚の差は分層の手がかりとなる混入物が認められないため識別できなかった可能性もある。いずれにせよ、北側へ向かって傾斜する地形（床面？）に水性堆積したものと思われる。

〈炉跡〉 地床炉が3基検出された。炉bはc-c'2層上面に形成され、周囲よりわずかに窪む。焼成はやや弱く、被熱の及ぶ範囲は70×40cm、深さは最大3cm程度である。炉a・cはc-c'6層上面に形成される。炉aは上部に炭化物を混入し、被熱土のみの下部との境界は不明瞭であるが、断面形が皿状を呈していることから、被熱が及んで形成されたものと判断した。焼成は弱く被熱の及ぶ深さは3cm程度である。平面形は60×30cmの三角形を呈する。炉cは70×40cmの不整形な範囲に形成される。焼成はやや弱く被熱の及ぶ深さは2cm程度である。断面形は西側が深く窪み、焼土上面には炭化物・焼土ブロック層が堆積する。

〈炭化物・焼土ブロック〉 B-B'4層下面に炭化物層が面的に広がる（18・21・22層、c-c'3層対応）。本層は下部に被熱土がみられるが、この面で形成された可能性も考えられるが、薄層（1cm以下）のため上部の炭層との分層がはっきりとできなかった。規模は、南北幅最大1.3m、東西は5m以上の幅を持ち調査区外へと延びる。炭化物層は北側へ向かって傾斜し堆積（F-F'18層）し、上面には遺物・礫が散在する。

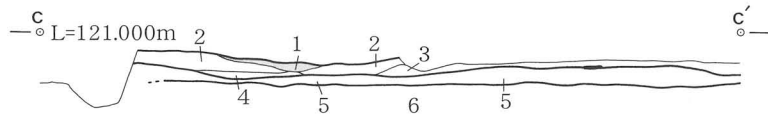
〈床面〉 炉a・cと炉bの形成面、炭化物層が広がる面と3枚の床面が存在すると思われる。炉a・c炉はc-c'6層上面（B-B'5層上面か？）、炉bはc-c'2層上面（B-B'1層下面）、炭化物層はc-c'5層上面（B-B'4層下面）に形成（堆積）する。いずれも平面で床面を把握することができず、断面から確認された床面の形状は浅皿状に窪む形状を持つものと思われる。特に炭化物層は北側に向かって傾斜し、壁際に沿って堆積（形成？）した可能性がある。礫・剥片もそれぞれの面に散在するようである。

〈壁〉 浅皿状の窪地に埋土が堆積しておりはっきりとした立ち上がりは認められなかった。A-A'南側4



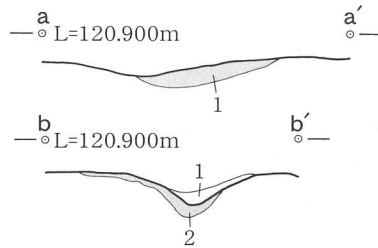
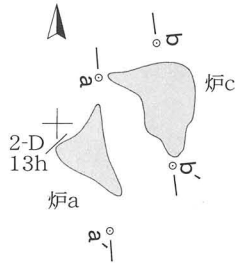
第43図 RA602(1)

- RA602住居跡 (A-A' ~ D-D')
- 全体やや砂質
1. 10YR5/6 黄褐色 シルト
 2. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 1層より明るい。A-A' 2層に似る。
 3. 10YR5/3 に近い黄褐色 砂質シルト やや暗く砂っぽい。1層との境に炭化物はいる。
 - 3' 3層に似るがややシルト質。色も明るい。
 4. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 暗褐色プロック少ないきれいな層。
 5. 3層と似る。45層の境に炭化物はいる。
 6. 2層と似る。
 7. 10YR5/6 黄褐色 シルト やや粘性強い。きれいな層。
 8. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 混ざりものないきれいな層。
 9. 1層と似るが3層状のため分層。暗褐色プロック微量。8層よりややシルト質。
 10. 9層より暗褐色プロック少なく明るい。
 11. 欠番。
 12. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 上位層よりやや砂質。11層よりはシルト質。色も明るい。
 13. 7層と似る。
 14. 3層よりやや明るい(10YR5/6 黄褐色に近い)シルト質のため分層。同一層の可能性も。
 15. 6層に似る。暗褐色プロック微量。8層よりややシルト質。
 16. 1'層に似るがやや明るく暗褐色プロック少ない。
 17. 3層に似るが砂質強い。
 18. 7.5YR3/1 黒褐色炭化物多く含む炭化物層。
 19. 4層に似る。
 20. 17層に似る。
 21. 7.5Y4/1 灰色 粘土層? 炭化物微量。
 22. =18層



RA602住居跡 炉b (C-C')

1. 7.5YR4/1 褐灰色 砂質シルト 焼土層。
2. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 他の埋土よりやや明るく粘性あるきれいな層。B-B' 4層対応か？
3. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 炭片含む。7.5YR3/1 黒褐色シルト (被熱した土) 多く含む。
4. 3層に似る。
5. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 他層より砂質のきれいな層。
6. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 上面が炉ab焼成面。

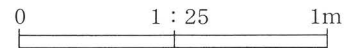


RA602住居跡 炉a (a-a')

1. 5YR5/4 にぶい赤褐色 砂質シルト 焼成弱い焼土層。上部には炭化物含む。下部には含まれないが境界は不明確。皿状に被熱しているため、焼土層になると思われる。

RA602住居跡 炉c (b-b')

1. 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト 被熱した地山ブロック含む。下部に炭化物はある。
2. 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト 焼土層。被熱やや弱い。



第44図 RA602住居跡(2)

層下面や、やや角度が変るB-B'中央付近3～5層下面もしくは9層下面、C-C'17～20層下面辺りが壁の立ち上がりである可能性は考えられる。

〈土坑・柱穴〉 R A 601住居跡A-A'13層下面に径20cm、深さ5cm程度の掘り込み(6層)が認められる。おそらく炉a・cの形成面を床とする住居跡の柱穴と考えられる。10YR3/3暗褐色シルトが堆積する。

〈規模・形状〉 平面形から遺構を把握することができなかった上に、北側の大半を溝によって消失するため不明である。

〈解釈〉 下部から炉a・c、炭化物層、炉b形成(堆積)面を床とする遺構が重複しているものと思われる。床面の高さから単純に照らし合わせると、(B-B'より)5・6層、2～4層、1層がそれぞれの埋土と考えられる(7層はR A 601住居跡か?)。いずれも浅く窪んだ土地(自然、人工かは不明)に埋土が薄く何枚も水性堆積しており、各面で生活痕(炉・炭片・遺物)が認められる状態である。各遺構の壁(床面の一部も含むか)は埋土堆積時に削平された可能性も考えられ、はっきりとした遺構の範囲、壁の立ち上がりなどを把握することができなかった。

〈重複〉 R A 601住居跡、R G 498・499溝跡と重複する。住居跡より新しく溝跡より古い。

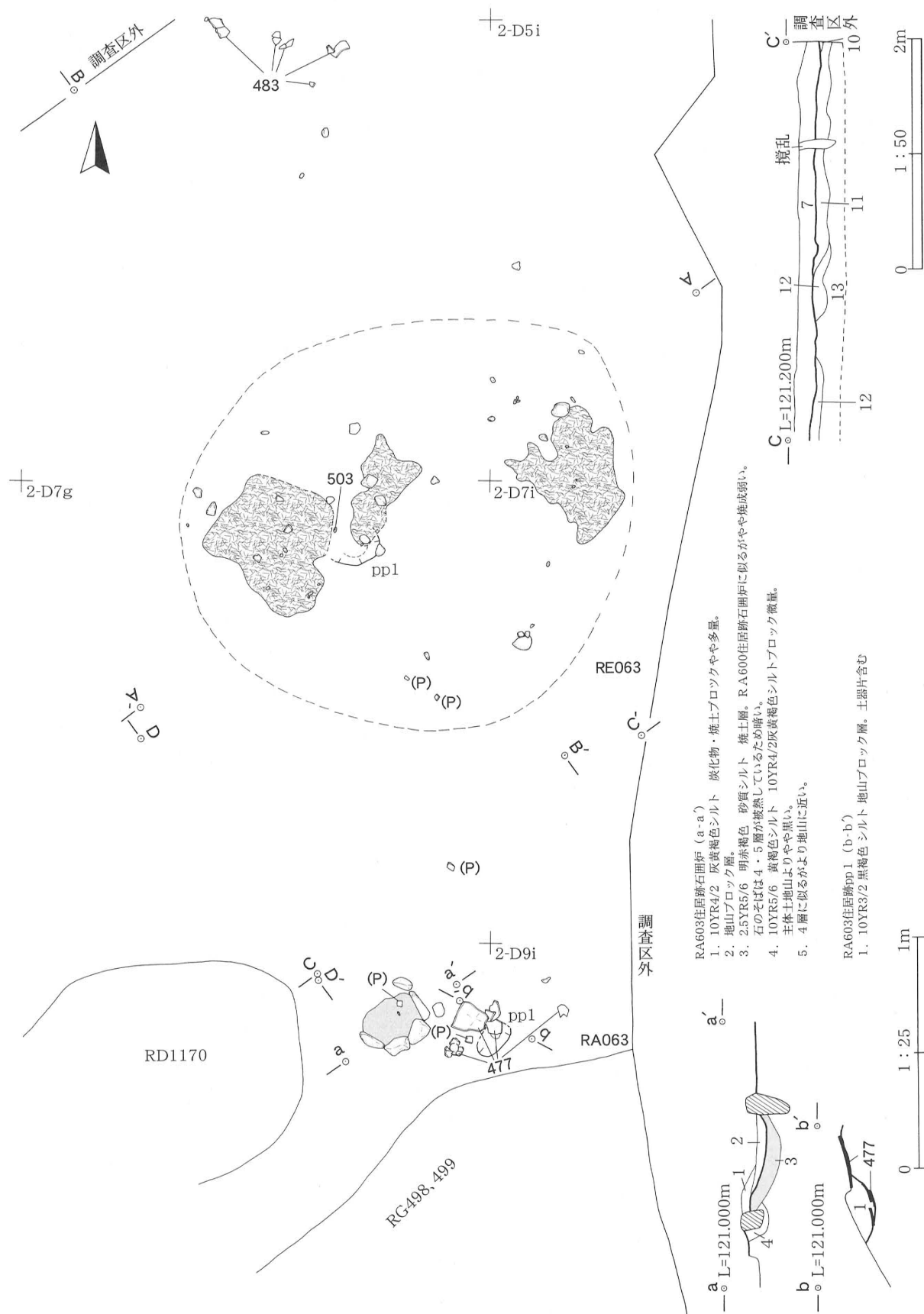
〈遺物〉 遺物・礫が散在し、特に炭化物層上面に集中する。しかし器形が復元できたものはなかった。(第109図、写真図版98・99)

〈時期〉 埋土の様相、出土遺物より縄文時代晩期と推定される。

R A 603住居跡 (第45図、写真図版35)

〈位置・検出状況〉 A区拡張部、2-D9 i グリッド付近に位置する。④層上面よりベルトを設定し掘り下げたところ石囲炉が検出され住居跡の可能性があると判断した。

〈埋土〉 暗褐色粒子を微量混入する10YR5/6黄褐色シルトの単層である。拡張部以西では本遺構の存在を認識していなかった上に、床面付近が検出面のため埋土を確認できなかった。



第45図 RA603住居跡・RE063住居状遺構(1)

〈炉跡〉 石囲炉が1基検出された。径60cmの範囲に礫が環状に埋め込まれるが、西側には礫がみられない。南西端の礫の西側は床面がやや汚れており、抜き取り痕の可能性はあるがはっきりとした掘込みは認められなかった。礫の内側は浅皿状に窪み焼土が形成される。焼成はやや弱く、被熱の及ぶ深さは6cmである。焼成面の上は地山ブロック層で覆われその上に炭化物・焼土ブロック層が堆積する。

〈床面〉 石囲炉形成面に礫・遺物が散在することから床面と考えられる。硬化面・炭化物は認められなかった。断面形からみるとほぼ平坦なようである。

〈壁〉 確認されなかった。

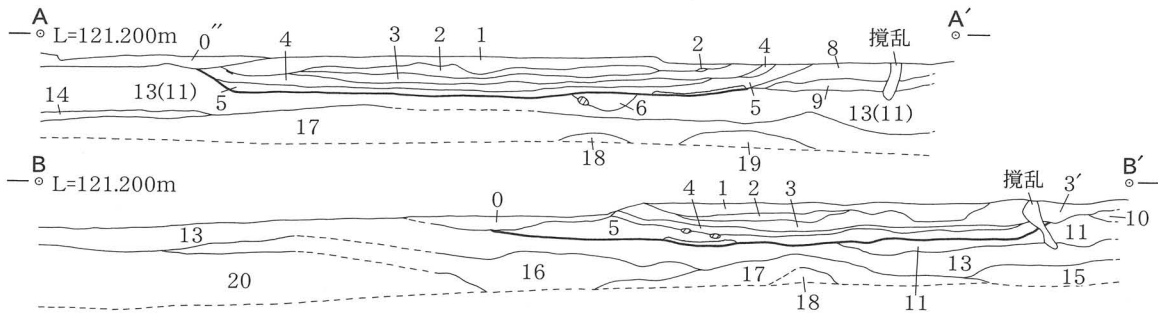
〈土坑・柱穴〉 炉跡東側に小穴1基検出された(pp1)。開口部径30×20cmの楕円形を呈し、床面からの深さは10cmである。埋土は10YR3/2黒褐色シルトを主体とし、底面からは土器片が出土している。

〈規模・形状・解釈〉 炉跡の南・西側は他遺構によって消失、東側は調査区外のため規模・形状を把握することはできなかった。北側は残存するものの、壁の立ち上がりは見られず、礫・遺物・炭化物の出土がほとんど見られないため、範囲を確定することは困難であった。しかし、炉跡およびその付近に柱穴・礫・遺物が検出されたことより住居跡の可能性が高いと考えられる。

〈重複〉 遺構範囲の確認はできていないが、炉の位置から推定するとRD1170土坑、RG498・499溝跡と重複すると思われる。両者は出土遺物から本遺構より新しいと判断される。またRE063住居状遺構とも重複する可能性がある。

〈遺物〉 炉周辺に遺物が散在する。417は炉東側より出土し、底部付近が正位で、胴部が床面に横たわり一部pp1内に入っていた。RA601住居跡で出土した小破片とも接合する。(第107図、写真図版99)

〈時期〉 埋土の様相、出土遺物より縄文時代晩期と推定される。

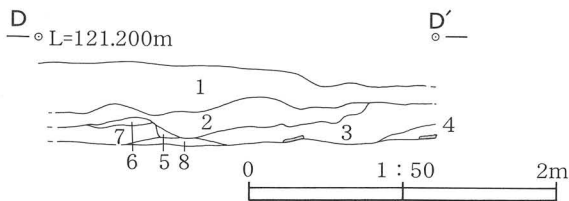


RA603住居跡(C-C')・RE63住居状遺構(A-A'・B-B')

0~0'', 10YR3/2 黒褐色シルト 後世の掘削による攪乱層。(0'・0''はやや砂質)

1. 10YR5/6 黄褐色シルト 暗褐色ブロック微量。
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 砂多い層。やや10YR5/6 黄褐色シルトブロック混じる。
3. 1層に似る。
4. 10YR5/6 黄褐色 砂 きれいな砂層。
5. 1層に似るが暗褐色ブロック少ない。下面に炭化物はいる。
6. 10YR5/6 黄褐色シルト 暗褐色ブロック含まないきれいな層。下面に炭化物入る。
7. 10YR5/6 黄褐色シルト 暗褐色ブロック微量。
8. 10YR5/6 黄褐色シルト 5層に似るがやや明るく黄味強い。

9. 10YR5/6 黄褐色シルト きれいな層。13層よりしまる。
10. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂 砂層。
11. 5層に似るが暗褐色ブロック少なく明るい。8層より明るい。
12. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂 砂層。
13. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト やや砂質。上位層よりきれいな層。
14. 9層に似る。
15. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 砂に近い層。細かい砂?
16. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 地山と砂が帯状に、砂も粒子まちまち。
17. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 13層より砂質。15層よりシルト質。
18. 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト 粘性のある地山。
19. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 15層と似る。
20. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト ラミナ状に酸化鉄の波はいる。横に波打つ程度。



RA603住居跡西(D-D')

1. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 酸化鉄はいる。斑。上位からの影響。
2. 10YR5/6 黄褐色シルト きれいな層。下面に沿ってラミナ層に酸化鉄はいる堆積。
3. 2層より砂質。色黒い。
4. 10YR5/6 黄褐色シルト きれいな層。下面に炭化物。
5. 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト しまり粘性あるきれいな層。
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂層。
7. 4層に似る。
8. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂層 粒子他より粗い。

第46図 RE063住居状遺構(2)

3. 住居状遺構

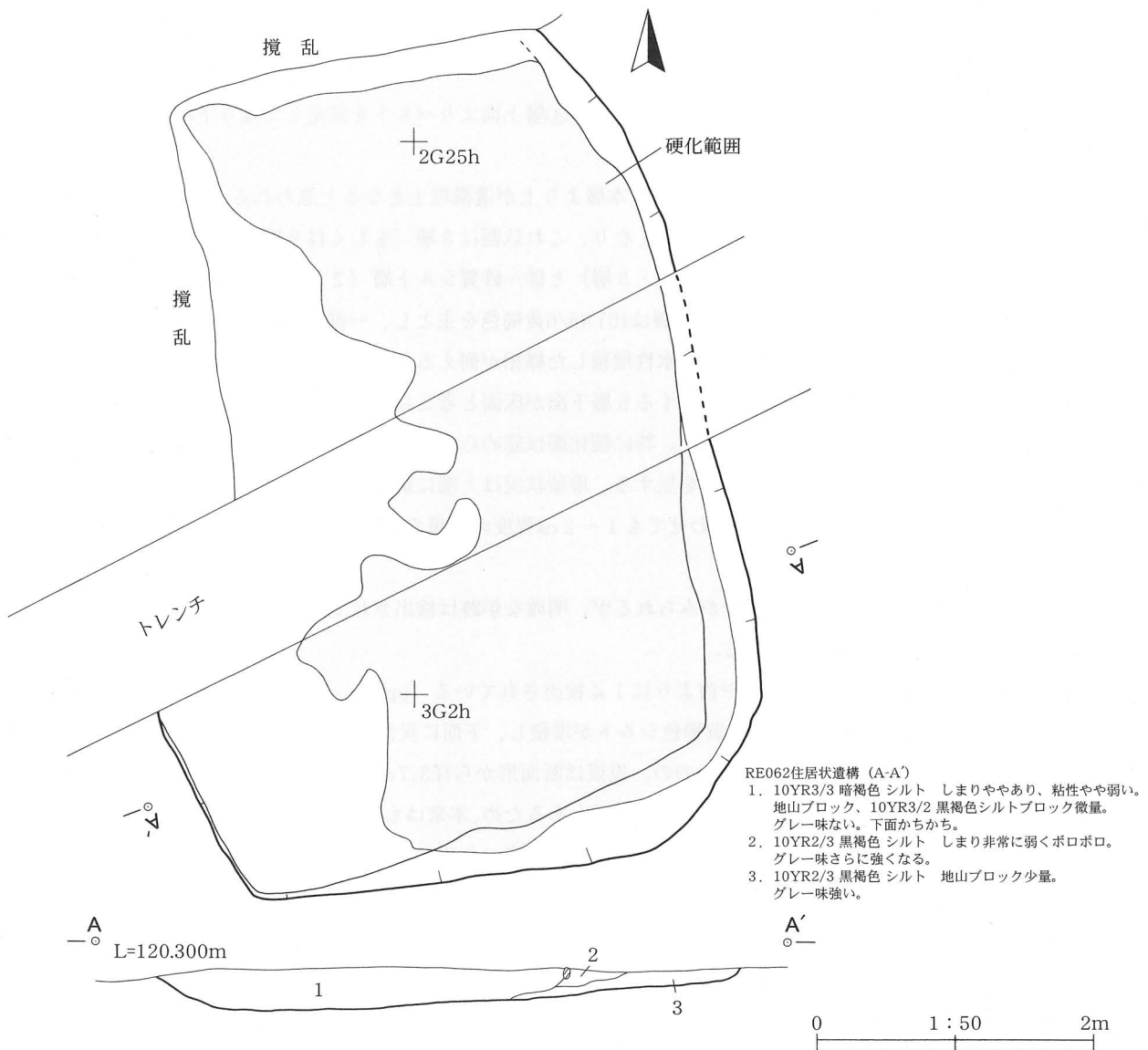
(1) 古代以降

RE062住居状遺構 (第48図、写真図版39)

〈位置・検出状況〉 E区、2G25hグリッド付近に位置する。試掘トレンチ底面に硬化範囲が認められ遺構の存在を確認した。

〈埋土〉 グレー味の強い10YR2/3黒褐色シルトを主体とする。壁際にしまりのない層（壁崩落層？）が堆積するもののほぼ単層である。

〈床面〉 床面の東側が土間のように非常に固くしまる。西側には認められなかったが、攪乱によって削平されてしまっている可能性がある。



第47図 RE062住居状遺構

〈壁〉外傾して立ち上がる。残存する壁の高さは30cmである。

〈土坑・柱穴〉東側の壁付近に10cm程度の小穴がみられた。小穴中央部に木片が残存していて、当初新期のものだと判断し記録を欠いてしまったが、本遺構に伴っていた可能性がある。

〈規模・形状・解釈〉北・西側を攪乱によって消失するが、形状は概ね長方形を呈するものと思われる。規模は南北6.0m以上、東西4.3mである。床面が非常にかたくしまり土間の可能性が想定されるため長方形プランの周辺に付属する遺構（柱穴など）を探したが、攪乱が多く把握できなかった。

〈重複〉R G 273溝跡と重複しこれを切る。

〈遺物〉土師器鉢（坏？）1点掲載した。非ロクロ整形で、口縁部ヨコナデ整形後、外面体部にハケメ調整を行う。（第92図、写真図版86）

〈時期〉出土遺物から古代以降、埋土の様相からは近世以降と判断される。

(2) 縄文時代

R E 063住居状遺構（第45・46図、写真図版37）

〈位置・検出状況〉2-D 7 i グリッドに位置する。④層上面よりベルトを設定して掘り下げたところ炭化物が広がる面が認められ、遺構の存在を確認した。

〈埋土〉5層下面に炭化物が面的にひろがり、本層より上が遺構埋土となると思われる。A-A'の5層下面は8層との接する付近から炭化物がみられなくなり、これ以西は8層（もしくは9層）まで遺構埋土に含まれる可能性がある。埋土はシルト層（1・3・5層）と砂～砂質シルト層（2・4層）との互層で、5層下面の傾斜に沿ってレンズ状に堆積する。色調は10YR5/6黄褐色を主とし、一部砂層は10YR5/3にぶい黄褐色となる。5層下位は、北東の旧河道側から水性堆積した様相が伺える。

〈床面・炭化物〉炭化物・礫・遺物が点在する5層下面が床面と考えられる。断面・炭化物の広がりから床面は壁から浅皿状に窪んでいるようである。特に硬化面は認められない。炭化物の広がりには3ヶ所で認められ、規模は長軸1.0～1.2m程度で不整形を呈する。堆積状況は上部に炭化物と焼土ブロック、下部はやや被熱しているように見える。しかし両者あわせても1～2cm程度の薄層のため、炉跡か否かの判断はできなかった。

〈炉跡〉上記の様に床面には被熱部分がみられるが、明確な炉跡は検出されていない。

〈壁〉床面から、緩やかに立ち上がる。

〈土坑・柱穴〉遺構内ほぼ中央、やや西よりに1基検出されている（pp 1）。開口部径50cm、床面からの深さは10cm程度である。埋土は10YR5/6黄褐色シルトが堆積し、下面に炭化物を含む。

〈規模・形状〉西側ははっきりしないものの、規模は断面形から径3.7m程度と思われる。床面から壁にかけて緩やかに立ち上がり上部を削平されている箇所もあるため、本来はもう少し広がっていたかもしれない。平面形から把握することはできなかったが形状は概ね円形であると思われる。

〈解釈〉R A 602住居跡と同様、浅く窪んだ土地（自然、人工かは不明）を床面とし、廃絶後埋土が薄層をなして堆積したものと思われる。しかし4層下面に礫が点在するもののR A 602住居跡のように各面での生活痕（炉跡・炭化物層など）は認められなかった。住居跡の可能性が高いが、はっきりした炉跡が確認できなかったため住居状とした。

〈重複〉R A 603住居跡と重複する可能性があるが、確認できなかった。

〈遺物〉 遺物・礫が散在するが、器形を復元できるものは出土していない。(写真図版99)

〈時期〉 埋土の様相、出土遺物より縄文時代晩期と推定される。

R E 064住居状遺構 (第47図、写真図版38)

〈位置・検出状況〉 A区、2-D14cグリッド付近に位置する。サブトレンチを設定し掘り下げたところ遺物が出土したため、遺構が存在する可能性を考え周囲を広げて確認した。

〈埋土〉 10YR5/6黄褐色砂質シルト層 (A-A' 1・3・5・6・10・11層) と10YR5/3にぶい黄褐色砂層 (A-A' 2・4・7・11・13層) が薄く互層となる。砂は下部に粗いものが溜まり、水性堆積と思われる。埋土中に炭化物は認められない。

〈床面・炭化物〉 A-A' 6・10～13層下面を床面とする。北側へ向かって若干低くなり、遺物・礫・炭化物が散在する。炭化物は4ヶ所のまとまりが認められ、最大260×150cm程度に広がる。これまでの遺構と同様、層厚1～2cm程度と薄く上部に炭化物、下部がわずかに被熱するように見える。

〈炉跡〉 検出されていない。

〈土坑・柱穴〉 検出されていない。

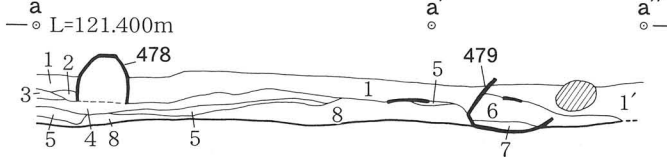
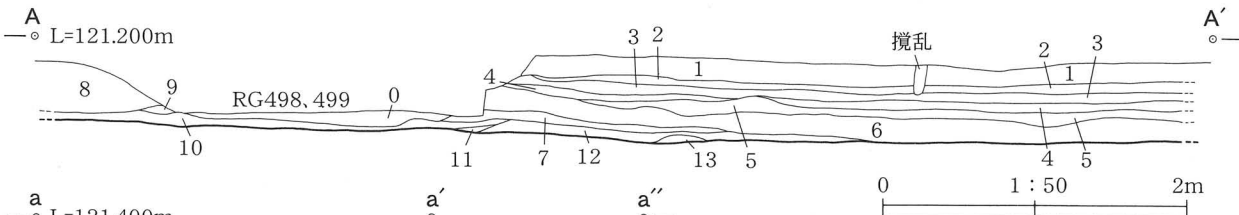
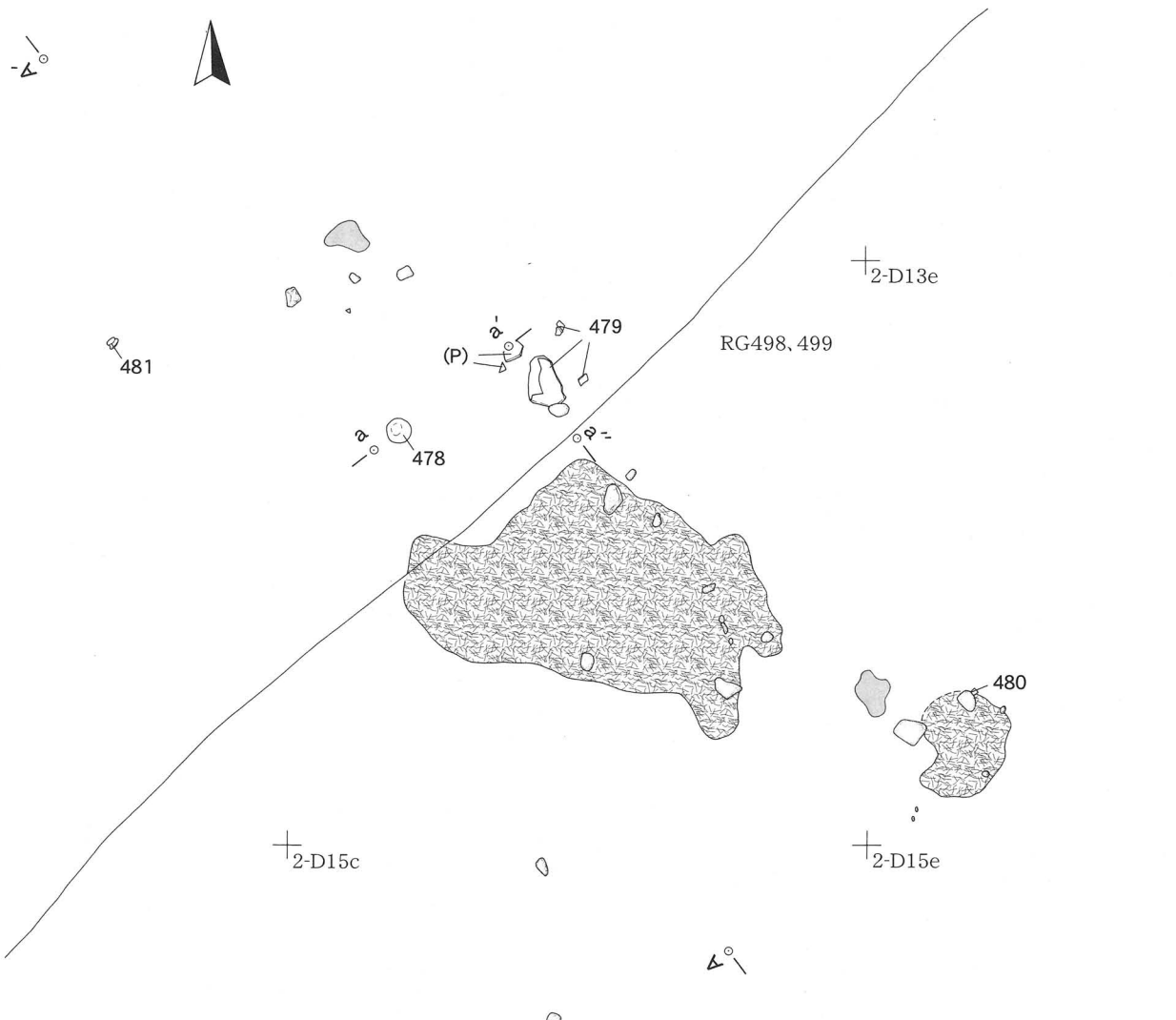
〈壁・規模・形状〉 確認できなかった。

〈解釈〉 壁の立ち上がり、柱穴など確認することはできなかったが、床面での遺物の散在状況、埋土の堆積状況など他の遺構 (R A 003・004) と類似していることから住居状遺構の可能性はある。しかし床面は他の遺構の様に浅皿状に窪むものではなく比較的平坦である。

〈重複〉 R G 498・499溝跡と重複しこれに切られる。

〈遺物〉 遺物・礫が散在する。478はa-a' 4層上面に倒位で、479はa-a' 8層上面に横位で出土している。(第107図、写真図版97)

〈時期〉 埋土の様相、出土遺物より縄文時代晩期と推定される。



- RE064住居状遺構 (a-a'')
1. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 8層と接する辺り10YR4/1褐色砂質シルト層はある。
 - 1'. 下面に入らない。
 2. 10YR5/3 にぶい黄褐色 あらい砂層。
 3. 10YR5/3 にぶい黄褐色 細かい砂層。
 4. 1層と似るが下面に10YR4/1褐色砂質シルトはいらざやや暗い？
 5. 10YR5/3 にぶい黄褐色 粗い砂。低いところほど粗い。
 6. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 下面に粗い砂入る。
 7. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト
 8. 10YR5/6 黄褐色 やや他層より粘土質。

- RE064住居状遺構 (A-A')
- 全体的にきれいな砂層。
0. RG498埋土または崩れてたまった土。
10YR5/6黄褐色シルトがラミナ状、若干10YR3/2黒褐色シルトはある。
 1. 10YR5/6 黄褐色シルト 他層よりややしまりあり、きれいな層。
 2. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂層。
 3. 1層に似る。
 4. 2層に似る。
 5. 10YR5/6 黄褐色シルト しまり粘性弱い。1・3層より砂質。暗い。
 6. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 暗さは5層と同じだが砂質。
 7. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂層 下面に粗い砂層たまる。(=a-a''3層)
 8. 10YR5/6 黄褐色 6層と似る。
 9. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂層 他の砂層より明るい。
 10. 10YR5/6 黄褐色シルト 5層に似る。
 11. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂層 やや粗い。
 12. (=a-a''4層)
 13. (=a-a''5層)

第48図 RE064住居状遺構

4. 土 坑

R D1116土坑 (第49図、写真図版40)

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 2 h グリッドに位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部で径2.1×1.9m、歪んだ円形を呈する。底面には凹凸が見られる。検出面からの深さは20cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として2つの層に分けられる。下部には地山ブロックを多く含む。

〈重複〉 R G487溝跡と重複し、これを切っている。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D1117土坑 (第49図、写真図版40)

〈位置・検出状況〉 D区、-1 F 25 d グリッドに位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 中央部が溝状の攪乱を受けている。開口部で径1.5×1.2m、歪んだ楕円形を呈する。底面は平坦で、壁は北半が直立、南半が外傾して立ち上がる。検出面からの深さは25cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として5つの層に分けられる。下部は焼土ブロック(3層)・焼土粒(4層)を含むが、上部は主体土のみの混入物のない層(2層)が堆積する。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 土師器甕底部を1点掲載した。外面体部下端が直立し、内面は丸みを帯びる平底となる。この他図化していないが、須恵器大甕の破片も出土している。(第93図、写真図版86)

〈時期〉 出土遺物より平安時代以降に位置づけられる。

R D1118土坑 (第49図、写真図版40)

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 11 b グリッドに位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 東端と西半の中央部が攪乱を受け消失する。規模は東西2.2m以上、南北1.4m、平面形は不整形を呈する。底面は西半に向かって丸みを帯び、壁はやや外傾して立ち上がる。検出面からの深さは最大48cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として3つの層に分けられる。下部層ほど地山ブロックの混入量が多い。堆積状況から自然に埋没したものと思われる。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 2層下部、底面に近いところから土師器坏が2点出土し、これを掲載した。いずれも内面ヘラミガキ後黒色処理される。251は丸底の底部から内彎して開き、明瞭な段を有する。底部ハケメ調整後ヘラナデで段を形成している。252は口縁部ヨコナデ、底部ハケメ調整が施され、両者の境が僅かに窪む。(第93図、写真図版86)

〈時期〉 出土遺物より奈良時代に推定される。

R D1119土坑 (第49図)

〈位置・検出状況〉 D区、-1 F 23 j グリッドに位置する。IVa層上位で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.35×0.6m、平面形は歪んだ楕円形を呈する。検出面からの深さは22cmである。

〈埋土〉 少量の10YR3/3暗褐色シルトを含む10YR2/2黒褐色シルトの単層である。

〈重複〉 R A 580 竪穴住居跡と重複し、これを切っている。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 R A 580 竪穴住居跡との重複関係から、8世紀以降に位置づけられる。ただし、遺物の出土がないため時期を特定することはできない。

R D 1120 土坑 (第49図、写真図版40)

〈位置・検出状況〉 D区、-1 F 24 f グリッドに位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.0×0.8m、平面形はやや歪んだ隅丸長方形を呈する。底面は丸みを帯び、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは35cmである。

〈埋土〉 少量の10YR3/3暗褐色シルトを含む10YR2/2黒褐色シルトの単層である。

〈重複〉 R D 1123 土坑と重複し、これを切っている。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1121 土坑 (第49図、写真図版41)

〈位置・検出状況〉 D区、-1 F 24 e グリッドに位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径0.9×0.5m、平面形はやや歪んだ楕円形を呈している。底面は東側がやや盛り上がっており、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは25cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として2つの層に分けられる。下部には地山ブロックを多く混入する。

〈重複〉 R D 1123 土坑と重複し、それを切っている。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1122 土坑 (第49図、写真図版41)

〈位置・検出状況〉 D区、-1 F 24 f グリッドに位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径0.85×0.5m、平面形は歪んだ楕円形を呈する。底面は丸みを帯び壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは25cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として3つの層に分けられる。下部に微量の地山ブロックを含むのみで、混入物が少ない。2層は攪乱層の可能性がある。

〈重複〉 R D 1123 土坑と重複し、これを切っている。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1123 土坑 (第49図、写真図版41)

〈位置・検出状況〉 D区、-1 F 23 e グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。

〈規模・形状〉 攪乱を受けていることと、他の遺構に切られているため北西部以外の周縁を消失する。北東

—南西軸は1.3m、北西—南東軸は推定1.6mである。平面形は隅丸正方形を呈していたものと推測される。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として4つの層に分けられる。地山ブロックを微量～少量含む上下の層（2・4層）に挟まれ焼土ブロックの混入する層（3層）が堆積する。

〈重複〉 R D1120～1122土坑と重複し、これらすべてに切られる。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D1124土坑（第50図、写真図版41）

〈位置・検出状況〉 D区、1 F13 l グリッド付近に位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状・埋土〉 南北幅約80cmの攪乱に大半を壊され南端部のみ残存する。開口部径は東西1.1cm以上、南北0.3cm以上で、形状は不明である。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルトが堆積しており、検出面からの深さは8cmである。攪乱のほぼ中央にも74×50cmの掘込みがみられ、埋土が同じことから、本遺構に伴うものと考えられる。攪乱の北側には掘込みが確認されないことから判断すると、一端平場を形成し遺構のほぼ中央部がさらに窪む形状を持つものと思われる。検出面から最深部の深さは23cmある。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 主体土が灰色味を帯び、周囲の攪乱のものと類似していることから、近現代の可能性はある。しかし出土遺物がなく決定できなかった。

R D1125土坑（第50図、写真図版41）

〈位置・検出状況〉 D区、1 F14mグリッド付近に位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.7×1.6mのほぼ円形を呈する。底面は凹凸が激しく中央がやや高くなる。壁は外傾して立ち上がり、検出面からの深さは8cmである。

〈埋土〉 10YR4/2灰黄褐色シルトを主体とし、地山ブロック、10YR2/2黒褐色シルトブロックが混入する。

〈重複〉 R A592竪穴住居跡と重複しこれを切る。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 重複関係から平安時代以降、埋土の様相から近現代の可能性はある。

R D1126土坑（第50図、写真図版42）

〈位置・検出状況〉 D区、1 F15kグリッド付近に位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.6×1.6mのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは10cmである。

〈埋土〉 10YR4/2灰黄褐色シルトを主体とし、地山ブロック、10YR2/2黒褐色シルトブロックが混入する。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 埋土の様相から近現代の可能性はある。

R D 1127土坑 (第50図、写真図版42)

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 16 i グリッド付近に位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径2.0×1.5mの楕円形を呈する。底面はやや中央部が高くなっており、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは8cmである。

〈埋土〉 10YR4/2 灰黄褐色シルトを主体とする。地山ブロック、10YR2/2 黒褐色シルトブロックが混入する。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 埋土の様相から近現代の可能性がある。

R D 1128土坑 (第50図、写真図版42)

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 19 h グリッド付近に位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.5×1.3m、やや楕円形を呈する。底面はほぼ平坦、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは11cmである。

〈埋土〉 地山ブロック、10YR2/2黒褐色シルトブロックを混入する10YR4/2灰黄褐色シルトを主体とする。

〈重複〉 R A 582 堅穴住居跡と重複しこれを切る。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 重複関係から奈良時代以降、埋土の様相から近現代の可能性がある。

R D 1129土坑 (第50図、写真図版42)

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 10 i グリッド付近に位置する。IVa層上面から検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.8×1.1mの楕円形を呈する。底面は南側がやや深くなっており、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは、最深24cm程度である。

〈埋土〉 10YR4/2 灰黄褐色シルトを主体とする。地山ブロック、10YR2/2 黒褐色シルトブロックを混入し、上部にやや多い。

〈重複〉 R A 581 堅穴住居跡と重複しこれより新しい。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 重複関係から奈良時代以降、埋土の様相から近現代の可能性がある。

R D 1130土坑 (第50図、写真図版42)

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 17 g グリッド付近に位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径2.0×1.5mの楕円形を呈する。底面にはやや凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは5cmである。

〈埋土〉 10YR4/2 灰黄褐色シルトを主体とし、地山ブロック、10YR2/2 黒褐色シルトブロックを微量含む。

〈重複〉 R A 582 堅穴住居跡と重複しこれより新しい。

〈遺物〉 非ロクロの土師器甕2点を掲載した。253は口縁部で、ハケメ後ヨコナデ調整される。254は頸部に段を持ち、調整は外面ハケメ、内面はヘラナデである。両者とも器形の復元は不可能であるが、胎土・器厚・色調など類似し同一個体の可能性が高い。重複遺構より流入したと思われる。(第93図、写真図版86)

〈時期〉 R A 581 堅穴住居との切りあい関係、出土遺物、埋土の様相から奈良時代以降で近現代の可能性も

考えられる。

R D 1131土坑（第50図、写真図版42）

〈位置・検出状況〉 D区、2 E 2 v グリッド付近に位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.4×1.1mの楕円形を呈する。底面は平坦で壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは18cmである。

〈埋土〉 10YR4/2灰黄褐色シルトを主体とし、地山ブロック、10YR2/2黒褐色シルトブロックを微量含む。

〈重複〉 R A 583 竪穴住居跡と重複しこれより新しい。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 重複関係から奈良時代以降、埋土の様相から近現代の可能性がある。

R D 1132土坑（第50図、写真図版42）

〈位置・検出状況〉 D区、1 E 16 y グリッド付近に位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 北側をR G 267溝跡によって消失するため全形を把握することはできないが、東西1.3m以上、南北1.1m以上、概ね円形～楕円形を呈するものと思われる。底面はほぼ平坦で、北側がやや低くなる。壁は外傾して立ち上がり、検出面からの深さは22cm程度である。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とする。地山ブロックを上部に少なく、下部に多く含む。また上部には炭化物が微量混入する。

〈重複〉 R G 267溝跡と重複しこれに切られる。

〈遺物〉 非ロクロ土師器甕の胴部、ロクロ調整土師器（内黒）の口縁体部が出土するが、いずれも小破片のため掲載していない。

〈時期〉 出土遺物より平安時代以降の年代が想定される。

R D 1133土坑（第50図、写真図版43）

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 18 d グリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 南西部をR G 267溝跡によって消失するため全形を把握することはできないが、南北1.6m以上、東西0.9m以上の円～楕円形を呈するものと思われる。底面はほぼ平坦、溝跡側（土坑中心部？）に向かって若干傾斜し低くなる。壁は外傾して立ち上がり、検出面からの深さは23cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、下部は地山ブロックが薄く層状に堆積する。

〈重複〉 R G 267溝跡と重複しこれに切られる。

〈遺物〉 掲載していないが、非ロクロの土師器甕胴部小破片が出土している。

〈時期〉 出土遺物より古代以降の年代が想定される。

R D 1134土坑（第50図、写真図版43）

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 19 e グリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 北東部をR G 267溝跡によって消失するため全形を把握することはできないが、南北1.2m以上、東西0.6m以上の円～楕円形を呈するものと思われる。底面は溝跡側（土坑中心部？）へ向かって若干傾斜し低くなっており、壁はやや外傾して立ち上がる。検出面からの深さは20cmである。南西壁際に開口部

径34×20cmの小穴が検出されたが、堆積状況を確認できず、本遺構に伴うものか不明である。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、地山ブロック、炭化物・焼土ブロックを混入する。

〈重複〉 R G 267溝跡と重複しこれに切られる。

〈遺物〉 非ロクロの土師器甕1点を掲載した。底部のみのため器形は不明である。外面はヘラナデ、底部はナデ調整されるが、内面の器壁は剥落してしまっている。(第93図、写真図版86)

〈時期〉 出土遺物より古代以降の年代が想定される。

R D 1135土坑 (第51図、写真図版43)

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 22 j グリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 西部をR G 267溝跡及び攪乱によって消失するため全形を把握することはできないが、北西-南東1.8m以上、北東-南西1.0m以上の円~楕円形を呈するものと思われる。底面は溝跡側(土坑中心部?)へ向かって若干傾斜し、壁はやや外傾して立ち上がる。検出面からの深さは25cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とする。下部は地山ブロックが薄い層状に堆積し、上部は斑状に混入する。

〈重複〉 R G 267溝跡と重複しこれに切られる。

〈遺物〉 小破片のため、不掲載としたが、非ロクロの土師器甕口縁部・体部が出土している。

〈時期〉 出土遺物より古代以降の年代が想定される。

R D 1136土坑 (第51図、写真図版43)

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 15 d グリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 東西2.3m、南北0.8mの細長い形状を呈する。底面はほぼ平坦、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは40cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルト主体とする。下部(4~6層)は混入物の少ない層で、比較的厚みを持つが、上部(1~3層)は主体土、地山ブロック、焼土ブロックが薄く何層も重なり堆積する。

〈重複〉 R G 489溝跡と重複しこれに切られる。

〈遺物〉 1~3層に遺物が含まれる。片面に敲痕みられる楕円形の礫を1点掲載した。この他、小破片であるが、非ロクロの土師器甕と坏(内黒)が出土している。(第93図、写真図版86)

〈時期〉 出土遺物より奈良時代以降の年代が想定される。

R D 1137土坑 (第51図、写真図版44)

〈位置・検出状況〉 D区、1 E 24 w グリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.2×1.2mの不整形を呈する。底面は浅皿状に窪む。検出面からの深さは12cmである。東壁際に開口部径32×30cm、深さ10cmの小穴を設ける。堆積状況を観察したところ、本遺構のものよりやや黒味が強いものの切りあいは確認できなかった。本遺構に伴う可能性がある。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とし地山ブロックを含む。上面に炭化物・焼土ブロックが散在する。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1138土坑（第51図、写真図版44）

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 18 l グリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 南北端を攪乱によって一部消失するものの、開口部径1.5×1.2mの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で壁はやや外傾して立ち上がる。検出面からの深さは8cmである。本遺構中央部やや西寄りの底面には南北24cm、東西20cm以上の焼土が形成されている。西半は掘りすぎて消失してしまった。焼成は弱く、被熱の及ぶ深さは1～2cm程度である。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、地山ブロックを少量混入する。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1139土坑（第51図、写真図版44）

〈位置・検出状況〉 F区、1 B 17 y グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.5×1.2m、平面形は不整形円形を呈する。底面はやや丸みを帯び、壁は外傾しながら立ち上がるが、東側は途中で一度角度を変える。検出面からの深さは28cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として、地山ブロックを含む層（2・3層）と含まない層（1層）に大別される。下部（2・3層）は地山ブロックの混入量によりさらに細分される。1層には下面には微量の焼土粒が混入している。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1140土坑（第51図、写真図版44）

〈位置・検出状況〉 C区、3 C 4 h グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径0.7m、平面形はほぼ円形を呈する。北半の壁はほぼ直立するが、南半は底面から緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは35cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として上下2層に分けられる。1層は10YR3/3暗褐色シルトと10YR4/4褐色シルトを少量含む。

〈重複〉 R G 491溝跡と重複し、これを切る。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 埋土の様相から中世の可能性がある。

R D 1141土坑（第51図、写真図版45）

〈位置・検出状況〉 C区、2 C 25 i グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.0×0.8m、平面形は楕円形を呈する。西壁はやや外傾して立ち上がるが、東壁は底面から緩やかな傾斜をもつ。検出面からの深さは10cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒色シルトに多量の10YR2/1黒褐色シルトを含む単層である。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1142土坑 (第51図、写真図版45)

〈位置・検出状況〉 C区、2 C 24 i に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.1×0.5m、平面形は楕円形を呈する。底面はやや凹凸がみられ、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは15cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として上下2層に分かれる。上部は10YR2/1黒色シルトを、下部は10YR3/3暗褐色シルトをそれぞれ多量に含む。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 非ロクロの土師器甕胴部と底部小破片が出土する。

〈時期〉 出土遺物より古代以降の年代が想定される。

R D 1143土坑 (第51図、写真図版45)

〈位置・検出状況〉 C区、3 C 1 d グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 南北1.6m、東西1.0m、平面形は不整な楕円形を呈する。底面の平坦部は狭く、すり鉢状を呈している。壁は南と西は直立気味だが、北と東はゆるやかに外傾する。検出面からの深さは37cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として3つの層に分けられる。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1144土坑 (第51図、写真図版45)

〈位置・検出状況〉 C区、2 C 23 i グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.3×0.6m、平面形は楕円形を呈する。底面は丸みを帯び北側へ片寄り、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは20cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として上下2つの層に分けられる。

〈重複〉 p1・p2と重複し、これらに切られている。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1145土坑 (第52図、写真図版46)

〈位置・検出状況〉 C区、2 C 17 h グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.0×0.8m、平面形は隅丸方形を呈する。底面は平坦で、壁は直立する。検出面からの深さは32cmである。

〈埋土〉 10YR3/3暗褐色シルトを多量に含む10YR2/2黒褐色シルトの単層である。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1146土坑（第52図、写真図版46）

〈位置・検出状況〉 C区、2 C 19 e グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.1×0.8m、南西角がやや張り出しているが、隅丸方形を呈する。底面は平坦で、壁は直立している。検出面からの深さは45cmである。

〈埋土〉 10YR4/4褐色シルトを少量含む10YR2/2黒褐色シルトの単層である。R D 1147土坑の埋土と類似する。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1147土坑（第52図、写真図版46）

〈位置・検出状況〉 C区、2 C 18 e グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.0×0.9m、平面形は隅丸方形を呈する。底面は平坦で壁は直立する。検出面からの深さが43cmである。

〈埋土〉 10YR4/4褐色シルトを少量含む10YR2/2黒褐色シルトの単層で、RD1146土坑の埋土と類似する。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1148土坑（第52図、写真図版46）

〈位置・検出状況〉 C区、2 C 18 j グリッドに位置する。IV層序面で検出された。

〈規模・形状〉 南半をRG200溝跡に切られ消失する。東西の最大幅は1.8m、南北は1.0m残存する。全形は不明だが、残存部から円形もしくは隅丸方形を呈するものと思われる。底面は平坦で壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは30cmである。

〈埋土〉 10YR3/3暗褐色シルトを多量に含む10YR2/2黒褐色シルトの単層で、水酸化鉄のシミが観察された。

〈重複〉 R G 200溝跡と重複し、これに切られている。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 R G 200溝跡との重複関係から、近世以前のものと推測される。

R D 1149土坑（第52図）

〈位置・検出状況〉 C区、2 C 15 c グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径0.9×0.7m、平面形は隅丸方形を呈する。底面は平坦で、壁は直立、検出面からの深さは40cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトの単層である。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1150土坑 (第52図、写真図版47)

〈位置・検出状況〉 C区、2 C 16 g グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 平面形は北東角がやや張り出す隅丸方形で、R D 1146土坑と類似する。開口部径1.6×1.0m、検出面からの深さは60cmとR D 1146土坑をひとまわり大きくした規模である。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体する。埋土の大半は10YR3/3暗褐色シルトと10YR4/4褐色シルトを混入する2層が占めるが、上部にこれらを含まない層(1層)が堆積する。2層はR D 1146土坑・R D 1147土坑の埋土と類似する。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1151土坑 (第52図、写真図版47)

〈位置・検出状況〉 C区、2 C 17 f グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.0×0.8m、平面形は隅丸方形を呈する。底面は平坦で壁は直立して立ち上がる。検出面からの深さは30cmである。

〈埋土〉 10YR3/3暗褐色シルトを多量に含む10YR2/2黒褐色シルトの単層である。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1152土坑 (第52図、写真図版47)

〈位置・検出状況〉 C区、2 C 18 f グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部で径1.1×1.0m、平面形は円形を呈する。底面は平坦で、壁は直立する。検出面からの深さは48cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として4つの層に分けられる。10YR4/4褐色シルトを含まない層(1層)と含む層(2～4層)に大別され、後者はその量で細分した。なお、1層には微量の小石が混入する。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1153土坑 (第52図)

〈位置・検出状況〉 C区、2 C 15 d グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.2m、平面形は円形を呈する。底面は平坦で壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは30cmである。

〈埋土〉 10YR4/4褐色シルトを極微量含む10YR2/2黒褐色シルトの単層である。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D1154土坑 (第52図、写真図版47)

〈位置・検出状況〉 C区、3 B 2 t グリッドに位置する。IV層上面検出された。

〈規模・形状〉 遺構の南半は攪乱を受け消失する。東西の最大幅は1.9m、南北は1.3m残存する。全形は不明だが、残存部は不整形を呈する。底面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。検出面からの深さは18cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルト主体、2つに分層される。下部(2層)には多量の地山ブロックを含む。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 埋土上部より出土してはじき坏2点を掲載した。258は、底部は丸みを帯び口縁部は直線的に開き、外面に段を2段有する。外面底部はヘラケズリ、内面はヘラミガキ後黒色処理される。258は底部と体部(口縁部)との境が明瞭でくの字状に開く。(第93図、写真図版86)

〈時期〉 出土遺物より奈良時代以降の年代が想定される。

R D1155土坑 (第52図)

〈位置・検出状況〉 E区、3 F 7 y グリッドに位置する。R G107溝跡の底面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.5×0.8mが残存、楕円形を呈する。底面は平坦でやや外傾しながら立ち上がる。溝跡の底面からの深さは7cmである。

〈埋土〉 10YR4/4褐色シルトを多量に含む10YR2/2黒褐色シルト層が堆積する。

〈重複〉 R G496溝跡と重複し、これに切られている。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 R G496溝跡より以前に構築されているが、時期の特定はできない。

R D1156土坑 (第53図、写真図版47)

〈位置・検出状況〉 B区、3-C10k グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.5×0.8m、平面形は長方形を呈する。底面はやや丸みを帯び、壁は外傾して立ち上がる。深さは検出面から35cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として上下2層に分けられる。上部(1層)は微量の10YR4/4褐色シルトを含み、ほぼ完形の土器が3点出土した。下部(2層)には10YR3/3暗褐色シルトが多量に混入する。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 1層中より遺物が多く出土している。土師器坏2点、須恵器坏2点、土師器甕1点、須恵器長頸瓶1点を掲載した。坏類は内湾してそのまま立ち上がる器形を持つ。土師器甕は頸部に段を有し、口縁部は短く開く。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整される。(第93図、写真図版86)

〈時期〉 出土遺物より平安時代に位置づけられる。

R D1157土坑 (第53図、写真図版48)

〈位置・検出状況〉 B区、3-C9f グリッドに位置する。IV層上面で黒褐色土の広がりを検出し、そこか

らやや下げると形状が明確となった。

〈規模・形状〉記録を怠り図示できなかつたが、西側の上部は攪乱を受ける。開口部径2.9×2.4m、南東角がややふくらんでいるが、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で壁はやや外傾して立ち上がる。検出面からの深さは75cmである。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトを主体として5つの層に分けられる。底面直上層（5層）と最上部層（1層）は10YR2/1黒色シルトを含み、これに地山ブロックが混入する層が挟まれる（2～4層）。2～4層は地山ブロックの混入量により細分した。

〈重複〉R A 595竪穴住居跡の煙道と重複し、これを切っている。

〈遺物〉埋土上部からの出土が多い。土師器坏5点、土師器甕2点を掲載した。265～268は、内面ヘラミガキ後黒色処理される土師器坏である。器形は内彎して立ち上がり、266・267は端部が僅かに外反する。一方269はロクロ調整のみの土師器坏で、器形は直線的に開く。また265体部に倒位で「木」とヘラ書される。270・271は土師器甕で口縁部は短く外反、内外面ともハケメ調整される。（第94図、写真図版86・87）

〈時期〉遺構の重複関係と出土遺物から平安時代9世紀後半に位置づけられる。

R D 1158土坑（第53図、写真図版48）

〈位置・検出状況〉B区、3-C 7 k グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉開口部径1.8×1.3m、平面形は長方形を呈する。底面はやや丸みを帯び壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは38cmである。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトを主体として3つの層に分けられる。底面直上は地山ブロックを含む層（3層）、その上に東側でのみ焼土ブロックを大量に含む層が確認される。さらに10YR2/1黒色シルトを多量に含む1層が堆積するが、これには土器片が混入する。以上の堆積状況から上部層（1・2層）は、人為的に埋められた可能性がある。

〈重複〉重複する遺構はない。

〈遺物〉西側壁際埋土上部より出土した土師器甕1点を掲載した（272）。頸部に段を持ち口縁部は外反する。底部は欠損するが、残存部から内面は丸みを帯びると思われる。外面は胴部下半がはヘラケズリ、外面上半及び内面はヘラケズリ調整される。（第94図、写真図版87）

〈時期〉出土遺物より奈良時代に位置づけられる。

R D 1159土坑（第53図、写真図版48）

〈位置・検出状況〉B区、3-C 2 c グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉開口部径2.8×2.6m、平面形は円形に近いが、底面では隅丸長方形となる。底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がるが、傾斜角度の変換点が2箇所確認される。検出面からの深さは90cmである。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトを主体として7つの層に分けられる。底面直上層（6層）には地山ブロックが含まれないが、上位層にはすべて混入する。東壁際には砂を多量に含む層が確認された。以上の堆積状況から、自然堆積に埋没したものと考えられる。

〈重複〉重複する遺構はない。

〈遺物〉7層から須恵器坏（293）が1点出土しこれを掲載した。底部から直線的に開き、体部中央付近で角度を変えくの字状を呈し口縁部はやや厚くなる。（第94図、写真図版87）

〈時期〉 出土遺物から9世紀後半に位置づけられる。

R D 1160土坑 (第53図、写真図版49)

〈位置・検出状況〉 B区、3-C 2 e グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.0×0.8m、平面形は楕円形を呈する。底面はやや丸みを帯び、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは35cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として2つの層に分けられる。両層とも地山ブロックを微量含み、2層は加えて10YR3/3暗褐色シルトが少量混入する。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明であるが、埋土の様相からは古代の可能性はある。

R D 1161土坑 (第53図、写真図版49)

〈位置・検出状況〉 B区、3-C 12 h グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.4×0.9m、平面形は楕円形を呈する。底面は平坦で壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは20cmである。

〈埋土〉 10YR3/3暗褐色シルトを多量に含む10YR2/2黒褐色シルトの単層で、良くしまる。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明であるが、埋土の様相からは古代の可能性はある。

R D 1162土坑 (第54図、写真図版49)

〈位置・検出状況〉 B区、3-C 7 e グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.7×1.3m、平面形は隅丸長方形を呈する。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトの単層で、10YR3/3暗褐色シルトを多量、10YR2/1黒色シルトを少量含む。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 土師器坏(274) 1点を掲載した。底部は丸みを帯び口縁部は直線的に開く。外面には沈線状の段を有する。調整は外面底部は一部ヘラケズリ、内面・外面口縁部はヘラミガキが施される。(第94図、写真図版87)

〈時期〉 出土遺物により奈良時代以降の年代が想定される。

R D 1163土坑 (第54図、写真図版49)

〈位置・検出状況〉 B区、3-C 8 h グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.4×0.8m、平面形は細長い形状を呈している。底面は狭く壁は外傾して立ちあがる。検出面からの深さは37cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として2つの層に分けられる。両層とも10YR3/3暗褐色シルトブロックを含み、下部は地山ブロックも混入する。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉非ロクロの土師器甕胴部とロクロの土師器口縁部が出土しているが、小破片のため掲載していない。

〈時期〉出土遺物から平安時代以降の年代が想定される。

R D 1164土坑 (第54図)

〈位置・検出状況〉B区、3-C13e グリッドに位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉東半は調査区外へと延びる。南北の最大幅は1.5m、東西は1.15m検出した。底面は平坦で壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは10cmである。

〈埋土〉10YR3/3暗褐色シルトを大量に含む10YR2/2黒褐色シルトの単層である。

〈重複〉D13と重複し、これに切られている。

〈遺物〉非ロクロの土師器甕胴部小破片が出土する。

〈時期〉出土遺物から古代以降の年代が想定される。

R D 1165土坑 (第54図、写真図版50)

〈位置・検出状況〉B区、南西3-C13i グリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈形状・規模〉R A 594 b 竪穴住居跡に切られ東部を消失する。規模は南北0.55m、東西は0.65m残存する。全形は確認できないが、楕円形を呈するものと推測される。検出面からの深さは45cmを測る。

〈埋土〉10YR3/3暗褐色砂質シルトが90%混入する10YR2/2黒褐色シルトの単層である。埋土中には礫(幅10cm、長さ20cm程度。)と235が混入しており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

〈重複〉R A 594 b 竪穴住居跡と重複し、これに切られる。

〈遺物〉土師器甕(275)を1点掲載した。口縁を西に向ける形で斜めに倒れ、礫に囲まれているという状態で出土している。甕を正立させ、そのまわりに礫を配した後、埋め戻したとも想定される(ただし、275が底部を全く欠き、体部も3分の1程度の残存率であることから、典型的な土器埋設遺構とは断定しがたい。ここではその可能性を指摘するにとどめ、後考にまちなたい)。器形は頸部がくの字状に屈曲し口縁部は短く開く。外面は胴部上半がハケメ後ヘラナデ、胴部下半がヘラケズリ、内面はハケメ調整、下部には一部細いヘラナデの痕跡がみられる。(第95図、写真図版87)

〈時期〉8世紀後半のものと考えられる。

R D 1166土坑 (第54図、写真図版50)

〈位置・検出状況〉A区、2-D16g グリッド付近に位置する。④層上面で検出された。

〈規模・形状〉開口部径1.8×1.1mの楕円形を呈する。底面は中心へ向かってゆるやかに窪む浅皿状を呈しており、壁はやや外傾して立ち上がる。検出面からの深さは20cm程度である。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトを主体とする。下部には地山ブロックを少量混入するが、上部は混入物のほとんどない黒味の強い層が堆積する。また上部は断面を削ると灰白色粒子が含まれるようなシャリっとした感触がみられたが、肉眼で観察できなかった。

〈重複〉A区319溝跡と重複し本遺構の方が新しい。

〈遺物〉本遺構北東側隅より馬の歯が、この反対側である南西隅からは礫が出土している。馬は右側を下にして北西を向いて埋葬したものと思われるが、歯以外の骨はすべて消失し、埋葬部位は不明である。(詳細は付編4)

〈時期〉 重複関係から平安時代以降の年代が想定される。

R D 1167土坑 (第54図、写真図版51)

〈位置・検出状況〉 A区、2-D14 g グリッド付近に位置する。④層上面で検出された。

〈規模・形状〉 本遺構の北半部はR A 601住居跡の埋土中に掘り込まれているが、調査時には重複を認識しておらず一部住居埋土まで掘りすすめてしまい、北西部および底面を消失する。規模は開口部径2.1×1.4m、不整楕円形を呈する。底面は凹凸を持ち、壁は外傾して立ちあがる。検出面からの深さは20～30cm程度である。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とする。地山ブロックの混入量は全体的に多く、特に下部には大量含む。

〈重複〉 R A 601住居跡と重複し本遺構の方が新しい。

〈遺物〉 土師器坏3点掲載した。296は内面黒色処理されている。摩滅しはつきりわからないが、外面体部下半がヘラケズリ再調整、内面はヘラミガキされている可能性が高い。277・278はロクロ調整のみの土師器坏である。(第95図、写真図版87)

〈時期〉 重複関係及び出土遺物から平安時代以降の年代が想定される。

R D 1168土坑 (第54図、写真図版51)

〈位置・検出状況〉 A区、2-D16 a グリッド付近に位置する。④層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径2.6×2.3mの北東壁がやや狭い隅丸方形を呈する。底面はほぼ平坦、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは約60cmである。

〈埋土〉 主体土は、茶味のある黒褐色シルト (10YR2/3) と黒味のある黒褐色シルト (10YR3/1) で構成され、5層以下はグライ化しているためグレー味が強い。埋土は北東から流入しており、底面には地山ブロックの多い層 (8～9層) が堆積するがその上 (5～7層) は混入物が少ない。上部 (1～4層) には礫・遺物 (土器) を含み、地山ブロックの粒径は細くなる。

〈重複〉 R G 499溝跡と重複しこれを切る。

〈遺物〉 279は埋土3～4層中より出土した。土師器坏3点を掲載した。299は体部が内彎して立ち上がる器形を持ち、内面ヘラミガキ後黒色処理される。また外面体部には2箇所ヘラ記号がみられる。289も黒色処理された土師器坏だが外面底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ再調整が施される。278はロクロ整形のみの土師器坏である。(第95図、写真図版87)

〈時期〉 重複関係及び出土遺物から平安時代に位置づけられる。

R D 1169土坑 (第55図、写真図版51)

〈位置・検出状況〉 A区、2-D10 g グリッド付近に位置する。R G 498溝跡の壁に黒褐色の掘り込みが認められたため周囲を検出したところ不整形なプラン (R D 1169・1170土坑) が確認された。

〈規模・形状〉 南側をR G 498溝跡によって消失、北側は重複遺構と同時に掘り下げたため断面でのみ立ち上がりを確認した。規模は、南北2.3m以上、東西1.6m、形状は不整楕円形を呈するものと思われる。底面は凹凸が見られ、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは30cm程度である。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、地山ブロックが比較的大きなブロックで上部に多く下部に少なく混入する。

〈重複〉 R G 498溝跡、R D 1170土坑と重複する。本遺構は土坑より新しいが、溝跡との新旧関係は不明である。

〈遺物〉 須恵器坏 (282) 1点を掲載した。法量を復元できないが、体部が内彎して立ち上がり、端部が短く外反する器形を持つと思われる。またR D 1170と本遺構とのいずれかに属すると思うものを3点掲載した。土師器坏2点、土師器甕1点である。283は底部ヘラケズリ再調整、内面は黒色処理される。(第95図、写真図版87)

〈時期〉 出土遺物より平安時代以降の年代が想定される。

R D 1170土坑 (第55図、写真図版51)

〈位置・検出状況〉 A区、2-D 9 g グリッド付近に位置する。上記のR D 1170土坑とともに④層上面で検出された。

〈規模・形状〉 南側を1169号土坑によって消失し、東側は調査区際でプランをはっきりと確認できなかったものの拡張後には続く遺構が検出されなかったため、概ね南北1.6m以上、東西2.0m程度の規模を持ち楕円形を呈するものと推定される。底面は中央に向かってゆるやかに浅皿状に窪み、南西部に2基の小穴を持つ。壁はほぼ直立する。検出面からの深さは約25cm、小穴の底面までは45cm程度である。

〈埋土〉 西半(1~4層)が10YR3/2黒褐色シルト、東半(5層以下)が10YR4/4褐色シルトを主体とする。埋土は東半の浅い方に流入した後、西半の小穴へ堆積する。両者とも地山ブロックの混入量は下部に多く上部に少ない。以上の堆積状況および、主体土の相違から南西部の小穴は別遺構の可能性はある。

〈重複〉 R D 1169・1171土坑と重複する。本遺構は前者より古いが、後者との新旧は不明である。

〈遺物〉 本遺構またはR D 1169土坑に属するもの3点を掲載、詳細はR D 1169土坑に記載した。

〈時期〉 出土遺物より平安時代以降の年代が想定される。

R D 1171土坑 (第55図、写真図版51)

〈位置・検出状況〉 A区、2-D 9 f グリッド付近に位置する。④層上面で本遺構西半部、径50cm程度円形のプランを確認、南北方向に半裁した。その後R D 1170土坑調査時に同遺構底面と壁面に黒褐色の広がりが見認められ、これが北西側の円形プランと連続したため、本遺構は東西に細長い形状を持つことが判明した。

〈規模・形状〉 R D 1170土坑と重複しており、上記の理由で同時的に精査したため東端上部を欠く。東西2.6m以上、南北の最大幅は68cm、中央部は幅がやや狭く50cm程度の細長い形状を呈する。底面は東側へ向かって低くなっており、高低差は最大20cm程度となる。南北壁は直立に近く、東壁は緩やかに立ち上がる。

〈埋土〉 東西端は検出状況の理由により埋土の記録を欠く。残存する埋土は、西側から流入しており、底面に黒味のある黒褐色シルト(5・6層)、上部には茶味のある黒褐色シルトが堆積する。

〈重複〉 R D 1170土坑と重複する。上記の検出状況のため平面・断面から新旧関係を把握することはできなかった。しかし、本遺構1層がR D 1169土坑埋土1層と似ているため、重複遺構の方が新しい可能性がある。

〈遺物〉 須恵器坏口縁部、非ロクロの土師器胴部が出土している。いずれも小破片のため掲載していない。

〈時期〉 出土遺物から平安時代以降の年代が想定される。

R D 1172土坑 (第55図、写真図版52)

〈位置・検出状況〉 A区、2-E 21 u グリッド付近に位置する。④層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径2.4×1.9m、不整円形を呈する。壁は外傾し、南東壁は傾斜角度が変わる。底面北西部には径120×80cmの楕円形の掘込みがみられる。検出面（5層下面）からの深さは30cm程度である。

〈埋土〉 10YR3/1黒褐色シルトを主体とし、グライ化しているため全体的にグレー味を帯びる。上部は茶味のある黒褐色シルト（10YR3/2）との互層となる。下部には地山ブロックを多く含む。調査の下手際で東西端の断面を欠くため本遺構と埋土と削平層の境界を把握できなかったが、埋土最上層（1層）は、溝跡1層と同様の③a層（削平層？）に相当すると思われる。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D1173土坑（第55図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 A区、2-D15 e グリッド付近に位置する。④層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径1.7×1.3cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは10cm程度である。

〈埋土〉 10YR4/4褐色シルトを主体とし、地山ブロックをやや多く含む。灰白色粒子の有無は確認できなかったが、全体的に白味を帯びる。

〈重複〉 R G501溝跡と重複しこれに切られる。

〈遺物〉 土師器高台杯1点、須恵器杯1点を掲載した。286は内面ヘラミガキ後黒色処理される。外面には倒位で「木」とヘラ書が確認できる。287は須恵器杯で体部から口縁部にかけて直線的に開く器形を持つ。（第95・106図、写真図版87・95）

〈時期〉 出土遺物から平安時代に位置づけられる。

R D1174土坑（第55図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 A区、2-D16 e グリッド付近に位置する。R G319溝跡調査中、底面から壁にかけて黒褐色土が広がり、周囲を再検出したところ遺構の存在が確認された。

〈規模・形状〉 北端がp9と重複するため消失するが、東西1.1m、南北0.8m以上の楕円形を呈する。検出面からの深さは20cm程度である。底面は平坦、ほぼ中央部に径40×10cm、深さ10cm程度の小穴を設ける。壁はやや外傾して立ち上がる。

〈埋土〉 10YR3/2黒褐色シルトを主体とする。下部（2・3層）には地山ブロックを多く含み、上部（1層）は混入物の少ないきれいな層が堆積する。灰白色粒子の有無は確認できなかった。

〈重複〉 R G319溝跡、p2・9と重複する。本遺構はp2よりは新しく、その他の遺構との新旧関係は不明である。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 出土遺物がなく不明である。

R D1175土坑（第55図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 A区、3-E2 r グリッド付近に位置する。④層上面で検出された。

〈規模・形状〉 開口部径2.3×1.6cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦、壁は階段状に開いて立ち上が

る。検出面からの深さは60cmである。

〈埋土〉 黒褐色土を主体とする。上部は茶味（1～4層）が強いが、下部（5層以下）はグライ化しているためグレー味が強い。底面直上層（7・8層）は主体土と地山土が帯状に堆積し、水性堆積の可能性が高い。その上位層には礫を含み地山ブロックが大きい斑状に混入、さらに上位には粘土質の層、地山砂を多く含む層が堆積する。埋土最上層には灰白色粒子を含む。

〈重複〉 R G 323溝跡と重複しこれに切られる。

〈遺物〉 須恵器は坏底部（糸切り）と瓶類胴部、土師器は内黒の坏体部が出土する。いずれも小破片である。

〈時期〉 重複関係及び出土遺物から、平安時代以降の年代が想定される。

R D 1176土坑（第56図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 A区拡張部、2-D13hグリッド付近に位置する。④層上面で検出された。

〈規模・形状〉 西端は拡張前の調査区内となるが、本遺構底面より検出面が低く消失している。規模は東西3.7m以上、南北2.3m、楕円形を呈するものと推定される。壁から底面にかけて浅皿状に窪み、検出面からの深さは5cm程度である。

〈埋土〉 10YR3/3暗褐色シルトを主体とする。

〈重複〉 R D 1179土坑と重複するが新旧関係は不明である。

〈遺物〉 須恵器瓶類胴部小破片が出土する。

〈時期〉 出土遺物から平安時代以降の年代が想定される。

R D 1177土坑（第56図、写真図版53）

〈位置・検出状況〉 A区拡張部、2-D15iグリッド付近に位置する。④層上面で検出された。

〈規模・形状〉 西半はR G 323溝跡に切れ消失する。開口部径東西1.0m以上、南北1.8m、形状は不整の円形または楕円形と推定される。底面はやや凹凸を持ち壁は外傾、検出面からの深さは10cm程である。

〈埋土〉 10YR3/3暗褐色シルトを主体とする。

〈重複〉 R D 1178土坑と重複し、これに切られる。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 出土遺物がなく不明である。

R D 1178土坑（第56図、写真図版53）

〈位置・検出状況〉 A区拡張部、2-D15iグリッド付近に位置する。④層上面で検出された。

〈規模・形状〉 北側は径0.5mの円形、南側は南北0.7m、東西幅0.4mの楕円形を呈する。全長は1.2mとなる。北側の円形プランの北壁は直立し南壁は外傾して立ち上がり、楕円形状の底面へと続く。この底面も南側に向かって緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは円形の方が30cm、北側の楕円形プランが最深10cm程度である。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とする。上部層（4層）は円形プランから楕円形プランまで連続して堆積している。円形の方には礫を含み、柱の根固め石のようであるが、本遺構北側には溝が走り、それ以外は調査区外となるので詳細は不明である。

〈重複〉 R D 1177土坑と重複しこれを切る。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 出土遺物がなく不明である。

R D 1179土坑 (第56図、写真図版52)

〈位置・検出状況〉 A区拡張部、2-D14hグリッド付近に位置する。R D 1176土坑底面に黒色土の広がりが検出された。

〈規模・形状〉 開口部径0.9×0.8cmの略円形を呈する。断面形状は浅皿状となり底面にはやや凹凸がある。検出面からの深さは10cm程度である。

〈埋土〉 10YR3/3暗褐色シルトの単層である。

〈重複〉 R D 1176土坑と重複するが新旧関係は不明である。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R D 1180土坑 (第56図、写真図版53)

〈位置・検出状況〉 A区、2-D10eグリッド付近に位置する。縄文時代の遺構の有無を確認するため④層を掘り下げていったところ礫が集中している箇所が検出された。この礫が下に潜り込んでいたため追いかけたところ本遺構を発見した。

〈規模・形状〉 開口部径2.5×1.7mの楕円形を呈する。底面は平坦で壁はほぼ直立する。検出面からの深さは約25cmである。

〈埋土〉 南側から礫が流入し、その上に地山がグライ化した5B5/1青灰色粘土、砂質シルトの順に堆積する。

〈重複〉 重複するその他の遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 埋土の様相から縄文時代晩期以降の年代が想定される。

5. 焼土遺構

R F 065焼土遺構 (第56図、写真図版53)

〈位置・検出状況〉 E区、3G3dグリッドに位置する。IV層上面で検出された。

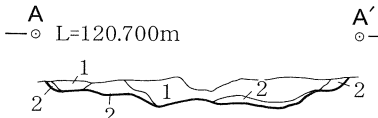
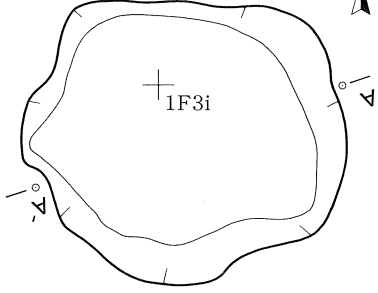
〈規模・形状〉 南側は攪乱を受け消失する。焼土Aは東西40cmで、南北は25cmが残存し、不整形を呈する。検出時での色調の違いにより焼土Aと焼土Bとした。焼土Bは直径13cmの円形である。焼土の厚さはともに8cmである。焼土の下には暗褐色シルト層が堆積しているが、これには焼土A・B起源と推測される焼土粒が混入しており、この層もあわせれば、深さは13cmとなる。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

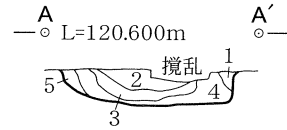
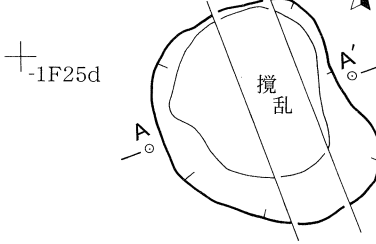
RD1116



RD1116土坑 (A-A')

1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。
10YR2/1 黒色シルト5%、10YR3/3 暗褐色シルト30%。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト40%。

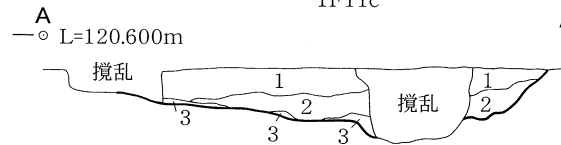
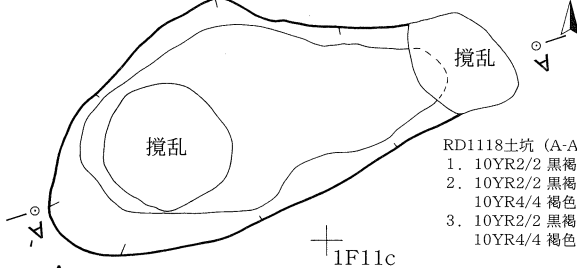
RD1117



RD1117土坑 (A-A')

1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト80%。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや強い。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
10YR3/3 暗褐色シルト20%、2.5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック60%。
4. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR3/3 暗褐色シルト60%、焼土粒1%。
5. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR3/3 暗褐色シルト60%。
10YR4/4 褐色シルト5%。

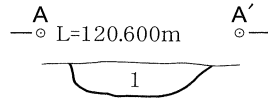
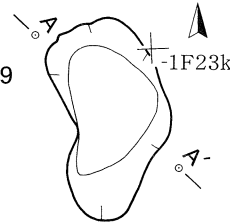
RD1118



RD1118土坑 (A-A')

1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性弱い。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト5%。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト80%。

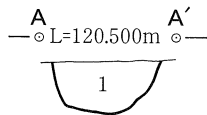
RD1119



RD1119土坑 (A-A')

1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
10YR3/3 暗褐色シルト30%。

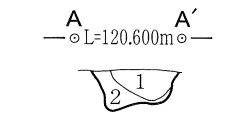
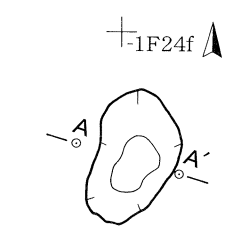
RD1120



RD1120土坑 (A-A')

1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR3/3 暗褐色シルト40%。

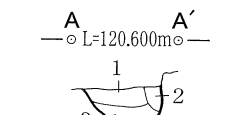
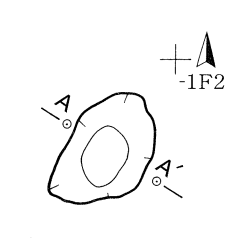
RD1121



RD1121土坑 (A-A')

1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性やや弱い。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト80%。

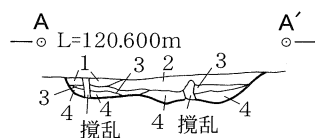
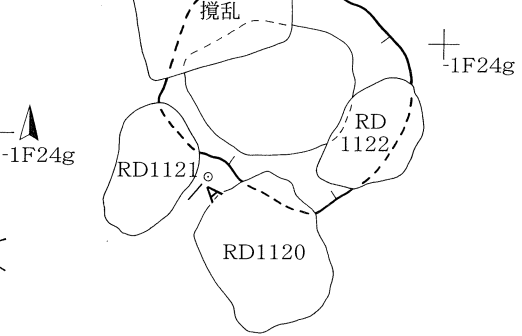
RD1122



RD1122土坑 (A-A')

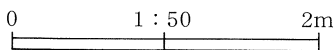
1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
10YR4/4 褐色シルト90%。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性やや弱い。
10YR4/4 褐色シルト5%。

RD1123

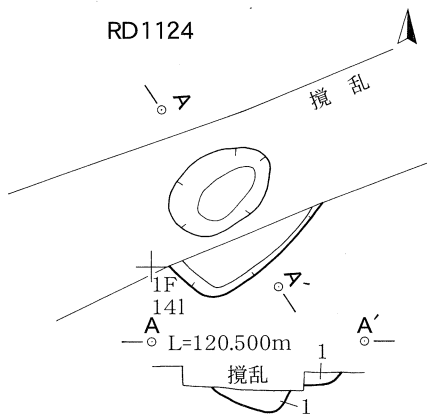


RD1123土坑 (A-A')

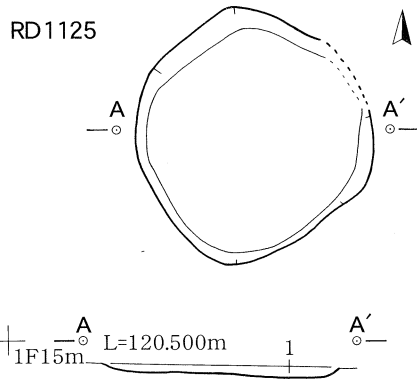
1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト80%。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト10%。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
焼土(5YR7/8 橙色土)2%、10YR3/3 暗褐色シルト20%。
4. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト5%。



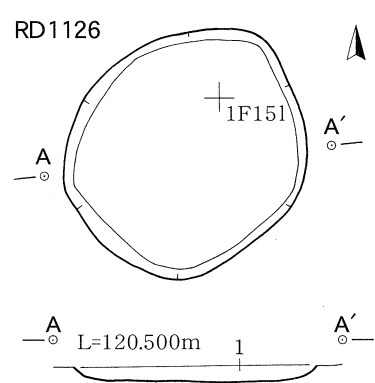
第49図 RD土坑(1)



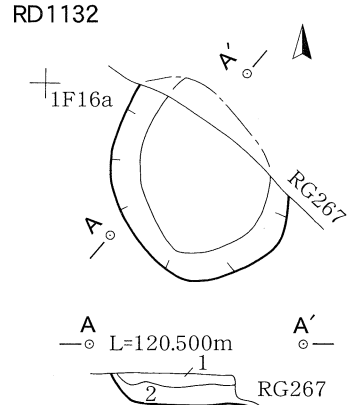
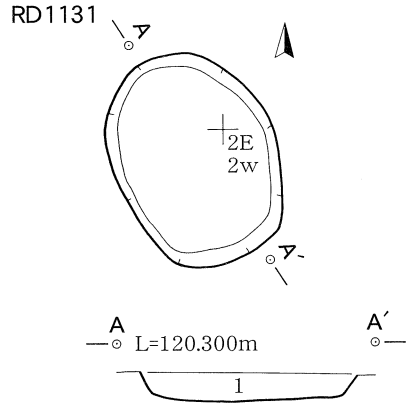
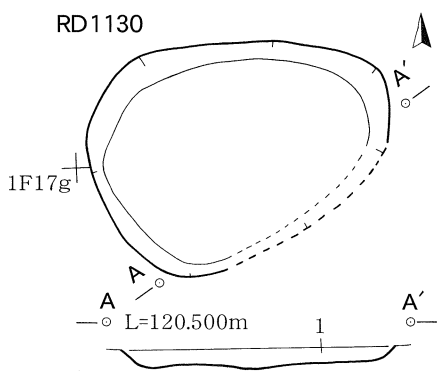
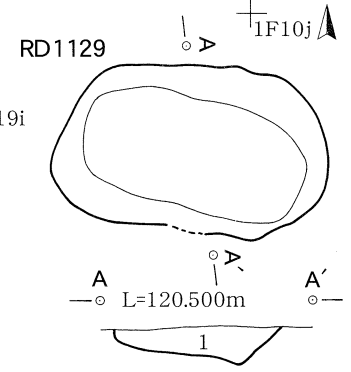
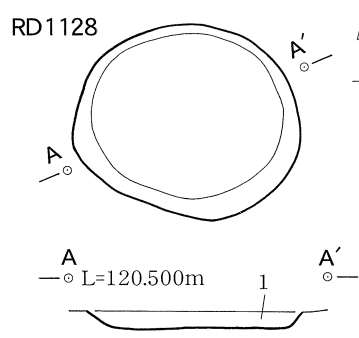
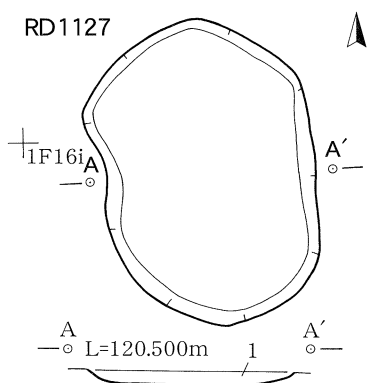
RD1124土坑 (A-A')
 1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト しまりややあり。
 粘性やや弱い。地山ブロック微量。



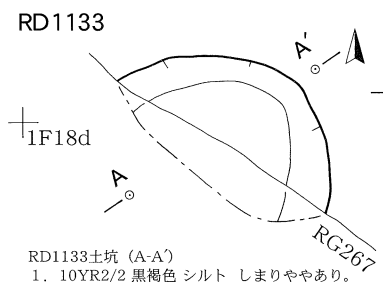
RD1125土坑 (A-A')
 1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 地山ブロック微量。



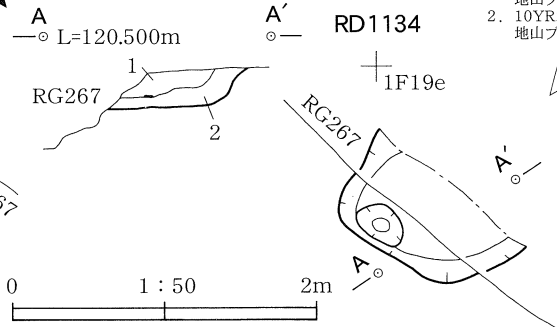
RD1126~1131土坑 (A-A')
 1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
 地山ブロック、10YR4/2 灰黄褐色シルト、
 10YR2/2 黒褐色シルトの混土。10YR4/2 灰黄褐色大量。



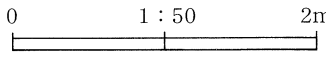
RD1132土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色シルト
 しまりややあり。
 地山ブロック・炭化物微量。
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり。
 地山ブロックやや多量。



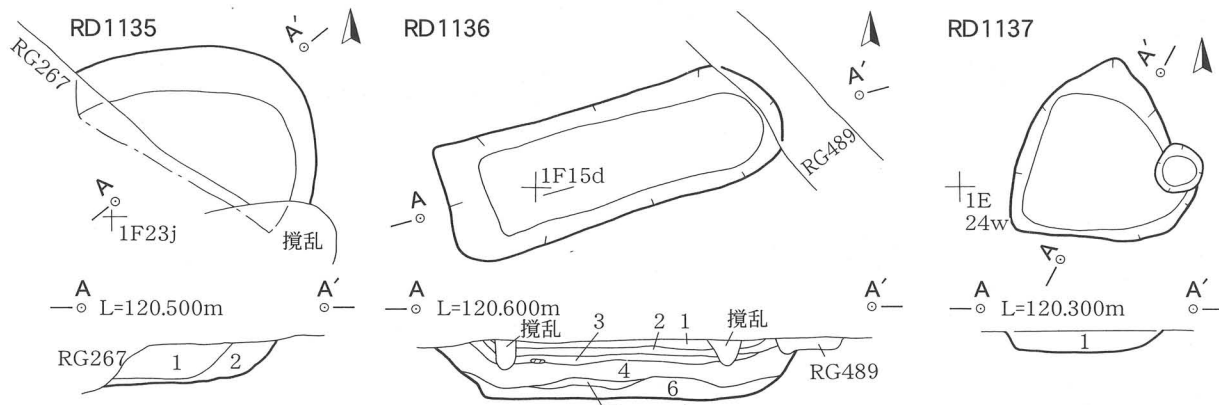
RD1133土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり。
 地山ブロック極微量。
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり。
 地山ブロックが薄くレンズ状に堆積。
 炭化物・焼土ブロック微量。



RD1134土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色シルト
 しまりややあり。地山ブロック少量。
 炭化物・焼土ブロック微量。



第50図 RD土坑(2)

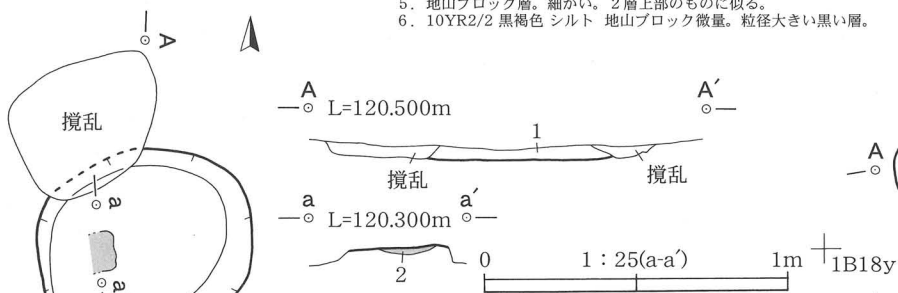


RD1135土坑 (A-A)
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロックやや多量。全体に斑状に混じる。
 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロックレンズ状に細かいブロックで入る。

RD1136土坑 (A-A)
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック微量。
 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト 下部1層上部地山ブロック層 (細かい) が薄く堆積。
 3. 10YR2/2 黒褐色 シルト 下面から1層、地山ブロック層、焼土ブロック層が薄く層状に堆積。
 4. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック・炭化物・焼土ブロック微量。
 5. 地山ブロック層。細かい。2層上部のものに似る。
 6. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック微量。粒径大きい黒い層。

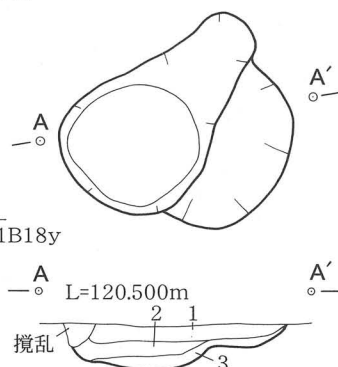
RD1137土坑 (A-A)
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロックやや多量。上面に炭化物・焼土ブロックのる。

RD1138



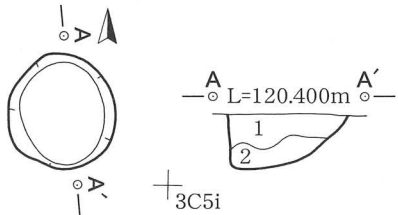
RD1138土坑 (A-A'-a-a')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりよい。地山ブロック少量。
 2. 2.5YR5/8 明赤褐色 シルト 焼土層。

RD1139



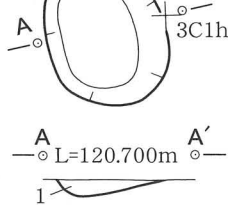
RD1139土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややなし、粘性やや弱い。2層との境付近に焼土ブロック含む。
 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややなし、粘性やや弱い。
 3. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト20%。

RD1140



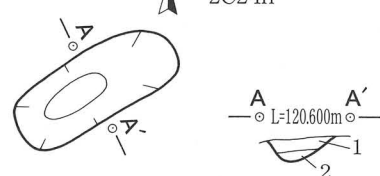
RD1140土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりあり、粘性強い。10YR3/3 暗褐色シルト・10YR4/4 褐色シルト各30%。
 2. 10YR3/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや強い。

RD1141



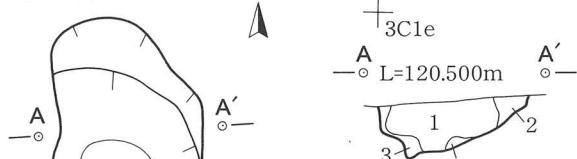
RD1141土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや強い。10YR2/1 黒色シルト90%。

RD1142



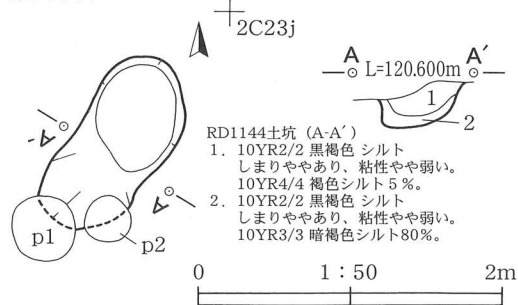
RD1142土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりなし、粘性やや強い。10YR2/1 黒色シルト60%・10YR4/4 褐色シルト10%。
 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややなし、粘性やや強い。10YR3/3 暗褐色シルト60%。

RD1143



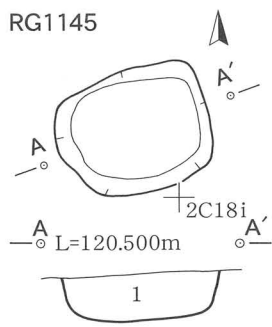
RD1143土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや強い。
 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR3/3 暗褐色シルト80%。
 3. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりあり、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト5%。

RD1144

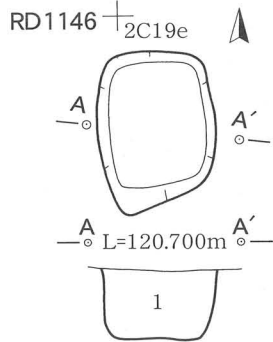


RD1144土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト5%。
 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR3/3 暗褐色シルト80%。

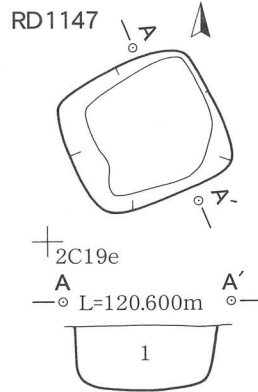
第51図 RD土坑(3)



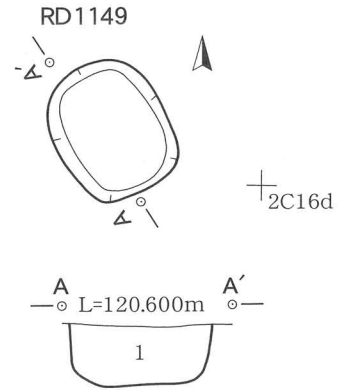
RD1145土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりあり、粘性弱い。
 10YR3/3黒褐色シルト80%。
 10YR4/4褐色シルトブロック状で10%。



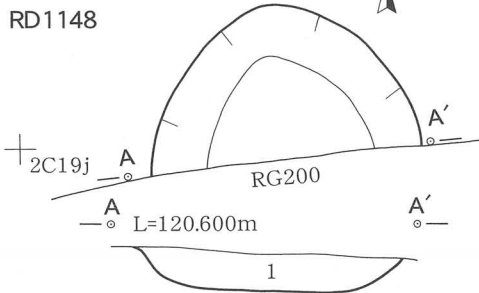
RD1146土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
 10YR4/4褐色シルト20%。



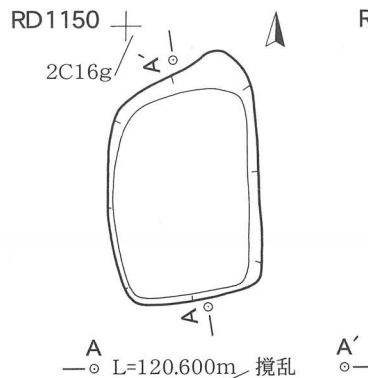
RD1147土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR4/4褐色シルト20%。



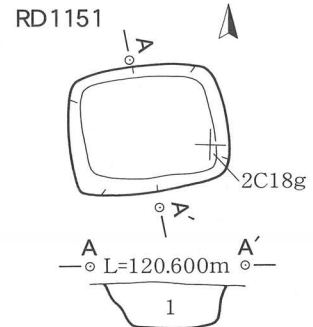
RD1149土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややなし、粘性弱い。



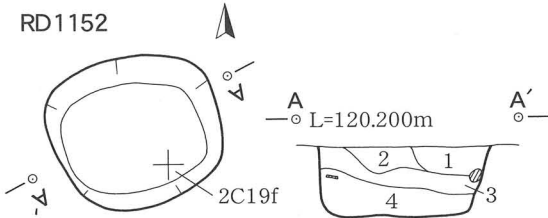
RD1148土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
 10YR3/3 暗褐色 シルト80%。水酸化鉄のシミ微量。



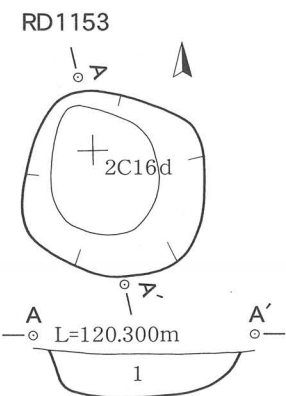
RD1150土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性弱い。
 10YR4/4 褐色シルト20%10YR3/3暗褐色シルト60%。



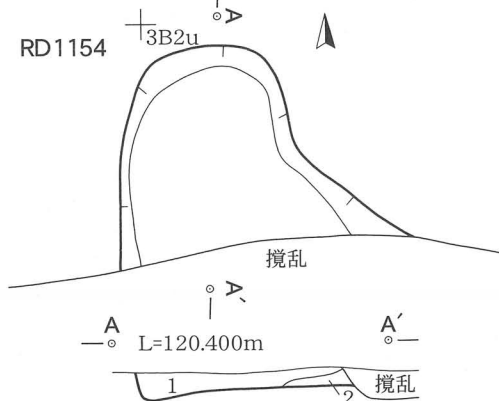
RD1151土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR3/3 暗褐色シルト90%。
 10YR4/4 褐色シルト5%。



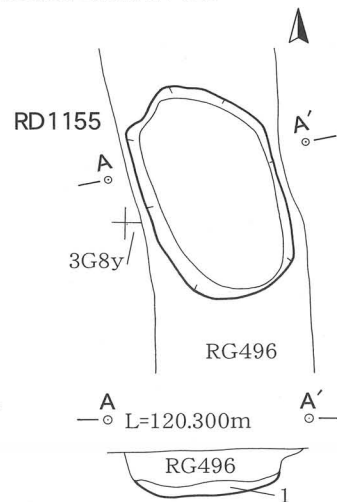
RD1152土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性弱い。小石微量。
 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性弱い。10YR4/4褐色シルト80%。
 3. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性弱い。10YR4/4褐色シルト10%。
 4. 10YR3/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性弱い。10YR4/4褐色シルト40%。



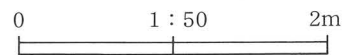
RD1153土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりあり、粘性やや強い。10YR4/4褐色シルト1%。



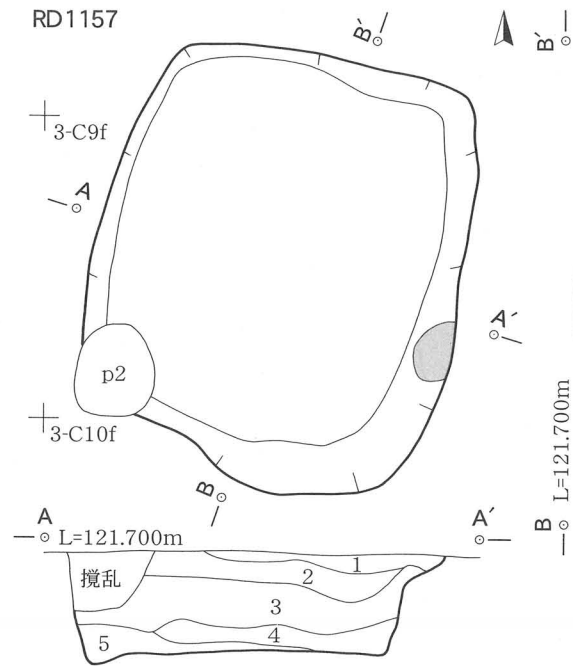
RD1154土坑 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや強い。
 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや強い。10YR4/4 褐色シルト80%。



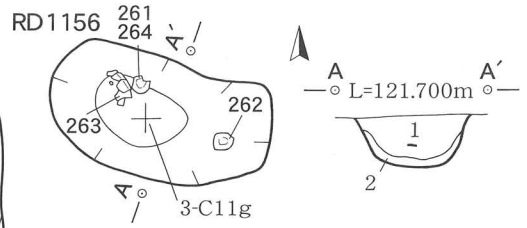
RD1155溝跡 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR4/4褐色シルト80%。



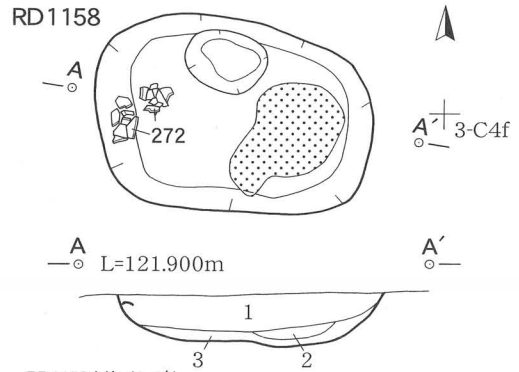
第52図 RD土坑(4)



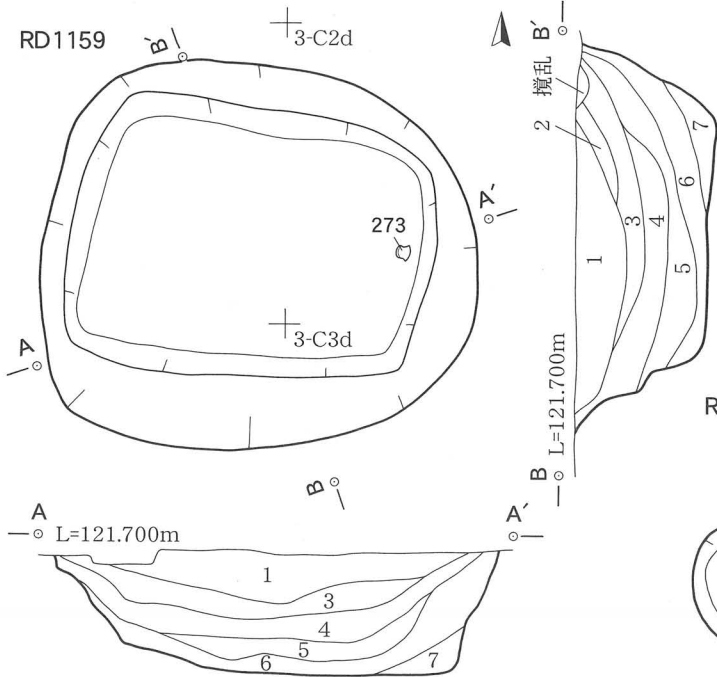
- RD1157土坑 (A-A'·B-B')
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりやあり、粘性やや弱い。10YR2/1 黒色シルト90%。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト70%。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト50%。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト30%。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR2/1 黒色シルト10%。
10YR4/4 褐色シルト5%。



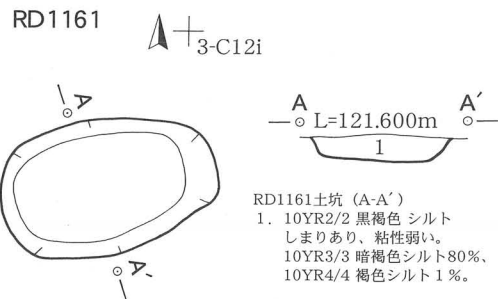
- RD1156土坑 (A-A')
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
10YR4/4 褐色シルト5%混入。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR3/4 褐色シルト80%混入。



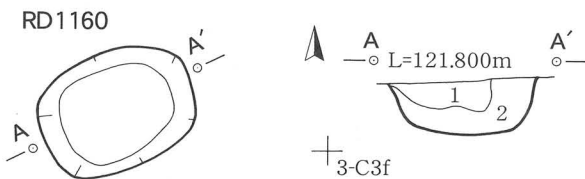
- RD1158土坑 (A-A')
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性やや弱い。
10YR2/1 黒色シルト80%、10YR4/4 褐色シルト1%。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性やや弱い。
5YR4/8 赤褐色土50%、10YR2/1 黒色シルト10%。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性やや弱い。
10YR4/4 褐色土10%。



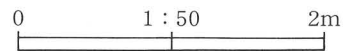
- RD1159土坑 (A-A'·B-B')
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト5%。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト30%。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR2/1 黒色シルト20%、10YR4/4 褐色シルト5%。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト5%、10YR3/3 暗褐色シルト70%。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト20%、10YR3/3 暗褐色シルト50%。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR3/3 暗褐色シルト90%。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性弱い。
10YR4/4 褐色砂 10YR3/3 暗褐色サンド60%。



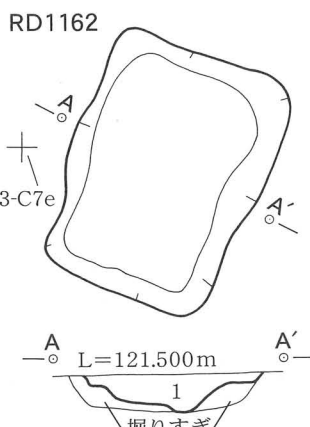
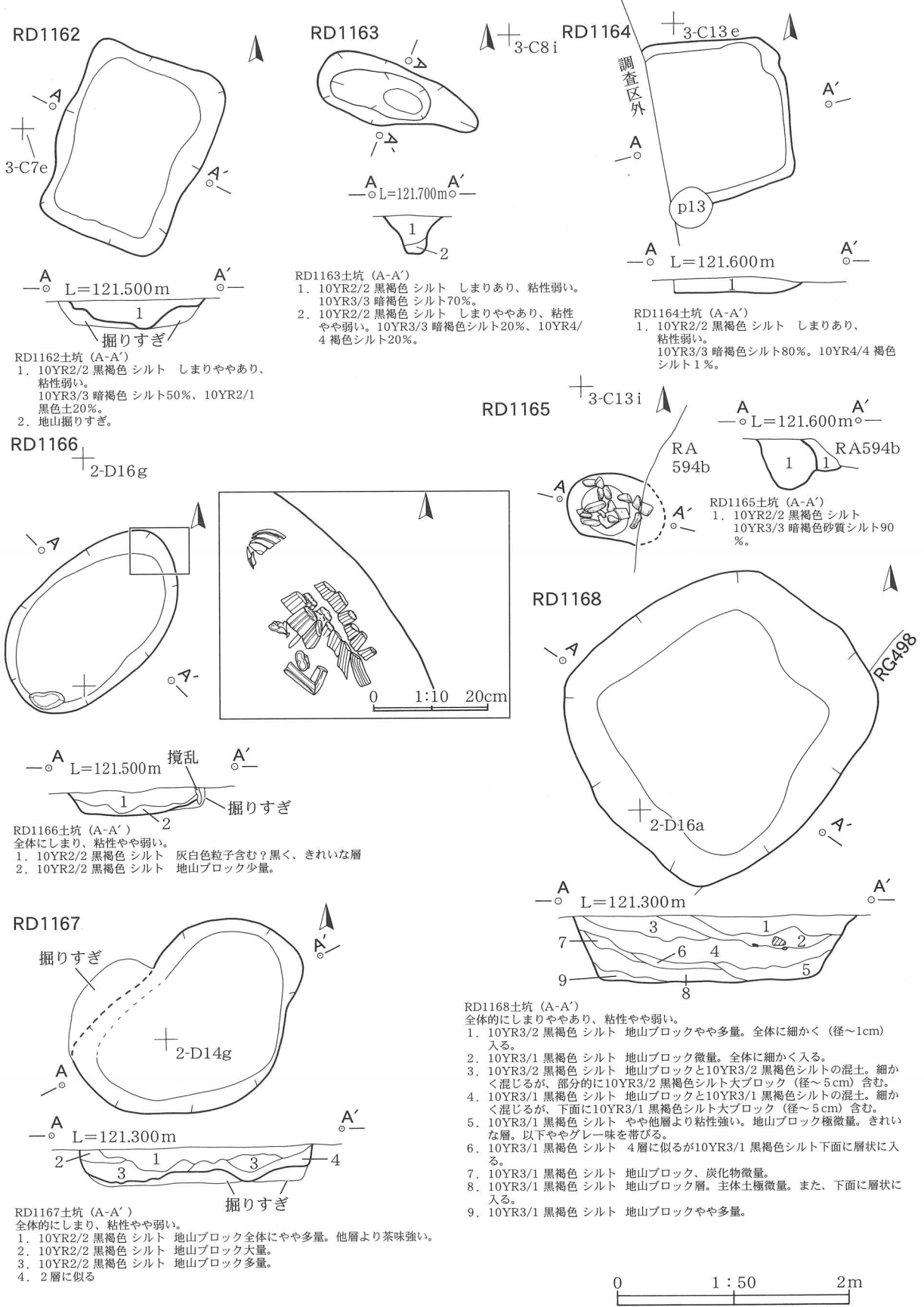
- RD1161土坑 (A-A')
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりやあり、粘性弱い。
10YR3/3 暗褐色シルト80%、
10YR4/4 褐色シルト1%。



- RD1160土坑 (A-A')
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性弱い。
10YR4/4 褐色シルト5%。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
10YR3/3 暗褐色シルト50%、10YR4/4 褐色シルト5%。



第53図 RD土坑(5)

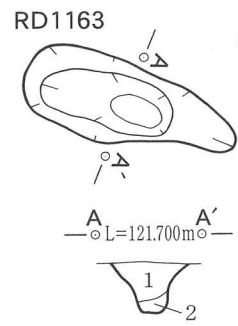


RD1162土坑 (A-A')

1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。

10YR3/3 暗褐色シルト50%、10YR2/1 黒色土20%。

2. 地山掘りすぎ。

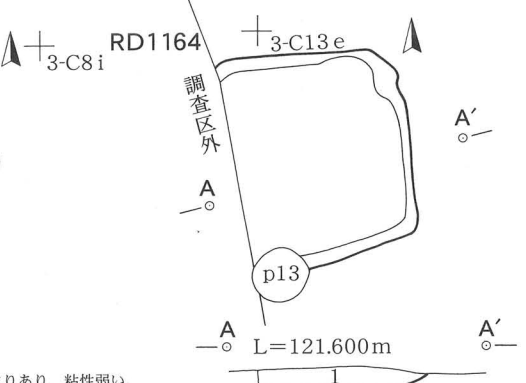


RD1163土坑 (A-A')

1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。

10YR3/3 暗褐色シルト70%。

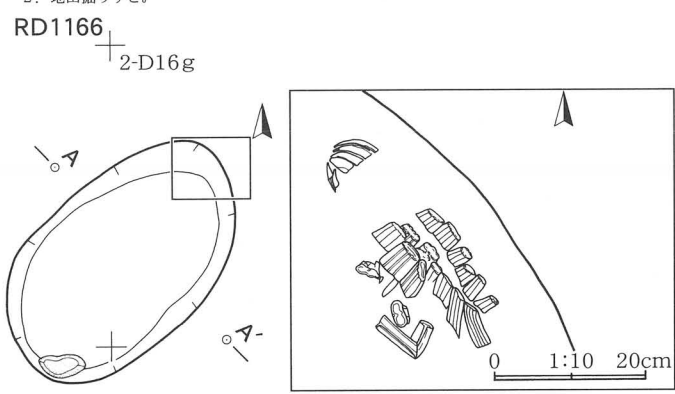
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR3/3 暗褐色シルト20%、10YR4/4 褐色シルト20%。



RD1164土坑 (A-A')

1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。

10YR3/3 暗褐色シルト80%。10YR4/4 褐色シルト1%。

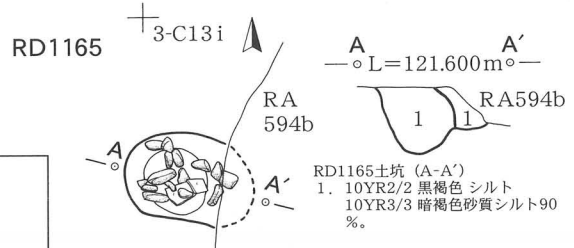


RD1166土坑 (A-A')

全体的にしまり、粘性やや弱い。

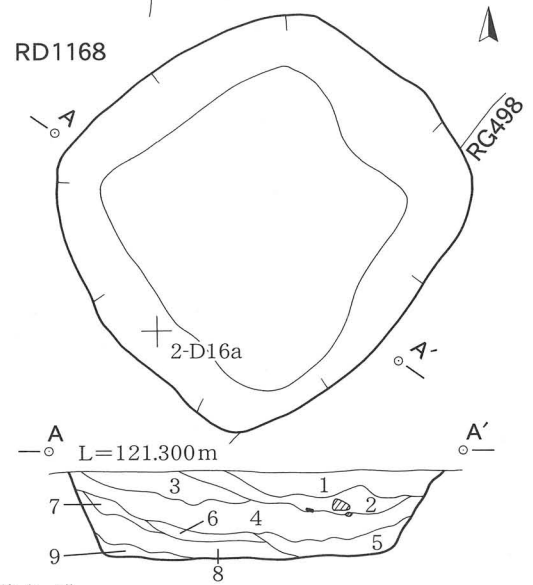
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 灰白色粒子含む? 黒く、きれいな層

2. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック少量。



RD1165土坑 (A-A')

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR3/3 暗褐色砂質シルト90%。



RD1168土坑 (A-A')

全体的にしまりややあり、粘性やや弱い。

1. 10YR3/2 黒褐色シルト 地山ブロックやや多量。全体に細かく (径~1cm) 入る。

2. 10YR3/1 黒褐色シルト 地山ブロック微量。全体に細かく入る。

3. 10YR3/2 黒褐色シルト 地山ブロックと10YR3/2 黒褐色シルトの混土。細かく混じるが、部分的に10YR3/2 黒褐色シルト大ブロック (径~5cm) 含む。

4. 10YR3/1 黒褐色シルト 地山ブロックと10YR3/1 黒褐色シルトの混土。細かく混じるが、下面に10YR3/1 黒褐色シルト大ブロック (径~5cm) 含む。

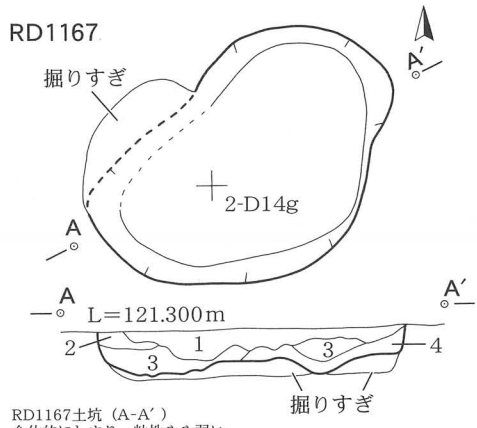
5. 10YR3/1 黒褐色シルト やや他層より粘性強い。地山ブロック極微量。きれいな層。以下ややグレー味を帯びる。

6. 10YR3/1 黒褐色シルト 4層に似るが10YR3/1 黒褐色シルト下面に層状に入る。

7. 10YR3/1 黒褐色シルト 地山ブロック、炭化物微量。

8. 10YR3/1 黒褐色シルト 地山ブロック層。主体土極微量。また、下面に層状に入る。

9. 10YR3/1 黒褐色シルト 地山ブロックやや多量。



RD1167土坑 (A-A')

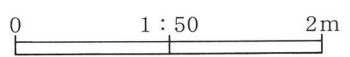
全体的にしまり、粘性やや弱い。

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック全体にやや多量。他層より茶味強い。

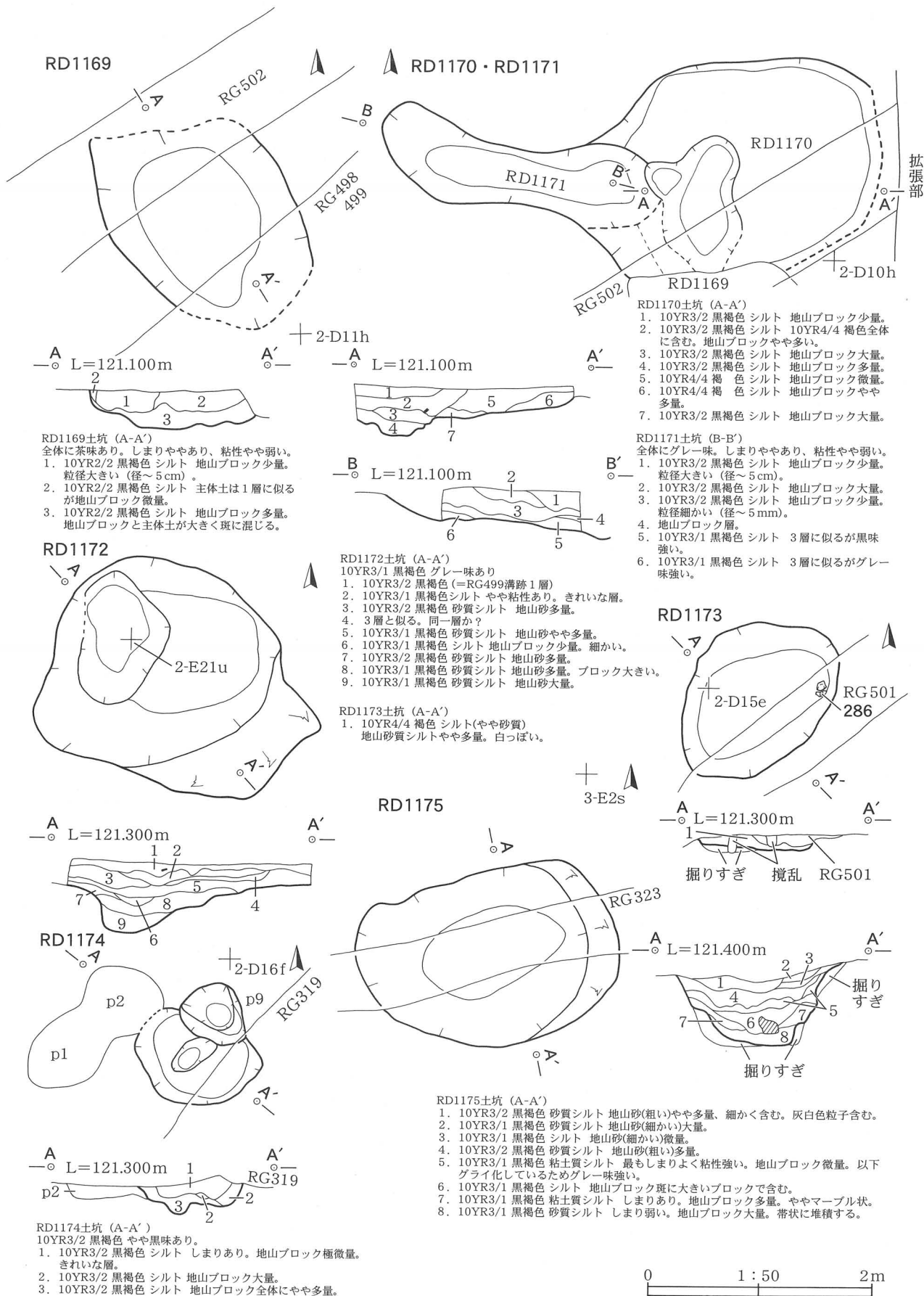
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック大量。

3. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック多量。

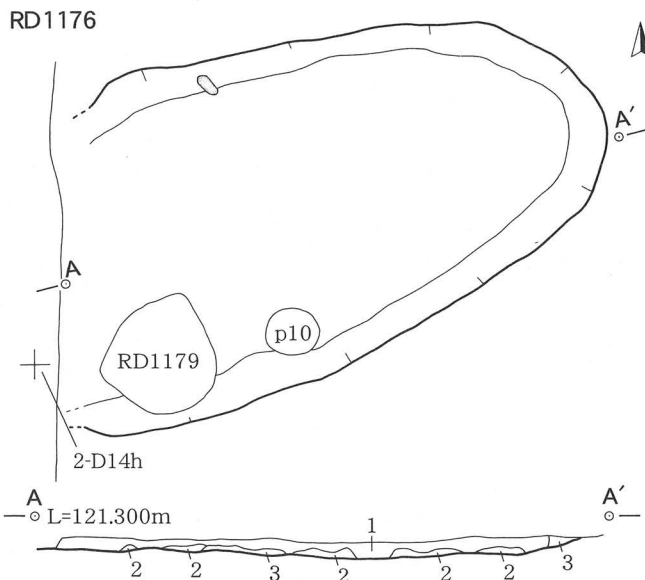
4. 2層に似る



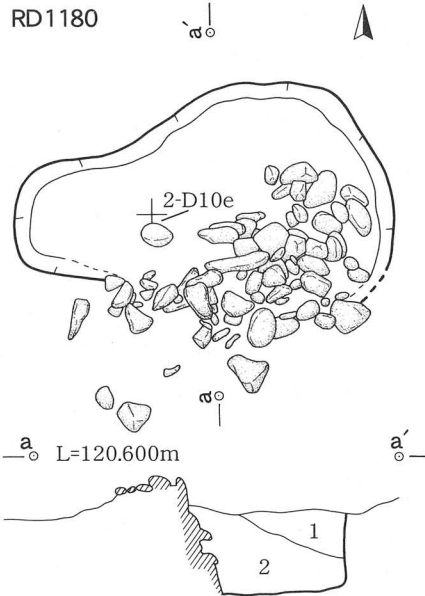
第54図 RD土坑(6)



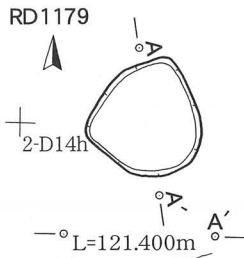
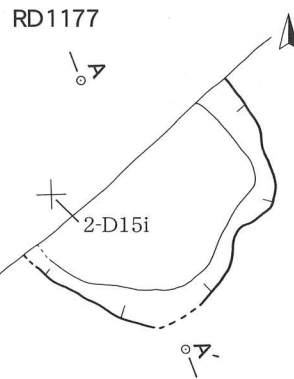
第55図 RD土坑(7)



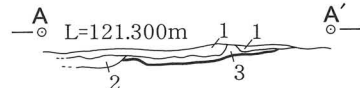
- RD1176土坑 (A-A')
1. 10YR3/3 暗褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
 2. 10YR3/3 暗褐色シルト 地山ブロック多量。
 3. 10YR3/3 暗褐色シルト 地山ブロック多量。



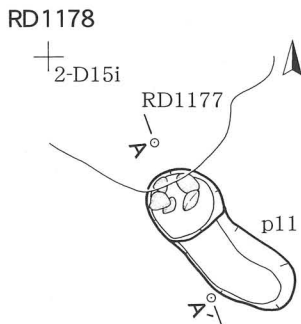
- RD1180土坑 (a-a')
1. 5B5/1 青灰色砂質シルト 粘性強い。
 2. 5B5/1 青灰色粘土 粘性非常に強い。



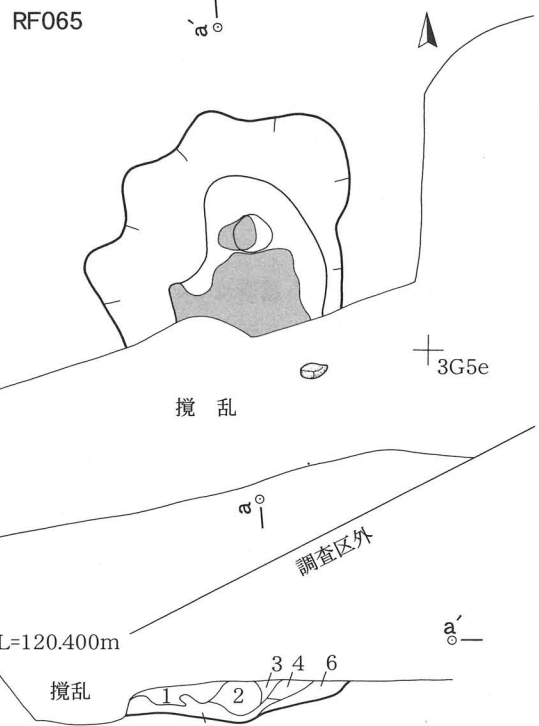
- RD1179 (A-A')
1. 10YR3/3 暗褐色シルト



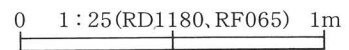
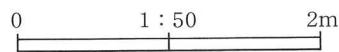
- RD1177土坑 (A-A')
1. 10YR3/3 暗褐色シルト しまりあり、粘性弱い。10YR4/4 褐色シルト1%。
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR2/1 黒色シルト10%。
 3. 10YR3/3 暗褐色シルト しまりあり、粘性やや弱い。10YR4/6 褐色シルト2%。



- RD1178土坑 (A-A')
1. 10YR3/3 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。10YR4/6 褐色シルト10%。



- RF065焼土遺構 (a-a')
1. 2.5YR5/8 明赤褐色 しまりあり、粘性弱い。10YR3/3 暗褐色シルトブロック状で10%~焼土A。
 2. 10YR3/3 暗褐色シルト しまりあり、粘性やや弱い。1層起源土粒状で2%。焼土A起源の焼土粒2%。
 3. 2.5YR2/4 極暗赤褐色 しまりあり、粘性弱い。炭化材微量~焼土B。
 4. 10YR3/3 暗褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。焼土B起源の焼土粒5%。
 5. 10YR3/3 暗褐色シルト しまりややなし、粘性やや弱い。10YR3/4 暗褐色シルト90%。焼土A起源土粒2%。
 6. 10YR3/3 暗褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。10YR4/4 褐色シルト90%。焼土B起源の焼土粒3%。



第56図 RD土坑(8)・RF焼土遺構

6. 井戸跡

R I 017井戸跡 (第57図、写真図版54)

〈位置・検出状況〉 B区、3-C12 o グリッド付近に位置する。IV層上面で、暗褐色土と黄褐色土の混土の楕円形プランを検出した。本遺構の南西部には底面にコンクリート製のタタキがある攪乱が確認されており、これと埋土が類似していたため、本遺構も攪乱と判断した。そのため半裁せずに掘り下げたところ、検出面から20cm程下から小石を含む礫層となり、さらに幅15cm前後、幅長さ20～30cmほどの石を検出した。この時点で、石が規則性を持って並んでいるのに気づき、井戸と判断した。

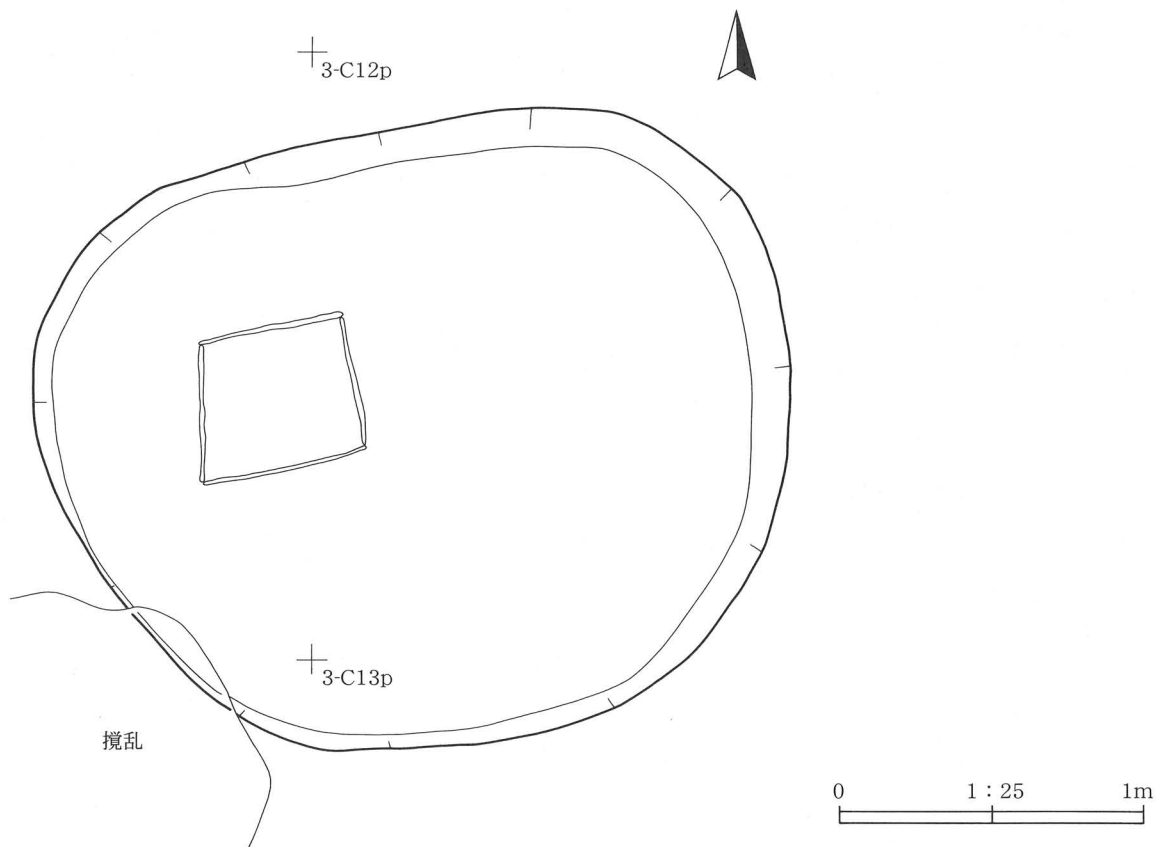
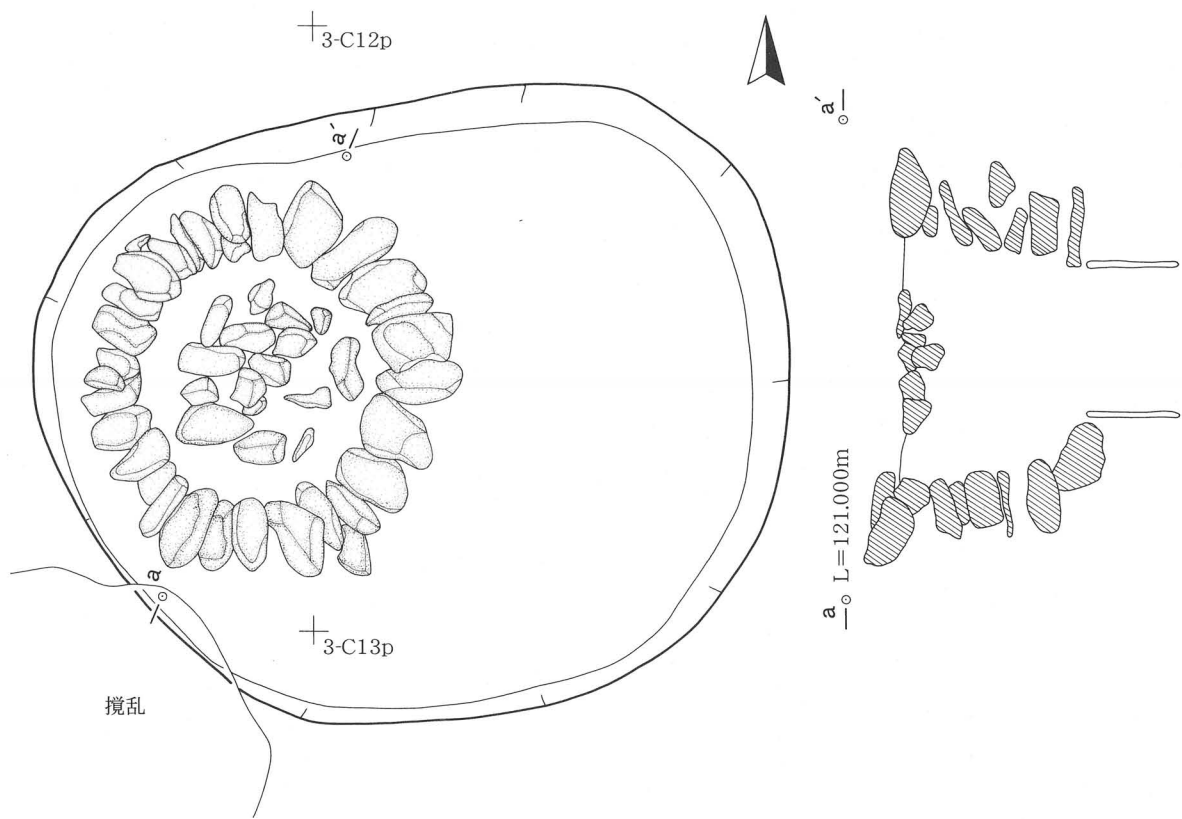
〈形状・規模〉 南西隅が攪乱を受け、一部消失する。掘方の開口部径2.0×2.5m、平面形は楕円形を呈している。検出面から石組までの深さは40cm前後を測る。井戸側（井戸の各部位の呼称については宇野隆夫「井戸考」（『史林』65-5 1982）によった）は礫を組んで構築されている。礫は長さ15～30cm・幅20～30cmの自然礫で、内側が円形に揃うよう放射状に組まれている。開口部はややゆがんだ円形で、直径78cmを測る。検出面から深さは、底面まで1.3m、石組み検出面からは0.9mである。底面まで約30cmの高さまでほぼ同じ直径の円筒形に礫が組まれている。その下は素堀の状態で、幅30cm・長さ45～50cmの板材を組んで水溜とし、褐色土によって裏込されている。水溜の平面形は、板材の長さが不揃いであることからややゆがんでいる。板材は4枚ともコナラ節で、コナラ・ミズナラと推測されている（詳しくは付篇の自然科学分析を参照されたい）。底面はV層相当の砂礫層である。

〈埋土〉 検出時点で井戸とは認定していなかったため、掘方埋土の記録を欠く。ただし、前述のように暗褐色土と黄褐色土との混合土を確認しており、また石組検出面まで同じような堆積状況だった。井戸本体の埋土は黒色シルトの単層である。これらのことから、井戸本体および掘方は人為的に埋め戻されたものと考えられる。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 木枠内より鉄釉茶碗の底部が1点出土している。18世紀代のものと思われるが、調査員の不手際により掲載することができなかった。

〈時期〉 井戸側の形状及び出土遺物から近世以降のものと推測される。



第57図 R1017井戸跡

7. 溝 跡

R G016溝跡（第65図、写真図版55）

〈位置・検出状況〉 F区東端、1 E 1 1 グリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 北西－南東方向へ直線状に延びる。北側は第15次調査区へと続き、南側は調査区外へと延びるが、位置及び規模・形状からD区R G 267溝跡と同一遺構の可能性が高い。調査区内で検出された全長は4.5m、最大幅2.5m。断面形は、下部がU字状、上部は外傾して開く。残存する深さは90cm程度である。

〈埋土〉 10YR3/2黒褐色シルトを主体とする。上部（1・2層）は地山ブロックをほとんど含まず最上層（1層）には灰白色粒子を混入する。下部はグレー味が強く（3層以下）、底面及び壁際は上部より地山ブロックを多く含む。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。16次調査では平安～中世（?）としている。

R G043溝跡（第65図、写真図版55）

〈位置・検出状況〉 F区、1 C 14 j ～ 1 C 17 i グリッド付近に位置する。IV層上面で検出したが、2層を地山層（IV層）、1層部分のみが本遺構の範囲と考え、R A 586竪穴住居跡と重複関係にないと判断した。そのため、竪穴住居跡から調査を開始したが、掘り下げていく過程で本遺構と住居跡は重複していることが判明した。

〈規模・形状〉 北東－南西方向に直線状に延びる。北側は18次調査区で検出されており、南側は攪乱を受け一部消失し接続しないが23次調査区へと続く。調査区内で検出された全長は5.4m、幅は2.2～2.3m、断面形は逆凸状を呈している。検出面からの深さは80cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として6つの層に分けられる。1層は混入物を含まず、2層は地山ブロック層と、下位層（3層以下）とやや埋土の様相が異なる。両層は本遺構に伴うものではなく他遺構が重複している可能性がある（RG272・273溝跡か）。

〈重複〉 R A 586竪穴住居跡と重複しこれを切る。第23次調査区においては本遺構とR G 272・273溝跡が重複しながら並走するが、本次調査区内では、これらを確認できなかった。平面形状を把握できなかったものの、上述の通り、埋土1・2層がこれらに対応する可能性がある。

〈遺物〉 非ロクロの土師器甕底部が出土している。

〈時期〉 これまでの調査における他遺構との切りあい関係から、奈良時代よりは新しく、近世までは降らないと判断される。

R G045溝跡（第65図、写真図版55）

〈位置・検出状況〉 F区、1 C 13 m ～ 1 C 15 p グリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 北北西－南南東方向に直線に延びる。北側は第18次調査で検出されており、南側は攪乱を受け一部消失するため接続しないが第23次調査へ続く。調査区内の全長は5.6m、幅3.4m、断面形は逆台形状を呈している。検出面からの深さは80cm前後である。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として5つの層に分けられる。底面壁際には地山ブロックを大量に含

む層（6層）が堆積する。埋土下部（2～6層）にはこれを含まないが、上部（1層）には多量に混入する。これらは自然に埋没したものと考えられる。

〈重複〉 R G 264堀跡と重複するが、重複箇所では本遺構は全体、R G 264堀跡は底面付近まで攪乱により消失するため切り合い関係は把握できていない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 時期を特定する遺物の出土がなく、不明である。しかもすぐ北側の第15次調査区および18次調査区では埋土上位に十和田 a 降下火山灰とされる灰白色粒子が帯状に堆積していることが確認されており、土師器、須恵器も出土していることから、平安時代に位置づけられている。

R G 193溝跡（第62図、写真図版56）

〈位置・検出状況〉 C区、3 B 1 v～3 C 3 v グリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 南北直線状に延びる。中央付近上部を攪乱により消失する。北側は調査区外へと延び、南側は23次調査区へと続く。調査区内で検出された全長は4.3m、幅1.0～1.1m、断面形はU字状を呈する。検出面からの深さは40～50cmである。

〈埋土〉 黒褐色土を主体として2つの層に分けられる。下部（2層）には地山ブロックを微量含む。

〈重複〉 重複する遺構はない。23次調査においてR G 43溝跡と同一遺構の可能性があるとされている。

〈遺物〉 非ロクロの土師器胴部小破片が出土している。

〈時期〉 出土遺物から古代以降の年代が想定される。

R G 200溝跡（第62図、写真図版56）

〈位置・検出状況〉 C区、2 C 20 d～2 C 18 m グリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 東西直線状に延びる。西側は調査区外へ、東側は23次調査区、本次調査D区へと続く。調査区内で検出された全長は10.6m、幅は0.4～0.6m、断面形は逆台形を呈する。検出面からの深さは、25～50cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトの単層であるが、中部で地山ブロックを含む。

〈重複〉 R D 1148土坑と重複し、それを切っている。

〈遺物〉 非ロクロの土師器甕の胴部・底部の小破片が出土している。

〈時期〉 出土遺物から古代以降の年代が想定される。23次調査では、出土遺物より近世と判断している。

R G 200溝跡（第63図、写真図版56）

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 21 r～1 E 10 w グリッド付近に位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 南西～北東方向に直線状に延びる。西側は23次調査区へと延び、本時調査C区内に続く。東側は調査区外へと延びるが、調査区外を挟んだ延長線上であるD区北側では検出されなかったことから、方向を変えるか、R G 016溝跡と合流するものと推定される。調査区内で検出された全長は19.0m、幅は1.4～1.9m。底面は凹凸を持ち、壁下半はやや外傾して立ち上がり、上半は外側に開く。検出面からの深さは50～60cm程度である。

〈埋土〉 上部は10YR3/2黒褐色シルト、下部は10YR2/2黒褐色シルトを主体とする。底面及び壁際に地山ブロックを含むが全体的にグレー味を帯びる混入物の少ない埋土である。最上層には灰白色粒子を含む。

〈重複〉 R G 265溝跡と重複するが、交差部分は23次調査区内に位置し概に調査済である。しかし、新旧関係は確認されていない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。23次調査においては、出土遺物より近世の遺構と判断している。

R G 201溝跡（第62図、写真図版57）

〈位置・検出状況〉 C区、2 C 11 d～2 C 9 j グリッド付近に位置する。IV層上面で検出されたが、周囲に攪乱が多く形状を把握できなかった。攪乱を除去しながら掘り下げていったところ、本遺構とR A 590竪穴住居跡が重複していることを確認した。

〈規模・形状〉 東西方向、直線状に延びる。東側は23次調査区へと続き、西側は攪乱を受け消失するが調査区外へと延びているものと推測される。調査区内で検出された全長は16.6m（住居跡との重複部は一部消失する）、幅30～45cm、断面形は逆台形状を呈する。検出面からの深さは6～20cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトの単層である。

〈重複〉 R A 590竪穴住居跡と重複し、住居内の断面観察により本遺構が古いものと思われる。しかし、上述の通り、前調査では平安時代の遺構（R G 045溝跡）を切り、出土遺物より近世の遺構と報告されているため矛盾する。住居内で浅くなり消失した可能性も考えられる。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 上記の理由で時期の特定はできない。

R G 223溝跡（第61図、写真図版57）

〈位置・検出状況〉 B区、2-C 22m～3-C 14 q グリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 南北方向、直線状に延びる。北側は23次調査区へと続き南側は攪乱によって消失する。B区南側は43次調査区（盛岡市教育委員会）となるが、本遺構に続くものは検出されていない。調査区内の全長は34.5m（途中の攪乱により一部消失する）、幅20～35cm、断面形は逆台形～U次状を呈する。検出面からの深さは12～35cmと一定しておらず、北が深く、南に向かって徐々に浅くなっている。

〈埋土〉 10YR2/1黒色シルトを大量に含む10YR2/2黒褐色シルトの単層である。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R G 264堀跡（第65図、写真図版57・58）

〈位置・検出状況〉 F区、1 B 19 v～1 D 15 f グリッド付近に位置する。東側はIV層上面で検出したが、西側は底面付近まで攪乱を受けていたため、トレンチを入れ断面を観察しながら範囲を確認した。

〈規模・形状〉 南西～北東方向、直線状に延びる。西は調査区外へ、東側は調査期間の都合により、一部を次年度以降に持ち越している。本遺構西部の南半は23次調査ですでに調査済み、北半は旧用水路によって遺構の大半が削平を受けていた。また中央部分には新期に水道管とガス管が埋設されており、安全を考慮して掘削していない。しかし、表土を除去した時点の検出状況が西側と同様だったので、この範囲もかなりの攪乱を受けているものと推測される。調査区内で検出された全長は68.0m、比較的残存状況の良い東側で、幅

は4.0～4.5m、断面形は逆台形状を呈している。検出面からの深さは100cm前後である。

〈埋土〉 東側では黒褐色シルトを主体とし、地山ブロック、10YR3/3暗褐色シルトの混入量で9つの層に分けられる。4層のみが10YR4/4褐色砂を大量に含み、6～9層のところどころに水酸化鉄のしみが観察された。堆積状況から自然に埋没したものと推測される。

〈重複〉 R A 586 竪穴住居跡・R G 045 溝跡・R G 043 溝跡と重複していると思われる。しかし、上記の通り、攪乱がかなり深くまでおよんでいるため、本次調査区内での切り合い関係は把握できていない。23次調査においては、R G 045・043 溝跡より新しいと判断されている。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく、不明である。第23次調査では中世のものと推測されている。

R G 265 溝跡 (第63図、写真図版59)

〈位置・検出状況〉 D区、1 E 22 r ～ 2 E 25 y グリッドに位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 北西－南東方向に直線状に延びる。南北両端は23次調査区へと続く。調査区内で検出された全長は18.5m、幅は20～30cm程度である。断面形は逆台形状となり、検出面からの深さは約20cm。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、灰白色粒子を含む。重複する住居跡の埋土よりも良くしまる。

〈重複〉 R A 583・584 竪穴住居跡、R G 200 溝跡と重複する。本遺構は住居跡よりも新しいが、溝跡との新旧関係は不明である。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R G 267 溝跡 (第63図、写真図版59)

〈位置・検出状況〉 D区、1 E 14 x ～ 1 F 24 j グリッドに位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 北西－南東方向、直線状に延びる。南側は23次調査区へと続き、北側は調査区外へ延びるが、位置、規模形状からR G 016 溝跡 (F区) と同一遺構の可能性が高い。調査区内で検出された全長は29.0m、幅は1.1～1.6mである。断面形は下半がU字状を呈し、上半は外側に開く。残存する深さは30cm程度である。

〈埋土〉 10YR3/2黒褐色シルトを主体とする。底面及び壁面には地山ブロックを含むが、全体的には混入物が少なく、堆積状況がR G 200 溝跡 (D区) の埋土と類似する。上部にはやはり灰白色粒子を含む。

〈重複〉 R D 1132～1135 土坑と重複し、本遺構の方が新しい。

〈遺物〉 土師器・須恵器の小破片が出土するが、土坑を切っているため本遺構に伴わない可能性がある。

〈時期〉 重複関係及び出土遺物から平安時代以降の年代が想定される。

R G 273 堀跡 (第64図、写真図版59・60)

〈位置・検出状況〉 E区、2 G 21 e ～ 3 G 2 j グリッド付近に位置する。IV層上面で検出したが、本来の検出面はIV層上面である。

〈規模・形状〉 北北西－南南東方向、直線状に延びる。南側は調査区外へと続く。北側は22次調査区へ延び、攪乱及び建物の基礎により直接つながらないものの、位置、規模・形状から同調査区R G 273 堀跡と同一遺構と判断した。本遺構は22次調査区内でL字状に西側へ折れる。方形を区画していたものと推定すればE区より南でも同方向に折れ、44次調査R G 461 堀跡へ続く可能性がある。調査区内で検出された全長は14.5m、

幅2.0～2.2m。断面形は逆台形状を呈し、残存する深さは65cmである。

〈埋土〉10YR3/2黒褐色シルトを主体とする。壁際が崩落しその上に礫混じり層が覆う。礫は大きいものが層下面に沿って入り込み、小礫は層中に混入する。

〈重複〉R E 062住居状遺構と重複しこれに切られる。

〈遺物〉出土していない。

〈時期〉22次調査では出土遺物より平安時代と推定している。

R G 319溝跡（第58・59図、写真図版60・61）

〈位置・検出状況〉A区、2-D13 i～3-E17 e グリッド付近に位置する。④層上面で検出した。

〈規模・形状〉北東-南西方向、直線状に走るが西半はやや蛇行して調査区外へと延びる。東側は26次調査区へと続く。本次調査区内で検出された全長は85m、幅1.0～1.4mである。断面形は逆台形状を呈しており、残存する深さは約30cmである。

〈埋土〉10YR3/2黒褐色シルトを主体とする。西半（R G 501溝跡合流点以西）はグライ化するためグレー味が強くなるものの、底面及び壁付近に地山ブロックを多く含む層、その上は少量、上部は灰白色粒子が混入するというほぼ同じ堆積状況がみられる。また、13・14・18層の堆積状況から他の溝（R G 501溝跡）が重複している可能性があるが、平面形でそれを把握することができなかった。

〈重複〉R G 323溝跡と重複しこれに切られる。R G 501溝跡とも重複するが新旧関係は不明である。

〈遺物〉R G 323溝跡と重複する東側でも土器片が出土するが、両遺構のいずれに所属するか判別して取り上げることができなかったため、分岐点より西側のものを3点掲載した。292・293は非口クロ土師器甕である。292は外面ヘラナデ、293はハケメと調整が異なるが、胎土・器厚・色調等両者は類似する点が多く同一個体の可能性が高い。294は須恵器小形壺である。またR G 319・323・501の合流点からも内面が黒色処理される土師器坏が1点出土している（295）。（第98・101図、写真図版90・92）

〈時期〉出土遺物及び埋土の様相から平安時代以降と判断される。

R G 323溝跡（第58・59図、写真図版60・61）

〈位置・検出状況〉A区、2-D14 i～3-E 7 1 グリッド付近に位置する。④層上面で検出したが、R G 319溝跡と重複する範囲では両遺構の埋土主体土が類似するため判別がつかずR G 319溝跡底面で確認した。

〈規模・形状〉北東-南西方向に延びる。R G 319溝跡とほぼ流路を同じくするが、R G 501溝跡との合流点以西から北側へ蛇行し、徐々に浅くなり消失する。北東側は26次調査区へと延びる。本次調査区内で検出された全長は60m、幅0.4～0.5m。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは約25cmである。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトを主体とする。上部に多く下部に少量灰白色粒子を混入する。また底面直上層には地山ブロックを多く含む層がみられる箇所もある。溝掘削時の掘方で、溝機能時にはすでに埋没していたものではないかと思われる。

〈重複〉R G 319溝跡と重複し本遺構のほうが新しい。R G 501溝跡とも重複するが新旧関係は不明である。

〈遺物〉R G 319溝跡と重複する東側でも土器片が出土するが、両遺構のいずれに所属するか判別して取り上げることができなかったため、分岐点より西側のものを1点掲載した。295は須恵器瓶類の底部で、外面はヘラケズリ、内面は自然釉が付着するため調整は確認できなかった。（第98・101図、写真図版90・92）

〈時期〉出土遺物及び埋土の様相から平安時代以降と判断される。

R G 487溝跡 (第63図、写真図版61)

〈位置・検出状況〉 D区、-1 F 23 k ~ 1 F 5 m グリッド付近に位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 南北方向、直線状に延びる。南北端は攪乱により消失するが、調査区外へと続く可能性がある。また、本遺構に沿うようにして溝状の攪乱が深く掘り込まれている。調査区内で検出された全長は18.8m、幅は0.6~0.7m、断面形は逆台形を呈する。検出面からの深さは20~30cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として2つの層に分けられる。底面壁際には地山ブロック（壁崩落土か）を大量に含む層（2層）が堆積し、その上を主体土のみの混入物のない層（1層）が覆う。部分的にこの1層のみしか確認できない箇所もある（A-A'など）。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R G 488溝跡 (第63図、写真図版62)

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 1 h ~ 1 F 16 j グリッド付近に位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 南北方向に直線状に延びるが、同区内の北西-南東方向の溝跡と比べやや蛇行する。北側は攪乱によって壊されており、南側は徐々に浅くなり自然と消失し、隣接調査区（22次・23次）でも検出されていない。調査区内に残存する全長は30.6m、幅は15~30cmである。断面形はU字状~逆台形状を呈しており、検出面からの深さは北側で約10cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、地山ブロックを少量含む。

〈重複〉 R A 581 竪穴住居跡、R D 1161 土坑と重複し前者はこれを切り、後者に切られる。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R G 489溝跡 (第63図、写真図版62)

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 12 b ~ 1 F 16 f グリッド付近に位置する。IVa層上面で検出された。

〈規模・形状〉 北西-南東方向に直線状に延びる。北側は、調査区外へと続くが、位置、規模・形状から15次調査区 R G 027 溝跡と同一遺構と推定される。南側は徐々に浅くなり R D 137 土坑と重複しこれより南側は消失するものの、位置及び規模・形状から、22次調査区 R G 275 溝跡へと続く可能性が高い。本次調査区内で検出された全長は11.0m、幅は15~25cmである。断面形は逆台形状を呈しており、検出面からの深さは約10cmである。

〈埋土〉 10YR3/2黒褐色シルトを主体とし地山ブロック、灰白色粒子を含む。

〈重複〉 R D 1130 土坑と重複する。重複部より南側で本遺構が検出されないことと、埋土の状況から、土坑の方が新しい可能性が高い。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明である。

R G 490溝跡 (第63図、写真図版62)

〈位置・検出状況〉 D区、1 F 25 d ~ 1 F 25 g グリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉隅丸方形に近い半円形を呈する。南側は調査区外へと位置する。直径約6.0m、幅20cm、断面形はU字状～逆台形状を呈する。底面にはやや凹凸がみられる。検出面からの深さは、数cm～10cm程度である。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、地山ブロックを少量混入する。

〈重複〉重複数する遺構はない。

〈遺物〉出土していない。

〈時期〉遺物の出土がなく不明である。

R G 491溝跡（第62図、写真図版63）

〈位置・検出状況〉C区、3C4d～3C4iグリッドにかけて位置する。IV層上面で検出されたが周囲に攪乱が多いためさらに掘り下げたところ遺構の形状が明確となり、RD1140土坑と重複していることを把握した。

〈規模・形状〉東西方向、への字状に屈曲する。西側は立ち上がるが、東側が攪乱を受け消失する。検出された全長は10.7m、幅は一定せず40～60cm、断面形は逆台形である。検出面からの深さも同様に、11～23cmと高低差がみられる。溝の端に向かって徐々に高くなるというわけではなく、（東西方向に見れば）波打っている状況である。

〈埋土〉地山ブロックを極微量含む10YR2/2黒褐色シルトの単層である。

〈重複〉RD1140土坑と重複し、これに切られている。

〈遺物〉埋土下位から土師器片がわずかに出土している。

〈時期〉RD1140土坑との重複関係から中世以前の可能性がある。

R G 492溝跡（第62図、写真図版63）

〈位置・検出状況〉C区、2C19c～2C18eグリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉南西～北東方向、直線状に延びる。東西端はやや浅くなって立ち上がり、全長は4.7mを測る。幅は、50～60cm、断面形は幅の狭いところではU字状、広いところでは逆台形状を呈する。検出面からの深さは、両端部で17cm、中央部分で21～31cmである。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトの単層である。

〈重複〉重複する遺構はない。

〈遺物〉非ロクロの土師器甕胴部小破片が出土する。

〈時期〉出土遺物から古代以降の年代が想定される。

R G 493溝跡（第62図、写真図版63）

〈位置・検出状況〉C区、2C8c～2C9bグリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉南西～北東方向、直線状に延びる。南側は調査区外へ、北側は23次調査RG272または271溝跡に続くものと思われる。しかし本次調査区内ではいずれに対応するのか判断できなかったため、新規の遺構名を命名した。調査区内で検出された全長は3.1m、幅は0.9m、断面形は底面がやや丸みを帯びるものの逆台形状を呈す。検出面からの深さは30cmである。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトの単層である。

〈重複〉 重複する遺構はない。

〈遺物〉 非ロクロの土師器甕胴部小破片が出土する。

〈時期〉 出土遺物から古代以降の年代が想定される。

R G 494溝跡（第64図、写真図版63・64）

〈位置・検出状況〉 E区、3 F 7 w ~ 3 F 10 x グリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 南北方向、直線状に延びる。南北両端は立ち上がり、全長は6.0mを測る。幅は1.4m、断面形は浅皿状を呈する。検出面からの深さは12~17cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とした混入物のない層（1層）が堆積する。北側には埋土下部に地山ブロックを少量含む層（2層、A-A'）が確認された。

〈重複〉 重複する遺構はない。南側にR G 495溝跡が位置し、接続しないため別遺構としたが、一連のものであった可能性がある。

〈遺物〉 土師坏口縁部小破片が出土している。

〈時期〉 遺物の出土から古代以降のものと想定される。

R G 495溝跡（第64図、写真図版64）

〈位置・検出状況〉 E区、3 F 11 x グリッド付近に位置する。IV層上層で検出された。

〈規模・形状〉 南北方向、直線状に延びる。北側は立ち上がり、南側は攪乱により消失するが調査区外へと延びている可能性がある。調査区内で検出された全長は1.7m、幅は1.0m、断面形は逆台形状を呈する。検出面からの深さは10~20cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体として上下2つの層に分けられる。R D 494溝跡の埋土と類似するが堆積状況がやや異なる。

〈重複〉 重複する遺構はない。上記の通りR G 494溝跡と一連のものであった可能性がある。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物の出土がなく不明だが、R G 494溝跡と一連であれば古代以降のものと想定される。

R G 496溝跡（第64図、写真図版64）

〈位置・検出状況〉 E区、3 F 4 x ~ 3 F 10 y グリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

〈規模・形状〉 南北方向、直線状に延びる。南北両端は自然と立ち上がる。全長11.0m、幅は0.8~1.1m、断面形は逆台形状を呈する。検出面からの深さは10~24cmで、南の方が深くなっている。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、地山ブロックの混入量の違いで2つの層に分けられる。2層は南側（B-B'）のみで確認された。

〈重複〉 R D 1155土坑と重複し、これを切っている。

〈遺物〉 ロクロの土師器坏小破片が出土している。

〈時期〉 出土遺物から平安時代以降の年代が想定される。

R G 497溝跡（第64図、写真図版64）

〈位置・検出状況〉 E区、2 G 20 i ~ 3 G 1 m グリッド付近に位置する。III層中で検出された。

〈規模・形状〉北側でわずかに蛇行するが、北北西—南南東方向、ほぼ直線に延びる。南側は調査区外へ、北側は22次調査区内へと続くが、前調査では本遺構が延びると推定される位置が攪乱を受けていたため検出されていない。調査区内の全長は12.4m、幅は0.6～1.0m、断面形は逆台形状を呈する。検出面からの深さは13～25cmで、南側の方が深くなっている。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、下部層（2層）には地山ブロックが少量混入する。

〈重複〉重複する遺構はない。

〈遺物〉土師器甕の胴部、磁器口縁部小破片が出土している。

〈時期〉出土遺物から古代以降の年代が想定される。

R G 498溝跡（第58図、写真図版65・66）

〈位置・検出状況〉A区、2-D 9 i～2-E 22 v グリッドに位置する。④層上面で検出された。

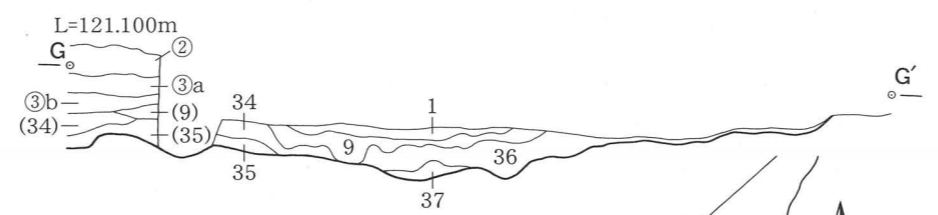
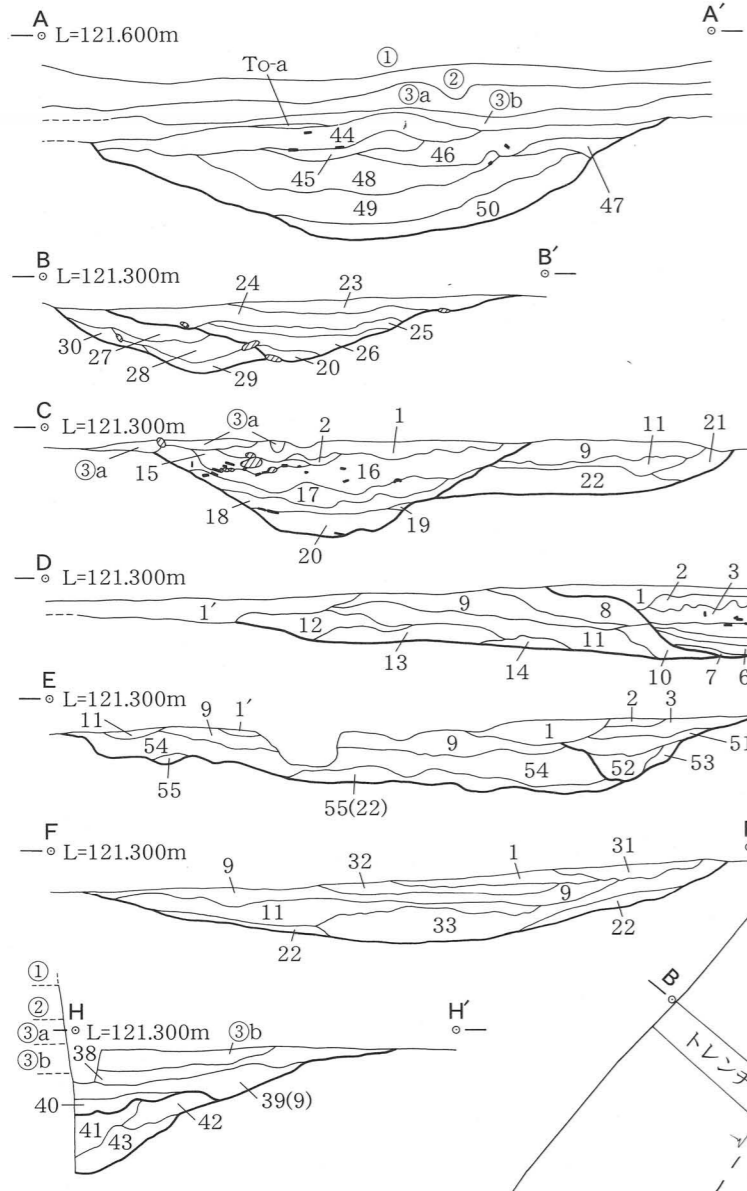
〈規模・形状〉北東—南西方向、直線状に延びる。北側は26次調査区調査区へ延びており、その位置・規模・形状からR G 320溝跡と同一遺構と判断される。しかし、本調査区内で同遺構は2条重複していることが判明したため、それぞれ新时期番号を付した（新时期R G 498溝跡、古期499溝跡）。両遺構は調査区北端では上下に重複し、それ以外の箇所では並行して走る。南端は幅が狭く浅くなり消失するが、恐らく旧河道（湿地）へと落ち込んでいくものと思われる。検出された全長は約35m、幅2.7～1.3m。断面形は底面がやや丸みを帯びるV字状を呈し、壁は大きく外側に開く。検出面からの深さは最大60cm程度である。

〈埋土〉北端部は10YR3/2黒褐色シルト、それ以外はグライ化してグレー味を帯び10YR3/1黒褐色シルト～砂質シルトを主体とする。埋土底面から下部にかけては、地山砂を多く含む層やラミナ層がみられ水性堆積の様相を示す（7・20・26・48層）。底面付近に遺物を含む細かい小破片が大半を占め、恐らく流れ込んだものと思われる。その上位には炭化物・焼土ブロック（一部骨片）を混入する層が堆積する（16・（24）・26・46層）。本層は完形個体の遺物を多く含み、下位層とは異なり人為堆積と思われる。A-A'ベルトからC-C'付近の層が厚く、D-D'へ向けて徐々に薄層となり、西側へ行くに従って低くなる傾斜を持つ堆積状況を示す。この上をTo-a降下火山灰がブロック状に含む層によって覆われる（6・15・23層）。火山灰ブロック層も、C-C'からD-D'間の層が厚く、西側へ向かって徐々に薄層となり、傾斜して堆積する。さらに上位はラミナ層と遺物（完形・破片）を多く含む層がみられ、人為と自然、両者によって徐々に埋没していったものと思われる。

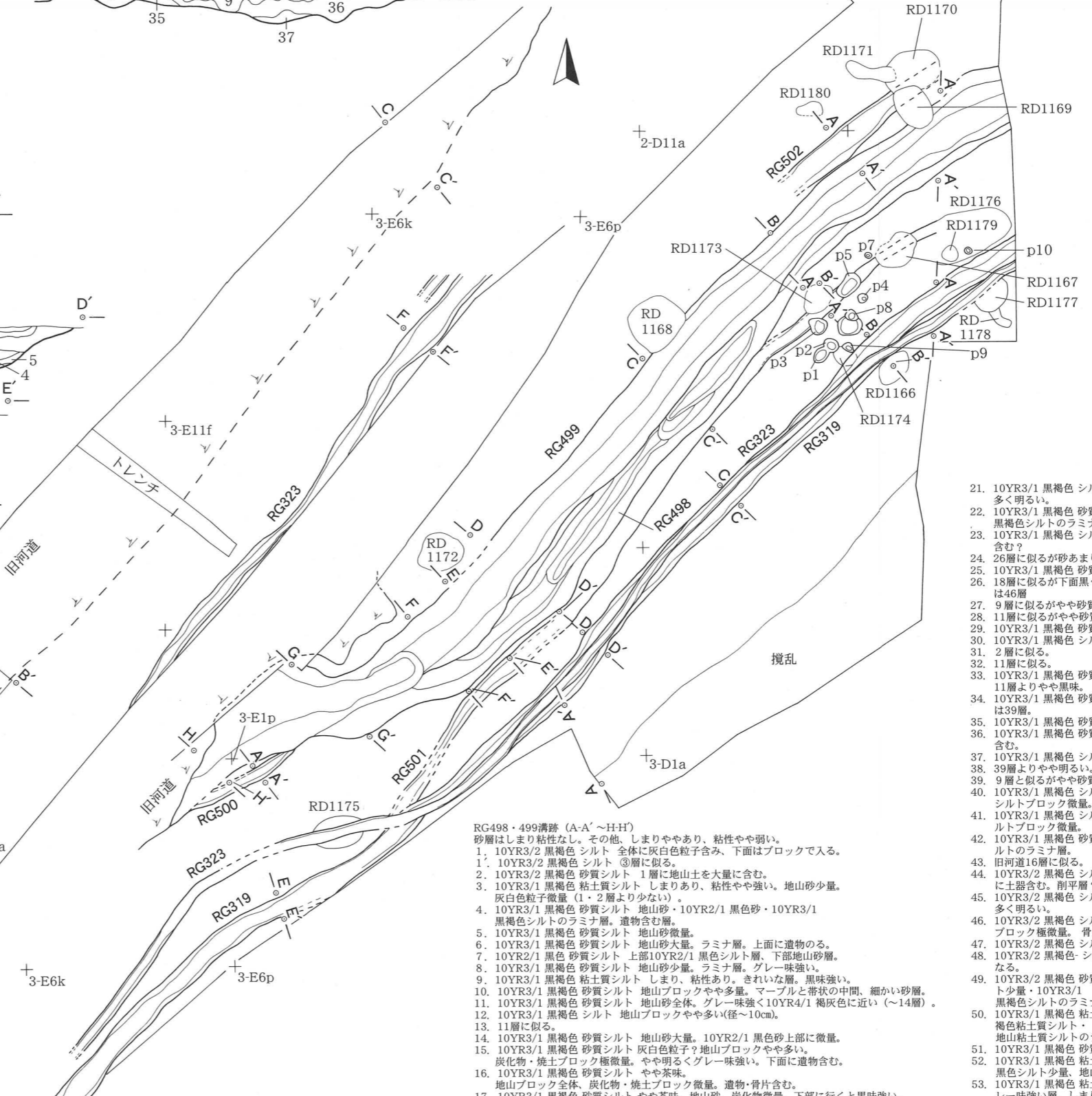
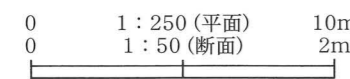
〈重複〉R G 499・501溝跡、R D 1169土坑と重複する。切り合い関係が確認できた遺構はR G 499溝跡のみで、本遺構の方が新しい。埋土から、R G 501溝跡より本遺構の方が古い可能性が高いが、土坑との新旧関係は不明である。

〈遺物〉底面付近（7・20・26・48層）の遺物は細かい小破片が大半を占め、埋土中部（16・（24）・26・46層）には完形個体の遺物を多く含む。上部にも中部ほどではないが完形個体が出土しており、これと共に大量の破片が混入する。地点別でみると、溝南北端は少なく中央部（B-B'～D-D'間）に集中する。これらの総出土量は本次調査区内最大で、大コンテナ（42×32×30cm）7箱にもおよぶ。このうち本遺構出土のもの92点、R G 499溝跡との重複部で出土したが遺物の形態から本遺構に属する可能性が高いもの（R G 498・499と表記）51点、計143点を登録した。さらに整理作業時間の制約からR G 498を60点、R G 498・499を34点、計94点を図化し、残り49点を写真掲載とした。以下図化した遺物のみ記述し、それ以外は第V章でまとめた。土師器坏47点、須恵器坏22点、土師器甕類6点、須恵器甕瓶類19点図化した。坏は、体部から口縁部に

RG498・499



- A区基本層序(A-A')
- ① レキ層新期造成盛土
 - ② 10YR3/3 暗褐色シルト 旧耕作土
グレー味強い比較的きれいな層。
 - ③a 10YR2/2 黒褐色シルト 灰白色粒子含む。
黄味強い。
 - ③b 10YR2/2 Ⅲa層に似るがやや明るい
下面にTo-aブロック含む所あり。旧表土?

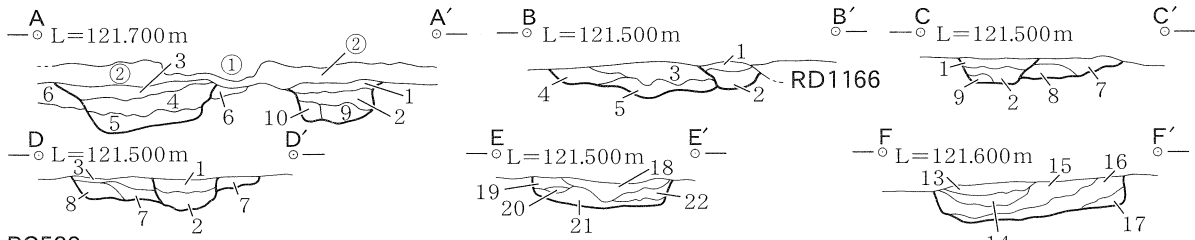


- 21. 10YR3/1 黒褐色シルト 11層に似るが地山ブロックやや多く明るい。
- 22. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 地山砂(多量)・10YR3/1 黒褐色シルトのラミナ層。
- 23. 10YR3/1 黒褐色シルト 地山ブロック全体。灰白色粒子含む?
- 24. 26層に似るが砂あまり含まない。
- 25. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 地山砂多量のラミナ層。
- 26. 18層に似るが下面黒くならない。26=17層、26=48または46層
- 27. 9層に似るがやや砂質。
- 28. 11層に似るがやや砂質。
- 29. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 地山砂多量。
- 30. 10YR3/1 黒褐色シルト 地山ブロック少量。
- 31. 2層に似る。
- 32. 11層に似る。
- 33. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 地山砂全体。炭化物微量。11層よりやや黒味。
- 34. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 地山砂やや多い。=34または39層。
- 35. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 地山砂大量。=40層。
- 36. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 11層に似るが下面に粗い砂含む。
- 37. 10YR3/1 黒褐色シルト 9層よりやや砂質。
- 38. 39層よりやや明るい。
- 39. 9層と似るがやや砂質。
- 40. 10YR3/1 黒褐色シルト 地山砂質シルト、10YR2/1 黒色シルトブロック微量。
- 41. 10YR3/1 黒褐色シルト 地山ブロック、10YR2/1 黒色シルトブロック微量。
- 42. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 地山砂・10YR3/1 黒褐色シルトのラミナ層。
- 43. 旧河道16層に似る。
- 44. 10YR3/2 黒褐色シルト 地山ブロック、炭化物微量。下面に土器含む。削平層?
- 45. 10YR3/2 黒褐色シルト 44層に似るが地山ブロックやや多く明るい。
- 46. 10YR3/2 黒褐色シルト 地山ブロック少量。炭化物・焼土ブロック極微量。骨片含む?
- 47. 10YR3/2 黒褐色シルト 地山ブロックやや多い(径~5cm)。
- 48. 10YR3/2 黒褐色シルト しまりあり。下部に地山砂多くなる。
- 49. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト 地山砂・10YR2/1 黒色シルト少量・10YR3/1 黒褐色シルトのラミナ層。
- 50. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 地山砂少量・10YR3/1 黒褐色粘土質シルト・地山粘土質シルトのラミナ層。
- 51. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 4層に似るが地山砂多い。
- 52. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト しまりあり。10YR2/1 黒色シルト少量、地山ブロックやや多量。
- 53. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 10YR4/1 褐色に近いグレー味強い層。しまりあり。地山ブロック多くグライ化している。
- 54. 33層に似る。
- 55. 22層に似る。

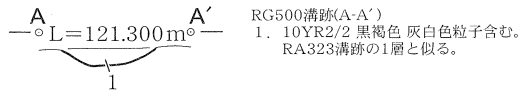
- RG498・499溝跡(A-A'~H-H')
- 砂層はしまり粘性なし。その他、しまりややあり、粘性やや弱い。
- 1. 10YR3/2 黒褐色シルト 全体に灰白色粒子含む、下面はブロックで入る。
 - 1'. 10YR3/2 黒褐色シルト ③層に似る。
 - 2. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト 1層に地山土を大量に含む。
 - 3. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト しまりあり、粘性やや強い。地山砂少量。灰白色粒子微量(1・2層より少ない)。
 - 4. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 地山砂・10YR2/1 黒色砂・10YR3/1 黒褐色シルトのラミナ層。遺物含む層。
 - 5. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 地山砂微量。
 - 6. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 地山砂大量。ラミナ層。上面に遺物のる。
 - 7. 10YR2/1 黒色砂質シルト 上部10YR2/1 黒色シルト層、下部地山砂層。
 - 8. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 地山砂少量。ラミナ層。グレー味強い。
 - 9. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト しまり、粘性あり。きれいな層。黒味強い。
 - 10. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 地山ブロックやや多量。マーブルと帯状の中間、細かい砂層。
 - 11. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 地山砂全体。グレー味強く10YR4/1 褐色に近い(~14層)。
 - 12. 10YR3/1 黒褐色シルト 地山ブロックやや多い(径~10cm)。
 - 13. 11層に似る。
 - 14. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 地山砂大量。10YR2/1 黒色砂上部に微量。
 - 15. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 灰白色粒子?地山ブロックやや多い。炭化物・焼土ブロック極微量。やや明るいグレー味強い。下面に遺物含む。
 - 16. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト やや茶味。地山ブロック全体。炭化物・焼土ブロック微量。遺物・骨片含む。
 - 17. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト やや茶味。地山砂。炭化物微量。下部に行くと黒味強い。
 - 18. 10YR3/1 黒褐色シルト 地山ブロック層。地山ブロック大量。
 - 19. 10YR3/1 黒褐色シルト 地山ブロック層。
 - 20. 17層に砂全体含む。混ざり具合16層に似るが下部は黒くならない。

第58図 A区全体図

RG319・323

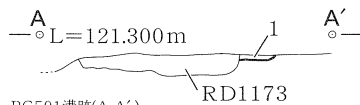


RG500



RG500溝跡(A-A')
1. 10YR2/2 黒褐色 灰白色粒子含む。
RA323溝跡の1層と似る。

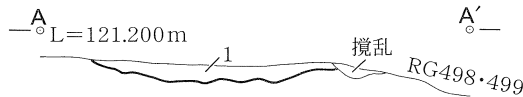
RG501



RD1173

RG501溝跡(A-A')
1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック微量。灰白色粒子含む。
RA323溝跡の1層と似る。

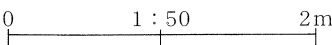
RG502



RG502溝跡(A-A')
1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロックやや多量。

RG319・323溝跡 (A-A'~F-F')
RG319=3~5(6)・7・8・12?・13~22
RG323=1・2・9・10・11
不明=6

- 全体にしまりややあり、粘性やや弱い。
1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 2層よりやや茶味。地山ブロック微量。灰白色粒子多く含む。
 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック少量。灰白色粒子少ない。
 3. 10YR3/2 黒褐色 シルト 他層よりしまり、粘性強い。グレー味強い。灰白色粒子含む。
 4. 10YR3/2 黒褐色 シルト 地山ブロック少量。
 5. 10YR3/3 暗褐色 シルト 地山ブロックやや多量。
 6. 10YR3/2 黒褐色 シルト 地山ブロック少量。埋土または地山層?
 7. 10YR3/2 黒褐色 シルト 3層のようなグレー味の強い土入らない。
 8. 10YR3/2 黒褐色 シルト 地山ブロック少量。
 9. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック大量。溝機能時には埋まっていた層?
 10. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック多量。
 11. 10YR2/2 黒褐色 シルト ややグレー味あり暗い。やや砂質。地山ブロック微量。灰白色粒子含む。
 12. 10YR3/2 黒褐色 シルト やや明るい。地山ブロック微量。
 13. 10YR3/2 黒褐色 シルト 灰白色粒子微量。以下グライ化しているためグレー味強い。
 14. 10YR2/2 黒褐色 砂質シルト 炭化物極微量。灰白色粒子微量。
 15. 7層に似る。しまりあり。
 16. 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト しまり非常にあり。粘性強い。地山ブロック、炭化物極微量。
 17. 10YR3/2 黒褐色 シルト 地山ブロック少量。
 18. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック細かく微量。灰白色粒子。
 19. 10YR3/2 黒褐色 シルト 地山ブロック少量(径~3cm)。灰白色粒子含む。
 20. 地山砂層。
 21. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロックと主体土が細かく混じる。
 22. 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロックやや多量。



第59図 A区RG溝跡

かけて内彎して立ち上がる器形が最も多い。次いで、口縁端部が外傾するもの、体部が直線的に開くものとなり、黒色処理される土師器には後者の器形はみられない。体部下端~底部もしくは底部のみが再調整されているものは6点、いずれも土師器で黒色処理される(303・304・308~311)。墨書・刻書土器は15点、小片もすべて図化した。本次調査の総点数27点中、半数以上が溝内からの出土となる。「×」5点・「木」4点(いずれも一点は不確定)、残りは不明である。381は非ロクロの土師器内黒坏で、外面体部に段を有し、平底の器形を持つ。342・343は非ロクロの土師器内黒坏(343は鉢か?)で、形態から重複遺構であるRG499より流れ込んだ可能性が高い。甕・瓶類(345~357・382~392)は出土点数が少ないことから、器形がある程度把握できるものは積極的に図化している。345はロクロの土師器甕で、ナデ状の工具によってみがかれたあと黒色処理されている。346は須恵器広口瓶、347~350・386は須恵器長頸瓶である。

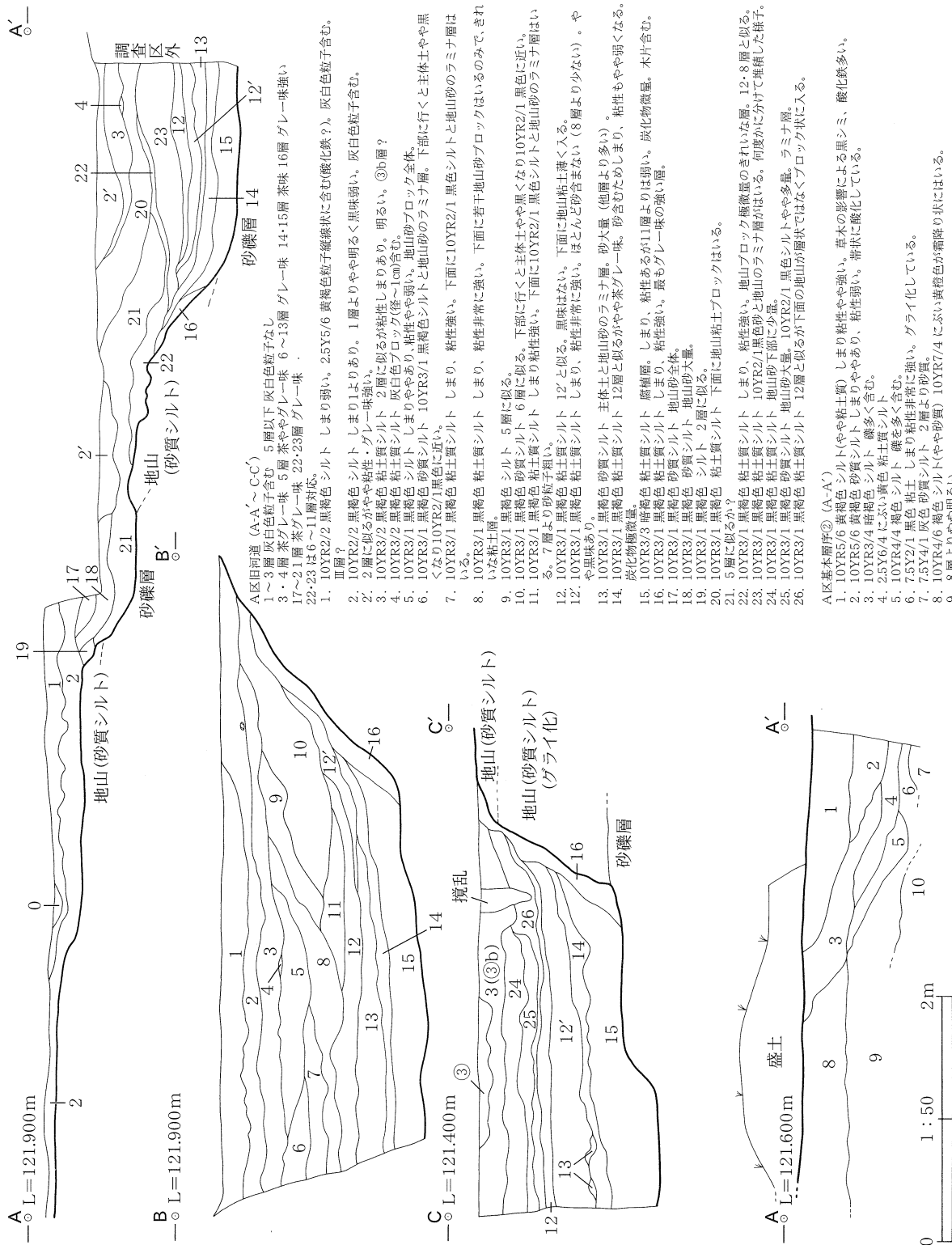
353は、外面タタキ、カキメ状のヨコナデ後体部下半はヘラケズリ、内面はカキ目状のナデ後ロクロナデが施されている。354~357・392は大甕で、この他同一個体と思われる胴部破片も出土しているものの接合しなかった。

〈時期〉埋土の様相及び出土遺物から9世紀後半から10世紀初頭の年代が推定される。

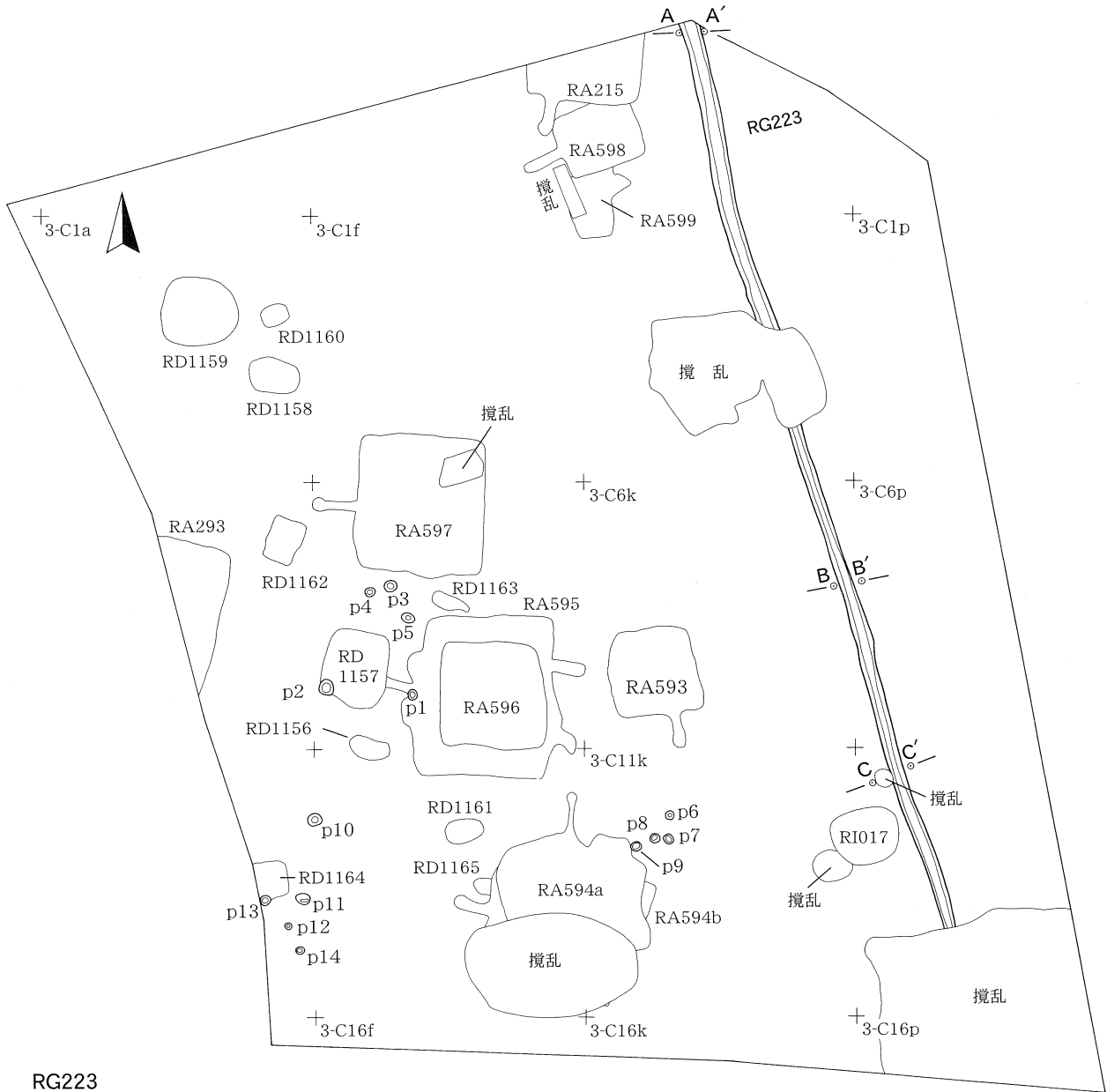
RG499溝跡(第58図、写真図版65・66)

〈位置・検出状況〉2-D9i~2-E22vグリッド付近に位置する。④層上面で検出された。

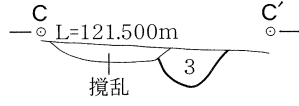
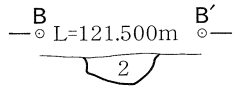
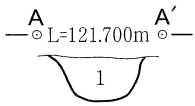
〈規模・形状〉北東-南西方向、直線状に延びる。北側はRG498溝跡と上下に重複し、26次調査区RG320溝跡へ続き、南側は旧河道へと注ぐ。調査区内で検出された全長は約50m、幅は4m程度であるが、南半のほとんどをRG498溝跡によって消失する。断面形は緩やかな弧を描く皿状を呈し、検出面からの深さは最



第60図 A区旧河道・基本層序



RG223

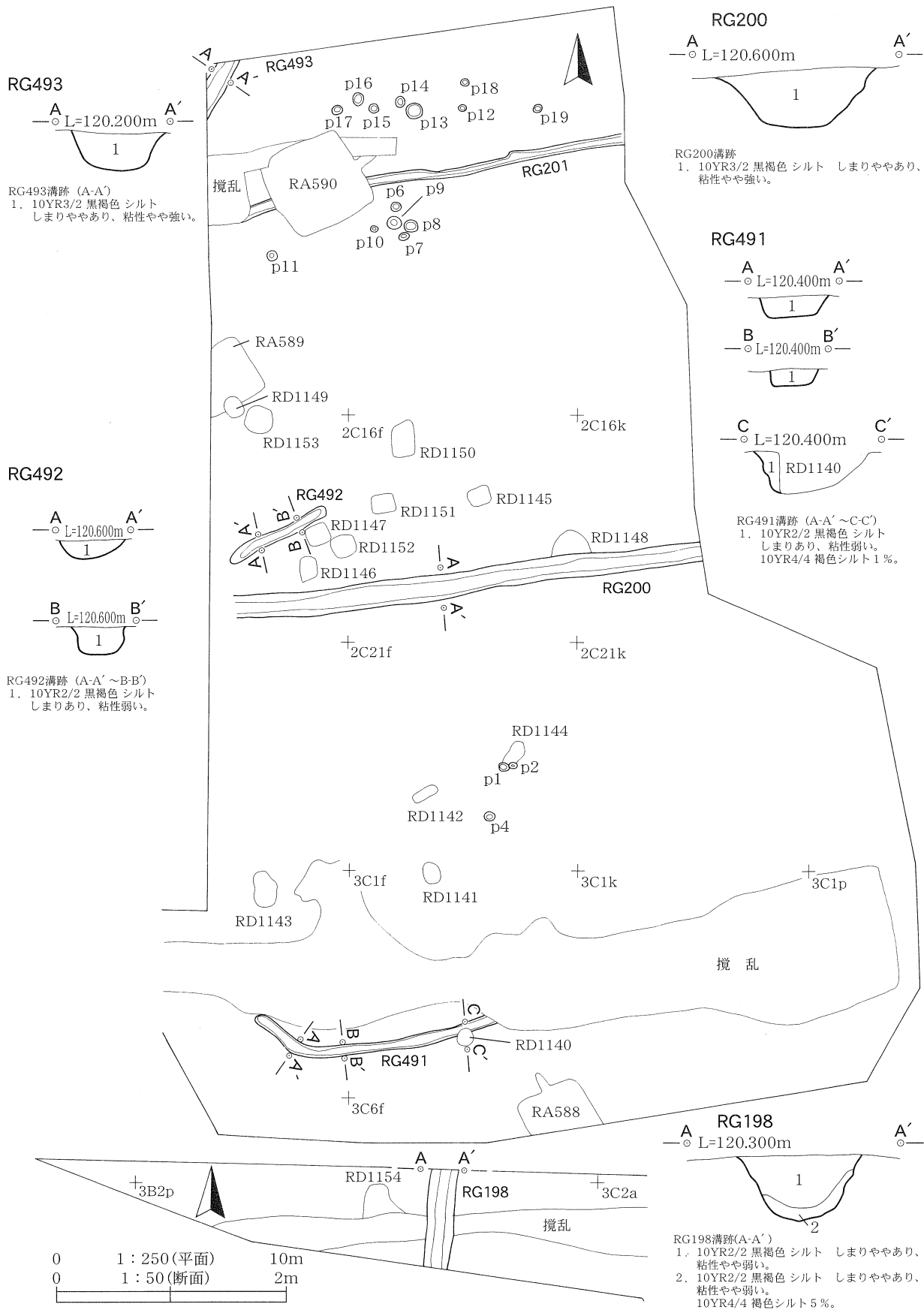


RG223溝跡 (A-A'~C-C')

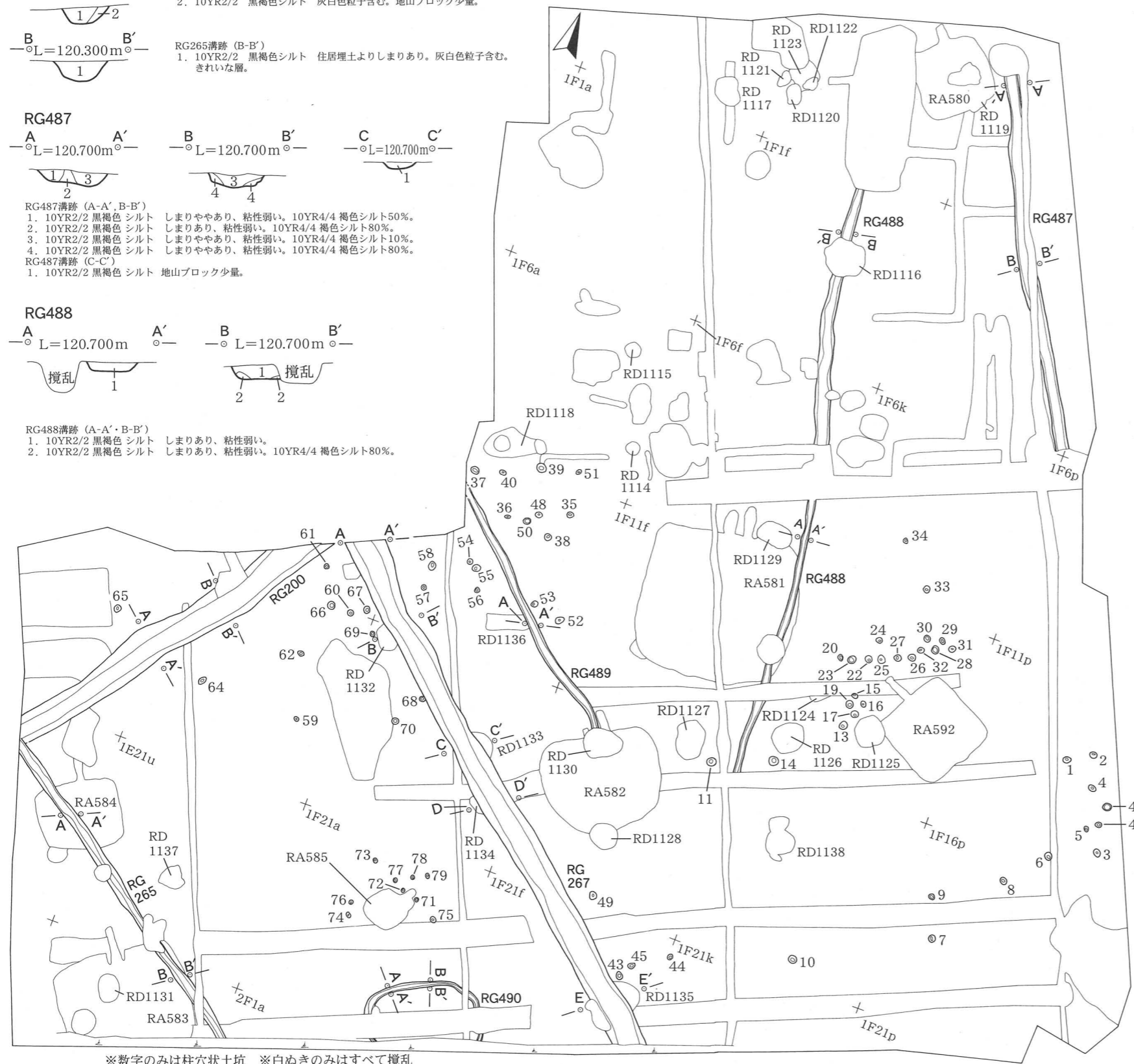
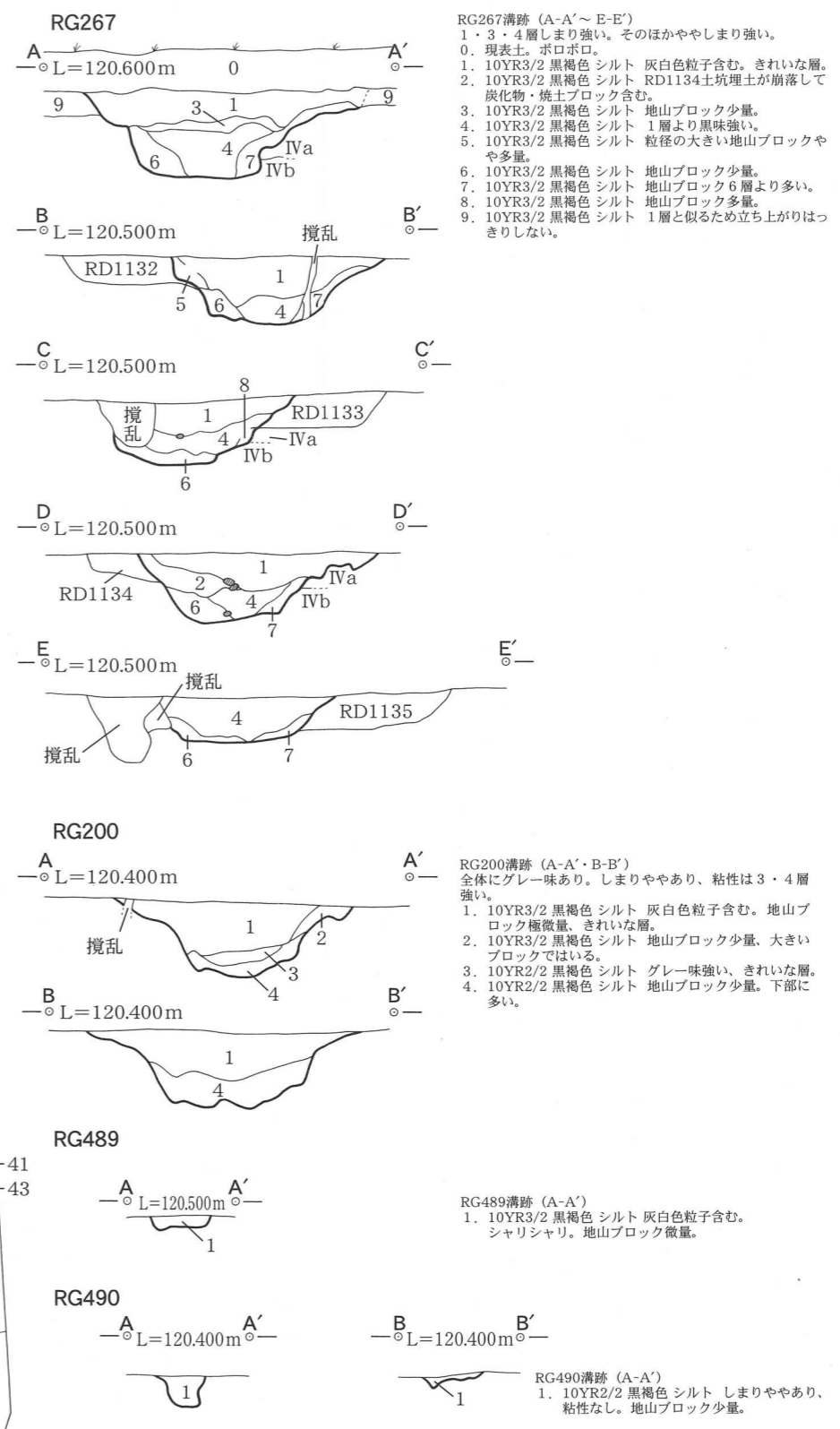
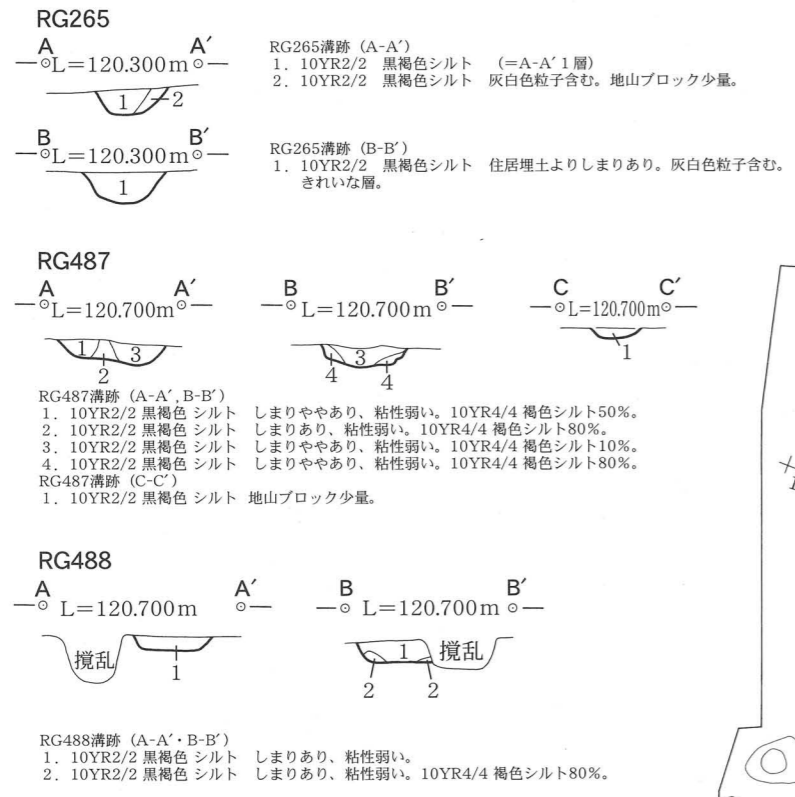
1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。10YR2/1 黒色シルト60%。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。10YR2/1 黒色シルト60%。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりなし、粘性弱い。10YR2/1 黒色シルト60%。小礫少量含む。

0 1 : 250 (平面) 10m
0 1 : 50 (断面) 2m

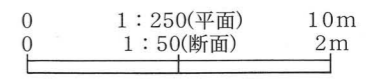
第61図 B区全体図



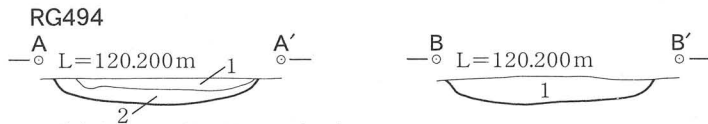
第62図 C区全体図



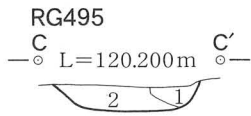
※数字のみは柱穴状土坑 ※白ぬきのみはすべて攪乱



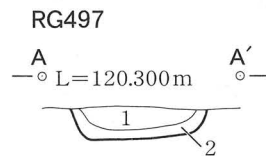
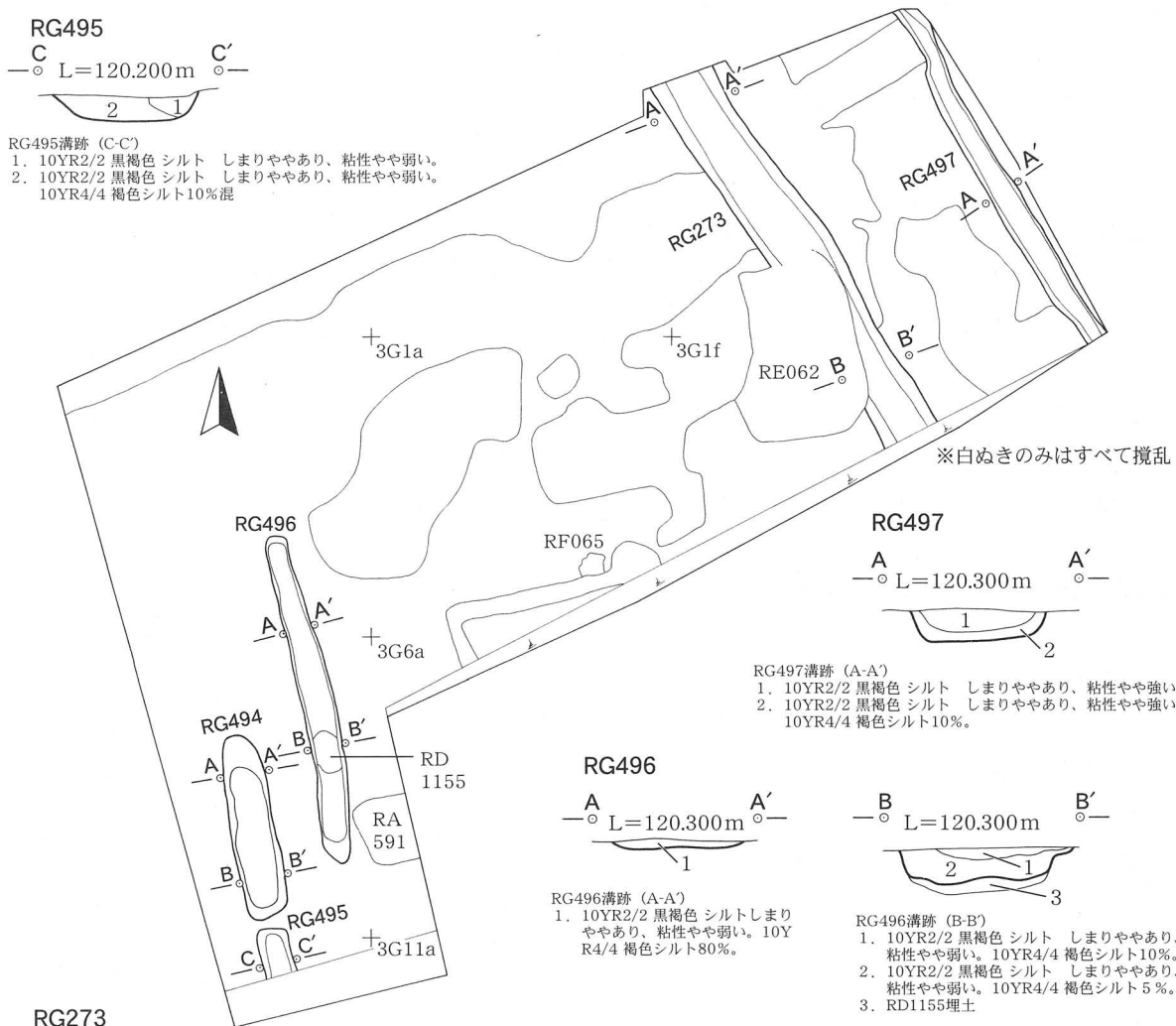
第63図 D区全体図



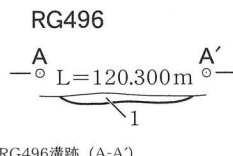
RG494溝跡 (A-A'~B-B') E[RD130 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト10%。



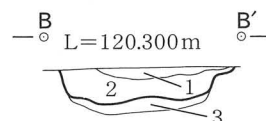
RG495溝跡 (C-C')
 1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
 10YR4/4 褐色シルト10%混



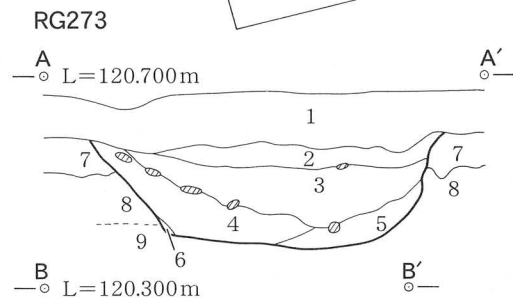
RG497溝跡 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや強い。
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや強い。
 10YR4/4 褐色シルト10%。



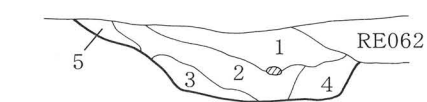
RG496溝跡 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色シルトしまりややあり、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト80%。



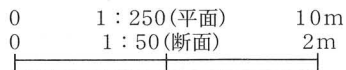
RG496溝跡 (B-B')
 1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト10%。
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト5%。
 3. RD1155埋土



RG273堀跡 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色シルト やや10YR2/3 黒褐色より。新期盛土。2層以下と似るがやや黒くしまり弱くボロボロ。陶器片はある。
 2. 10YR2/3 黒褐色シルト しまり3よりやや弱い。下面に礫含む。層中には小礫あり。
 3. 10YR2/3 黒褐色シルト しまりあり。層中に小礫、下面に礫含む。
 4. 10YR2/3 黒褐色シルト 上面及び層中央に大きい礫含む。2・3層よりやや明るい。
 5. 10YR2/3 黒褐色シルト 地山ブロック少量。4層より明るい。
 6. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 8・9層の混土層。壁崩落土？
 7. 10YR2/3 黒褐色シルト 地山粒含む。(III層)
 8. 10YR4/6 褐色シルト 上位との漸移層で汚れる。(IV層)
 9. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 砂礫層。小礫含む。(V層)



RG273堀跡 (B-B')
 1. 10YR2/3 黒褐色シルト 炭化物極微量、下面に礫はある、
 2. 10YR2/3 黒褐色シルト しまり1層より弱い。
 3. 10YR2/3 黒褐色シルト 地山ブロック少量。以下崩落層？
 4. 10YR2/3 黒褐色シルト 3層に似るが地山ブロックやや多い。
 5. 10YR2/3 黒褐色シルト 地山ブロック多量。



第64図 E区全体図

大50cm程度である。

〈埋土〉10YR3/1黒褐色シルト～砂質シルトを主体とする。底面に黒～黒褐色砂と地山砂を含むラミナ層(14・22層)、地山砂を全体に含む層(11層)、混入物の少ない粘性のある黒褐色土層、再びラミナ層の順で堆積する。南側は、主体土は変わらないものの砂の割合が多くなり、粒子も粗くなる(34～39層)。下部はグライ化し、グレー味が強い。遺物の出土量も少なく、炭化物を含む層(33層)は南端で僅かにみられるだけで自然堆積と思われる。また、すくなくとも本遺構廃絶時には旧河道がある程度埋没していたようである(H-H')。

〈重複〉R G 498・R G 501溝跡、R D 1168・1169土坑と重複する。切り合い関係からR G 498溝跡、R D 1168土坑より古い。R G 501溝跡は埋土から、R D 1169土坑は出土遺物から、いずれも本遺構より新しい可能性が高い。

〈遺物〉埋土上部からの出土が多く、器形を把握できるものが点在している状態で、破片はほとんど含まれていない。土師器坏5点、小形甕1点を掲載した。R G 489との重複部から出土したこれら381・384の2点も、形態から本遺構に伴う可能性が高い。土師器坏はいずれも外面に段を有し、393は内面にも段が見られる。器形は、381が平底、それ以外は丸底である。調整は外面底部ヘラケズリ、口縁部はヘラミガキもしくはヨコナデ、内面はヘラミガキが施される。397は内外面ともヘラミガキである。384・398は小形の非ロクロ土師器甕で、384は外面ヘラケズリ、内面はヘラミガキ、398は外面ヘラナデ、内面ハケメが施される。

〈時期〉埋土の様相・重複状況及び出土遺物から奈良時代の年代が推定される。

R G 500溝跡 (第58・59図、写真図版65)

〈位置・検出状況〉A区、2-E 25 q～3-E 2 oグリッド付近に位置する。④層上面で検出した。

〈規模・形状〉北東-南西方向、直線状に延びる。南北両端は重複を把握する前にR G 498・499溝跡埋土を掘り下げてしまったため、詳細は不明である。残存している全長は6.0m、幅0.5～0.6m。断面形は浅皿状を呈し、検出面からの深さは、10cmほどである。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトを主体とし、灰白色粒子を含む。R G 323溝跡埋土1層と似る。

〈重複〉R G 498 (499) 溝跡と重複する。切り合い関係を把握することはできなかったが、埋土に灰白色粒子を含むことから、少なくともR G 499溝跡より新しく、R G 498溝跡も本遺構に切られていた可能性が高い。

〈遺物〉出土しない。

〈時期〉埋土の様相から平安時代以降の年代が想定される。

R G 501溝跡 (第58・59図、写真図版65)

〈位置・検出状況〉A区、2-D 13 g～3-D 2 sグリッド付近に位置する。R G 498溝跡調査時に本遺構の一部を埋土を削平盛土と判断し掘り下げたところ、掘方が溝状となった。そのため周囲の再検出を試みると直線状に延びる黒褐色土の広がりを検出した。

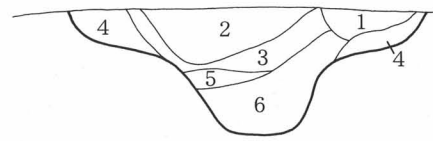
〈規模・形状〉北東-南西方向、直線状に延びる。北側はR D 1176土坑、南側はR G 319・323溝跡と重複し消失する。しかし南側は上述の通り、319溝跡上部層(13・14・18層)が本遺構の可能性が高い。平面形で検出された全長は36m、幅0.6～1.1m。断面形は浅皿状を呈し、検出面から僅かに窪む程度である。

〈埋土〉10YR2/2黒褐色シルトを主体とし灰白色粒子を含む。R G 323溝跡の埋土と似る。

〈重複〉R D 1173土坑と重複しこれを切る。R D 1176土坑、R G 319・323・498溝跡とも重複するが新旧関係は不明である。埋土に灰白色粒子の含まれることから、R G 498溝跡よりも新しい可能性が高い。また、

RG043

A L=120.500m A'

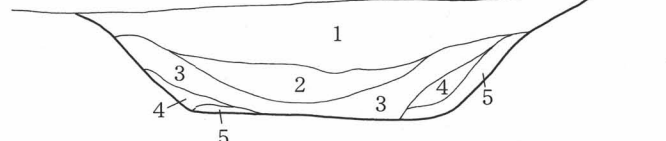


RG043溝跡(A-A')

- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性やや強い。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
- 10YR4/4 褐色シルト90%。10YR3/3暗褐色シルト5%。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性やや強い。
- 10YR4/4 褐色シルト15%。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
- 10YR3/3 暗褐色シルト80%。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。
- 10YR4/4 褐色シルト95%。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性強い。
- 10YR4/4 褐色シルト2%。

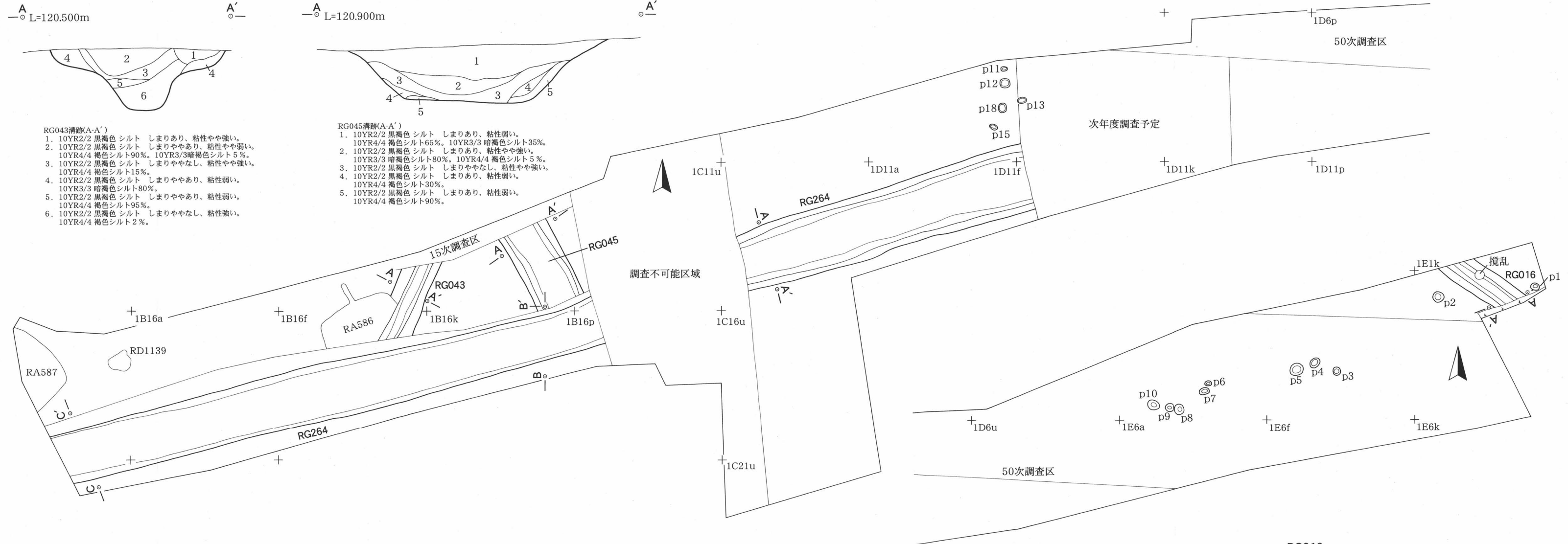
RG045

A L=120.900m A'



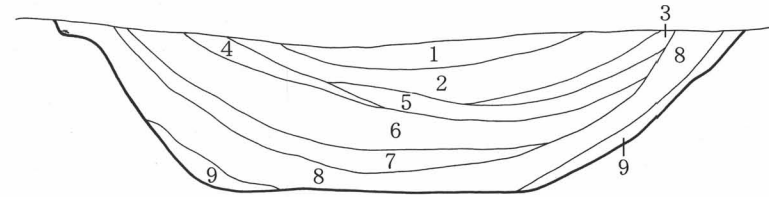
RG045溝跡(A-A')

- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。
- 10YR4/4 褐色シルト65%。10YR3/3 暗褐色シルト35%。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性やや強い。
- 10YR3/3 暗褐色シルト80%。10YR4/4 褐色シルト5%。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし、粘性やや強い。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。
- 10YR4/4 褐色シルト30%。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。
- 10YR4/4 褐色シルト90%。



RG264

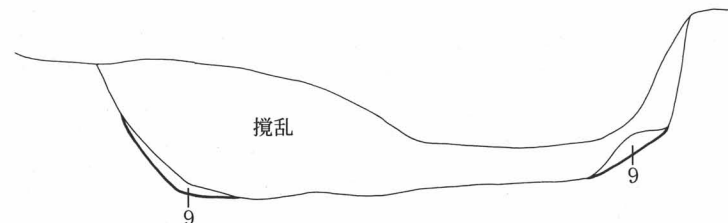
A L=120.900m A'



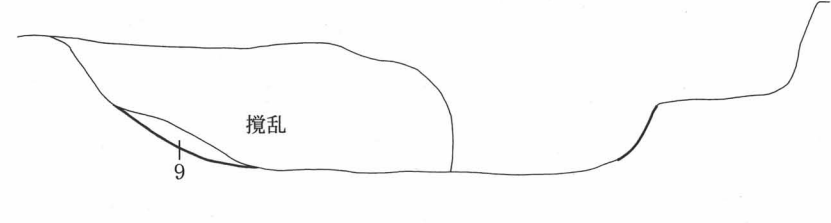
RG264溝跡(A-A'~C-C')

- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりあり、粘性弱い。10YR4/4 褐色シルト95%。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。10YR4/4 褐色シルト40%。10YR3/3暗褐色シルト50%。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。10YR4/4 褐色シルト30%。10YR3/3暗褐色シルト60%。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。10YR4/4 褐色シルト90%。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性弱い。10YR3/3暗褐色シルト90%。小石少量含む。
- 6~9は水酸化鉄のシミ強い
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト5%。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR4/4 褐色シルト80%。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR3/3暗褐色シルト80%。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり、粘性やや弱い。10YR3/3暗褐色シルト10%。10YR4/4 褐色シルト80%。

A' B L=121.100m B'

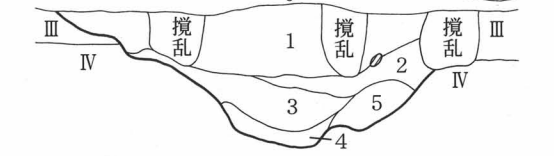


B' C L=121.000m C'



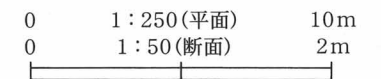
RG016

A L=120.600m A'



RG016溝跡(A-A')

- 10YR3/2 黒褐色シルト しまりあり。灰白色粒子含む。地山ブロック極微量のきれいな層。
- 10YR3/2 黒褐色シルト 1層よりしまり弱い。地山ブロック微量。
- 10YR3/2 黒褐色シルト グレー味強いきれいな層。
- 10YR3/2 黒褐色シルト 地山ブロック少量。3層よりグレー味強い。10YR4/2 灰黄褐色に近い。
- 10YR3/2 黒褐色シルト 地山ブロックやや多量。



第65図 F区全体図

R G 319溝跡埋土上部が本遺構と仮定すればこれを切ると判断される。

〈遺物〉 R D 1173土坑と重複部から2点出土し、これを掲載した。いずれも内面黒色処理される土師器坏で、250は底部にヘラケズリ再調整が施される。

〈時期〉 出土遺物及び埋土の様相から平安時代以降の年代が想定される。

R G 502溝跡 (第58・59図、写真図版65・66)

〈位置・検出状況〉 A区、2-D10 f～2-D11 d グリッド付近に位置する。④層上面で検出した。

〈規模・形状〉 北東-南西方向、直線状に延びる。南側は徐々に浅くなり消失し、北側はR D 1169・1170土坑と重複し確認できなかった。土坑北東側の拡張部及び隣接調査区(26次調査区)でも検出されていない。残存する全長は6.0m、幅1.0～1.5m。断面形は浅皿状に窪み、底面には凹凸がみられる。検出面からの深さは約10cmである。

〈埋土〉 10YR2/2黒褐色シルトを主体とし地山ブロックを多く含む。

〈重複〉 R D 1169・1170土坑と重複するが新旧関係は不明である。

〈遺物〉 土師器(内黒)、須恵器坏の口縁部小破片が出土している。

〈時期〉 出土遺物から平安時代以降の年代が想定される。

8. 柱穴状土坑

柱穴状の小穴をA～F区全体で約130基確認された。これらの中には掘立柱建物跡を構成する柱穴も含まれると思われるが、いずれも明確な並びはみられず、柱穴状土坑と一括して扱った。

9. 遺構外遺物

試掘、検出時及び、攪乱内より出土したもの、または明らかに遺構に伴わないと判断されたものを一括して扱った。土師器・須恵器、木製品、鉄製品、銭貨、土製品、縄文・弥生土器、石器、近世陶磁器が該当し、種別毎に掲載した(第106・108・109図、写真図版95・96・98～100)。須恵器・土師器は、出土地点が曖昧だが遺構に属する可能性があるもの(451～457。R G 498溝跡に属するか?)、遺構内での出土が少ない器種・器形のもの(458・459)を選別した。451は、内黒土師器坏で、底部内面に「丹」と刻書される。453の須恵器長頸瓶は胴部と頸部の変換点に絞り込みの痕跡が確認できる。木製品、鉄製品、銭貨、土製品は全点登録した。460は、板状の木製品で、側面に切り込みが見られる。A区旧河道側で出土しており、祭祀に係わる可能性もあるが、用途・性質ははっきりせず、時期も不明である。樹種はスギと鑑定されている。467～470は銭貨で467以外は全てE区より出土している。471・472は弥生時代の土製紡錘車と思われる。482～495は縄文・弥生土器で、すべてA区より出土している。482～488は縄文晩期のもので、本来は周囲の住居跡等に伴っていた可能性が高い。489～495はいずれもA区の溝跡から出土した土器片であるが、弥生時代後期に属するものと思われる。石器・石製品は遺構内外一緒に掲載したが、遺構外のは479・506・507・509である。A区からの出土が大半で、住居跡等との関連性が高いと思われるが、509はB区平安時代の住居床面より出土している。近世陶磁器は全点掲載した。517～521は肥前産の染付け磁器で18代のもと思われる。522は大堀相馬産の磁器碗である。その他、甕・鉢類は在地産のものが多い(524～528・530～532)。534は鳥形の水滴である。

表4 柱穴一覽

区域番号	位置	底面標高(m)	埋土	備考	図版	区域番号	位置	底面標高(m)	埋土	備考	図版		
A区	1	2-D16e	120.998	10YR2/2 黒褐色		58	D区	28	1F11n	120.200	10YR3/2 黒褐色		63
A区	2	2-D16e	121.020	10YR2/2 黒褐色		58	D区	29	1F11n	120.319	10YR3/2 黒褐色		63
A区	3	2-D15e	121.042	10YR2/2 黒褐色		58	D区	30	1F11n	120.168	10YR3/2 黒褐色		63
A区	4	2-D15f	121.016	10YR3/2 黒褐色		58	D区	31	1F110	120.195	10YR3/2 黒褐色		63
A区	5	2-D14f	120.815	10YR2/2 黒褐色		58	D区	32	1F11n	120.172	10YR3/2 黒褐色		63
A区	6	2-D15f	121.016	10YR2/2 黒褐色		58	D区	33	1F10m	120.170	10YR3/2 黒褐色		63
A区	7	2-D14f	—	10YR2/2 黒褐色		58	D区	34	1F9m	120.300	10YR4/1 褐灰色	攪乱か?	63
A区	8	2-D15f	121.028	—		58	D区	35	1F11d	120.190	10YR3/1 黒褐色		63
A区	9	2-D16f	120.768	—		58	D区	36	1F12c	120.173	10YR3/1 黒褐色		63
A区	10	2-D13h	—	10YR3/2 黒褐色		58	D区	37	1F11b	120.210	10YR3/1 黒褐色	遺物あり	63
B区	1	3C9g	121.072	10YR3/2 黒褐色		61	D区	38	1F12d	120.170	10YR3/1 黒褐色		63
B区	2	3C9f	120.905	10YR3/2 黒褐色		61	D区	39	1F10c	120.060	10YR3/1 黒褐色		63
B区	3	3C7g	120.985	10YR3/2 黒褐色		61	D区	40	1F11b	120.202	10YR3/1 黒褐色		63
B区	4	3C8g	121.270	10YR3/2 黒褐色		61	D区	41	1F14t	120.017	10YR3/2 黒褐色		63
B区	5	3C8g	121.240	10YR3/2 黒褐色		61	D区	43	1F14t	119.961	10YR4/1 褐灰色		63
B区	6	3C12l	121.353	10YR3/2 黒褐色		61	D区	43	1F22i	120.127	10YR3/2 黒褐色	攪乱か?	63
B区	7	3C12l	121.143	10YR3/2 黒褐色		61	D区	44	1F21k	120.155	10YR3/2 黒褐色		63
B区	8	3C12l	121.138	10YR3/2 黒褐色		61	D区	45	1F21j	120.177	10YR3/2 黒褐色		63
B区	9	3C12k	121.116	10YR3/2 黒褐色		61	D区	46	欠番	—	10YR3/2 黒褐色		63
B区	10	3C12e	121.089	10YR3/2 黒褐色		61	D区	47	欠番	—	10YR3/2 黒褐色		63
B区	11	3C13e	121.275	10YR3/2 黒褐色		61	D区	48	1F12d	119.760	10YR3/1 黒褐色		63
B区	12	3C14e	121.250	10YR3/2 黒褐色		61	D区	49	1F20h	119.942	10YR3/1 黒褐色		63
B区	13	3C13e	121.310	10YR3/2 黒褐色		61	D区	50	1F12c	120.123	10YR3/1 黒褐色		63
B区	14	3C14e	121.140	10YR3/2 黒褐色		61	D区	51	1F10d	120.118	10YR3/1 黒褐色		63
C区	1	2C23j	120.228	10YR3/2 黒褐色		62	D区	52	1F14e	120.148	10YR3/2 黒褐色		63
C区	2	2C23j	120.213	10YR4/1 褐灰色		62	D区	53	1F14d	120.168	10YR3/2 黒褐色		63
C区	3	3C12d	120.170	10YR4/1 褐灰色		62	D区	54	1F13b	120.100	10YR3/1 黒褐色		63
C区	4	3C9i	119.976	10YR3/2 黒褐色		62	D区	55	1F13b	120.098	10YR3/1 黒褐色		63
C区	5	3C9h	119.985	10YR3/2 黒褐色		62	D区	56	1F14c	120.088	10YR3/1 黒褐色		63
C区	6	3C9h	120.170	10YR4/1 褐灰色		62	D区	57	1F14a	119.881	10YR3/1 黒褐色		63
C区	7	3C9g	120.164	10YR3/2 黒褐色		62	D区	58	1F14a	119.904	10YR3/1 黒褐色		63
C区	8	3C9g	120.198	10YR3/2 黒褐色		62	D区	59	1F19y	119.835	10YR3/2 黒褐色		63
C区	9	3C9e	120.226	10YR3/2 黒褐色		62	D区	60	1F16y	120.114	10YR3/2 黒褐色		63
C区	10	3C8i	120.782	10YR3/2 黒褐色		62	D区	61	1F15x	119.838	10YR3/2 黒褐色		63
C区	11	3C9k	120.068	10YR3/2 黒褐色		62	D区	62	1F17x	120.080	10YR3/1 黒褐色		63
C区	12	3C11h	120.108	10YR3/2 黒褐色		62	D区	63	欠番	—	10YR3/1 黒褐色		63
C区	13	3C11g	120.190	10YR3/2 黒褐色		62	D区	64	1F18y	119.848	10YR3/2 黒褐色		63
C区	14	3C11g	119.976	10YR3/2 黒褐色		62	D区	65	1F17s	120.070	10YR3/1 黒褐色		63
C区	15	3C11h	120.123	10YR3/2 黒褐色		62	D区	66	1F16x	120.128	10YR3/2 黒褐色		63
C区	16	3C12h	120.275	10YR3/2 黒褐色		62	D区	67	1F15y	120.160	10YR3/2 黒褐色		63
D区	1	1F13r	120.105	10YR4/1 褐灰色	攪乱か?	63	D区	68	1F17b	120.000	10YR3/2 黒褐色		63
D区	2	1F12s	119.967	10YR4/1 褐灰色	攪乱か?	63	D区	69	1F16a	120.120	10YR3/2 黒褐色		63
D区	3	1F15t	120.229	10YR3/2 黒褐色		63	D区	70	1F18b	119.855	10YR3/2 黒褐色		63
D区	4	1F13s	120.138	10YR3/2 黒褐色		63	D区	71	1F22d	119.968	10YR3/1 黒褐色		63
D区	5	1F14s	120.157	10YR3/2 黒褐色		63	D区	72	1F22d	120.023	10YR3/1 黒褐色		63
D区	6	1F15s	120.145	10YR4/1 褐灰色	攪乱か?	63	D区	73	1F21c	119.996	10YR3/1 黒褐色		63
D区	7	1F18g	119.999	10YR4/1 褐灰色	攪乱か?	63	D区	74	1F23b	119.990	10YR3/1 黒褐色		63
D区	8	1F16r	119.900	10YR3/2 黒褐色		63	D区	75	1F22e	120.139	10YR3/1 黒褐色		63
D区	9	1F17p	119.912	10YR3/2 黒褐色		63	D区	76	1F22b	120.072	10YR3/1 黒褐色		63
D区	10	1F20m	119.875	10YR3/2 黒褐色		63	D区	77	1F22c	120.077	10YR3/1 黒褐色		63
D区	11	1F16j	120.165	10YR4/1 褐灰色	攪乱か?	63	D区	78	1F22d	120.084	10YR3/1 黒褐色		63
D区	12	欠番	—	10YR4/1 褐灰色	攪乱か?	63	D区	79	1F21d	120.094	10YR3/2 黒褐色		63
D区	13	1F14m	120.212	10YR4/1 褐灰色	攪乱か?	63	F区	1	1E1g	—			65
D区	14	1F15k	120.178	10YR4/1 褐灰色	攪乱か?	63	F区	2	1E1k	—			65
D区	15	1F13m	120.172	10YR3/2 黒褐色		63	F区	3	1E4h	—			65
D区	16	1F13m	120.214	10YR4/1 褐灰色	攪乱か?	63	F区	4	1E4g	—			65
D区	17	1F14m	120.208	10YR4/1 褐灰色	攪乱か?	63	F区	5	1E4g	—			65
D区	18	欠番	—	10YR3/2 黒褐色		63	F区	6	1E4c	—			65
D区	19	1F13m	120.250	10YR3/2 黒褐色		63	F区	7	1E5c	—			65
D区	20	1F12l	120.120	10YR3/2 黒褐色		63	F区	8	1E5c	—			65
D区	21	欠番	—	10YR4/1 褐灰色	攪乱か?	63	F区	9	1E5b	—			65
D区	22	1F12m	120.090	10YR3/2 黒褐色		63	F区	10	1E5b	—			65
D区	23	1F12l	120.200	10YR3/2 黒褐色		63	F区	11	1D7e	—			65
D区	24	1F12m	120.100	10YR3/2 黒褐色		63	F区	12	1D8e	—			65
D区	25	1F12m	120.092	10YR3/2 黒褐色		63	F区	13	1D8f	—			65
D区	26	1F12n	120.182	10YR3/2 黒褐色		63	F区	14	1D9e	—			65
D区	27	1F12m	120.115	10YR3/2 黒褐色		63	F区	15	1D9e	—			65

表5 遺構一覧(1)

種類	遺構名	区域	グリッド	規模(m) ※1	主軸方向	カマド	重複※2	勤務※3	執筆	仮番号	備考
住居	RA580	D区	-1F21i	N3.3・S3.6・W2.8<・E3.4	N-31° -W	北壁/N-35° -W	<RD1119	○	石崎	RA101	
住居	RA581	D区	1F12h	N6.7・S7.0・W6.8・E6.8	N-10° -W	北壁/N-8° -W	<RD1129・RG487	○	中村	RA106	2時期あり
住居	RA582	D区	1F18g	(新)N4.9・S4.0・W4.3・E3.9 (古)N4.0・S4.0・W3.4・E3.8	N-32° -W	(新)北壁/N-36° -W (古)北壁/N-30° -W	<RD1128・1130	○	中村	RA107	2時期あり
住居	RA583	D区	2E2v	N6.0・S-・W3.0<・E5.1<	N-32° -W	北壁/N-35° -W	<RD1131・RG265	○	中村	RA108	2時期あり?
住居	RA584	D区	1F23u	N4.0・S3.9・W2.7・E3.1	N-30° -W	北壁/N-30° -W	<RG265	○	中村	RA109	
住居	RA585	D区	1F22d	N1.6・S1.8・W1.7・E1.6	N-35° -E	北壁/N-34° -E		○	中村	RA110	
住居	RA586	F区	1C15g	N2.4・S0.25<・W0.75<・E-	N-17° -W	北壁/N-28° -W	<RG043	○	石崎	RA020	
住居	RA587	F区	1B16v	N-・S2.9<・W4.8<・E-	N-45° -W			○	石崎	RA021	
住居	RA588	C区	3C4j	N2.9・S1.5<・W2.5<・E1.5<	N-30° -W	北壁/N-33° -W		○	石崎	RA022	
住居	RA589	C区	2C14c	N1.2<・S2.9・W-・E2.7	N-35° -W	北壁	<RD1149	○	石崎	RA023	
住居	RA590	C区	2C10d	N(3.6)・S3.7・W(3.6)・E3.6	N-30° -W	東壁/N-55° -E	#RG201	○	石崎	RA024	
住居	RA591	E区	3F8y	N1.7<・S1.3<・W2.2・E-	N-25° -W			×	石崎	RA102	
住居	RA592	D区	1F14o	N3.9・S4.1・W3.9・E4.0	N-61° -W	西壁/N-60° -W	RD1124	○	中村	RA105	
住居	RA593	B区	3-C9k	N2.7・S3.3・W3.0・E3.1	N-15° -W	南壁/N-165° -E		○	石崎	RA010	
住居	RA594	B区	3-C12i	N4.4・S4.4・W5.4・E5.4	N-30° -E	北壁/	<RD1165	○	石崎	RA011	ab重複あり
住居	RA595	B区	3-C10g	N4.7・S4.8・W5.9・E6.1	N-4° -E	西壁/N-77° -W	>RA596<RD1157	○	石崎	RA012	
住居	RA596	B区	3-C9h	N3.4・S3.7・W3.8・E3.7	N-0° -E	北東壁/N-95° -E	<RA595	○	石崎	RA014	
住居	RA597	B区	3-C5f	N4.5・S4.5・W4.9・E5.0	N-4° -E	西壁/N-90° -W		○	石崎	RA016	
住居	RA598	B区	2-C24j	N1.6<・S2.9・W2.2・E1.9<	N-25° -W	西壁/N-110° -W	<RA215>RA599	△	石崎	RA017	
住居	RA599	B区	2-C25j	N-・S1.2・W1.5<・E2.5<	N° -	東壁/N-85° -E	<RA598	△	石崎	RA018	
住居	RA215	B区	2-C24j	N3.9・S4.0・W3.3・E3.5	N-7° -E	南壁/N-168° -W	>RA598	△	石崎	RA013	(23次調査)
住居	RA293	B区	3-C1c	N6.4・S6.6・W6.2・E6.2	N-10° -E	西壁/		○	石崎	RA015	(23次調査)
住居	RA600	A区	2-D10f	4.0<				○	中村	RA001	
住居	RA601	A区	2-D13f	4.0<				○	中村	RA002	
住居	RA602	A区	2-D12h	7.5<・4.0<				○	中村	RA003	
住居	RA603	A区	2-D9i					○	中村	RA004	
住居状	RE062	E区	2G25h	6.0<・4.3				○	中村	RA103	
住居状	RE063	A区	2-D7i	3.7				○	中村	RA004	
住居状	RE064	A区	2-D14c	5.0<				○	中村	RA004	
土坑	RD1116	D区	1F2h	2.1×1.9			>RG487	×	石崎	RD104	
土坑	RD1117	D区	-1F25d	1.5×1.2				○	石崎	RD114	
土坑	RD1118	D区	1F11b	2.2×1.4				○	石崎	RD116	
土坑	RD1119	D区	-1F23j	1.35×0.6			>RA580	×	石崎	RD119	
土坑	RD1120	D区	-1F24f	1.0×0.8			>RD1123	×	石崎	RD122	
土坑	RD1121	D区	-1F24e	0.9×0.5			>RD1123	×	石崎	RD123	
土坑	RD1122	D区	-1F24f	0.85×0.5			>RD1123	×	石崎	RD125	

※1 <以上・()推定

※2 >旧、<新、≠不明

※3 ○掲載、△不掲載、×なし

表5 遺構一覧(2)

種類	遺構名	区域	グリッド	規模 (m) ※1	主軸方向	カマド	重複※2	聴3	執筆	仮番号	備考
土坑	RD1123	D区	-1F23e	(1.5)×(1.3)			<RD1120~1122	×	石崎	RD126	
土坑	RD1124	D区	1F13i	1.1<×0.3<				×	中村	RD131	
土坑	RD1125	D区	1F14m	1.7×1.6			>RA592	×	中村	RD132	
土坑	RD1126	D区	1F15k	1.6×1.6				×	中村	RD133	
土坑	RD1127	D区	1F16i	2.0×1.5				×	中村	RD134	
土坑	RD1128	D区	1F19h	1.5×1.3			>RA582	×	中村	RD135	
土坑	RD1129	D区	1F10i	1.8×1.1			>RA581	×	中村	RD136	
土坑	RD1130	D区	1F17g	2.0×1.5			>RA582	○	中村	RD137	
土坑	RD1131	D区	2E2v	1.4×1.1			>RA583	×	中村	RD138	
土坑	RD1132	D区	1E16y	1.3<×1.1<			<RG267	△	中村	RD139	
土坑	RD1133	D区	1E18d	1.6<×0.9<			<RG267	△	中村	RD140	
土坑	RD1134	D区	1F19e	1.2<×0.6<			<RG267	○	中村	RD141	
土坑	RD1135	D区	1F22j	1.8<×1.0<			<RG267	△	中村	RD142	
土坑	RD1136	D区	1F15d	2.3×0.8			<RG498	○	中村	RD144	
土坑	RD1137	D区	1E24w	1.2×1.2				×	中村	RD145	
土坑	RD1138	D区	1F18i	1.5×1.2				×	中村	RD146	
土坑	RD1139	F区	1B17y	1.5×1.2				×	石崎	RD050	
土坑	RD1140	C区	3C4h	0.7×0.7			>RG491	×	石崎	RD054	
土坑	RD1141	C区	2C25j	1.0×0.8				×	石崎	RD055	
土坑	RD1142	C区	2C24i	1.1×0.5				△	石崎	RD056	
土坑	RD1143	C区	3C1d	1.6×1.0				×	石崎	RD057	
土坑	RD1144	C区	3C23i	1.3×0.6				×	石崎	RD058	
土坑	RD1145	C区	2C17h	1.0×0.8				×	石崎	RD059	
土坑	RD1146	C区	2C19e	1.1×0.8				×	石崎	RD060	
土坑	RD1147	C区	2C18e	1.0×0.9				×	石崎	RD061	
土坑	RD1148	C区	2C18j	1.8<×1.0<			<RG200	×	石崎	RD062	
土坑	RD1149	C区	2C15c	0.9×0.7				×	石崎	RD063	
土坑	RD1150	C区	2C16g	1.6×1.0				×	石崎	RD064	
土坑	RD1151	C区	2C17f	1.0×0.8				×	石崎	RD065	
土坑	RD1152	C区	2C18f	1.1×1.0				×	石崎	RD067	
土坑	RD1153	C区	2C15d	1.2×1.2				×	石崎	RD068	
土坑	RD1154	C区	3B2t	1.9<×1.3<				○	石崎	RD069	
土坑	RD1155	E区	3F7y	1.5×0.8			<RG496	×	石崎	RD131	
土坑	RD1156	B区	3-C10k	1.5×0.8				○	石崎	RD034	
土坑	RD1157	B区	3-C9f	2.9×2.4			>RA595	○	石崎	RD036	
土坑	RD1158	B区	3-C7k	1.8×1.3				○	石崎	RD037	

※1 <以上・()推定

※2 >旧、<新、≠不明

※3 ○掲載、△不掲載、×なし

表5 遺構一覽(3)

種類	遺構名	区域	グリッド	規模 (m) ※1	主軸方向	カマド	重複※2	遺物※3	執筆	仮番号	備考
土坑	RD1159	B区	3-C2c	2.8×2.6				○	石崎	RD039	
土坑	RD1160	B区	3-C2e	1.0×0.8				×	石崎	RD041	
土坑	RD1161	B区	3-C12h	1.4×0.9				×	石崎	RD043	
土坑	RD1162	B区	3-C7e	1.7×1.3				○	石崎	RD044	
土坑	RD1163	B区	3-C8h	1.4×0.8				△	石崎	RD045	
土坑	RD1164	B区	3-C13e	1.5<×1.15<				△	石崎	RD046	
土坑	RD1165	B区	3-C13i	0.65<×0.55			> RA594b	○	石崎	RZ001	
土坑	RD1166	A区	2-D16g	1.8×1.1			> RG319	△	中村	RD001	
土坑	RD1167	A区	2-D14g	2.1×1.4			> RA601	○	中村	RD002	
土坑	RD1168	A区	2-D16a	2.6×2.3			> RG499	○	中村	RD003	
土坑	RD1169	A区	2-D10g	2.3×1.6			> RD1170≠RG498	○	中村	RD004	
土坑	RD1170	A区	2-D9g	1.6<×2.0<			< RD1169≠1171	○	中村	RD005	
土坑	RD1171	A区	2-D9f	2.6<×0.5			≠RD1170	×	中村	RD006	
土坑	RD1172	A区	2-E21u	2.4×1.9				×	中村	RD007	
土坑	RD1173	A区	2-D15e	1.7×1.3			< RG501	○	中村	RD008	
土坑	RD1174	A区	2-D16e	1.1×0.8<			≠RG319	×	中村	RD009	
土坑	RD1175	A区	3-E2r	2.3×1.6			< RG323	△	中村	RD010	
土坑	RD1176	A区	2-D13h	3.7<×2.3			≠RD1179	△	中村	RD020	
土坑	RD1177	A区	2-D15i	1.8×1.0<			< RG502	×	中村	RD021	
土坑	RD1178	A区	2-D15i	0.5×0.5				×	中村	RD022	
土坑	RD1179	A区	2-D14h	0.9×0.8			≠RD1176	×	中村	RD023	
土坑	RD1180	A区	2-D10e	2.5×1.7				×	中村	RD026	
礎土遺構	RF065	E区	3G3d					×	石崎	RF001	
井戸	RI017	B区	3-C12o	2.5×2.0				○	石崎	RI001	
溝跡	RG016	F区	1E11	全長4.5/幅2.5				×	中村	RG113	15次調査・RG267と同一か？
溝跡	RG043	F区	1C14j~ 1C17i	全長5.4/幅2.2~2.3			≠RG264	△	石崎	RG058	18・23次調査
溝跡	RG045	F区	1C13m~ 1C15p	全長5.6/幅3.4			≠RG264	×	石崎	RG045	15・18・23次調査
溝跡	RG198	C区	3B1v~ 3C3v	全長4.3/幅1.0~1.1				△	石崎	RG054	仮西側・23次調査
溝跡	RG200	C区	2C20d~ 2C18m	全長10.6/幅0.4~0.6			> RD1148	△	石崎	RG056	23次調査
溝跡	RG200	D区	1F21r~ 1E10w	全長19.0/幅1.4~1.9			≠265	×	石崎	RG114	23次調査
溝跡	RG201	C区	2C11d~ 2C9j	全長16.6/幅0.3~0.45			≠RA590	×	石崎	RG054	23次調査
溝跡	RG223	B区	2-C22m~ 3-C14p	全長34.5/幅0.3~0.35				×	石崎	RG020	23次調査
堀跡	RG264	F区	1B19v~ 1D15f	全長68.0/幅4.0~4.5			≠RG43・45、RA586	×	石崎	RG050	23次調査

※1 <以上・()推定

※2 >旧、<新、≠不明

※3 ○掲載、△不掲載、×なし

表5 遺構一覧(4)

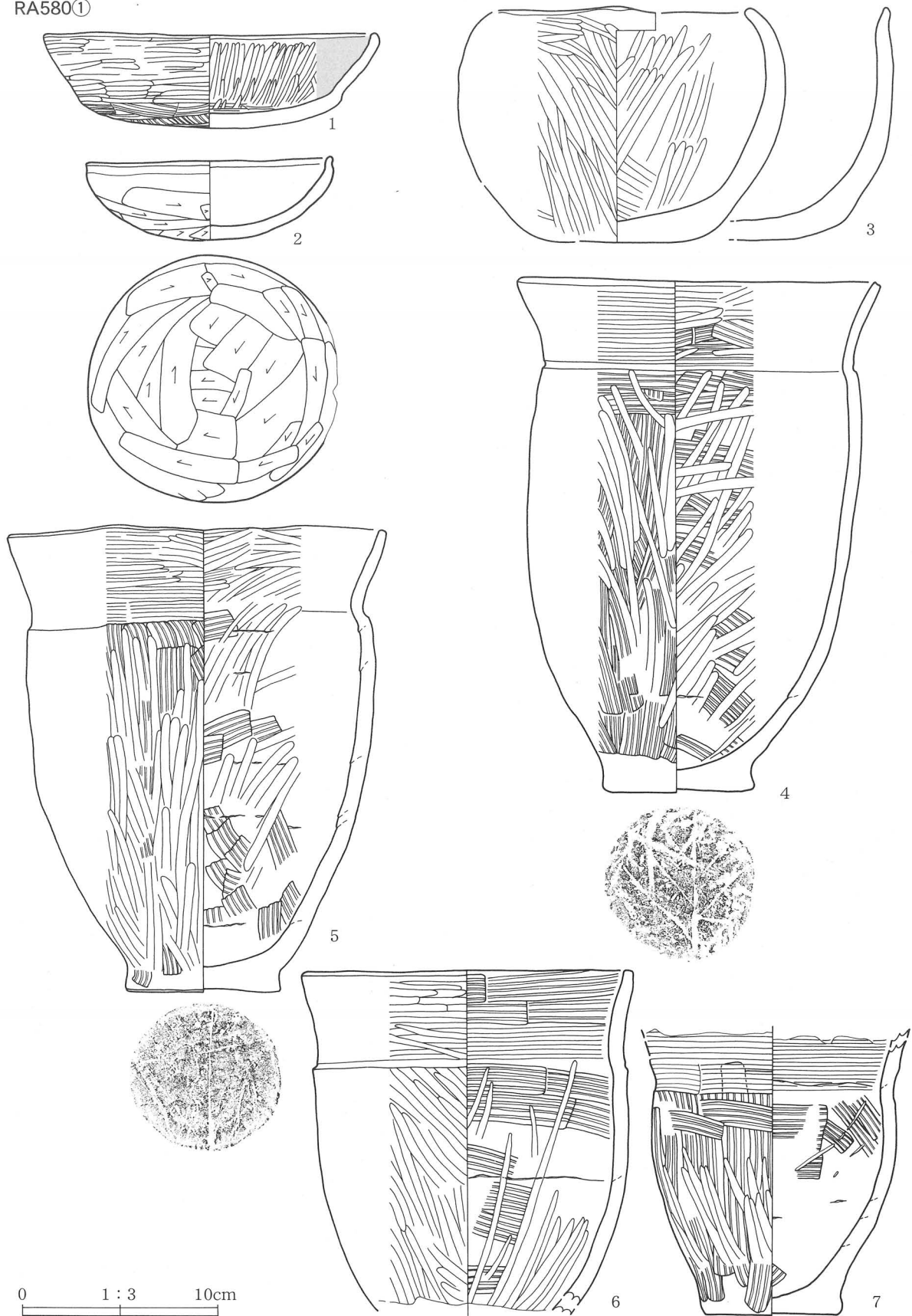
種類	遺構名	区域	グリッド	規模 (m) ※1	主軸方向	カマド	重複※2	遺跡※3	執筆	仮番号	備考
溝跡	RG265	D区	1E22r~ 2E25y	全長18.5/幅0.2~0.3			<RA583・584# RG200 >RD1132~1135	×	中村	RG112	23次調査
溝跡	RG267	D区	1E14x~ 1F24j	全長29.0/幅1.1~1.6				△	中村	RG113	23次調査
溝跡	RG273	E区	2G21e~ 3G2j	全長14.5/幅2.0~2.2			<RE062	×	中村	RG105	22次調査・44次調査 RG461とも同一か?
溝跡	RG319	A区	2-D13i~ 3-E17e	全長85.0/幅1.0~1.4			<RG323#RG501	○	中村	RG002	26次調査
溝跡	RG323	A区	2-D14i~ 3-E7l	全長60.0/幅0.4~0.5			>RG319#RG501	○	中村	RG003	26次調査
溝跡	RG487	D区	-F23k~ 1F5m	全長18.8/幅0.6~0.7				×	中村	RG101 RG111	50次調査
溝跡	RG488	D区	1F1h~ 1F16j	全長30.6/幅0.15~0.30			>RA581<RD1161	×	石崎	RG104	50次調査
溝跡	RG489	D区	1F12b~ 1F16f	全長11.0/幅0.15~0.25			<RD1130?	×	中村	RG115	
溝跡	RG490	D区	1F25d~ 1F25g	全長6.0/幅0.2				×	中村	RG116	
溝跡	RG491	C区	3C4d~ 3C4i	全長10.7/幅0.4~0.6			<RD1140	△	石崎	RG051	
溝跡	RG492	C区	2C19c~ 2C18e	全長4.7/幅0.5~0.6				△	石崎	RG052	
溝跡	RG493	C区	2C8c~ 2C9b	全長3.1/幅0.9				△	石崎	RG055	RG43, 271・272, RG286・269の可能性あり
溝跡	RG494	E区	3F7w~ 3F10x	全長6.0/幅1.4				△	石崎	RD130	
溝跡	RG495	E区	3F11x	全長1.7/幅1.0				×	石崎	RG106	
溝跡	RG496	E区	3F4x~ 3F10y	全長11.0/幅0.8~1.1			>RD1155	△	石崎	RG107	
溝跡	RG497	E区	2G20i~ 3G1m	全長12.4/幅0.6~1.0				△	石崎	RG108	18・23次調査
溝跡	RG498	A区	2-D9i~ 2-E22v	全長35.0/幅1.3~2.7<			>RG499 #RG501, RD1169	○	中村	RG001	26次調査, RG320の可能 性あり
溝跡	RG499	A区	2-D9i~ 3-E1o	全長50.0/幅>4.0			<RG498・501, RD1168・1169	○	中村	RG004	26次調査, RG320の可能 性あり
溝跡	RG500	A区	2-E25q~ 3-E2o	全長6.0/幅0.5~0.6			>RG499・498?	×	中村	RG005	
溝跡	RG501	A区	2-D13g~ 3-E2s	全長36.0/幅0.6~1.1			>RG498・319? #RG323	○	中村	RG006	
溝跡	RG502	A区	2-D10f~ 2-D11d	全長6.0/幅1.0~1.5			#RD1169・1170	△	中村	RG007	

※1 <以上・()推定

※2 >旧、<新、#不明

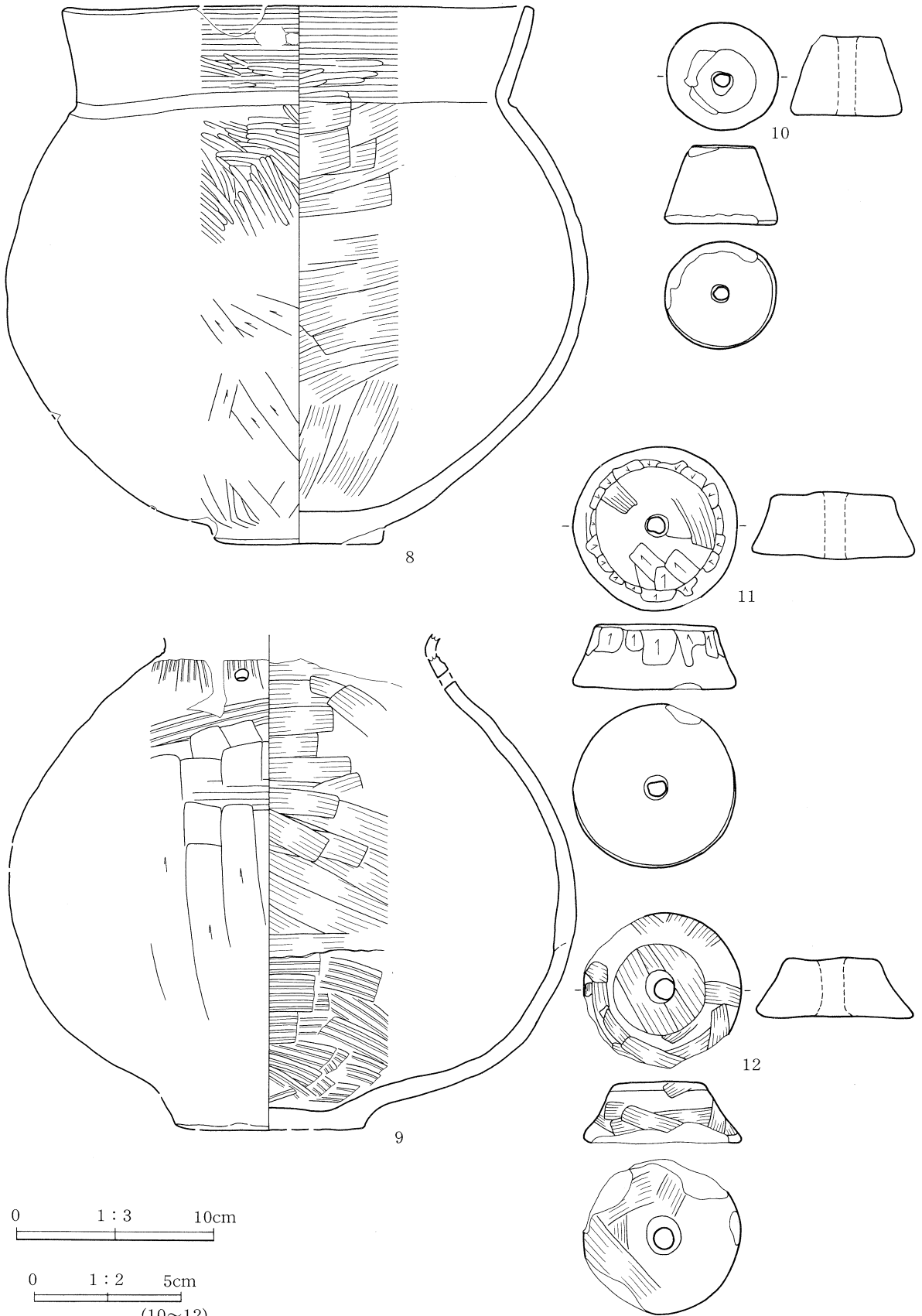
※3 ○掲載、△不掲載、×なし

RA580①



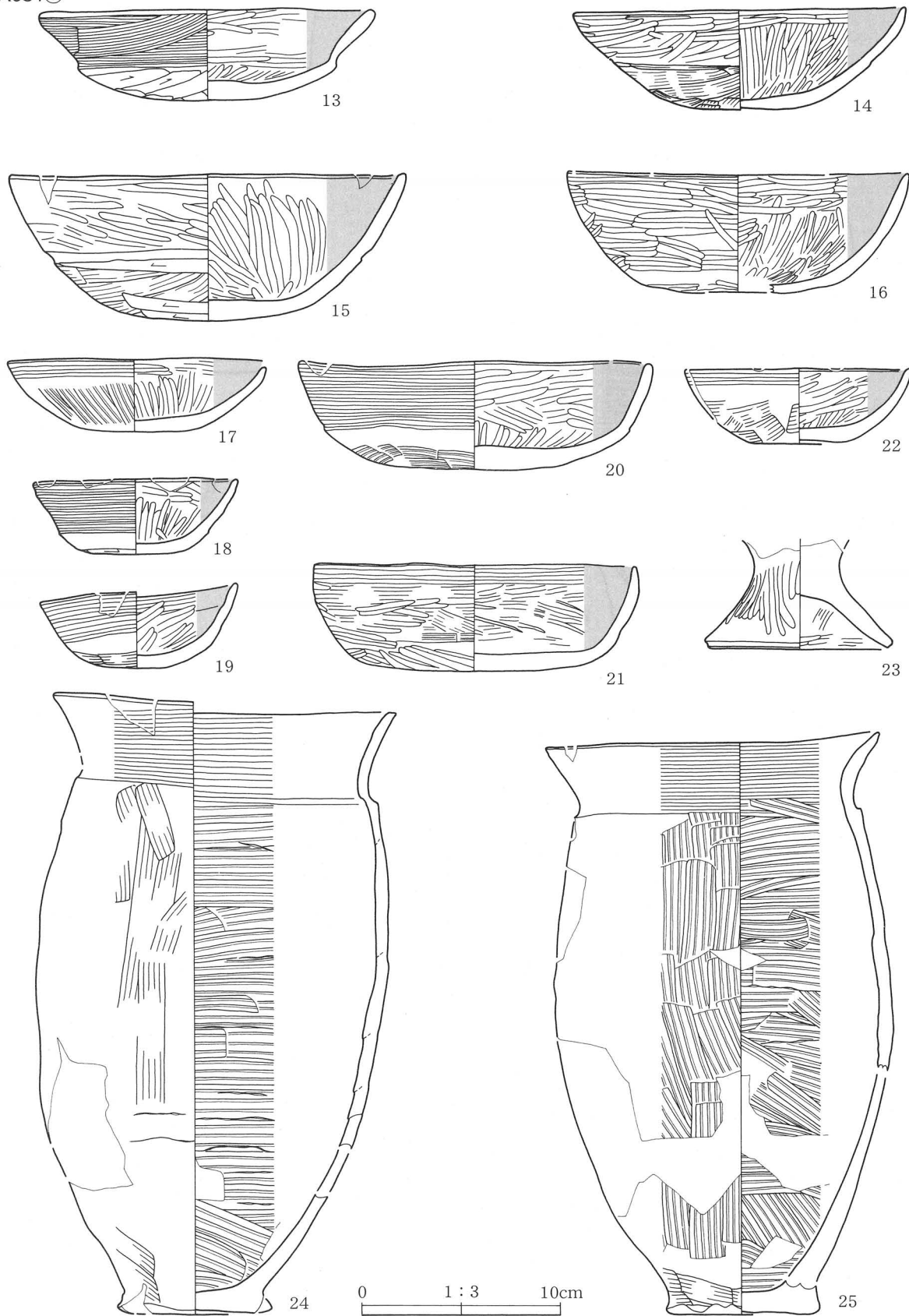
第66图 RA竖穴住居跡出土遺物(1)

RA580②



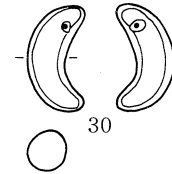
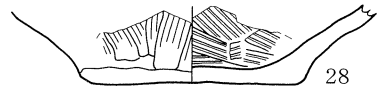
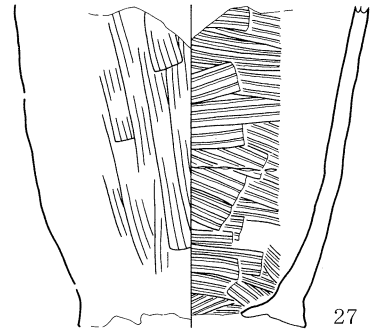
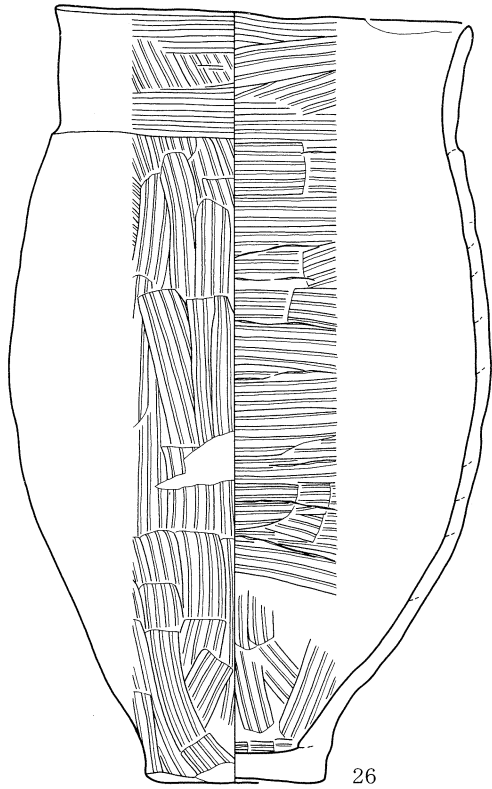
第67図 RA豎穴住居跡出土遺物(2)

RA581①

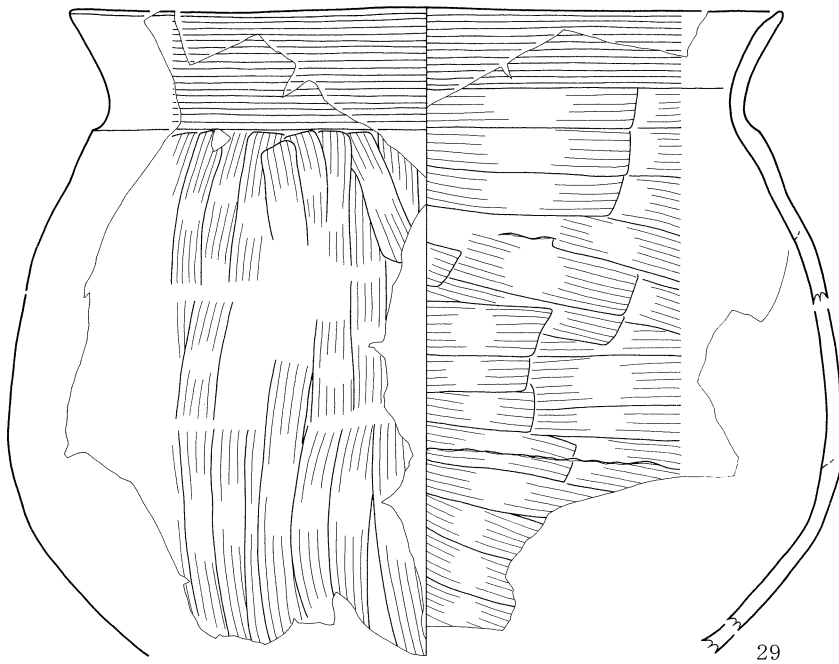


第68図 RA竖穴住居跡出土遺物(3)

RA581②



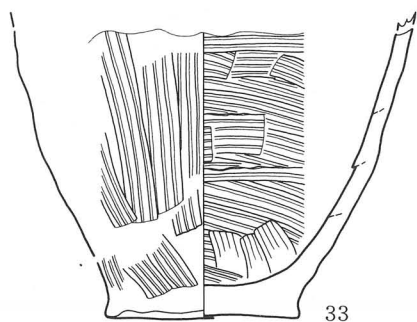
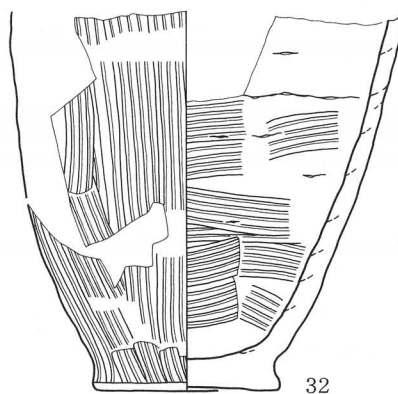
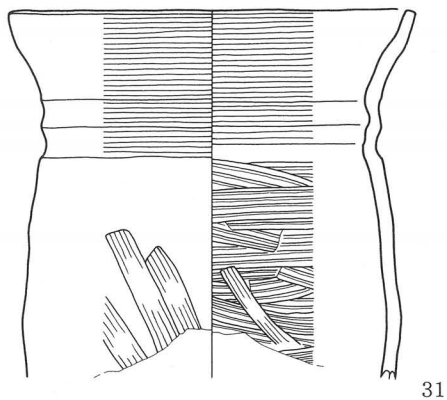
0 1 : 2 5cm
(30)



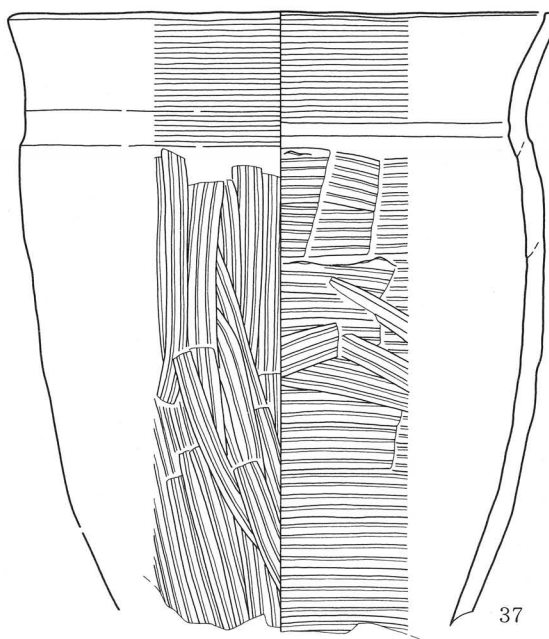
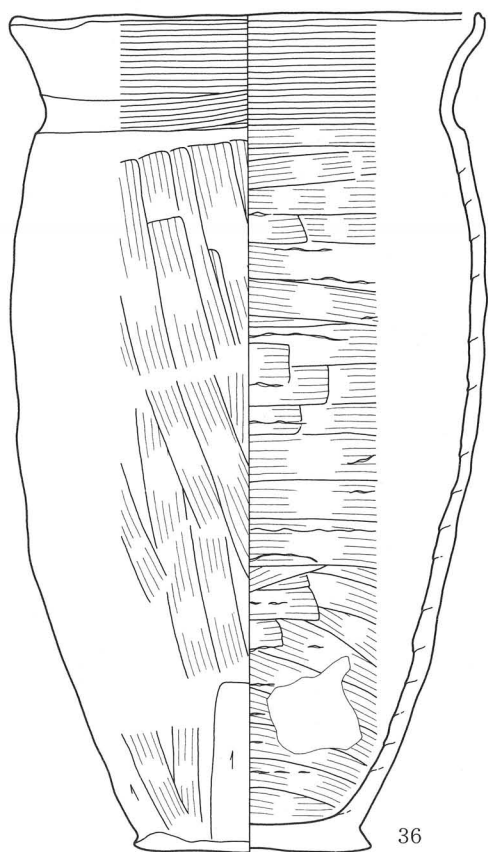
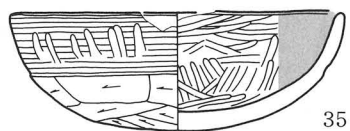
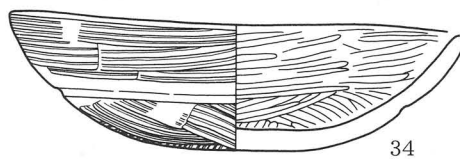
0 1 : 3 10cm

第69図 RA竪穴住居跡出土遺物(4)

RA582



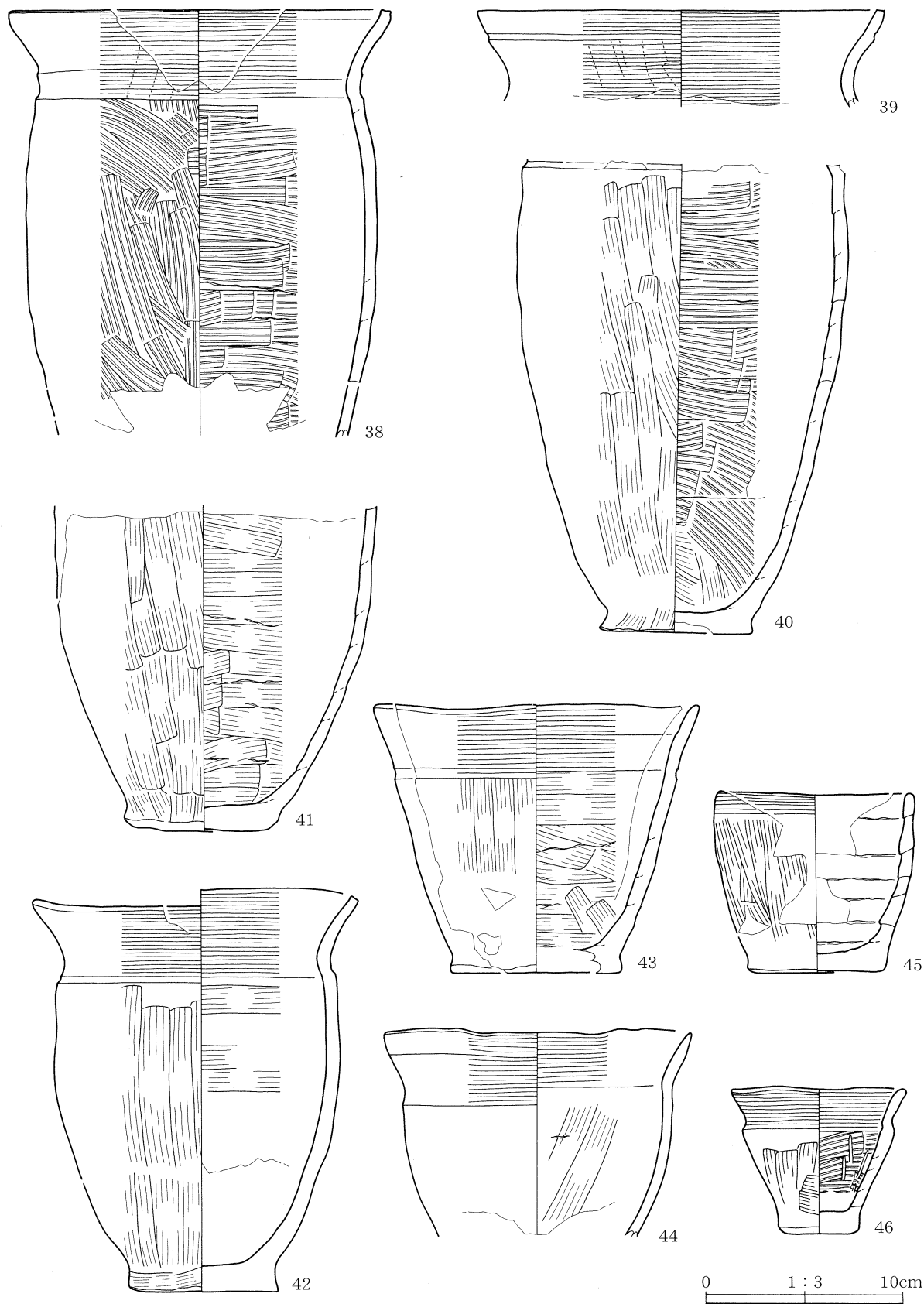
RA583①



0 1:3 10cm

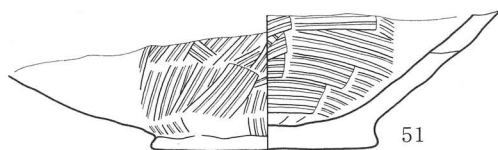
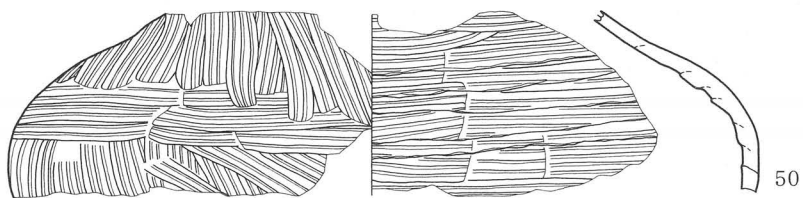
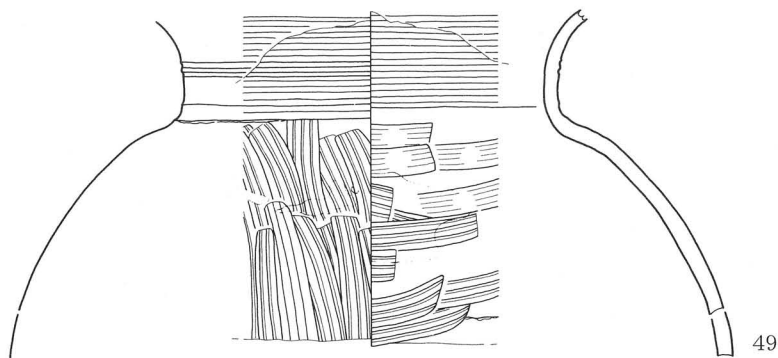
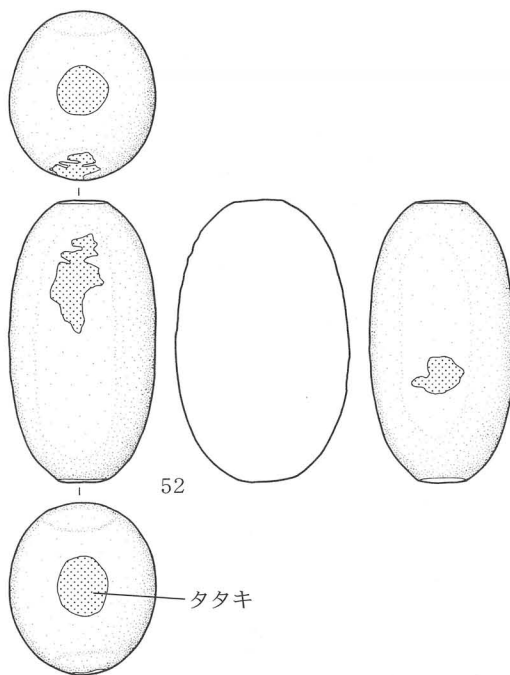
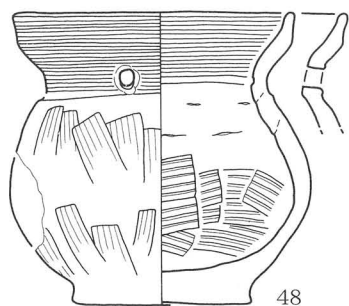
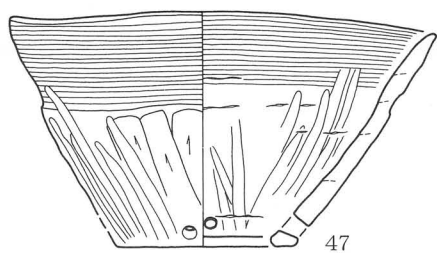
第70図 RA豎穴住居跡出土遺物(5)

RA583②



第71図 RA豎穴住居跡出土遺物(6)

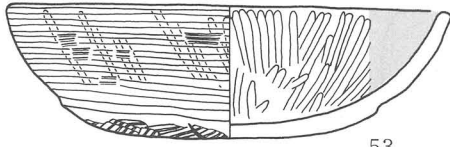
RA583③



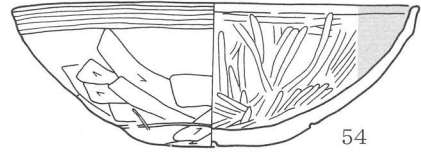
0 1:3 10cm

第72図 RA 竪穴住居跡出土遺物(7)

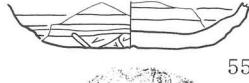
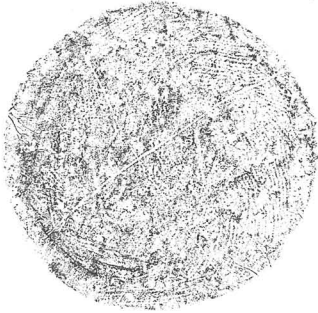
RA584①



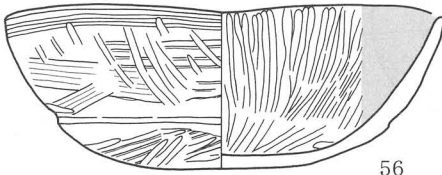
53



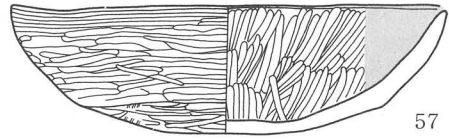
54



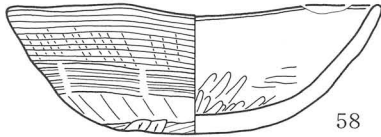
55



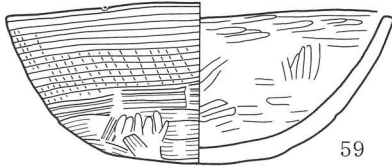
56



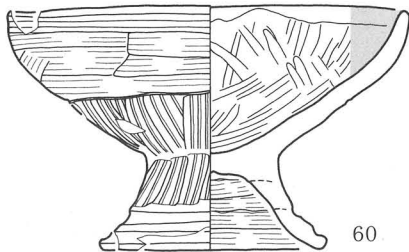
57



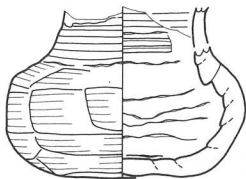
58



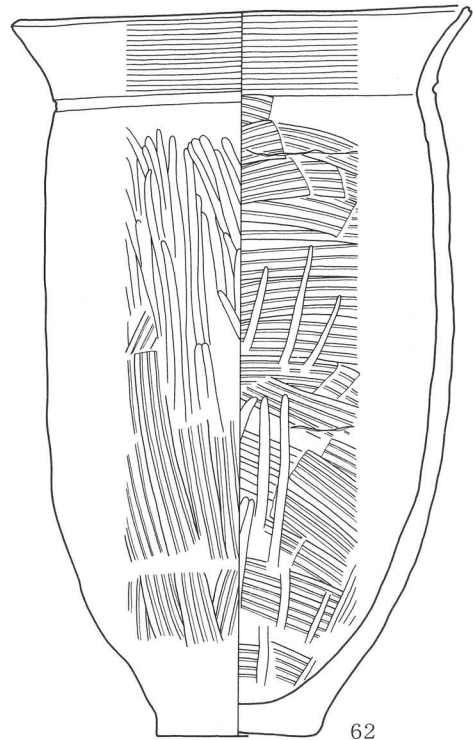
59



60



61



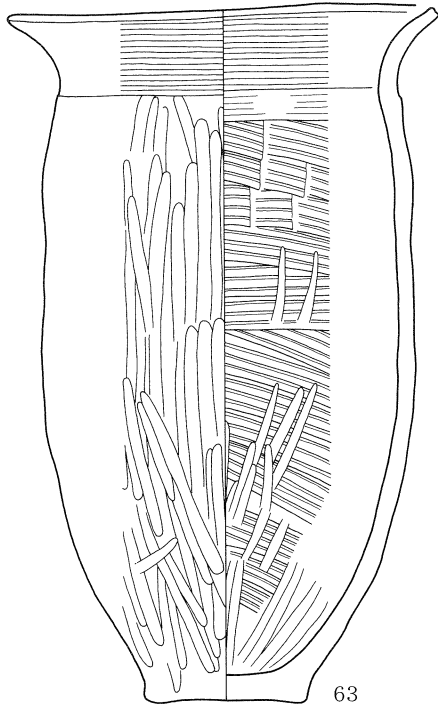
62

0 1 : 2 5cm (61)

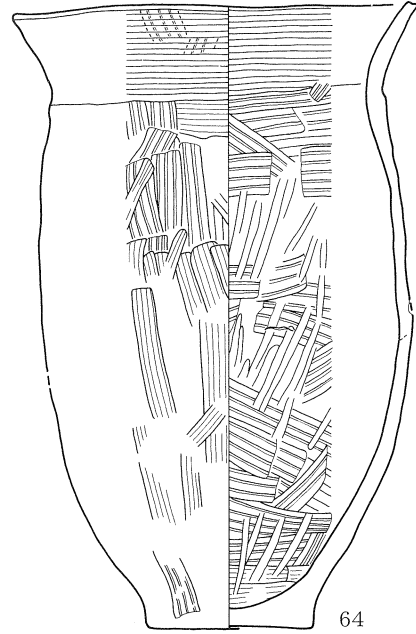
0 1 : 3 10cm

第73图 RA竖穴住居跡出土遺物(8)

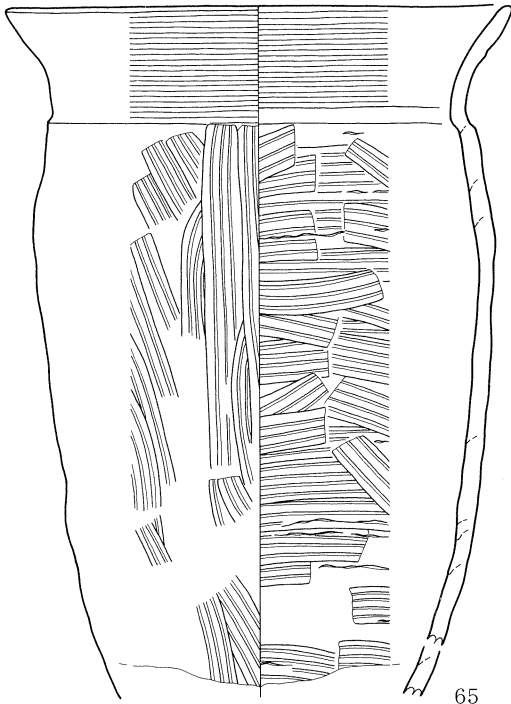
RA584②



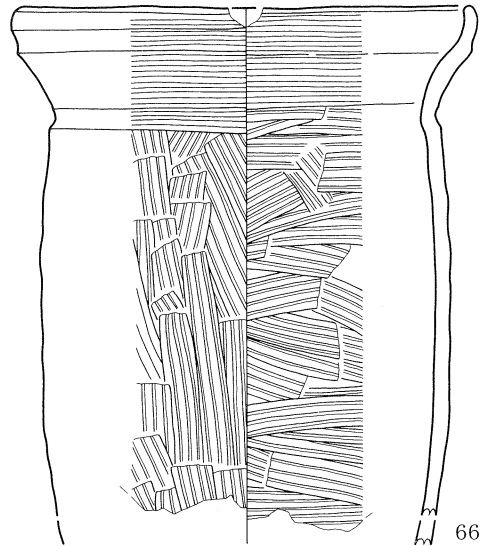
63



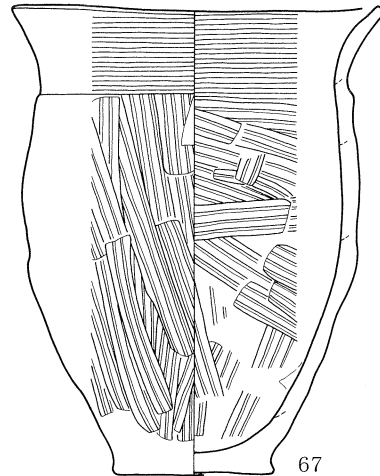
64



65



66

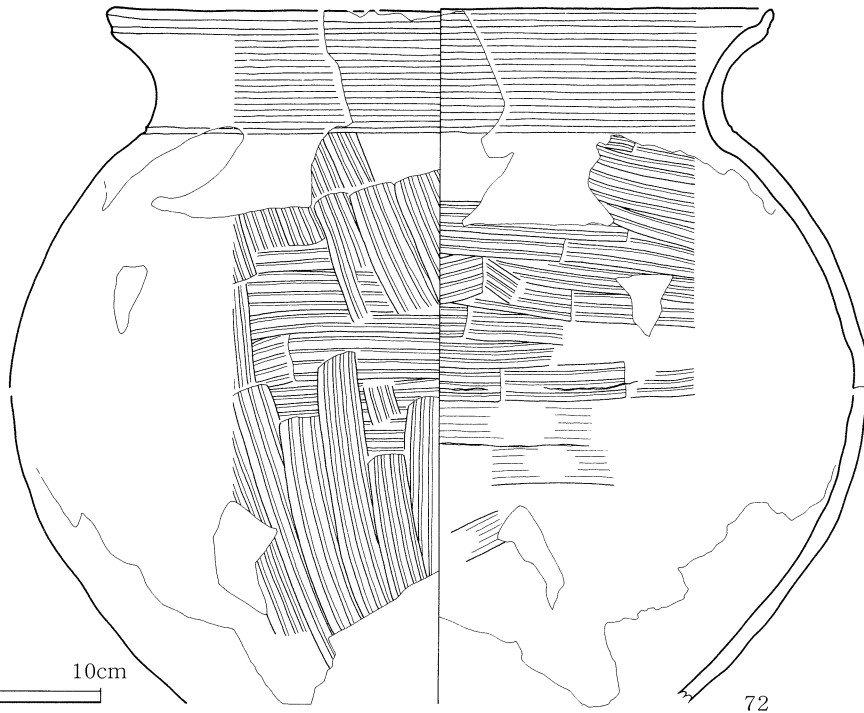
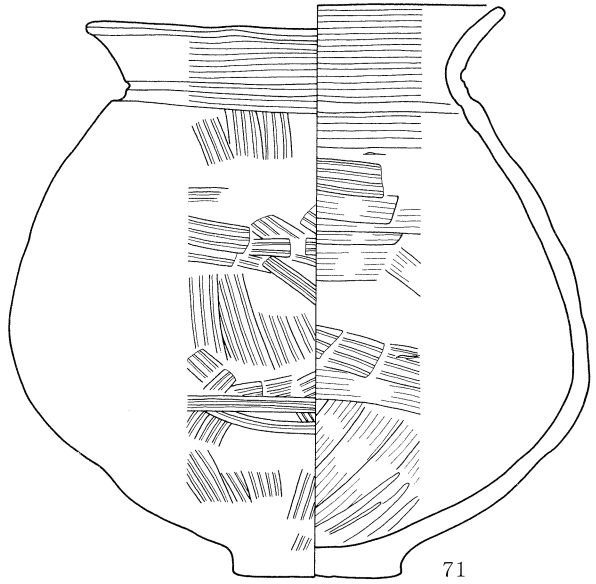
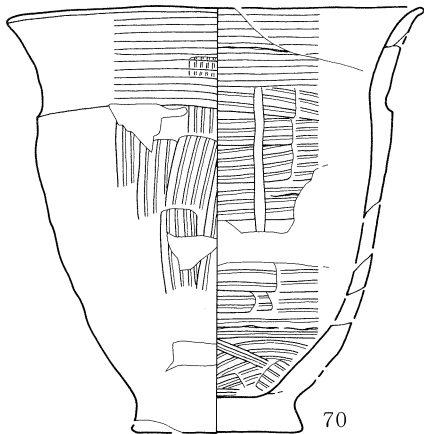
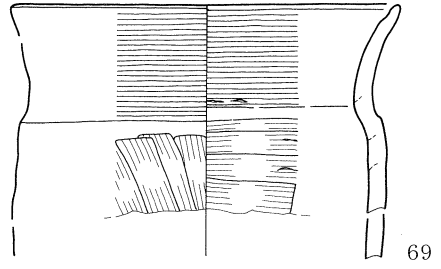
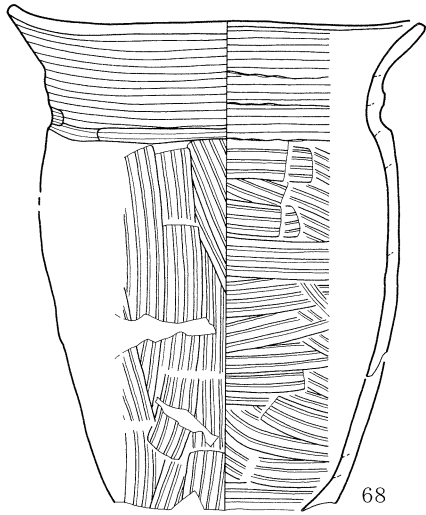


67

0 1 : 3 10cm

第74図 RA豎穴住居跡出土遺物(9)

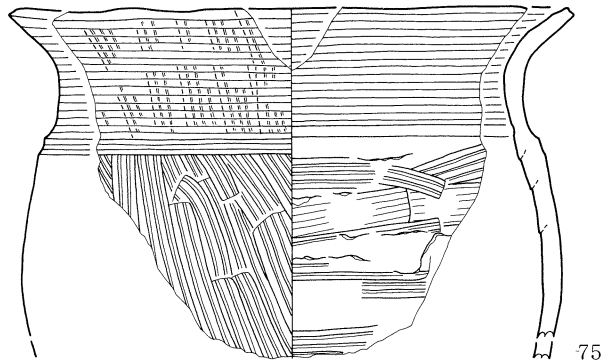
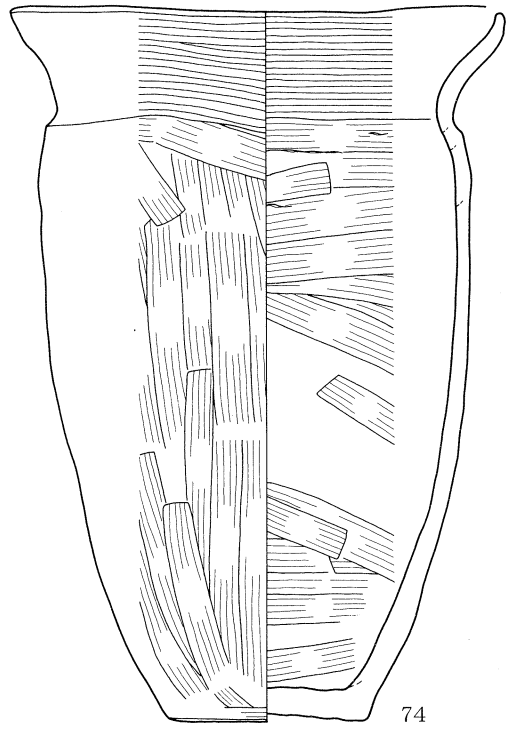
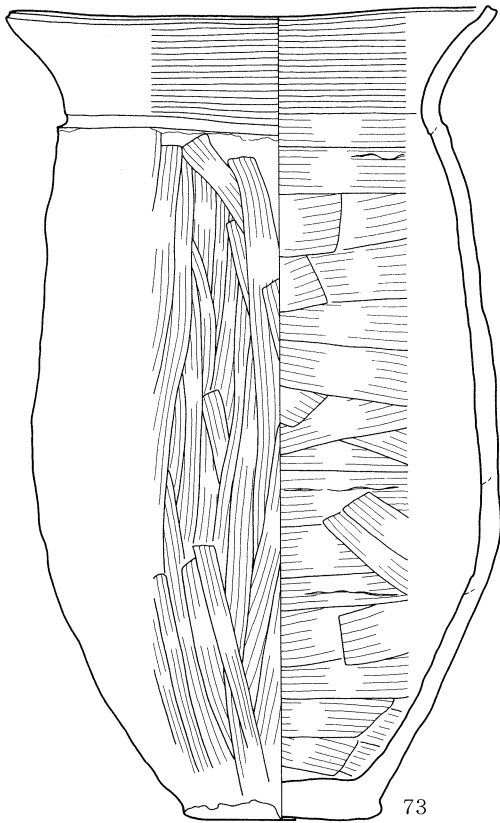
RA584③



0 1:3 10cm

第75図 RA豎穴住居跡出土遺物(10)

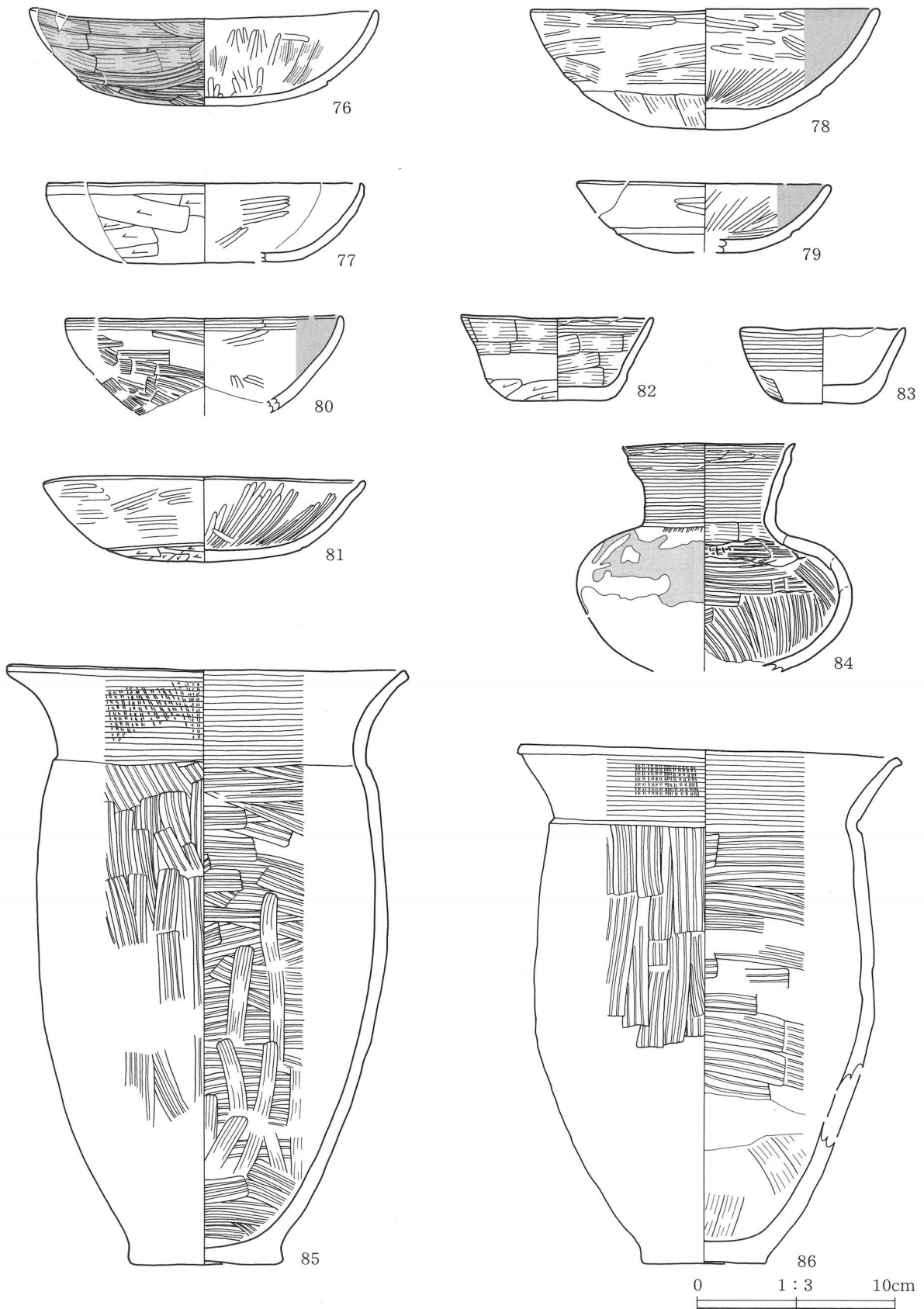
RA585



0 1:3 10cm

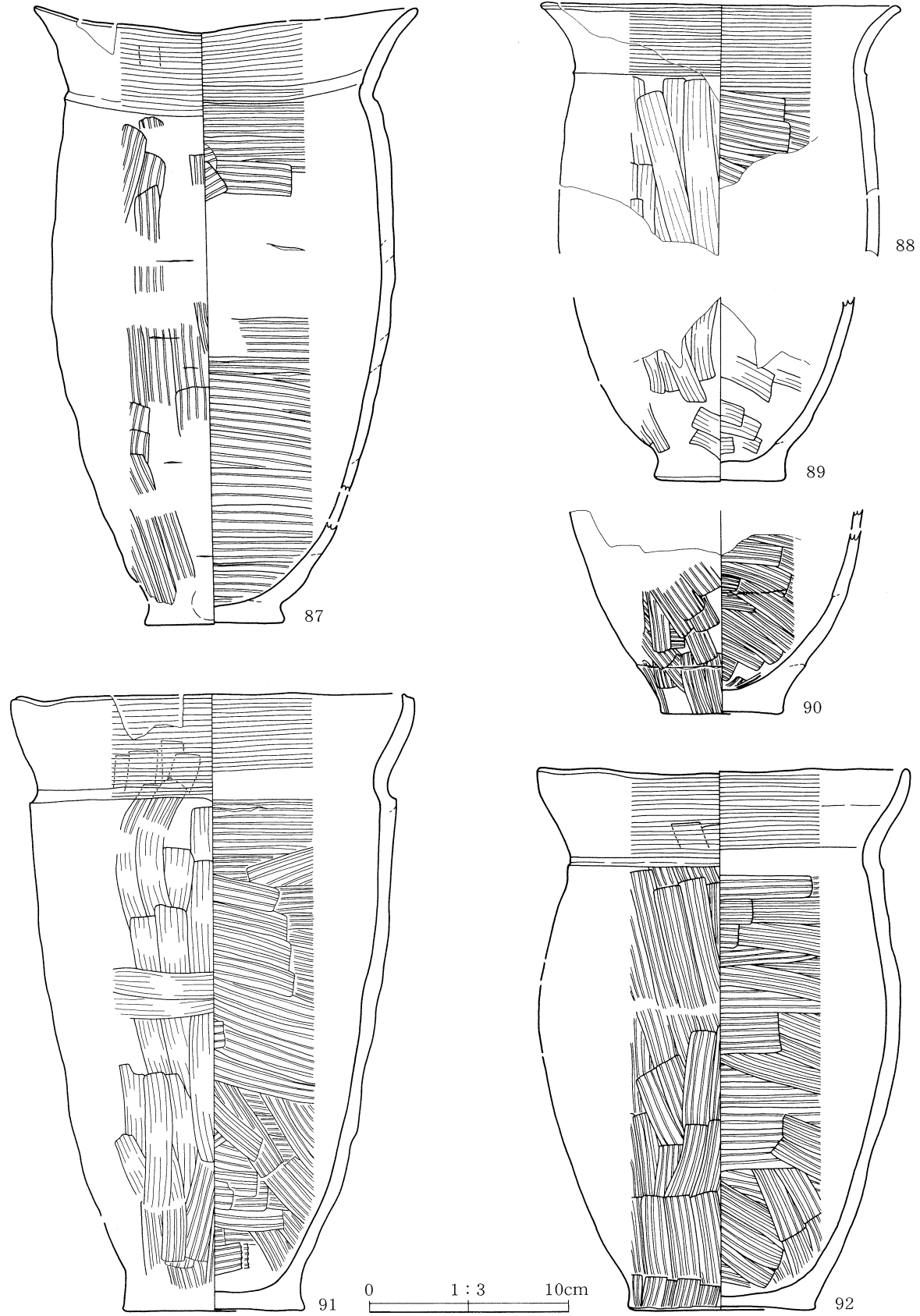
第76図 RA竪穴住居跡出土遺物(11)

RA586①



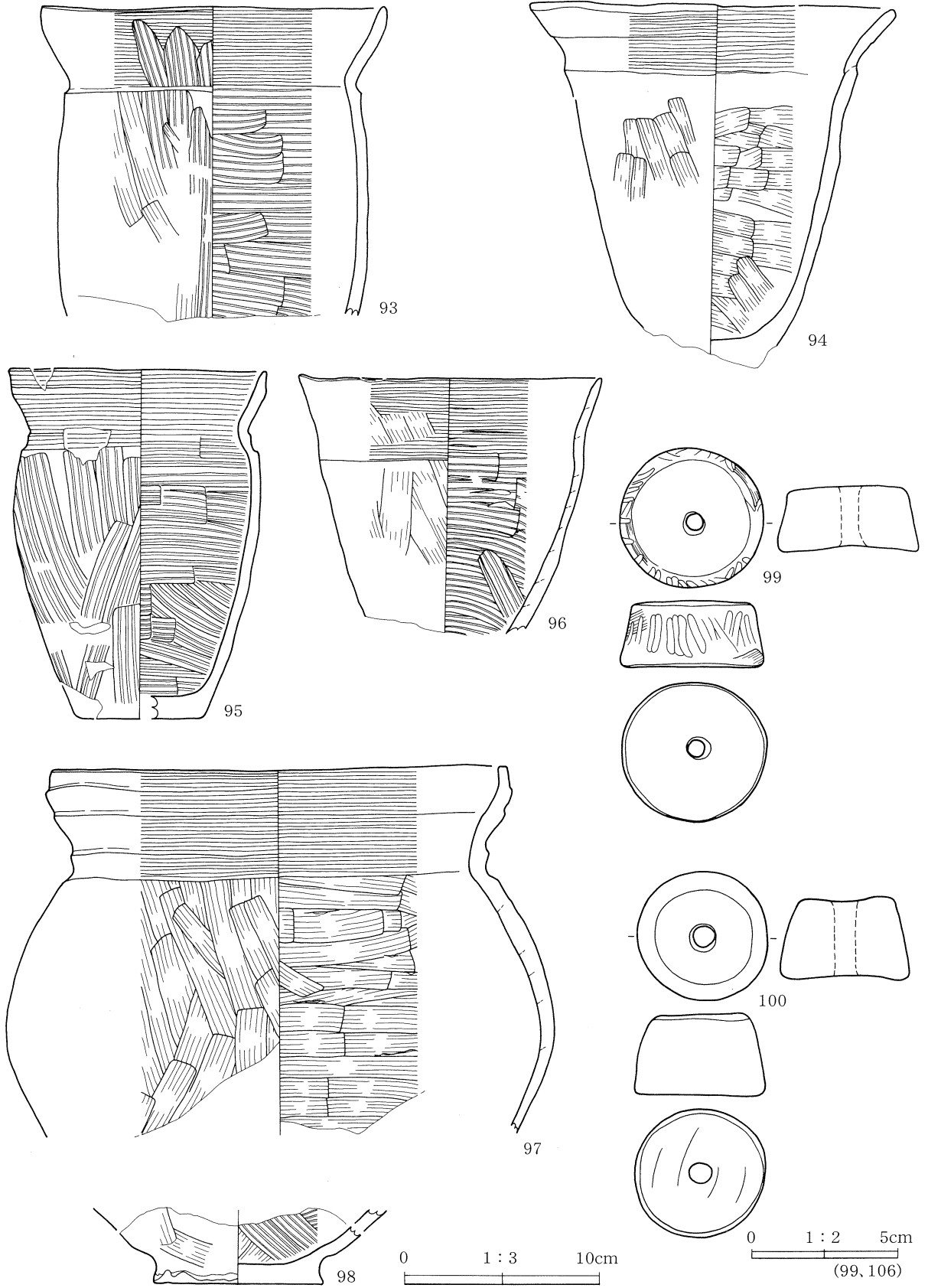
第77図 RA竪穴住居跡出土遺物(12)

RA586②



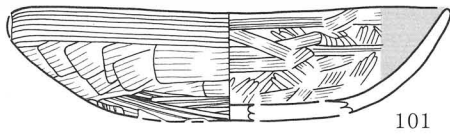
第78図 RA豎穴住居跡出土遺物(13)

RA586③

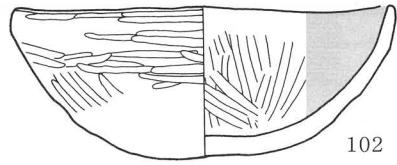


第79図 RA竪穴住居跡出土遺物(14)

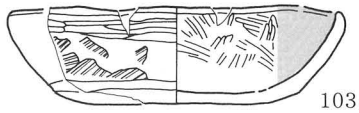
RA587①



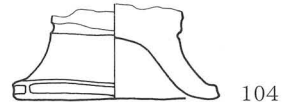
101



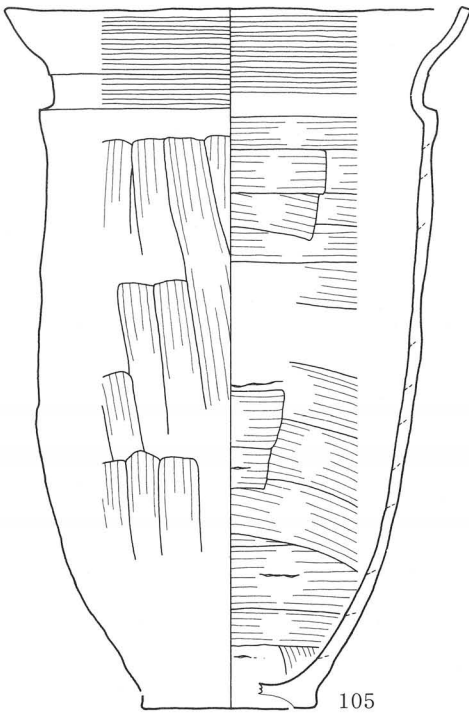
102



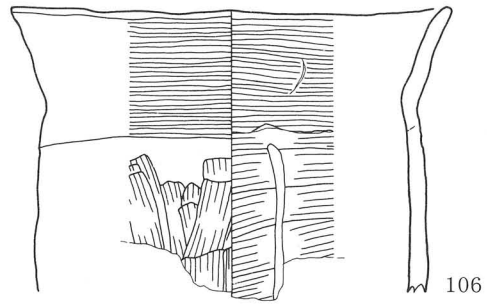
103



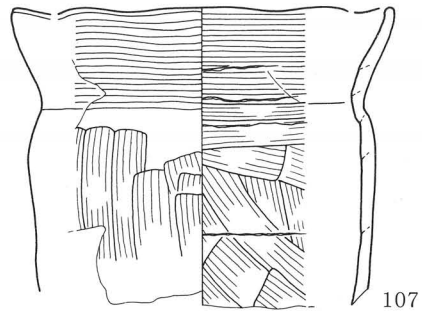
104



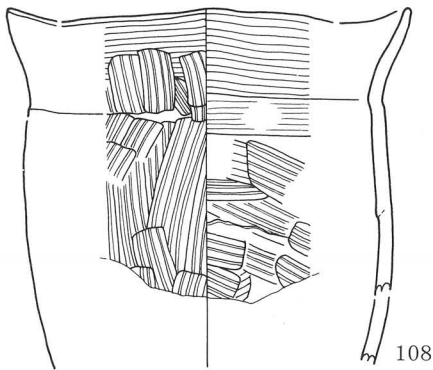
105



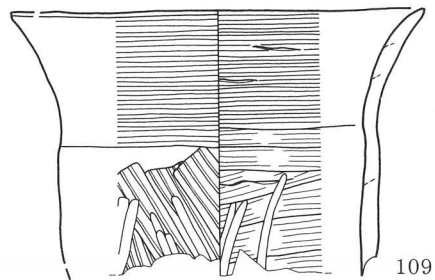
106



107



108

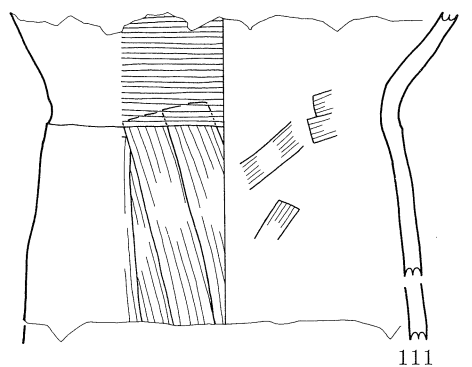
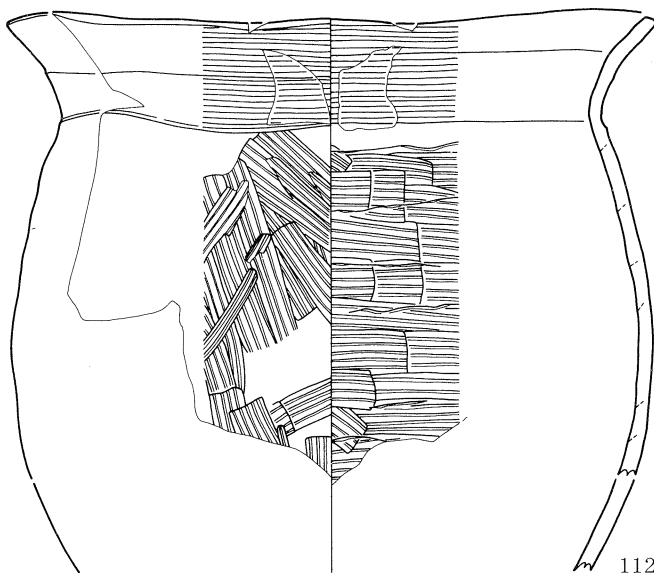
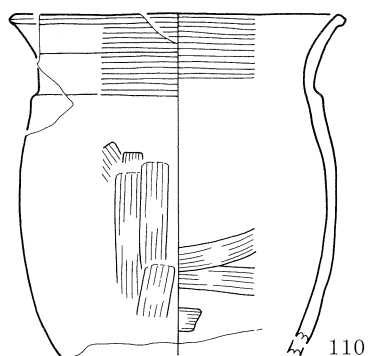


109

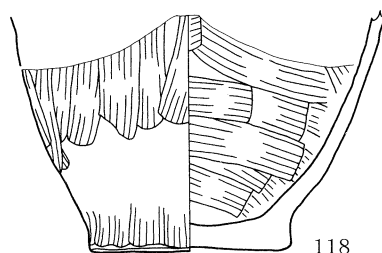
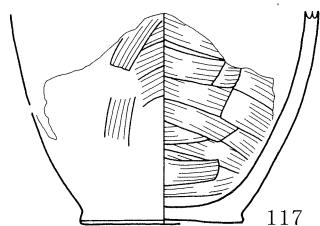
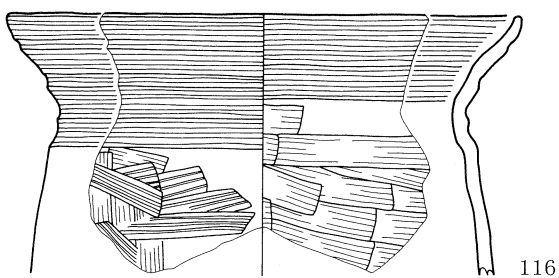
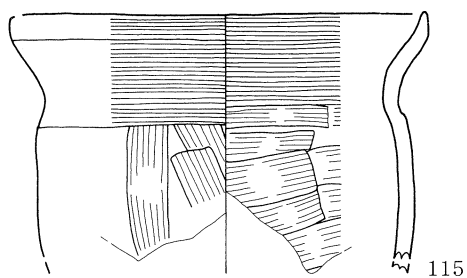
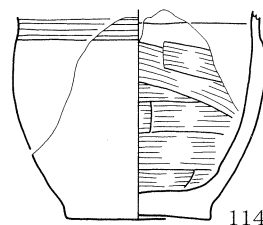
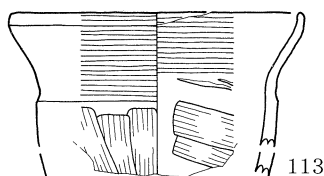
0 1 : 3 10cm

第80図 RA豎穴住居跡出土遺物(15)

RA587②



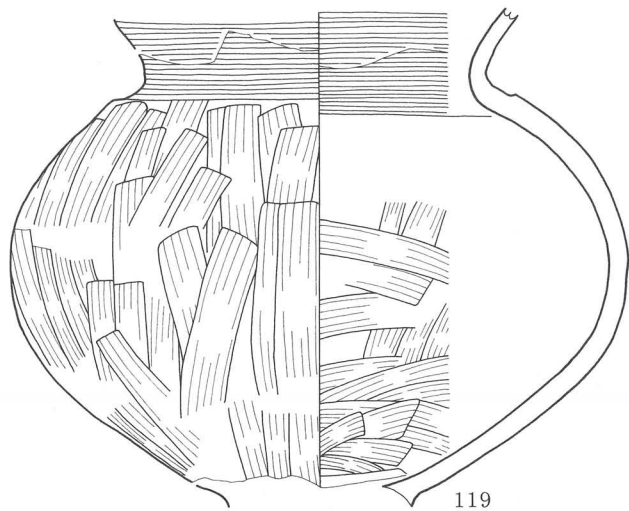
RA588①



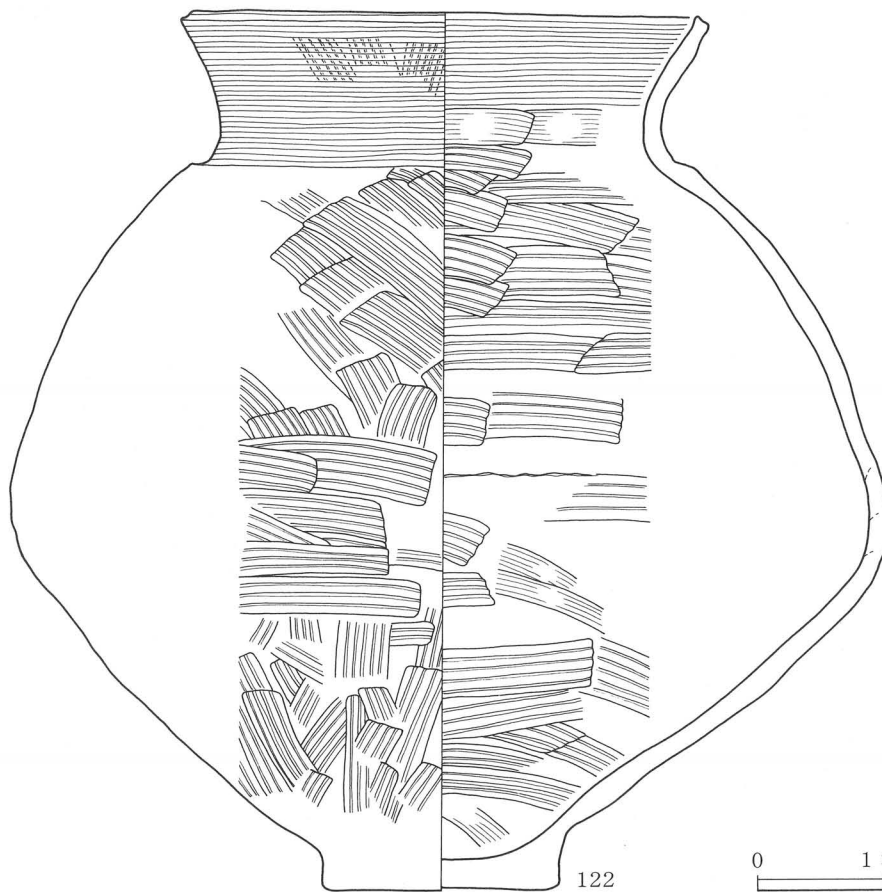
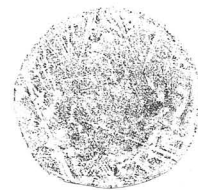
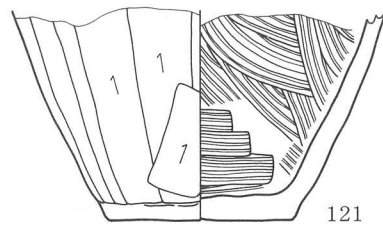
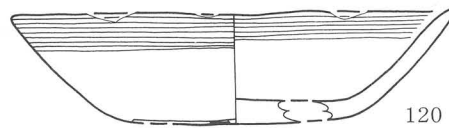
0 1 : 3 10cm

第81図 RA豎穴住居跡出土遺物(16)

RA588②



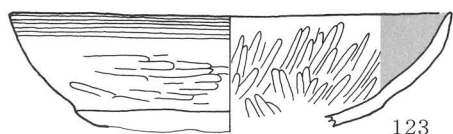
RA589



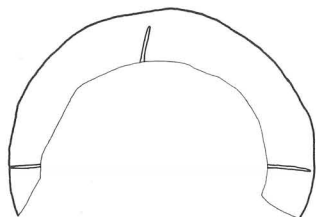
0 1:3 10cm

第82図 RA豎穴住居跡出土遺物(17)

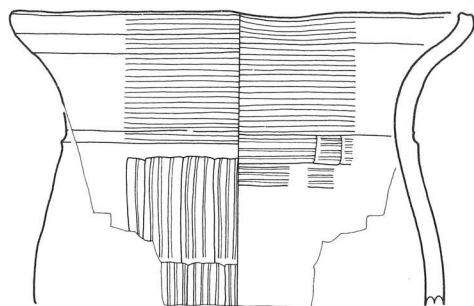
RA590



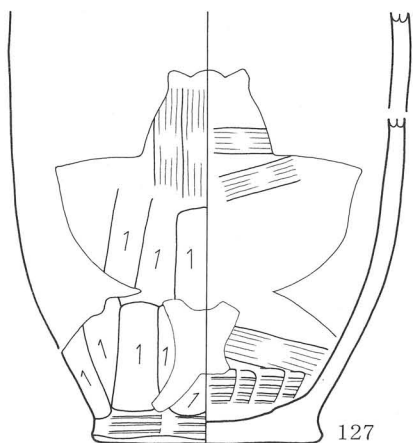
123



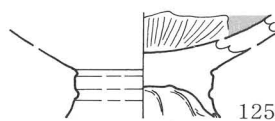
124



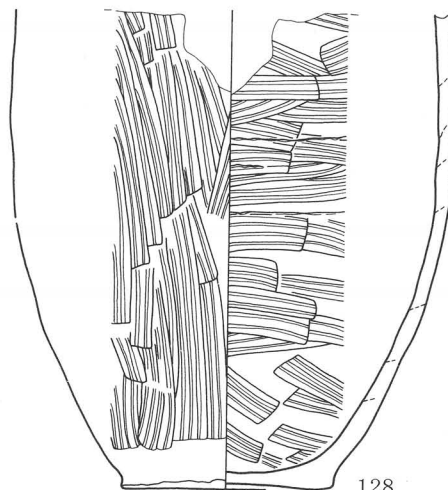
126



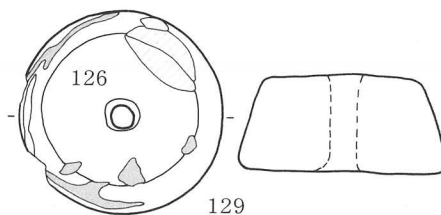
127



125

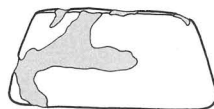


128

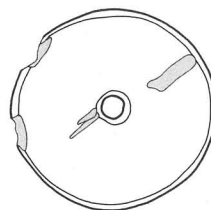


126

129



■ 摩滅
□ 磨痕

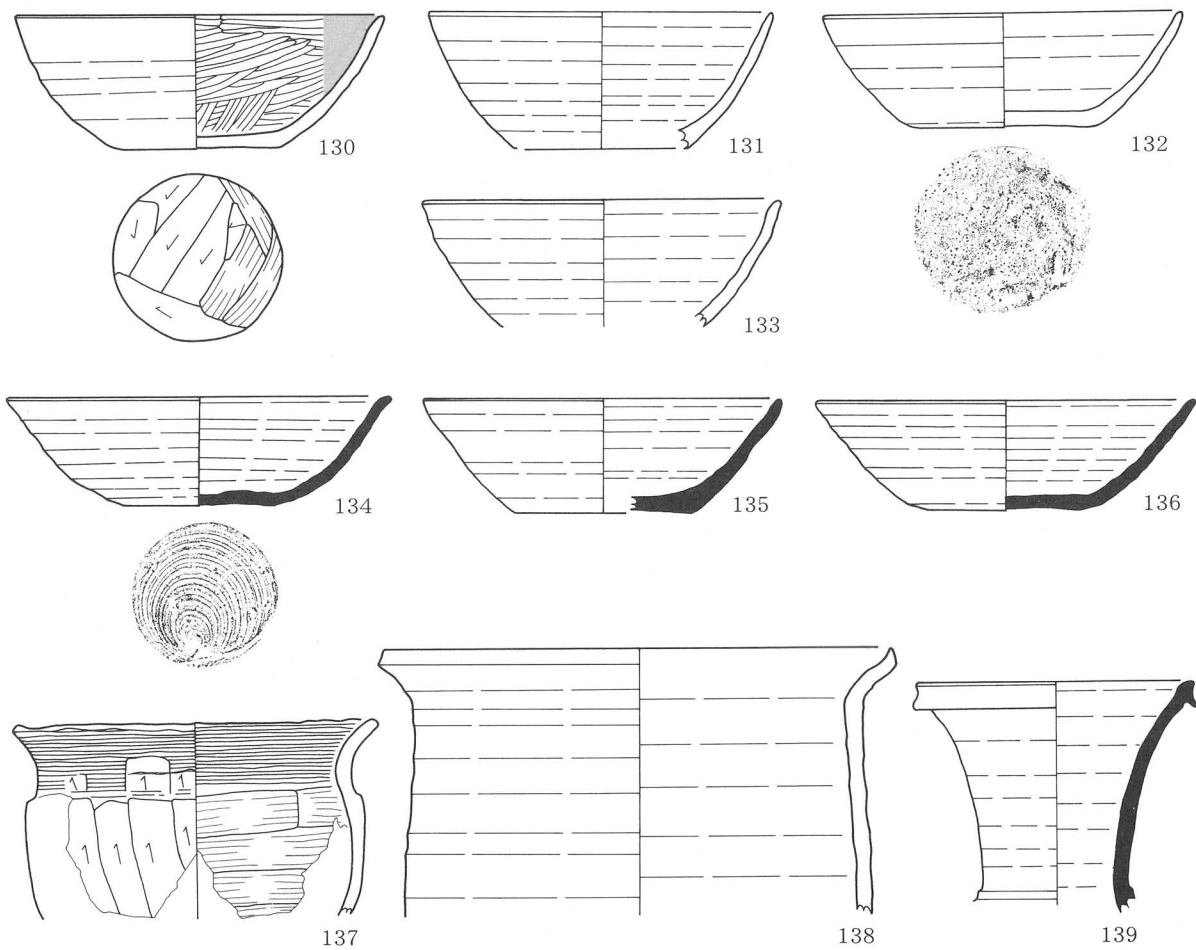


0 1:2 5cm
(129)

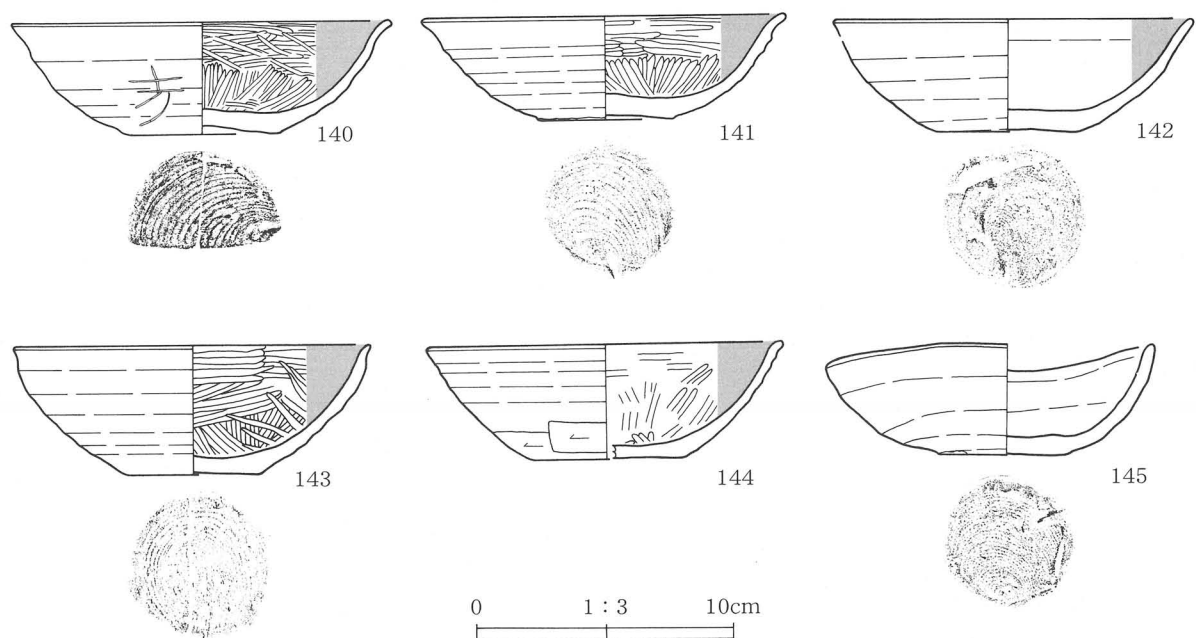
0 1:3 10cm

第83図 RA豎穴住居跡出土遺物(18)

RA592

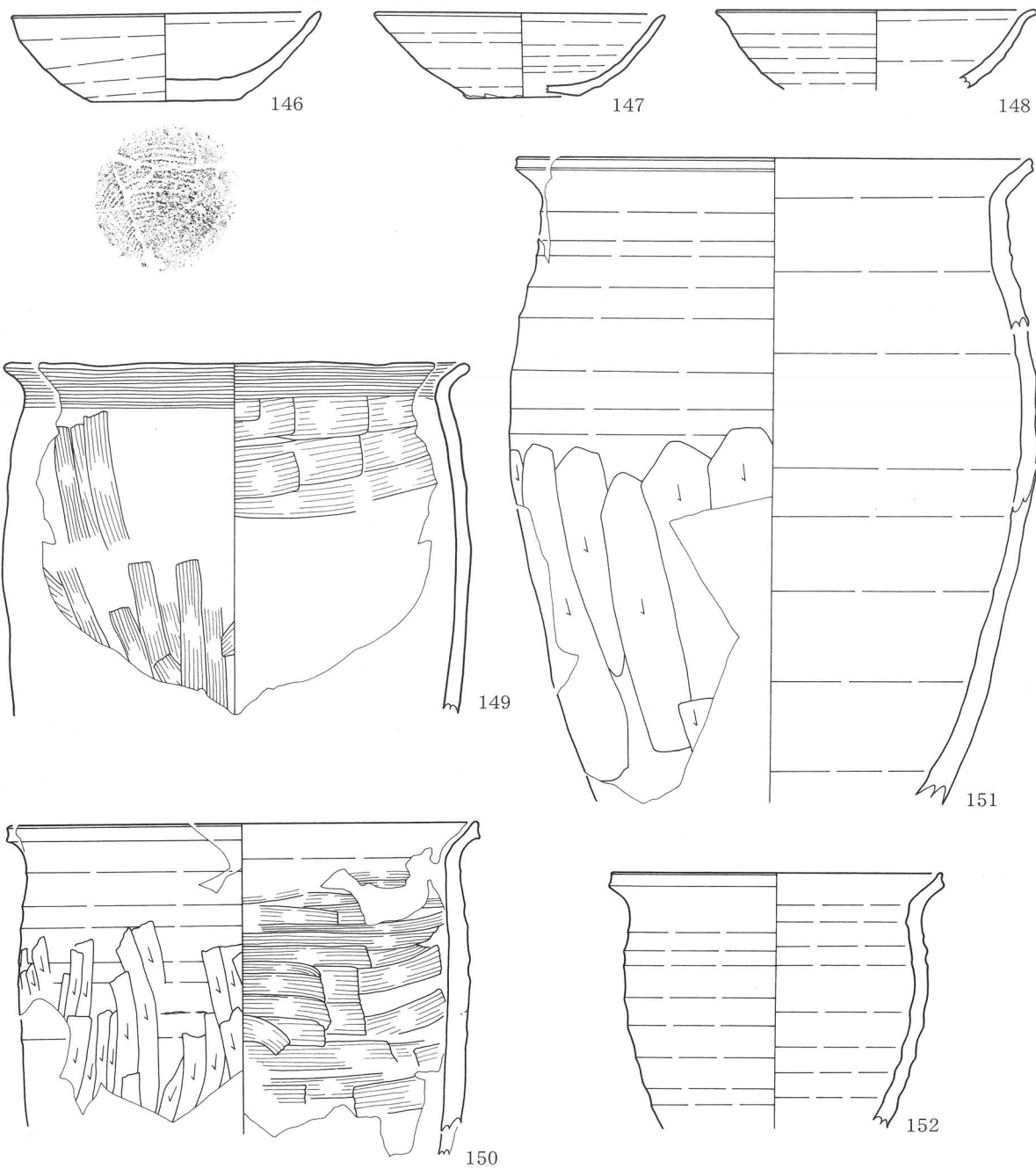


RA593①

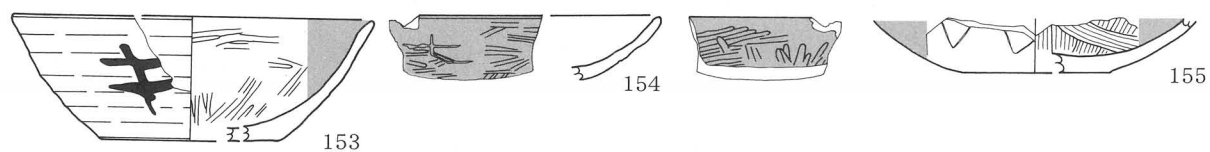


第84図 RA竪穴住居跡出土遺物(19)

RA593②



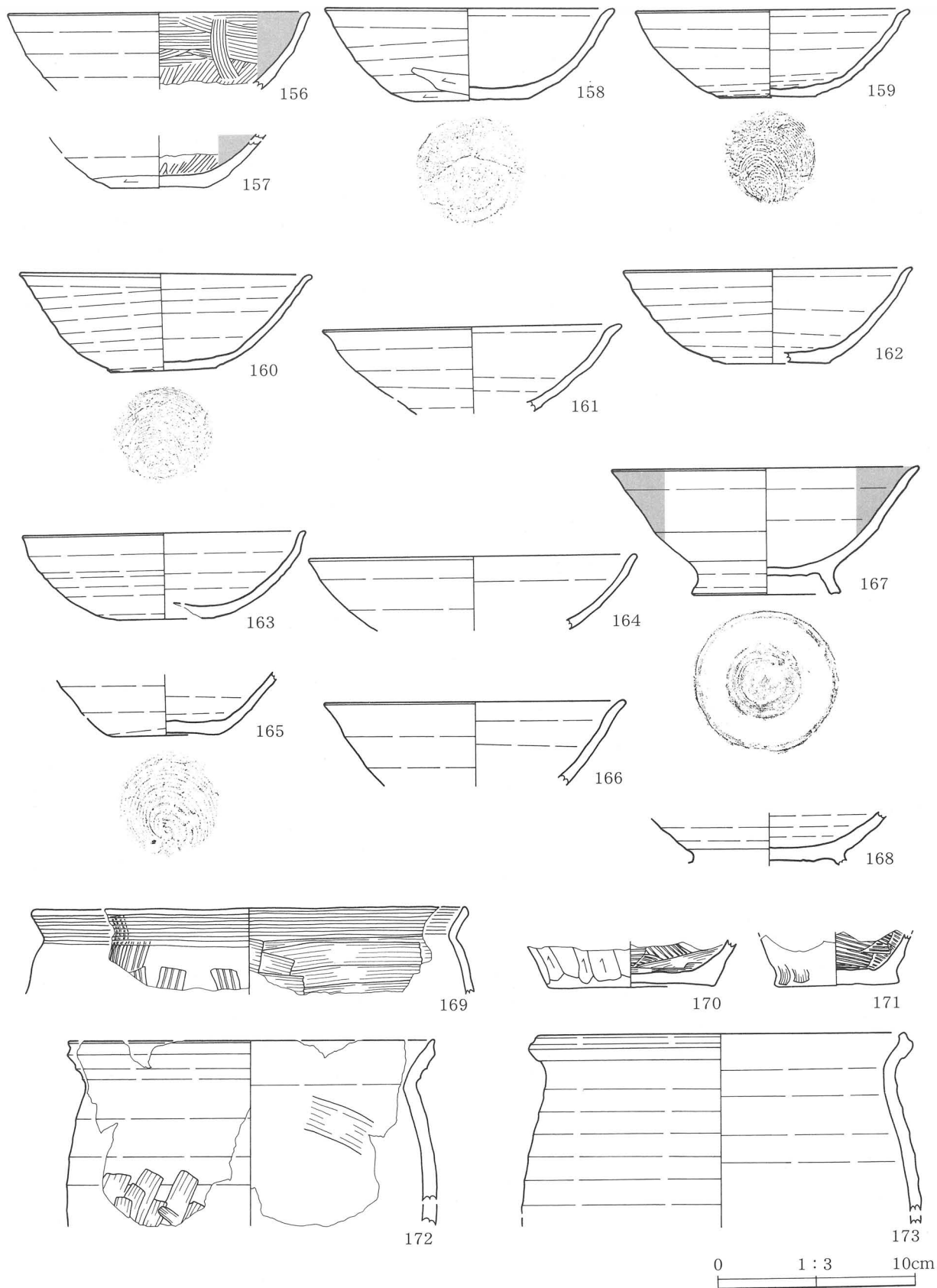
RA594①



0 1:3 10cm

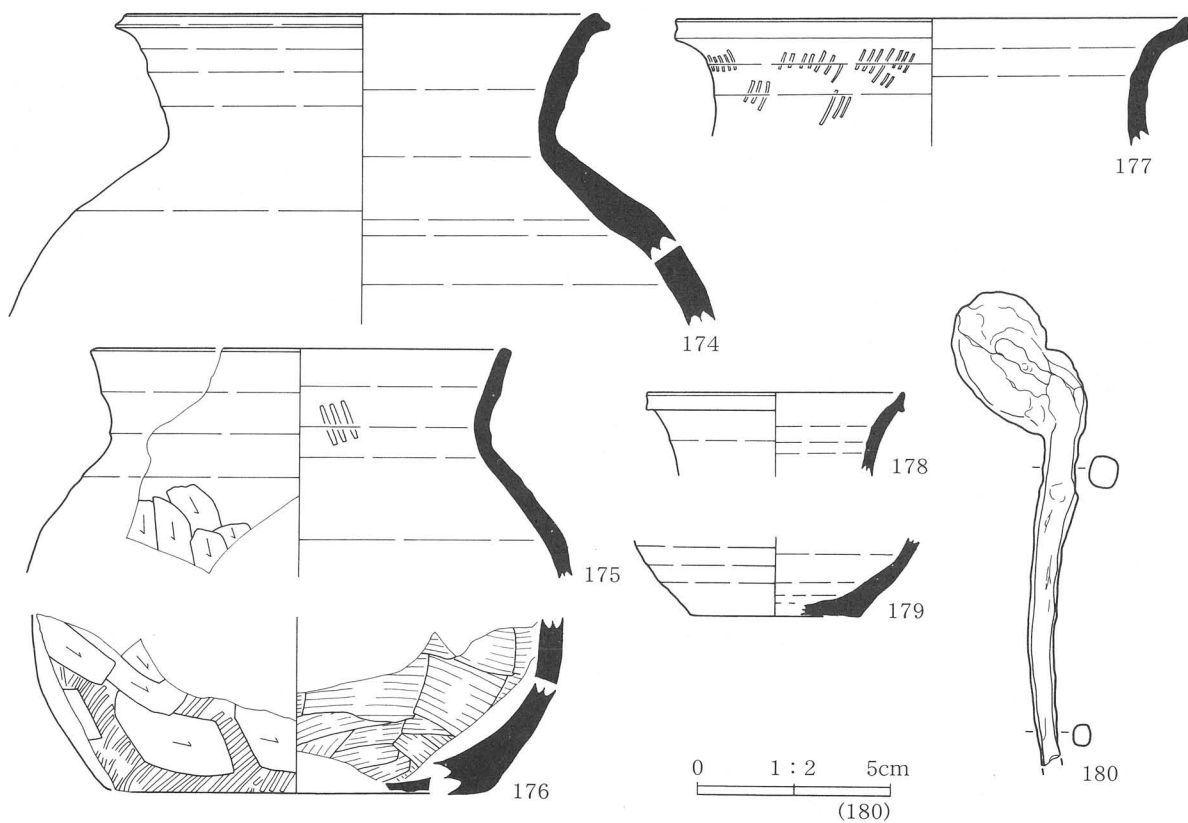
第85図 RA竪穴住居跡出土遺物(20)

RA594②

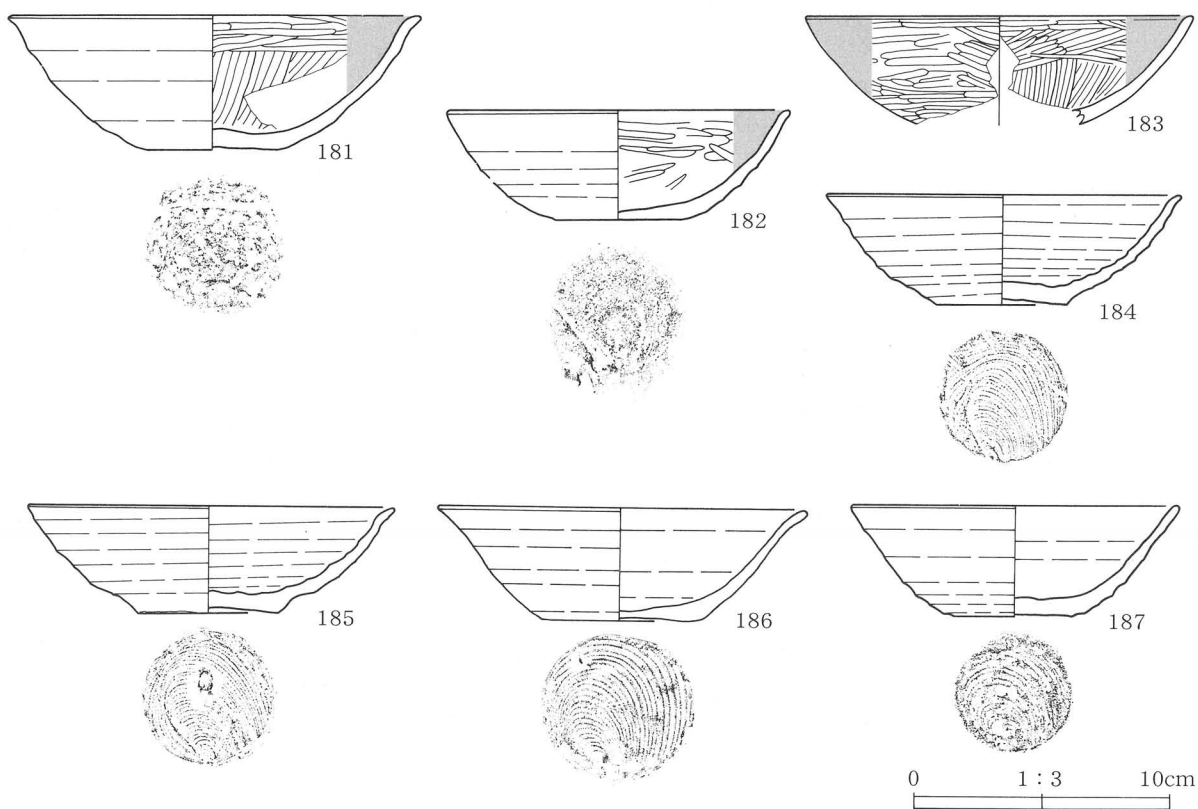


第86図 RA竪穴住居跡出土遺物(2)

RA594③

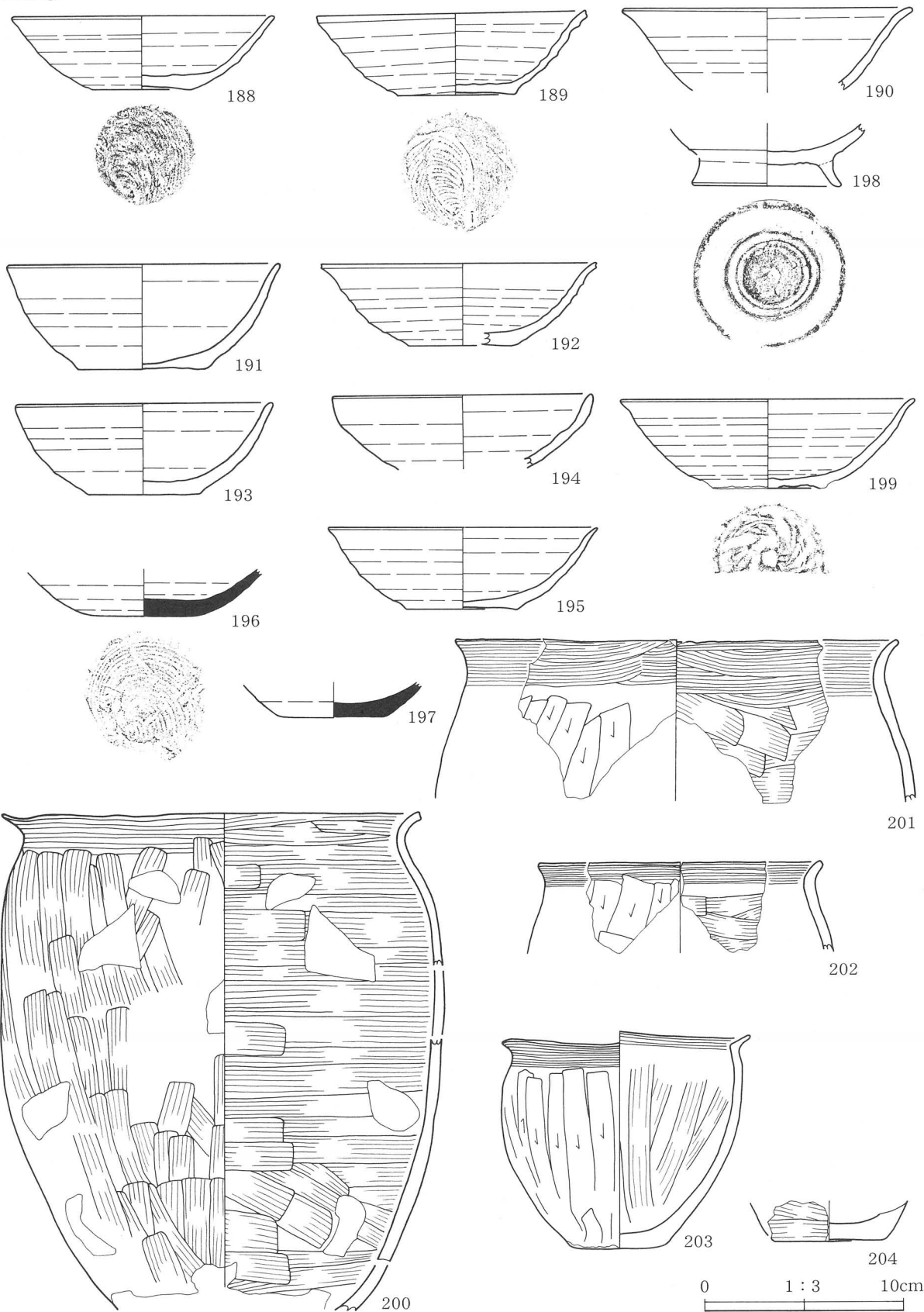


RA595①



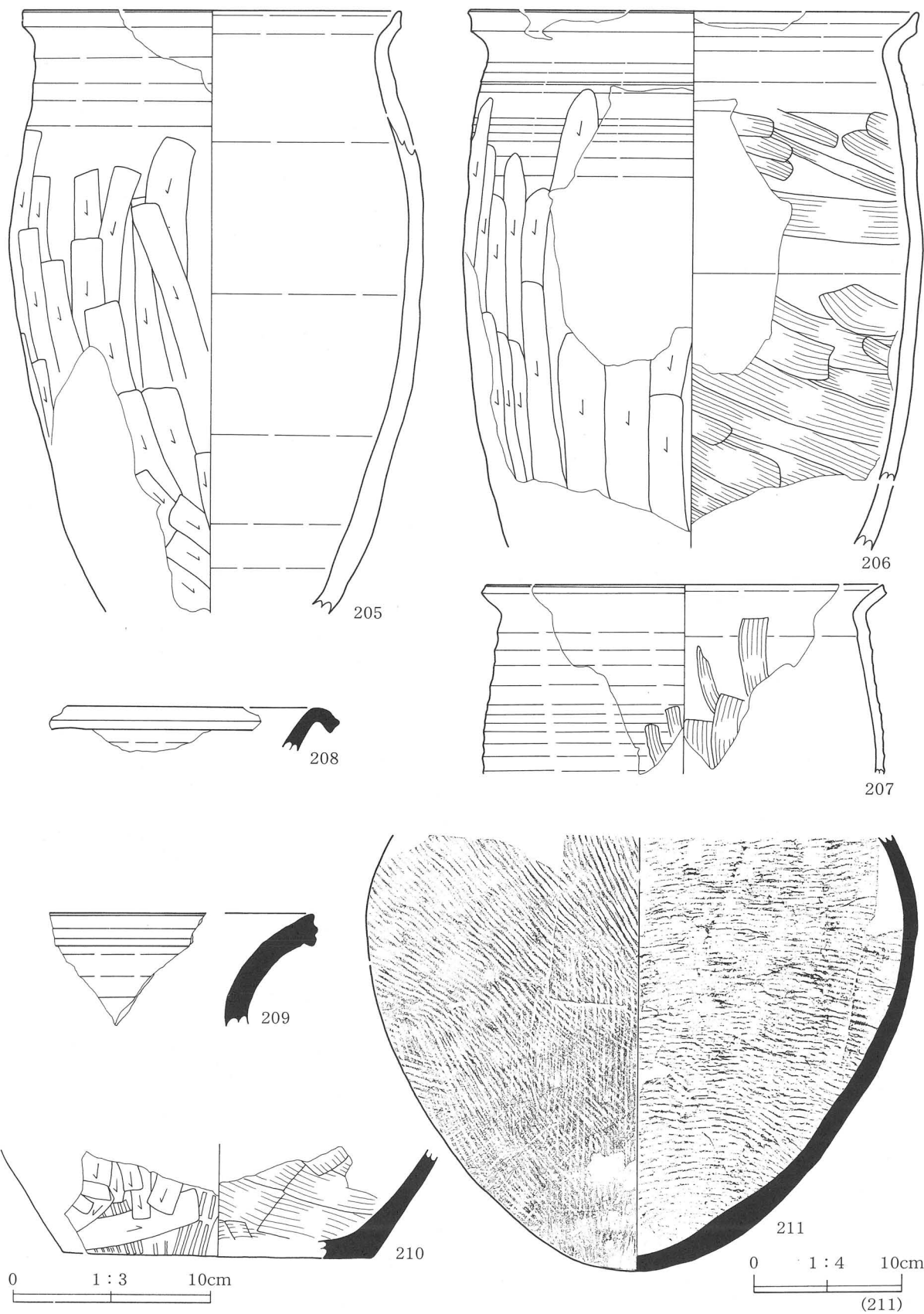
第87図 RA豎穴住居跡出土遺物(22)

RA595②



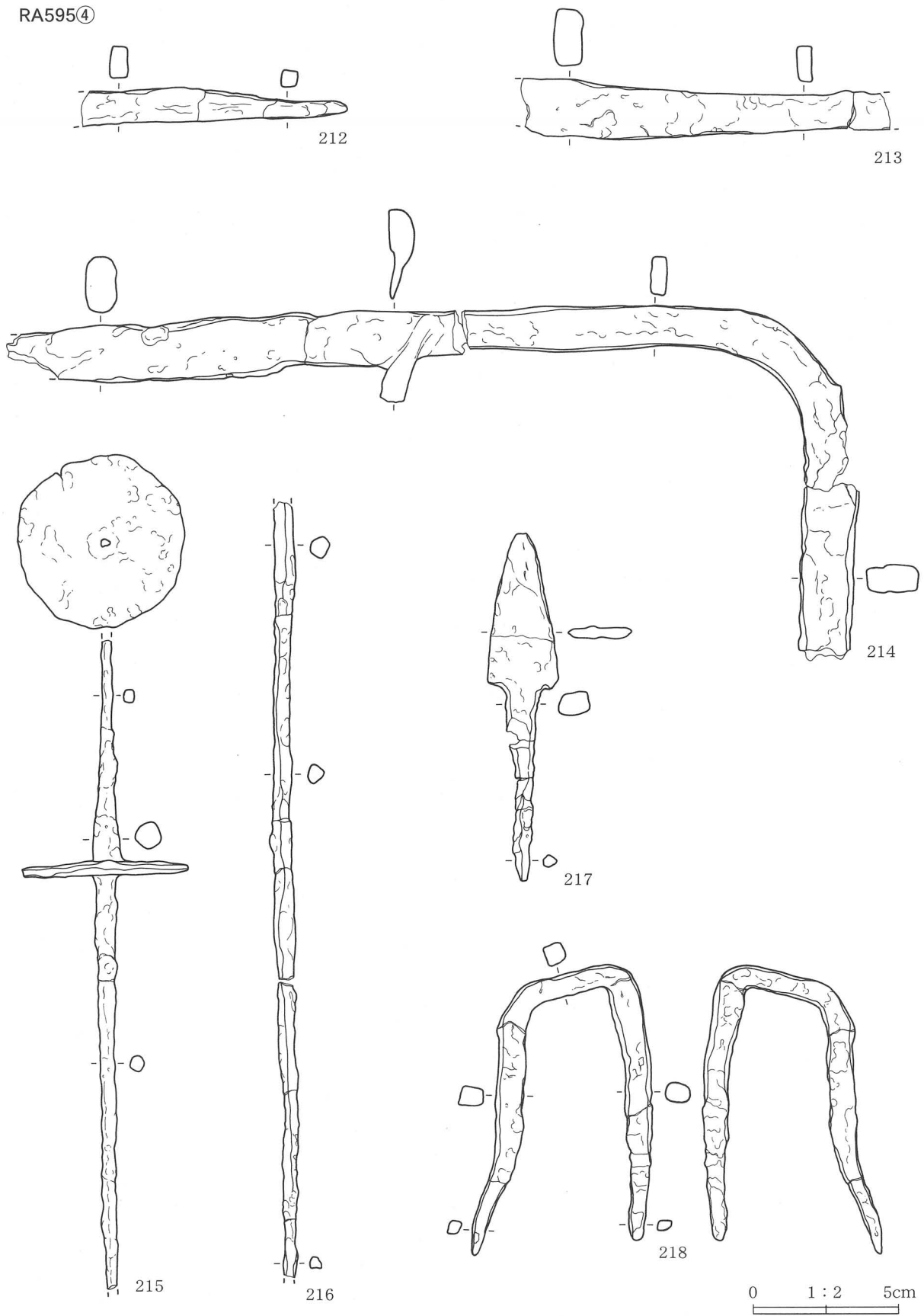
第88図 RA竖穴住居跡出土遺物(23)

RA595③



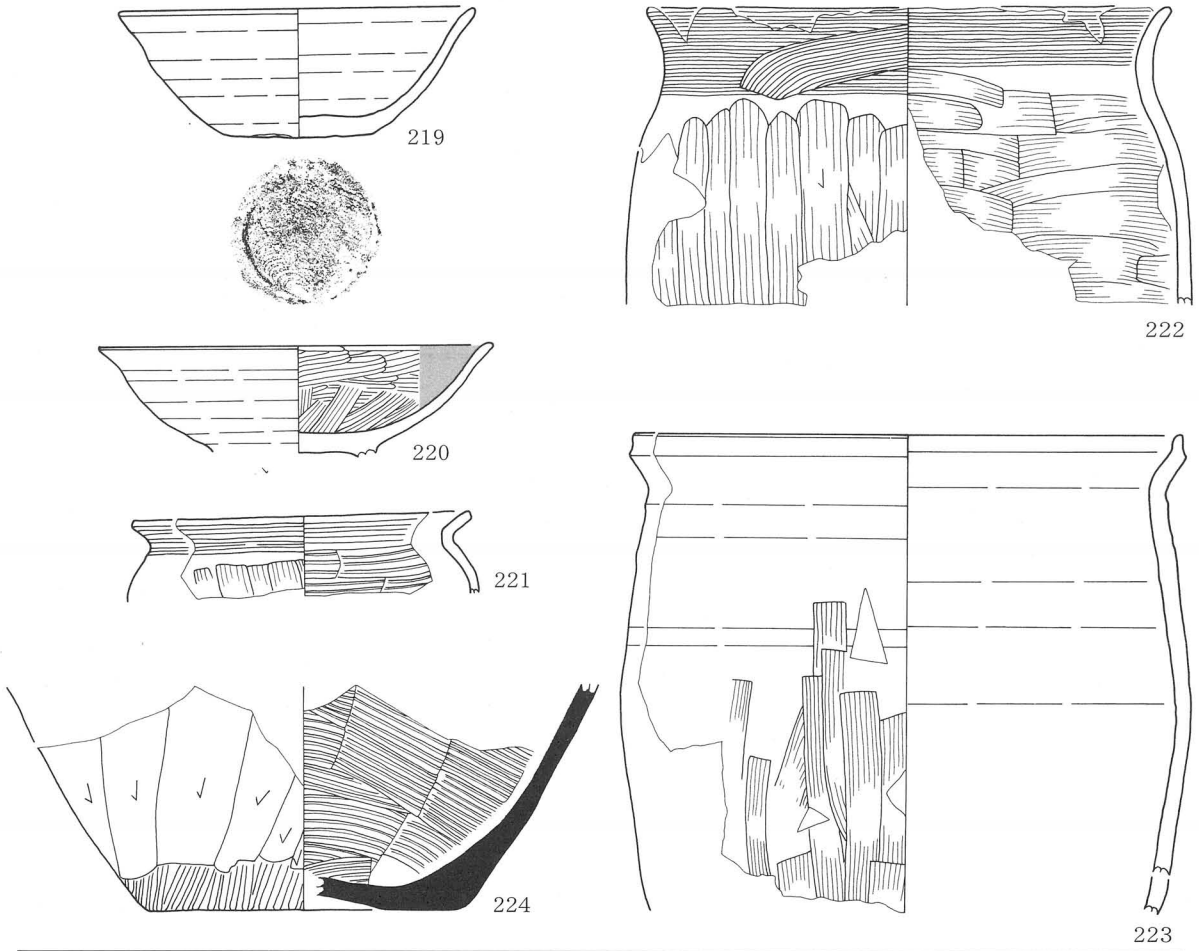
第89図 RA豎穴住居跡出土遺物(24)

RA595④

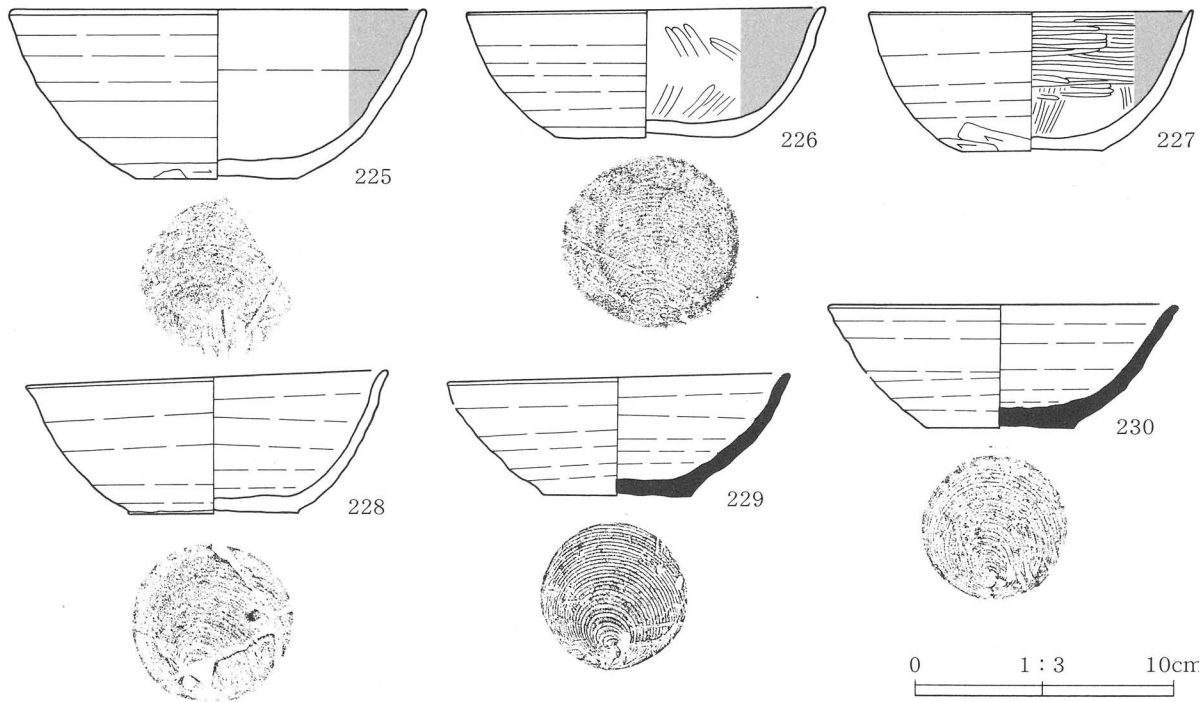


第90图 RA竖穴住居跡出土遺物(25)

RA596



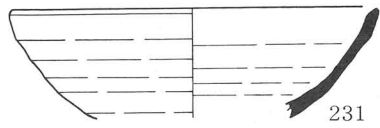
RA597①



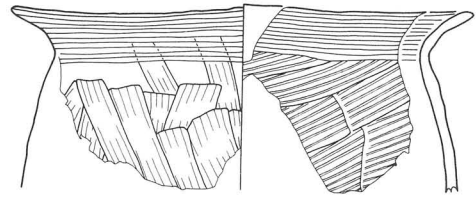
0 1 : 3 10cm

第91図 RA豎穴住居跡出土遺物(26)

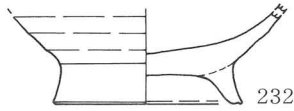
RA597②



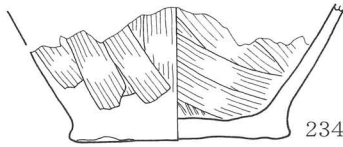
231



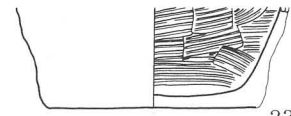
233



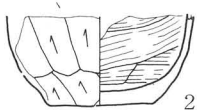
232



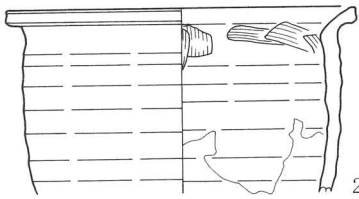
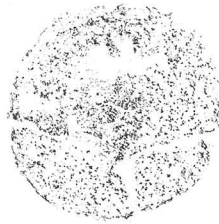
234



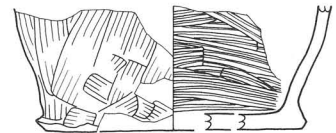
235



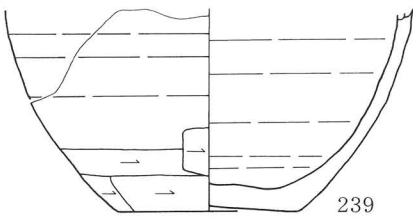
237



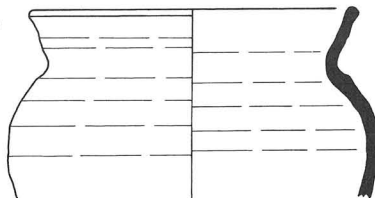
238



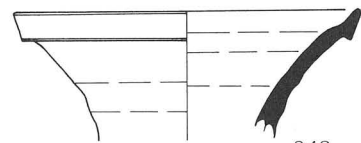
236



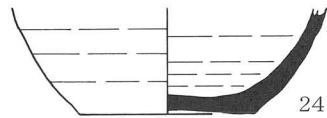
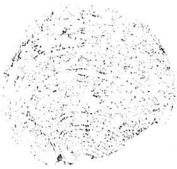
239



240

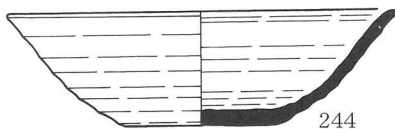


242

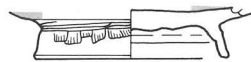


241

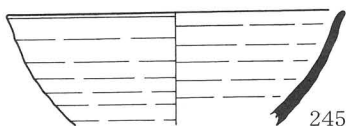
RA293



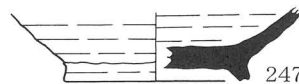
244



246

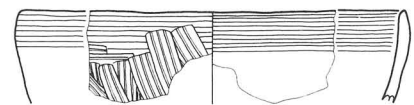


245

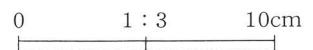


247

RE062

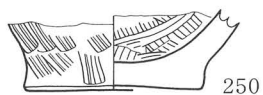


249

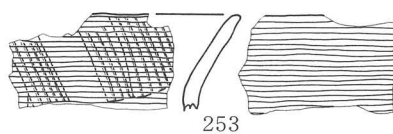


第92図 RA竪穴住居跡(27)・RE住居状遺構出土遺物

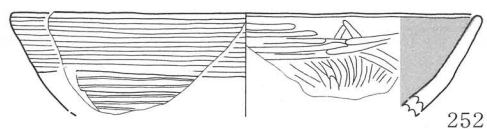
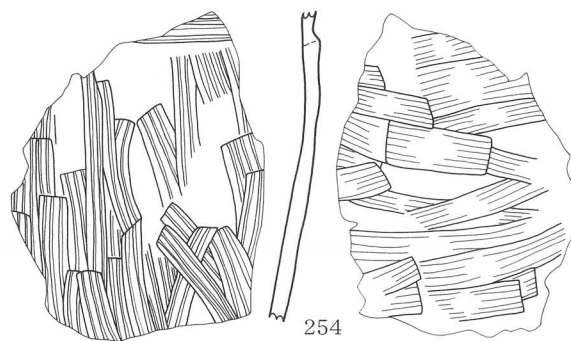
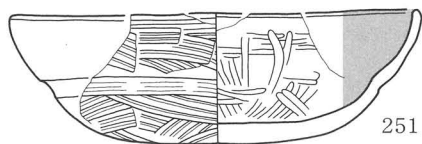
RD1117



RD1130



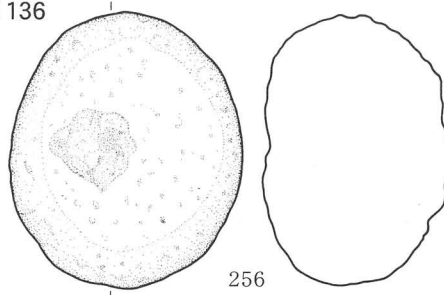
RD1118



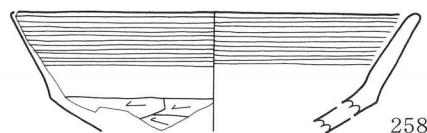
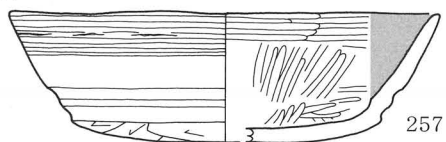
RD1134



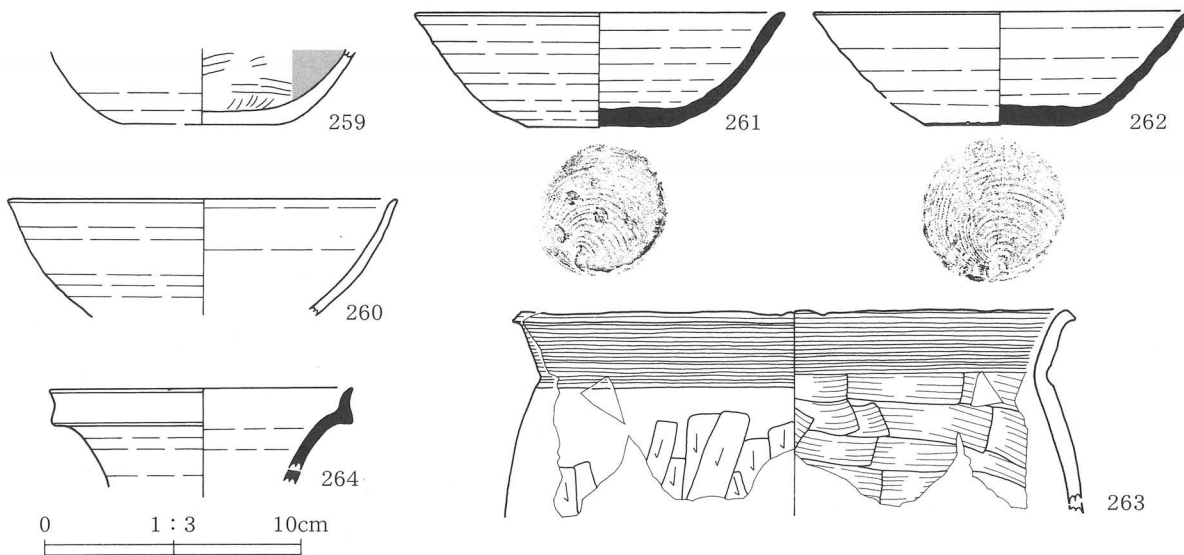
RD1136



RD1154

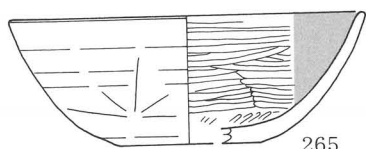


RD1156

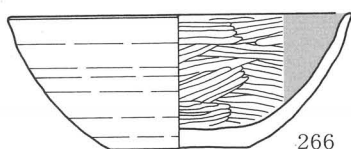


第93図 RD土坑出土遺物(1)

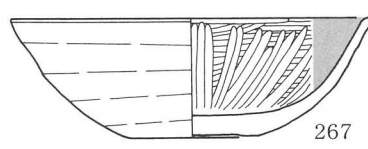
RD1157



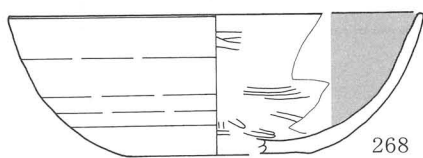
265



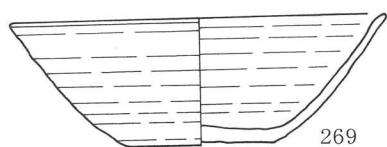
266



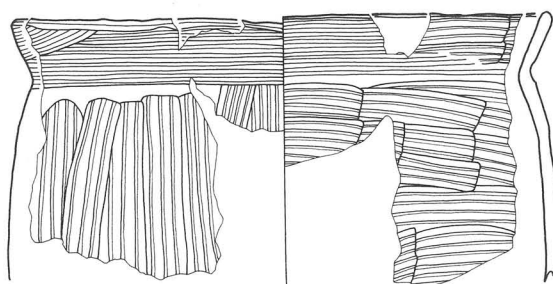
267



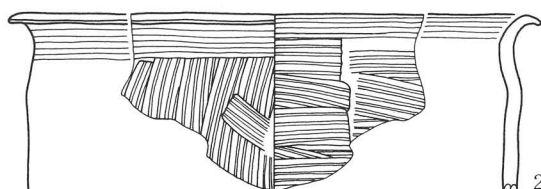
268



269

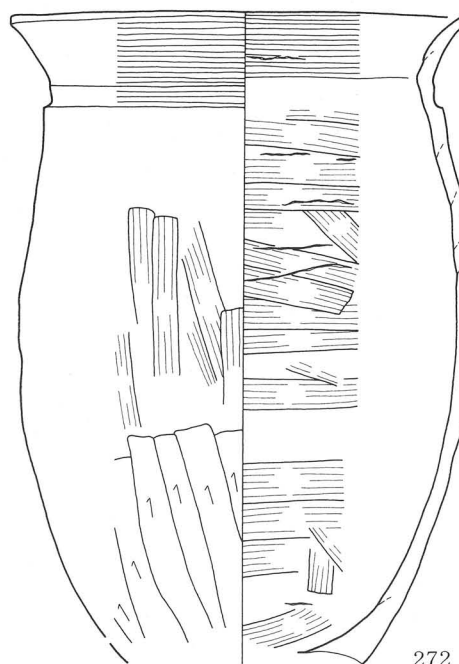


270



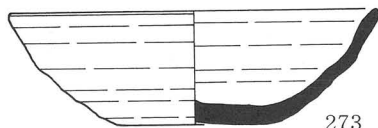
271

RD1158



272

RD1159



273



RD1162

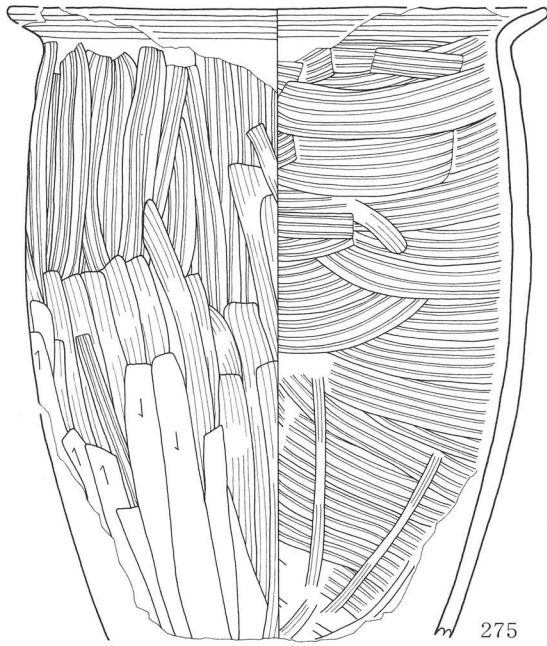


274

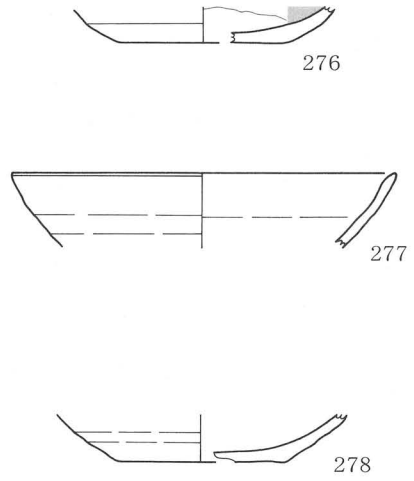
0 1 : 3 10cm

第94图 RD土坑出土遺物(2)

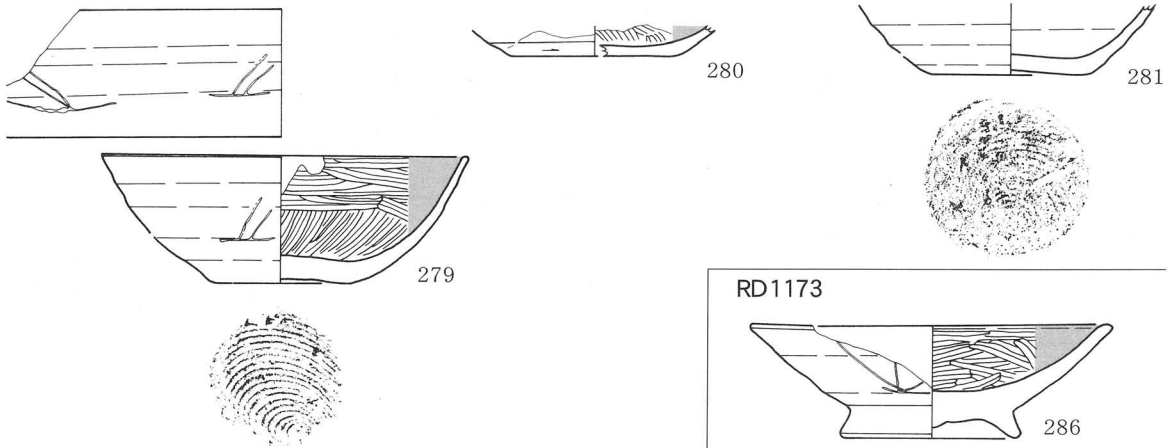
RD1165



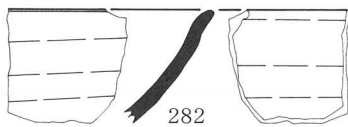
RD1167



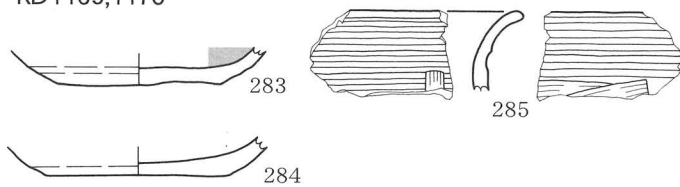
RD1168



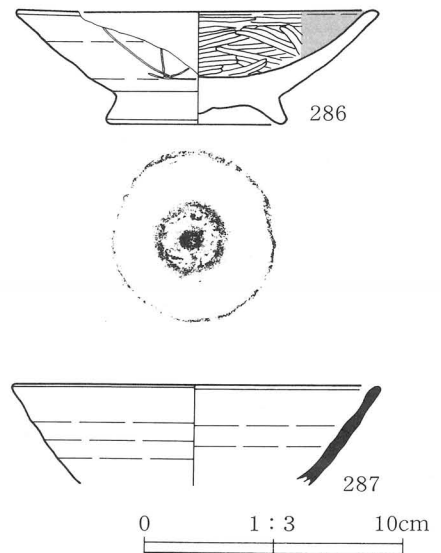
RD1169



RD1169,1170

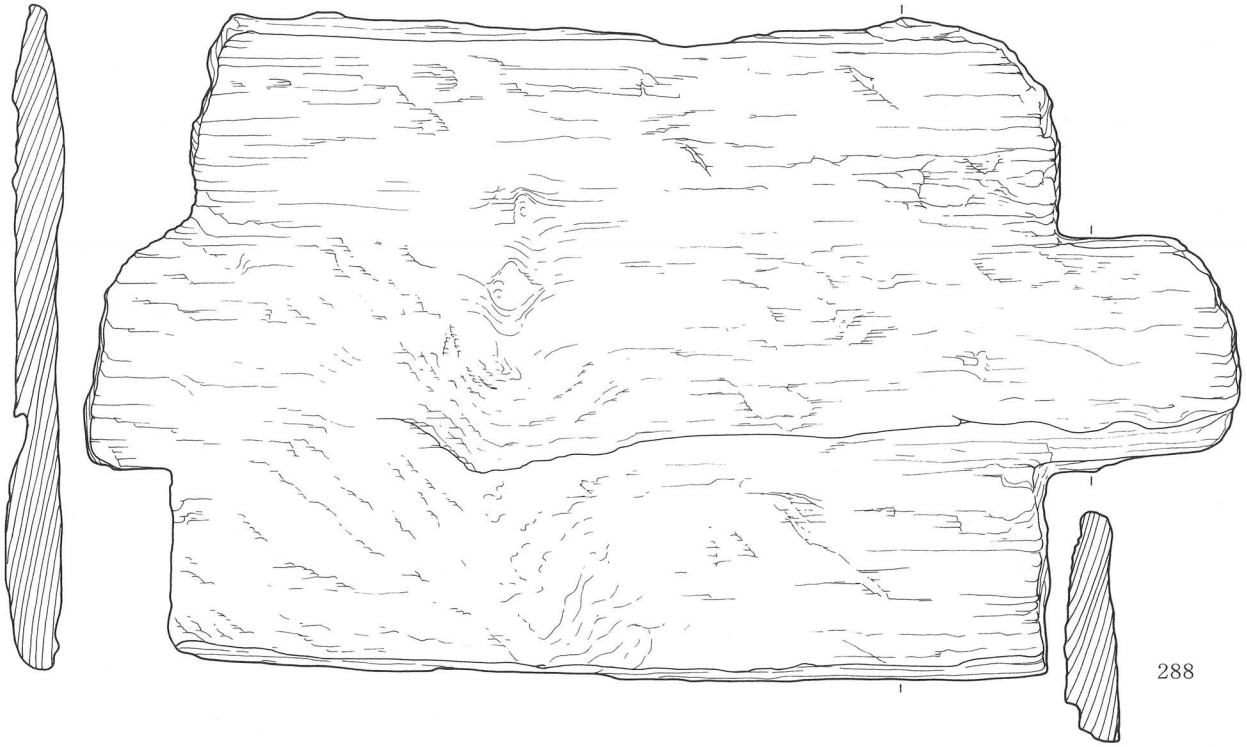


RD1173

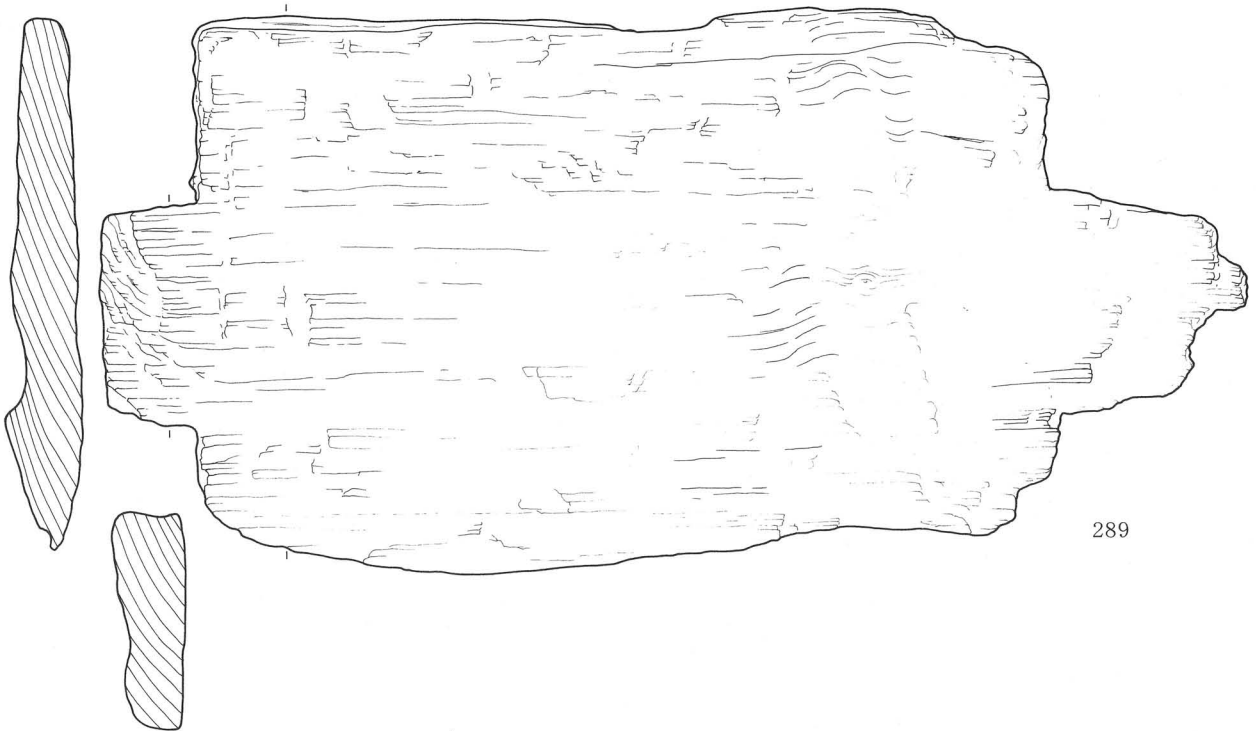


第95図 RD土坑出土遺物(3)

RI017①



288

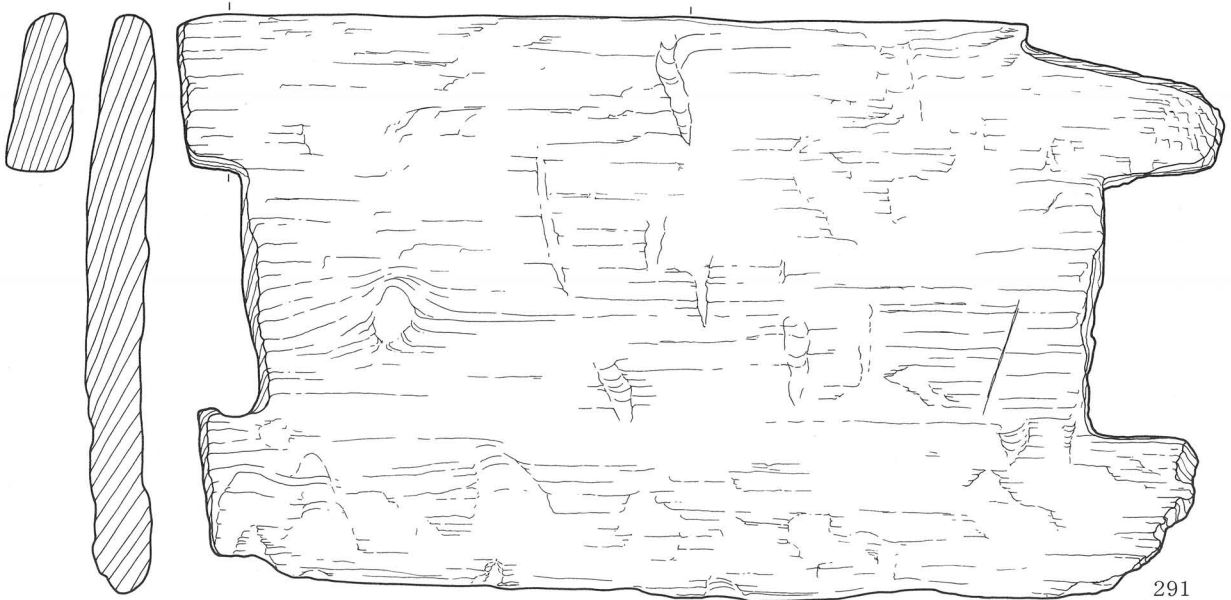


289

0 1:4 10cm

第96図 RI 井戸跡出土遺物(1)

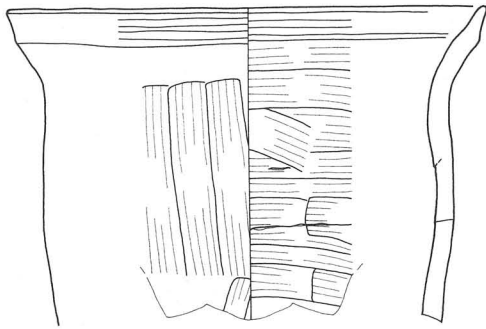
RI017②



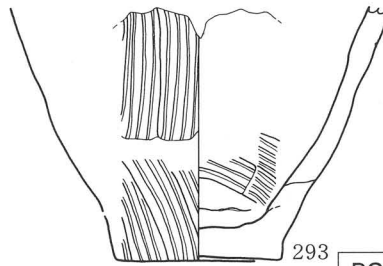
0 1 : 4 10cm

第97図 RI 井戸跡出土遺物(2)

RG319

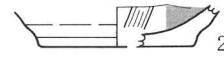


292

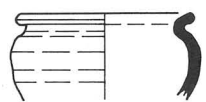


293

RG319.323.501



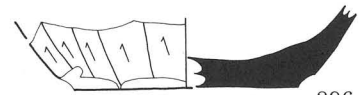
295



294

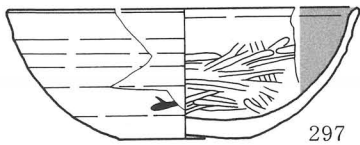


RG323

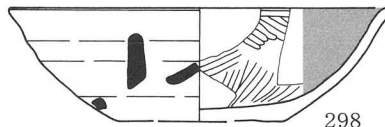


296

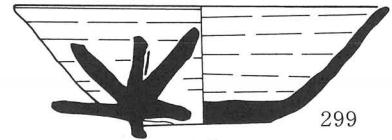
RG498①



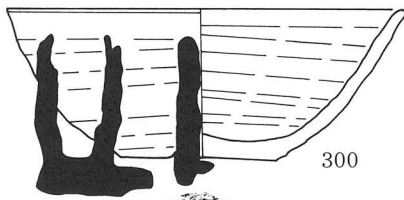
297



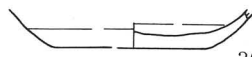
298



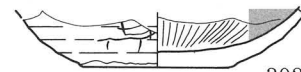
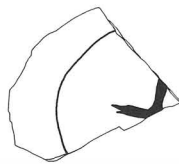
299



300



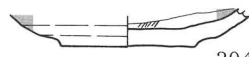
301



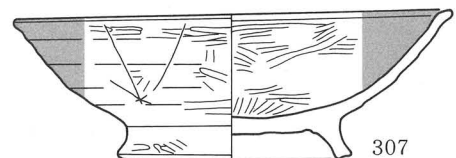
302



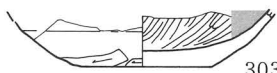
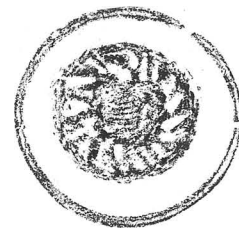
306



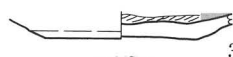
304



307



303



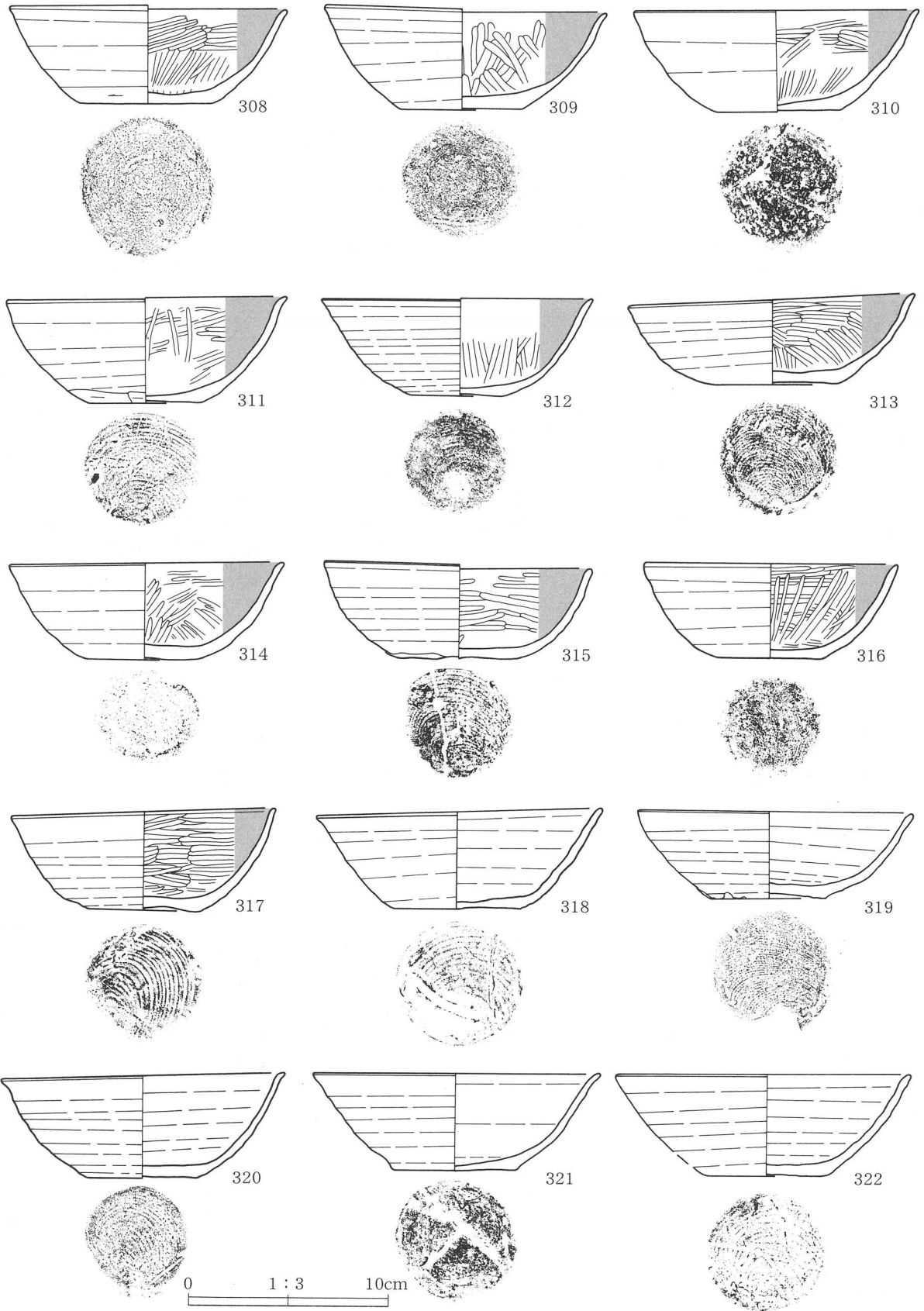
305



0 1:3 10cm

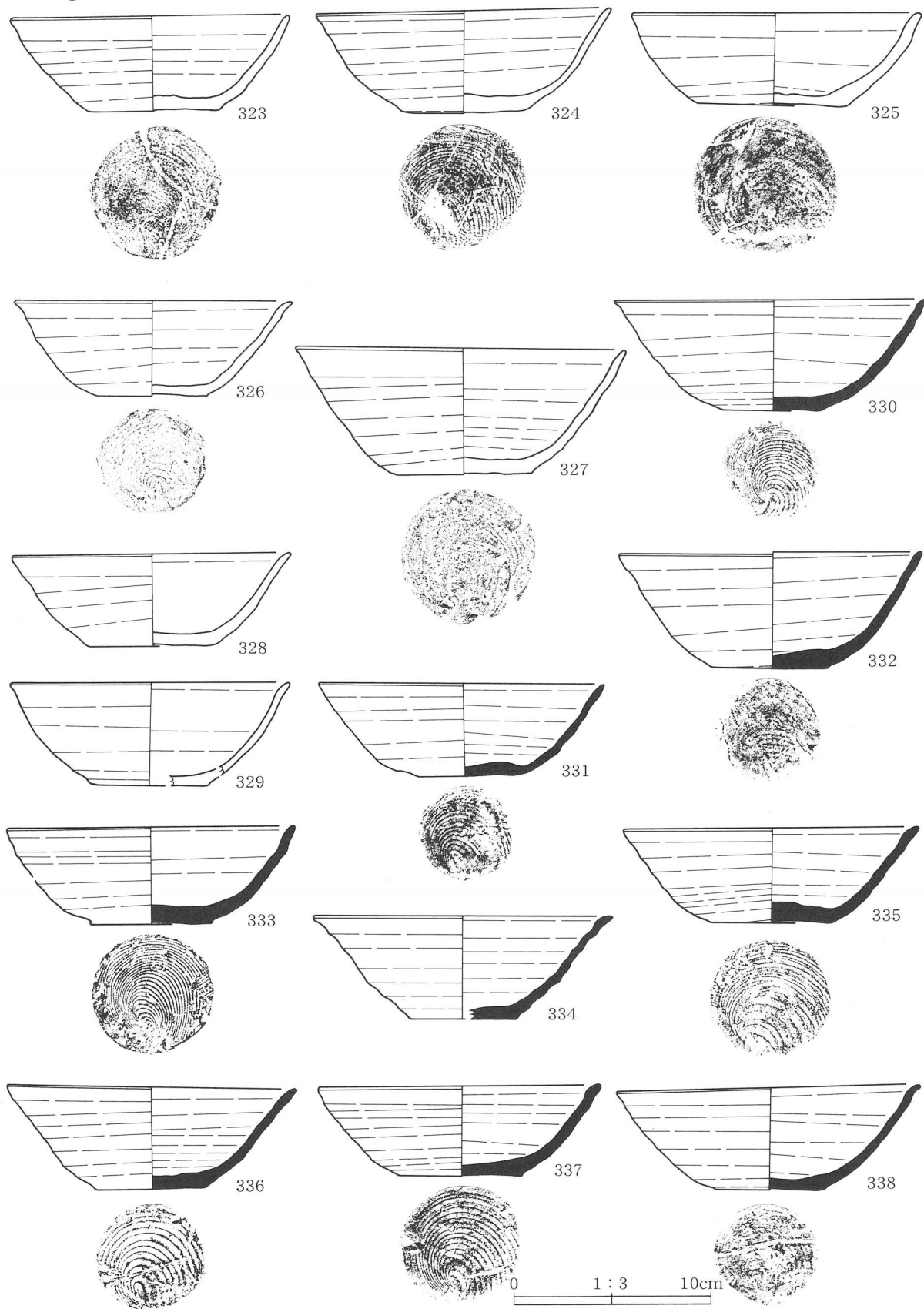
第98図 RG溝跡出土遺物(1)

RG498②



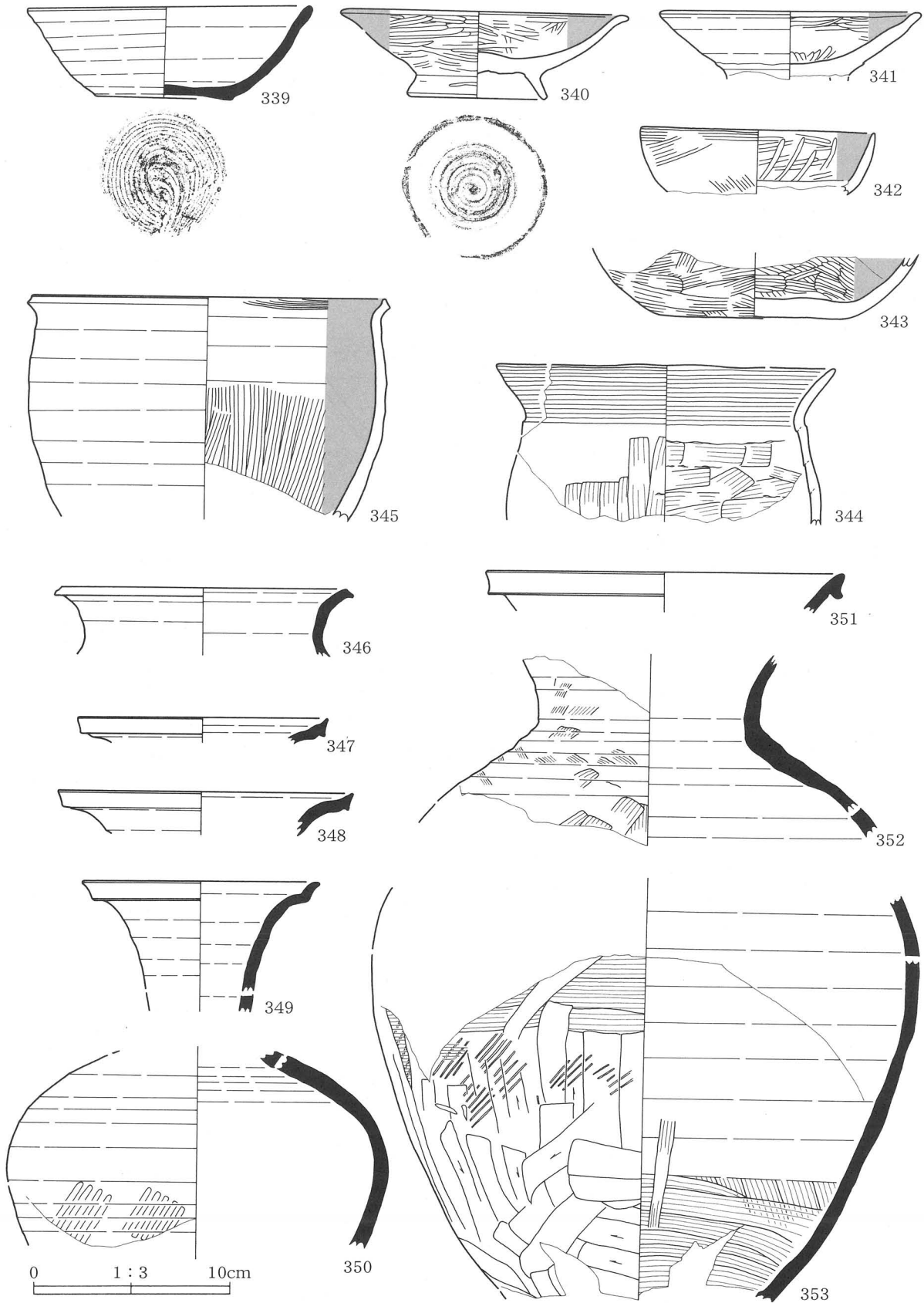
第99図 RG溝跡出土遺物(2)

RG498③



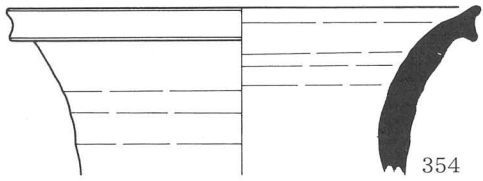
第100図 RG溝跡出土遺物(3)

RG498④

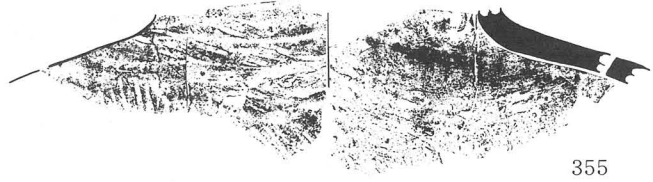


第101図 RG溝跡出土遺物(4)

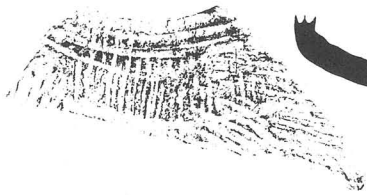
RG498⑤



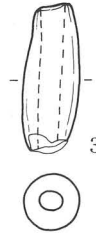
354



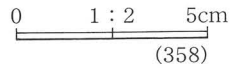
355



356



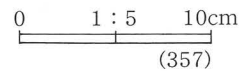
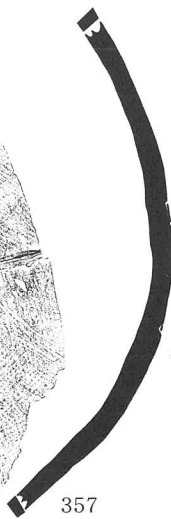
358



(358)

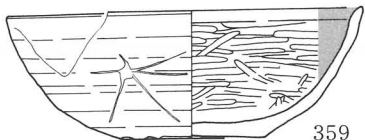


357

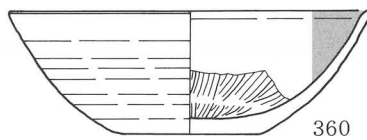


(357)

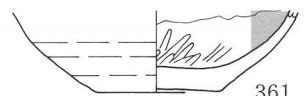
RG498.499①



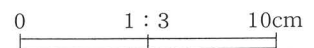
359



360

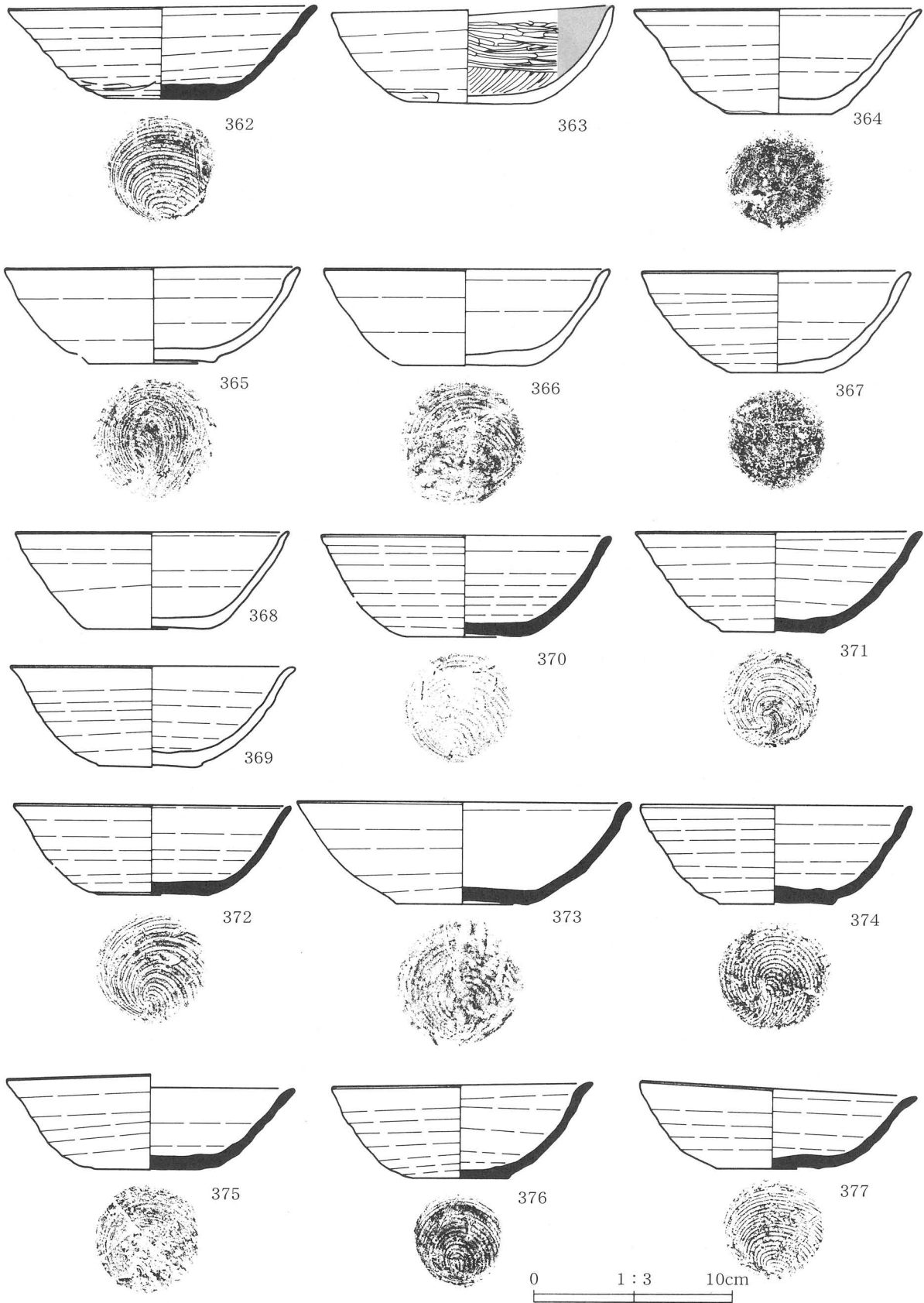


361



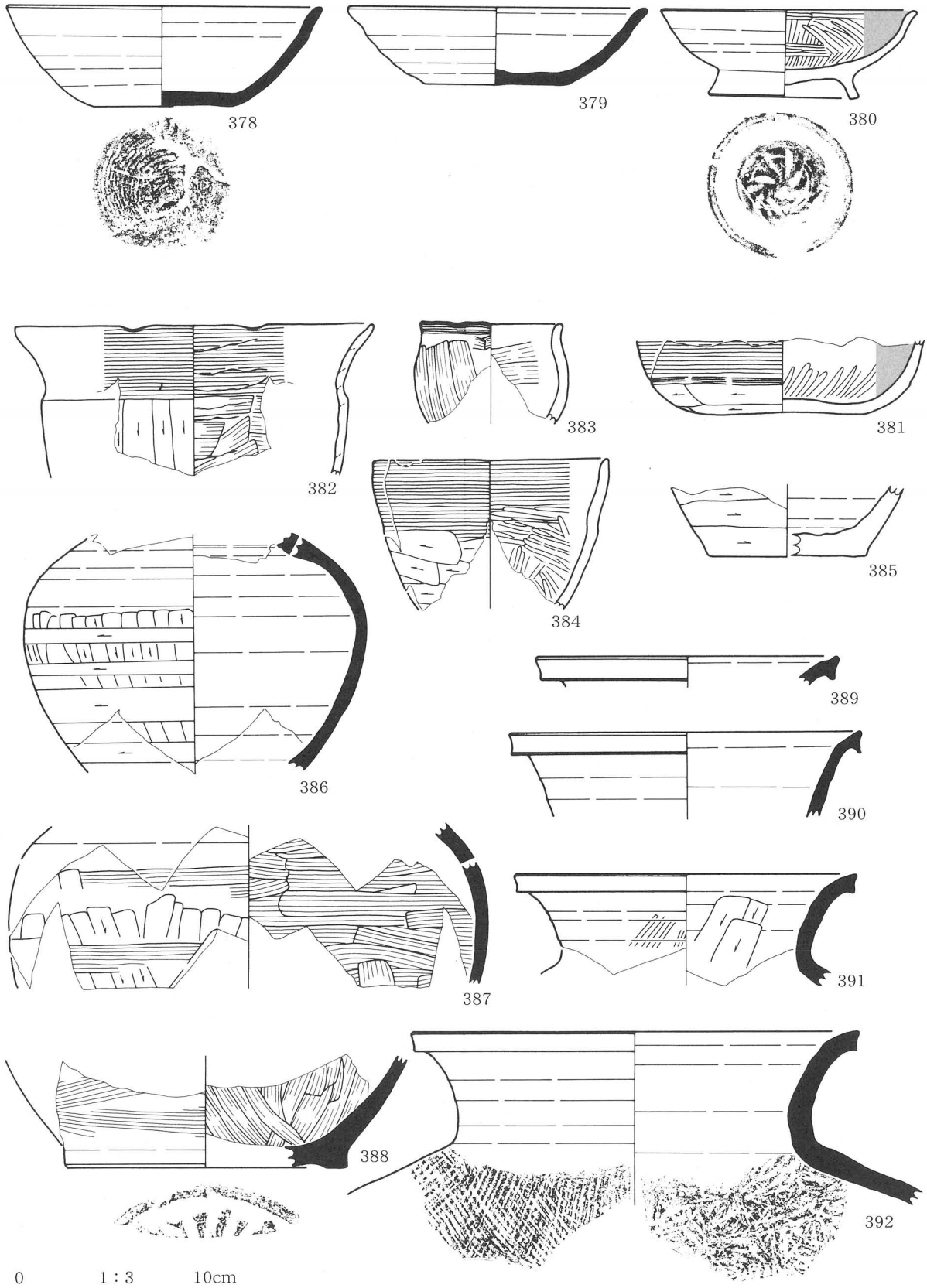
第102図 RG溝跡出土遺物(5)

RG498. 499 ②



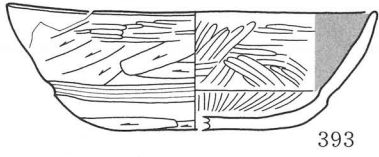
第103図 RG溝跡出土遺物(6)

RG498. 499 ③

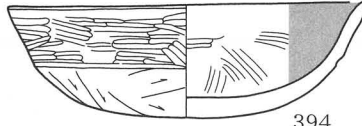


第104図 RG溝跡出土遺物(7)

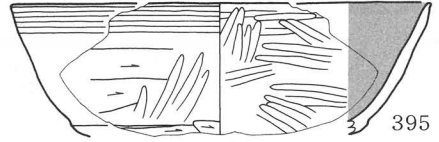
RG499



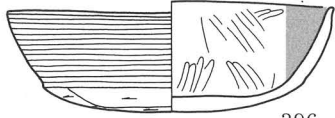
393



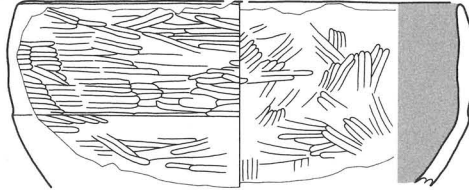
394



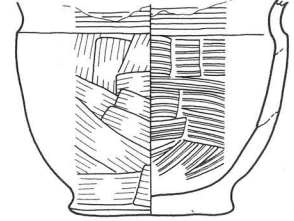
395



396



397



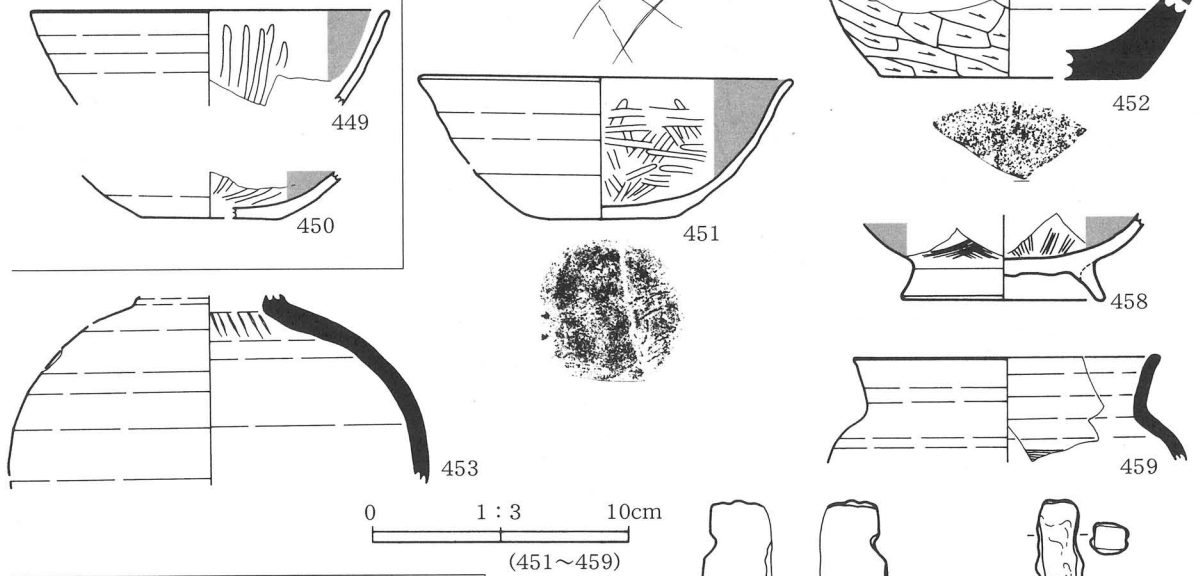
398

0 1:3 10cm

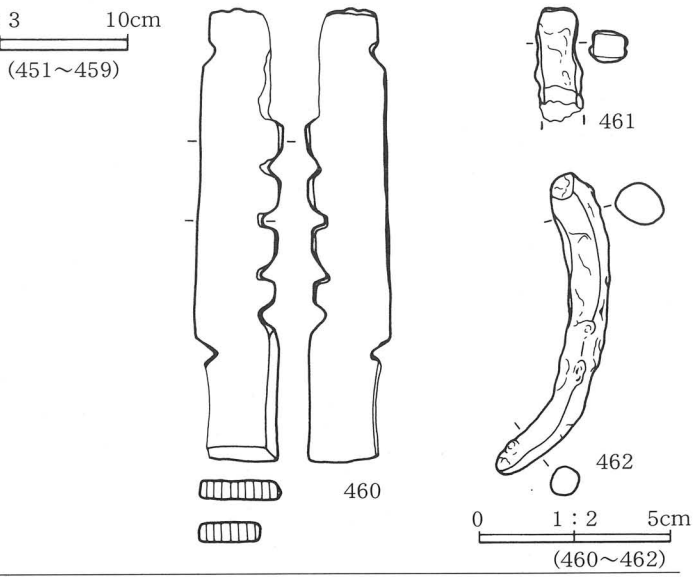
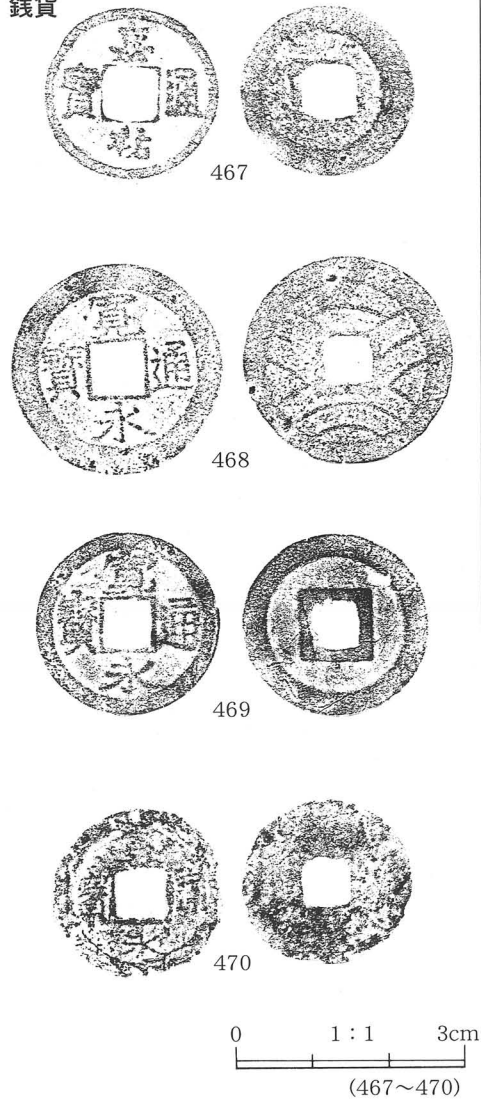
第105図 RG溝跡出土遺物(8)

RG501・RD1173

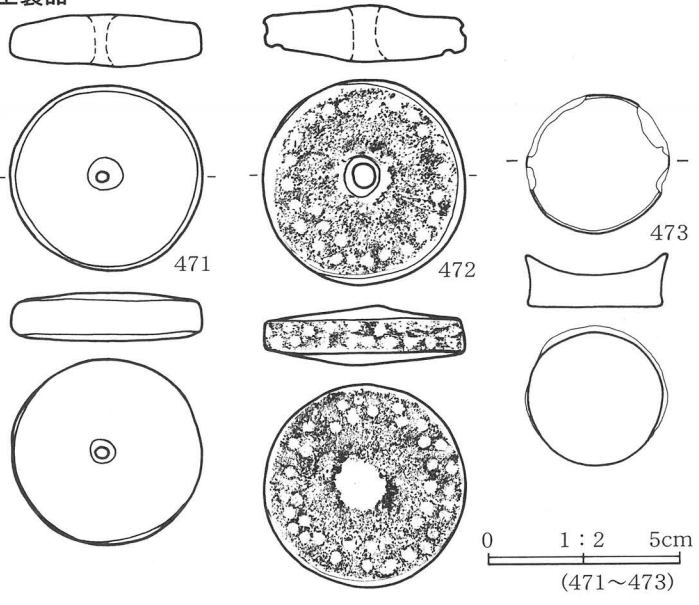
遺構外



錢貨

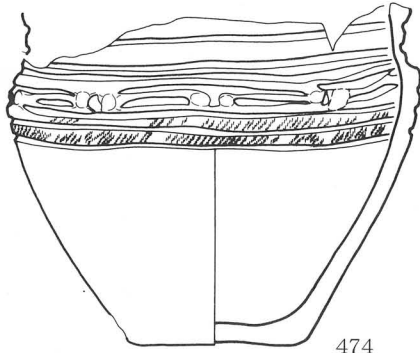


土製品



第106図 RG溝跡(9)・遺構外出土遺物・錢貨・土製品

RA600



474



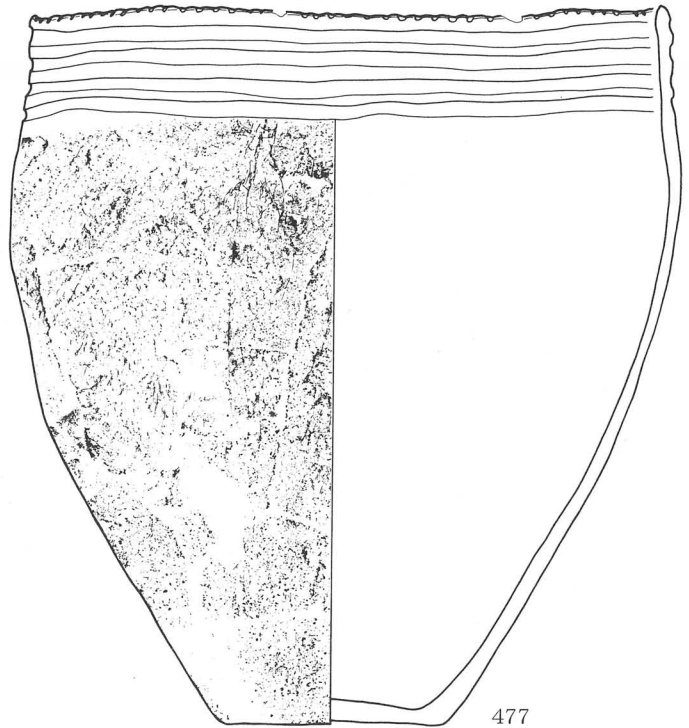
475

RA601



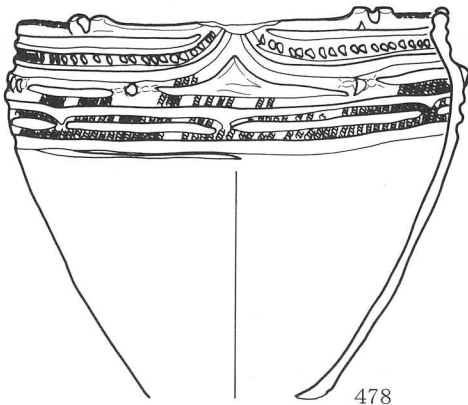
476

RA603 (RA601)

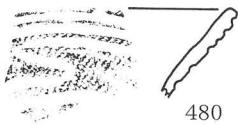


477

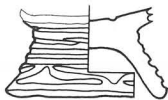
RE064



478

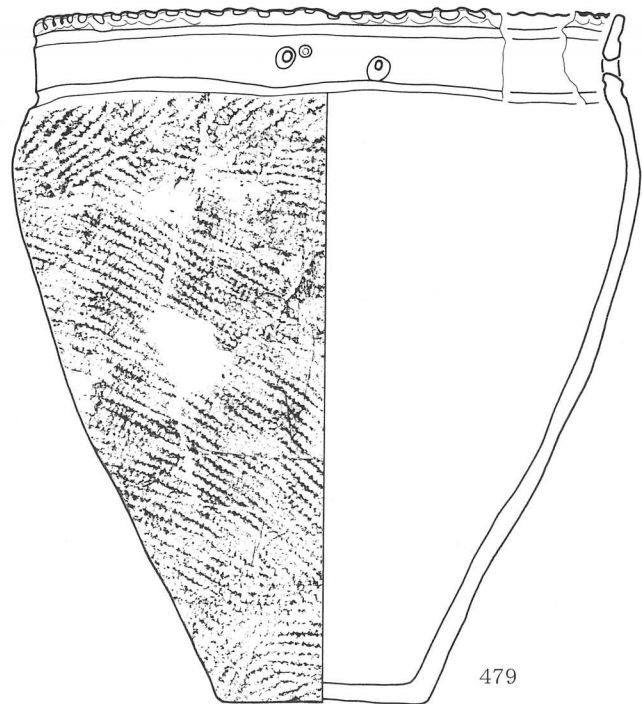


480



481

RE064 (RA602)

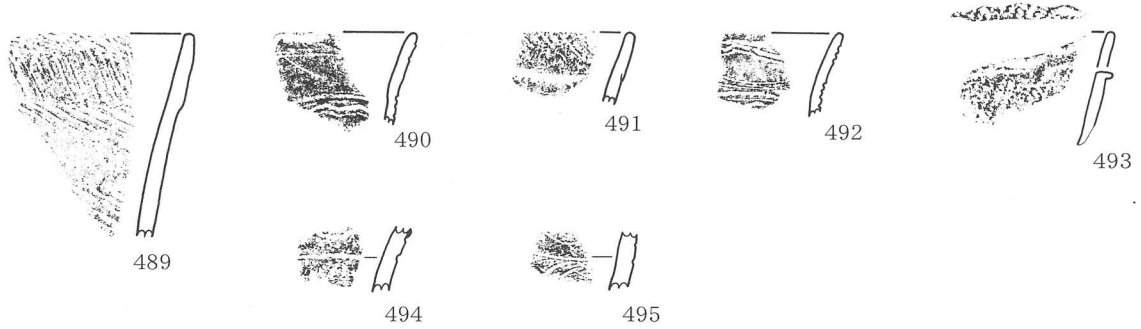
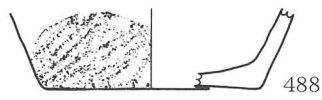
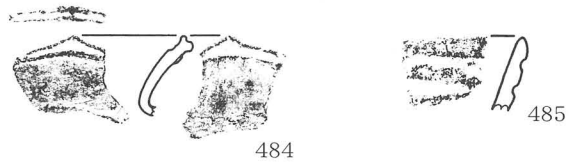
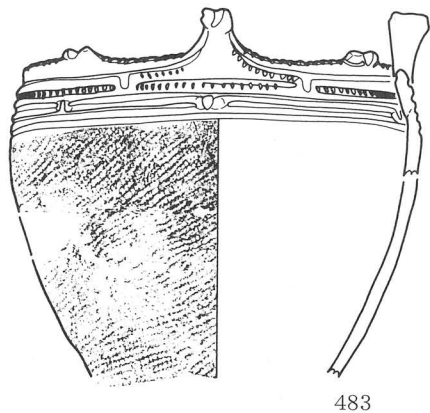
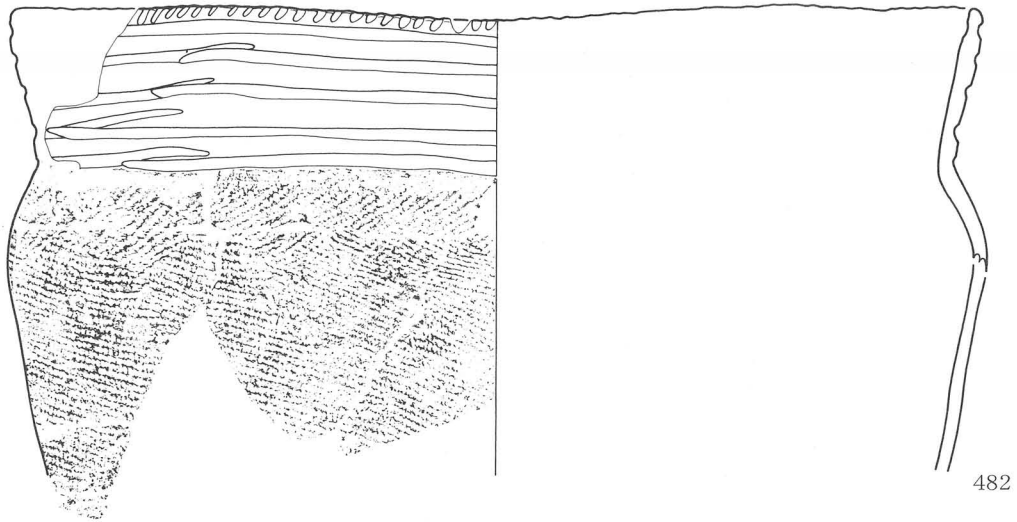


479

0 1:3 10cm

第107図 縄文・弥生土器(1)

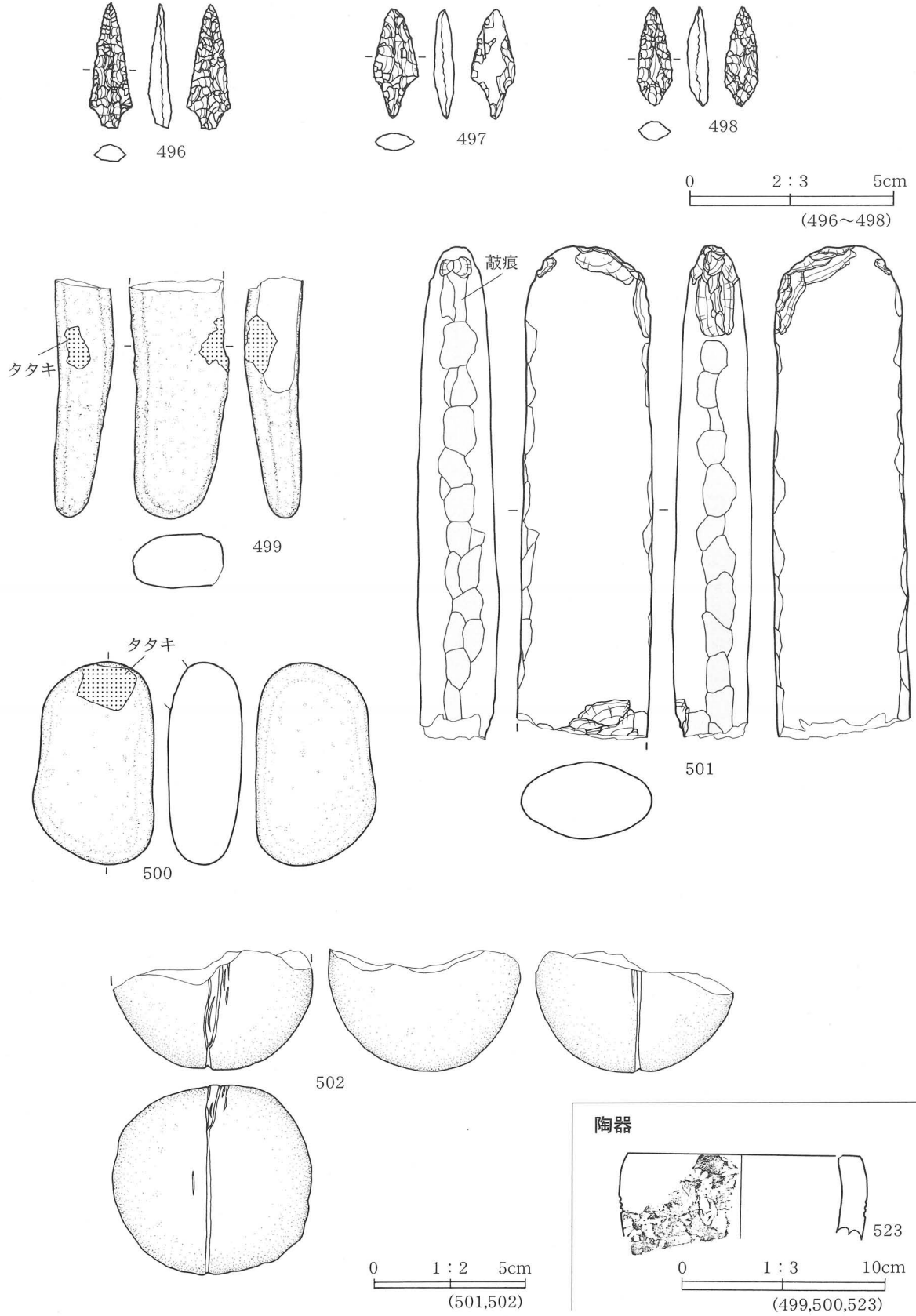
遺構外



0 1:3 10cm

第108図 縄文・弥生土器(2)

石器・石製品



第109図 石器・石製品、近世陶器

表6 出土遺物一覧(1)

※1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番	
1	D	RA580	床面	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	100	17.2	5.0	—	10YR6/6 明黄褐	ヘラミガキ	ハケメ	ヘラミガキ		66	67	210	
2	D	RA580	1の上	土師	坏	非ロクロ	口~底	95	12.7	4.2	—	7.5YR6/8 橙	ヨコナデ	ヘララケズリ	ナデ	関東系土師器	66	67	211	
3	D	RA580	下部	土師	片口	非ロクロ	口~底	95	13.0	12.0	6.6	7.5YR6/6 橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ		66	67	961	
4	D	RA580	床~下部	土師	甕	非ロクロ	口~底	95	18.7	26.6	7.9	10YR6/6 明黄褐	ハケメ→ヘラミガキ	木葉痕	ハケメ→ヘラミガキ		66	67	212	
5	D	RA580	床面	土師	甕	非ロクロ	口~底	100	19.5	23.9	7.8	10YR6/3に ぶい黄橙	口)ヘラナデ→ミガキ、 胴)ハケメ→ミガキ	木葉痕	ハケメ→ヘラミガキ		66	67	213	
6	D	RA580	床上	土師	甕	非ロクロ	口~胴 下	(90)	16.9	17.8	—	10YR7/4 にぶい黄橙	口~胴)ヘラミガキ	—	ハケメ→ヘラミガキ		66	67	216	
7	D	RA580	支脚	土師	小形甕	非ロクロ	頸~底	(85)	—	(14.8)	6.7	7.5YR6/4 にぶい橙	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ→ヘラミガキ	木葉痕	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ(下半ヘラミガキか?)	輪縁み痕あり	66	68	214	
8	D	RA580	床上	土師	球胴甕	非ロクロ	口~底	75	24.0	27.5	(8.6)	10YR6/6 明黄褐	口)ハケメ→ヨコナデ →(ヘラミガキ)、胴)ヘ ラミガキ、ヘララケズリ		口)ヨコナデ→一部ミ ガキ、胴)ヘララナデ		67	68	215	
9	D	RA580	床~下部	土師	球胴甕	非ロクロ	頸~底	(95)	—	(25.3)	9.6	7.5YR6/6 橙	樽ハケメ→ヨコナデ→ タラケズ	ナデ	ヘララナデ、ハケメ	穿孔あり。	67	68	221	
10	D	RA580	北西隅下部	土製品	紡錘車								ヘララケズリ・ヘララナデ			擦痕あり	67	68	218	
11	D	RA580	床面	土製品	紡錘車								ヘララナデ				67	68	219	
12	D	RA580	床面	土製品	紡錘車								ヨコナデ				67	68	220	
13	D	RA581	新期カマド袖上	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	50	(17.0)	(4.6)	—	7.5YR6/6 橙	ヨコナデ	ヘララケズリ	ヘラミガキ(体ヨコ、 底ナメ)	内外有段	68	68	239	
14	D	RA581	下部	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	70	(16.8)	5.6	—	10YR7/4に ぶい黄橙	ヘラミガキ	沈線・ヘララナデ	ヘラミガキ	段沈線	68	68	235	
15	D	RA581	床上	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	45	(20.0)	7.7	—	10YR6/6 明黄褐	ヘラミガキ	ヘララナデ→ヘララケズリ →段	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘララナデ摩滅したケ ズリか? 外面段あり	68	68	238
16	D	RA581	新期カマド床面 ~袖上	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	30	(17.2)	6.1	—	10YR6/4に ぶい黄橙	ヨコナデ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	外面やや窪む箇所あ り	68	69	241	
17	D	RA581	下部	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	85	13.1	3.9	5.0	7.5YR6/4 にぶい橙	口)ヨコナデ、体)ハケ メ	底)ナデ?	ヘラミガキ	ヘラミガキ		68	69	250
18	D	RA581	上部	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	75	10.4	3.8	—	10YR8/4 浅黄橙	ヨコナデ	ヘララケズリ(マメツ)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	外面段あり	68	69	237
19	D	RA581	新期カマド床面	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	95	10.0	4.3	3.0	7.5YR7/6 橙	ヨコナデ	ヘララケズリ	ヘラミガキ	外面段あり	68	69	242	
20	D	RA581	新期カマド床面 ~袖上	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	70	18.0	5.6	—	10YR8/2 灰白	ヨコナデ	ハケメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	外面段あり	68	69	240
21	D	RA581	下部	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	85	16.2	5.4	—	10YR7/2に ぶい黄橙	ヘララナデ→段	段→ヘラミガキ	(ヘララナデ→)ヘラミガ キ	外面段あり(弱い)	68	69	236	
22	D	RA581	下部	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	70	(11.4)	3.8	5.0	7.5YR6/6 橙	ヨコナデ、ヘララナデ(マ メツ、ミガキか)	ヘラミガキ	ヘラミガキ		68	69	243	
23	D	RA581	検出面(試掘)	土師	高坏	非ロクロ	脚	(85)	—	(5.9)	9.5	10YR7/4に ぶい黄橙	ヨコナデ→ヘラミガキ	—	ヘララナデ、ヘラミガキ		68	69	253	

表6 出土遺物一覽(2)

※1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
24	D	RA581	古期カマド床・ 新期カマド床、 床より上	土師	甕	非ロクロ	口～底	75	16.3	31.5	7.8	7.5YR6/4 にぶい橙	口)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ?(マメツ)		口)ヨコナデ、胴)ハケ メ	輪積み顕著	68	69	248
25	D	RA581	新期カマド床～ 袖上	土師	甕	非ロクロ	口～底	60	16.8	29.5	7.8	7.5YR5/4 にぶい濁	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ		口)ヨコナデ、胴)ハケ メ	輪積み顕著	68	69	246
26	D	RA581	新期カマド床～ 5層上面	土師	甕	非ロクロ	口～底	90	16.2	30.8	7.1	10YR6/4に ぶい黄橙	ハケメ→口)ヨコナデ		ハケメ	輪積み顕著	69	70	247
27	D	RA581	床面・下部・上 部	土師	甕	非ロクロ	胴下～ 底	(75)	—	(12.8)	—	10YR8/3 浅黄橙	ハラナデ		ハケメ	ハケメ	69	69	249
28	D	RA581	床より下・一括	土師	球脚甕	非ロクロ	底	(55)	—	(3.1)	8.2	7.5YR6/8 橙	ハラナデ	ナデ	ハケメ	ハケメ	69	69	255
29	D	RA581	床より下・床 面・上部	土師	球脚甕	非ロクロ	口～胴 下	(15)	(28.0)	(24.4)	—	10YR7/3に ぶい黄橙	口)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ	—	口)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ		69	70	251
30	D	RA581	新期カマド床面	土製品	勾玉												69	69	257
31	D	RA582	床面	土師	甕	非ロクロ	口～胴 上	(30)	(16.0)	(14.6)	—	7.5YR7/6 橙	口)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ	—	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ	頸部段あり	70	70	258
32	D	RA582	床～下部・一括	土師	甕	非ロクロ	胴下～ 底	(40)	—	(15.0)	7.2	7.5YR5/6 明濁	ハケメ(ハラナデに近 い)	ナデ	ハケメ(ハラナデに近 い)		70	70	259
33	D	RA582	燃焼面上	土師	甕	非ロクロ	胴下～ 底	(80)	—	(12.1)	7.5	7.5YR7/6 橙	ハケメ	ナデ	ハケメ	輪積み痕あり	70	70	260
34	D	RA583	下部	土師	坏	非ロクロ	口～底	80	17.8	5.5	—	5 YR5/8明 赤橙	ハケメ	ハケメ	ハラミガキ	黒色処理なし・赤 い? 外面段あり	70	70	262
35	D	RA583	下部	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口～底	90	13.1	4.7	—	10YR5/6 黄濁	口)ヨコナデ→ハラミ ガキ?	ハラケズリ	ハラミガキ	外面段あり	70	70	261
36	D	RA583	カマド2層	土師	甕	非ロクロ	口～底	90	(18.4)	33.2	9.3	10YR8/4 浅黄橙	口)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ、下端)ハラケズリ	ナデ	口)ヨコナデ、ハラナデ	輪積み痕あり	70	71	269
37	D	RA583	床面	土師	甕	非ロクロ	口～胴 上	(80)	21.6	(24.5)	—	10YR6/4に ぶい黄橙	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ	—	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ	輪積みあり	70	70	267
38	D	RA583	貯蔵穴上部・下 部	土師	甕	非ロクロ	口～胴 下	(15)	(19.4)	(21.5)	—	5 YR6/4に ぶい橙	ハケメ→口)ヨコナデ	—	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ	段あり	71	71	276
39	D	RA583	床上	土師	甕	非ロクロ	口	破片	(20.8)	(4.6)	—	10YR7/4に ぶい黄橙	ハラナデ(細かいハケ メ?) →ヨコナデ	—	ヨコナデ	段あり	71	70	279
40	D	RA583	支脚(東側)・ 一括	土師	甕	非ロクロ	胴上～ 底	(25)	—	(23.9)	(7.9)	5 YR7/3に ぶい橙	ハラナデ(細かいハケ メ?) →ヨコナデ	ナデ	ハケメ(細かい)		71	71	271
41	D	RA583	支脚(西側)・ 床～下部・一括	土師	甕	非ロクロ	胴下～ 底	(50)	—	(16.7)	7.4	5 YR6/4に ぶい橙	ハラナデ	ナデ	ハラナデ	煤付輪積み痕あり	71	71	270
42	D	RA583	床面	土師	甕	非ロクロ	口～底	80	(16.6)	20.5	7.7	5 YR7/4に ぶい橙	口)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ	ナデ	ハラナデ		71	71	268
43	D	RA583	カマド	土師	小形甕	非ロクロ	口～底	25	(16.5)	13.7	(8.7)	5 YR6/3に ぶい橙	口)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ(下半マメツ)	ナデ?	ハラナデ	輪積みあり	71	71	277
44	D	RA583	下部	土師	甕	非ロクロ	口～胴 下	(30)	(15.6)	(10.6)	—	5 YR4/4に ぶい赤濁	口)ヨコナデ、胴)マメ ツ	—	口)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ	輪積みあり	71	72	272
45	D	RA583	PP 9 下部・床 面	土師	小形 鉢?	非ロクロ	口～底	45	10.0	9.4	7.0	7.5YR6/4 にぶい橙	口)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ	ナデ	ナデ?輪積み明瞭に残 る		71	71	263

表6 出土遺物一覽(3)

※1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
46	D	RA583	下部	土師	小形 甕?	非ロクロ	口~底	50	9.0	7.4	3.6	10YR7/3に ぶい黄橙	口)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ	ナデ	ハケメ→ハラミミガキ (楕圓に近い)		71	71	264
47	D	RA583	床面	土師	甕	非ロクロ	口~底	100	16.6	9.1	6.9	7.5YR7/6 黄橙	口)ヨコナデ、胴)ハラ ケズリ→ハラミガキ	-	口)ヨコナデ→胴)ハラ ミガキ	2箇所穿孔 輪痕みあり	72	72	265
48	D	RA583	床面	土師	小形球 脚甕?	非ロクロ	口~底	85	(11.0)	11.5	7.0	10YR7/4に ぶい黄橙	口)ヨコナデ、胴)ハラ ミガキ	-	口)ヨコナデ、胴)下半 ハケメ	穿孔あり(内→外) 輪痕みあり	72	71	266
49	D	RA583	床面	土師	球脚甕	非ロクロ	頸~胴 上	(20)	-	(12.6)	-	5.YR5/6明 赤褐	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ	-	口)ヨコナデ、胴)上部 ハラナデ→中部ハケメ	外面麻付着	72	72	274
50	D	RA583	床面	土師	球脚甕	非ロクロ	脣~胴 上	(15)	-	(7.2)	-	5.YR7/4に ぶい橙	ハケメ	-	ハケメ	輪痕みあり	72	72	275
51	D	RA583	カマド西袖・カ マド南床面	土師	球脚甕	非ロクロ	脚下~ 底	(70)	-	(5.3)	8.8	7.5YR8/3 浅黄橙	ハケメ	ナデ	ハケメ	輪痕みあり	72	72	273
52	D	RA583	下部	石器	タタキ												72	72	S-112
53	D	RA584	カマド袖上面	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	90	17.3	5.4	-	10YR6/4に ぶい黄褐	口)タテミガキ→ハケ メ→ヨコナデ	ハケメ	ハラミガキ	刻書「X」 外面段あり	73	72	286
54	D	RA584	1層下面	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	45	(15.7)	5.7	-	7.5YR7/6 黄橙	口)ヨコナデ、体)ハラ ケズリ	ハラケズリ	ハラミガキ	刻書「X」 段沈線	73	72	287
55	D	RA584	上部	土師	坏	非ロクロ	体~底	(30)	(9.4)	(1.9)	(5.0)	5.YR6/6橙	ヨコナデ	ハラケズリ	ヨコナデ	刻書「X」 外面段あり	73	72	290
56	D	RA584	530の上	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	70	17.0	6.5	-	10YR6/6 明黄橙	口)ヨコナデ、体)ハケ メ→ハラナデ→ハラ ミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	外面段あり	73	72	285
57	D	RA584	530の上	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	85	17.0	5.2	-	10YR6/4に ぶい黄橙	口)ヨコナデ、体)ハラ ミガキ	ハケメ→ハラミガキ	ハラミガキ	光沢あり 外面段あり	73	72	284
58	D	RA584	床面	土師	坏	非ロクロ	口~底	95	14.6	5.1	-	7.5YR6/6 黄橙	口)タテミガキ?→ヨ コナデ、体)ハケメ	ハラナデ→ハラケズリ	ハラミガキ(上半マメ ツ)	外面窪み	73	72	291
59	D	RA584	カマド袖上埋土 中	土師	坏	非ロクロ	口~底	95	15.0	6.4	-	10YR6/6 明黄橙	口)タテミガキ?、→ ヨコナデ、体)ハケメ	ハケメ→ハラナデ、ハ ラミガキ	ハラミガキ	外面段あり	73	73	289
60	D	RA584	床上	土師 (内黒)	高坏	非ロクロ	口~底	60	(15.7)	9.6	(8.4)	10YR7/4に ぶい黄橙	口)ヨコナデ、段)上 ハラナデ、段)下ハケメ	脚外)ハケメ、段あり	ハラミガキ、脚内)ハラ ナデ	輪痕みあり	73	73	288
61	D	RA584	一括	土師	小形蓋	非ロクロ	頸~底	(70)	-	(4.5)	3.5	10YR6/4に ぶい黄橙	口)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ(ケズリに近い)	ハラナデ(ケズリに近い)	口)ヨコナデ、ハケメ、 胴)輪痕み→押さのみ		73	73	292
62	D	RA584	カマド6層(下 部)	土師	甕	非ロクロ	口~底	90	18.0	28.8	6.4	7.5YR5/4 にぶい褐	口)ヨコナデ、上半 ハラミガキ、下半ハケメ		口)ヨコナデ、胴)ハケ メ→ハラミガキ	頸部段(沈線状?)	73	73	305
63	D	RA584	床~床下(めり 込む)・上部	土師	甕	非ロクロ	口~底	95	16.6	27.4	6.2	5.YR6/6橙	口)ヨコナデ、胴)ハラ ミガキ(←ハケメ?)	ナデ	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ→ハラミガキ	輪痕みあり	74	73	303
64	D	RA584	床上	土師	甕	非ロクロ	口~底	100	15.9	24.6	6.5	7.5YR6/6 黄橙	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ→ナテミガキ	底)ナデ	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ→ハラミガキ		74	73	293
65	D	RA584	下部	土師	甕	非ロクロ	口~胴 下	(90)	19.7	(27.1)	-	7.5YR7/8 黄橙	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ	-	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ	輪痕みあり	74	73	298
66	D	RA584	下部	土師	甕	非ロクロ	口~胴 下	(65)	(18.1)	(21.2)	-	7.5YR6/3 にぶい褐	口)ヨコナデ、胴)ハ ケメ	-	口)ヨコナデ、胴)ハ ケメ	口縁段あり	74	74	306
67	D	RA584	床面	土師	甕	非ロクロ	口~底	85	14.5	18.6	6.3	7.5YR6/4 にぶい橙	口)ヨコナデ、胴)ハ ケメ	底)ナデ	口)ヨコナデ、胴)ハ ケメ(下半ハラナデか)		74	74	294

表6 出土遺物一覽(4)

※1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
68	D	RA584	上部	土師	甕	非ロクロ	口~胴 下	(85)	15.7 (19.9)	—	—	7.5YR5/8 明褐色	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ	—	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ		75	74	296
69	D	RA584	カマド 2層	土師	甕	非ロクロ	口~胴 上	(75)	(15.2) (8.1)	—	—	7.5YR6/6 橙	口) ヨコナデ、胴) ヨ コナデ	—	口) ヨコナデ、胴) ヨ コナデ	輪積みあり	75	74	304
70	D	RA584	カマド	土師	甕	非ロクロ	口~底	75	16.2 16.9 (6.7)	—	—	7.5YR6/6 橙	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ(マメツ)	底) ナデ	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ		75	74	295
71	D	RA584	3層中	土師	球脚甕	非ロクロ	口~底	95	16.4 22.5 (6.5)	—	—	7.5YR6/8 橙	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ	底) ナデ	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ		75	75	297
72	D	RA584	カマド・下部・ 1層中	土師	球脚甕	非ロクロ	口~胴 下	(50)	(26.0) (27.1)	—	—	7.5YR6/6 橙	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ	—	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ		75	74	321
73	D	RA585	1層下面	土師	甕	非ロクロ	口~底	95	19.6 32.1 (7.7)	—	—	7.5YR7/8 黄橙	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ(幅狭い)	底) ナデ	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ		76	75	307
74	D	RA585	1層下面	土師	甕	非ロクロ	口~底	90	19.4 28.0 (7.6)	—	—	7.5YR7/8 明褐色	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ	—	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ	輪積みあり	76	75	308
75	D	RA585	1層下面	土師	甕	非ロクロ	口~胴 上	(15)	(22.2) (13.9)	—	—	10YR6/3に ぶい、黄橙	口) ハケメ→ヨコナデ、 胴) ハケメ	—	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ	輪積みあり	76	75	310
76	F	RA586	床面 (pp 3 埋 土上面)	土師	坏	非ロクロ	口~底	30	(17.5) 5.2 (—)	—	—	7.5YR7/6 橙	ハラナデ→ハラミガ キ	ハラナデ	ハラナデ→ハラミガ キ	外面赤色顔料	77	75	161
77	F	RA586	pp 3	土師	坏	非ロクロ	口~底	25	(14.2) (3.7) (7.0)	—	—	5 YR6/8橙	口) ヨコナデ、体) ハ ケメ	—	ハラミガキ?	外面赤彩か?	77	75	163
78	F	RA586	下部	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	85	17.5 6.1 (—)	—	—	10YR6/6 明黄橙	ハラナデ、ハラミガキ	ハラナデ	ハラミガキ		77	75	159
79	F	RA586	上部	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	30	(12.3) 3.6 (—)	—	—	7.5YR7/6 橙	ハラミガキ?	ハラケズリ	ハラミガキ	段沈線	77	75	162
80	F	RA586	上部	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~体	(15)	(14.4) (4.9)	—	—	10YR7/3に ぶい、黄橙	口) ヨコナデ、体) ハ ケメ	ハラケズリ	ハラミガキ	ハラメデコボコする	77	75	166
81	F	RA586	下部・上部	土師	坏	非ロクロ	口~底	55	16.2 4.1 (—)	—	—	10YR8/3 浅黄橙	ハラミガキ	ハラケズリ	ハラミガキ	段沈線 黒色処理なし	77	75	160
82	F	RA586	下部	土師	坏	非ロクロ	口~底	100	9.8 4.4 (—)	—	—	10YR8/4 浅黄橙	口) ヨコナデ、体) 上) 無調整(指痕残る?)、 体) ハケメ	外周) ハラケズリ、中 周) ナデ	口) ヨコナデ、体) ハ ケメ		77	75	164
83	F	RA586	pp 3	土師	坏	非ロクロ	口~底	95	8.4 3.9 (—)	—	—	10YR8/3 浅黄橙	口) ヨコナデ、体) ハ ケメ	ナデ	ハラナデ? (マメツ)		77	75	165
84	F	RA586	pp 1 上部~床 面	土師	壺	非ロクロ	口~胴 上	(70)	(8.8) 11.6 (—)	—	—	2.5Y7/2灰 黄	口) ヨコナデ、体) ハ ケメ	—	口) ヨコナデ、体) ハ ケメ		77	76	960
85	F	RA586	床面・7層上面	土師	甕	非ロクロ	口~底	90	20.3 30.5 (7.9)	—	—	10YR7/2に ぶい、黄橙	口) ハケメ→ヨコナデ、 胴) ハケメ(マメツ)	ナデ	口) ヨコナデ、胴) ハケ メ→ハラナデ		77	76	167
86	F	RA586	7層上面	土師	甕	非ロクロ	口~底	65	19.4 26.3 (6.3)	—	—	10YR7/4に ぶい、黄橙	口) ハケメ→ヨコナデ、 胴) ハケメ、胴下) ハ ケメ	ハラナデ	口) ヨコナデ、胴) ハケ メ→ハラナデ		77	76	168
87	F	RA586	床面	土師	甕	非ロクロ	口~底	80	19.1 31.4 (6.6)	—	—	7.5YR7/6 橙	口) ハケメ→ヨコナデ、 胴) ハケメ(マメツ)	—	口) ヨコナデ、胴) ハケ メ		78	76	171
88	F	RA586	pp 3	土師	甕	非ロクロ	口~胴 上	(30)	(17.8) (13.7)	—	—	7.5YR8/3 浅黄橙	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ	—	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ	89と同一個体か?	78	76	184

表6 出土遺物一覽(5)

※1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
89	F	RA586	床面・pp3	土師	甕	非ロクロ	胴下～底	(45)	—	(9.3)	6.6	7.5YR8/3 浅黄褐色	ハケメ		ヘラナデ(マメツ)	88と同一個体か?	78	77	184
90	F	RA586	カマド燃焼部・ 床面	土師	甕	非ロクロ	胴下～底	(85)	—	(10.3)	3.1	7.5YR7/6 褐色	ハケメ	ナデ	ハケメ		78	76	178
91	F	RA586	床面・pp3埋 土上面	土師	甕	非ロクロ	口～底	50	20.1	36.2	9.1	7.5YR6/6 褐色	口)ハケメ→ヨコナデ、 胴)ハケメ、ヘラナデ (乾燥の差か?)		口)ヨコナデ、胴)ハケ メ		78	77	173
92	F	RA586	床面	土師	甕	非ロクロ	口～底	90	18.6	27.4	9.4	7.5YR6/4 ふい橙	口)ハケメ→ヨコナデ、 胴)ハケメ	ナデ	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ		78	77	174
93	F	RA586	カマド燃焼部	土師	甕	非ロクロ	口～胴 上	(45)	(17.4)	(16.1)	(16.3)	5 YR7/3に ふい橙	口)ヨコナデ→ハケメ、 胴)ハケメ、ヘラナデ (乾燥の差?)	—	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ		79	77	176
94	F	RA586	床面(pp3埋 土上面)	土師	甕	非ロクロ	口～底	75	18.4	(17.6)	—	10YR6/6 明黄褐色	口)ヨコナデ、胴)ヘラ ナデ	—	口)ヨコナデ、胴)ヘラ ナデ	口縁段あり	79	77	175
95	F	RA586	床面	土師	甕	非ロクロ	口～底	90	13.1	18.1	(6.4)	5 YR6/8橙	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ	ヘラナデ	口)ヨコナデ、ヘラナデ	口縁段あり	79	77	169
96	F	RA586	床面	土師	甕	非ロクロ	口～胴 下	(70)	15.4	(13.3)	—	5 YR7/4に ふい橙	口)ヨコナデ、ヘラナ デ、胴)ヘラナデ(マメ ツ)	—	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ	輪積み痕顕著	79	77	172
97	F	RA586	下部	土師	球脚甕	非ロクロ	口～胴 下	(20)	(23.0)	(19.0)	—	7.5YR7/4に ふい橙	口)ヨコナデ、胴)ヘラ ナデ	—	口)ヨコナデ、胴)ヘラ ナデ	口縁段あり	79	78	179
98	F	RA586	上部	土師	球脚甕 ?	非ロクロ	胴下～ 底	(80)	—	(3.9)	8.6	10YR6/6 明黄褐色	ヘラナデ	ナデ?	ヘラナデ、ハケメ		79	78	182
99	F	RA586	床面	土製品	紡錘車												79	78	185
100	F	RA586	pp2	土製品	紡錘車												79	78	186
101	F	RA587	床面・上部	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口～底	80	17.4	4.6	—	7.5YR6/4 にふい橙	口)ヨコナデ、体)ヘラ ナデ	ハケメ	ヘラミガキ、ハケメ、ヘ ラナデ		80	78	189
102	F	RA587	床面	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口～底	90	15.1	5.8	—	10YR7/6 明黄褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ?	ヘラミガキ		80	78	187
103	F	RA587	床～上部	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口～底	25	(12.8)	3.8	(8.0)	10YR5/4に ふい黄褐色	口)ヘラミガキ、体)へ ラナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	段沈線	80	78	188
104	F	RA587	上部	土師	高坏	非ロクロ	脚	(95)	—	(3.7)	8.1	7.5YR5/6 明褐色	ナデ	—	ナデ	脚端部沈線	80	78	200
105	F	RA587	床面・上部・検 出面	土師	甕	非ロクロ	口～底	70	(18.3)	27.8	(6.8)	10YR7/4に ふい黄褐色	口)ヨコナデ、胴)ヘラ ナデ	剥落のため不明	口)ヨコナデ、胴)ヘラ ナデ		80	78	203
106	F	RA587	検出面	土師	甕	非ロクロ	口～胴 上	(20)	(17.3)	(11.0)	—	7.5YR5/3 にふい褐色	口)ヨコナデ、胴)ヘラ ナデ	—	口)ヨコナデ、胴)ヘラ ナデ→ヘラミガキ?	輪積み痕あり	80	78	190
107	F	RA587	床面	土師	甕	非ロクロ	口～胴 上	(20)	(15.0)	(11.8)	—	10YR6/4に ふい黄褐色	口)ヨコナデ、胴)ヘラ ナデ	—	口)ヨコナデ、胴)ヘラ ナデ	輪積み痕あり	80	78	198
108	F	RA587	焼土プロック 中・検出面	土師	甕	非ロクロ	口～胴 下	(25)	(15.9)	(13.2)	—	10YR6/6 明黄褐色	口)ヨコナデ→ハケメ、 胴)ハケメ	—	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ	輪積み痕あり	80	78	191
109	F	RA587	検出面	土師	甕	非ロクロ	口～胴 上	(20)	(16.4)	(10.6)	—	10YR5/4に ふい黄褐色	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ→ヘラミガキ	—	口)ヨコナデ、胴)ハケ メ→ヘラミガキ	輪積み痕あり	80	78	193
110	F	RA587	下部・上部	土師	甕	非ロクロ	口～胴 下	(15)	(12.6)	(13.5)	—	7.5YR8/4 浅黄褐色	口)ヨコナデ、胴)ヘラ ナデ(マメツ)	—	口)ヨコナデ、胴)ヘラ ナデ(マメツ)	輪積み痕あり	81	79	197

表 6 出土遺物一覧(6)

※ 1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	
111	F	RA587	床面・上部・検出面	土師	甕	非ロクロ	口~胴上	—	(17.5)	(12.7)	—	7.5YR6/4に ぶい黄橙	□)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ(マメツ)	—	ハラナデ(マメツ)		81	79	202
112	F	RA587	床~上部・検出面	土師	球胴甕	非ロクロ	口~胴下	(20)	(25.5)	(22.3)	—	10YR6/4に ぶい黄橙	□)ヨコナデ、胴)ハケ メ	—	□)ヨコナデ、胴)ハケ メ	輪積み痕あり	81	79	192
113	C	RA588	一括	土師	小形甕	非ロクロ	口~胴上	(20)	(11.6)	(6.5)	—	10YR6/4に ぶい黄橙	□)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ	—	□)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ	114と同一個体?	81	79	206
114	C	RA588	一括	土師	小形甕	非ロクロ	胴上~ 底	(45)	—	(8.3)	5.6	10YR6/4に ぶい黄橙	□)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ(マメツ)	ナデ	ハラナデ	113と同一個体?	81	79	206
115	C	RA588	下部・上部	土師	甕	非ロクロ	口~胴上	(55)	16.4	(10.2)	—	10YR6/2 灰黄褐	□)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ	—	□)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ		81	79	205
116	C	RA588	一括	土師	甕	非ロクロ	口~胴上	(25)	(20.2)	(10.2)	—	7.5YR8/3 浅黄橙	□)ヨコナデ、胴)ハケ メ	—	□)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ	口縁段あり	81	79	207
117	C	RA588	一括	土師	甕	非ロクロ	胴下~ 底	(50)	—	(8.4)	(6.4)	7.5YR7/4 にぶい黄	ハラナデ	—	ハラナデ		81	79	209
118	C	RA588	上部	土師	甕	非ロクロ	胴下~ 底	(80)	—	(9.3)	7.7	7.5YR5/6 明褐	ハラナデ	ハラナデ?	ハラナデ		81	79	208
119	C	RA588	下部	土師	球胴甕	非ロクロ	胴上 下	(90)	—	(19.8)	—	10YR7/4に ぶい黄橙	□)ヨコナデ、胴)ハラ ナデ	—	□)ヨコナデ、ハラナデ		82	79	149
120	C	RA589	床面	土師	坏	非ロクロ	口~底	40	(17.2)	4.5	9.0	10YR7/4に ぶい黄橙	□)ヨコナデ	ハラケズリ	□)ヨコナデ		82	79	150
121	C	RA589	床面	土師	甕	非ロクロ	胴下~ 底	(45)	—	(8.3)	7.2	10YR7/4に ぶい黄橙	ハラケズリ	クシ状の工具でナデ?	ハケメ		82	79	151
122	C	RA589	床面(カマド東 袖)	土師	球胴甕	非ロクロ	口~底	95	20.5	34.6	9.3	2.5YR8/2 灰白	□)ハケメ→ヨコナデ、 胴)ハケメ	ナデ	□)ヨコナデ、胴)ハケ メ	最大径付近あまり調 整されず輪積み残る	82	80	152
123	C	RA590	床面	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	(60)	(17.2)	(4.6)	—	2.5Y7/4 浅 黄	□)ヨコナデ、(体) ミガキ	—	ハラミガキ	内外有段? 刻書「X」	83	80	157
124	C	RA590	床面	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	(15)	(16.0)	(2.6)	—	10YR3/1 黒褐	ヨコナデ	沈線→ナデミガキ	ナデミガキ→ハラミガ キ	段沈線	83	80	153
125	C	RA590	床面	土師 (内黒)	高坏	非ロクロ	体~脚	(30)	—	(4.2)	—	7.5YR6/6 橙	ナデ	—	体)ナデミガキ、胴)指 跡痕		83	80	154
126	C	RA590	下部	土師	甕	非ロクロ	口~胴上	(20)	(18.0)	(11.6)	—	7.5YR5/6 明褐	□)ヨコナデ、胴)ハケ メ	—	□)ヨコナデ、胴)ハケ メ	127と同一個体か?	83	80	156
127	C	RA590	床面	土師	甕	非ロクロ	b体~ 底	(20)	—	(15.3)	(9.0)	7.5YR5/6 明褐	ハラナデ、ハラケズリ	ナデ、一部ハケメ	ハラナデ、ハケメ	126と同一個体か?	83	80	156
128	C	RA590	床面・一括	土師	甕	非ロクロ	胴上~ 底	(45)	—	(20.0)	8.2	10YR6/4に ぶい黄橙	ハケメ	ナデ	ハケメ	輪積み痕あり	83	80	155
129	C	RA590	検出面	土製品	紡錘車												83	80	158
130	D	RA592	pp1 底面	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	75	14.4	5.4	6.6	5.YR5/6明 赤褐	ロクロナデ	ハラケズリ→ナデ	ハラミガキ		84	81	234
131	D	RA592	pp1 (底面・ 3層上面)	土師	坏	ロクロ	口~底	30	(13.4)	(5.4)	(6.8)	5.YR6/8橙	ロクロナデ	不明	ロクロナデ		84	81	224
132	D	RA592	上部	土師	坏	ロクロ	口~底	55	(14.0)	4.5	6.6	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切→ナデ? マメ ツ?	ロクロナデ		84	81	222
133	D	RA592	pp1 壁際・一 括	土師	坏	ロクロ	口~体	(35)	(14.0)	(5.0)	—	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		84	81	225

表 6 出土遺物一覽(7)

※ 1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
134	D	RA592	pp1底面	須恵	坏	ロクロ	口~底	100	15.0	4.3	5.8	2.5Y6/3に ぶい、黄	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		84	81	230
135	D	RA592	床上	須恵	坏	ロクロ	口~底	30	(14.0)	4.5	(6.8)	2.5Y5/3黄 褐	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	火跡痕あり	84	81	229
136	D	RA592	床上・上部	須恵	坏	ロクロ	口~底	35	(14.8)	4.3	(5.6)	2.5Y7/3浅 黄	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		84	81	228
137	D	RA592	縄方埋土・カマ ド壘道	土師	小形甕	非ロクロ	口~胴 上	(20)	(14.2)	(7.8)	-	10YR7/4に ぶい、黄橙	口) ヨコナデ、胴) へ ラケズリ	-	口) ヨコナデ、胴) へ ラケズリ		84	81	231
138	D	RA592	pp1(3層上面)・ カマド・カマド壘 道・上部・一拵	土師	甕	ロクロ	口~胴 上	(25)	(19.8)	(10.6)	-	7.5YR7/4 にぶい、橙	ロクロナデ、胴下) へラ ケズリ	-	ロクロナデ		84	81	232
139	D	RA592	床面	須恵	長頸瓶	ロクロ	口~頸	(40)	(10.8)	(9.2)	-	2.5Y5/1黄 灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ	頸部遺状凸帯自然軸 付着	84	81	233
140	B	RA593	南東部床面	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	40	(14.5)	4.5	6.0	10YR7/4に ぶい、黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	へラミガキ	刻書「十万」	84	81	9
141	B	RA593	南東部一拵	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	65	(14.2)	4.1	5.3	10YR8/2 灰白	ロクロナデ	回転糸切り	へラミガキ		84	81	6
142	B	RA593	南東部一拵	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	65	(13.9)	4.5	5.5	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	へラミガキ?		84	81	7
143	B	RA593	カマド燃焼部	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	35	(13.9)	5.1	5.5	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	へラミガキ		84	81	5
144	B	RA593	カマド燃焼部	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	35	(13.8)	4.6	(6.0)	10YR8/3 浅黄橙	ロクロナデ→下端回転 へラケズリ	回転へラケズリ	へラミガキ	底部再調整	84	81	2
145	B	RA593	カマド燃焼部	土師	坏	ロクロ	口~底	75	(12.6)	4.4	5.1	7.5YR8/6 浅黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	歪み非常に大きい	84	81	3
146	B	RA593	下部・南東部一 拵	土師	坏	ロクロ	口~底	70	13.6	4.0	6.7	10YR8/4 浅黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		85	81	11
147	B	RA593	カマド燃焼部	土師	坏	ロクロ	口~底	40	(12.9)	4.0	(5.2)	10YR8/4 浅黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		85	81	1
148	B	RA593	上部	土師	坏	ロクロ	口~体	(25)	(14.2)	(3.6)	-	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	-	ロクロナデ		85	81	10
149	B	RA593	カマド燃焼部	土師	甕	非ロクロ	口~胴 下	(20)	(20.4)	(15.8)	-	10YR6/4に ぶい、黄橙	口) ヨコナデ、胴) へ ラケズリ	-	口) ヨコナデ、胴) へ ラケズリ		85	81	14
150	B	RA593	カマド燃焼部	土師	甕	ロクロ	口~胴 上	(25)	(20.8)	(15.0)	-	10YR7/4に ぶい、黄橙	ロクロナデ→胴下) へ ラケズリ	-	ロクロナデ→へラケズリ		85	81	13
151	B	RA593	カマド壘道	土師	甕	ロクロ	口~胴 下	(25)	(22.7)	29.0	-	10YR5/2 灰黄褐	ロクロナデ→胴下) へ ラケズリ	-	ロクロナデ		85	82	12
152	B	RA593	カマド燃焼部	土師	小形甕	ロクロ	口~胴 下	(30)	(14.6)	(11.5)	-	10YR7/6 明黄褐	ロクロナデ	-	ロクロナデ		85	81	15
153	B	RA594	南側一拵	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	25	(14.2)	4.9	(6.8)	10YR6/6 明黄褐	ロクロナデ	回転糸切り	へラミガキ	墨書「木」	85	82	19
154	B	RA594	上部	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~体	(20)	-	(2.5)	-	10YR3/1 黒褐	へラミガキ	-	へラミガキ	刻書「七」	85	82	36
155	B	RA594	上部	土師 (内黒)	坏	ロクロ	体~底	(25)	-	(2.1)	5.8	10YR3/1 黒褐	ロクロナデ	回転へラケズリ	へラミガキ	刻書 底部再調整	85	82	37

表 6 出土遺物一覧(8)

※ 1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
156	B	RA594	一括	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~体	(25) (7.7)	(4.0)	-	10YR5/4に ぶい黄褐	ロクロナデ	-	ヘラミガキ		86	82	35	
157	B	RA594	床面	土師 (内黒)	坏	ロクロ	体~底	(45)	-	2.7	5.0	10YR6/2 灰黄褐	ロクロナデ→体下端へ ラケズリ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	再調整	86	82	33
158	B	RA594	南側一括	土師	坏	ロクロ	口~底	70	14.7	5.0	7.5YR6/4 にぶい橙	ロクロナデ→体下端へ ラケズリ	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	再調整	86	82	18	
159	B	RA594	北東部一括	土師	坏	ロクロ	口~底	100	13.8	4.6	4.9	7.5YR7/8 黄橙	回転糸切り	ロクロナデ		86	82	27	
160	B	RA594	下部	土師	坏	ロクロ	口~底	75	14.8	5.2	5.3	5 YR7/8橙	回転糸切り	ロクロナデ		86	82	17	
161	B	RA594	南側一括	土師	坏	ロクロ	口~体	(95)	15.3	(4.5)	-	7.5YR7/6 橙	-	ロクロナデ		86	82	20	
162	B	RA594	床面	土師	坏	ロクロ	口~底	60	14.6	4.5	5.9	10YR6/4に ぶい黄橙	回転糸切り	ロクロナデ		86	82	31	
163	B	RA594	床面	土師	坏	ロクロ	口~底	25	(14.4)	(4.5)	(5.0)	7.5YR8/3 浅黄橙	剥落	ロクロナデ		86	82	32	
164	B	RA594	南側一括	土師	坏	ロクロ	口~体	(30)	(16.8)	(3.8)	-	10YR6/4に ぶい黄橙	-	ロクロナデ		86	82	21	
165	B	RA594	南側一括	土師?	坏	ロクロ	体~底	(75)	-	(3.2)	5.5	5 YR6/6橙	回転糸切り	ロクロナデ	須恵質	86	82	25	
166	B	RA594	南側一括	土師?	坏	ロクロ	口~体	(30)	(15.4)	(4.4)	-	5 YR6/8橙	-	ロクロナデ		86	82	22	
167	B	RA594	床面・南側一括	土師 (内黒)	高台付 坏	ロクロ	口~底	40	(15.4)	6.6	7.6	10YR5/4に ぶい黄褐	ロクロナデ→体下半下 回転ヘラケズリ?	ロクロナデ		86	82	26	
168	B	RA594	南西部一括	土師	高台付 坏	ロクロ	体~底	(35)	-	2.8	-	7.5YR7/4 にぶい橙	-	ロクロナデ		86	82	30	
169	B	RA594	南西部一括	土師	甕	非ロクロ	口~胴 上	(15)	22.3	(4.5)	-	7.5YR6/6 橙	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ	口) ヨコナデ、胴) ハ ラナデ		86	82	41	
170	B	RA594	上部	土師	甕	非ロクロ	底	(35)	-	(2.4)	(8.6)	5 YR6/6橙	外周)ヘラケズリ	ハケメ→ナデ		86	82	40	
171	B	RA594	南西部一括	土師	小形甕	非ロクロ	底	(40)	-	(2.8)	(6.4)	7.5YR5/4 にぶい褐	-	ハケメ(底)ナデ		86	82	43	
172	B	RA594	南西部一括	土師	甕	ロクロ	口~胴 上	(20)	(18.6)	(9.6)	-	7.5YR6/6 橙	ロクロナデ→体)ヘラ ナデ	-	ロクロナデ→一部ヘラ ナデ		86	82	42
173	B	RA594	一括	土師	甕	ロクロ	口~胴 上	(15)	(18.5)	9.9	-	7.5YR6/6 橙	ロクロナデ	-	ロクロナデ		86	82	39
174	B	RA594	下部	須恵	瓶?	ロクロ	口~胴 上	(20)	(19.1)	(12.4)	-	10YR5/1 褐灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ	口縁ゆがみ大きい肩 に厚いタマ残る	87	82	47
175	B	RA594	北カマド・建連・ 條出面	須恵	広口壺	ロクロ	口~胴 上	20	(16.4)	(9.2)	-	N 3 / 暗灰	ロクロナデ→体)ヘラ ケズリ	-	タタキ?→ロクロナデ	外面黒、内面口縁に 自然釉付着	87	83	44
176	B	RA594	下部	須恵	瓶	ロクロ	胴下~ 底	(15)	-	(7.0)	(14.6)	N 3 / 暗灰	タタキ→ヘラケズリ	-	ヘラナデ		87	83	48
177	B	RA594	下部	須恵	瓶?	ロクロ	口~頸	(30)	(20.0)	(5.1)	-	N 3 / 暗灰	タタキ→ロクロナデ	-	ロクロナデ		87	83	46
178	B	RA594	床面	須恵	長頸瓶	ロクロ	口	(15)	(5.0)	(3.3)	-	10YR5/1 褐灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ	自然釉かかる断面赤 い	87	83	45
179	B	RA594	一括	須恵	瓶	ロクロ	底	(15)	-	(3.1)	(6.6)	2.5Y4/1黄 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	断面赤褐色	87	83	49

表 6 出土遺物一覧(9)

※ 1 大字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
180	B	RA594	一括	鉄製品	釘?												87	83	T-08
181	B	RA595	カマド	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	35 (16.1)	5.3	5.6	7.5YR7/4 にぶい橙	ロクロナデ(下半マメツ)	回転糸切り	ヘラミガキ			87	83	54
182	B	RA595	下部	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	55 (13.4)	4.4	4.9	10YR6/4に ぶい黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ			87	83	50
183	B	RA595	中部	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~体	(20) (15.2)	4.3	-	2.5Y5/3黄 褐	ヘラミガキ	-	ヘラミガキ	内外面黒色処理		87	83	60
184	B	RA595	下部	土師	坏	ロクロ	口~底	85 (13.8)	4.4	5.0	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			87	83	51
185	B	RA595	下部	土師	坏	ロクロ	口~底	90 (14.3)	4.2	5.4	10YR7/6 明黄褐	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			87	83	53
186	B	RA595	床面	土師	坏	ロクロ	口~底	50 (14.4)	4.4	6.1	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			87	83	62
187	B	RA595	下部	土師	坏	ロクロ	口~底	45 (12.8)	4.4	4.5	10YR6/3に ぶい黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			87	83	52
188	B	RA595	中部	土師	坏	ロクロ	口~底	30 (13.2)	3.7	5.0	7.5YR8/6 浅黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			88	83	58
189	B	RA595	下部	土師	坏	ロクロ	口~底	100 (13.6)	4.3	6.1	7.5YR8/4 浅黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			88	83	72
190	B	RA595	カマド付近	土師	坏	ロクロ	口~体	(20) (14.6)	(4.2)	-	10YR5/4に ぶい黄褐	ロクロナデ	-	ロクロナデ			88	83	55
191	B	RA595	下部	土師	坏	ロクロ	口~底	25 (13.8)	5.4	(6.6)	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			88	83	68
192	B	RA595	カマド付近・カ マド燃焼部	土師	坏	ロクロ	口~底	60 (13.9)	4.2	5.4	5.YR5/6明 赤褐	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			88	83	56-57
193	B	RA595	中部	土師	坏	ロクロ	口~底	50 (13.0)	4.7	5.7	7.5YR5/4 にぶい褐	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			88	83	64
194	B	RA595	下部	土師	坏	ロクロ	口~体	破片 (13.2)	(3.8)	-	10YR8/6 黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			88	83	71
195	B	RA595	下部	土師	坏	ロクロ	口~底	30 (13.5)	4.2	(5.6)	5.YR5/6明 赤褐	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			88	83	69
196	B	RA595	中部	須恵	坏	ロクロ	体~底	(40)	(2.5)	5.5	2.5Y6/3に ぶい黄	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			88	83	86
197	B	RA595	上部	須恵	坏	ロクロ	体~底	(50)	(1.9)	5.4	10YR6/3に ぶい黄橙	ロクロナデ	回転糸切り → 周辺ナ デ?	ロクロナデ			88	83	61
198	B	RA595	床面	土師	高台付 坏	ロクロ	体~底	(60)	(3.2)	(7.5)	7.5YR6/6 橙	ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ			88	83	63
199	B	RA595	中部	土師	高台付 坏	ロクロ	口~底	35 (14.8)	(4.6)	-	7.5YR7/4に ぶい橙	ロクロナデ	指押さえ痕	ロクロナデ			88	83	65
200	B	RA595	中部・下部・カ マド南側	土師	甕	非ロクロ	口~胴 下	(55)	20.8	(25.3)	10YR7/4に ぶい黄橙	ロクロナデ	-	ヘラナデ		輪轆み痕あり	88	83	73
201	B	RA595	中部	土師	甕	非ロクロ	口~胴 上	破片 (22.4)	(8.3)	-	10YR6/4に ぶい黄橙	ロクロナデ	-	ロクロナデ			88	83	81
202	B	RA595	中部	土師	甕	非ロクロ	口~胴 上	破片 (14.0)	(4.6)	-	5.YR6/6橙	ロクロナデ	-	ロクロナデ			88	83	82

表 6 出土遺物一覽(10)

※ 1 大宇は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
203	B	RA595	中部・下部	土師	小形甕	非ロクロ	口~底	95	12.4	11.0	4.8	10YR7/4に ぶい、黄橙	口) ヨコナデ、胴) ヘ ラケズリ(マメツ、ナデ に近い)	ナデ?	口) ヨコナデ、胴) ヘ ラナデ		88	83	75
204	B	RA595	上部	土師	甕	非ロクロ	底	破片	-	(2.0)	(2.7)	7.5YR8/4 浅黄橙	ヘラナデ	-	不明	外面赤彩?	88	83	80
205	B	RA595	拡張部	土師	甕	ロクロ	口~胴 下	(60)	(19.0)	(30.9)	-	10YR5/4に ぶい、黄褐	ロクロナデ、胴) ヘラケ ズリ	-	ロクロナデ		89	84	74
206	B	RA595	カマド付近・下 部・上部	土師	甕	ロクロ	口~胴 下	(30)	(22.6)	(27.4)	-	10YR8/3 浅黄橙	ロクロナデ、胴) ヘラケ ズリ	-	ロクロナデ、胴) ヘラナ デ		89	84	77
207	B	RA595	上部	土師	甕	ロクロ	口~胴 上	破片	(20.0)	(9.7)	-	7.5YR7/4 にぶい、橙	ロクロナデ、胴) ヘラナ デ	-	ロクロナデ、胴) ヘラナ デ		89	84	79
208	B	RA595	下部	須恵	瓶?大 甕?	ロクロ	口	破片	-	(2.3)	-	N2 / 黒	ロクロナデ	-	ロクロナデ	断面茶褐色	89	84	88
209	B	RA595	下部	須恵	瓶?大 甕?	ロクロ	口	破片	-	(5.8)	-	2.5Y6/1 黄灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ	口縁粘土付け足し痕 あり	89	84	87
210	B	RA595	カマド	須恵	瓶	ロクロ	胴下~ 底	(15)	-	(5.7)	(15.6)	2.5Y5/1 黄灰	タタキ→ヘラケズリ	ナデ?	ヘラナデ		89	84	89
211	B	RA595	カマド北側床面	須恵	大甕	ロクロ	胴上~ 底	(75)	-	(28.8)	-	5 Y5/2 灰 オリーブ	タタキ	-	タタキ		89	84	90
212	B	RA595	一括	鉄製品	刀子ナ カゴ?												90	84	T-07
213	B	RA595	一括	鉄製品	棒状												90	84	T-06
214	B	RA595	下部	鉄製品	不明												90	84	T-05
215	B	RA595	中部	鉄製品	紡錘車												90	85	T-01
216	B	RA595	下部	鉄製品	紡錘車 軸?												90	85	T-04
217	B	RA595	下部	鉄製品	鉄鏃												90	85	T-03
218	B	RA595	下部	鉄製品	鏃状												90	85	T-02
219	B	RA596	カマド煙道	土師	坏	ロクロ	口~底	55	(13.8)	5.1	5.8	7.5YR7/4 にぶい、橙	回転糸切り		ロクロナデ		91	85	93
220	B	RA596	東カマド	土師 (内黒)	高台付 坏	ロクロ	口~底	(75)	15.3	(4.4)	-	10YR7/3 にぶい、黄橙	ロクロナデ	-	ヘラミガキ		91	85	91
221	B	RA596	カマド煙道	土師	小形甕	非ロクロ	口~胴 上	(20)	(13.0)	(3.3)	-	5 YR5/6 明赤褐	口) ヨコナデ、胴) ヘ ラナデ	-	口) ヨコナデ、胴) ヘ ラナデ		91	85	97
222	B	RA596	カマド煙道	土師	甕	非ロクロ	口~胴 上	(20)	(20.4)	(11.8)	-	10YR4/4 褐	口) ヨコナデ、胴) ヘ ラナデ	-	口) ヨコナデ、胴) ヘ ラナデ		91	85	96
223	B	RA596	カマド煙道	土師	甕	ロクロ	口~胴 上	(20)	(21.2)	(18.9)	-	7.5YR6/6 橙	ロクロナデ、胴) ヘラナ デ	-	ロクロナデ		91	85	95
224	B	RA596	東カマド	須恵	瓶	ロクロ	胴下~ 底	(40)	-	(8.9)	(12.0)	5 B4/1 暗 青灰	タタキ→ヘラケズリ	タタキ→ナデ	ハケメ		91	85	98
225	B	RA597	カマド焼結面	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	45	(16.2)	6.7	6.1	7.5YR6/8 橙	ロクロナデ→体下) 回 転ヘラケズリ(体下 端) 手持ちヘラケズリ	回転糸切り	ロクロナデ→ミガキ? (マメツ)	再調整	91	85	105

第6表 出土遺物一覧(1)

※1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	板番
226	B	RA597	下部	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	70	14.0	5.2	6.8	7.5YR6/6 橙	ロクロナデ→下端回転 ヘラケズリ	回転糸切り→周辺ヘラ ケズリ	ヘラミガキ(マメツ)	再調整	91	85	104
227	B	RA597	一括・検出面	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	75	12.6	5.5	5.4	7.5YR6/8 橙	ロクロナデ→下端手持 ちヘラケズリ	回転糸切り	ヘラミガキ		91	85	107
228	B	RA597	一括	土師	坏	ロクロ	口~底	80	14.1	5.6	6.4	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		91	85	106
229	B	RA597	下部	須恵	坏	ロクロ	口~底	75	(13.5)	4.9	5.8	7.5Y5/1 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		91	85	116
230	B	RA597	一括	須恵	坏	ロクロ	口~底	40	(13.6)	4.8	5.7	5Y5/1 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		91	85	118
231	B	RA597	一括	須恵	坏	ロクロ	口~体	(25)	(14.4)	(4.3)	-	2.5Y5/1 黄灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		92	85	119
232	B	RA597	一括	土師	高台付 坏	ロクロ	体~底	(65)	-	(3.5)	7.4	7.5YR6/4 にぶい橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		92	85	114
233	B	RA597	カマド燃焼部	土師	甕	非ロクロ	口~胴 上	(30)	(18.0)	(7.4)	-	2.5Y4/1 黄灰	口) ヨコナデ、胴) ヘ ラナデ(マメツ)したハ ケメ)	-	口) ヨコナデ、胴) ハ ケメ		92	85	76
234	B	RA597	一括	土師	甕	非ロクロ	胴~底	(50)	-	(5.4)	8.7	10YR7/3 にぶい黄橙	ヨコナデ	砂底	ヘラナデ		92	85	76
235	B	RA597	一括	土師	甕	非ロクロ	胴下~ 底	(75)	-	(4.0)	(8.0)	5YR4/8 赤褐	剥落のため不明	砂底	ハケメ		92	85	113
236	B	RA597	カマド燃焼部	土師	甕	非ロクロ	胴下~ 底	(50)	(12.4)	(4.9)	(10.0)	5YR5/6 明赤褐	ヘラナデ	木葉痕	ハケメ、底)ナデ		92	86	111
237	B	RA597	一括	土師	小形甕	非ロクロ	胴下~ 底	(60)	-	(3.6)	4.0	7.5YR7/6 橙	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラナデ		92	86	112
238	B	RA597	一括	土師	甕	ロクロ	口~胴 上	(15)	(13.8)	(7.3)	-	10YR7/4 にぶい黄橙	ロクロナデ	-	ロクロナデ、頸部ヘラ ナデ		92	86	115
239	B	RA597	カマド燃焼面	土師	甕	ロクロ	胴下~ 底	(35)	-	(8.0)	(7.0)	7.5YR6/6 橙	ロクロナデ、体) 下端へ ラケズリ	回転糸切り	ロクロナデ		92	86	110
240	B	RA597	一括	須恵	小形広 口甕	ロクロ	口~胴 下	(35)	12.8	(7.5)	-	7.5Y4/1 灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ		92	86	120
241	B	RA597	一括	須恵	瓶	ロクロ	胴下~ 底	(25)	-	(4.2)	(6.8)	N 3 / 暗灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	断面赤褐色	92	86	121
242	B	RA597	pp 2・一括	須恵	長頸瓶	ロクロ	口~頸	(40)	(13.4)	(5.2)	-	5 PB4/1 暗青灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ	断面赤褐色	92	86	122
243	B	RA597	検出面	鉄製品	リング 状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	86	T-14
244	B	RA293	一括	須恵	坏	ロクロ	口~底	45	(15.2)	4.5	(5.6)	5 Y5/1 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		92	86	100
245	B	RA293	一括	須恵	坏	ロクロ	口~体	(20)	(13.2)	(4.5)	-	5 B5/1 青 灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ		92	86	103
246	B	RA293	一括	土師 (内黒)	高台付 坏	ロクロ	体~底	(30)	-	(1.8)	(7.6)	7.5YR5/3 にぶい褐	ロクロナデ→台縁台へ ラナデ→ミガキ?	ナデ	ヘラミガキ		92	86	99
247	B	RA293	一括	須恵	高台付 坏	ロクロ	体~底	(35)	-	(2.8)	(7.2)	2.5Y8/2 灰白	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		92	86	101
248	B	RA293	下部	鉄滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	86	Z-1

表 6 出土遺物一覧(12)

※ 1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	
249	E	RE082	一拵	土師	坏? 鉢?	非ロクロ	口~体	破片 (15.0)	(3.7)	-	10YR7/3 にぶい黄橙	□) ヨコナデ、ハケメ	-	□) ヨコナデ、体) ナデ?		92	86	322	
250	D	RD1117	一拵	土師	甕	非ロクロ	底	(95)	-	(3.3)	6.8	10YR7/4 にぶい黄橙	ハケメ	ナデ	ヘラナデ→ヘラミガキ?		93	86	314
251	D	RD1118	一拵	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	40	(16.0)	5.2	-	□)ハケメ、段)ナデ	ハケメ	ヘラミガキ	内外有段	93	86	311	
252	D	RD1118	上部	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~体	破片 (18.4)	(3.9)	-	10YR 6/3 にぶい黄橙	□) ヨコナデ、体)ハケメ	-	ヘラミガキ		93	86	312	
253	D	RD1130	一拵	土師	甕	非ロクロ	口	破片	-	(3.9)	-	□) ハケメ→ヨコナデ	-	ヨコナデ		93	86	316	
254	D	RD1130	一拵	土師	甕	非ロクロ	頸~胴 上	破片	-	(12.3)	-	□) ヨコナデ、胴) ハケメ	-	ヘラナデ(マメツした)		93	86	315	
255	D	RD1134	一拵	土師	甕	非ロクロ	底	(25)	-	(2.2)	(8.2)	7.5YR 8/3 浅黄橙	ヘラナデ	ナデ	剥落	93	86	317	
256	D	RD1136	一拵	石器	土師? タガキ?											93	86	S-116	
257	C	RD1154	上部	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	30	(16.8)	5.1	-	□) ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	内外有段(外段)	93	86	140	
258	C	RD1154	上部	土師	坏	非ロクロ	口~底	(15)	16.0	(4.7)	-	□) ヨコナデ	ヘラケズリ	□) ヨコナデ	外面段	93	86	141	
259	B	RD1156	一拵	土師 (内黒)	坏	ロクロ	体~底	(20)	-	(2.8)	(6.0)	10YR7/4 浅黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ		93	86	125
260	B	RD1156	一拵	土師	坏	ロクロ	口~体	(15)	(15.2)	(4.6)	-	ロクロナデ	-	ロクロナデ		93	86	124	
261	B	RD1156	1層	須恵	坏	ロクロ	口~底	60	(14.4)	5.1	5.0	2.5YR7/4 にぶい橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		93	86	128
262	B	RD1156	1層	須恵	坏	ロクロ	口~底	65	(14.8)	4.5	5.5	2.5YR6/2 灰黄	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		93	86	127
263	B	RD1156	1層	土師	甕	非ロクロ	口~胴 上	(20)	(21.2)	(8.1)	-	□) ヨコナデ、胴)ヘラケズリ	-	□) ヨコナデ、胴)ヘラナデ		93	86	126	
264	B	RD1156	1層	須恵	長頸瓶	ロクロ	口~頸	破片 (11.8)	(4.3)	-	N 4 / 灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ		93	86	130	
265	B	RD1157	上部	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	65	(13.8)	(5.1)	(5.4)	10YR7/4 にぶい橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	刻書「木」	94	86	131
266	B	RD1157	上部	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	55	(13.4)	5.3	5.4	7.5YR6/4 にぶい橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ		94	87	132
267	B	RD1157	上部	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	90	14.1	4.7	5.4	7.5YR8/4 浅黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ		94	87	137
268	B	RD1157	上部	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	20	(16.0)	5.6	(7.0)	10YR7/4 にぶい黄橙	ロクロナデ→下端ヘラケズリ(手持ち?)	ヘラケズリ(手持ち?)	ヘラミガキ	再調整	94	87	133
269	B	RD1157	上部	土師	坏	ロクロ	口~底	45	(14.4)	5.0	5.6	10YR7/3 にぶい黄橙	クロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		94	87	134
270	B	RD1157	上部	土師	甕	非ロクロ	口~胴 上	(25)	(21.0)	(10.8)	-	□) ヨコナデ、胴) ハケメ	-	□) ヨコナデ、胴) ハケメ		94	87	135	
271	B	RD1157	下部	土師	甕	非ロクロ	口~胴 上	破片 (22.2)	(7.0)	-	7.5YR8/6 浅黄橙	□) ヨコナデ、胴) ハケメ	-	□) ヨコナデ、胴) ハケメ		94	87	136	

表6 出土遺物一覧(13)

※1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図歴	板番
272	B	RD1158	上部	土師	甕	非ロクロ	口~胴 下	(80)	(17.6)	(25.8)	-	10YR8/3 浅黄橙	口)ヨコナデ、胴)ヘラ ナデ、ヘラケズリ	-	口)ヨコナデ、胴)ヘラ ナデ		94	87	142
273	B	RD1159	7層	須恵	坏	ロクロ	口~底	55	(14.4)	4.5	5.4	7.5Y6/1 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		94	87	138
274	B	RD1162	一括	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	50	11.7	3.4	(5.0)	7.5YR7/4 にぶい橙	ヘラミガキ	一部ヘラケズリ	ヘラミガキ(ナデ状)		94	87	139
275	B	RD1165	一括	土師	甕	非ロクロ	口~胴 下	(20)	(21.0)	(25.0)	-	7.5YR6/6 橙	口)ヨコナデ、胴)ヘ ケメ→ヘラミガキ→ヘ ラケズリ	-	口)ヨコナデ、胴)ハ ケメ→ヘラナデ?		95	87	143
276	A	RD1167	一括	土師 (内黒)	坏	ロクロ	体~底	(15)	-	(1.3)	(7.8)	.5YR7/6 橙	ロクロナデ→下端回転 ヘラケズリ?	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	再調整	95	87	833
277	A	RD1167	一括	土師	坏	ロクロ	口~体	(15)	15.4	(3.0)	-	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	-	ロクロナデ		95	87	834
278	A	RD1167	一括	土師	坏	ロクロ	体~底	(15)	-	(1.8)	(6.6)	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		95	87	835
279	A	RD1168	3~4層	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	50	(14.4)	5.1	5.7	10YR6/4 にぶい黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	刻書「万・万」	95	87	837
280	A	RD1168	一括	土師 (内黒)	坏	ロクロ	体~底	(15)	-	(1.0)	(6.4)	7.5YR6/3 にぶい濁 橙	ロクロナデ→下端回転 ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	再調整	95	87	836
281	A	RD1168	一括	土師	坏	ロクロ	体~底	(50)	-	(2.8)	(6.0)	5YR6/7 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		95	87	838
282	A	RD1169	一括	須恵	坏	ロクロ	口~体 破片	(8.0)	後	(5.5)	-	5Y5/1 灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ		95	87	839
283	A	RD1169- 1170	一括	土師 (内黒)	坏	ロクロ	底	(15)	-	(1.2)	(6.6)	10YR8/6 黄橙	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	再調整	95	87	841
284	A	RD1169- 1170	一括	土師	坏	ロクロ	底	(15)	-	(1.6)	(7.0)	10YR8/3 浅黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		95	87	840
285	A	RD1169- 1170	一括	土師	甕	非ロクロ	口	破片	-	(3.5)	-	10YR8/4 浅黄橙	口)ヨコナデ	-	口)ヨコナデ、ヘラナ デ		95	87	842
286	A	RD1173	上部	土師 (内黒)	高台付 坏	ロクロ	口~底	75	14.1	4.5	7.0	10YR8/4 浅黄橙	ロクロナデ	ナデ	ヘラミガキ	刻書「木」	95	87	843
287	A	RD1173	一括	須恵	坏	ロクロ	口~体	破片	(14.4)	(4.0)	-	7.5Y5/1 灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ		95	87	844
288	B	RI017	東側	木製品	井戸枠	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		96	88	U-1
289	B	RI017	西側	木製品	井戸枠	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		96	88	U-2
290	B	RI017	南側	木製品	井戸枠	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		97	89	U-3
291	B	RI017	北側	木製品	井戸枠	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		97	89	U-4
292	A	RG319	分岐より西	土師	甕	非ロクロ	口~胴 上	(15)	(18.4)	(12.4)	-	2.5YR6/4 にぶい橙	口)ヨコナデ、胴)ヘ ラナデ	-	口)ヨコナデ、胴)ヘ ラナデ	283と同一個体か	98	90	649
293	A	RG319	下部・分岐より西	土師	甕	非ロクロ	胴下~ 底	(35)	-	(10.0)	6.6	2.5YR6/4 にぶい橙	ハケメ(マメツ)	-	ハケメ(マメツ)	282と同一個体か	98	90	649
294	A	RG319	F-Fより西	須恵	小形甕	ロクロ	口~胴 下	破片	(7.0)	(3.4)	-	5B4/1 暗 青灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ		98	90	651

表6 出土遺物一覧(14)

※1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺跡名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
295	A	RG319・323・501	台流地点	土師 (内黒)	坏? 甕?	ロクロ	体~底	破片	—	(1.7)	(6.0)	10YR8/3 浅黄橙	ロクロナデ	—	ナデミガキ		98	90	813
296	A	RG323	分岐より西	須恵	瓶	ロクロ	脚下~底	(20)	—	(2.8)	(8.6)	N 4 / 灰	ヘラケズリ、下端剥落		軸付着	断面褐色	98	90	658
297	A	RG498	B-B'・C-C'間 C中部(16~19層)	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	25	(13.8)	5.2	(5.2)	10YR7/4 にぶい黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	墨書	98	90	569
298	A	RG498	C-C'・D-D'間 D上部(1・2層)	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	20	(14.8)	4.5	6.4	10YR6/4 明黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	墨書	98	90	362
299	A	RG498	検出面	須恵	坏	ロクロ	口~底	85	14.2	4.9	5.0	7.5Y6/2 灰オリーブ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	墨書「木」	98	90	434
300	A	RG498	C-C'・D-D'間 D6層	土師	坏	ロクロ	口~底	75	15.5	6.2	5.8	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	墨書	98	90	359
301	A	RG498	C-C'・D-D'間 D下部(7層)	土師	坏	ロクロ	体~底	(20)	—	(1.5)	(3.0)	10YR7/4 にぶい黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	墨書	98	90	376
302	A	RG498	C-C'・D-D'間 底面	土師 (内黒)	坏	ロクロ	体~底	(50)	—	(2.5)	(5.8)	7.5YR6/3 にぶい褐	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	刻書	98	90	403
303	A	RG498	検出面(遺構屑部)	土師 (内黒)	坏	ロクロ	体~底	(55)	—	(2.3)	(5.6)	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ→下端手持ちヘラケズリ	回転糸切り	ヘラミガキ	刻書「×」 再調整	98	90	633
304	A	RG498	C-C'・ベルト16層	土師 (内黒)	坏	ロクロ	体~底	(60)	—	(1.6)	5.1	10YR4/1 褐灰	ロクロナデ	回転糸切り→ヘラナデ?	ヘラミガキ	同黒刻書「×」 再調整?	98	90	522
305	A	RG498	C-C'・D-D'間 底面	土師 (内黒)	坏	ロクロ	体~底	(30)	(8.7)	(1.1)	(5.8)	7.5YR7/4 にぶい橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	縞刻「×カ」	98	90	406
306	A	RG498	C-C'・ベルト17・18層	土師 (内黒)	坏? 高台付坏?	非ロクロ	体	(20)	—	(3.1)	—	10YR3/1 黒褐	ヘラミガキ	—		ナデミガキ 刻書	98	90	597
307	A	RG498	C-C'・D-D'間 C上部(15層より上)	土師 (内黒)	高台付坏	ロクロ	口~底	55	7.0	5.8	9.0	2.5Y6/1 黄灰	ロクロナデ→ヘラミガキ	回転糸切り→指押さえ	ヘラミガキ	同黒刻書 再調整	98	90	385
308	A	RG498	B-B'・ベルト上部(23~26層)	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	95	14.0	5.1	6.7	7.5YR6/4 にぶい橙	ロクロナデ→下端回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	再調整	99	90	471
309	A	RG498	上部	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	90	14.2	5.4	6.2	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	再調整	99	90	457
310	A	RG498	A-A'・B-B'間 45層より上	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	70	14.5	5.3	6.3	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転ヘラケズリ? (マメツ)	ヘラミガキ	再調整?	99	90	604
311	A	RG498	B-B'・C-C'間 B26層	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	80	14.0	5.4	5.8	7.5YR7/4 にぶい橙	ロクロナデ→下端ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	再調整	99	90	526
312	A	RG498	B-B'・ベルト上部(23~26層)	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	90	13.7	5.0	4.8	7.5YR7/4 にぶい橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ		99	90	473
313	A	RG498	C-C'・D-D'間 D6層	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	80	14.3	4.7	5.7	5YR7/4 にぶい橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ		99	90	610
314	A	RG498	C-C'・ベルト16層? 壁際	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	95	13.8	5.0	5.8	7.5YR5/6 明褐	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ		99	90	524
315	A	RG498	B-B'・C-C'間 C中部(16~19層)	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	85	13.4	5.0	5.8	10YR7/4 にぶい黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ		99	90	568
316	A	RG498	A-A'・B-B'間 45層より上	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	100	12.8	4.8	5.4	7.5YR8/4 浅黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ		99	90	603

表6 出土遺物一覧(15)

※1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
317	A	RG498	C-C・ベルト16層	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口～底	75	13.5	5.6	6.0	7.5YR8/3 浅黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ		99	90	846
318	A	RG498	B-B'・C-C間 部(15層より上 または23-26層)	土師	坏	ロクロ	口～底	70	14.5	5.3	6.4	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		99	90	527
319	A	RG498	C-C'・D-D'間 D上部(1-2層)	土師	坏	ロクロ	口～底	80	13.9	4.6	5.7	7.5YR7/4 にぶい橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		99	90	358
320	A	RG498	C-C'・D-D'間 D中部(3-6層)	土師	坏	ロクロ	口～底	75	14.4	5.4	5.3	7.5YR6/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		99	90	350
321	A	RG498	B-B'・C-C間 検出面	土師	坏	ロクロ	口～底	80	14.6	5.0	5.4	7.5YR7/4 にぶい橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		99	90	586
322	A	RG498	C-C・ベルト16層	土師	坏	ロクロ	口～底	70	14.9	5.2	5.8	5YR6/8 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		99	91	505
323	A	RG498	B-B'・C-C間 上部(13層より 上または23-26層)	土師	坏	ロクロ	口～底	75	14.1	5.1	6.5	5YR7/8 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		100	91	529
324	A	RG498	C-C・ベルト16層	土師	坏	ロクロ	口～底	95	14.9	5.5	6.4	2.5YR6/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		100	91	591
325	A	RG498	B-B'・C-C間 B26層	土師	坏	ロクロ	口～底	95	14.6	4.9	7.4	2.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		100	91	587
326	A	RG498	C-C'・D-D'間 D中部(3-6層)	土師	坏	ロクロ	口～底	80	14.1	4.9	5.6	5YR7/8 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		100	91	351
327	A	RG498	上部	土師	坏	ロクロ	口～底	70	16.8	6.7	6.8	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		100	91	413
328	A	RG498	B-B'・C-C間 C16層	土師	坏	ロクロ	口～底	65	14.1	4.7	6.4	10YR7/6 明黄褐	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		100	91	577
329	A	RG498	C-C'・D-D'間 D上部(1-2層)	土師	坏	ロクロ	口～底	65	14.2	5.5	(6.0)	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		100	91	360
330	A	RG498	C-C・ベルト16層	須恵?	坏	ロクロ	口～底	80	15.9	5.8	4.9	5YR6/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	色調橙色だが、重ね 焼き痕あり、胎土も 緻密。焼成も良い。	100	91	592
331	A	RG498	B-B'・C-C間 C上部(15層より上)	須恵	坏	ロクロ	口～底	55	14.3	4.6	4.8	5YR8/1 灰白	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		100	91	562
332	A	RG498	B-B'・C-C間 C16層	須恵	坏	ロクロ	口～底	75	15.3	6.0	5.6	10YR8/1 灰白	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		100	91	579
333	A	RG498	A-A'・B-B間 45層より上	須恵	坏	ロクロ	口～底	60	(14.6)	5.0	6.2	2.5YR8/1 灰白	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		100	91	605
334	A	RG498	C-C間C17・18層	須恵	坏	ロクロ	口～底	40	16.0	5.4	(6.2)	10YR8/4 浅黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		100	91	602
335	A	RG498	A-A'・B-B間 上部(47層より 上)	須恵	坏	ロクロ	口～底	70	14.9	4.9	6.2	5YR8/2 灰白	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		100	91	607
336	A	RG498	B-B'・C-C間 C16層	須恵	坏	ロクロ	口～底	100	14.8	5.0	5.5	2.5GY6/1 オリーブ灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		100	91	582

表6 出土遺物一覽(16)

※1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	遺構名	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整(外面)	調整(底部)	調整(内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
337	A	RG498	B-B・C-C間 B26層	須恵	坏	ロクロ	口~底	85	14.3	4.8	5.3	2.5GY8/1 灰白	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		100	91	584
338	A	RG498	B-B・C-C間 C16層	須恵	坏	ロクロ	口~底	60	15.3	5.5	5.5YR8/1 灰白	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			100	91	580
339	A	RG498	B-B・C-C間 B26層	須恵	坏	ロクロ	口~底	100	14.2	5.0	6.8	2.5YR8/2 灰白	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		101	91	585
340	A	RG498	上部	土師 (内黒)	高台付 坏	ロクロ	口~底	70	(14.5)	4.5	7.2	10YR2/1 黒	ロクロナデ→ヘラミガキ	回転ナデ	ヘラミガキ		101	91	335
341	A	RG498	B-B・ベルト24 層	土師 (内黒)	高台付 坏	ロクロ	口~底	80	13.3	(3.5)	-	7.5YR6/6 橙	ロクロナデ	指ナデ痕	ヘラミガキ		101	91	470
342	A	RG498	C-C・D-D'間 底面	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~体	(45)	(11.8)	(3.3)	-	10YR7/2 にぶい、黄橙	ロクロナデ	-	ヘラミガキ	内面に段あり	101	91	408
343	A	RG498	上部	土師 (内黒)	鉢?	非ロクロ	体~底	(45)	-	(3.4)	9.8	10YR6/4 にぶい、黄橙	ナデミガキ	ナデミガキ	ヘラミガキ		101	91	417
344	A	RG498	C-C・D-D'間 D下部(7層)	土師	甕	非ロクロ	口~胴 上	破片	(18.8)	(8.3)	-	2.5YR8/2 灰白	ロクロナデ	-	ロクロナデ、胴)へ ラナデ		101	91	383
345	A	RG498	一括	土師 (内黒)	甕	ロクロ	口~胴 下	(25)	(17.8)	(11.4)	-	10YR7/3 にぶい、黄橙	ロクロナデ	-	ロクロナデ→ナデミガ キ		101	91	448
346	A	RG498	検出面	須恵	広口瓶	ロクロ	口	(25)	(15.0)	(3.4)	-	N4/灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ		101	91	647
347	A	RG498	一括	須恵	長頸瓶	ロクロ	口	破片	(12.6)	(1.3)	-	5BZ/1 青黒	ロクロナデ	-	ロクロナデ	内面自然釉	101	91	450
348	A	RG498	B-B・C-C間 C20層 検出面	須恵	長頸瓶	ロクロ	口	破片	(15.0)	(2.2)	-	N4/灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ	内面自然釉 断面赤褐色	101	91	646
349	A	RG498	B-B・C-C間 C20層	須恵	長頸瓶	ロクロ	口~頸	(15)	(12.0)	(6.7)	-	5Y4/1 灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ	断面赤褐色	101	91	576
350	A	RG498	A-A・B-B間 上部(47層より 上)	須恵	長頸瓶	ロクロ	肩~胴 上	(15)	-	(10.9)	-	N5/灰	タタキ→ロクロナデ	-	ロクロナデ		101	92	609
351	A	RG498	B-B・ベルト上 部(23-26層)	須恵	瓶	ロクロ	口	破片	(18.0)	(2.0)	-	N3/暗灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ	内面自然釉	101	92	648
352	A	RG498	C-C・D-D'間 D上部(1-2層)	須恵	瓶	ロクロ	頸	(20)	-	(9.3)	-	2.5Y6/1 黄灰	ヘラナデ(?)→ロクロ ナデ→胴)ヘラナデ	-	ロクロナデ		101	92	371
353	A	RG498・ 319・323	B-B・C-C間 C16層、C-C・D-D' 間D下部(7層)、 東側一法、 RG319-323上部	須恵	瓶	ロクロ	胴	破片	-	(20.9)	-	2.5GY5/1 オリーブ灰	タタキ→カキメ状ヨコ ナデ→ヘラケズリ	-	カキメ状タテナデ→ヨ コナデ→ロクロナデ		101	92	644
354	A	RG498	C-C・D-D'間 D下部(7層)	須恵	大甕	ロクロ	口~頸	破片	(18.4)	(6.9)	-	5B4/1 暗青灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ	断面茶褐色	102	92	384
355	A	RG498	検出面	須恵	大甕?	ロクロ	頸~肩	破片	-	(3.1)	-	N5/灰	ロクロナデ、タタキ	-	ロクロナデ、タタキ	断面橙色	102	92	632
356	A	RG498	C-C・D-D'間 C中~下部(16 層以下)	須恵	大甕	ロクロ	頸~肩	破片	-	(5.6)	-	5YR5/6 明赤褐	タタキ	-	タタキ		102	92	645
357	A	RG498	B-B・C-C'間 C中部(16~19 層)	須恵	大甕	ロクロ	胴	破片	-	(32.0)	-	7.5Y7/1 灰白	タタキ	-	タタキ		102	92	643

表6表 出土遺物一覧(17)

※1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
358	A	RG498	C-C・D-D間 C中～下部(16 層以下)	土製品	土甌												102	92	590
359	A	RG498・ 499	A-A・B-B・ 間上部(47層よ り上)	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口～底	65	14.0	5.1	5.9	7.5YR8/4 浅黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	刻書「木」	102	92	714
360	A	RG498・ 499	検出面	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口～底	25	(14.1)	4.9	5.8	7.5YR7/3 にぶい橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	刻書「×」	102	92	849
361	A	RG498・ 499	上部	土師 (内黒)	坏	ロクロ	体～底	(55)	—	(3.2)	5.0	5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	刻書「×」	102	92	784
362	A	RG498・ 499	A-A・B-B間 45層	須恵	坏	ロクロ	口～底	70	15.5	4.9	5.6	7.5Y7/1 灰白	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	刻書	103	92	721
363	A	RG498・ 499	A-A・B-B間 46～48層	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口～底	50	14.3	(5.2)	6.6	10YR6/3 にぶい黄橙	ロクロナデ→体下端手 持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	ナデミガキ→ヘラミガ キ		103	92	723
364	A	RG498・ 499	上部	土師	坏	ロクロ	口～底	80	14.7	5.5	5.4	7.5YR8/8 黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		103	93	730
365	A	RG498・ 499	A-A・B-B間 上部(47層よ り上)	土師	坏	ロクロ	口～底	50	14.8	4.9	6.3	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		103	93	661
366	A	RG498・ 499	A-A・B-B間 上部(47層よ り上)	土師	坏	ロクロ	口～底	65	14.4	5.0	6.5	5YR7/4 にぶい橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		103	93	660
367	A	RG498・ 499	A-A・B-B間 上部(47層よ り上)、46～48層	土師	坏	ロクロ	口～底	100	13.5	5.2	5.0	7.5YR8/4 浅黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		103	93	606
368	A	RG498・ 499	A-A・B-B間 上部(47層よ り上)	土師	坏	ロクロ	口～底	60	(13.7)	(5.0)	6.3	7.5YR8/4 浅黄橙	ロクロナデ	マメツ	ロクロナデ		103	93	662
369	A	RG498・ 499	D-D・ベルト上 部(1・2層)	土師	坏	ロクロ	口～底	55	14.3	5.1	5.0	7.5YR8/8 黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		103	93	818
370	A	RG498・ 499	B-B・C-C間 上部(15層よ り上)または25～26 層)	須恵	坏	ロクロ	口～底	70	(14.6)	5.2	6.0	7.5Y7/1 灰白	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		103	93	528
371	A	RG498・ 499	上部	須恵	坏	ロクロ	口～底	70	14.5	5.2	5.2	2.5GY5/1 オリーブ灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		103	93	804
372	A	RG498・ 499	A-A・B-B間 上部(47層よ り上)	須恵	坏	ロクロ	口～底	50	(14.0)	4.6	5.6	2.5GY7/1 明オリーブ 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		103	93	700
373	A	RG498・ 499	A-A・B-B間 上部(47層よ り上)	須恵	坏	ロクロ	口～底	80	16.8	5.2	6.7	5Y5/1 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		103	93	695
374	A	RG498・ 499	A-A・B-B間 上部(47層よ り上)	須恵	坏	ロクロ	口～底	75	13.7	5.1	5.8	N5/灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		103	93	697
375	A	RG498・ 499	上部	須恵	坏	ロクロ	口～底	70	14.5	4.9	5.4	5Y6/2 灰オリーブ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		103	93	805
376	A	RG498・ 499	A-A・B-B間 上部(47層よ り上)	須恵	坏	ロクロ	口～底	65	13.2	4.9	4.8	N5/灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		103	93	698

表6 出土遺物一覽(18)

※1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
377	A	RC498・499	B・B'・C-C'間 中部(16~19層)	須恵	坏	ロクロ	口~底	100	14.0	4.5	5.1	5Y6/1 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		103	93	572
378	A	RC498・499	A・A'・B-B'間 上部(47層より上)	須恵	坏	ロクロ	口~底	70	15.8	5.2	6.7	5Y5/1 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		104	93	696
379	A	RC498・499	上部・検出面	須恵	坏	ロクロ	口~底	40	15.0	4.0	7.2	7.5Y5/1 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		104	93	868
380	A	RC498・499	B-B'・C-C'間 C上部(15層より上)	土師 (内黒)	高台付 坏	ロクロ	口~底	60	13.1	4.6	6.6	10YR7/4 にぶい黄橙	ロクロナデ	指押さえ痕	ヘラミガキ		104	93	744
381	A	RC498・499	C-C'・D-D'間 一括	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	体~底	(40)	-	(3.9)	-	7.5YR8/1 灰白	口)ヨコナデ(段)ナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ		104	93	731
382	A	RC498・499	上部	土師	甕	非ロクロ	口~胴 上	(15)	(18.0)	(7.8)	-	10YR8/3 浅黄橙	口)ヨコナデ、胴)ヘ ラケズリ	-	口)ヨコナデ、胴)ヘ ラケズリ	輪積あり	104	93	802
383	A	RC498・499	上部	土師	小形甕	非ロクロ	口~胴 下	(20)	(7.2)	(5.2)	-	10YR6/4 にぶい黄橙	口)ヨコナデ、胴)ヘ ラケズリ	-	ヘラナデ		104	93	771
384	A	RC498・499	上部	土師	小形甕	非ロクロ	口~胴 下	(15)	(12.0)	(7.6)	-	10YR6/1 褐灰	口)ヨコナデ、胴)ヘ ラケズリ	-	口)ヨコナデ、胴)ヘ ラミガキ		104	93	769
385	A	RC498・499	上部	土師	甕?	ロクロ	底	(25)	-	(3.5)	(8.0)	7.5YR6/6 橙	ロクロナデ→回転ヘラ ケズリ	回転糸切り	ロクロナデ		104	93	803
386	A	RC498・499	A-A'・B-B'間 上部(47層より上) 下部(48層より上) C-C'間上部 (15層より上)	須恵	長頸瓶	ロクロ	胴	(40)	-	(12.1)	-	N 3 / 暗灰	ロクロナデ、胴)タテ ヘラケズリ、ヨコ回転 ヘラケズリ	-	ロクロナデ	断面赤褐色	104	93	810
387	A	RC498・499	B-B'・C-C'間 一括	須恵	瓶	ロクロ	胴上	(15)	-	(8.4)	-	N 3 / 暗灰	ロクロナデ→タテヘラ ケズリ→カキ目状ナ デ	-	カキ目状ナデ	断面赤褐色	104	93	850
388	A	RC498・499	A-A'・B-B'間 上部(47層より上)	須恵	瓶	ロクロ	胴下~ 底	(15)	-	(5.5)	(14.4)	N 3 / 暗灰	ロクロナデ→カキ目 ナデ	-	ヘラナデ		104	93	715
389	A	RC499 (498?)	A-A'・B-B'間 下部(49層より上)	須恵	瓶	ロクロ	口	破片	(15.3)	(1.5)	-	N 3 / 暗灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ	内面袖付着 断面赤褐色	104	93	811
390	A	RC498・499	C-C'・D-D'間 C上部(18層より上)	須恵	瓶	ロクロ	口	破片	(17.8)	(4.4)	-	2.5YR6/1 黄灰	タタキ?→ロクロナ デ	-	ロクロナデ	内面袖付着	104	93	742
391	A	RC498・499	E-E'・F-F'間 一括	須恵	瓶	ロクロ	口~肩	(20)	(17.2)	(5.7)	-	N 3 / 暗灰	タタキ→ロクロナ デ	-	ロクロナデ→ヘラケ ズリ		104	93	614
392	A	RC498・499	E-E'・F-F'間 一括	須恵	大甕	ロクロ	口~肩	破片	(22.6)	(8.9)	-	N 4 / 灰	ロクロナデ、タタキ	-	ロクロナデ、タタキ	断面赤褐色	104	93	613
393	A	RC498・499	上部・27-28層	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	80	14.4	5.0	8.9	10YR6/4 にぶい黄橙	体)ヘラケズリ(口)ヘ ラミガキ、段)ヘラナ デ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	内外段あり	105	94	817
394	A	RC499	一括	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	90	14.1	4.6	-	7.5YR7/2 明褐灰	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	段沈線	105	94	815
395	A	RC499	B-B'・C-C'間 C上部(9・11・21層)	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~体	(20)	(16.4)	(5.2)	-	10YR8/4 浅黄橙	口)ヨコナデ(体)ヘラ ケズリ(?)→ヘラミガ キ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	外面段あり	105	94	826
396	A	RC499	上部	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~底	95	12.7	3.1	(4.0)	10YR8/6 黄橙	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	外面段あり	105	94	816
397	A	RC499	B-B'・C-C'間 C上部(9・11・21層)	土師 (内黒)	坏	非ロクロ	口~体	(15)	(17.2)	(7.2)	-	10YR6/4 にぶい黄橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	内?外段あり	105	94	829

表6 出土遺物一覧(19)

※1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	板番	
398	A	RG499	B-B'・C-C'間 B上部(27-28層)	土師	小形壺	非ロクロ	底	(80)	—	(8.3)	(6.6)	7.5YR5/4 にぶい褐	ロクロナデ	ナデ	ロココナデ・胴ハケ		105	94	831	
399	A	RG498	検出面、一括	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	60	(14.1)	4.7	7.6	10YR7/4 にぶい黄橙	ロクロナデ→下端手持 ちヘラケズリ	回転糸切り	ヘラミガキ		—	94	621	
400	A	RG498	C-C'・D-D'間 底面	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	55	14.6	5.1	6.8	10YR4/2 灰黄褐	ロクロナデ→下端回転 ヘラケズリ	回転糸切り	ヘラミガキ(ヨコ・放 射)	再調整	—	94	400	
401	A	RG498	B-B'・C-C'間 C16層	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	55	(13.1)	4.8	6.0	7.5YR8/6 浅黄橙	ロクロナデ	ヘラケズリ?(マメツ)	ロクロナデ		再調整?	—	94	578
402	A	RG498	C-C'・D-D'間 C中~下部(16 層以下)	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	50	(11.4)	4.0	6.2	10YR7/3 にぶい黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ(ヨコ→放 射)		—	94	343	
403	A	RG498	C-C'・D-D'間 D上部(1・2層)	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	30	(14.2)	4.7	6.8	10YR6/4 にぶい黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ(ヨコ・放 射)		—	94	363	
404	A	RG498	C-C'・D-D'間 C中~下部(16 層以下)	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	40	(13.0)	5.0	5.1	10YR6/6 明黄褐	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ→?		—	94	387	
405	A	RG498	C-C'・D-D'間 底面	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	40	(14.4)	5.9	(6.1)	10YR7/4 にぶい黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ(ヨコ・放 射)		—	94	401	
406	A	RG498	一括	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	35	(15.8)	5.9	(5.8)	7.5YR8/4 浅黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ(ヨコ・放 射)		—	94	451	
407	A	RG498	C-C'・ベルト16 層	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	55	(13.6)	4.9	6.0	7.5YR6/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ		—	94	506	
408	A	RG498	C-C'・D-D'間 D中部(3~6層)	土師	坏	ロクロ	口~底	50	16.2	5.4	(5.2)	5.YR7/8 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		—	94	352	
409	A	RG498	C-C'・D-D'間 D上部(1・2層)	土師	坏	ロクロ	口~底	40	(15.0)	5.2	(5.2)	5.YR7/6 橙	ロクロナデ	マメツ	ロクロナデ		—	94	361	
410	A	RG498	上部	土師	坏	ロクロ	口~底	30	(14.2)	5.1	5.1	5YR8/4 淡 橙	クロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		—	94	414	
411	A	RG498	上部	土師	坏	ロクロ	口~底	45	(14.2)	4.8	(5.9)	5YR6/8 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		—	94	415	
412	A	RG498	D-D'・ベルト上 部(1・2層)	土師	坏	ロクロ	口~底	30	(14.4)	5.0	5.3	5.YR7/8 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		—	94	489	
413	A	RG498	B-B'・C-C'間 上部(15層より 上または25~26 層)	土師	坏	ロクロ	口~底	35	(13.0)	4.3	6.2	10YR7/4 にぶい黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		—	94	530	
414	A	RG498	B-B'・C-C'間 B26層	土師	坏	ロクロ	口~底	60	(14.0)	4.5	6.2	5YR6/8 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		—	94	583	
415	A	RG498	D-D'・ベルト中 部(3~6層)C-C' ・D-D'間	土師	坏	ロクロ	口~底	55	13.8	4.6	5.8	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		—	94	638	
416	A	RG498	C-C'・D-D'間 D中部(3~6 層)、検出面	須恵	坏	ロクロ	口~底	20	(14.2)	5.1	5.2	2.5Y6/6 明黄褐	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		—	94	412	
417	A	RG498	一括	須恵	坏	ロクロ	口~底	60	(14.6)	4.2	5.2	2.5Y7/2 灰黄	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		—	94	449	
418	A	RG498	上部	須恵	坏	ロクロ	口~底	35	(15.0)	5.6	5.5	N4/灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		—	94	456	

表 6 出土遺物一覧(20)

※ 1 大文字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 高 図版	仮番
419	A	RG498	B・B'・C-C'間 C上層(19層)より上)	須恵	坏	ロクロ	口~底	50 (15.6)	4.7	6.4	2.5Y7/2 灰黄	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			94	563	
420	A	RG498	B・B'・C-C'間 C中層(18~19層)	須恵	坏	ロクロ	口~底	20 (14.6)	5.0	5.6	10Y6/1 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			94	574	
421	A	RG498	B・B'・C-C'間 C16層	須恵	坏	ロクロ	口~底	45 (14.8)	4.5	5.0	2.5Y8/1 灰白	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			94	581	
422	A	RG498	C-C'・D-D'間 16層(10~11層)より下)	須恵	坏	ロクロ	口~底	40 (15.0)	5.0	5.8	5Y6/1 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			94	589	
423	A	RG498	C-C'・パルト 17・18層	須恵	坏	ロクロ	口~底	45 (15.4)	4.8	5.5	7.5Y7/1 灰白	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			94	601	
424	A	RG498	A-A'・B-B'間 上部(47層より上)	須恵?	坏	ロクロ	口~底	55 (14.4)	4.9	4.8	N 5/7 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			94	608	
425	A	RG498	上部	須恵?	坏	ロクロ	口~底	20 (14.1)	5.0	(5.8)	10YR7/4 にぶい、黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			94	494	
426	A	RG498	上部	土師 (内黒)	高台付 坏	ロクロ	口~底	35 (15.6)	6.6	8.3	2.5Y6/3 にぶい、黄	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ(ヨコ・放射)			95	454	
427	A	RG498	一括	土師 (内黒?)	小形甕	非ロクロ	底	(40)	—	(4.8)	7.5YR7/6 橙	ナデ?		剥落?			95	466	
428	A	RG498	C-C'・D-D'間 底面	土師	甕	非ロクロ	底	(15)	—	(9.8)	7.5YR6/4 にぶい、橙	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ハケメ			95	411	
429	A	RG498	B-B'・C-C'間 C上層(18層)より上)	土師	甕	非ロクロ	底	(25)	—	(2.8)	5YR6/8 橙	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラナデ?			95	561	
430	A	RG498	隣接	土師	小形甕	非ロクロ	底	(75)	—	(1.2)	7.5YR7/8 黄橙	—	ナデ	—			95	642	
431	A	RG498・ 499	A-A'・B-B'間 上部(47層より上)	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	35 (12.8)	4.7	(7.2)	10YR6/3 にぶい、黄橙	ロクロナデ→下端手持 ちヘラケズリ	回転糸切り→周辺ヘラ ケズリ	ヘラミガキ(ヨコ・放射)	再調整		95	664	
432	A	RG498・ 499	A-A'・B-B'間 46~48層	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	40 (13.0)	4.9	6.4	10YR6/4 にぶい、黄橙	ロクロナデ→下端手持 ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	再調整		95	722	
433	A	RG498・ 499	B-B'・C-C'間 上部(15層)より 上または23~26 層)	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	30 (14.4)	5.0	5.6	7.5YR6/4 にぶい、橙	ロクロナデ→下端手持 ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ(ヨコ・放射)	再調整		95	745	
434	A	RG498・ 499	上部	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	25 (14.0)	5.3	(5.4)	10YR8/4 浅黄橙	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ(マメツ)	再調整		95	780	
435	A	RG498・ 499	C-C'・D-D'間 一括	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	40 (13.6)	4.6	6.2	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ(放射)			95	726	
436	A	RG498・ 499	C-C'・D-D'間 上部(15層)より 上または1・2層)	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	35 (14.0)	4.9	6.1	7.5YR7/4 にぶい、橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ(ヨコ・放射)			95	738	
437	A	RG498・ 499	検出面	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	50 (13.8)	4.9	6.5	10YR7/4 にぶい、黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ			95	848	
438	A	RG498・ 499	A-A'・B-B'間 上部(47層より上)	土師	坏	ロクロ	口~底	55 (15.4)	4.7	6.8	2.5Y8/3 淡黄	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			95	663	
439	A	RG498・ 499	上部	土師	坏	ロクロ	口~底	55 (13.0)	4.9	5.6	7.5YR8/6 浅黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			95	776	

表6 出土遺物一覧(21)

※1 大字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
440	A	RC498・499	上部	土師	坏	ロクロ	口~底	60 (13.0)	4.7	4.6	7.5YR8/6 淺黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		-	95	777	
441	A	RC498・499	A-A・B-B間 上部(47層より上)	須恵	坏	ロクロ	口~底	50 (14.2)	5.0	5.6	2.5Y7/2 灰黄	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		-	95	699	
442	A	RC498・499	A-A・B-B間 46~48層	須恵	坏	ロクロ	口~底	40 (13.4)	5.1	5.1	2.5Y7/2 灰黄	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		-	95	724	
443	A	RC498・499	A-A・B-B間 46~48層	須恵	坏	ロクロ	口~底	50 (13.2)	5.0	6.3	10Y5/1 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		-	95	725	
444	A	RC498・499	上部	須恵	坏	ロクロ	口~底	30 (13.6)	4.6	5.2	7.5Y6/1 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		-	95	772	
445	A	RC498・499	上部	須恵	坏	ロクロ	口~底	40 (14.4)	5.5	6.0	7.5Y6/1 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		-	95	773	
446	A	RC498・499	A-A・B-B間 上部(47層より上) 上、埋土上部	須恵	坏	ロクロ	口~底	45 (14.2)	4.7	6.2	5Y6/1 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		-	95	806	
447	A	RC498・499	上部	須恵	坏	ロクロ	口~底	35 (13.9)	5.4	5.6	10Y6/1 灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		-	95	807	
448	A	RC499	B-B・C-C間 C上部(15層より上)	土師	坏	ロクロ	口~底	35 (14.2)	4.6	4.8	5YR7/8 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		-	95	827	
449	A	RC501・RD1173	一括	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~体	破片 (14.0)	(3.8)	-	10YR7/3 にぶい黄橙	ロクロナデ	-	ロクロナデ		106	95	812	
450	A	RC501・RD1173	一括	土師 (内黒)	坏	ロクロ	体~底	(20)	(1.7)	(6.4)	2.5Y8/3 後黄	ロクロナデ	回転へラケズリ?	ロクロナデ		106	95	814	
451	A	遺構外	東側一括	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	50 (14.6)	5.5	5.9	2.5Y8/3 後黄	ロクロナデ	回転へラケズリ?	ロクロナデ		106	95	882	
452	A	遺構外	検出面	須恵?	瓶?	ロクロ	底	(15)	(3.7)	(10.2)	7.5YR7/4 にぶい橙	へラケズリ	砂底	ロクロナデ		106	95	915	
453	A	遺構外	検出面	須恵	長頸瓶	ロクロ	肩~胴 上	(45)	(7.5)	-	N6/灰	ロクロナデ	-	ロクロナデ		106	95	895	
454	A	遺構外	試掘	土師 (内黒)	坏	ロクロ	口~底	45 (14.4)	5.5	6.4	10YR8/3 淺黄橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		-	95	917	
455	A	遺構外	東側検出面より上	土師	坏	ロクロ	口~底	40 (14.0)	5.2	5.0	7.5YR6/8 橙	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		-	95	851	
456	A	遺構外	試掘	土師	坏	ロクロ	口~底	35 (14.2)	4.3	4.5	7.5YR6/1 褐灰	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		-	95	921	
457	A	遺構外	検出面	須恵	坏	ロクロ	口~底	50 (14.4)	4.7	5.0	7.5Y7/1 灰白	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		-	95	892	
458	B	遺構外	検出面より上	土師 (内黒)	高台付 坏	ロクロ	体~底	(50)	(2.9)	8.0	2.5Y5/3 黄褐	へラミガキ	へラミガキ	へラミガキ		106	95	145	
459	B	遺構外	試掘	須恵	小形広 口蓋	ロクロ	口~胴 上	破片 (10.2)	(4.3)	-	N3/暗灰	ロクロ	-	ロクロナデ		106	95	147	
460	A	遺構外	検出面	木製品	板状木 製品	-	-	-	-	-	-	-	-	-	106	95	95	U-5	
461	B	遺構外	一括	鉄製品	釘	-	-	-	-	-	-	-	-	-	106	96	96	T-09	
462	B	遺構外	検出面	鉄製品	釘	-	-	-	-	-	-	-	-	-	106	96	96	T-10	

表 6 出土遺物一覽(2)

※ 1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロク	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
463	B	遺構外	検出面より上	鉄製品	板状												—	96	T-11
464	B	遺構外	検出面より上	鉄製品	馬蹄												—	96	T-12
465	B	遺構外	検出面より上	鉄製品	馬蹄												—	96	T-13
466	—	遺構外	一括	鉄滓													—	96	z-2
467	A	遺構外	東側検出面	銭貨													106	96	z-3
468	E	遺構外	検出面より上	銭貨													106	96	z-4
469	E	遺構外	RF065南東攪乱内	銭貨													106	96	z-5
470	E	遺構外	RF065南東攪乱内	銭貨													106	96	z-6
471	A	遺構外	西側一括	土製品													106	96	873
472	A	RG498・499	西部一括	土製品	紡錘車												106	96	612
473	A	RG499	東部下部	土製品	不明												106	96	588
474	A	RA600	石囲炉 炉体	縄文	漆鉢	—	口~底	—	15.2	12.8	7.0	7.5YR7/4 にぶい橙				107	97	936	
475	A	RA600	石囲炉	縄文	漆鉢	—	体~底	15	—	(2.7)	(3.5)	10YR8/3 浅黄橙				107	97	937	
476	A	RA601	?	縄文	漆鉢	—	口~胴	—	—	—	—	—				107	97	938	
477	A	RA603 (601)	床面・P P 1 内 (・床面)	縄文	漆鉢	—	口~底	85	24.5	28.5	8.5	10YR6/3 にぶい黄橙				107	97	957	
478	A	RE064	B-B' 1 層下 面	縄文	漆鉢	—	口~胴	—	17.0	(15.0)	—	2.5Y6/4 にぶい黄				107	97	939	
479	A	RE064 (RA602)	床面	縄文	漆鉢	—	口~底	80	12.7	27.5	8.0	2.5Y5/6 黄褐				107	97	956	
480	A	RE064	床面	縄文	漆鉢	—	口	—	—	—	—	—				107	97	940	
481	A	RE064	床面~下部	縄文	白竹鉢	—	体~底	95	—	(3.6)	6.3	10YR3/1 黒褐				107	97	941	
482	A	RD1169・ 1170	一括	縄文	漆鉢	—	口~胴	—	(37.5)	(18.5)	—	2.5Y6/6 明黄褐				108	98	955	
482	A	RD1170	一括	縄文	漆鉢	—	口~胴	—	—	—	—	—				108	98	955	
482	A	RD1169・ 1170・ RG498・ 499	一括	縄文	漆鉢	—	口~胴	—	—	—	—	—				108	98	955	
483	A	遺構外	上部	縄文	漆鉢	—	口~胴	50	15.6	14.4	—	10YR4/2 灰黄褐				108	98	958	
484	A	RG498・ 499	東部底面	縄文	漆鉢	—	口	—	—	—	—	—				108	98	950	
485	A	遺構外	東側一括	縄文	漆鉢	—	口	—	—	—	—	—				108	98	959	
486	A	RG499	下部	縄文	漆鉢	—	口	—	—	—	—	—				108	98	954	

表 6 出土遺物一覧(2)

※ 1 大字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
487	A	RG498	C-C' I7・18層	縄文	深鉢	-	口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	108	98	944
488	A	RG498	東部	縄文	深鉢	-	体~底	25	-	-	(3.2)	10YR4/3 にふい、黄褐	-	-	-	-	108	98	945
489	A	RG319	RG319	弥生	深鉢	-	口~胴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	108	98	949
490	A	RG323	RG323東端下部	弥生	深鉢	-	口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	108	98	951
491	A	RG498・499	RG498・499西部	弥生	深鉢	-	口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	108	98	948
492	A	RG498	RG498下部	弥生	深鉢	-	口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	108	98	947
493	A	RG498	RG498東部下部	弥生	深鉢	-	口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	108	98	946
494	A	RG498	RG498西部底面	弥生	深鉢	-	口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	108	98	942
495	A	RG499 (498?)	RG499 (498?) 東端下部	弥生	深鉢	-	口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	108	98	952
496	A	RA601	埋土中	石器	石鉢	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	109	98	S-060
497	A	遺構外	一括	石器	石鉢	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	109	98	S-039
498	A	RA602	炭層面	石器	石鉢	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	109	98	S-042
499	A	RA602	炭層面	石器	タタキ?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	109	98	S-099
500	A	RA602	下部	石器	タタキ?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	109	98	S-066
501	A	RA601	床面	石製品	棒状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	109	98	S-120
502	A	RA602	上部	石製品	岩版	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	109	99	S-107
503	A	RA603	床面	石器	不定形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	99	S-063
504	A	RA600	床面	石器	不定形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	99	S-010
505	A	RA602	炭層面	石器	不定形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	99	S-051
506	A	RG498・499	西部	石器	不定形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	99	S-078
507	A	RG498	東部	石器	不定形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	99	S-073
508	A	RA600	床面	石器	不定形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	99	S-032
509	B	RA594	床面	石器	不定形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	99	S-091
510	A	RA603・RE063	上部	石器	不定形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	99	S-085
511	A	RA601	床面	石器	石核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	S-017
512	A	RA601	床面	石器	石核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	S-028
513	A	RA602	下部	石器	石核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	S-041
514	A	RA602	炭層面	石器	石核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	S-097
515	A	RA602	炭層面	石器	石核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	S-100
516	B	RD1165	検出面より上	近世	検?皿?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	148

磁器

表6 出土遺物一覧(24)

※1 太字は図中に出土地点あり

番号	区	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	ロクロ	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整 (外面)	調整 (底部)	調整 (内面)	備考	図版	写真 図版	仮番
517	A	RG489	検出面	近世	皿?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	磁器・肥前・染付 け 18c	-	100	966
518	A	遺構外	西側一括	近世	皿?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	磁器・肥前・染付 け 18c	-	100	963
519	A	遺構外	東側一括	近世	碗?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	磁器・肥前・染付 け 18c	-	100	962
520	A	RG489	検出面より上	近世	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	磁器・肥前・染付 け 18c	-	100	965
521	D	遺構外	一括	近世	碗? 皿?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	磁器・肥前・染付 け 18c	-	100	320
522	E	遺構外	R.F.065南東攪 乱一括	近世	碗	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	磁器・大塚相馬	-	100	324
523	A	RG498・ 499	検出面より上	近世	?	-	口	破片 (11.6)	(4.2)	-	-	2.5Y6/1 黄灰	-	-	-	瓦質	109	100	762
524	E	遺構外	検出面より上	近世	甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	在地産	-	100	330
525	A	遺構外	西側一括	近世	急須? 土瓶?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	在地産	-	100	964
526	E	遺構外	検出面より上	近世	甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	在地産・527と同一	-	100	331
527	E	遺構外	検出面より上	近世	甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	在地産・526と同一	-	100	332
528	E	遺構外	検出面より上	近世	甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	在地産	-	100	333
529	E	遺構外	一括	近世	摺鉢	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	在地産	-	100	334
530	E	遺構外	R.F.065南東攪乱 一括	近世	火鉢?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	在地産	-	100	325
531	E	遺構外	検出面より上	近世	火鉢?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	在地産	-	100	327
532	B	RD1165	一括	近世	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	在地産	-	100	144
533	F	遺構外	一括	近世	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	近代以降か?	-	100	204
534	B	RA597	一括	近世	水滴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	磁器・鳥形	-	100	123

表6 出土遺物一覧(25)

<鉄製品>

番号	区	遺構名	地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	図版	写真図版	仮番
180	B	RA594	一括	釘?	12.5	0.8	0.8		87	83	T-08
212	B	RA595	一括	刀子ナカゴ?	9.0	1.2	0.6		90	84	T-07
213	B	RA595	一括	棒状	12.4	2.0	1.0		90	84	T-06
214	B	RA595	下部	不明	28.5	2.1	1.1		90	84	T-05
215	B	RA595	中部	紡錘車	22.4	0.9	径5.7	孔0.3cm	90	85	T-01
216	B	RA595	下部	紡錘車軸?	26.7	0.6	-		90	85	T-04
217	B	RA595	下部	鉄鏃	12.0	2.5	0.7		90	85	T-03
218	B	RA595	下部	鏃状	10.0	1.0	0.6		90	85	T-02
243	B	RA597	検出面	リング状	2.4	-	0.3	孔0.7cm	-	86	T-14
461	B	遺構外	一括	釘	3.1	1.1	0.9		106	96	T-09
462	B	遺構外	検出面	釘	8.1	1.3	1.1		106	96	T-10
463	B	遺構外	検出面より上	板状	6.7	4.2	0.8		-	96	T-11
464	B	遺構外	検出面より上	馬蹄	15.7	1.8	0.6		-	96	T-12
465	B	遺構外	検出面より上	馬蹄	16.1	2.3	0.6		-	96	T-13

<木製品>

番号	区	遺構名	地点・層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	樹種	図版	写真図版	仮番
288	B	RI017	東側	井戸枠	59.9	35.0	2.9	スギ	96	88	U-1
289	B	RI017	西側	井戸枠	59.8	29.3	3.8	コナラ	96	88	U-2
290	B	RI017	南側	井戸枠	54.1	29.6	3.8	コナラ	97	89	U-3
291	B	RI017	北側	井戸枠	54.1	31.0	3.3	コナラ	97	89	U-4
460	A	遺構外	検出面	板状木製品	17.7	3.2	0.7	コナラ	106	95	U-5

<土製品>

番号	区	遺構名	地点・層位	種類	長さ・厚さ(cm)	径(cm)	孔(cm)	重さ(g)	調整	備考	図版	写真図版	仮番
10	D	RA580	北西隅下部	紡錘車	2.7	3.8	0.5	26.04		擦痕あり	67	68	218
11	D	RA580	床面	紡錘車	5.6	2.3	0.7	71.27	ヘラケズリ・ヘラナデ		67	68	219
12	D	RA580	床面	紡錘車	5.4	2.1	0.7	53.50	ヘラナデ		67	68	220
30	D	RA581	新期カマド床面	勾玉	2.8	1.1	0.1	3.49			69	69	257
99	F	RA586	床面	紡錘車	2.3	4.8	0.6	59.93			79	78	185
100	F	RA586	pp 2	紡錘車	2.9	4.4	0.7	57.84			79	78	186
129	C	RA590	検出面	紡錘車	2.6	5.5	0.7	82.92			83	80	158
358	A	RG498	C-C'・D-D' 間 C中～下部 (16層以下)	土錘	3.9	1.5	0.5	7.90			102	92	590
471	A	遺構外	西側一括	紡錘車	1.3	5.0	0.3	34.50			106	96	873
472	A	RG498・499	西部一括	紡錘車	1.6	5.2	0.6	39.73			106	96	612
473	A	RG499	東部下	不明	3.7	1.4	-	17.24			106	96	588

表6 出土遺物一覧(26)

<石器>

番号	区	遺構名	地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版	写真図版	仮番
52	D	RA583	下部	タタキ	11.1	5.7	6.8	650.75	ひん岩(北上山地)	72	72	S-112
256	D	RD1136	一括	凹?	10.9	9.0	7.2	538.01	安山岩(奥羽山脈)	93	86	S-116
496	A	RA601	埋土中	石鏃	3.1	1.1	0.5	1.19	頁岩(奥羽山脈)	109	98	S-060
497	A	遺構外	一括	石鏃	2.8	0.6	0.5	1.13	頁岩(奥羽山脈)	109	98	S-039
498	A	RA602	炭層面	石鏃	2.5	0.4	0.3	1.01	頁岩(奥羽山脈)	109	98	S-042
499	A	RA602	炭層面	タタキ?	12.1	4.8	2.7	231.64	デイサイト(奥羽山脈)	109	98	S-099
500	A	RA602	下部	タタキ?	10.2	5.9	3.6	352.84	安山岩(奥羽山脈)	109	98	S-096
501	A	RA601	床面	棒状石製品	16.5	4.2	2.4	334.79	頁岩(北上山地)	109	98	S-120
502	A	RA602	上部	岩版	4.0	6.6	6.3	123.37	凝灰岩(奥羽山脈)	109	99	S-107
503	A	RA603	床面	不定形	2.9	1.6	0.3	1.13	頁岩(奥羽山脈)	—	99	S-063
504	A	RA600	床面	不定形					頁岩(奥羽山脈)	—	99	S-10
505	A	RA602	炭層面	不定形	3.5	2.3	0.5	3.03	頁岩(奥羽山脈)	—	99	S-051
506	A	RG498・499	西部	不定形	6.6	3.9	1.5	41.75	頁岩(奥羽山脈)	—	99	S-078
507	A	RG498	東部	不定形	6.5	3.7	1.3	33.79	頁岩(奥羽山脈)	—	99	S-073
508	A	RA600	床面	不定形	8.5	4.9	1.4	80.98	頁岩(奥羽山脈)	—	99	S-032
509	B	RA594	床面	不定形	5.1	2.5	0.5	12.58	頁岩(奥羽山脈)	—	99	S-091
510	A	RA603・RE063	上部	不定形	5.0	3.5	0.8	17.22	頁岩(奥羽山脈)	—	99	S-085
511	A	RA601	床面	石核	8.4	4.7	3.1	195.68	—	—	—	S-017
512	A	RA601	床面	石核	5.9	4.0	3.0	81.79	頁岩(奥羽山脈)	—	—	S-028
513	A	RA602	下部	石核	6.5	5.5	4.1	176.45	頁岩(奥羽山脈)	—	—	S-041
514	A	RA602	炭層面	石核	10.2	7.2	3.0	260.52	—	—	—	S-097
515	A	RA602	炭層面	石核	7.7	6.9	4.3	289.94	頁岩(奥羽山脈)	—	—	S-100

<銭貨>

番号	区	新遺構	地点・層位	種別	径(cm)	孔(cm)	重さ(g)	備考	図版	写真図版	仮番
467	A	遺構外	東側検出面	銭貨	2.2	0.7	1.57		106	96	z-3
468	E	遺構外	検出面より上	銭貨	2.7	0.7	5.16		106	96	z-4
469	E	遺構外	RF065南東攪乱内	銭貨	2.4	0.7	2.67		106	96	z-5
470	E	遺構外	RF065南東攪乱内	銭貨	2.2	0.7	2.18		106	96	z-6

<鉄滓>

番号	区	新遺構	地点・層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版	写真図版	仮番
248	B	RA293	下部	鉄滓	10.8	6.8	2.1	135.18		—	86	z-1
466	—	遺構外	一括	鉄滓	5.8	5.2	3.8	121.79		—	96	z-2

表7 R G498・499溝跡出土遺物一覧(1)

※面積 (cm²) 重量 (g)

出土地点	I a : 環 (須恵器)			I b : 環 (土師器)			I c : 環 (内黒)			I d : 環 (非ロクロ)			II a : 甕 (須恵器)			II b : 甕 (土師器)		
	登録外 面積	登録 重要	総重量	登録外 面積	登録 重要	総重量	登録外 面積	登録 重要	総重量	登録外 面積	登録 重要	総重量	登録外 面積	登録 重要	総重量	登録外 面積	登録 重要	総重量
A-A'・B-B'間 45層より上	0	0	294	25	15	0	0	0	322	322	0	0	0	0	0	0	0	0
A-A'・B-B'間 46~48層	0	0	249	25	15	0	6.25	10	178	188	0	0	0	0	0	0	0	0
A-A'・B-B'間上部 (47層より上)	1400	840	2055	3800	2225	4196	2175	1348	202	1550	25	30	450	970	1365	568.75	447	0
A-A'・B-B'間下部 (49層より下)	300	180	91	800	405	536	600	415	0	415	0	0	50	35	136	171	600	380
A-A'・B-B'間	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	125	150	0	150	0	0
B-B'ヘルト下部(20層)	12.5	10	0	75	54	0	25	18	0	18	25	20	0	0	0	37.5	30	0
B-B'ヘルト上部 (23~26層)	475	207	227	434	625	402	500	381	439	820	0	0	12.5	14	25	39	50	40
B-B'ヘルト付近 (27・28層)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100	107	139
B-B'・C-C'間B上部 (23~26層)	0	0	0	75	37	0	75	59	0	59	0	0	0	0	0	25	20	0
B-B'・C-C'間B26層	0	0	345	0	306	306	75	50	70	120	0	0	12.5	7	0	7	100	51
B-B'・C-C'間上部(15 層より上)か23~26層)	100	70	267	650	365	1208	250	141	76	217	0	0	0	0	0	375	251	0
B-B'・C-C'間C上部 (9・11・21層)	0	0	0	100	71	67	50	40	0	40	0	137	0	0	0	225	160	0
B-B'・C-C'間C上部 (15層より上)	6.25	4	0	4	0	0	50	20	0	20	0	0	0	120	120	6.25	4	0
B-B'・C-C'間C16層	25	10	503	513	25	13	31.25	21	81	102	0	0	0	390	390	118.75	84	0
B-B'・C-C'間C中部 (16~19層)	100	45	264	309	650	375	300	154	195	349	0	0	75	108	2050	2158	425	315
B-B'・C-C'間C20層	75	38	0	38	131.25	63	135	198	406.25	206	0	0	12.5	6	85	91	300	226
B-B'・C-C'間C下部 (22層)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	250	200	0
B-B'・C-C'間 B 29・30層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	150	111	0	111
B-B'・C-C'間検出面	0	0	0	25	10	0	25	22	0	22	0	0	0	0	12.5	10	0	10
B-B'・C-C'間上部	68.75	39	0	39	575	357	525	308	0	308	0	0	0	0	100	76	0	76
B-B'・C-C'間底面	0	0	0	6.25	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	20	0	20
B-B'・C-C'間	187.5	85	48	133	425	263	400	204	119	323	0	0	31.25	47	130	177	250	200
C-C'ヘルト上部 (15層より上)	31.25	30	430	460	1112.5	604	1200	680	160	840	0	0	225	215	0	215	350	256
C-C'ヘルト16層	275	148	249	397	800	445	1231.3	785	458	1243	0	0	275	530	0	530	562.5	464
C-C'ヘルト17・18層	12.5	10	192	202	200	120	200	118	0	118	0	25	0	0	200	209	0	209
C-C'ヘルト18層	0	0	59	59	12.5	9	164	173	7	7	0	0	6.25	27	0	27	0	0

表7 R G498・499溝跡出土遺物一覧(2)

※面積 (cm²) 重量 (g)

出土地点	I a : 坏 (須恵器)			I b : 坏 (土師器)			I c : 坏 (内黒)			I d : 坏 (非ロクロ)			I i a : 甕 (須恵器)			I i b : 甕 (土師器)									
	登録外 面積 重要	登録 重要	総重量	登録外 面積 重要	登録 重要	総重量	登録外 面積 重要	登録 重要	総重量	登録外 面積 重要	登録 重要	総重量	登録外 面積 重要	登録 重要	総重量	登録外 面積 重要	登録 重要	総重量							
C-C・ベルト下部 (20層)	225	140	154	700	390	629	775	475	0	475	35	0	35	70	0	70	600	490	0	490					
C-C・ベルト下部 (22層)	0	0	0	0	0	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	125	130	0	130					
C-C・D-D'間C上部 (9・11・21層)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	55	0	55	0	0	0	6.25	4	0	4					
C-C・D-D'間C上部 (15層より上)	243.75	142	0	3825	1964	2144	3275	1842	230	2072	7	0	7	143.75	98	40	138	962.5	840	0	840				
C-C・D-D'間C 中～下部 (16層以下)	150	279	105	825	482	740	1275	787	193	980	0	0	0	275	450	105	555	725	813	0	813				
C-C・D-D'間D上部 (1・2層)	12.5	15	0	1275	685	728	675	390	128	518	0	0	0	0	0	120	120	350	225	0	225				
C-C・D-D'間D中部 (3～6層)	6.25	4	116	700	354	842	350	191	0	191	0	0	0	100	123	0	123	300	216	0	216				
C-C・D-D'間D6層	0	0	0	112.5	60	279	75	60	115	175	0	0	0	0	0	0	50	40	0	40					
C-C・D-D'間D下部 (7層)	106.25	65	47	675	410	326	475	320	0	320	0	0	0	250	416	90	506	1135	1010	49	1059				
C-C・D-D'間C下部 (22層)	0	0	0	0	0	82	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
C-C・D-D'間底面	375	190	71	2611	162.5	600	1275	751	296	1047	0	0	48	25	15	0	15	825	665	50	715				
C-C・D-D'間	87.5	48	0	48331.25	190	249	993.75	677	0	677	0	0	125	206.25	205	0	205	775	650	0	650				
D-D'ベルト上部 (1・2層)	0	0	0	6.25	5	163	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12.5	8	0	8				
D-D'ベルト中部 (3～6層)	81.25	55	0	55	275	170	33	203	0	38	0	0	0	0	0	0	0	62.5	60	0	60				
D-D'ベルト下部 (7層)	25	22	0	37.5	30	0	25	21	0	21	0	0	0	25	29	390	419	125	110	0	110				
D-D'ベルト下部 (9層より上)	6.25	6	0	50	35	0	25	15	0	15	0	0	0	6.25	7	0	7	50	40	0	40				
D-D'・E-E'間D上部 (1・2層)	0	0	0	25	11	0	25	6	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
D-D'・E-E'間D中部 (3～6層)	50	22	0	300	130	189	225	115	0	115	0	0	0	50	68	0	68	150	105	0	105				
D-D'・E-E'間	12.5	3	0	100	35	46	50	31	0	31	0	0	0	5	60	0	60	25	15	0	15				
E-E'・F-F'間	31.25	20	0	225	136	0	200	138	0	138	0	0	0	325	597	410	1007	300	270	0	270				
G-G'ベルト付近	0	0	0	200	115	0	25	15	0	15	0	0	0	50	59	0	59	100	105	0	105				
D-D'ベルトより西 上部	50	40	0	12.5	10	39	49	0	0	0	0	0	0	25	51	0	51	125	140	0	140				
下部	1737.5	1039	1063	2102	5093.8	2693	4925	2787	574	3361	100	85	360	445	431.25	559	0	559	1906.3	1550	437	1987			
検出面一括	6.25	5	0	25	14	0	12.5	10	0	10	0	0	0	0	0	0	0	150	110	0	110				
一括	793.75	489	316	805	3206.3	1821	909	2730	3012.5	1622	361	1983	0	900	1195	190	1385	1725	1365	0	1365				
	162.5	115	196	311	1625	874	1468	1225	756	88	844	0	215	1850	1835	12	1847	500	429	178	607				
(合計)	7231.3	4415	7341	11756	31025	17114	14918	32032	27119	16034	4285	20319	256.25	232	910	1142	6062.5	7946	4688	12634	15916	13051	870	13921	
																					総量	87610	58792	33012	91804

V. ま と め

1. 遺構

検出した遺構は、竪穴住居跡26棟（縄文晩期4棟、古墳末～平安時代22棟）、住居状遺構3棟、土坑67基、溝跡29条、井戸跡1基、柱穴状土坑約130基である。台太郎遺跡では平成15年度までに52回もの調査が行われており、検出された遺構は竪穴住居跡600棟以上、土坑1200基近く、溝跡も500条を超えている。そのため、単独の調査次内でのみ詳細な分析を行うのではなく、過去の調査を含めた全体の把握が必要とされる。特に竪穴住居跡については、過去の報告書（23次・36次など）によって何度かまとまった検討がなされているので、これまでの調査成果・検討結果をふまえて、本次調査の特徴を捉えていきたい。

(1) 竪穴住居跡（古代）

〈分布状況〉古墳時代末～奈良時代の竪穴住居跡は12棟で、C区3棟、D区6棟、F区2棟、B区1棟？と主に遺跡の南東部に、互いに重複することなく分布している。一方で、平安時代の竪穴住居跡は9棟で、B区8棟、D区1棟と遺跡の南西部に位置し、重複例が多い。E区の1棟は、出土遺物がなく時期は不明である。以上のように各区で竪穴住居跡が検出されているが、遺跡の南西端であるA区では住居跡は確認されなかった。

〈規模・形状〉長辺と短辺の差は10cm程度のもが多く、正方形に近い形を持つ。奈良時代の住居跡は壁がやや弧を描き不整形のもが目立った。一辺の長さは両時代とも4m前後のもが多いが、奈良時代が1.6～7.0m、平安時代が2.2～6.2mと様々な規模が見られる。床面積は奈良時代の住居跡が20㎡以下（小型）9棟、20～40㎡（中型）が2棟、40以上が1棟（大型・47.6㎡）となる。平安時代ではそれぞれ、4棟、3棟、1棟（41㎡）と、奈良時代のほうが大きい住居跡を持つ。

〈土坑・柱穴〉奈良時代の住居跡はR A 581・583・586の3棟で支柱穴が確認できる。いずれも床面積が20㎡を超える比較的大きな住居跡である。これに対して全く柱穴を確認できなかったものは床面積15㎡以下の小さいものである。貯蔵穴と思われるカマド脇の土坑は4棟で確認されている。平安時代の住居跡で支柱穴を確認できたものもR A 293・595・596の3棟で、やはり大きい住居跡でみられる傾向がある。貯蔵穴は3棟で確認した。

〈カマド〉奈良時代の住居跡は北壁に設置される（10棟）。煙道方向はN—61°—WからN—35°—Eまでの範囲に位置し、R A 585以外は北西を向く。1棟に複数基設置されるものもあるが（R A 581・582）、いずれも北壁に並置されていた。一方平安時代では北壁でも東へ傾くものが多い（9棟中5棟）。また南壁に設置される例もある（R A 593）。一棟で複数基カマドを持つ場合はそれぞれ異なる壁に設置されるようである（R A 595）。

〈過去の調査との検討〉奈良時代の住居跡は重複がほとんど見られず、散在し、カマドは北～北西方向に設置される。平安時代は重複例が多く、カマドの方向は北東が多いがばらつきが見える。以上の事柄はこれまでの調査成果とほぼ合致する項目である。分布域も、南東部（D～F区付近）は奈良時代主体、南西部（B区）は奈良・平安時代混在（平安の方が多）区域とこれまでのものと相違ない。一方で住居の規模は、奈良時代は大・中・小の3つの類型に大別できるのに対し、平安時代では3つのなかでも小型に集約される傾向があるとされているが、本次調査では、むしろ逆の結果となってしまった。しかしこの相違は、検討対象と

なった住居跡が少ないことに起因するのかもしれない。

(2) 竪穴住居跡・住居状遺構（縄文）

A区北東部、旧河道の南東側で縄文時代の遺構が検出された。遺構の埋土は地山土を主体としているうえに遺物など混入物も少なく、古代の検出面から遺構の把握をすることは不可能であった。たまたま、古代の溝跡が、住居炉跡を切っており、溝の壁に被熱範囲が認められてために発見できた。そのため、遺構の平面形を確認することはかなり困難であった。断面形及び遺物の分布状況から推測するに、浅皿状に窪んだ円形～楕円形の遺構であったものと思われる。そしてこれらの遺構は、水によって幾度となく埋土が堆積してはその度に再び生活面が形成されているような箇所も認められる。しかし近隣の本宮熊堂A遺跡と比較しても、出土遺物は非常に少ないため、ここを拠点として生活していたと言うよりもむしろ、キャンプサイト的な役割が想定される。

この時期の遺構は平面形から存在の把握は難しいが、遺構がある付近にある古代以降の遺構埋土には縄文土器片が混入している。今後、該期の遺物が確認された場合、地山土内にも遺構が存在する可能性があり、注意していきたい事項である。

(3) まとめ

本次調査における結果は、これまでの成果を補強するもので、集落分布の白地図を埋めていく一翼を担う。一方で、これまで確認されていなかった、縄文時代晩期の遺構の存在が明らかとなった。縄文晩期の住居跡は古代の竪穴住居跡とは分布域を異にしており、それぞれの時代の土地利用の違いが伺える。今後さらに調査が重ねられ、調査が終了したあかつきにはこれまでの調査成果をまとめ再検討していくことが必要とされる。

2. 遺物

遺物は大コンテナ（42×32×30cm）20箱程度出土し、この大半が古墳時代末～平安時代の土師器・須恵器類である。その他縄文・弥生土器、中～近世陶磁器、鉄製品（紡錘車・鉄鏃）、土製品（紡錘車・勾玉）、石器・石製品（石鏃・敲磨器類・砥石）、井戸枠、馬歯なども出土しているが、ここでは出土量の多い古代の土器類についてのみふれたい。

(1) 土器・非口口整形のもの

坏・高坏・片口・（鉢？）・甕・球胴甕・甗・壺など、計174点掲載した。比較的出土量の多い坏と甕の詳細を述べたい。

I. 坏

47.点掲載した。黒色処理されているものが、35点（内面34点、両面1点）、されていないものが12点である。後者のうち3点には赤色塗彩がみられ（可能性ありも含む）、また関東系土師器1点もこれに含まれる。

法量は、15（RA581）が口径20cm、器高7.7cmと突出して大きく、その他は口径16～18cm、器高5～6cmと、口径14cm前後、器高3～5cmの2つに集中する傾向が伺える。

器形は、丸底のもの（M）（やや平底風のものも含む）、平底のもの（H）があり、底部との境に段を有するかによりさらに3種類に分類される（内外有段（I）、外面有段～沈線（II）、内外面無段（III））。これらを組み合わせて分類した個対数はMI 7点、MII 21点、MIII 6点、HII 4点、HIII 6点、I? 1点、II 1点となる。丸底のものが33点と大半を占める。段は外面のみのものが23点と多い。また、段を有さないものの中でも丸底の器形を持つものは、外面体部中央が僅かに窪み、段を意識していた可能性がある。口縁部の形状

は内彎して立ち上がるものが大半であるが、平底のものにはやや直線的に開く器形も認められる。丸底の法量は口径17cm前後が多いのに対し、平底は14cm以下の小形のものが増える。MⅡ・MⅢは黒色処理されていないものを含むが、これ以外はすべて内黒の土師器である。

内面調整はヘラミガキがほとんどで、平底のものにはヘラナデもみられる。外面はミガキ・ハケメ・ヘラナデ、ケズリと多種認められるが、ヘラミガキは比較的口径が広く、器高の高いものに施されているようである。

なお、2 (RA580) は、在地のものではないため上記の分類には含めず、別項を設けて述べたい (3. R A580 竪穴住居跡出土関東系土師器について)。

Ⅱ. 甕

100点掲載した。以下口縁部・底部の形態により分類を行いたい。口縁部器形は、Ⅰ外反して開く (上半がやや内湾するものも含む)、Ⅱ頸部がくの字状に強く屈曲して開く、Ⅲ短く外反するの3種に分かれ、口縁端部は、①平坦なもの、②丸みを帯びるもの、と2種認められる。外面体部下端はa短く直立、b外に張り出す、cその他に、底部内面は、1 胴部から器形の変換点が認められず底部中央へ緩やかにつながるもの (丸底)、2 外面底部縁の延長線上付近に器形変換点がみられるが、底部中央へ緩やかにつながるもの (平底風)、3 内面底部がほぼ平坦なもの (平底) に分類される。

口縁部が残存している個体は66点、Ⅰが48点と大半を占め、Ⅱが4点、Ⅲ14点となる。Ⅰの端部は①と②が各24点ずつ確認されたが、Ⅱ・Ⅲはすべて②で丸みを帯びる。底部が残存している個体は49点、分類の組み合わせは、aのものは内面丸みを帯びるもの (1又は2) が多く、bは平底のもの (3) が多くなる。cは全て平底である。口縁部から底部まで残存する個体は25点、すべて口縁部器形がⅠのもので、Ⅱ・Ⅲは底部が残存していない。Ⅰ①類の底部はa 10点、b 3点、c 1点で、内面は丸底のもの (1又は2) が多い。Ⅰ②類の底部は、aが1点のみで平底 (3)、残りはbもしくはcでこれも大半が平底である。

法量は、器高24cm以上、口径16~21cm程度の大型 (17点)、器高16~21cm、口径13~17cmの中形 (4点)、器高14cm以下の小形 (3点) と3種類に分けられる。法量と口縁部形態との特徴はみいだせなかったが、底部形態は中・小形の器種には直立丸底 (a1) が見られず、平底が多いようである。

(2) 土器・ロク口整形のもの

坏・高台坏・甕・壺・瓶など261点掲載した。須恵器96点、土師器156点で、大半を坏類が占める。土師器甕はわずか8点、須恵器甕・瓶類は40点でいずれも口縁部から底部まで残存する個体はない。ここでは坏のみ詳細を述べたい。

Ⅰ. 坏

191点掲載した。A底部から直線的に開く器形をもつもの、B底部から内湾しながら立ち上がり端部は丸く収まるもの、C底部から内湾しながら立ち上がり端部が僅かに外反するもの、の3形態に器形分類される。各分類の点数はA18点、B63点、C39点、BもしくはCと思われる個体9点、不明12点である。法量はバラツキが見られるが、口径14~15cm程度、器高5cm前後にピークがあるようだ。

土師器は136点、黒色処理されるものが66点、このうちB26点、A11点とBが多くAは確認されなかった。黒色処理のされない土師器は70点、A9点、B22点、C20点とBとCに器形が集中する。須恵器は55点、内訳は、A9点、B16点、C8点とBが多い。以上のように器種により若干比率がことなるものの、いずれもBが多いようである。土師器の体部下端から底部、もしくは底部に再調整されるものは28点認められ、一点をのぞき、すべて内面黒色処理される器種であった。

(中村)

(3) 墨書土器 (表8)

今次調査では26点の墨書土器が出土している。積文や文字の部位など基本的な事柄については別表にまとめている。これらから読みとれることとして次の4点があげられる。

1. 通常、台太郎遺跡のような集落遺跡から出土する墨書土器は、吉や万といったいわゆる吉祥句が記されていることが多い。しかし、今次調査で出土したものには9と837に「万」とある以外にそうした吉祥的な文字が記されたものはほとんど出土していない。

2. 今次調査では22棟の竪穴住居跡が検出されているが、そのうち墨書土器が出土しているのはRA584・590・594竪穴住居跡の3棟のみである。うち、RA594からは3点、RA584からは4点が出土している。ここから墨書土器が偏って出土した状況を読みとれる。このことは、土器に文字を記す行為が集落全体で行われていたわけではなく、ある特定の人々によってなされていたことを窺わせるものである。

3. 記号以外では「木」と記された土器が最も多く出土しており、5点見られる。この「木」銘墨書土器はこれまでの調査でも出土しており、台太郎遺跡を代表する文字といえる。ただ「木」銘墨書土器は周辺の古代の遺跡では出土していない。一方、これらの遺跡では台太郎遺跡の「木」銘墨書土器と同じような出土傾向の墨書土器が見られる。すなわち、低湿地をはさみ台太郎遺跡の反対側に位置する細谷地遺跡では「大」が、西側に位置する本宮熊堂B遺跡では「成」の文字が出土しており、これらは他の遺跡では出土していない。つまり、「木」「大」「成」はそれぞれの集落を代表する文字ということになる。

4. ×と記された土器の年代をみると、古いところでは8世紀後半に比定され、新しいものでは9世紀後半のものがある。すなわち、台太郎遺跡では100年以上にわたって同じ記号が記され続けてきたのである。

×という刻書は生産あたって記されたものと考えられているが、焼成後のものもありにわかに判断できない。いずれにせよ、周辺ではこのように長期間同じ文字・記号を土器に記し続けている遺跡は今のところみられない。その理由については今後の検討課題だが、台太郎遺跡の特徴のひとつとしてあげられよう。

(石崎)

表8 墨書土器一覧

番号	出土遺構	積文	器種	部位	方向	備考
53	RA584	×	土師器・坏	底部外面		
54	RA584	⊗	土師器・坏	底部外面		
55	RA584	×	土師器・坏	底部外面		焼成前の刻書
123	RA590	×	土師器・坏	底部外面		焼成前の刻書
140	RA594	十万	土師器・坏	体部外面	正位	焼成後の刻書
153	RA594	木	土師器・坏	体部外面	倒位	
154	RA594	七	土師器・坏	体部外面	正位	焼成後の刻書
155	RA594	□	土師器・坏	体部外面	?	焼成後の刻書
265	RD1157	木	土師器・坏	体部外面	倒位	焼成後の刻書
279	RD1168	万・万	土師器・坏	体部外面	倒位	焼成後の刻書
286	RD1173	木	土師器・高台付坏	体部外面	倒位	
297	RG498	□	土師器・坏	体部外面	?	
298	RG498	□	土師器・坏	体部外面	?	
299	RG498	木	須恵器・坏	体部外面	倒位	
300	RG498	□[木カ]	土師器・坏	体部外面	倒位	
301	RG498	□	土師器・坏	底部外面		
302	RG498	□□	土師器・坏	体部外面	正位	焼成前の刻書
303	RG498	×	土師器・坏	底部外面		焼成前の刻書
304	RG498	×	土師器・坏	底部外面		
305	RG498	□[×カ]	土師器・坏	底部外面		
306	RG498	□	土師器・坏	体部外面	?	焼成後の刻書
307	RG498	□[木カ]	土師器・高台付坏	体部外面		
359	RG488・499	木	土師器・坏	体部外面	正位	焼成後の刻書
360	RG488・499	×	土師器・坏	底部外面		焼成前の刻書
361	RG488・499	×	土師器・坏	底部外面		焼成後の刻書
362	RG488・499	□	須恵器・坏	体部外面	?	焼成前の刻書
451	A区東側一括	#	土師器・坏	底部内面		

(4) R G 489・499溝跡出土遺物について(表7・9)

R G 489・499溝跡遺物出土量は、大コンテナ(42×32×30cm) 7箱におよぶ。本次調査全体で20箱程度なのに対し、この約1/3を占めることになる。前述(第三章、2. 室内整理)の選別基準により一次登録を行ったところ、490点が登録(掲載対象)となった。ロクロ整形の坏類が449点と大半を占め、このうち300点が口縁部を欠く体部～底部破片であった。これらすべてを掲載することは不可能なため、ロクロ整形坏類と土師器甕類の2次選別を行った。前者は口縁部から底部まで残存し、なおかつ口縁部から径が算出できるもの、後者は量量が算出できるものに限定した。この結果、総点数151点となりこれを掲載遺物とした。しかしさらに整理作業期間の制約から、比較的残存率の低く、類似した器形が多々あるものなどを写真掲載とし、残りの101点のみ図化を行った(図化した遺物についての記載は前章)。以上のように、通常の基準では当然掲載及び図化の対象となるべきもの(選別基準aの底部から径が算出できる個体とb・c)も不掲載とせざるをえなかった。また、接合においても多量の遺物を前に十分な時間を費やすことができず、器形の復元がなされず、破片として登録外となった個体も多いものと思われる。

このような状況のなかでR G 489・499溝跡出土遺物の全体傾向を少しでも把握するため、総出土量の計測を行った。須恵器坏(I a)、土師器坏(I b)、土師器坏(内黒)(I c)、土師器坏(非ロクロ)(I d)、須恵器甕(II a)、土師器甕(II b)の6項目に器種分類し、出土地点別に重量を計測した(表7)。総重量91.804kg、器種毎の重量は下表(表9)の通りである。坏類は、I dが極端に少なく約1kgで、次いでI aが10kg程度、I c・I bと10kgずつ増えていく。重量比はI a 18%、I b 50%、I c 32%、I d 2%となる。全体量に対して登録量が占める割合はI a～dそれぞれ、6割、5割、2割、7割程度で、I cの接合率が低いようである。一方でI dは、7割と大半が接合している。しかしI dに関しては総量が少なく、非ロクロという他と異なる明確な特徴があるため探しやすかったという点、逆にロクロ使用の有無を判断できないような小破片の場合はI cへカウントされており、登録外のものに関してはこれよりも若干増える可能性を考慮したい。甕類は須恵器・土師器とも13kg前後、重量比はほぼ同数である。登録量との比較は、II aはd・e、II bはcまでと選別基準が異なるため比較はできないが、II bの登録重量は全体量の1%にも見えず非常に接合率が低い。これは登録対象となり得る口縁もしくは底部破片が、総量の大半をしめる胴部破片とほとんど接合しなかったためと思われる。

重量と共に出土遺物の表面積の算出も試みた。一辺2.5cmの正方形の方眼の上に土器片を並べていった。一マスに満たない極少量もの(6.25cm²以下)は全て繰り上げている。溝跡出土遺物全てを対象としたかったが、ある程度器形をとどめている個体(平面ではないもの)に関しては上記の方法では表面積を求めることができず、今回はやむを得ず登録外のもののみで試みた。登録外の重量と表面積を単純に数値のみで比較すると、ほとんどかわらない、もしくは表面積の数値が増えるもの(I類)、表面積の数値の方が減るもの(II類)に分かれる。後者のうち特にII a類は半分に減ってしまう。これは器壁が厚く面積あたりの重量が重いためであると考えられ、表面積比のほうがより器種の組成比に近づいているのではないと思われる。では遺物が何個体分出土しているのであろうかとう点まで検討していきかけたが、立体固体(登録固体)の表面積の算出にまで時間を費やせず、今後の課題としたい。

次に地点別の出土量(以下総重量が対象)を比較していきたい。グリッド単位での出土量の把握はできておらず、断面観察を行った地点間ごとに遺物を取り上げている。A-A'・B-B'間、B-B'・C-C'間、C-C'・D-D'間、D-D'～G-G'間の4区間(1区間概ね10m前後)に別け、これより以东・以西ではほとんど遺物は出土していない。ちなみにベルトは断面観察時に残しておいたもののため、ベルト西側で堆積状況記録し

た場合は、ベルトは断面より東側（若いアルファベット側）の区間に位置することになる。また出土地点欄に「C-C'・D-D'間C上部（15層より上）」など記載されているが、これは区間内でもよりC-C'側（東側）に位置し、C-C'の断面に対応する層位と言うことである。これらの区間毎に出土量を計測したところ、C-C'・D-D'間が最も多く、全体量の40%程度を占める。次いでA-A'・B-B'間、B-B'・C-C'間とはほぼ同量となる（後者は前者よりやや地点間の距離が短いため、1 m当たり平均値で求めると両者の大差はない）。D-D'～G-G'間は全体量のわずか3%と、D-D'以西では遺物がほとんど出土していない。A-A'以东（拡張部）も同様に極端に出土量が減少する。本次調査区東側は26次調査区内へと続き、R G 320として調査されている。R G 320は、長さ約18m、深さ30cm程度で西側同様旧河道へ注ぐ。遺物の総量は確認できていないが掲載遺物は12点で、ここから推測するとやはり遺物量は東へむかって減少していくようである。器種別に地点間の出土量比を見ていくと、I b～cとII a、つまり土師器類は地点間全体量比にほぼ比例するように増減するが、須恵器類はこれと対応しない。I aは東側、II bはB-B'・C-C'間に多く出土している。

層位別の出土量も検討していきたい。調査時に地点毎に概ね上・中・下部に分けたが、地点間で対応する層位を把握しきれないまま区分したためそれぞれが対応していない。そこで改めて区分を行いたい（上層・中層・下層と表記）。まず、埋土中には十和田a降下火山灰が含まれており、この有無で大きく上下にわけられる。A-A'では火山灰層（44層上部）が検出面で確認されており、これより上位層は削平されている。26次調査R G 320でも埋土内には火山灰は含まれていない。B-B'からC-C'までは埋土上部（23層？・15層より上・検出面下10cm程度）が火山灰を含む層、ここから西へは急激に下方へ傾斜し、D-D'では6層下面が境となる。これを上層としたい。火山灰層の直下の16・(24)・26・(44～)46層は炭化物を多く含み、骨片なども混入する（中層）。中層の下位及びR G 499埋土を下層とする。本層は砂層やラミナ層を含み水性堆積の様相が見られる。把握できる範囲でこれらの層位から出土している重量を抜き出してみると、中層が最も多く総重量（g）の30%程度を占める。調査時には遺物量が多く、しかも完形もしくはそれに近い器形を把握できる個体が多いように感じた。上層（検出面一括も含む）は25%程度、遺物は多量の小破片ともに完形個体も含まれていた。下層は全体の15%、小破片が目立った。口縁から底部まで残存し法量を算出できる個体を数えてみると、上層28点、中層54点、下層7点となり、調査時にうけた印象に対応するようである。器種別に見ていくと、土師器類は上層・中層でほぼ同量出土しているのに対し、須恵器類は中層からの出土が多い。地点別須恵器出土量の多いB-B'以东では上層が残存していないため、仮にB-B'以西の上層：中層の比率をもとに東側の上層出土量として足しても、中層の約半分程度である。

地点と層位を総合してみると、下層ではC-C'・D-D'間の出土量が多い。中層ではA-A'・B-B'間が主体となるが、これ以西でも主体区域の4～6割程度出土している。須恵器坏の出土量が東部に多いのは中層段階で主体となる場所が移動しているためと理解したい。上層ではC-C'・D-D'間が多くB-B'・C-C'間で極端に減る。しかし、上層は西側ほど削平されており、埋土が徐々に薄くなっていくため集中範囲がはっきりしない。

最後に墨書土器の出土状況を見ていきたい。溝内では計15点、このうち上層が最も多く6点、中層・下層で各4点、不明1点である。地点別ではA-A'・B-B'間2点、B-B'・C-C'間1点、C-C'・D-D'間8点、地点不明4点である。C-C'以东では中層のみで出土、これ以西では上層・下層の出土が多くなる。器形の残存率は、下層からの出土のものが底部～体部の破片であるのに対し、上層・中層は器形を把握できる上に残存率も高い。判読できる銘は「×」5点・「木」4点（いずれも一点は不確実）で特に地点・層別の特徴は把握できなかった。

以上のことから考えられることをまとめたい。まず、総量91.804kgという出土量から意図的に投棄されたものと判断される。少しずつ主体となる地点を変えて大きく3時期にわかれるようである。投棄された土器は坏類主体で完形個体が多いのに対し、甕類は出土量が少なく、器形を復元できる個体は見られなかった。また墨書土器以外特殊な遺物は出土していない。層別にみていくと、下層は墨書土器を含め完形個体は少なく小破片が多い。反対に中部・上部は遺物総量が多く完形個体も増える。墨書土器も器形の把握できるものが出土する。同じ投棄でも、中部・上部は廃棄というより、意図的に投棄した祭祀的意味合いの強い可能性がある。須恵器と土師器の層位毎の出土量変化の相違は、時期的な土器組成の違いを反映しているのではないと思われる。しかし、その他の遺構（竪穴住居跡）などで、これらの組成比をもとめておらず、今後の検討課題としたい。「木」銘墨書土器は台太郎遺跡内から特徴的に出土するものであり、集落の西端に位置する本遺構への土器の投棄は台太郎遺跡住む人々によって行われていたものと推測される。（中村）

表9 溝跡出土遺物重量一覧

〈登録遺物一覧〉

※重量（g）

		I a		I b		I c		I d		II a		II b		合計	
		点数	総重量	点数	総重量	点数	総重量	点数	総重量	点数	総重量	点数	総重量	点数	総重量
登録	掲載	39	4921	32	3860	41	4285	8	910	19	4688	12	820	151	19484
	不掲載	65	2420	272	11058	0	0	0	0	0	0	2	50	339	13528
(小計)		104	7341	304	14918	41	4285	8	910	19	4688	14	870	490	33012
登録外	不掲載	—	4415	—	17114	—	16034	—	232	—	7946	—	13051	—	58792
(合計)		—	11756	—	32032	—	20319	—	1142	—	12634	—	13921	—	91804

〈地点別総重量一覧〉

※重量（g）

地点	I a	I b	I c	I d	II a	II b	総重量
A-A'・B-B'間	4153	5400	3313	50	1725	1143	15784
B-B'・C-C'間	1718	3609	1766	137	2943	1728	11901
C-C'・D-D'間	2577	12766	8737	295	2930	6346	33651
D-D'・E-E'間	25	411	152	0	128	120	836
E-E'・F-F'間	20	136	138	0	1007	270	1571
F-F'・G-G'間	0	115	15	0	59	105	294
その他	2263	9595	6198	660	3842	4209	27767
(合計)	11756	32032	20319	1142	12634	13921	91804

〈層別総重量一覧〉

※重量（g）

層位	I a	I b	I c	I d	II a	II b	総重量
上層	1623	9875	5980	7	2169	3146	22800
中層	5526	8673	5411	30	5044	2234	26918
下層	1275	3606	2682	320	1306	4130	13319
その他	3332	9878	6246	785	4115	4411	28767
(合計)	11756	32032	20319	1142	12634	13921	91804

〈地点・層別重量一覧〉

※重量（g）

地点	上層	中層	下層	その他	総重量
A-A'・B-B'間	0	12852	2151	781	15784
B-B'・C-C'間	240	5806	1567	4288	11901
C-C'・D-D'間	13646	8260	9601	2144	33651
F-F'・G-G'間	646	0	0	2055	2701
その他	8268	0	0	19499	27767
(合計)	22800	26918	13319	28767	91804

3. R A 580 竪穴住居跡出土関東系土師器について

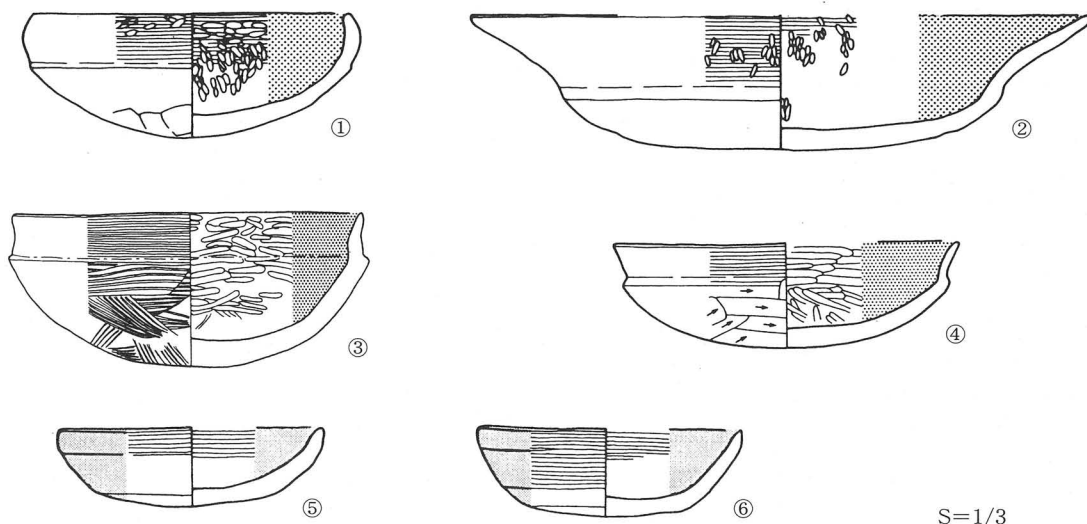
はじめに

ここでは R A 580 竪穴住居跡から出土した関東系土師器¹⁾について若干の検討を加える。

1970年代、郡山遺跡（宮城県仙台市）・清水遺跡（宮城県名取市）など宮城県における発掘調査において東北地方のものとは明らかに異質な土師器がずるようになった。これらの系譜については、報告当初から関東地方古墳時代後期に位置づけられる土師器と器形や器面調整が共通していると認識されていた。そして、関東地方で生産されるものと類似する土器が遠く宮城県で出土することについて、①「関東地方で製作されたものが直接搬入された」、②「関東地方から移動してきた人々が東北地方で製作した」、③「東北地方の人々が模倣して製作した」という3つの可能性があげられている（宮城県教育委員会1981）。なお余談であるが、清水遺跡の調査報告書では、これらの土器に関東系土師器（ないしは関東系土器）という名称は与えられていない。

その後、開発に伴う大規模な発掘調査が行われ、関東系土師器の類例が増加すると、その搬入の背景について検討が加えられるようになる。今泉隆雄は、関東系土師器が宮城県で出土することについて、上の①～③のうち、当該期に交易による土器の搬入は考えにくいとし、①をさげ、②の可能性が高いとし、その場合、自発的な移動というよりも柵戸など「国家の政治的強制」によるものとした。つまり、関東系土師器は関東地方からの移民によって生産されたものとしたのである（今泉1989）。関東系土師器の中には宮城県域のものとは明らかに異なる精製された胎土が使用されたものがあり、関東地方からの搬入品と推測されているものもあるが、下飯田遺跡出土の関東系土師器のように、蛍光X線分析によってその胎土が在地の土師器と同じであることが判明している事例もある（仙台市教育委員会1995）。

近年では単に出土した遺跡の分布のみを問題にするのではなく、関東系土師器が単品で出土しているのか、あるいは食膳具のみなのか煮炊具とセットで出土しているのかといった出土傾向を細かく分類し、さらに関東系土師器のみが出土するのか、関東系土師器が主体となって少量の在地の土師器と共伴するのか、あるいは



第110図 岩手県出土の関東系の土師器（2は除く）

はその逆なのかといった共伴関係も厳密に考えられるようになってきた。そして、これらの分析結果をふまえ、さらに遺跡の位置や性格を加味して検討し、「陸奥国における律令制の北進のあり方」の考察材料にされるまでに至っている（村田2000）。また、牡鹿柵・郡家推定地である赤井遺跡（宮城県矢本町）では官衙の成立に関して、関東系土師器・在地の土師器・東北地方北部の土師器のそれぞれの変遷と遺構とを有機的に結びつけて検討が加えられている（佐藤2003）。

以上、関東系土師器の研究史をおおまかにまとめた。それによれば、関東系土師器は、陸奥国における律令制の定着のために関東地方から東北地方へと移住させられた人々、すなわち移民にかかわるものと理解されている。問題は、R A 580 堅穴住居跡出土の関東系土師器をそのような文脈で理解することができるかどうかである。以下、検討してみよう。

1 岩手県出土の関東系土師器（第110図）

関東系土師器は岩手県でも若干の出土があり、ここではそれらを概観する。なお、これらには関東地方の鬼高式土器に特徴的な須恵器を模倣したものも含めている。これらについては関東系土師器の範疇でとらえるべきでないという考えもあるが、今回の考察では非在地土器ということで関東系土師器に含めている。

水沢市膳膳遺跡 E-7 住居址-1 ①

4.5×4.7mの堅穴住居跡の床面から出土した土師器坏である。口径12.6cm、器高4.9cmで、体部は内湾しながら立ちあがる。併出した在地的なものと考えられる坏②がきつく外反しながら立ちあがるのと比べれば、器形の違いは明らかである。また、底部外面の器面調整がケズリである点にも関東系土師器の特徴を見出せる。ただ、内面はヘラミガキによって器面調整された後、黒色処理を施すという在地的技法が用いられている。時期については、調査担当者は「西暦700年前後を中心とするその前後」とし（財）岩手県埋蔵文化財センター1982）、利部修は①の形態が舞台遺跡（埼玉県松山市）の5号住居址から出土したものと類似し、それが6世紀末～7世紀初頭と推定されていることから、「7世紀初頭頃」としている（利部1993）。

久慈市上野山遺跡 B J 21 住居址 ③

不定形の堅穴住居跡の北東隅の埋土から出土した土師器坏である。口径13.7cm、器高7.0cmで、器形は丸底の底部からゆるやかに内湾しながら立ちあがり、体部と口縁部の間に明瞭な段が形成されている。口縁部は段の上部からほぼ直立して端部にいたっている。このような器形は関東地方の鬼高式土器に見られるもので、須恵器坏身を模倣したものとされている。ただ、内面はヘラミガキの後黒色処理を施されており、在地的の様相を呈している。本資料がいわゆる須恵器坏身を模倣した関東地方の鬼高式土器に類似することについては「単なる偶然」とするむきもあるが（羽柴1995）、ここでは関東系土師器ととらえておく。時期については、報告者は7世紀末ごろとしている一方で（財）岩手県埋蔵文化財センター1983）、「目安にすぎない」と断ったうえで8世紀前半頃とする見解もある（羽柴1995）。なお、底部外面には靱痕がみられ、靱が散乱するような環境のもとで製作されていたと推測される。

盛岡市台太郎遺跡第18次調査 R A 180 ④

3.8×4.5mの堅穴住居跡から出土した土師器坏である。口径13.6cm、器高4.2cmを計り、器形は③と同じように丸底の底部からゆるやかに立ちあがった後、体部と口縁部の間に段を形成し、口縁部は外反している。また、器面調整も口縁部外面がヨコナデ、内面がヘラミガキの後黒色処理という点も共通している。ただ、外面の段より下がヘラケズリである点が相違しており（③はハケメ）、こちらの方が鬼高式土器に近い。時期については、調査担当者は8世紀前半としている（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2001）。

盛岡市台太郎遺跡第23次調査 R A 235 (⑤・⑥)

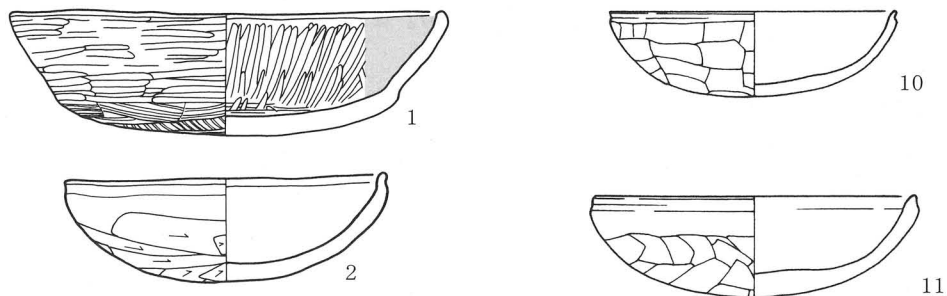
5.6×6.0mの竪穴住居跡から出土した2点の土師器坏である。⑤は口径10.4cm、器高3.1cm、⑥は口径10.5cm、器高3.4cmとほぼ同じ法量である。また、ともに内外両面に赤色顔料が塗彩されていることも共通する。器面調整は、体部が摩滅のため不明とせざるを得ないが、口縁部は内外両面ともにヨコナデが施されている。土器の色調は盛岡市周辺をよくみられるものよりはやや赤みがかった。なお、赤色塗彩が施された関東系土師器はそれほど例が多いわけではないが、御駒堂遺跡（宮城県志波姫町）から出土した関東系土師器に見られる（第112図左側、上から2番目）。時期について、調査担当者は8世前半としている。

小結 以上、岩手県出土の関東系土師器について概観したが、ほとんどが単品の出土であることが判明した。村田晃一は、宮城県出土の関東系土師器の出土傾向を論ずるなかで、食膳具のみの出土で量が少ない場合、土器だけの移動を考慮しておく必要があるとしている（村田2000）。これをふまえれば、これら岩手県出土の関東系土師器も同様に他所から土器のみがもたらされたものであると推測される。したがって、これら関東系土師器が関東地方から現在の岩手県域に人々が移住したことを示す資料とはなり得ない。ただし、台太郎遺跡第23次調査で出土したものは、造りが粗雑で口縁部のヨコナデも整形のために行われたというよりもヨコナデのためにヨコナデを行ったという印象を受け、体部から底部にかけてのケズリもあまりなされなかったようである。このことからあるいは関東系土師器をまねて在地で製作されたものと判断される。いずれにせよ、関東地方からの移民を示す資料とはならないことには変わりはない。

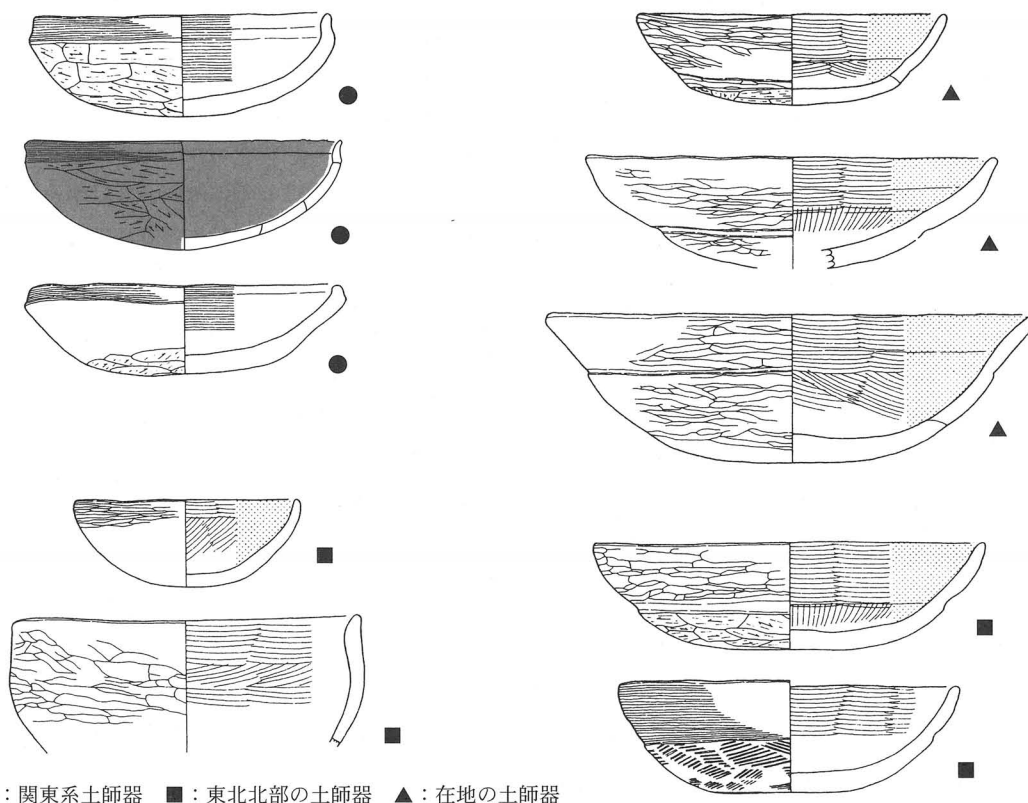
2 R A 580竪穴住居跡の検討

位置 D区-1 F21 i グリッドで検出された。この地点は台太郎遺跡推定範囲の東側に位置している。台太郎遺跡の竪穴住居跡は、時代をおおまかに奈良時代以前と平安時代とに分ければ、奈良時代以前ものは東側に多く、平安時代ものは西側に多くみられる。後述のようにR A 580竪穴住居跡は7世紀中頃から末に位置づけられ、一応はこの傾向と合致しているといえよう。

規模 3.7×3.8mとほぼ正方形で隅丸を呈し、西壁の南側が若干外に張り出している。床面積は、軸長を単純に乗じた場合、14.1㎡となる。台太郎遺跡第15次調査と第18次調査で検出された奈良時代の竪穴住居跡30棟を分析した結果によれば、その規模は20㎡以下、20～40㎡、40㎡以上の3つに分けられるという（財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2003a）。そして、小型の20㎡以下のものが最も多い。規模の上では台太郎遺跡でよく見られる竪穴住居跡といえよう。



第111図 RA580出土土師器坏（左）と熊野遺跡第60次調査1号住居出土土器（右）



●：関東系土師器 ■：東北部の土師器 ▲：在地の土師器
 第112図 御駒堂遺跡第12号住居跡出土土器

軸方向 台太郎遺跡第23次・第26次で検出された奈良時代の竪穴住居跡の軸方向の検討結果によれば、当該期の軸方向はほとんどが北西方向となっているという（助岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003 b）。R A 580竪穴住居跡の軸方向はN-35°-Wであり、この点でも台太郎遺跡で検出される奈良時代以前の竪穴住居跡と大差ない。

カマド 北西壁の中央よりやや北側に設けられており、壁より突出していない。袖は削り出した地山に褐色シルトなどが貼り付けられたもので、礫や土師器甕といった芯材は利用されていない。白色粘土が貼り付けられた痕跡は現状では見出せなかった²⁾。煙道は掘り込み式によって構築されていると思われる。煙出し部分と推測される部分が攪乱されているため推定値だが、壁からの距離は0.75mでなる。以上のことから、R A 580竪穴住居跡のカマドは台太郎遺跡でよく見られる形態のものといえよう。

小結 位置・規模・軸方向・カマドを検討した。それによれば、R A 580竪穴住居跡は同時期の台太郎遺跡における一般的な竪穴住居跡と変わらず、遺構の面からは特に関東地方的特徴を見出すことはできなかった。

3 出土土器の検討

R A 580竪穴住居跡からは9点の土師器が出土している（第66・67図）。これらは3が床面よりやや浮いた状態で出土した以外はすべて床面から出土している。また、3以外は西側の区画に集中している。坏である1・2と片口である3以外はすべて甕で、破片で出土しているが、そのひとつのまとまりはほとんど接合し、残存率が高い。これらのことから壊れたものが投げ込まれたというよりは、R A 580竪穴住居跡で使用されていたものが何らかの事情でそのまま廃棄されたものと考えられ、1～9は一括性の高いものである。特に

1と2とは入れ子状をなして出土しており、同時に使用されていたことは確実である(第10図)。

関東系土師器 2は、体部に段を持たず、器面は内面がナデ、外面がヘラケズリによって調整され、口縁部には稜が見られ、胎土が橙色という特徴を持つことから、関東系土師器とされるものである。ただし、関東系土師器が多く出土している宮城県で出土しているものに比べれば、特に口縁の立ち上がりの部分において違いがみられる。すなわち、宮城県出土のものはかっちりとした印象を受けるのに対し、2は厚みをおびており、やや野暮ったい印象を受ける。さらに、内面に暗文が見られない。また、胎土は宮城県域で出土している関東地方で製作されたと考えられているものと比べるとかなり粗いものを使用されているが、宮城県域で製作されたものと変わらない。また、ケズリによって調整された底部は宮城県域のものとは大差はない。これらのことから、2は宮城県域で製作されたものと判断される。時期はこれと同じような器形のものも多く出土する北武蔵地域(現在の埼玉県域)のものを参考にすれば(例えば埼玉県岡部町熊野遺跡出土土器〈第111図3・4、埼玉県岡部町教育委員会2002〉)、7世紀後半ごろのものと考えられる。

在地の土師器 1は坏であるが、口縁部が開き気味で体部下半の内外両面に段を持ち、丸底であり、緻密なヘラミガキが施されており、内面には黒色処理が施されている。4～7は長胴甕、8・9は球胴甕であるが、いずれも口縁端部は丸みを帯びず平坦で、器面調整はヘラミガキとハケメが併用されている。底部は突出して台状をなしているが、内面は丸くなっている。これらはいずれも東北地方北部の坏あるいは甕の特徴であることから、1・4～9は在地で生産されたものと考えられる。また、3は器形としては普遍的なものではないが、内外両面とも綿密なヘラミガキを施されており、東北地方北部のものと考えて差し支えない。時期については4・5・8・9から7世紀中ごろ～後半にかけてのものとして判断される。

小結 R A580竪穴住居跡出土土器を簡単に検討したが、関東系土師器である2以外はすべて東北地方北部の特徴を持つことを確認した。また、両者に年代観の上で矛盾することはない。

4 関東系土師器出土の意義

前節までの検討の結果、R A580竪穴住居跡には遺構・遺物の両面(ただし、関東系土師器は除いて)から関東地方と何らかの関連を有しているとはいえないことが明らかになったものと思われる。すなわち、当竪穴住居跡に起居していた人々は関東地方から移動してきたわけではなく、もともと台太郎遺跡周辺の在地の、少なくとも東北地方北部で活動していた人物と判断される。つまり、本遺跡から出土した関東系土師器は現在の関東地方からの移民が直接持ち込んだものではないようである。

とすれば、R A580竪穴住居跡出土関東系土師器は単品で出土していることから、他の岩手県出土の関東系土師器と同様に、土器のみが移動してきたものと考えられる。では、この関東系土師器はどこから移動してきたのであろうか。

そこで参考になるのが、宮城県域において関東系土師器が出土している遺跡からは少数ながら東北北部の土器が出土しているという事実である。村田晃一は宮城県域における4世紀～8世紀の東北地方北部(ないしは北海道)と交流を示す遺構や遺物を集成しているが(村田1997)、そのうち7世紀半ば以降のもので関東系土師器が出土している遺跡として郡山遺跡(仙台市)・名生館遺跡(古川市)・御駒堂遺跡(志波姫町)・色麻古墳群(色麻町)があげられる。また、牡鹿柵・郡家推定地である赤井遺跡(矢本町)では3つの群の関東系土師器とともに2群に分けられる東北北部の土師器が出土している。このように宮城県域においては関東系土師器が出土している遺跡では必ずといっていいほど東北北部の土師器の出土が確認できるのである。そして、東北北部の土師器が単品ではなく、まとまって出土していることから、上記の遺跡において東

北北部の人が何らかの活動を行っていたことを推測させる。R A 580 堅穴住居跡出土のものと形態的に酷似する関東系土師器が出土している御駒堂遺跡第12号住居跡の遺物群（第112図）の構成をみれば明らかなように、関東系土師器が出土するような遺跡では、在地のもの、東北北部のものが混在しており、これらの地域に出自を持つ人々が混在していたようである。つまり、東北北部の人々は、東北南部において、在地の人々とともに関東地方の人々とも交流を持っていたことになる。そして、こうした人々が何らかの事情で関東系土師器を持ちこんだことも十分に考えられよう。

以上のことからすれば、R A 580 堅穴住居跡から出土した関東系土師器は関東地方から直接移住してきた人々の痕跡を示すものではなく、盛岡市周辺と宮城県域、特に赤井遺跡がある牡鹿地方や御駒堂遺跡がある大崎平野との交流を裏づける資料と評価することができる。これらの遺跡は北上川流域に立地していることから、それを介した活発な交流が想定されるのである。（石崎）

註

(1) ここでいう関東系土師器とは、「7世紀から8世紀中頃まで認められる、在地の「栗圀式土器」とは器形・製作技法が明らかに異なり、同時期の関東地方の特徴を持った土師器のこと」（村田2000）を指す。かつては関東系土器と呼ばれていたが、最近は関東系土師器とする研究者が多いようである。具体的には腰部に段を持たず、器面は内面がナデ、外面がヘラケズリによって調整され、口縁部には稜が見られ（単にヨコナデのみ施されたものもある）、胎土が橙色という特徴を持つものである。

(2) 村田晃一は、燃焼部が壁外に突出し、袖が白色粘土によって構築されるカマドを「関東型カマド」とし、こうした構造のカマドを有する堅穴住居跡から出土する関東系土師器は食膳具のみでなく、煮炊具も伴っていることが多い傾向を指摘している（村田2000）。

参考文献

- 今泉隆雄 1989 「八世紀以前の陸奥国と坂東」（『地方史研究』39-5）
利部 修 1993 「下藤根遺跡出土土師器の再検討」（『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』8）
佐藤敏幸 2003 「律令国家形成期の陸奥国牡鹿地方(1)」（『宮城考古学』5）
羽柴直人 1995 「岩手県九戸地方のロクロ使用以前の土師器」（『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』15）
村田晃一 1997 「陸奥中部における北との交流」（日本考古学協会1997年度秋田大会『蝦夷・律令国家・日本海』）
2000 「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺」（『宮城考古学』2）

(財)岩手県埋蔵文化財センター

- 1982 『水沢市膳性遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第34集
1983 『上野山遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第67集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

- 2001 『台太郎遺跡第18次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第369集
2003 a 『台太郎遺跡第35次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第417集
2003 b 『台太郎遺跡第23次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第415集

埼玉県岡部町教育委員会

- 2002 『町内遺跡Ⅲ』岡部町埋蔵文化財調査報告書第7集

仙台市教育委員会

- 1995 『下飯田遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第191集

宮城県教育委員会

- 1981 「清水遺跡」（宮城県文化財調査報告書第77集『東北新幹線関係遺跡調査報告書』V所収）
1982 「御駒堂遺跡」（宮城県文化財調査報告書第7集『東北新幹線関係遺跡調査報告書』VI所収）

付編 1. 火山灰分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県盛岡市に所在する台太郎遺跡は、雫石川によって形成された河岸段丘上に位置している。これまで継続的に行われた発掘調査から、奈良・平安時代の集落の様相について明らかにされてきている。今回の発掘調査(51次)では、古墳時代末～奈良時代と考えられる竪穴住居跡および平安時代と考えられる竪穴住居跡や溝跡などの遺構も確認されている。

本報告では、平安時代前半と考えられる溝跡覆土中に認められた火山灰(テフラ)と考えられる堆積物を対象に、その性状を明らかにする。また、テフラであった場合、噴出年代の明らかにされている指標テフラとの対比を行い、遺構に関わる年代資料を作成する。

1. 試料

試料は、台太郎遺跡(51次) A区から検出された平安時代前半と考えられる溝跡(R G 498溝跡)覆土上層から採取された火山灰と考えられる堆積物1点である。発掘調査時の所見によれば、当遺構はほぼ東西に延び幅約2mを測る。また、火山灰と考えられる堆積物は当遺構東側と西側で堆積状況が異なり、試料が採取された西側ではレンズ状に堆積する状況が確認されている。試料の肉眼観察の結果、にぶい黄橙色を呈するシルト質砂からなることが確認された。

2. 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

3. 結果

処理後に得られた砂分は、多量の細砂～極細砂径の火山ガラスと多量の軽石から構成される。火山ガラスのほとんどは無色透明の塊状の軽石型であり、少量の繊維束状のものも混在する。また、微量の無色透明のバブル型も認められる。軽石は、最大径約1.5mmで粒径の淘汰は良好、白色を呈し、発泡はやや良好～やや不良である。火山ガラスと軽石の他には、少量の斜長石や斜方輝石、単斜輝石などの遊離結晶や安山岩と思われる岩石片、さらには微量の黒曜石片などが認められる。

火山ガラスの屈折率測定結果を図1に示す。n1.504~1.509のレンジに入り、n1.506~1.507にモードがある。

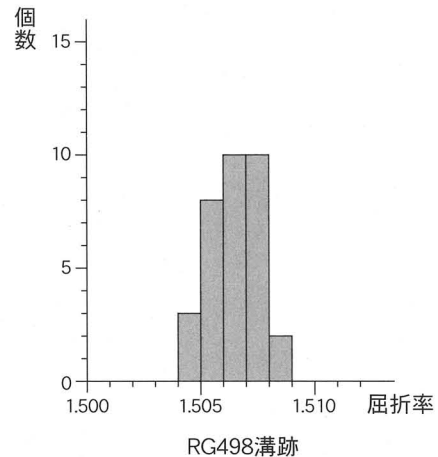
4. 考察

試料は、細粒の軽石および火山ガラスを主体とするテフラである。上述した碎屑物の特徴および台太郎遺跡の地理的位置と、既存の東北地方におけるテフラの産状の研究(町田ほか(1981; 1984)、Arai et al. (1986)、町田・新井(2003)など)との比較から、十和田aテフラ(To-a)の降下堆積物に由来すると判断される。To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている(町田ほか, 1981)。また、その噴出年代については、早川・小山(1998)による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。また、町田・新井(2003)に記載されたTo-aの火山ガラスの屈折率は、n1.496~1.508の広いレンジを示す。このうちn1.502以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とする火山灰層は、南方へは広がらず、十和田周辺とその東方地域に分布が限られるとされている(町田ほか, 1981)。おそらく、今回検出されたテフラは、低屈折率の火山ガラスを含まないTo-aの可能性もある。

したがって、本分析結果によればTo-a噴出時、すなわち10世紀前半頃には溝跡が存在していた可能性がある。ただし、溝跡は、上記したように東西でテフラの堆積状況が異なること指摘されており、地形的にやや低い西側でレンズ状堆積することが確認されている。ただし、これら堆積状況の観察では一次降下物か二次堆積物であるかは不明とされているため、遺構の年代については当遺構内から出土した遺物の年代と合わせて検討することが望まれる。

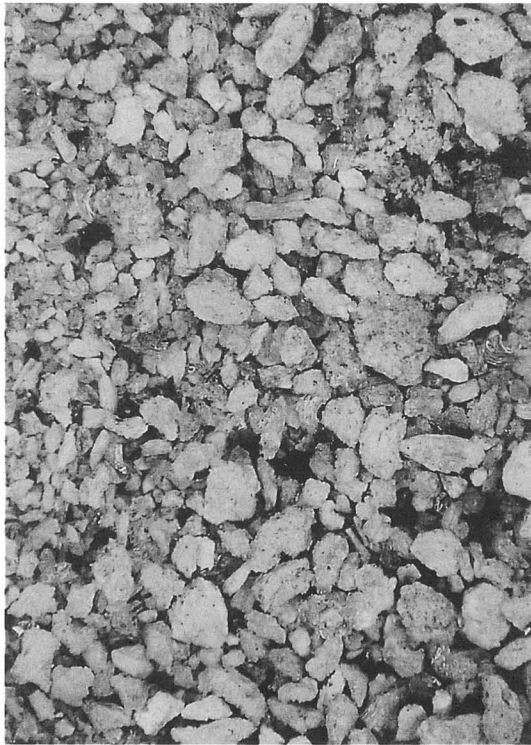
引用文献

- Arai, F.・Machida, H.・Okumura, K.・Miyachi, T.・Soda, T.・Yamagata, K, 1986, Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II -Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido-. Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21, 223-250.
- 古澤 明. 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 123-133.
- 早川由紀夫・小山真人. 1998, 日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日—十和田湖と白頭山—. 火山, 43, 403-407.
- 町田 洋・新井房夫. 2003, 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広. 1981, 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, 562-569.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦. 1984, テフラと日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカタログ—. 渡辺直経(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学. 同朋舎, 865-928.

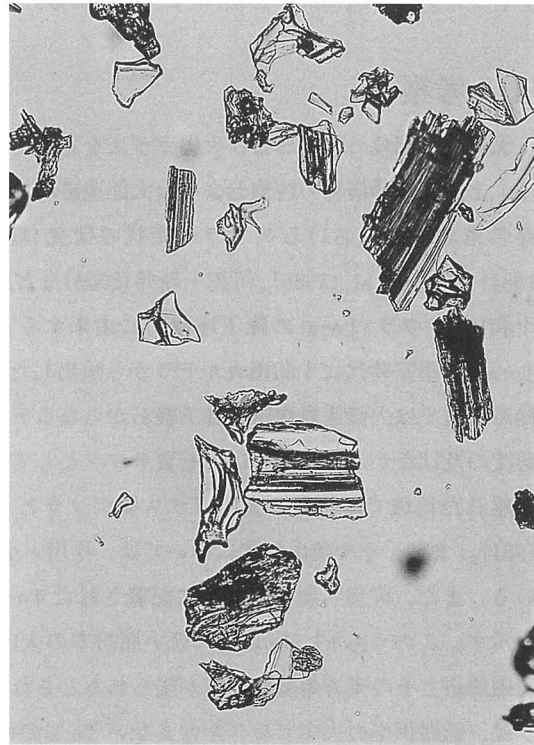


火山ガラスの屈折率測定結果

図版1 テフラ



1. To-aの軽石 (R G 498溝跡)



2. To-aの火山ガラス (R G 498溝跡)

2 mm

0.2mm

1

2

付編2. 樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県盛岡市向中野に所在する台太郎遺跡（51次調査）は、雫石川右岸の沖積地に位置している。発掘調査の結果、縄文時代及び古墳～平安時代に相当する遺構（竪穴住居跡や土坑、溝跡、堀跡、井戸跡、柱穴等）の遺構や、当該期の遺物が多数確認されている。

本報告では、上記した遺構のうち、井戸跡等から出土した木製品を対象に樹種同定を行い、当時の木材利用について検討する。

1. 試料

試料は、A区遺構外から出土した板状木製品1点と、R I 017井戸跡内より出土した井戸枠材1点である。板状木製品は、形状等から斎串や呪符木簡の可能性が示唆されるが、現段階では用途不明な遺物である。

また、年代観についても遺構等に伴わないことから時期不明（平安時代以降？）とされている。一方、井戸枠は、近世以降の井戸跡と推測されており、井戸枠は井戸跡の底面付近より確認されている。この井戸枠は、東西南北4点の部材によって方形に枠組されている。本報告では、各部材の樹種構成を調査する目的から、それぞれより試料採取を行った。したがって、試料は、上記した試料1点と井戸枠4点の計5点である。各試料の詳細は、結果と共に表1に示す。

2. 分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレバートを作製する。作製したプレバートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

結果を表1に示す。板状木製品は針葉樹のスギ、井戸枠4点はいずれも落葉広葉樹のコナラ節に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

表1 台太郎遺跡の樹種同定結果

区域	遺構	時期	種類	樹種
A区	遺構外	平安時代以降	板状木製品	スギ
B区	RI017 井戸跡	中・近世？	井戸枠(東)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			井戸枠(西)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			井戸枠(南)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			井戸枠(北)	コナラ属コナラ亜属コナラ節

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

試料は、遺物の破損を最小限に抑えるために薄い小片で採取したため、木口・板目の切片が作製できず、柁目面のみを観察である。軸方向組織は仮道管を主とし、晩材部の幅は広い。晩材部に樹脂細胞が認められるが、観察した範囲で早材部には樹脂細胞は認められない。放射組織は柔細胞のみで構成され、観察した範囲では仮道管および樹脂道は認められない。分野壁孔はスギ型で1分野に2-4個。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複合放射組織とがある。

4. 考察

板状木製品は、スギであった。スギは、木理が通直で割裂性が高い種類であり、楔等の利用で比較的容易に板を作製することができる。また、これまでに各地で行われた斎串や呪符木簡などの調査事例でも、スギやヒノキ、モミ属等の針葉樹が多く利用される状況が確認されている（島地・伊東、1988）。本遺跡から出土した板状木製品については、樹種のみから斎串や呪符木簡といった判断はできないが、スギの加工性を考慮した木材利用が推測される。

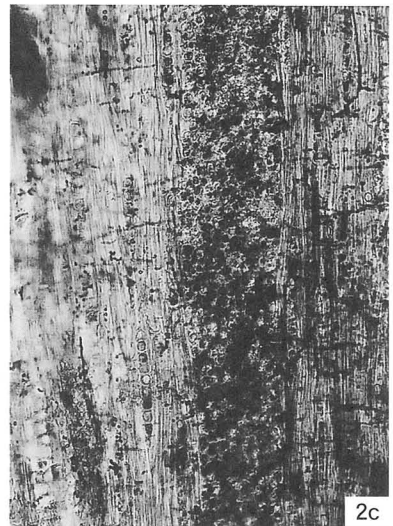
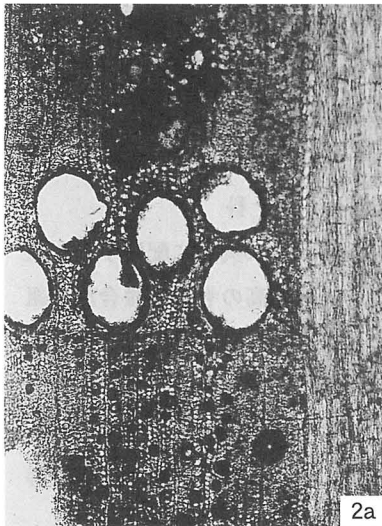
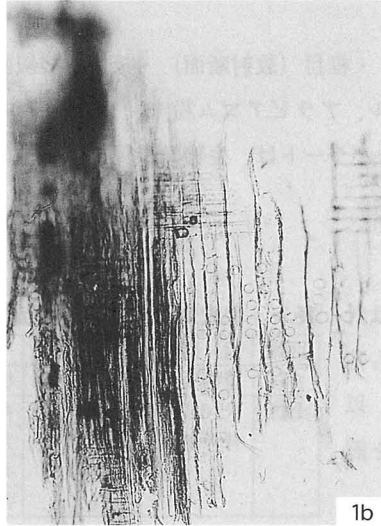
一方、井戸枠は、いずれもコナラ節であった。既存の調査事例（島地・伊東、1988）によれば、井戸枠材にはスギやヒノキ属等の針葉樹材が多く認められている。これは、上記したように、これらの樹種が、割裂性が高く加工が容易であることや、耐水性が高い材質を有するといった要因が考えられる。一方、当遺構の井戸枠材に用いられたコナラ節は、宮脇（1987）の潜在性植生等の所見を参考にすると、本地域で

はコナラやミズナラと考えられ、これらの木材はいずれも重硬で強度が高い材質を有する。これらの材質を考慮した利用が考えられるが、井戸枿材に広葉樹材を用いる例は少なく、このような木材利用の背景については今後の検討課題である。

引用文献

島地 謙・伊東 隆夫（編），1988，日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.

図版1 台太郎遺跡の木材



1. スギ(A区板状木製品)
2. コナラ属コナラ亜属コナラ節(R1017井戸枿(北))
 - a:木口, b:柁目, c:板目

 200 μm: a
 200 μm: b, c

付編 3. 赤色顔料分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県盛岡市向中野に所在する台太郎遺跡（51次調査）は、雫石川右岸の沖積地に位置している。発掘調査の結果、縄文時代及び古墳～平安時代と考えられる遺構（竪穴住居跡や土坑、溝跡、堀跡、井戸跡、柱穴等）や、当該期の土器や時期不明の木製品等の多様な遺物が確認されている。本遺跡では、前報で時期や用途の不明な木製品や井戸枿材の樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得ている。

本報告では、古墳時代末～奈良時代と考えられる竪穴住居跡内から出土した土師器破片の表面に認められる赤色顔料の性状や物質を明らかにするため、自然科学的手法を用いて検討する。

1. 試料

試料は、土師器破片（R A586竪穴住居76、84）2点である。これらの土師器片は、竪穴住居跡（RA586）の床面より出土し、76は土師器坏、84は土師器壺？とされている。これらの肉眼観察では、両試料とも胎土は橙色を呈し、赤色顔料は器面内外面に認められるが、部分的に濃淡や顔料の付着しない部分が認められた。分析試料は、器面外面の赤色顔料が濃い部分を対象に、径3mm程度の範囲から削り取り、分析対象試料とした。

2. 分析

分離した赤色顔料試料を105℃で乾燥させる。その後、メノウ乳鉢で微粉碎し、アセトンを用いて無反射試料板に塗布し、測定試料とする。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製MultiFlex	Divergency Slit：1°
Target：Cu（K α ）	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite湾曲	Receiving Slit：0.3mm
Voltage：40KV	Scanning Speed：2°/in
Current：40Ma	Scanning Mode：連続法
Detector：SC	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：3～45°

3. 結果

土師器外面から採取した赤色顔料試料のX線回折図(図1)からは、両試料中に赤鉄鉱(hematite)のほか、石英(quartz)、曹長石(albite)が含まれることが確認される。これらの試料から赤鉄鉱が検出されたことから、土師器表面に付着する赤色顔料は、ベンガラに由来すると判断される。また、同時に検出された石英、曹長石は、土壌や岩石中に見られる一般的な造岩鉱物であることから、土師器に付着した土壌あるいは土師器胎

土から混入した鉱物の可能性がある。

4. 考察

土師器外面に塗布された赤色顔料は、両試料ともベンガラと判断される。ベンガラは、天然の赤鉄鉱を利用する場合や、含水水酸化鉄を焼成して得られる赤鉄鉱を利用する場合がある。また、赤鉄鉱にはパイプ状構造をなすものと、非パイプ状構造のものがあり、前者については沼沢地などにおいて鉄細菌が生成する含水水酸化鉄(例えば、高師小僧など)が出発物質であることが判明している。このような背景を考慮すると、ベンガラ材料の産出地は無数に存在することとなり、材料産出地を一概に言及することは困難である。ただし、電子顕微鏡観察によってパイプ状構造の有無を確認し、その由来を限定することは可能である。

また、成瀬(1998)によれば、一遺跡において同一時期に使用されるベンガラはパイプ状もしくは非パイプ状のどちらかが支配的な傾向にあることが指摘されている。このことから、今後は、赤色顔料の由来の検証とともに、赤色顔料の構造などを調査することで、赤色顔料の利用についても明らかにできると期待される。

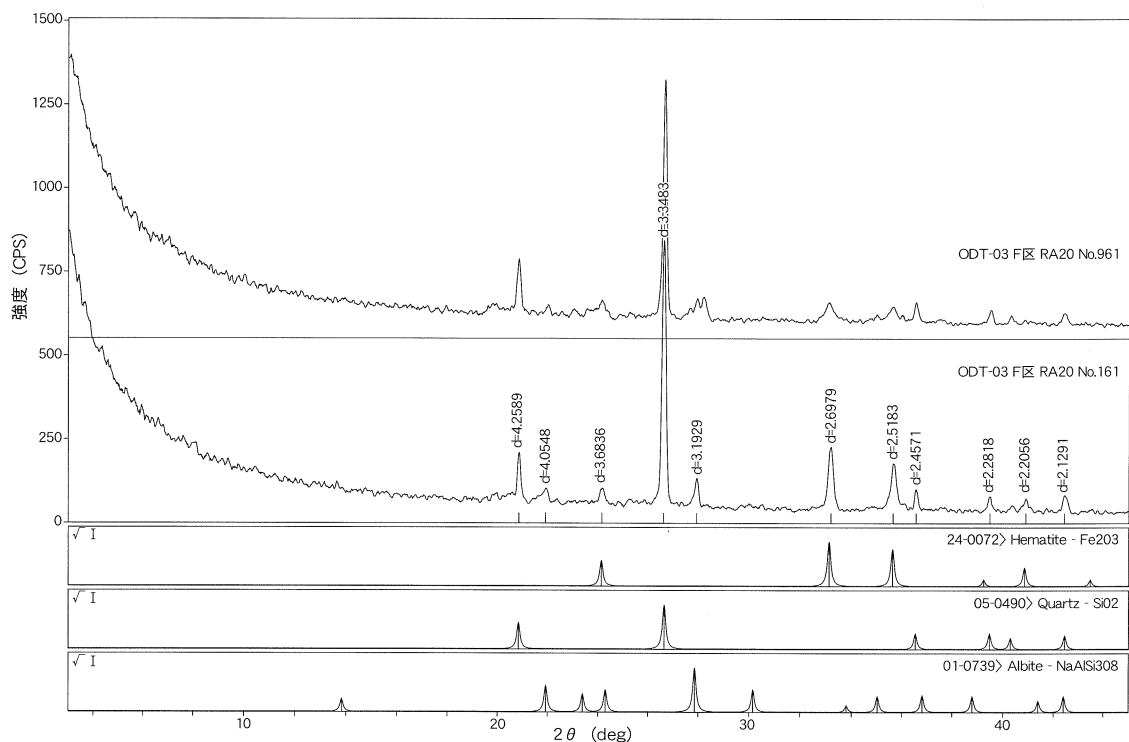


図1. 赤色顔料のX線回折図

引用文献

成瀬 正和. 1998, 縄文時代の赤色顔料 I. 考古学ジャーナル, 438, 10-14.

付編 4. 動物遺存体

熊 谷 賢

(海と貝のミュージアム)

台太郎遺跡発掘調査により動物遺存体が出土しているので報告する。出土した資料は、ウマの歯及び焼骨であり、ほとんどが細片であり種同定できた動物は、ウマ、ニホンジカの2種である。出土内容については第1表に示した。

1. ウマ

R D1166土坑より出土した。出土部位は歯のみである。細片が多く歯種を同定することは困難を極めたが、出土状況写真から推察すると、上顎・下顎の骨体は残存しないが出土した歯はほぼ植立した状態にあり、解剖学的位置を留めていることから、これらの歯片は同一個体のものであり、1体分のウマの頭骨が残存していたものと思われる。

頭骨はその歯列の状況から見て、右側を下に北西方向を向いている。土坑からの出土であることから、埋葬されたウマであると考えられ、出土部位も歯のみであることから、頭部のみを埋葬した可能性もあるが、下顎骨体が残存していないことから体部を構成する部位骨はすべて消失したものである。

出土した歯は、非常に脆くすべて細片であった。これらの細片を可能な限り接合したところ、左上顎切歯? 2点、右上顎切歯? 3点、右下顎切歯? 2点、右下顎後臼歯2点が同定された。雌雄の判別点である犬歯は認められなかった。歯種同定できたものの計測値については、第1表中に示した。年齢については不明であるが、右下顎第2後臼歯の全歯高現存値が64.8mmであることから、西中川駿氏らによる年齢と全歯高の相関を参考に推定すると、下顎第2後臼歯は4才で72.0mm、5才で64.8mmであることから、破碎している部分の長さを考慮しても4~5才の範囲に納まる。また、犬歯が確認されなかったため、メスである可能性と残存しなかった可能性もあるが、仮に本個体がオスの個体であったと仮定すれば、犬歯は未萌出であることが予想され、その萌出時期は4才半からであり、4才から4才半未満であるとも考えられる。いずれにせよ、推測ではあるが本個体は4~5才程度の若い個体である可能性が高い。

2. ニホンジカ

R G498溝跡A-B間上層(48層より上)から、左脛骨遠位端が1点出土している。火を受け灰白色を呈する。破片であり計測はできないが、その大きさから見て若い個体のものであると思われる。詳細は不明である。

このほか、R G498溝跡Cベルト西下層、R G498溝跡C-B間下層、同溝B-C間C中層、D区R A583竪穴住居跡 pp1底面より部位不明の獣骨片が出土しているが、すべて火を受け灰白色を呈した細片である。したがって、ニホンジカ同様詳細は不明である。

第1表 台太郎遺跡動物遺存体出土数表

試料No.	出土地点	種名	部位	数	備考
試料(1)一括	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(1)No 1	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(1)No 2	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(1)No 3	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(1)No 4	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(1)No 5	R D1166	ウマ	右下顎第2後臼歯	1	全歯高(64.8mm)、歯冠長(24.5mm)
試料(1)No 6	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(1)No 7	R D1166	ウマ	右下顎第1後臼歯?	—	白歯片
試料(1)No 8	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(1)No 9	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(1)No10	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(1)No11	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(1)No12	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(1)No13	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(1)No14	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(1)No15	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(1)No16	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(1)No17	R D1166	ウマ	左上顎第1切歯?	1	歯冠長(13.7mm)、歯冠幅計測不可
		ウマ	左上顎第3切歯?	1	歯冠長、歯冠幅計測不可
		ウマ	右上顎第1切歯?	1	歯冠長(15.5mm)、歯冠幅(10.8mm)
		ウマ	右上顎第2切歯?	1	歯冠長(15.7mm)、歯冠幅(11.0mm)
		ウマ	右上顎第3切歯?	1	歯冠長(18.7mm)、歯冠幅計測不可
		ウマ	右下顎第1切歯?	1	歯冠長(13.6mm)、歯冠幅計測不可
		ウマ	右下顎第2切歯?	1	歯冠長(15.3mm)、歯冠幅計測不可
ウマ	切歯片	—			
試料(1)No18	R D1166	ウマ	歯種不明の歯片	—	白歯片
試料(2)	R G 498 A - B 間上層 (48層より上)	ニホンジカ	左脛骨遠位端	1	焼骨 (灰白色)、若い個体
		種不明	部位不明の獣骨片	—	焼骨 (灰白色)
試料(3)	R G 498 C ベルト西下層	種不明	部位不明の獣骨片	—	焼骨 (灰白色)
試料(4)	R G 498 C - B 間下層	種不明	部位不明の獣骨片	—	焼骨 (灰白色)
試料(5)	R G 498 B - C 間C中層	種不明	部位不明の獣骨片	—	焼骨 (灰白色)
試料(6)	R A 583 pp 1 底面	種不明	部位不明の獣骨片	—	焼骨 (灰白色)

数の「—」は細片でカウントできないものを示す。

写 真 图 版

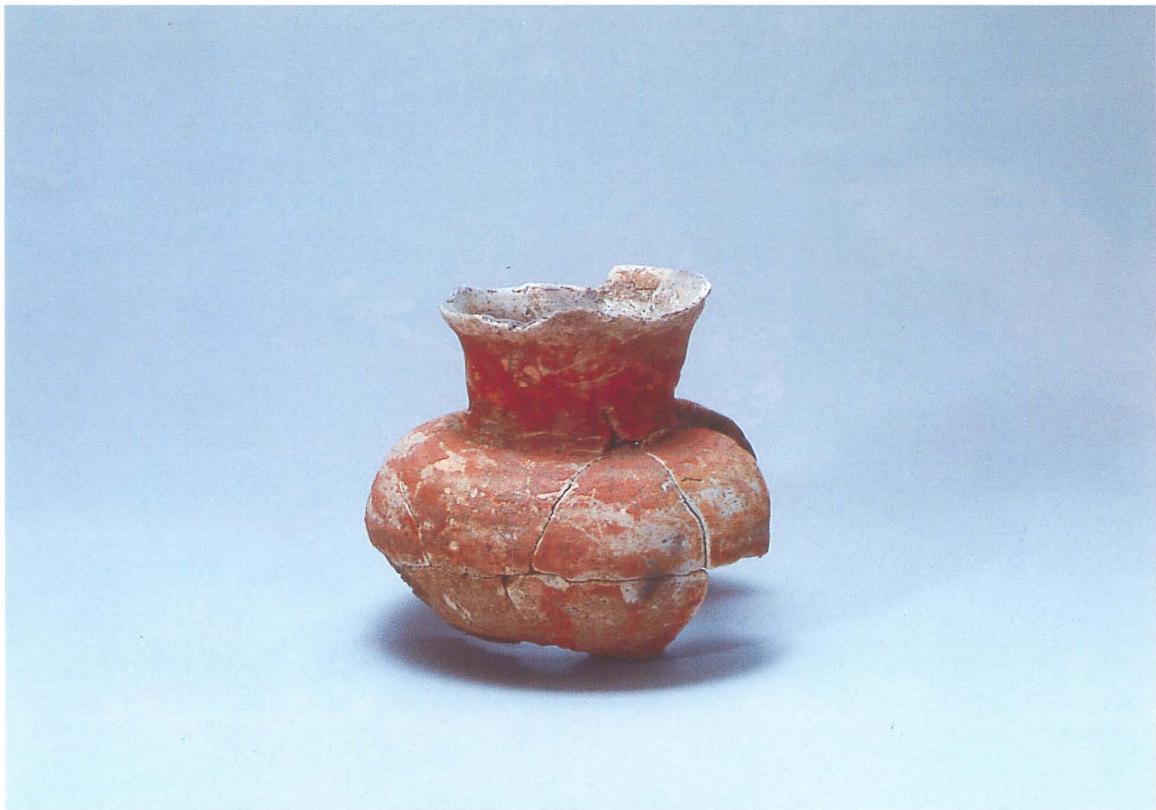


遺物出土状況



出土遺物

写真図版 1 RA580竪穴住居跡

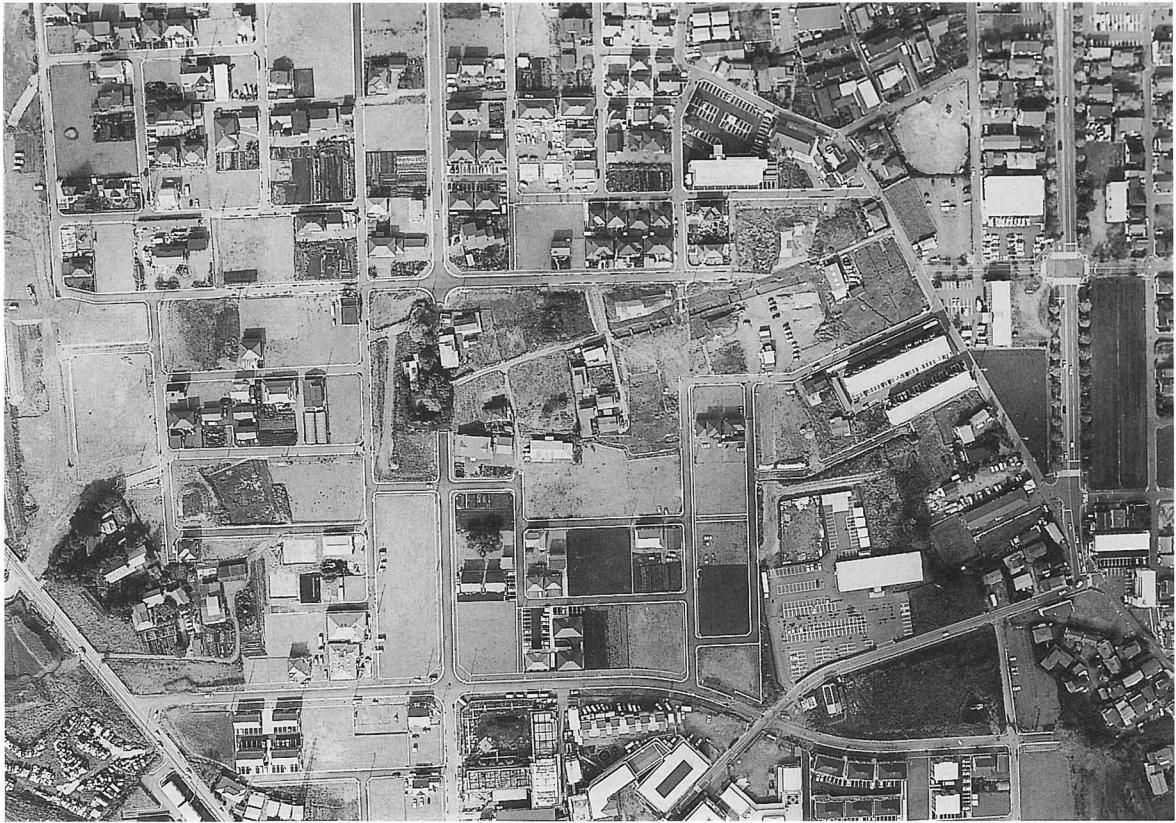


RA586出土遺物



RG498出土遺物

写真図版 2 RA586・RG498出土遺物



調査区全景 (空中写真)



B区全景 (空中写真)

写真図版3 空中写真(1)



C区全景（空中写真）



D区全景（空中写真）

写真図版4 空中写真(2)



E区全景（空中写真）



F区全景（空中写真）

写真図版5 空中写真(3)



調査前風景 (B区)



調査前 (試掘) 風景 (D区)



調査前風景 (E区)



検出 (A区)



検出 (D区)



検出 (F区)



基本層序 (D区)

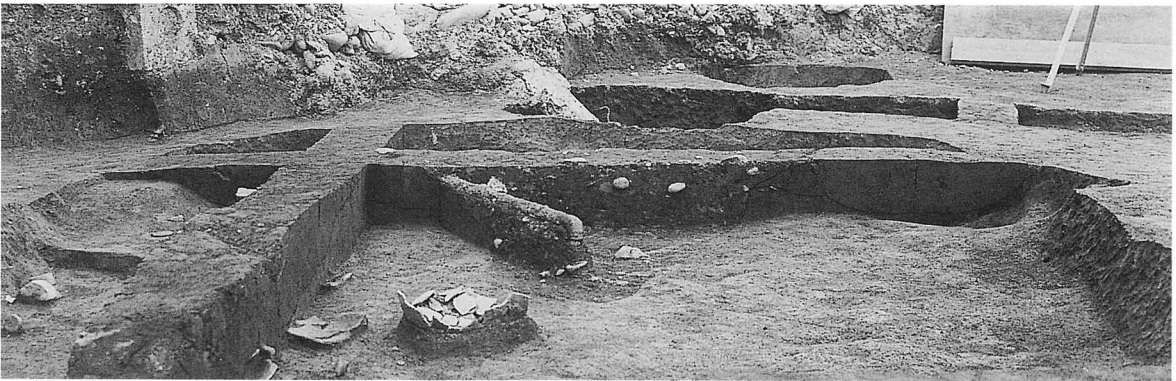


基本層序 (A区)

写真図版 6 調査前風景・検出・基本層序



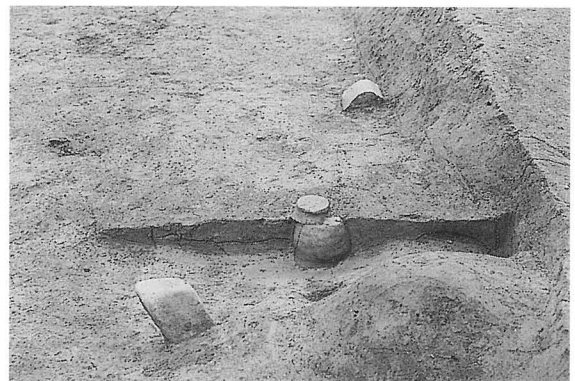
全景（南東から）



断面（南西から）



カマド全景（南東から）

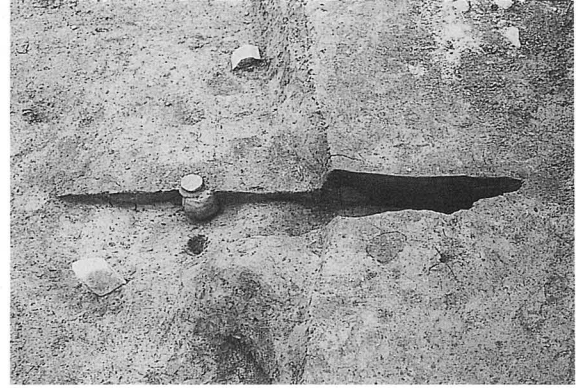


カマド断面（東から）

写真図版 7 RA580竪穴住居跡(1)



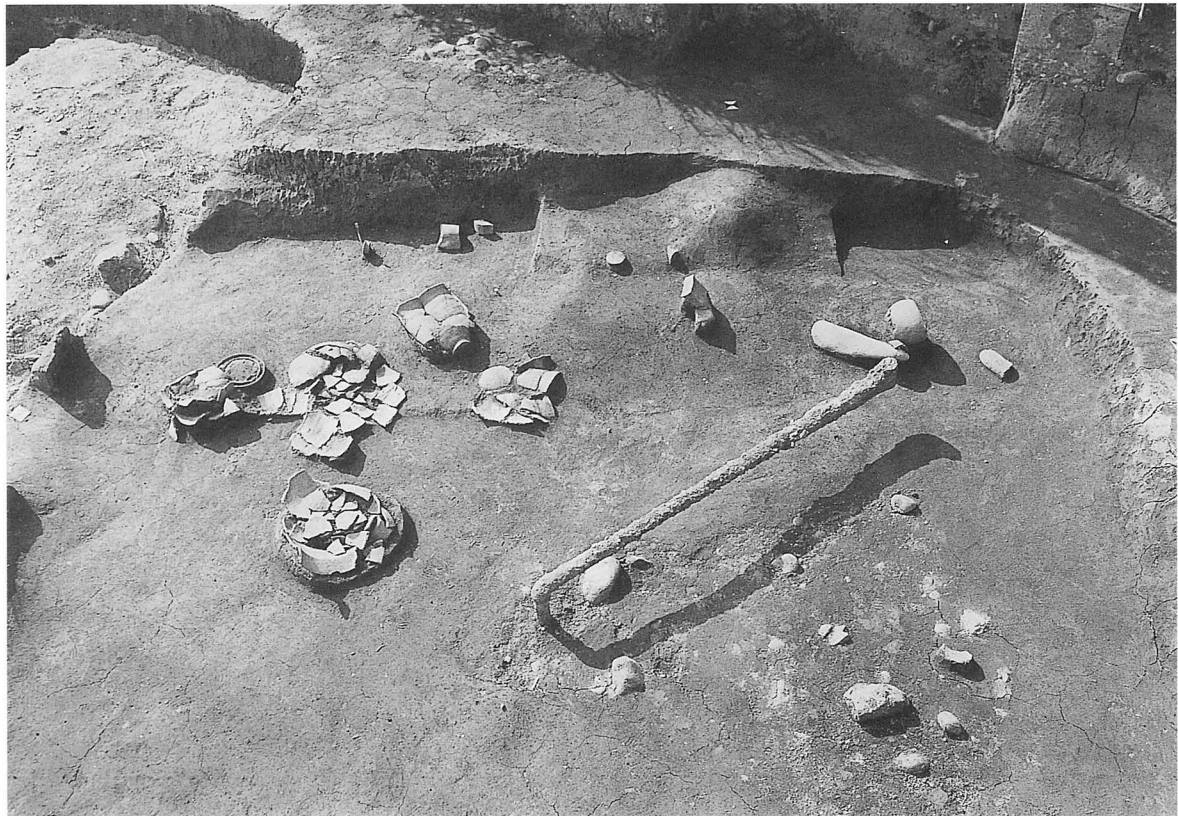
カマド全景（南東から）



カマド煙道断面（東から）



カマド袖断面（南東から）



遺物出土状況（南東から）

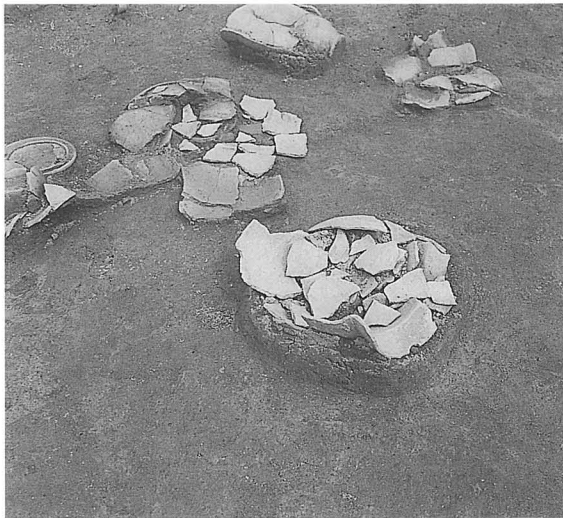
写真図版 8 RA580竪穴住居跡(2)



遺物出土状況 (1・2・6・9・北西から)



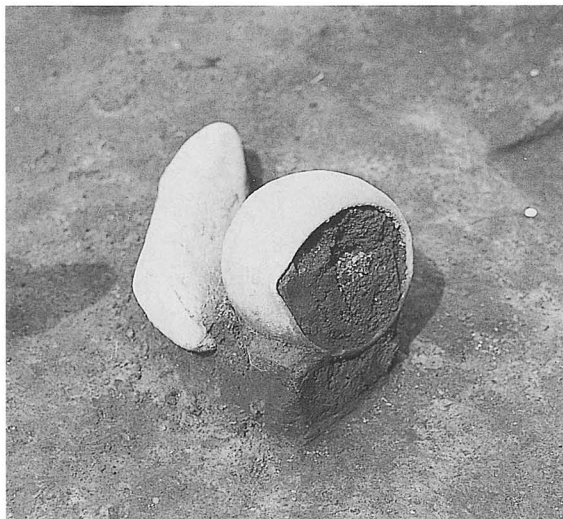
遺物出土状況 (1・2・6・真上から)



遺物出土状況 (8・東から)



遺物出土状況 (4・北西から)



遺物出土状況 (3・北東から)



カマド支脚出土状況 (北東から)

写真図版 9 RA580竪穴住居跡(3)



全景（南から）



カマド遺物出土状況（南から）

写真図版10 RA581竪穴住居跡(1)



断面 (南西から)



新期カマド全景 (南から)



古期カマド全景 (南から)



カマド断面 (南西から)



遺物出土状況 (南から)

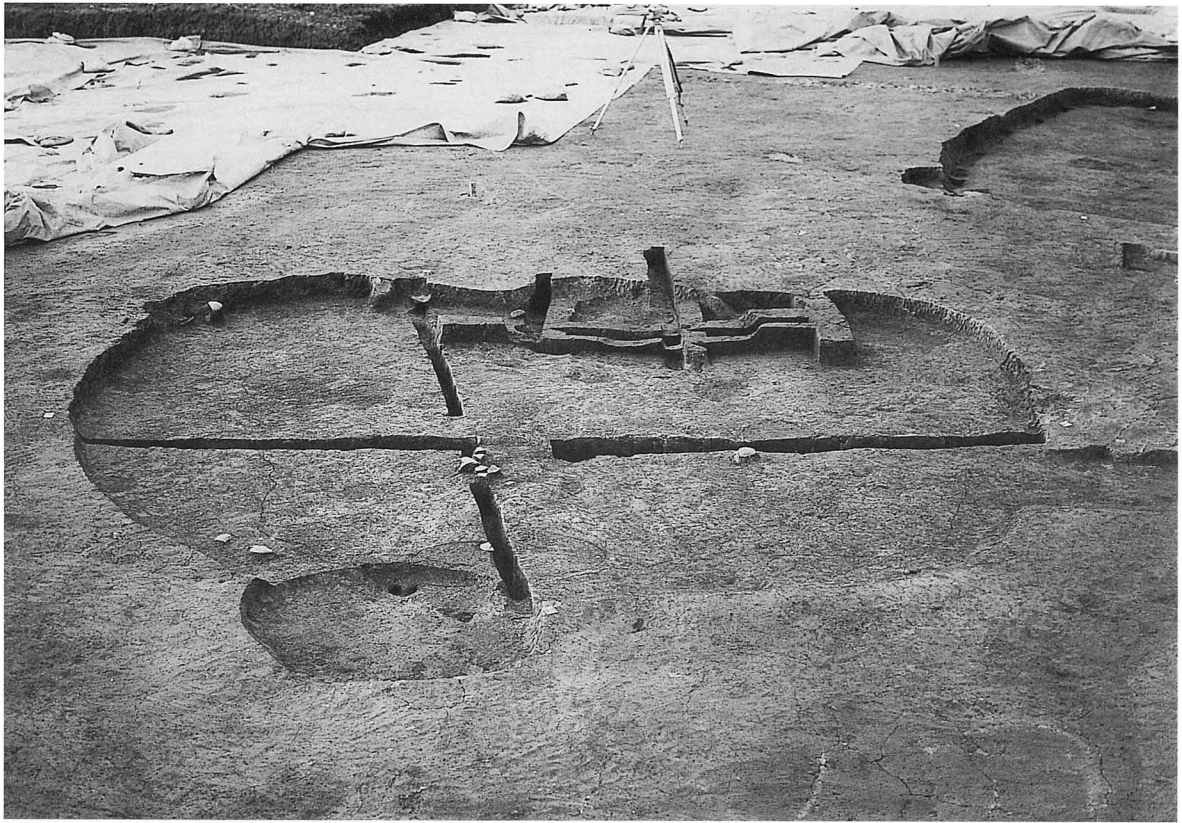


pp4粘土出土状況 (南西から)

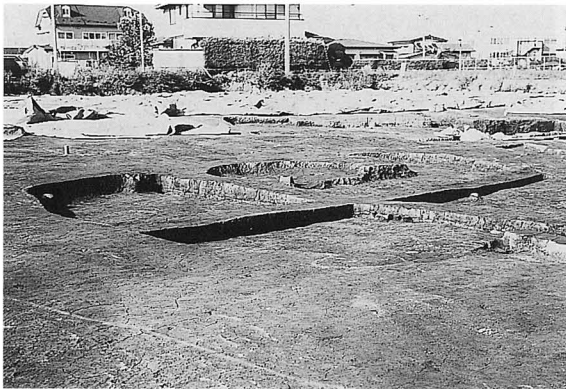


作業風景

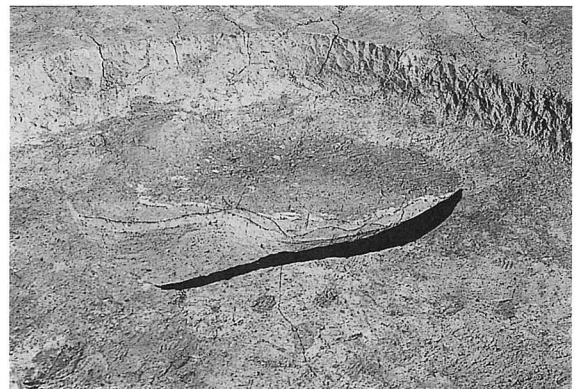
写真図版11 RA581 竪穴住居跡(2)



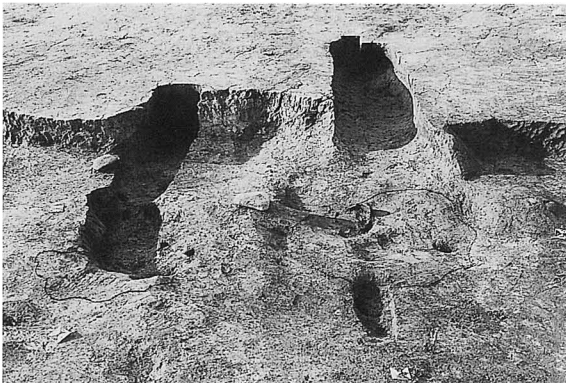
全景（南東から）



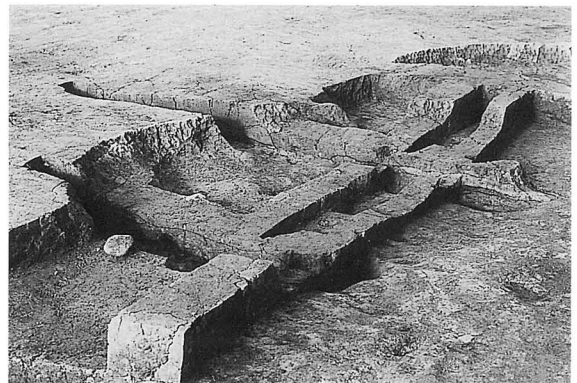
断面（南西から）



DP 1 断面（南から）

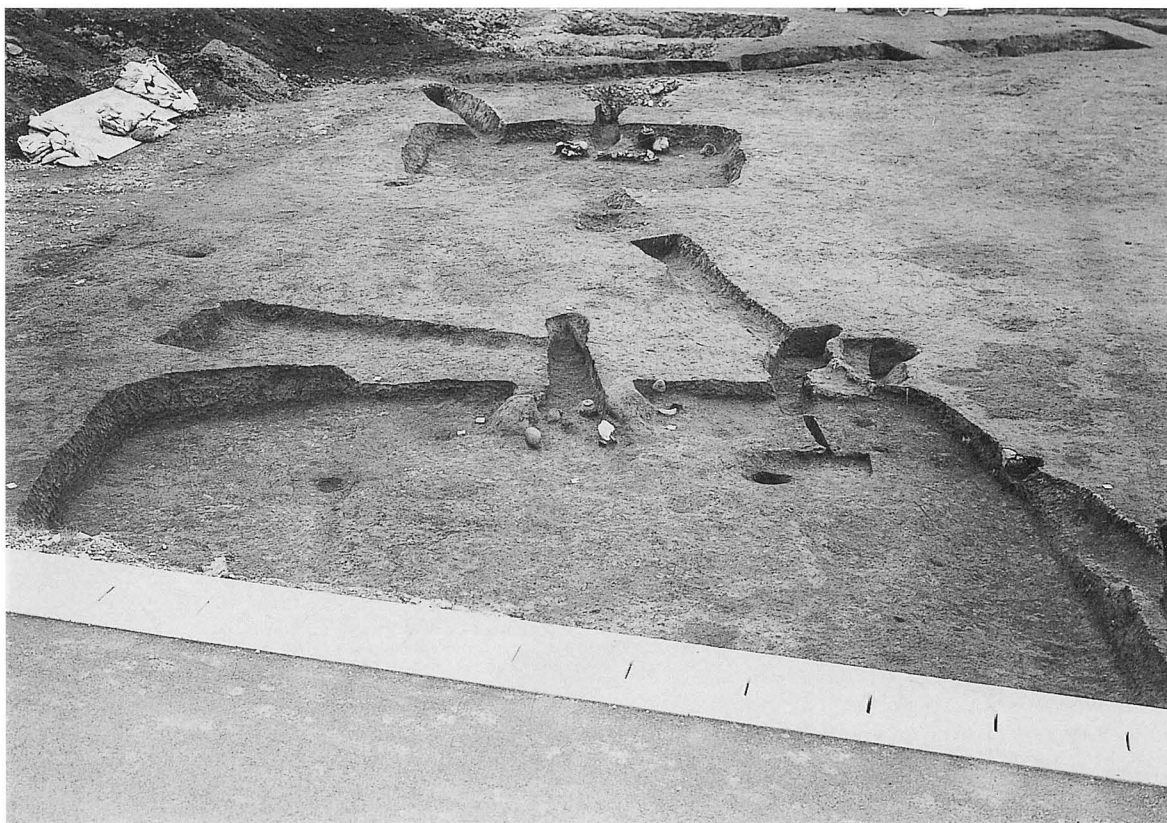


カマド全景（南東から）

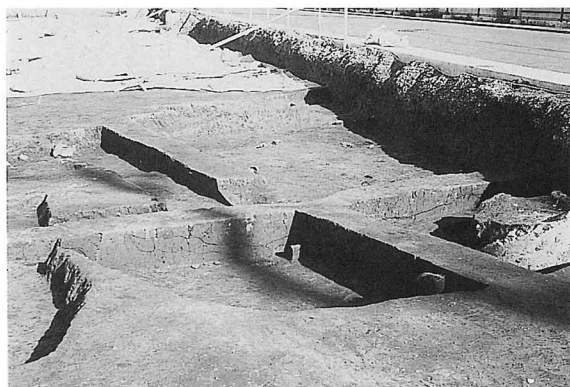


カマド断面（南西から）

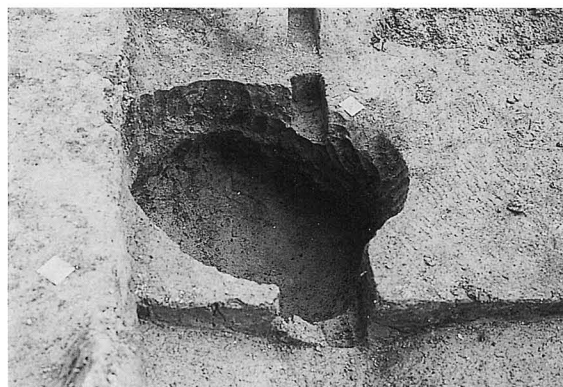
写真図版12 RA582竪穴住居跡



全景（南東から）



断面（西から）



DP8 全景（西から）



カマド全景（南東から）

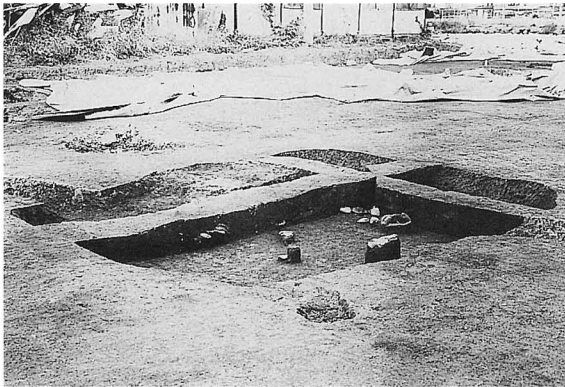


カマド断面（南から）

写真図版13 RA583竪穴住居跡



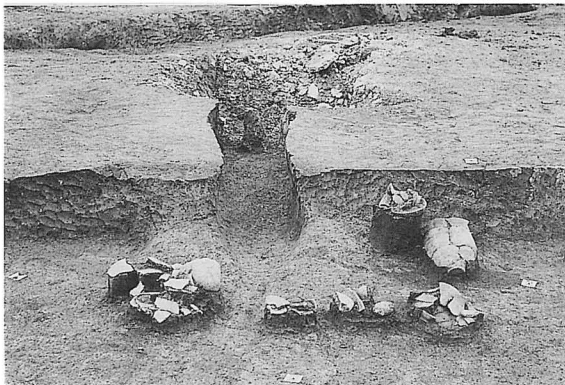
全景（南東から）



断面（南西から）



遺物出土状況（南東から）



カマド全景（南東から）

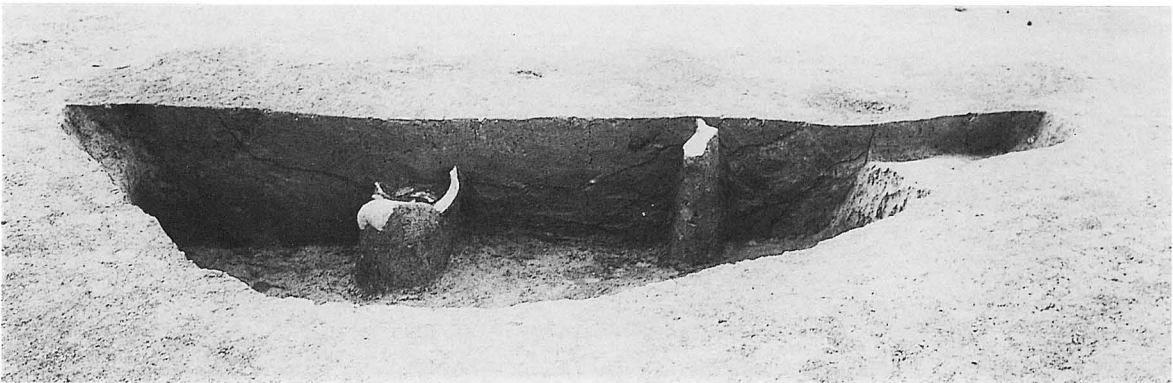


カマド断面（南から）

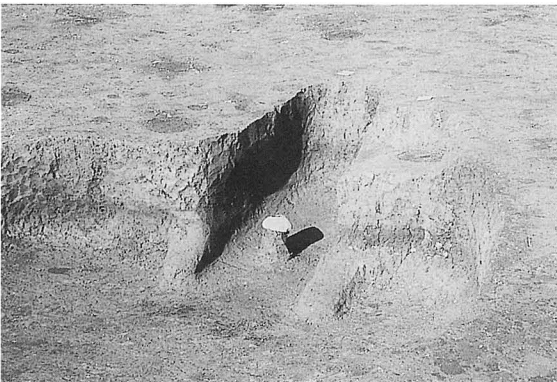
写真図版14 RA584竪穴住居跡



全景（南西から）



断面（南東から）



カマド全景（南西から）



作業風景（職場体験）

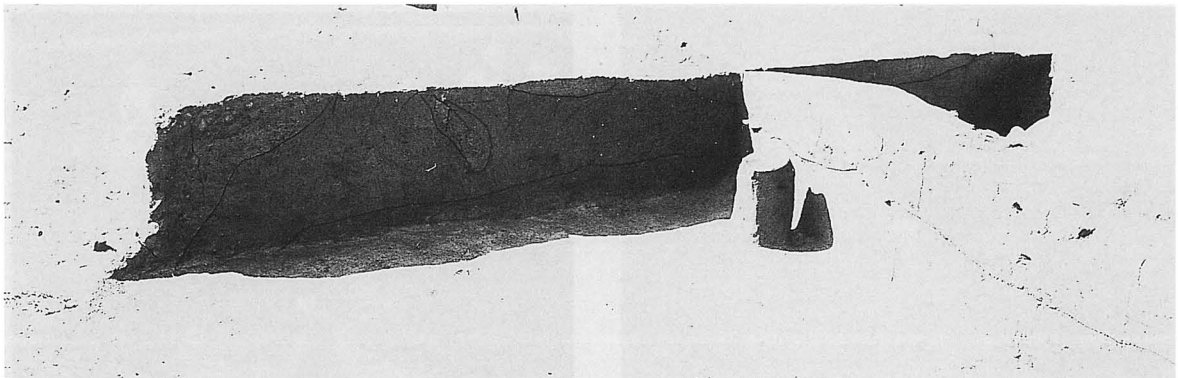
写真図版15 RA585竪穴住居跡



全景（南東から）

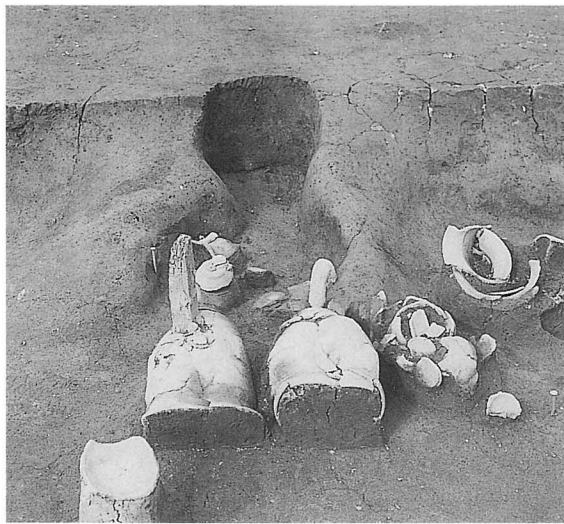


断面（南東から）

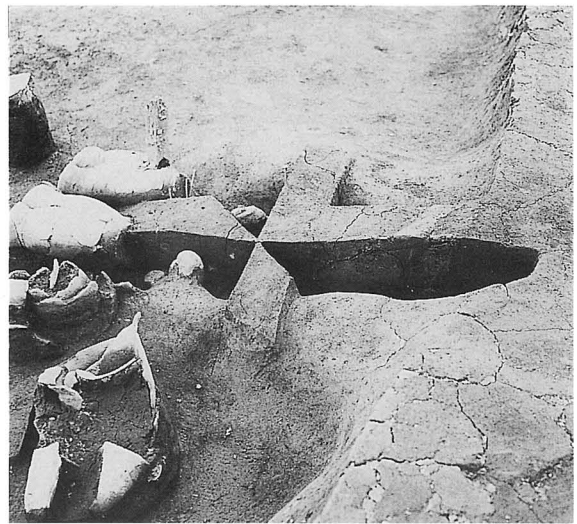


断面（北東から）

写真図版16 RA586竪穴住居跡(1)



カマド全景（南東から）



カマド断面（北東から）



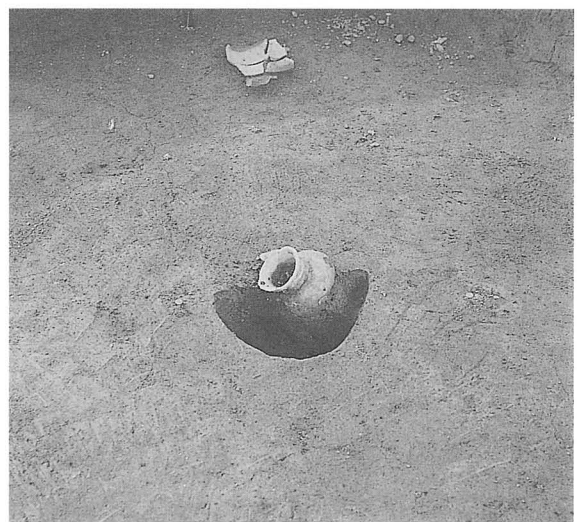
遺物出土状況（南から）



遺物出土状況（南西から）

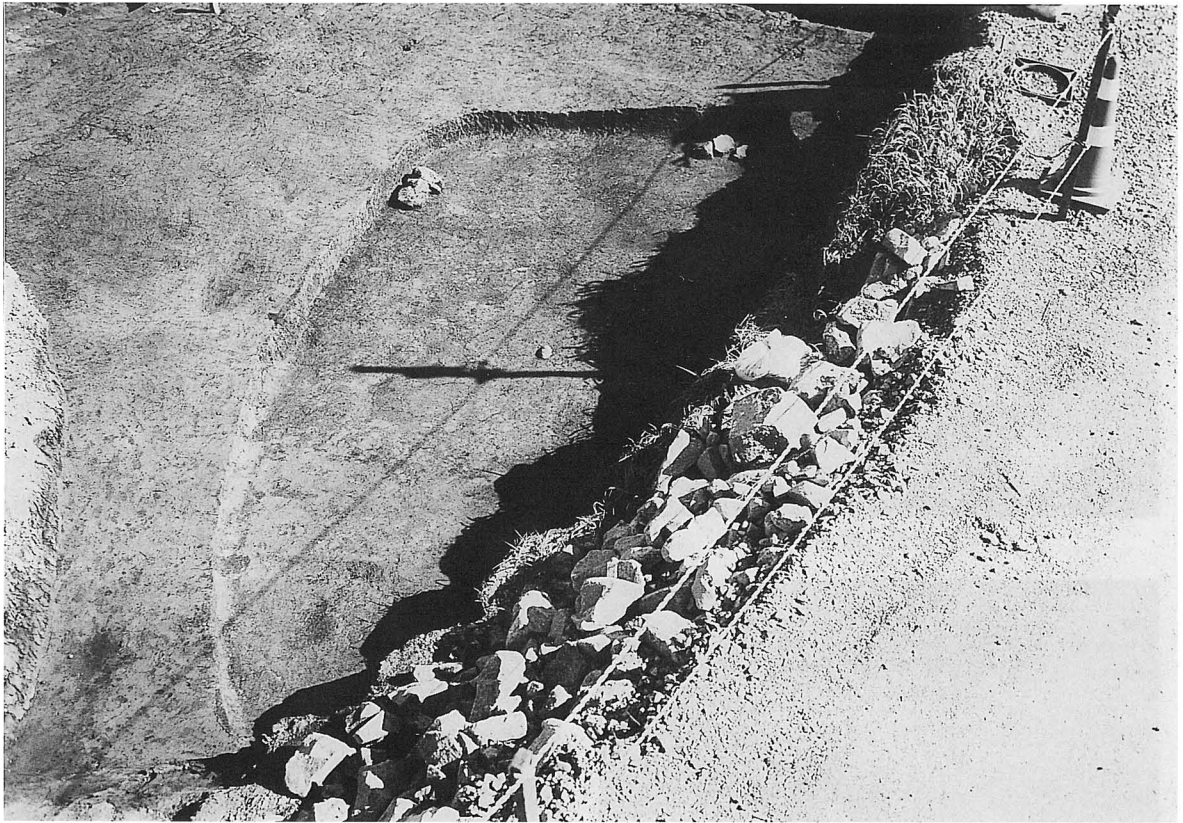


遺物出土状況（84・東から）

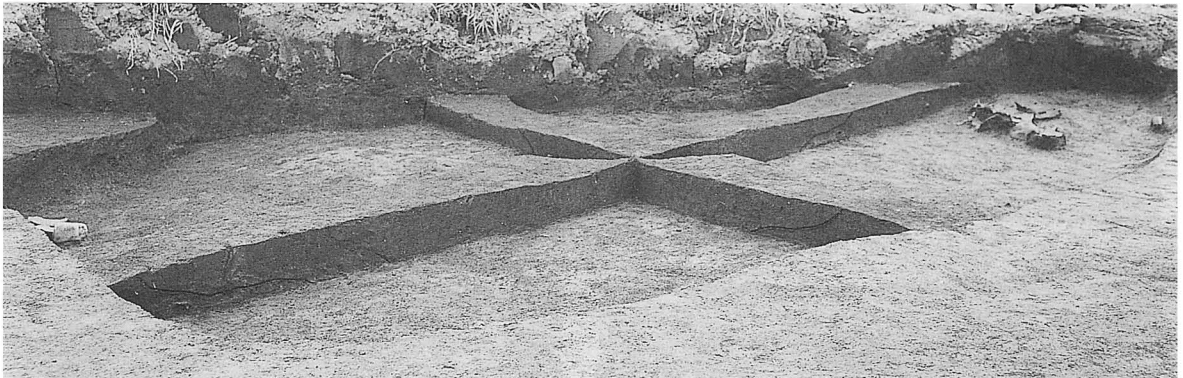


同左近景（東から）

写真図版17 RA586竪穴住居跡(2)



全景（北西から）



断面（南東から）



遺物出土状況（南東から）

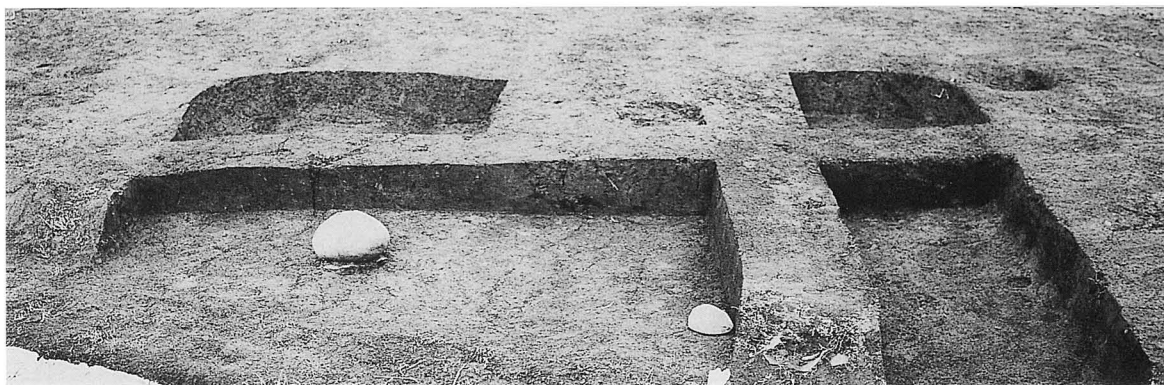


粘土出土状況（南西から）

写真図版18 RA587竪穴住居跡



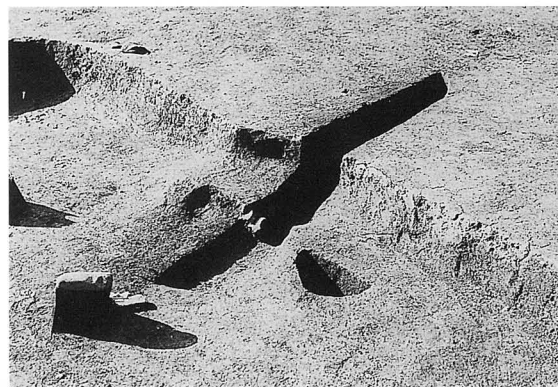
全景（南東から）



断面（南東から）



カマド全景（南東から）

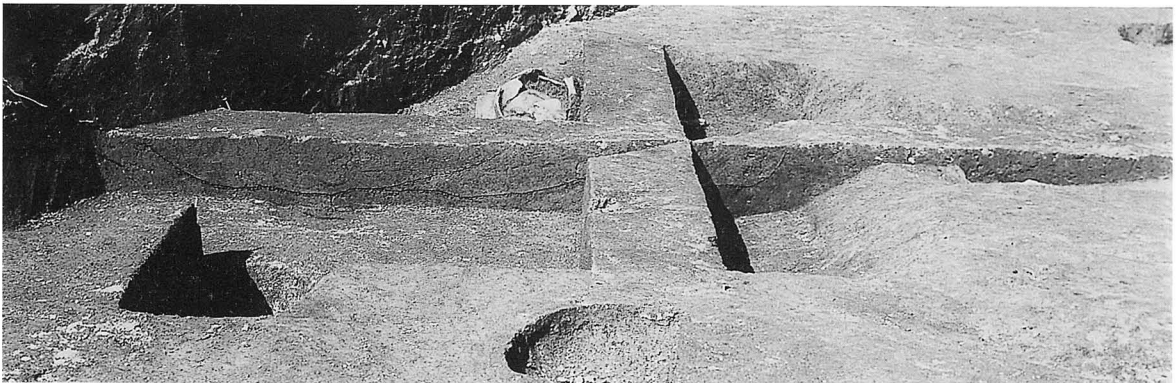


カマド断面（南東から）

写真図版19 RA588竪穴住居跡



全景（南東から）



断面（南東から）



遺物出土状況（南東から）

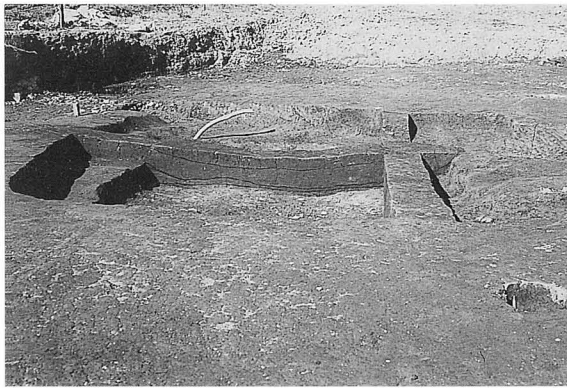


検出（北東から）

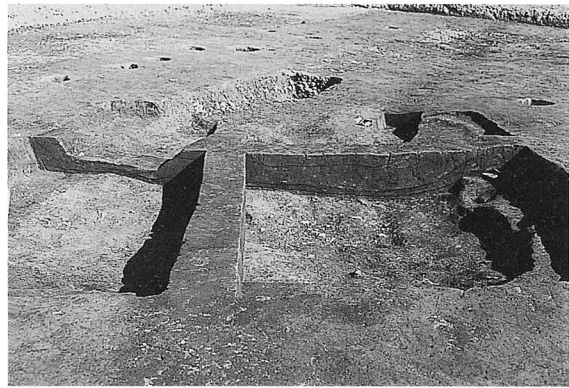
写真図版20 RA589竪穴住居跡



全景（南西から）



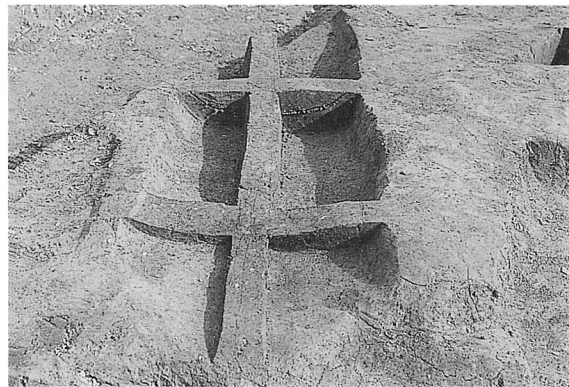
断面（南東から）



断面（南西から）



カマド断面（南西から）

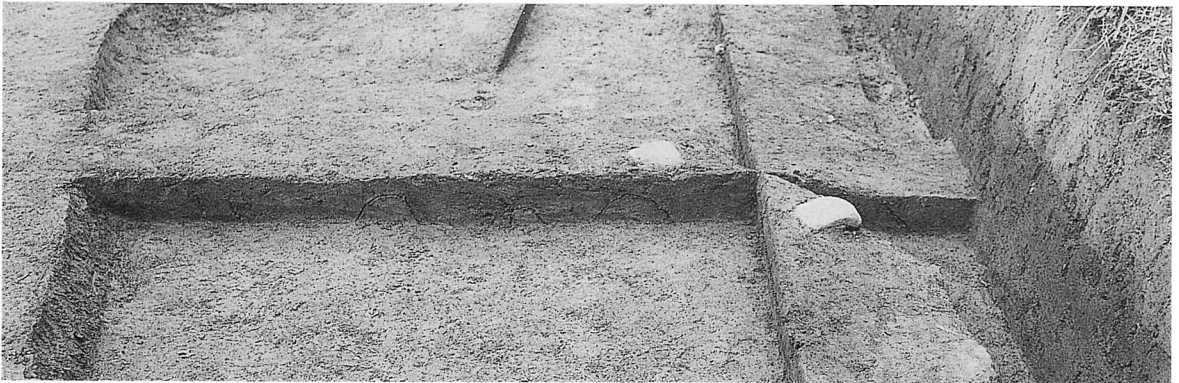


カマド断面（西から）

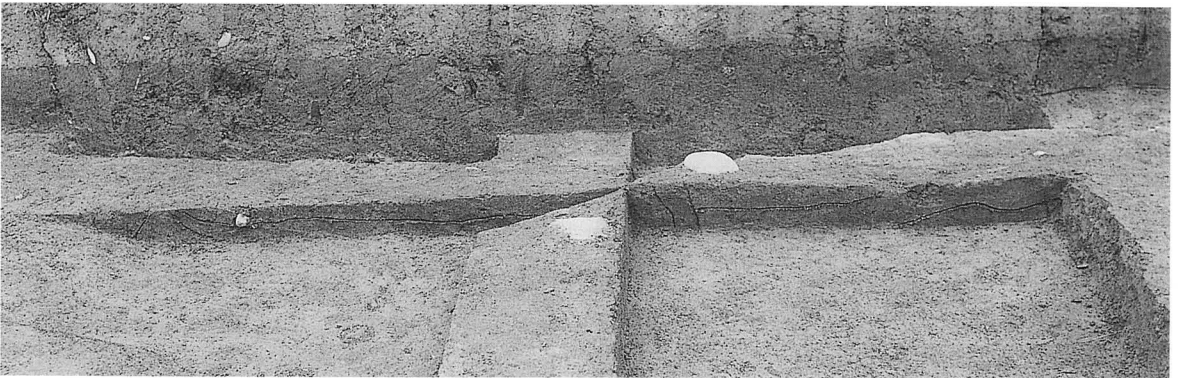
写真図版21 RA590竪穴住居跡



全景（南から）



断面（南から）

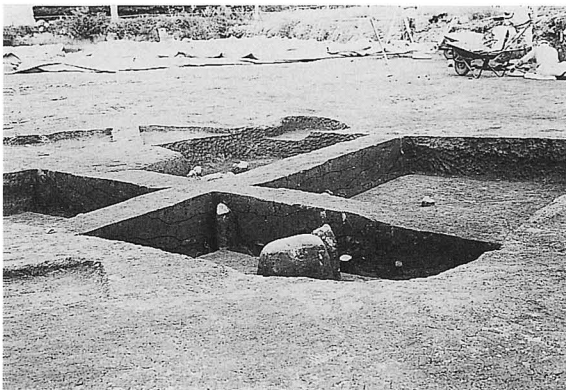


断面（西から）

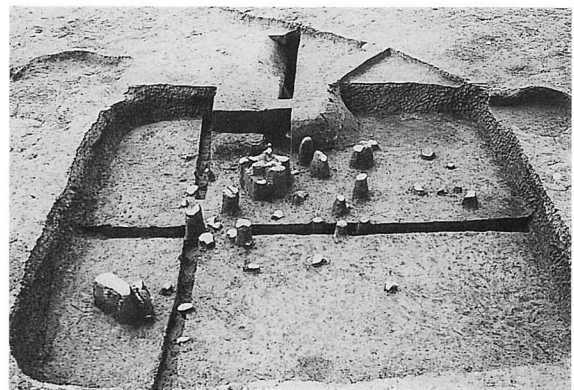
写真図版22 RA591竪穴住居跡



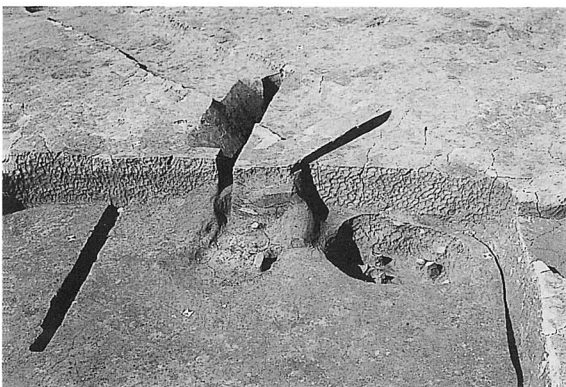
全景（南東から）



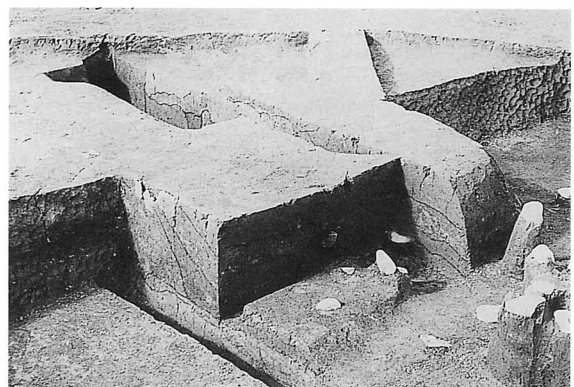
断面（南から）



遺物出土状況（南東から）



カマド全景（南東から）

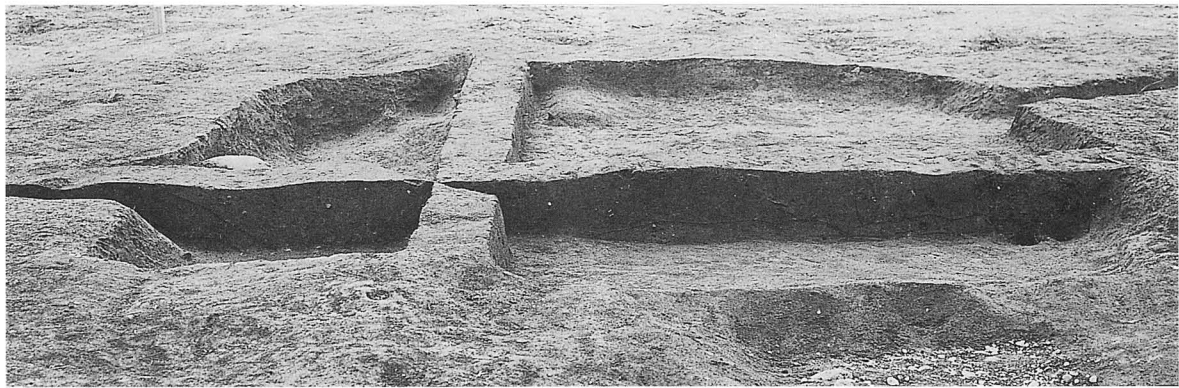


カマド断面（南から）

写真図版23 RA592竪穴住居跡



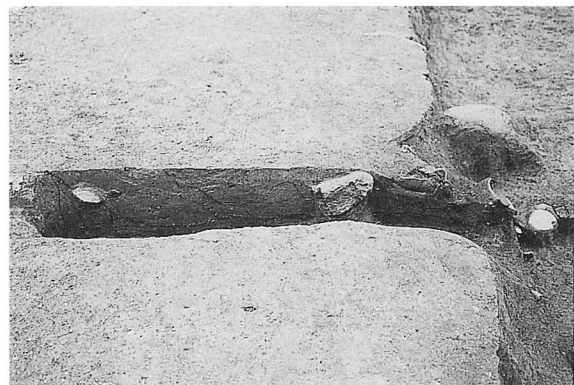
全景（北から）



断面（東から）

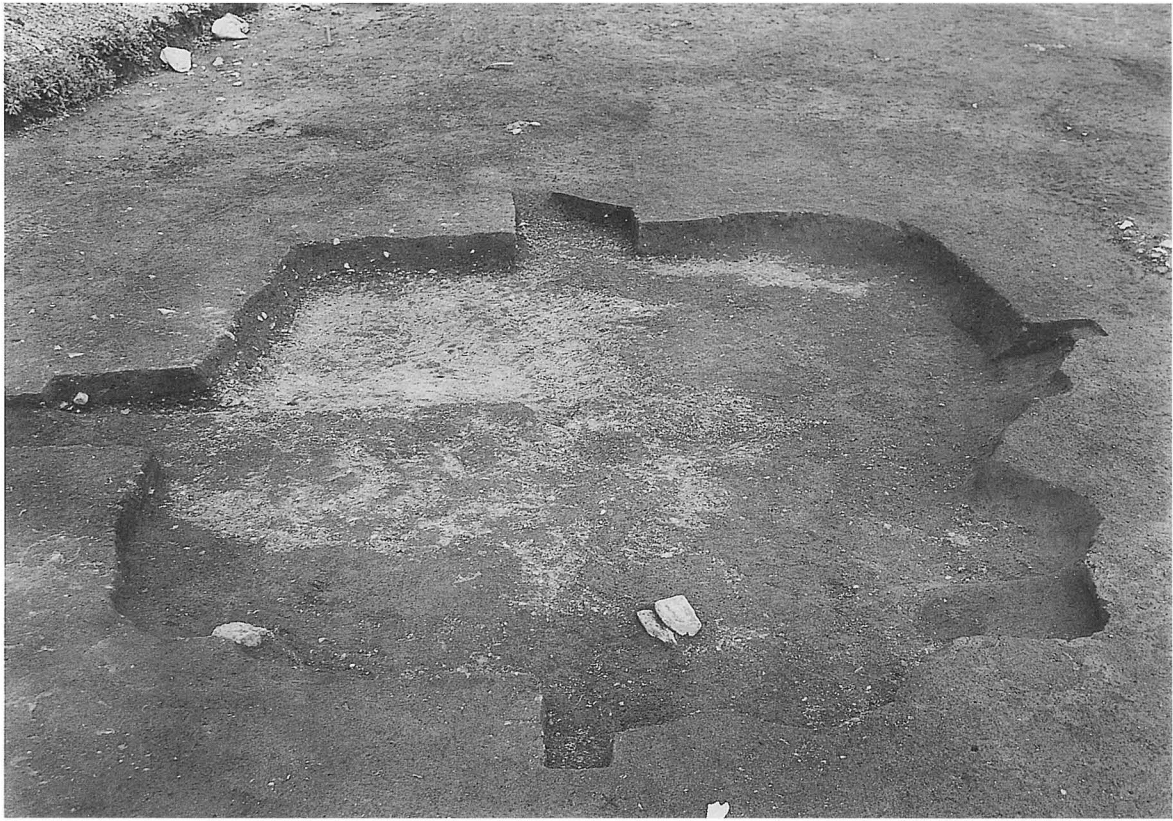


カマド全景（北から）

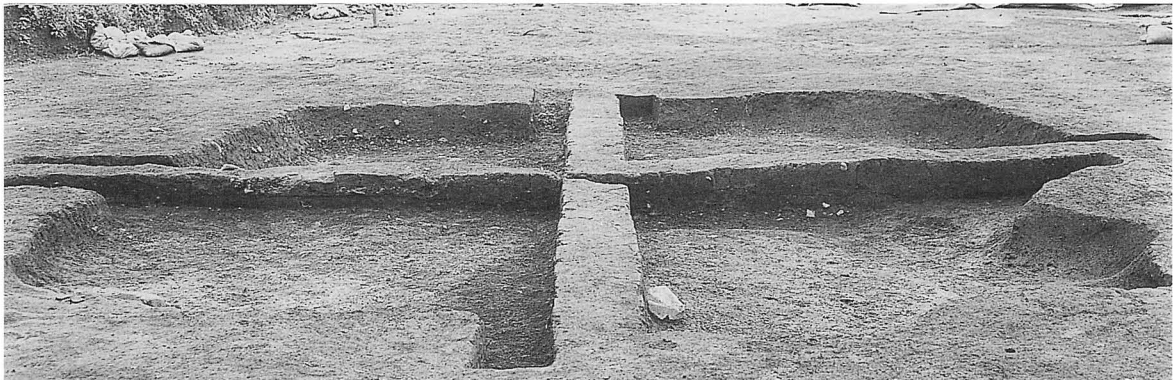


カマド断面（東から）

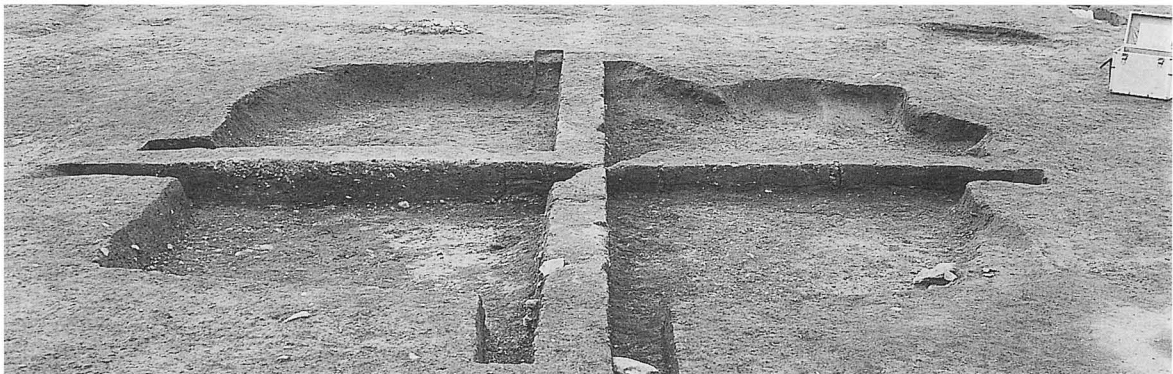
写真図版24 RA593竪穴住居跡



全景（東から）



断面（東から）

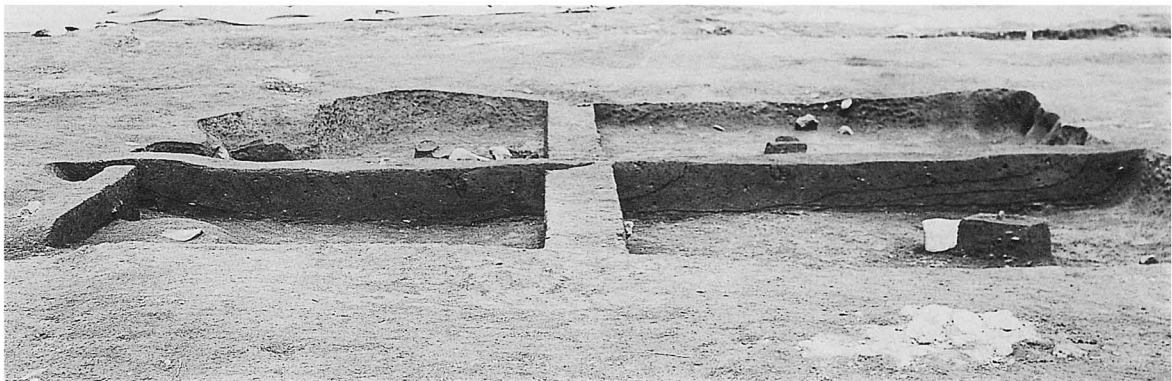


断面（南から）

写真図版25 RA594竪穴住居跡



全景（東から）



断面（南から）



カマド断面（東から）



カマド断面（東から）

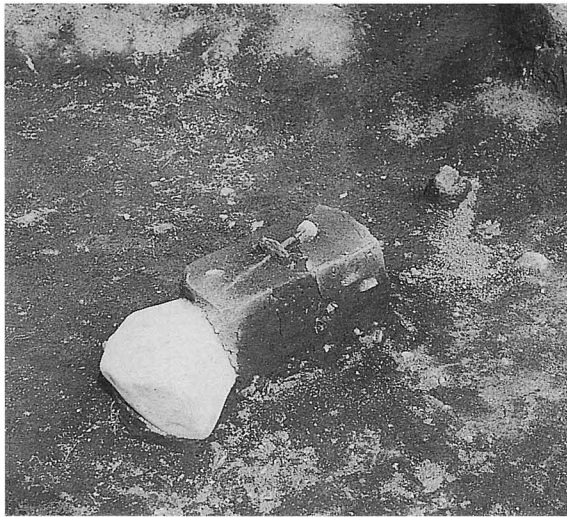
写真図版26 RA595竪穴住居跡(1)



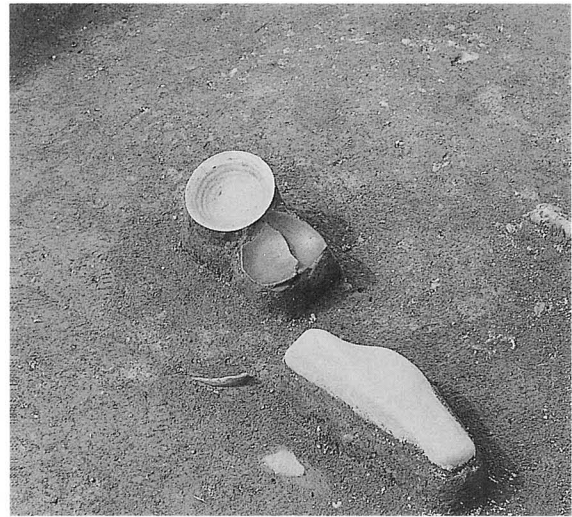
遺物出土状況 (211・南東から)



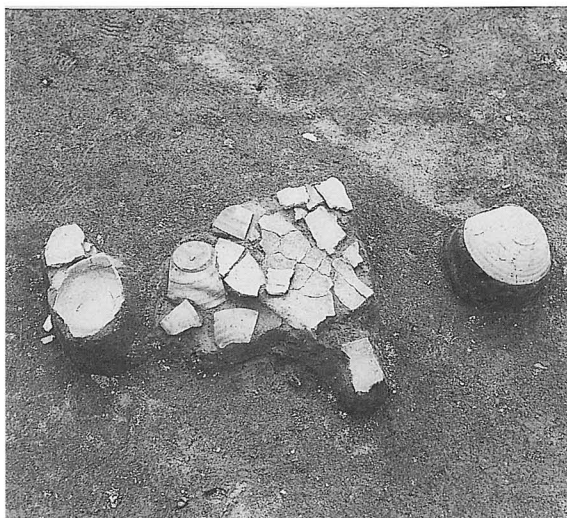
同左近景 (南から)



遺物出土状況 (215・西から)



遺物出土状況 (182・189・南西から)



遺物出土状況 (184・185・187・南西から)



遺物出土状況 (214・北西から)

写真図版27 RA595竪穴住居跡(2)



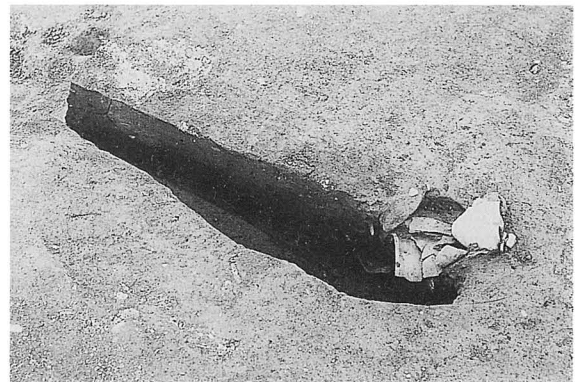
全景（西から）



断面（南東から）



カマド全景（西から）

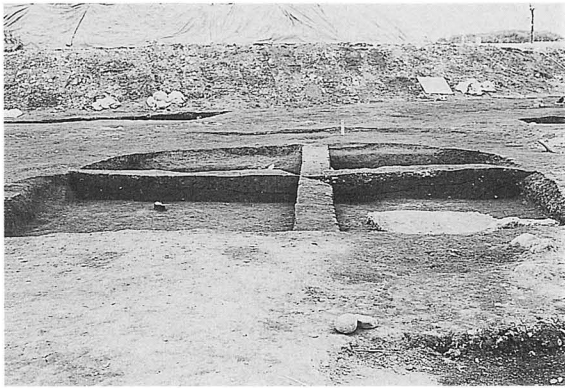


カマド断面（南東から）

写真図版28 RA596竪穴住居跡



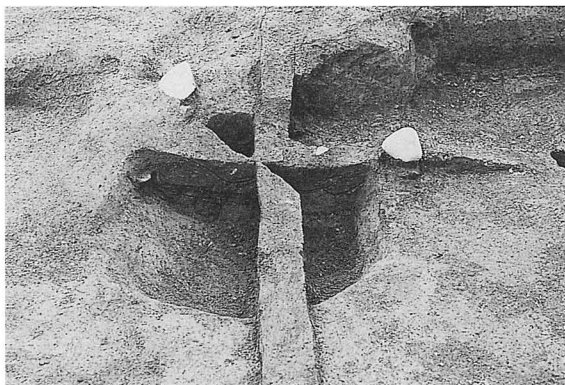
全景（東から）



断面（東から）



遺物出土状況（北東から）

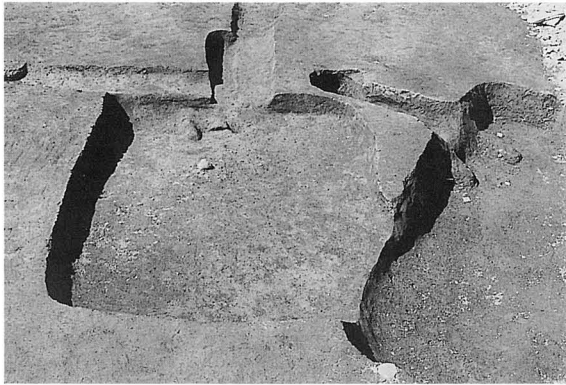


カマド断面（東から）

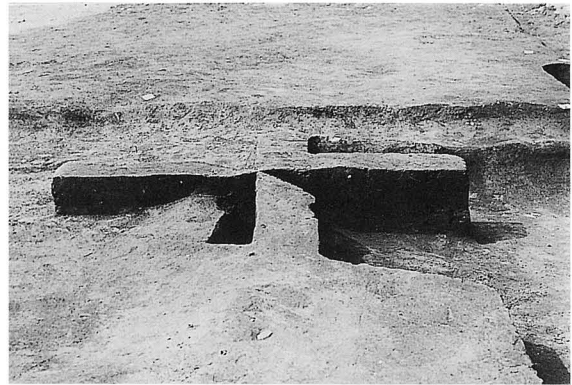


カマド煙道断面（北西から）

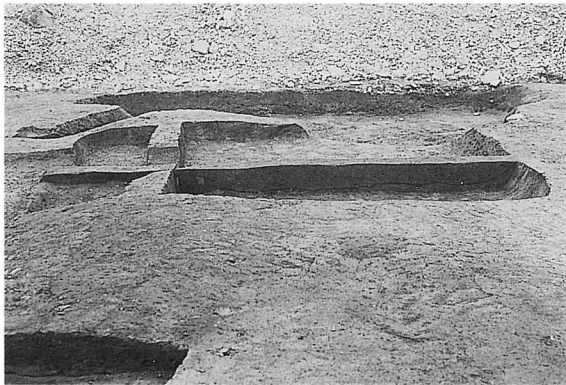
写真図版29 RA597竪穴住居跡



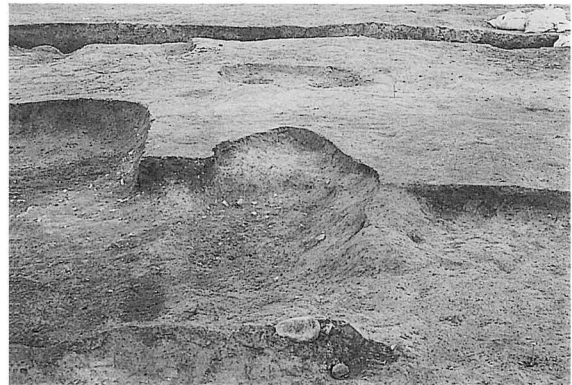
RA598全景（東から）



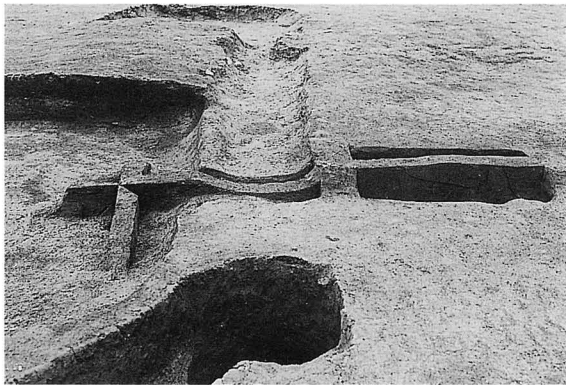
RA599断面（南東から）



RA598断面（南から）



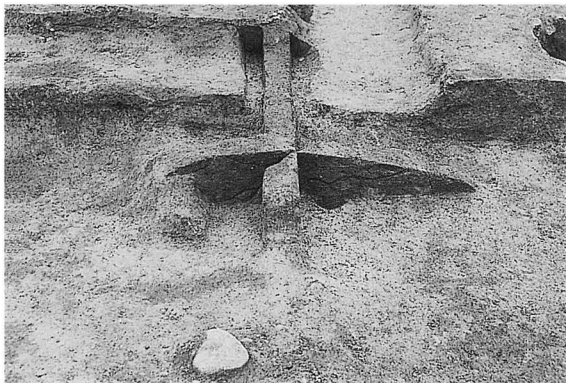
RA599カマド全景（西から）



RA598カマド断面（東から）



RA599カマド断面（南西から）

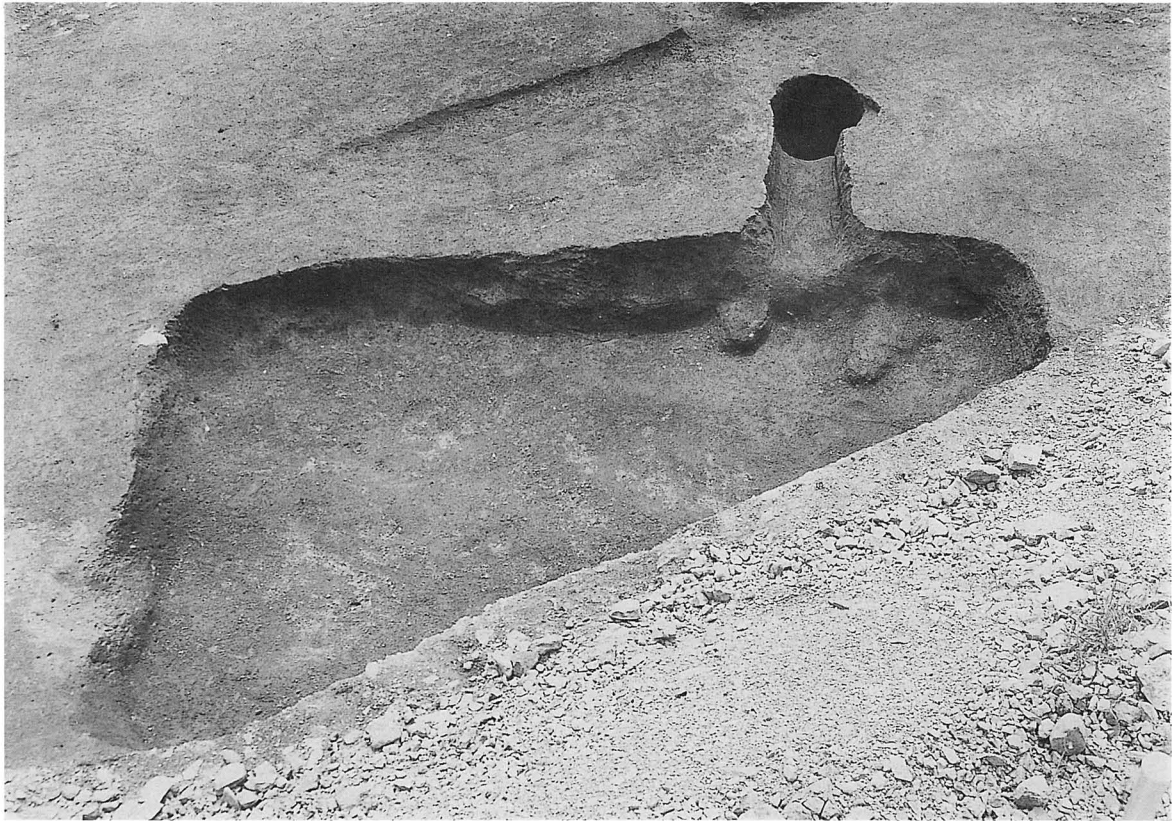


RA598カマド断面（北から）

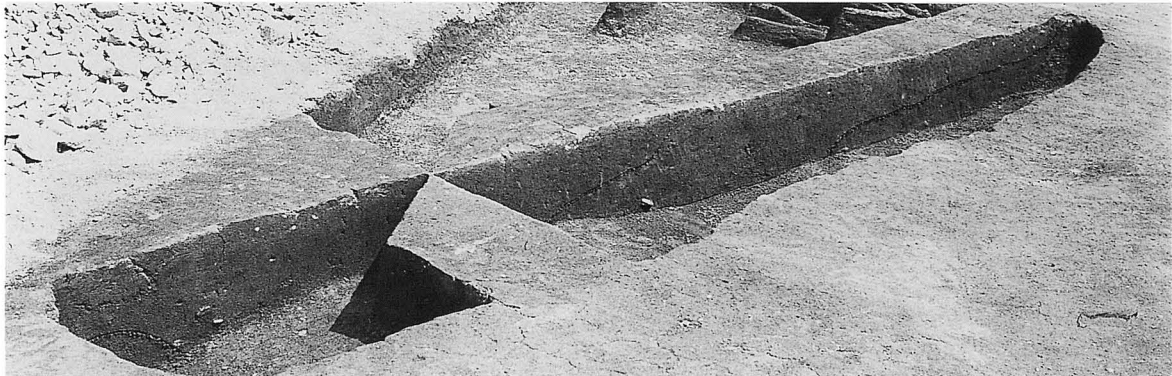


B区検出（南東から）

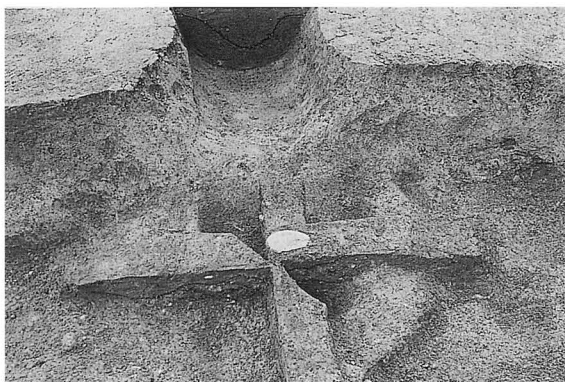
写真図版30 RA598・599竪穴住居跡



全景（北から）



断面（南西から）



カマド断面（北から）

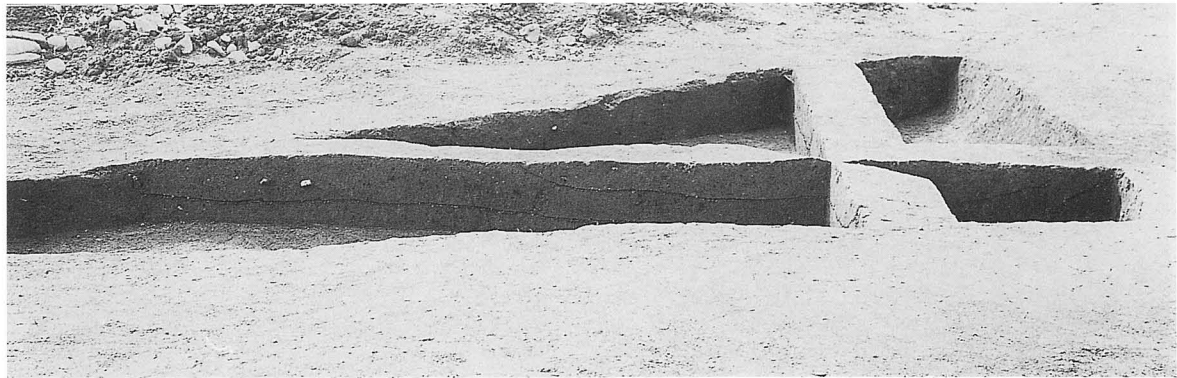


B区検出（南東から）

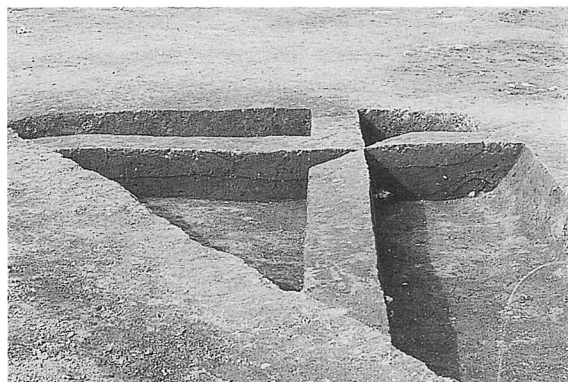
写真図版31 RA215竪穴住居跡



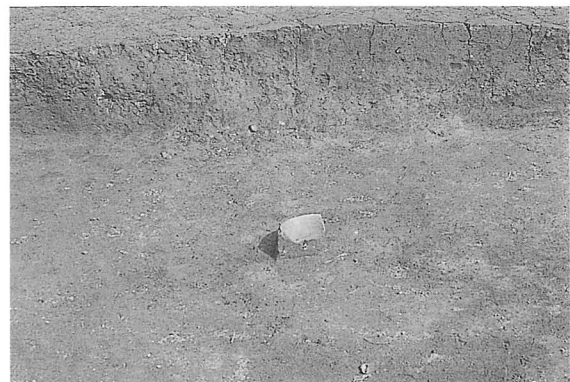
全景（南東から）



断面（南東から）

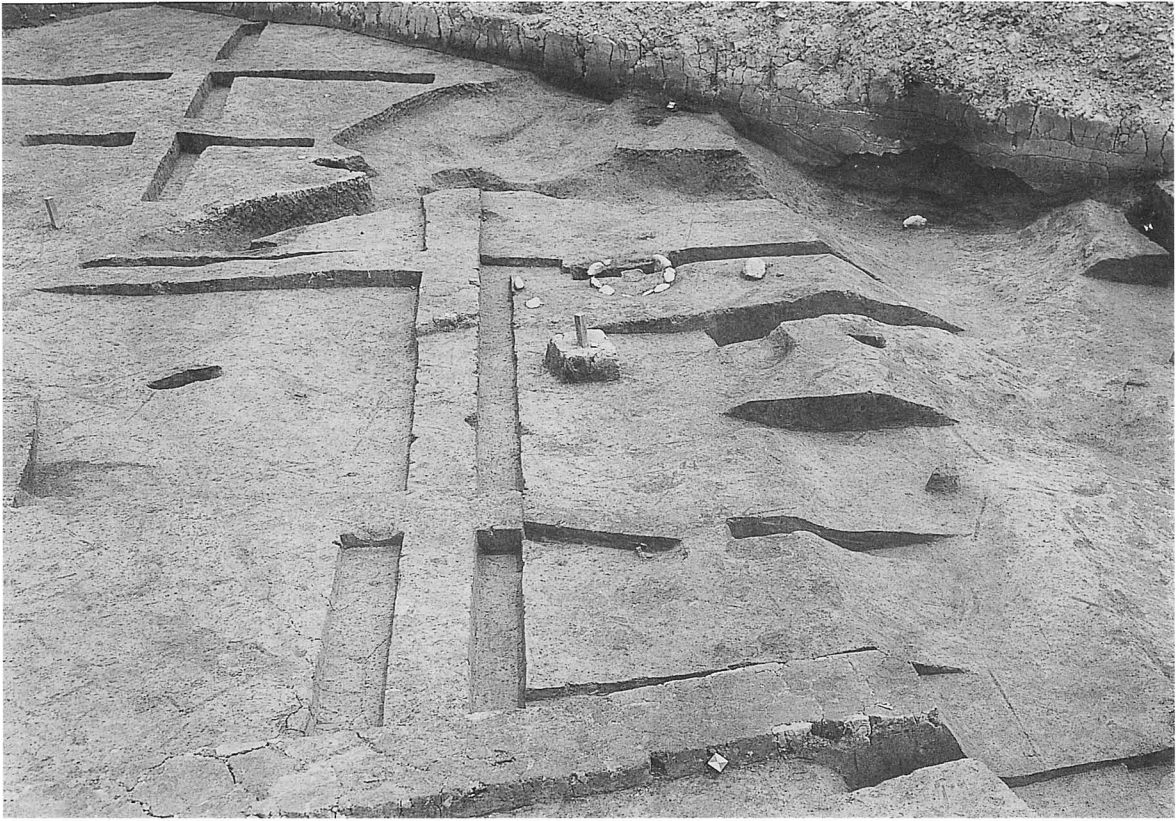


断面（南西から）



遺物出土状況（北西から）

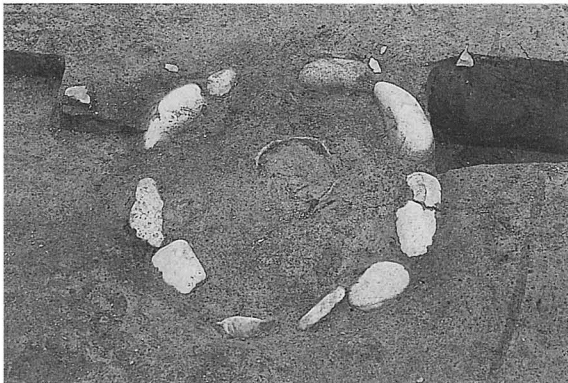
写真図版32 RA293竪穴住居跡



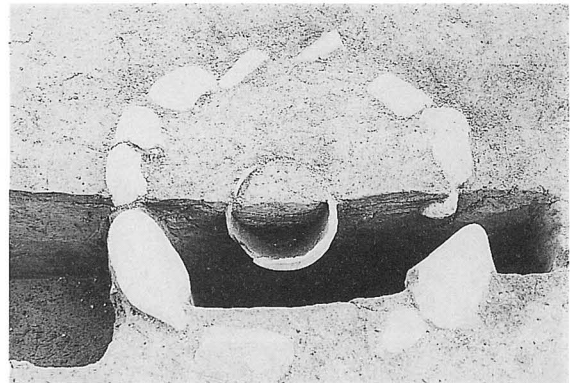
全景（西から）



断面（東から）

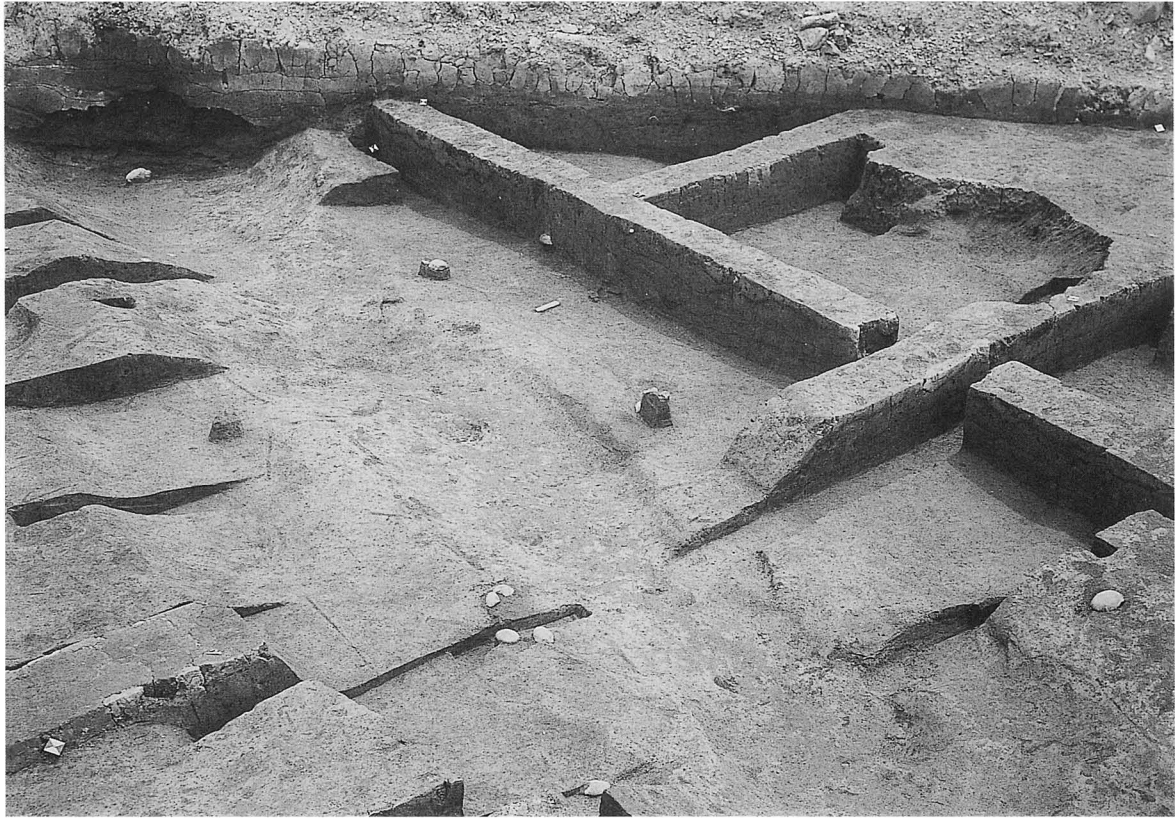


炉全景（東から）



炉断面（東から）

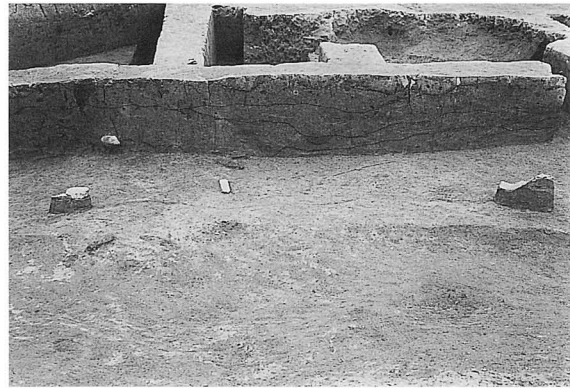
写真図版33 RA600住居跡



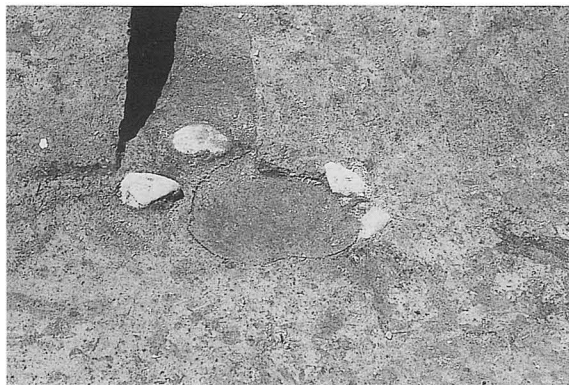
全景（西から）



断面（西から）



断面（北西から）



西側炉跡全景（南東から）

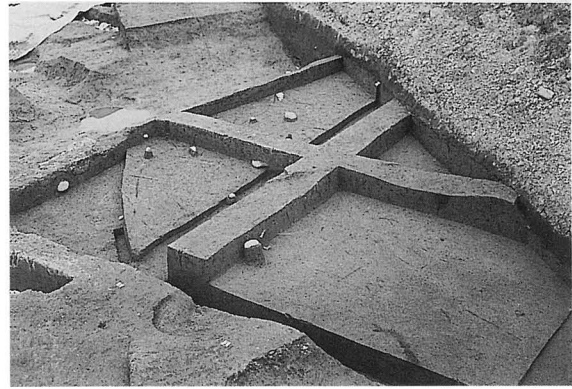


東側炉跡全景（西から）

写真図版34 RA601住居跡



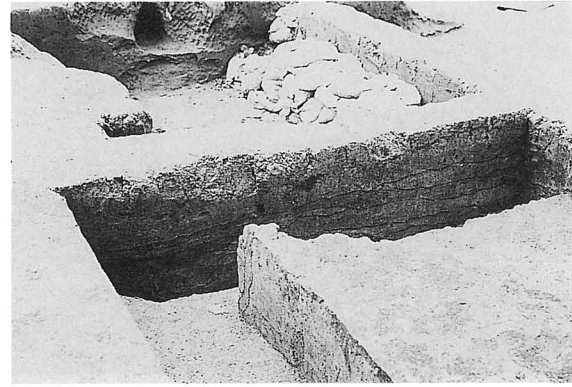
全景 (RA600・601含む・西から)



全景 (南西から)



断面 (北西から)



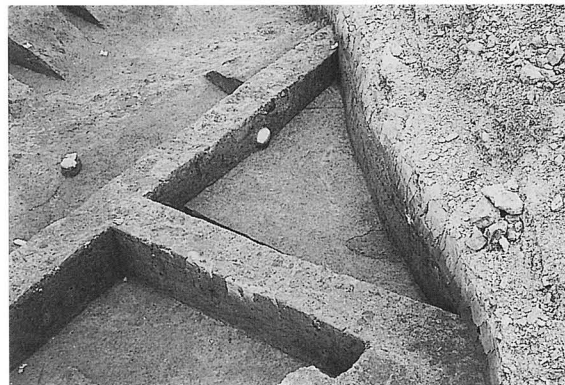
断面 (南東から)



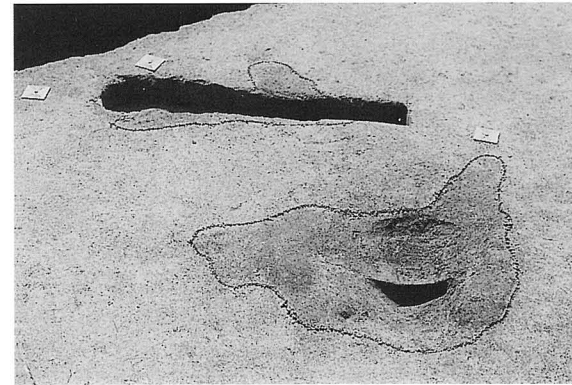
炉跡 b 全景 (南西から)



炭化物・遺物出土状況 (南から)

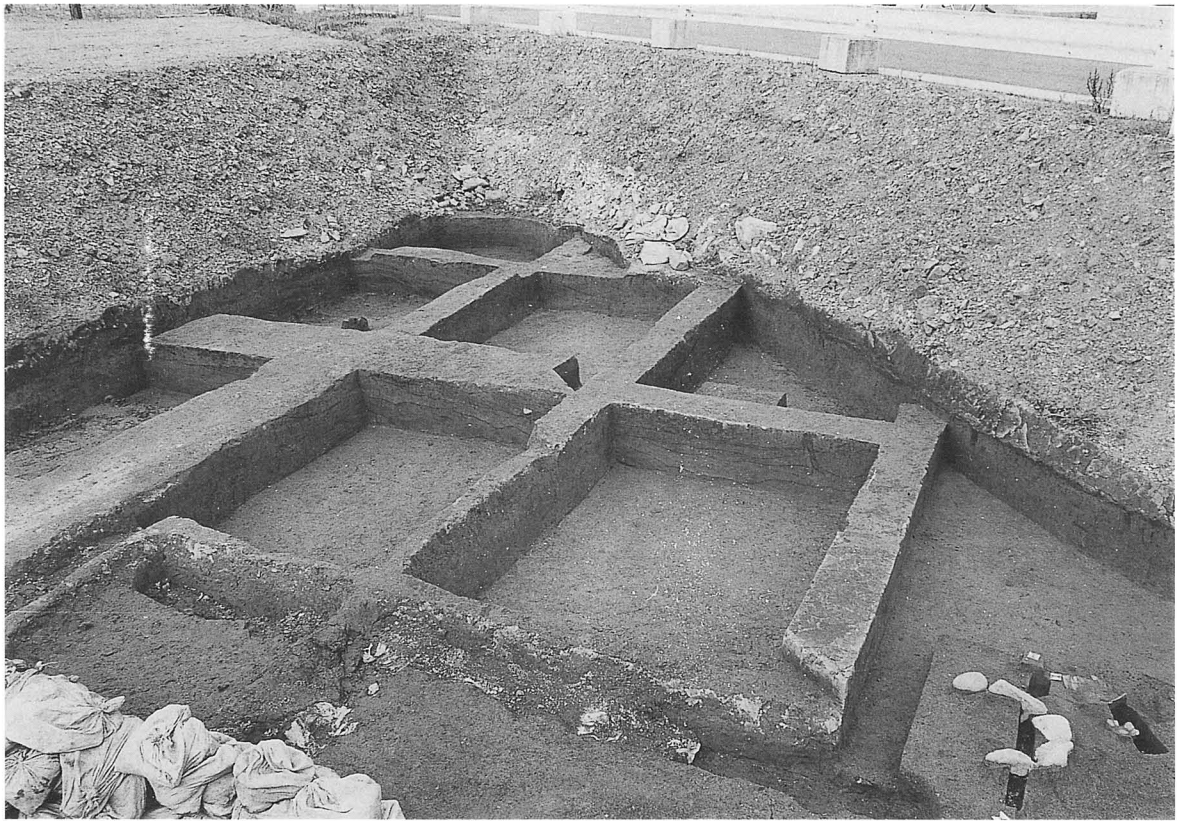


炉跡 a 検出状況 (南から)



炉跡 a・c 全景 (北東から)

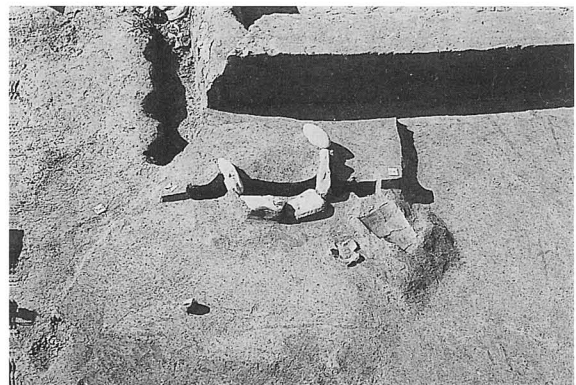
写真図版35 RA602住居跡



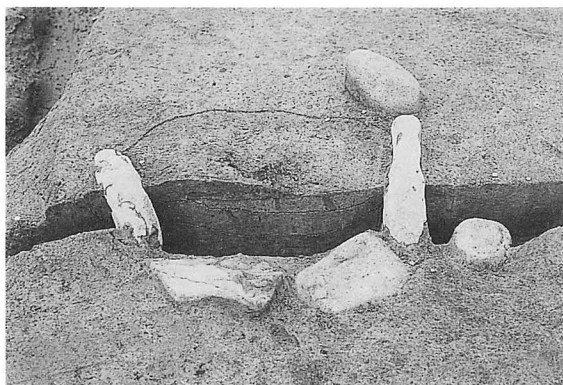
全景 (RE063含む) (南西から)



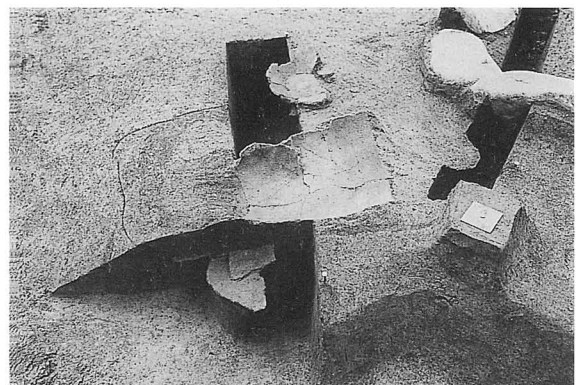
断面 (南東から)



炉跡全景 (南東から)



炉跡断面 (南東から)



遺物出土状況 (pp 1) (北東から)

写真図版36 RA603住居跡



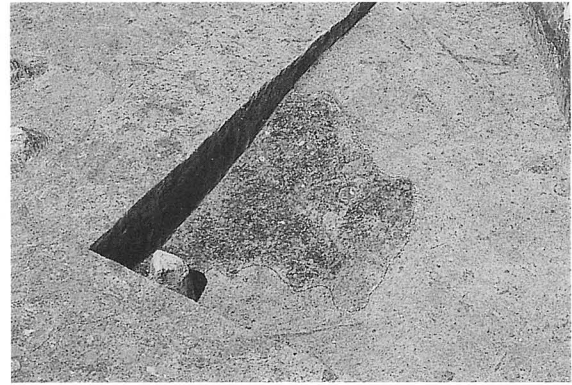
RE063断面（南西から）



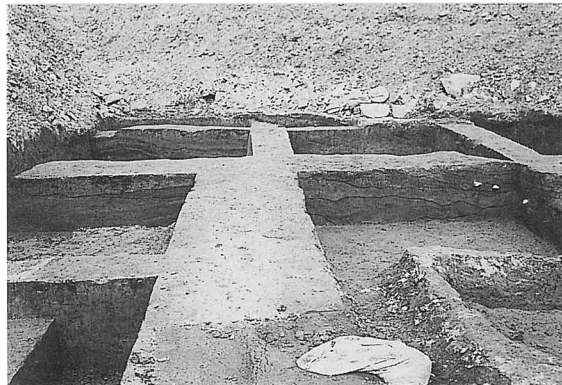
RE063断面（北西から）



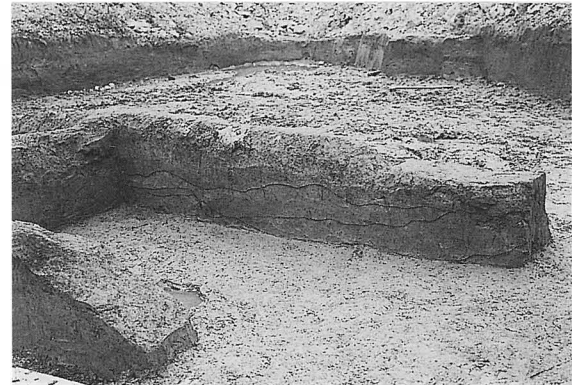
RE063炭化物出土状況（西側・南西から）



RE063炭化物出土状況（東側・南西から）



RE063より北断面（南西から）



RE063より西断面（南西から）



北端部遺物出土状況（483・南東から）



北東部旧河道全景（南東から）

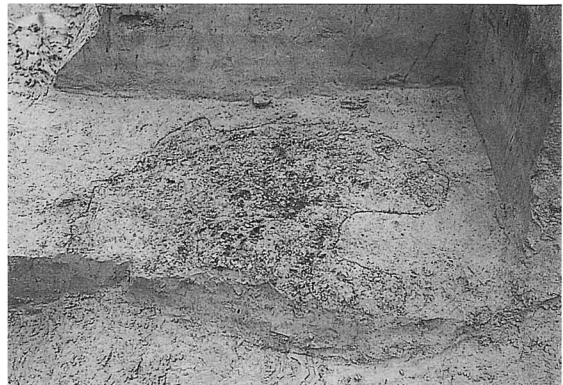
写真図版37 RE063住居状遺構・A区北端部



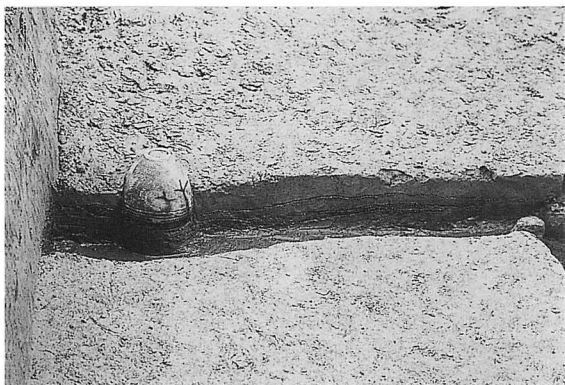
全景（南東から）



断面・遺物出土状況（南東から）



炭化物出土状況（南東側・北西から）



断面（南東から）



A区水没状況（南東から）

写真図版38 RE064住居状遺構

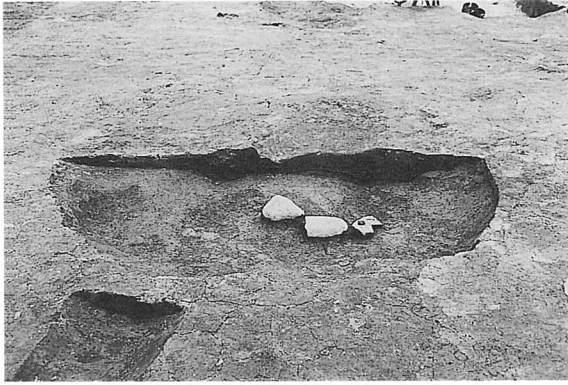


全景（南から）



断面（南西から）

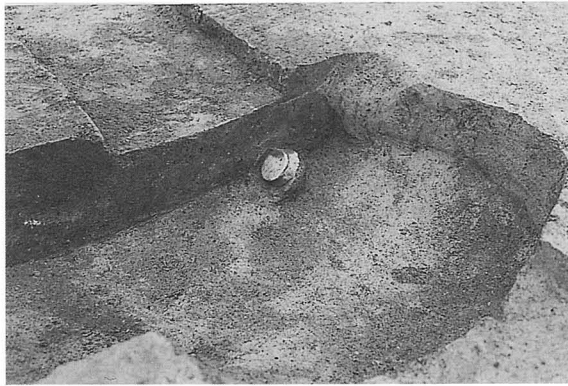
写真図版39 RE062住居状遺構



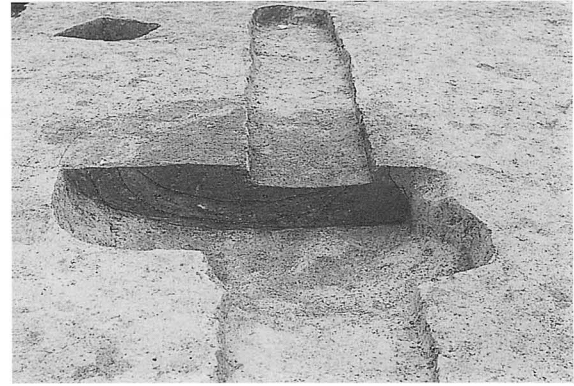
RD1116土坑断面（南から）



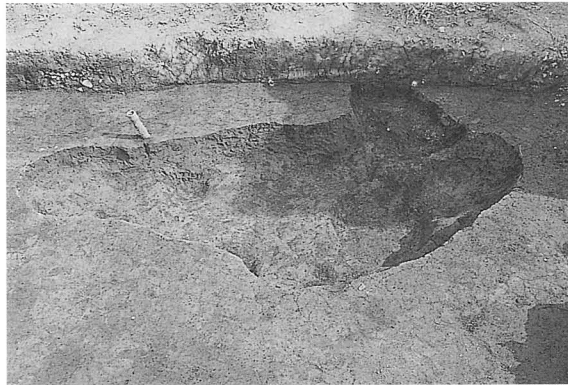
RD1117土坑全景（南から）



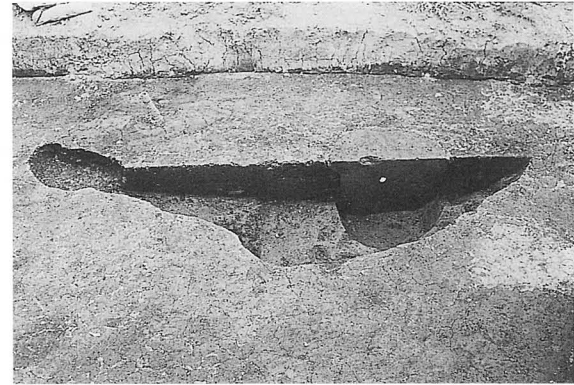
RD1117土坑遺物出土状況（南西から）



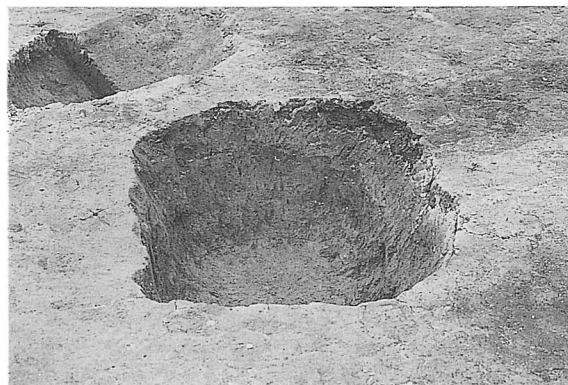
同左断面（南から）



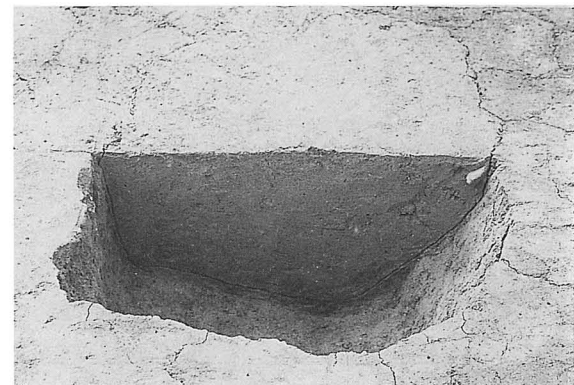
RD1118土坑全景（北から）



同左断面（北から）



RD1120土坑全景（南から）



同左断面（南から）

写真図版40 RD土坑(1)



RD1121土坑断面（南西から）



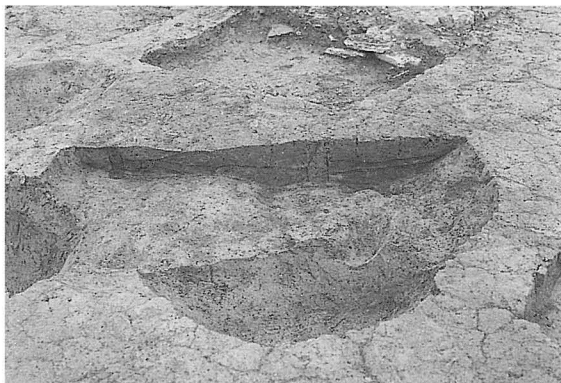
同左断面（南西から）



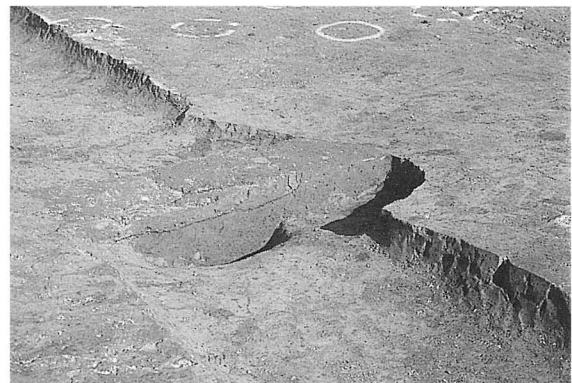
RD1122土坑全景（南西から）



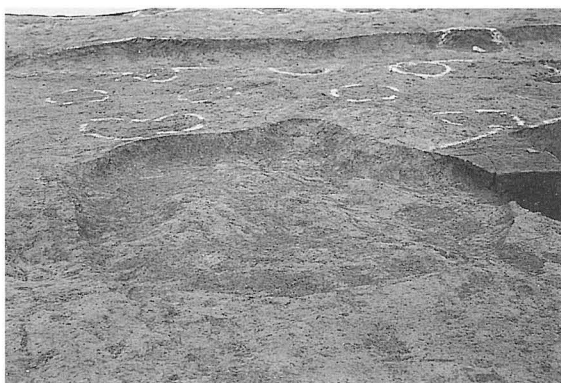
同左断面（南西から）



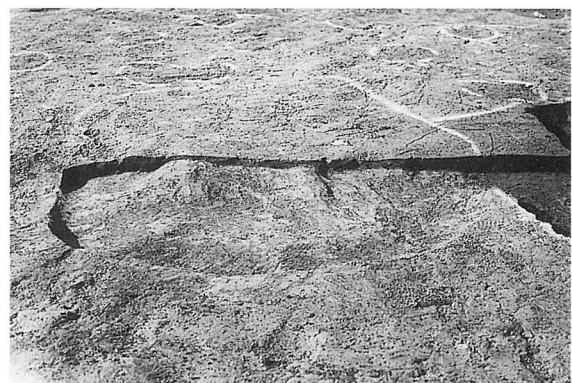
RD1123土坑断面（南西から）



RD1124土坑断面（北西から）

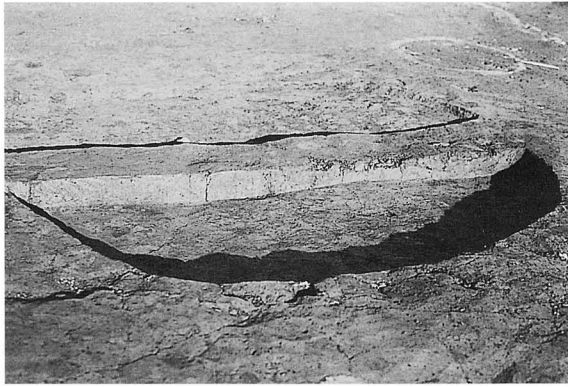


RD1125土坑全景（南から）

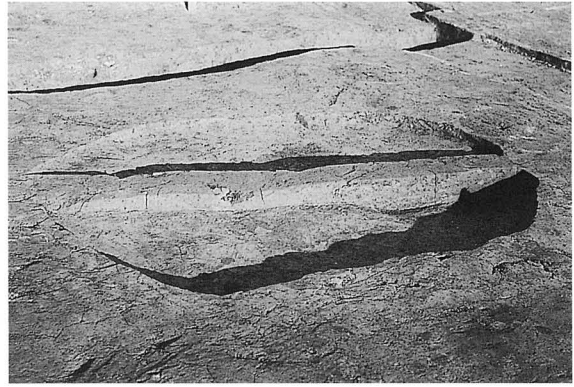


RD1125土坑断面（南から）

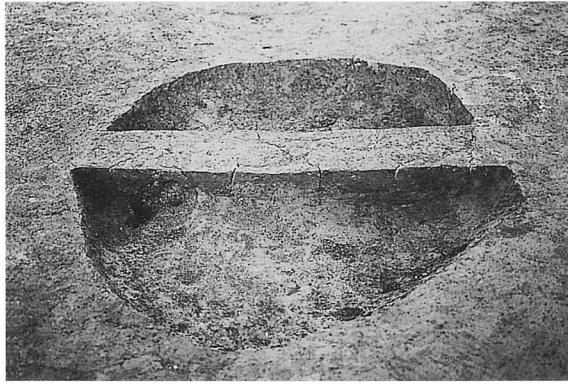
写真図版41 RD土坑(2)



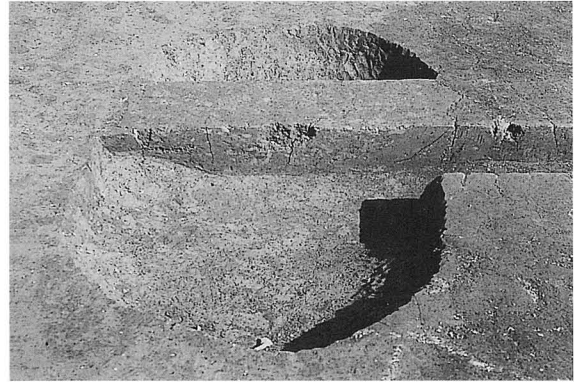
RD1126土坑断面（西から）



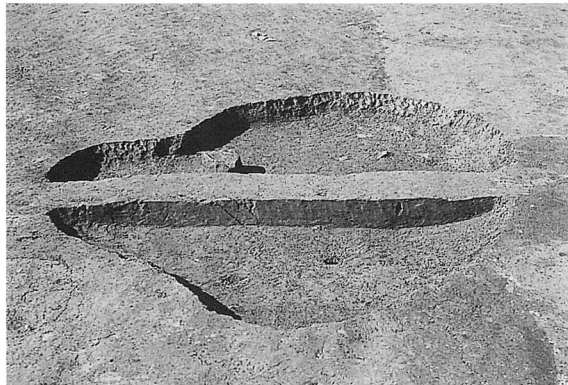
RD1127土坑全景（西から）



RD1128土坑全景（西から）



RD1129土坑全景（西から）



RD1130土坑全景（西から）



RD1131土坑全景（西から）



RD1132土坑全景（東から）

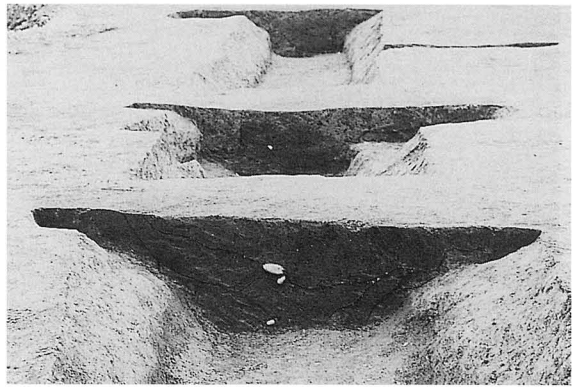


同左断面（南東から）

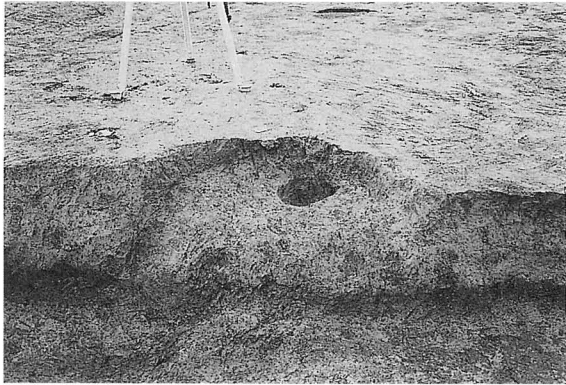
写真図版42 RD土坑(3)



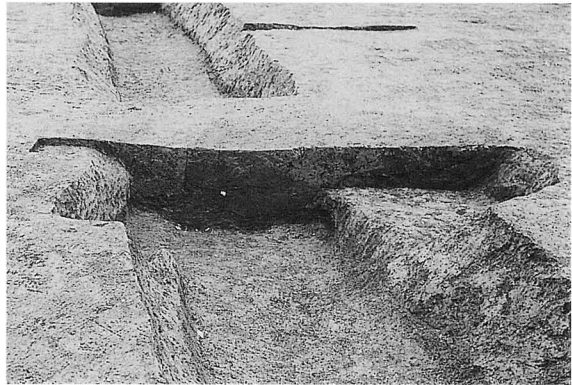
RD1133土坑全景（南から）



同左断面（南東から）



RD1134土坑全景（北東から）



同左断面（南東から）



RD1135土坑全景（南西から）



同左断面（南東から）

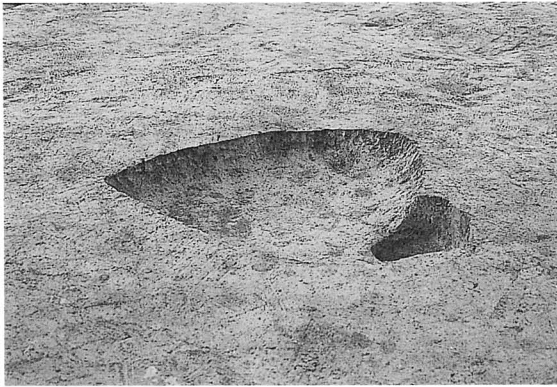


RD1136土坑全景（南東から）

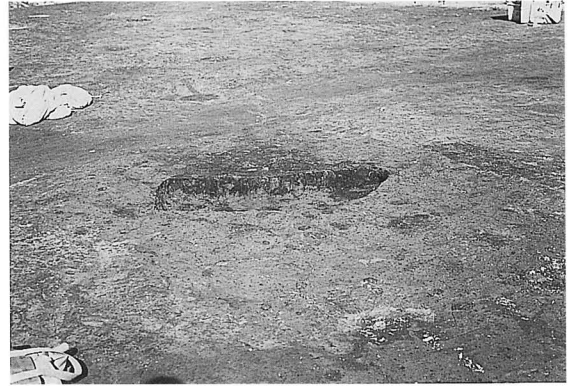


同左断面（南西から）

写真図版43 RD土坑(4)



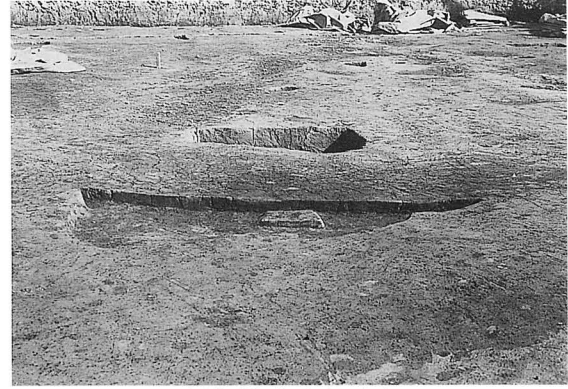
RD1137土坑全景（南から）



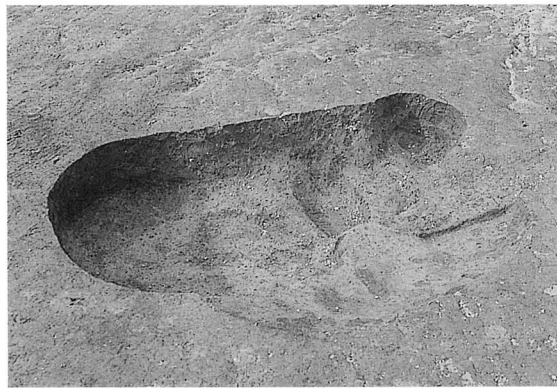
同左断面（南から）



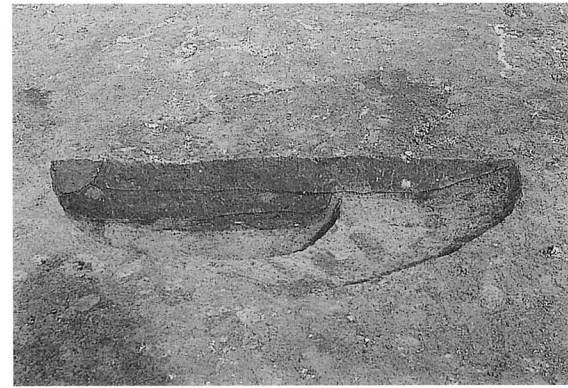
RD1138土坑全景（西から）



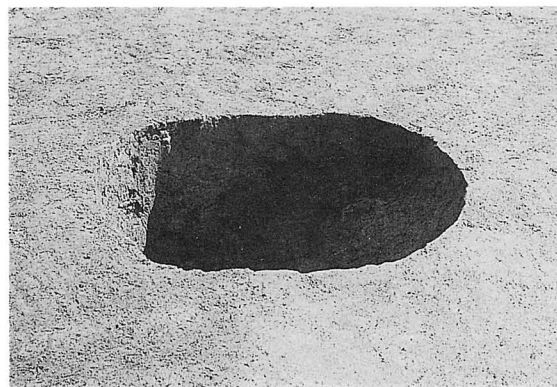
同左断面（西から）



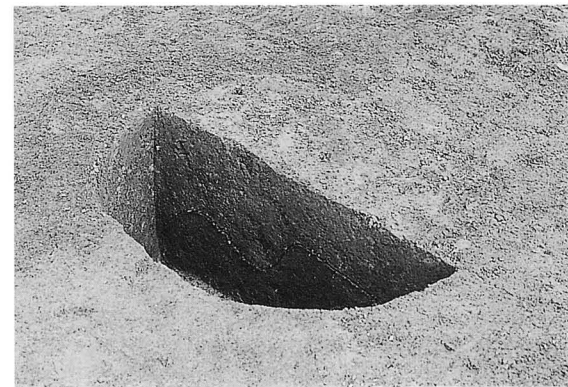
RD1139土坑全景（南東から）



同左断面（南から）



RD1140土坑全景（西から）



同左断面（南西から）

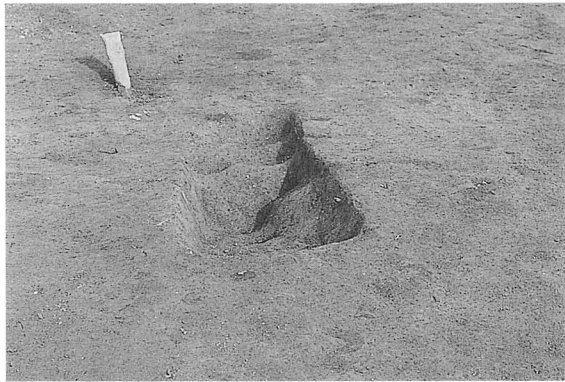
写真図版44 RD土坑(5)



RD1141土坑全景（南東から）



同左断面（南から）



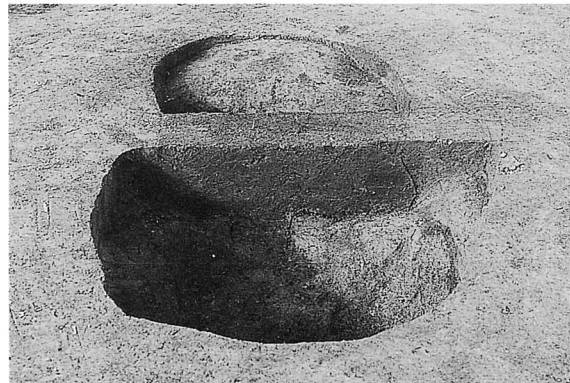
RD1142土坑全景（南西から）



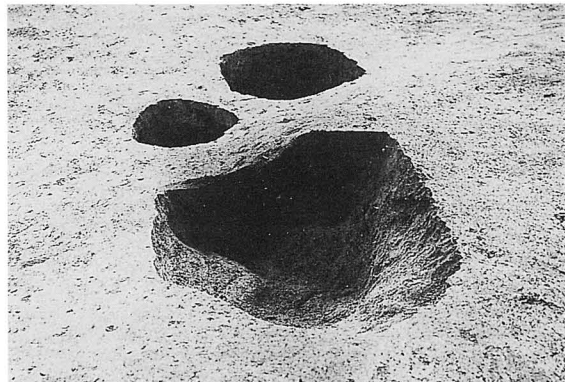
同左断面（南西から）



RD1143土坑全景（南東から）



同左断面（南から）



RD1144土坑断面（北東から）

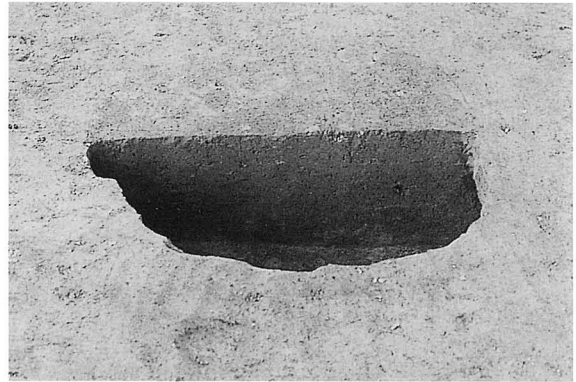


C区検出（南西から）

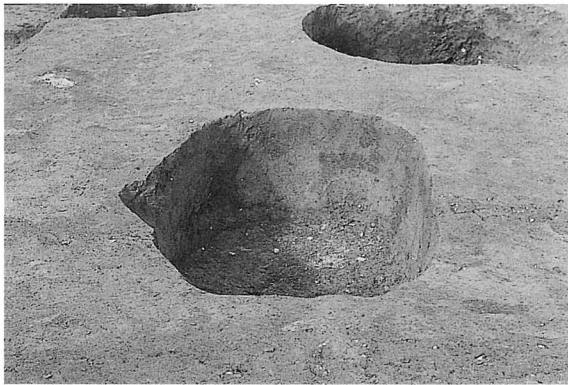
写真図版45 RD土坑(6)



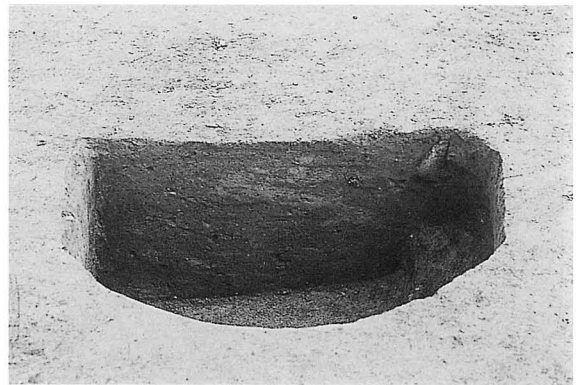
RD1145土坑全景（南から）



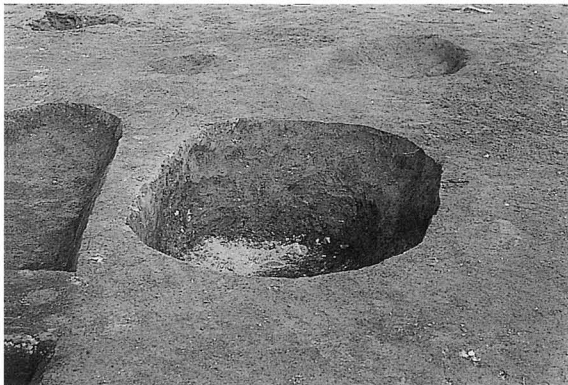
同左断面（南東から）



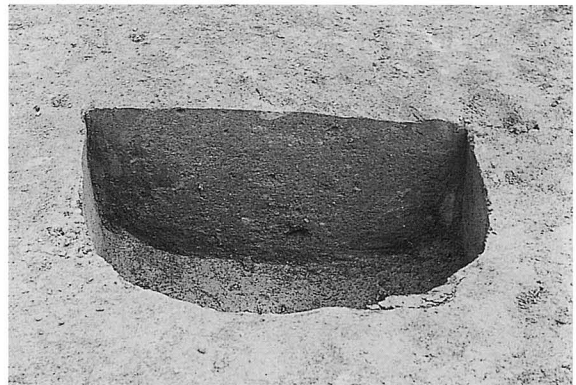
RD1146土坑全景（南から）



同左断面（南から）



RD1147土坑全景（西から）



同左断面（西から）

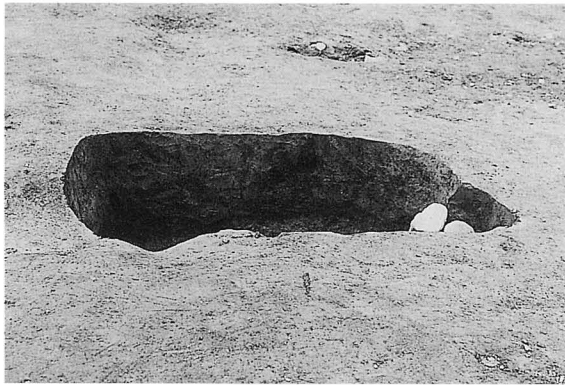


RD1148土坑全景（西から）

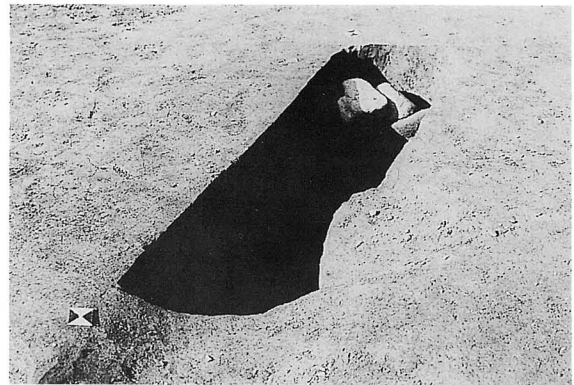


同左断面（西から）

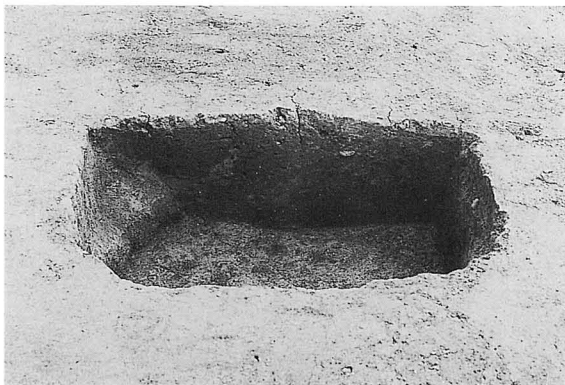
写真図版46 RD土坑(7)



RD1150土坑断面（東から）



同左断面（南東から）



RD1151土坑断面（西から）



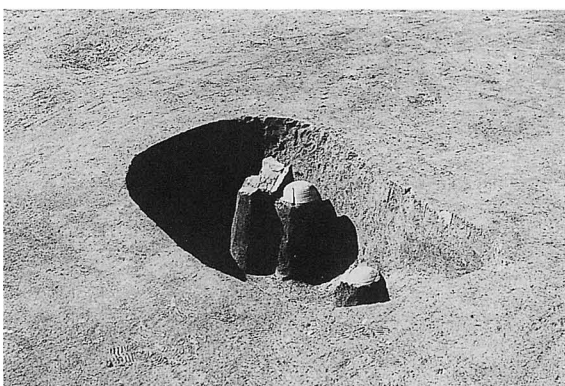
C区 検出（南西から）



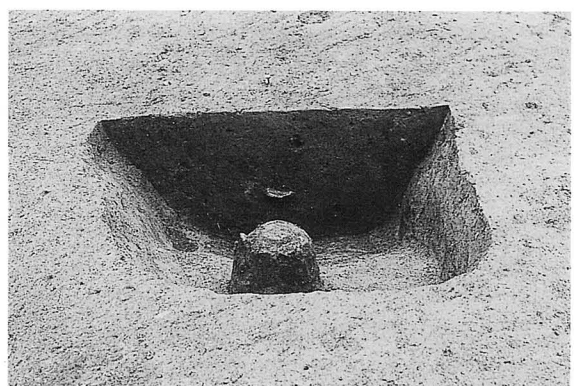
RD1152土坑断面（北から）



RD1154土坑断面（西から）

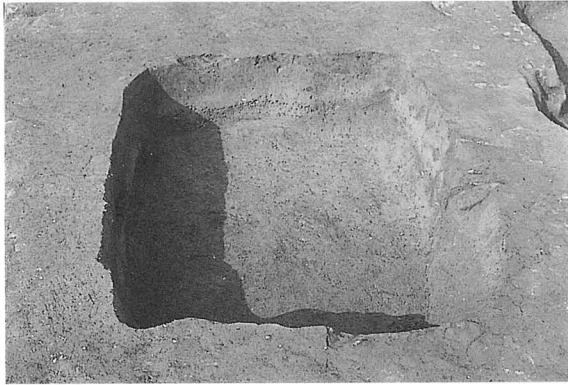


RD1156土坑全景（南西から）

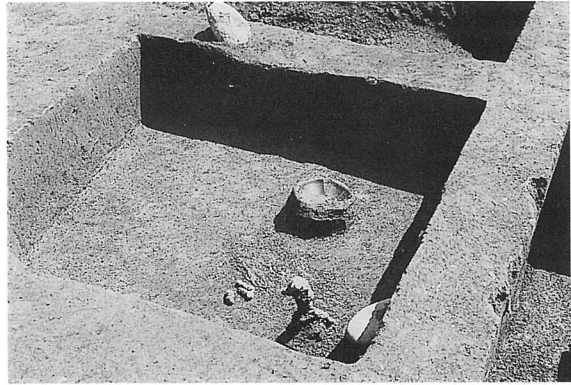


同左断面（東から）

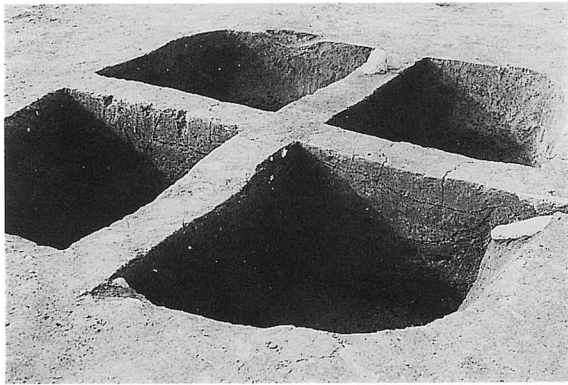
写真図版47 RD土坑(8)



RD1157土坑全景（南西から）



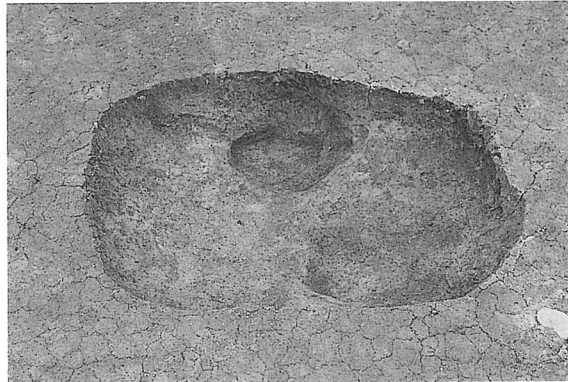
同左遺物出土状況（西から）



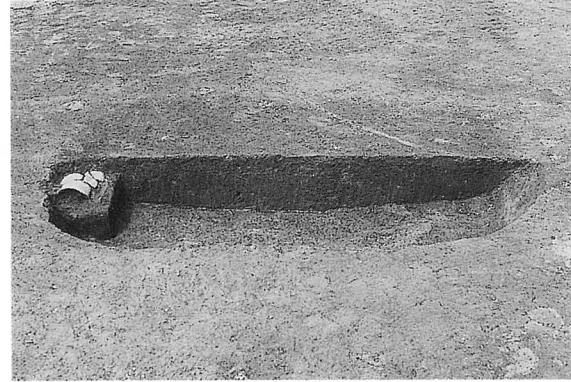
同上断面（南東から）



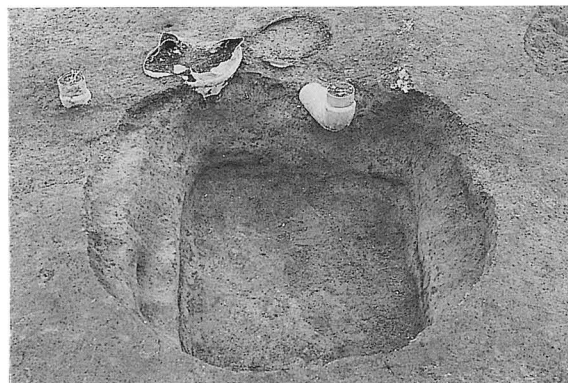
同左断面（南西から）



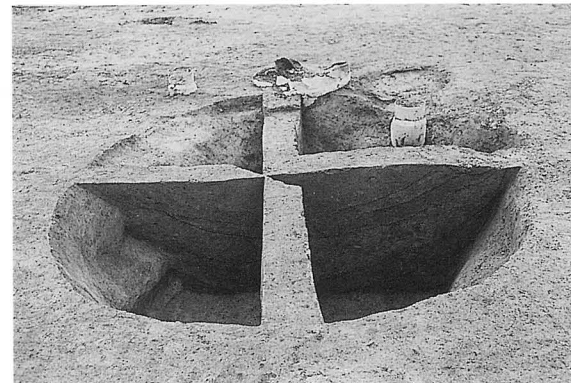
RD1158土坑全景（南から）



同左断面（南から）

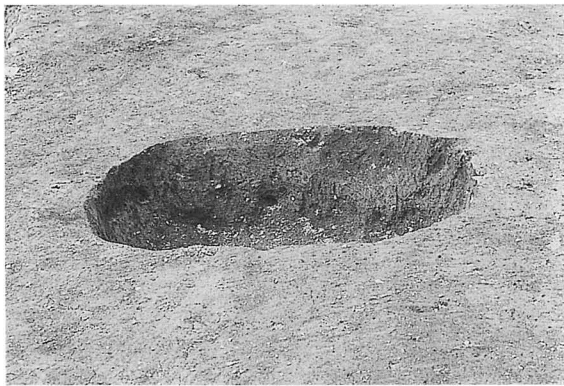


RD1159土坑全景（東から）

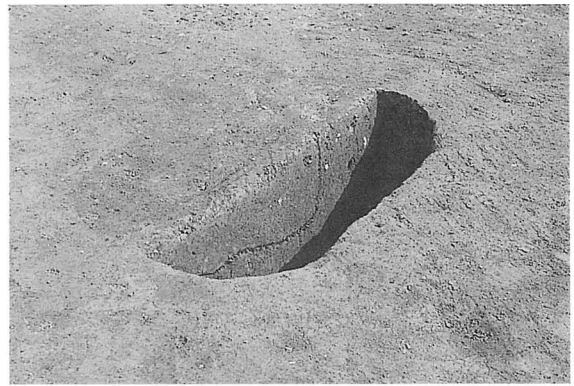


同左断面（東から）

写真図版48 RD土坑(9)



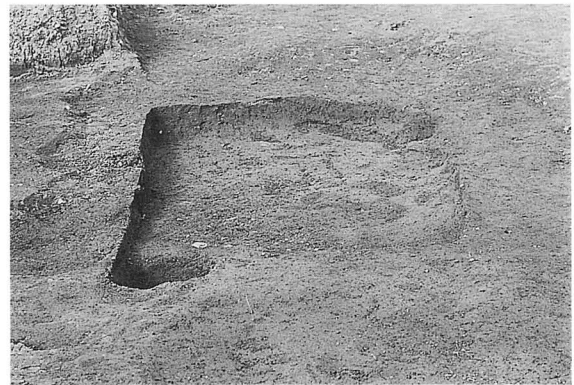
RD1160土坑全景（南西から）



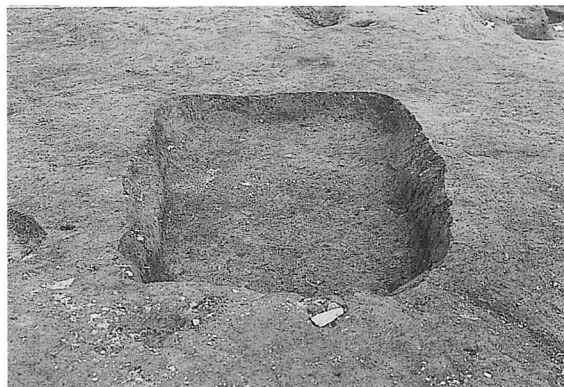
同左断面（南西から）



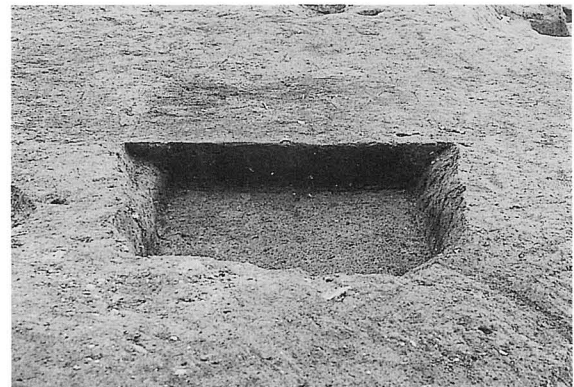
RD1161土坑全景（西から）



RD1164土坑全景（南から）



RD1162土坑全景（南東から）



同左断面（南東から）



RD1163土坑全景（西から）



同左断面（西から）

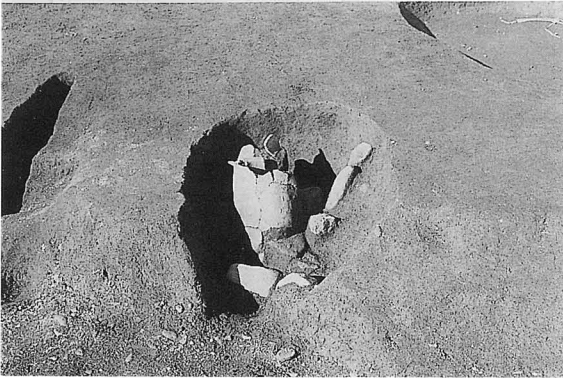
写真図版49 RD土坑(10)



RD1165土坑断面（南東から）



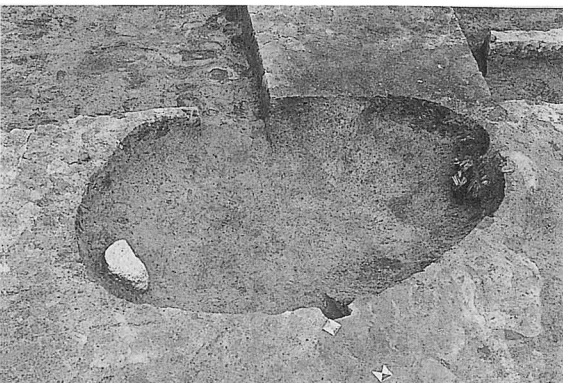
同左断面（南から）



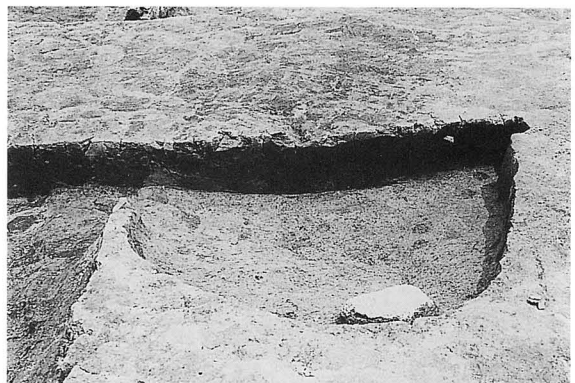
同上遺物出土状況（東から）



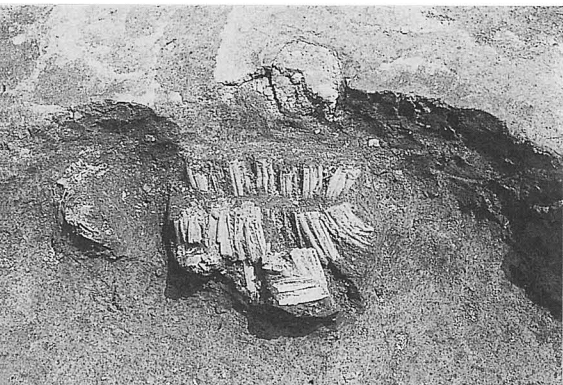
同左遺物出土状況（南から）



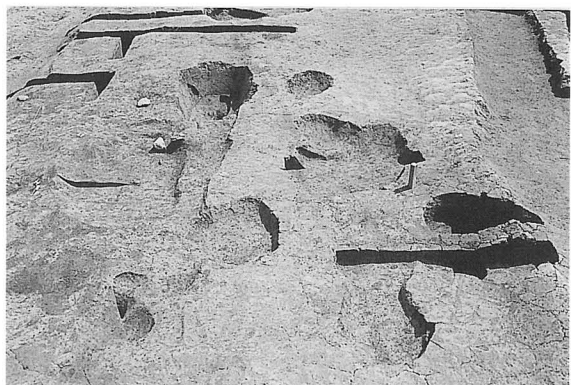
RD1166土坑全景（南東から）



同左断面（南西から）

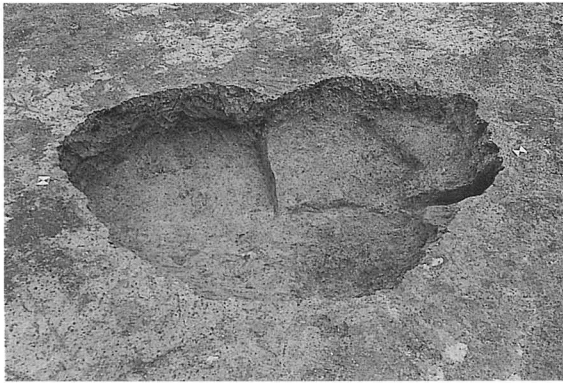


同上馬歯出土状況（南西から）

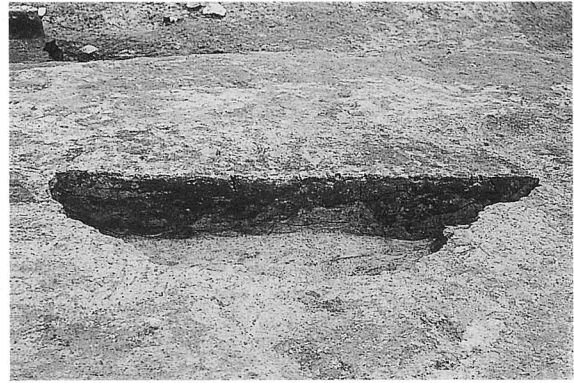


A区北東部土坑群（南西から）

写真図版50 RD土坑(11)



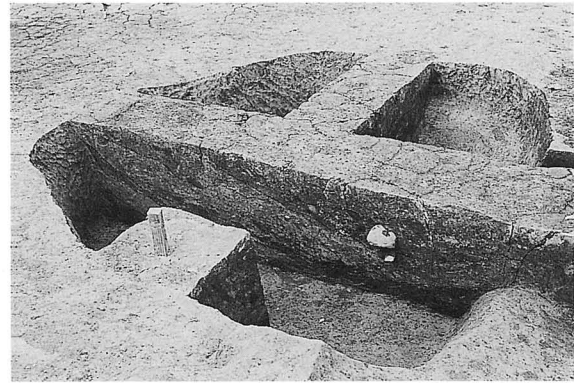
RD1167土坑全景（南から）



同左断面（南東から）



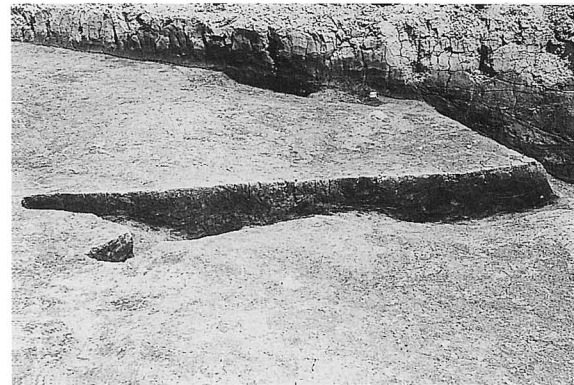
RD1168土坑全景（南東から）



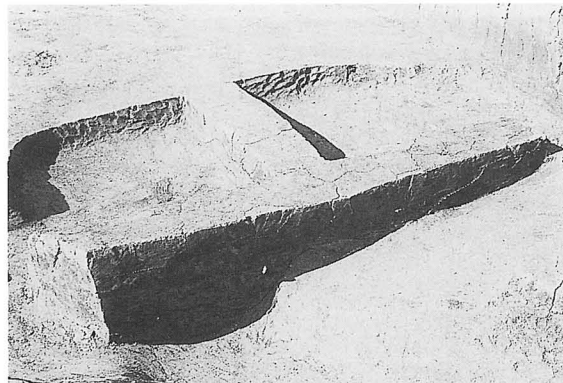
同左断面（南西から）



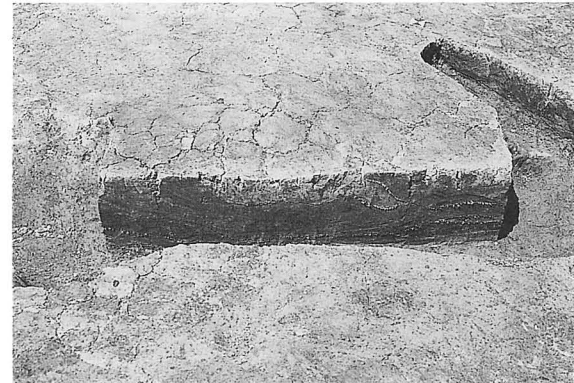
RD1169～1171土坑全景（南から）



RD1169土坑断面（南西から）

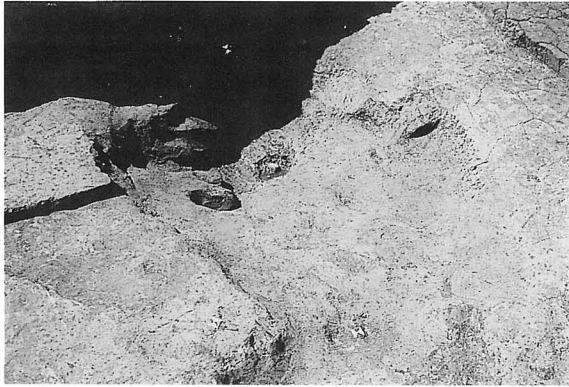


RD1170土坑断面（南から）

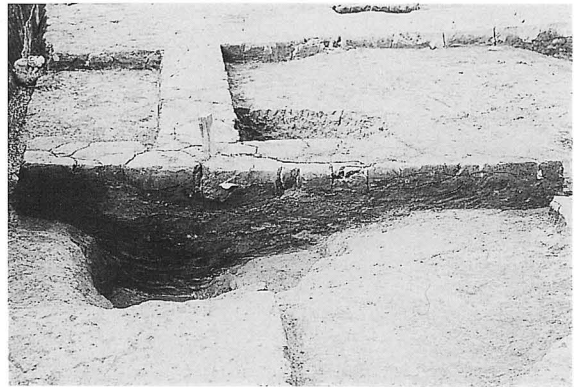


RD1171土坑断面（南から）

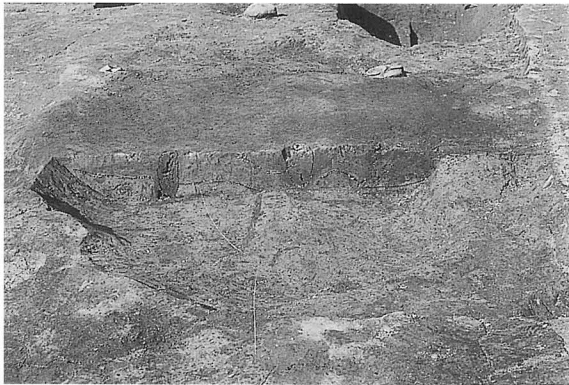
写真図版51 RD土坑(12)



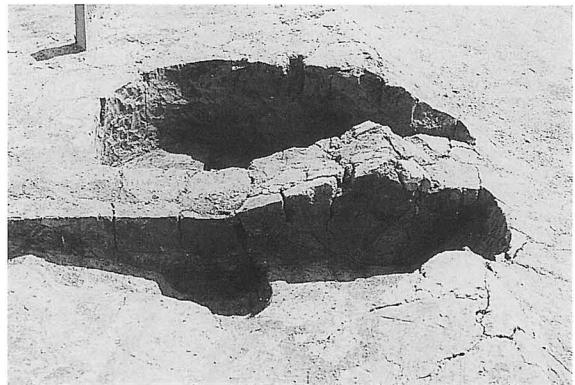
RD1172土坑全景（南から）



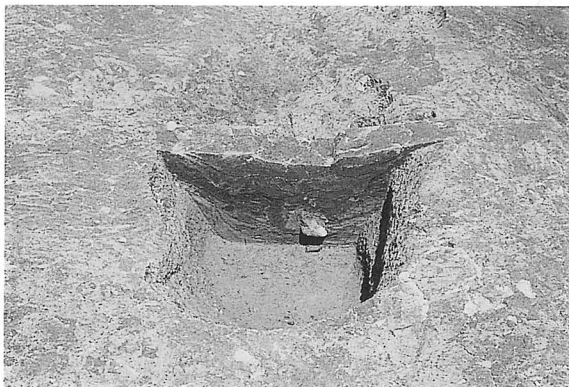
同左（南西から）



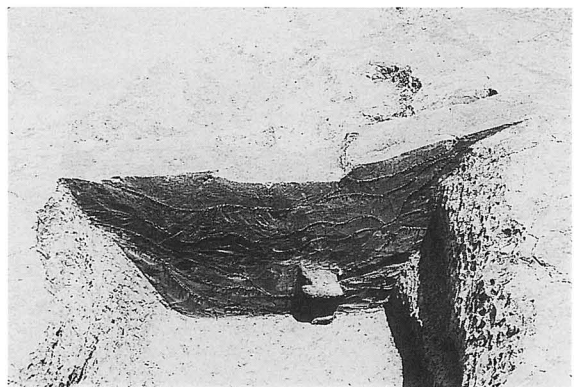
RD1173土坑全景（南西から）



RD1174土坑断面（南西から）



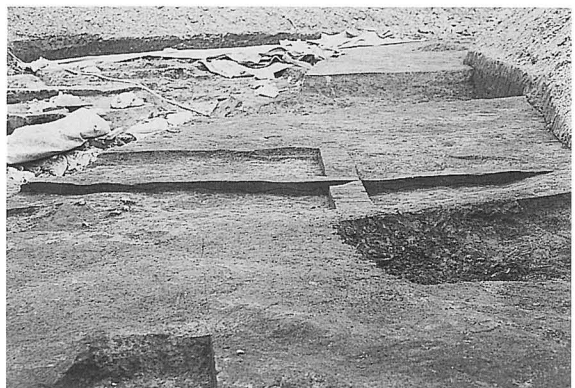
RD1175土坑全景（西から）



同左断面（西から）



RD1176・1179土坑全景

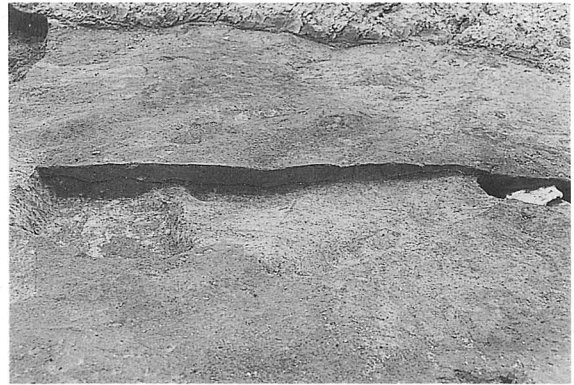


RD1176土坑断面（南東から）

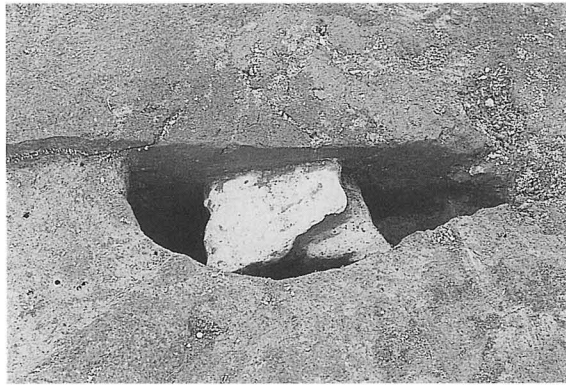
写真図版52 RD土坑(13)



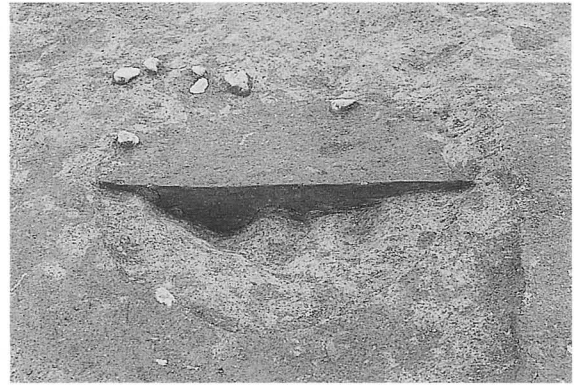
RD1177・1178土坑全景（南西から）



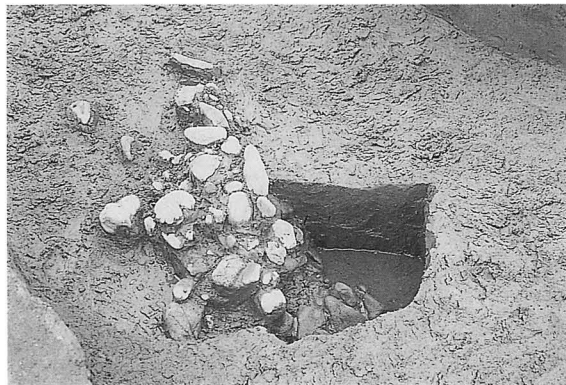
RD1177土坑断面（南西から）



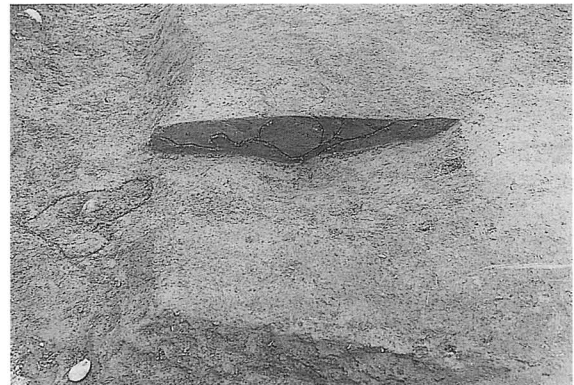
RD1178土坑断面（南西から）



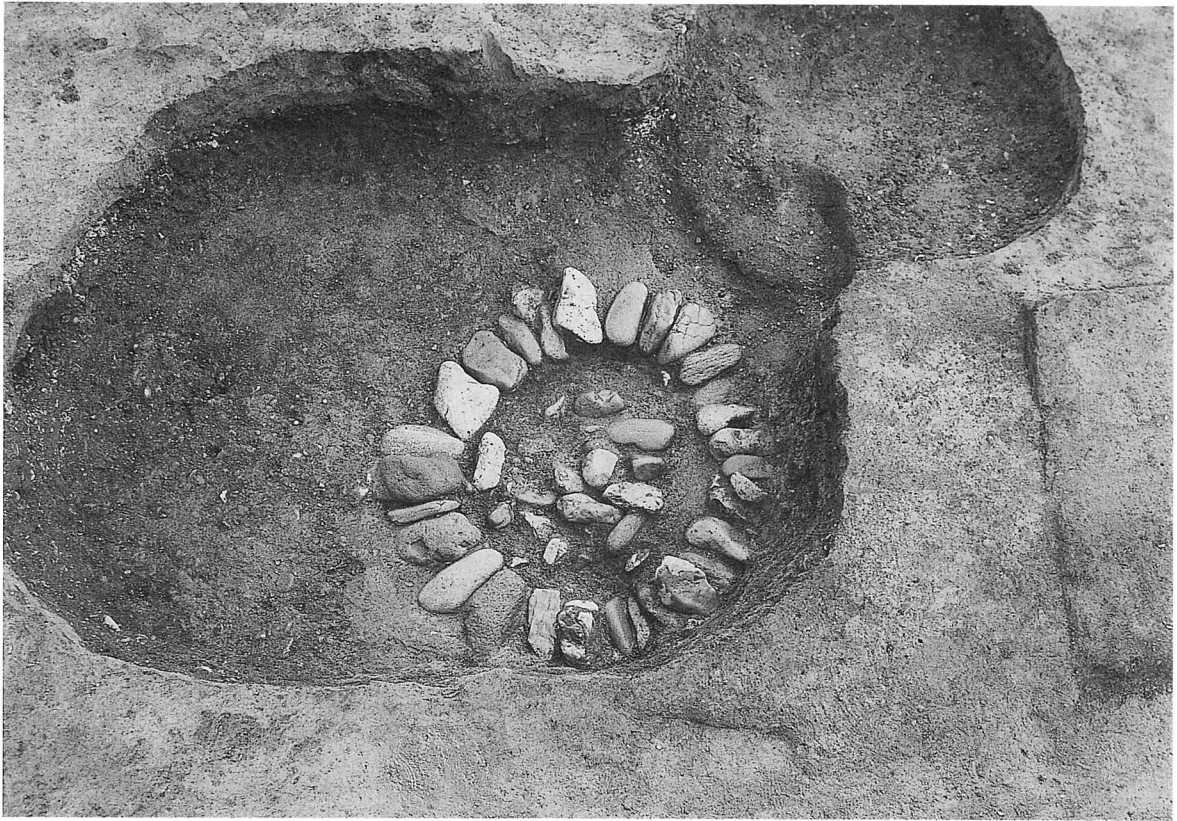
RD1179土坑断面（西から）



RD1180土坑断面（東から）



RF065焼土遺構断面（東から）



全景（北から）



全景（南東から）



断面（東から）



断面（南東から）



全景（木柁出土状況・北東から）

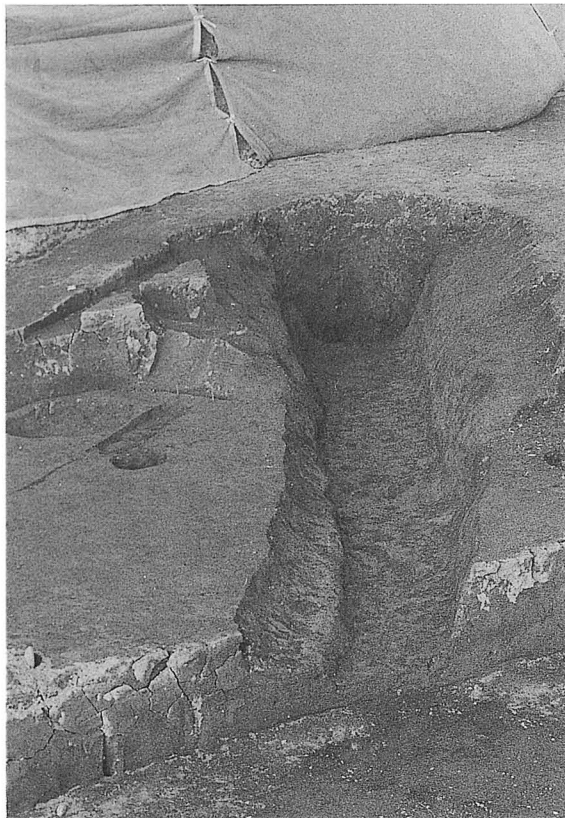
写真図版54 RI017井戸跡



RG016溝跡全景（北西から）



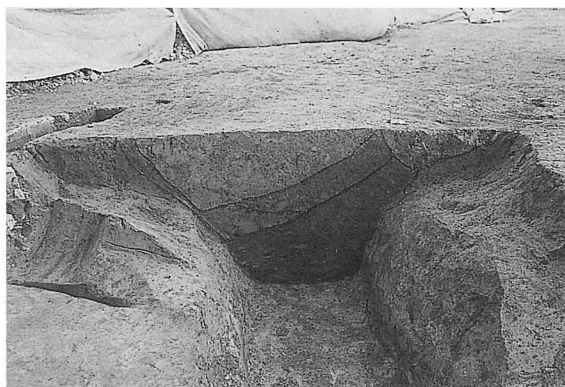
同左断面（北から）



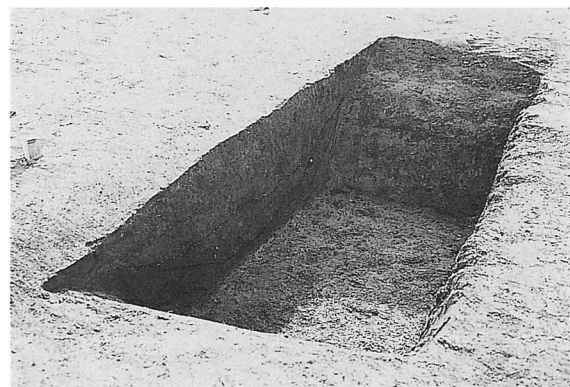
RG043溝跡全景（南西から）



RG045溝跡全景（南東から）

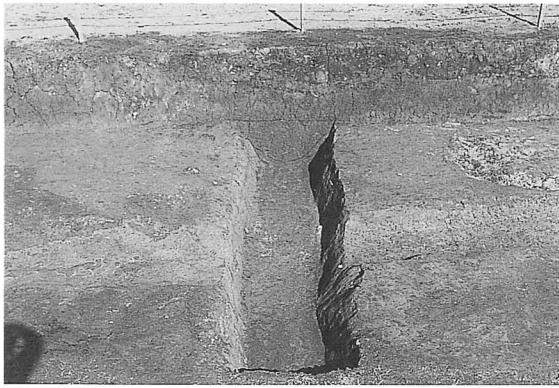


同上断面（南西から）

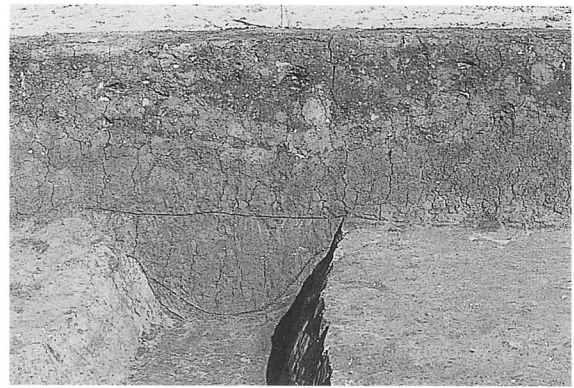


同上断面（北東から）

写真図版55 RG溝跡(1)



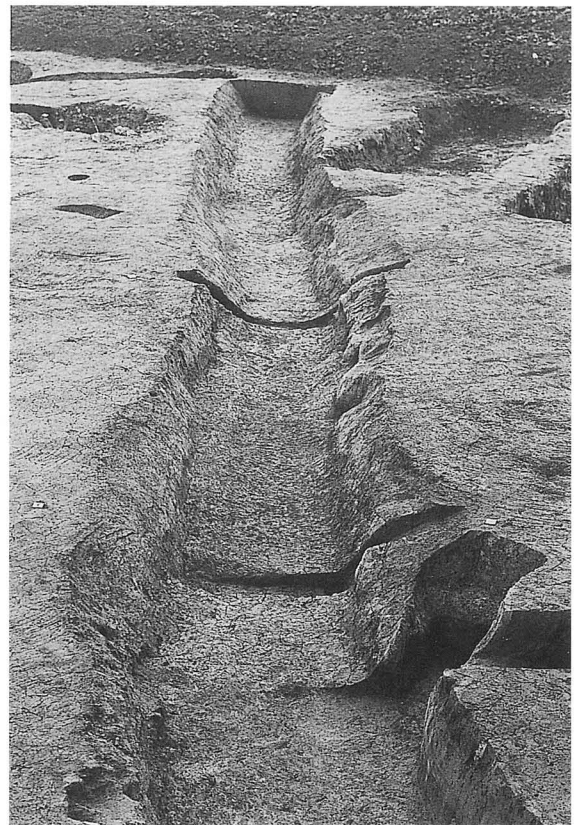
RG198溝跡全景（南から）



同左断面（南から）



RG200溝跡全景（C区・西から）



RG200溝跡全景（D区・南西から）



同上断面（南西から）



同上断面（南西から）

写真図版56 RG溝跡(2)



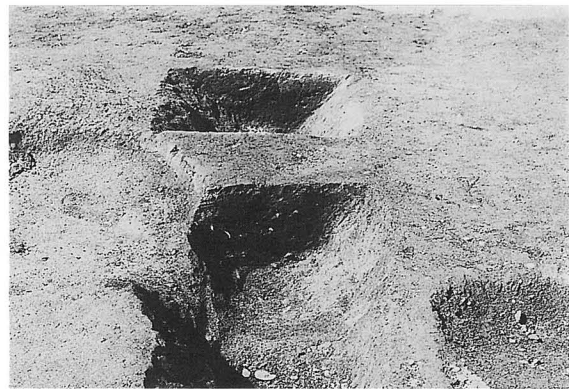
RG201溝跡全景（東から）



RG223溝跡全景（南から）



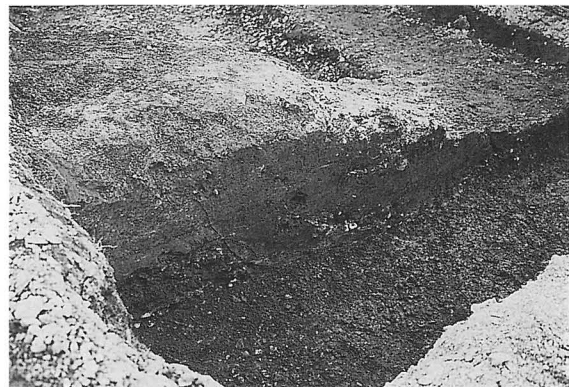
同上断面（西から）



同上断面（南から）



RG264溝跡全景（南西から）



同左溝跡断面（南東から）

写真図版57 RG溝跡(3)



RG264堀跡東側全景（南西から）

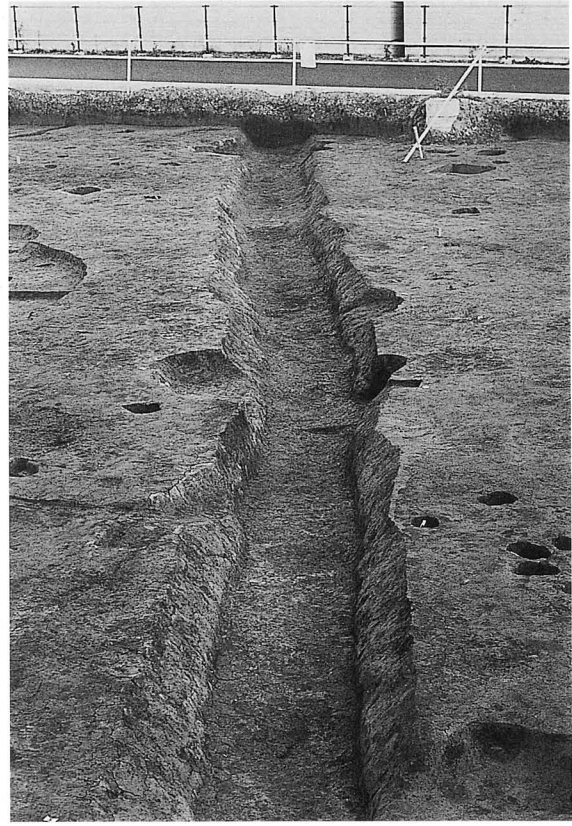


RG264堀跡西側全景（東から）

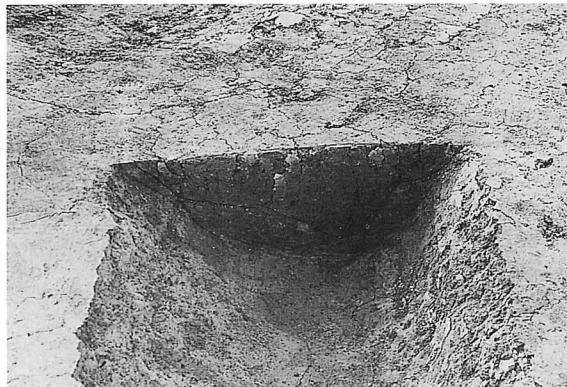
写真図版58 RG溝跡(4)



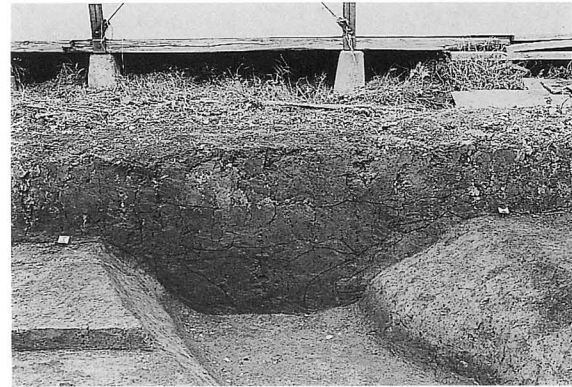
RG265溝跡全景（南から）



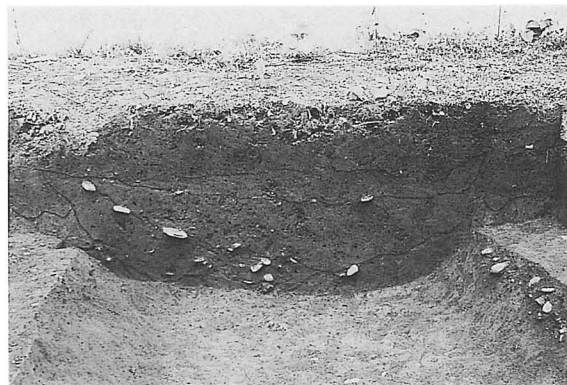
RG267溝跡全景（南東から）



同上断面（南から）



同上断面（南東から）



RG273溝跡断面（南東から）

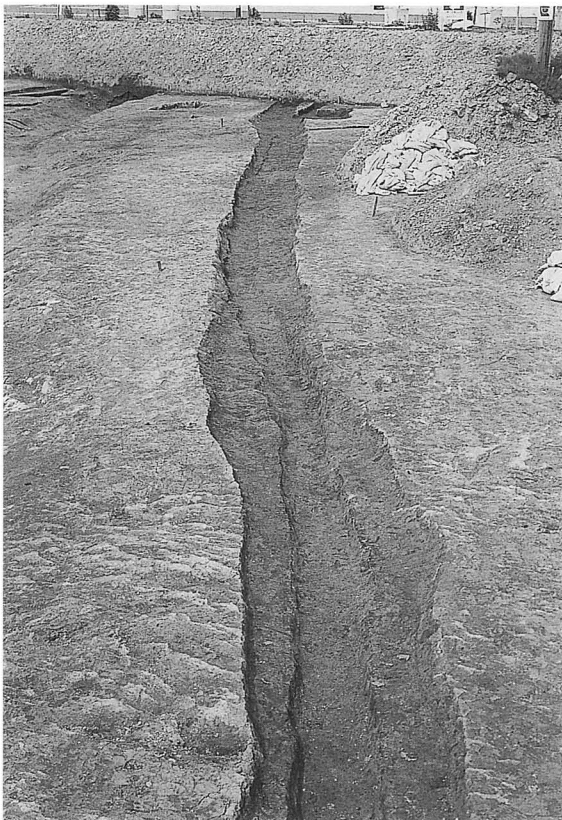


同左断面（北西から）

写真図版59 RG溝跡(5)



RG273溝跡全景（北西から）



RG319・323溝跡全景（南西から）

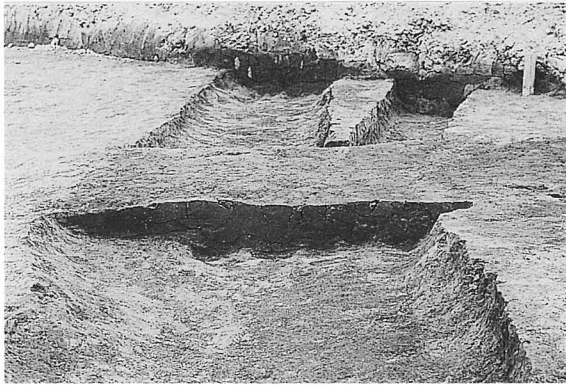


同左全景（西側・南西から）

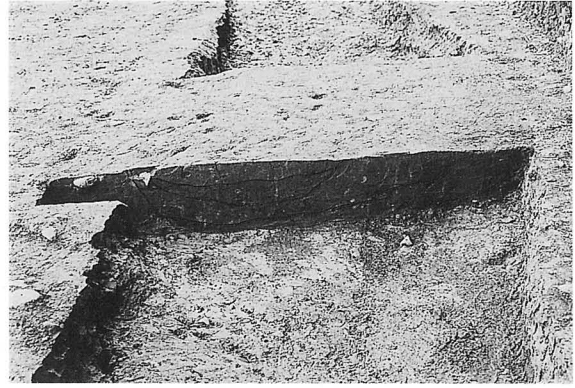


同左全景（拡張部・南西から）

写真図版60 RG溝跡(6)



RG319・323溝跡断面（南西から）



同左断面（南西から）



RG487溝跡全景（北から）



同左全景（南から）



同上断面（南から）

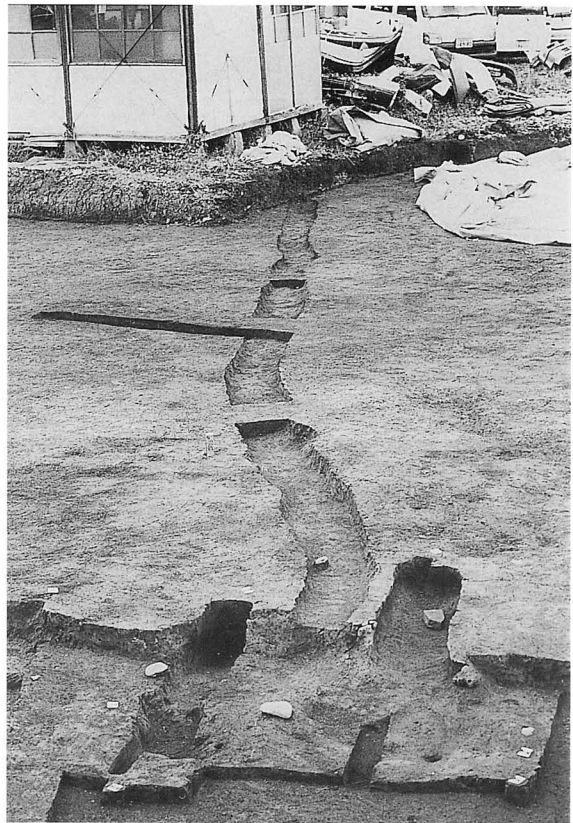


同上断面（南から）

写真図版61 RG溝跡(7)



RG488溝跡全景（北西から）



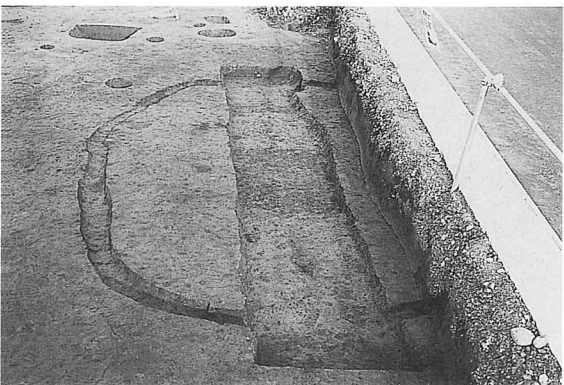
RG489溝跡全景（南東から）



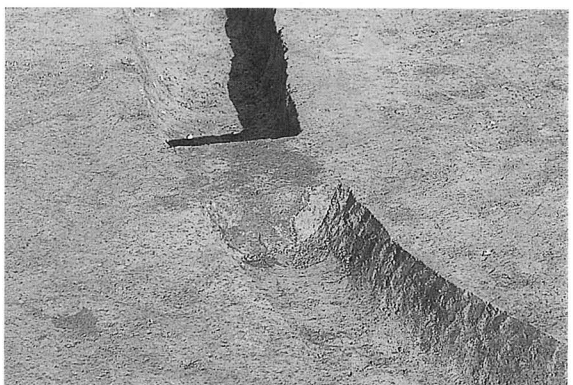
同上断面（南東から）



同上断面（南東から）



RG490溝跡全景（西から）

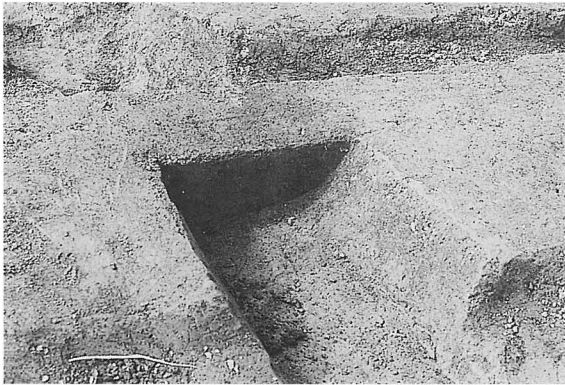


同左断面（西から）

写真図版62 RG溝跡(8)



RG491溝跡検出（西から）



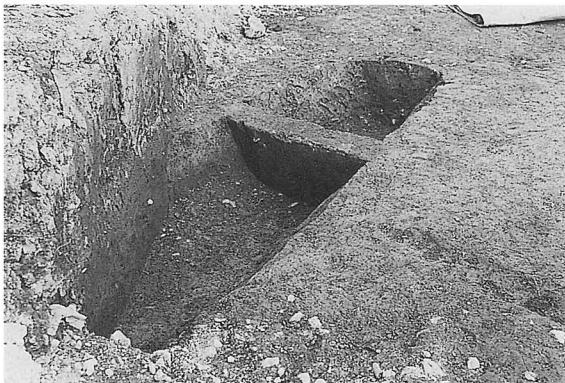
RG492溝跡断面（北東から）



RG492溝跡全景（北東から）



RG493溝跡全景（南西から）

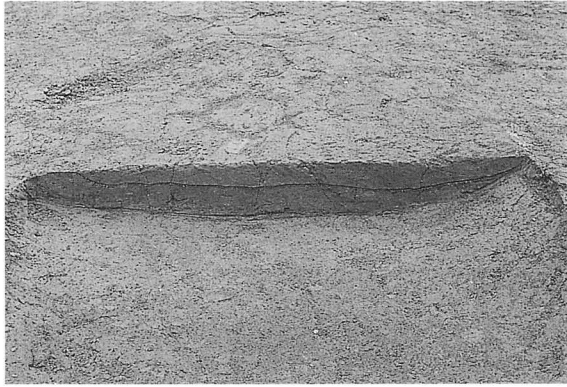


同上断面（南から）

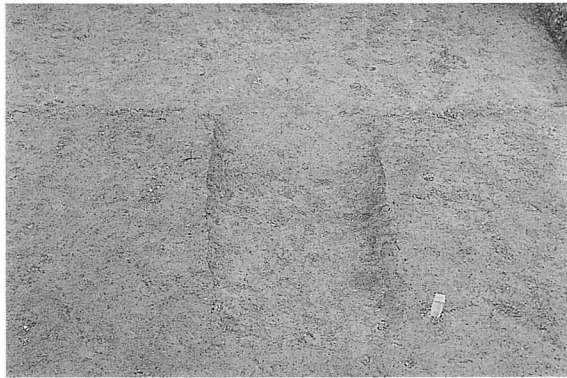


RG494溝跡全景（北から）

写真図版63 RG溝跡(9)



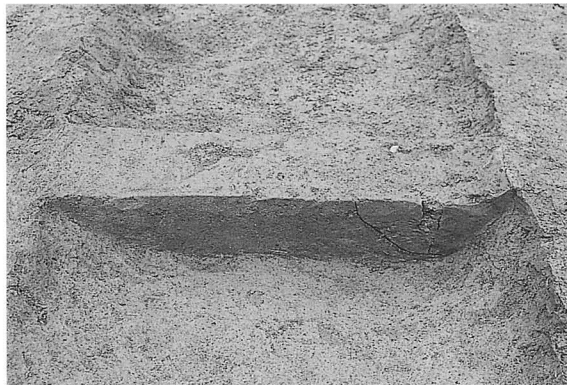
RG494溝跡断面（南から）



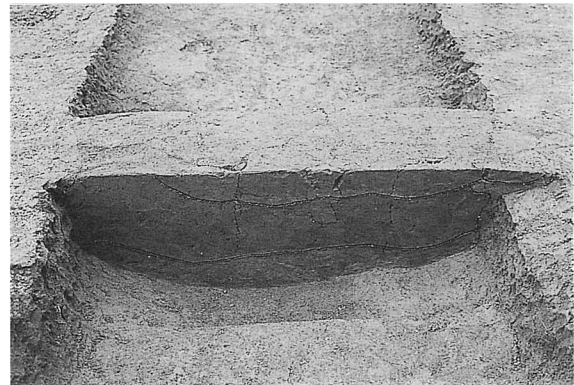
RG495溝跡全景（北から）



RG496溝跡（北から）



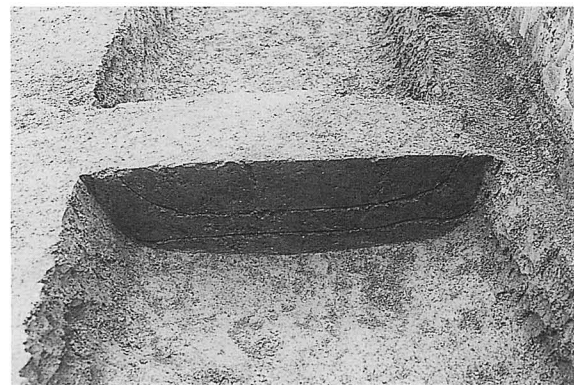
同上断面（南から）



同上断面（南から）



RG497溝跡全景（北西から）



同左断面（南東から）

写真図版64 RG溝跡(10)



A区溝跡全景（北東から）

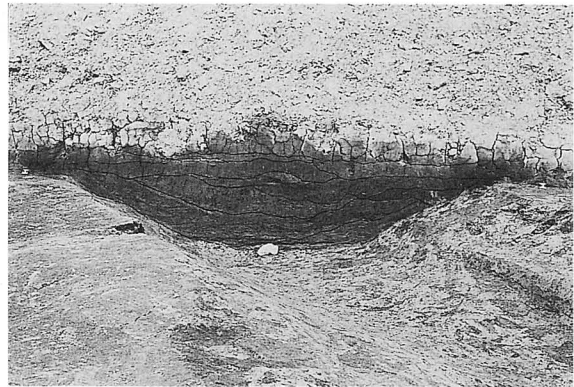


同上全景（南西から）

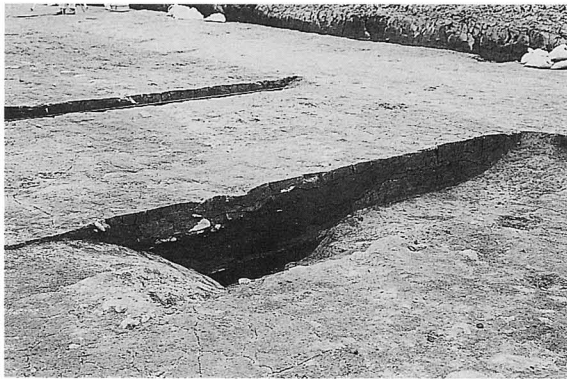
写真図版65 RG溝跡(1)



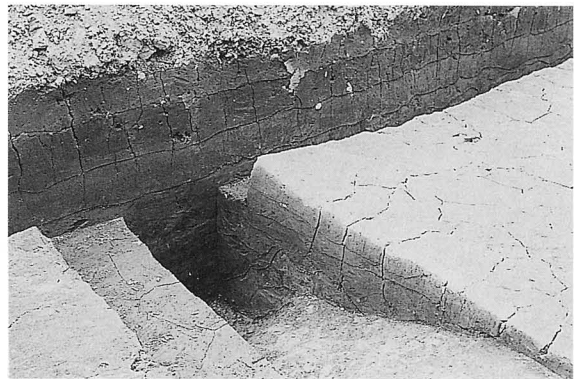
RG498・499溝跡全景（拡張部・西から）



同左断面（南西から）



同上断面（東から）



同左断面（南西から）



同上遺物出土状況（南から）



同左遺物出土状況（南から）

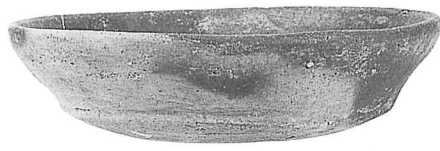


RG502溝跡全景（南西から）



旧河道断面（南西から）

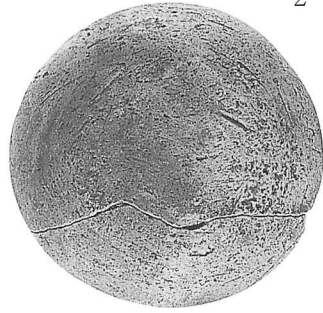
写真図版66 RG溝跡(12)



1



2



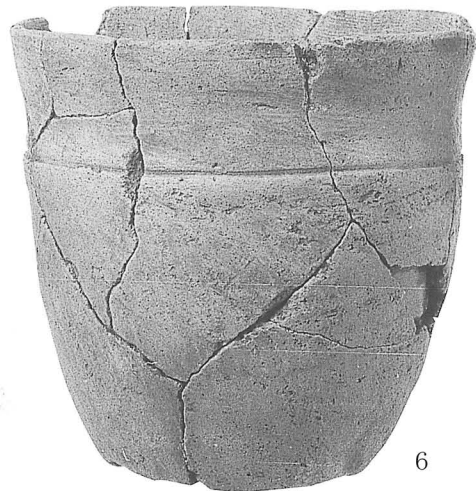
3



4

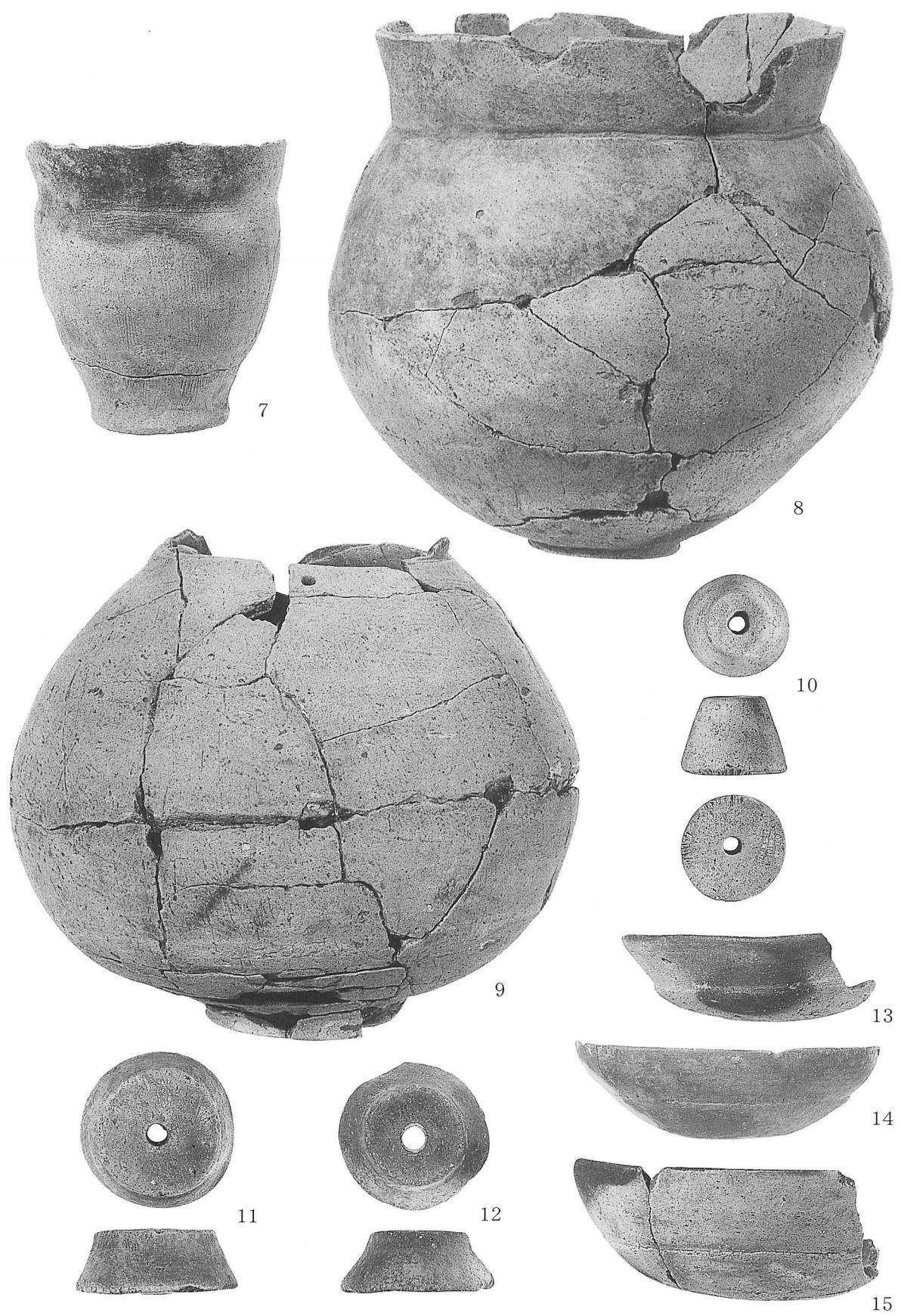


5



6

写真図版67 出土遺物(1)



写真図版68 出土遺物(2)



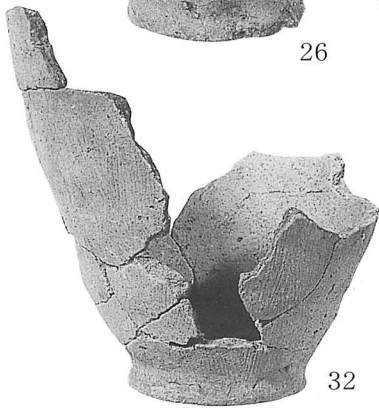
写真図版69 出土遺物(3)



26



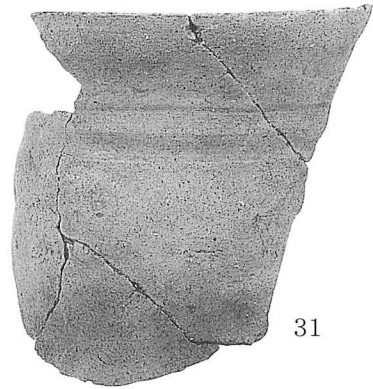
29



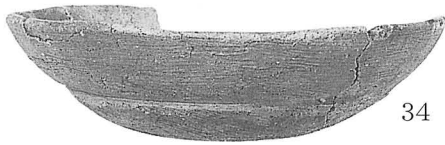
32



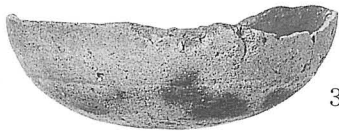
33



31



34



35



39

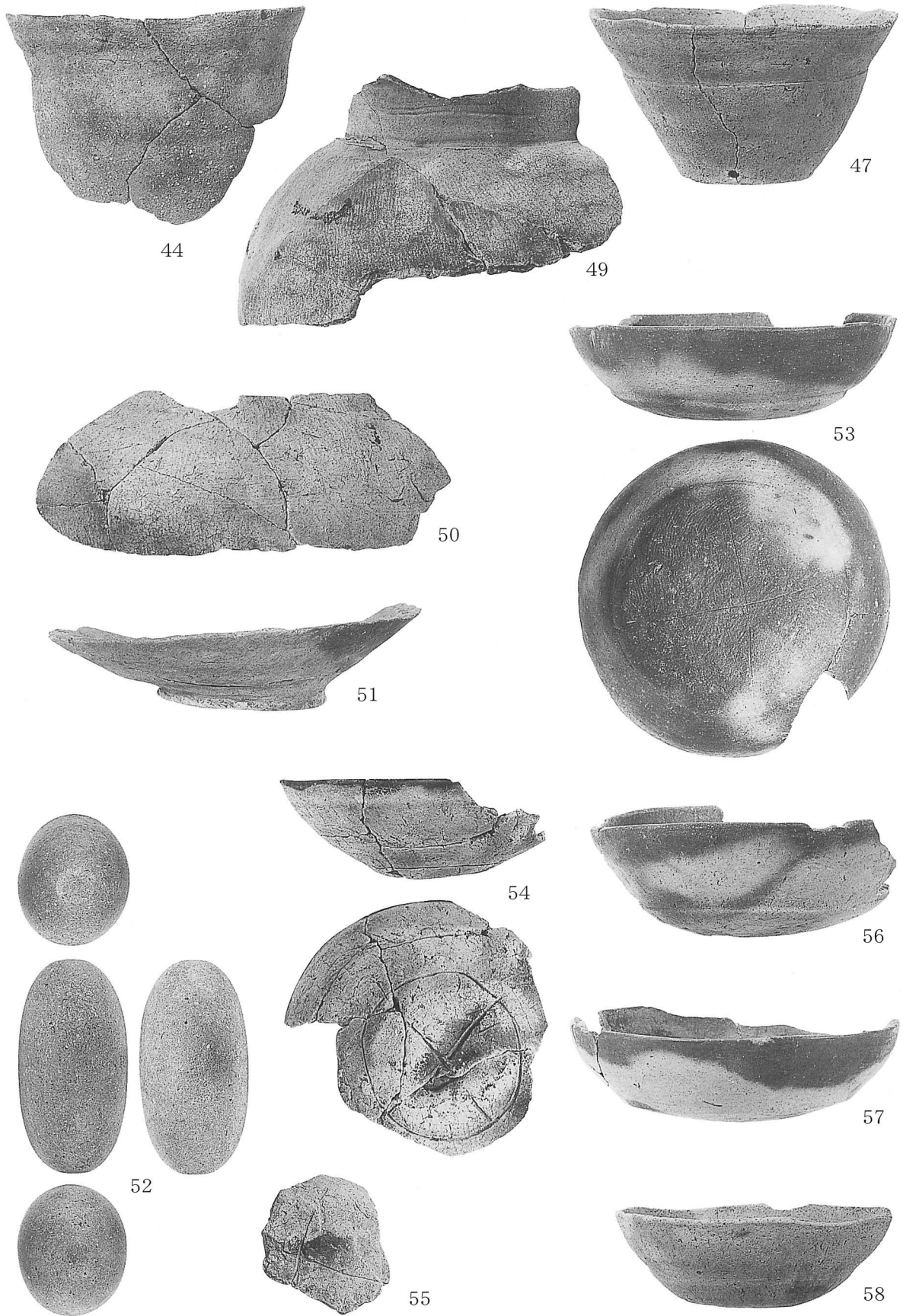


37

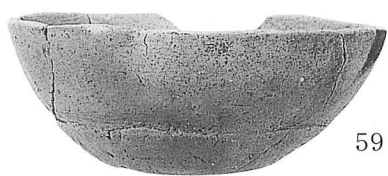
写真図版70 出土遺物(4)



写真図版71 出土遺物(5)



写真図版72 出土遺物(6)



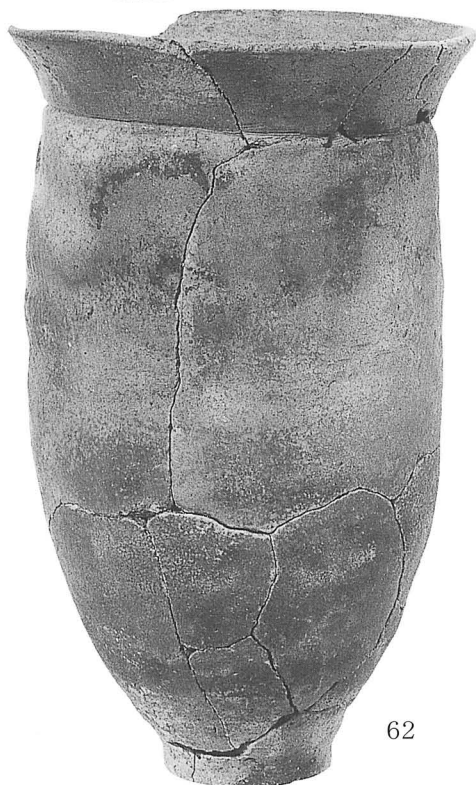
59



60



61



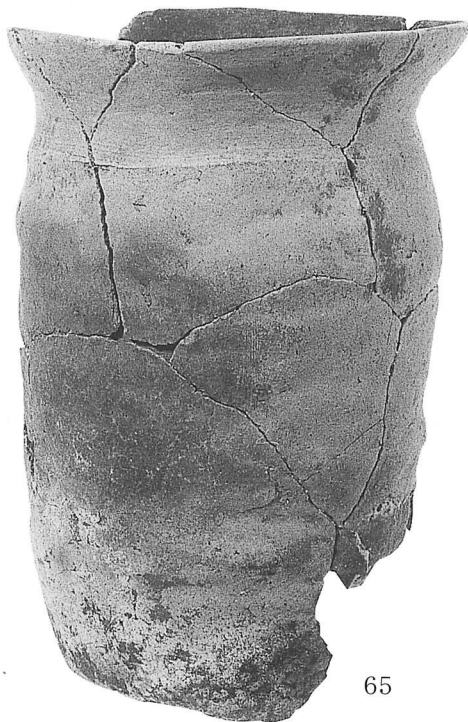
62



64

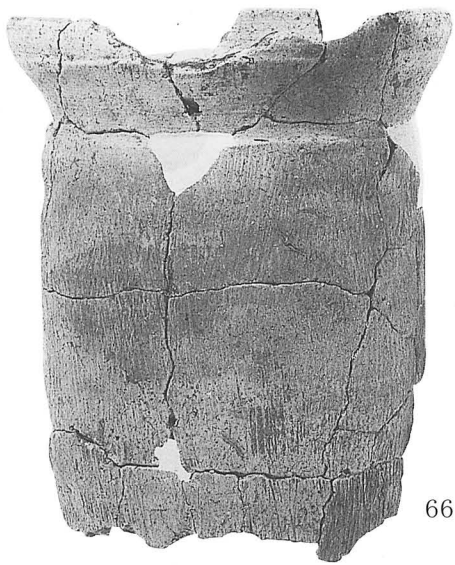


63

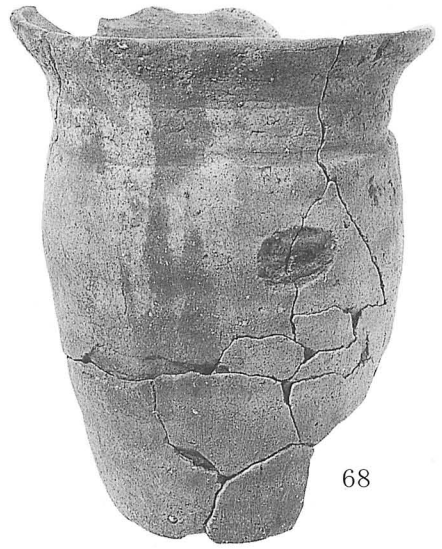


65

写真図版73 出土遺物(7)



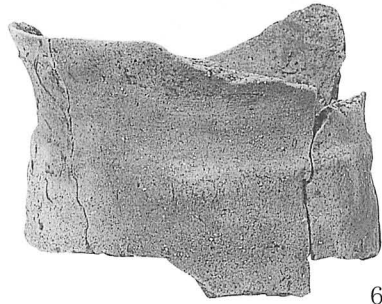
66



68



67



69



70

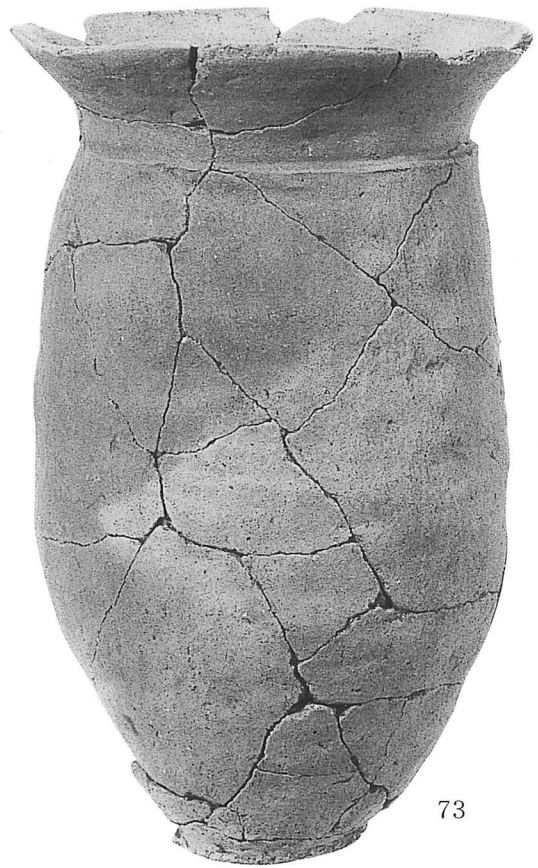


72

写真図版74 出土遺物(8)



71



73



74



75



76



77



78



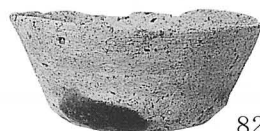
79



80



81



82



83

写真図版75 出土遺物(9)



85



84



86



87



88



90

写真図版76 出土遺物(10)



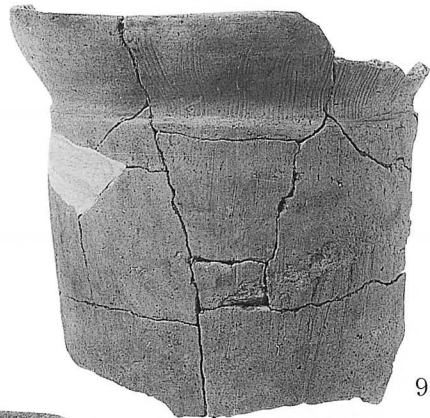
91



92



94



93

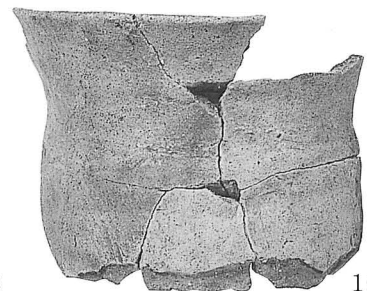
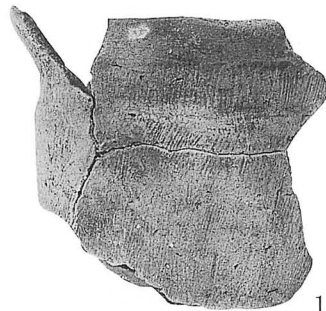
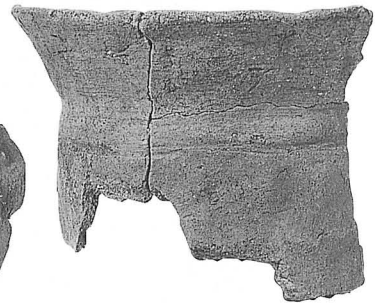
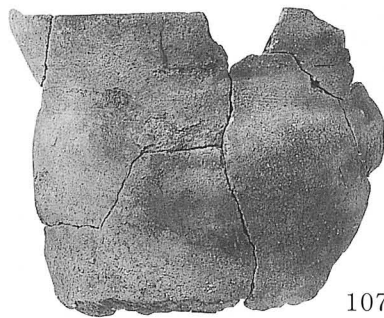
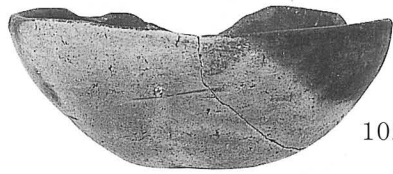
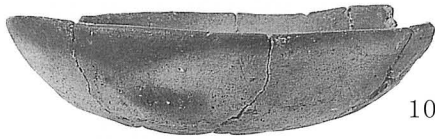
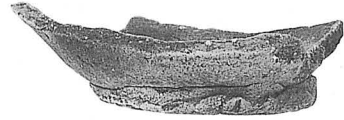
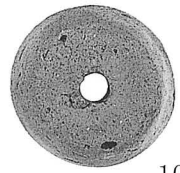
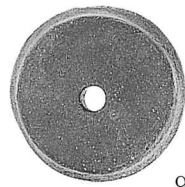


95

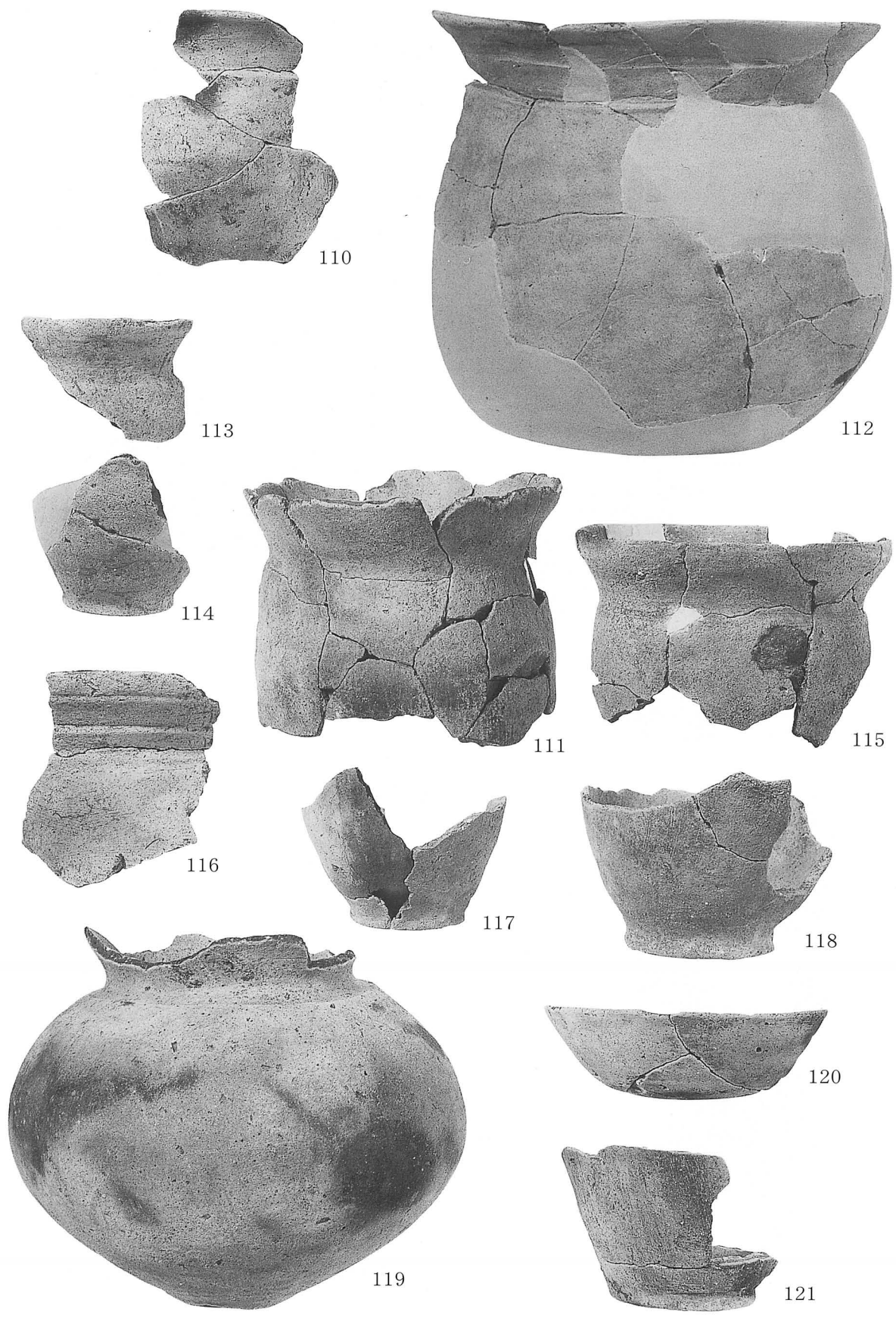


96

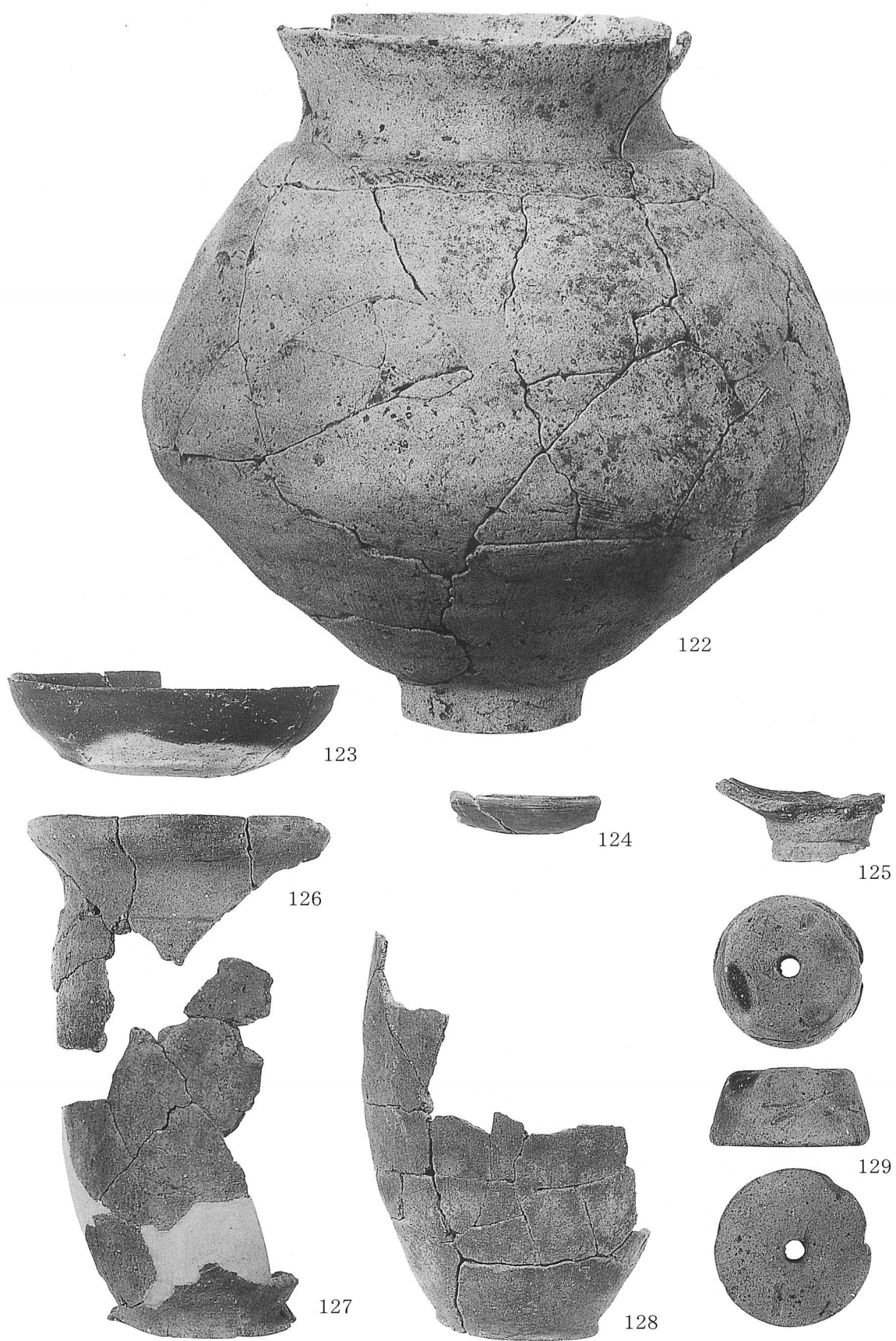
写真図版77 出土遺物(11)



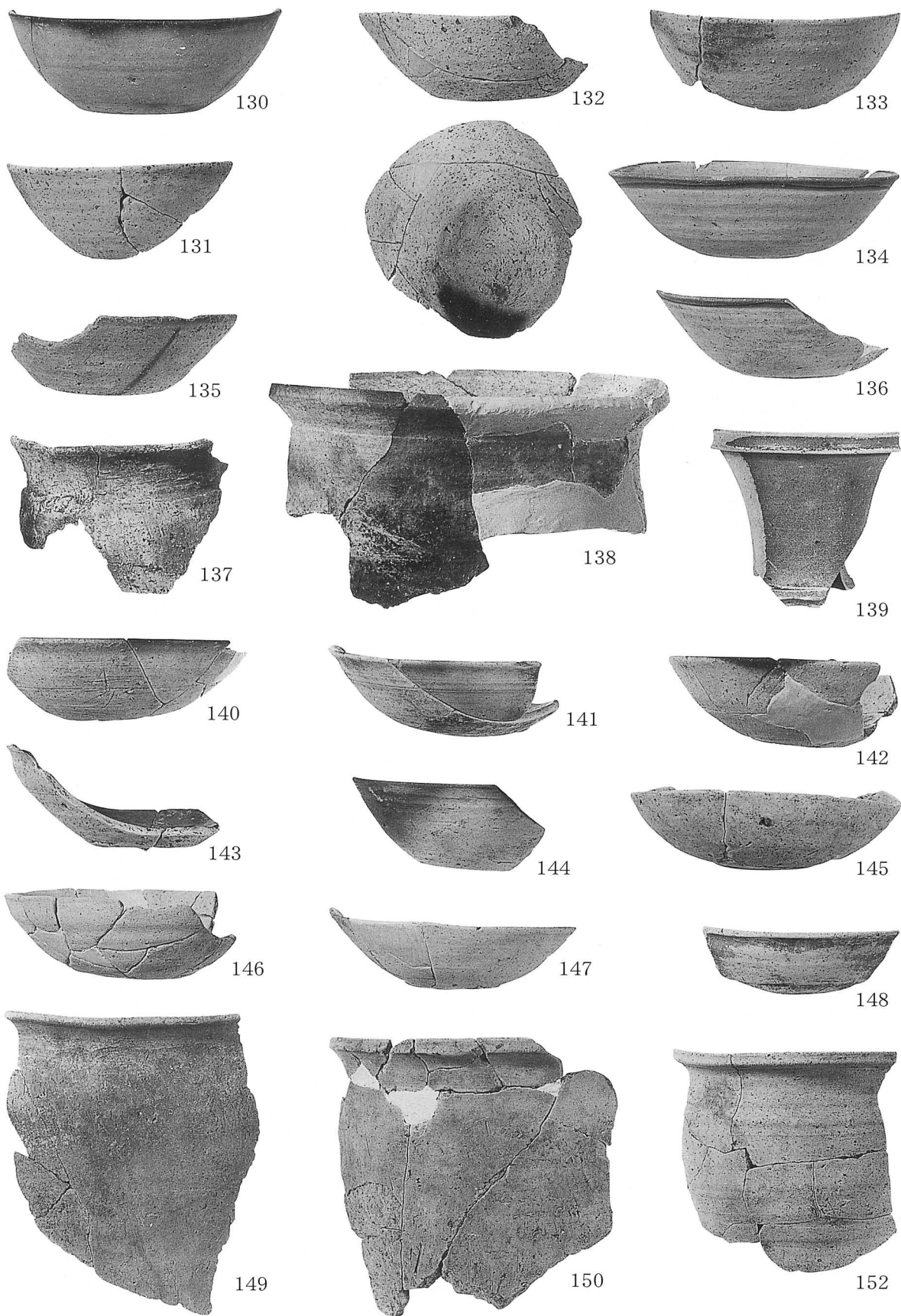
写真図版78 出土遺物(12)



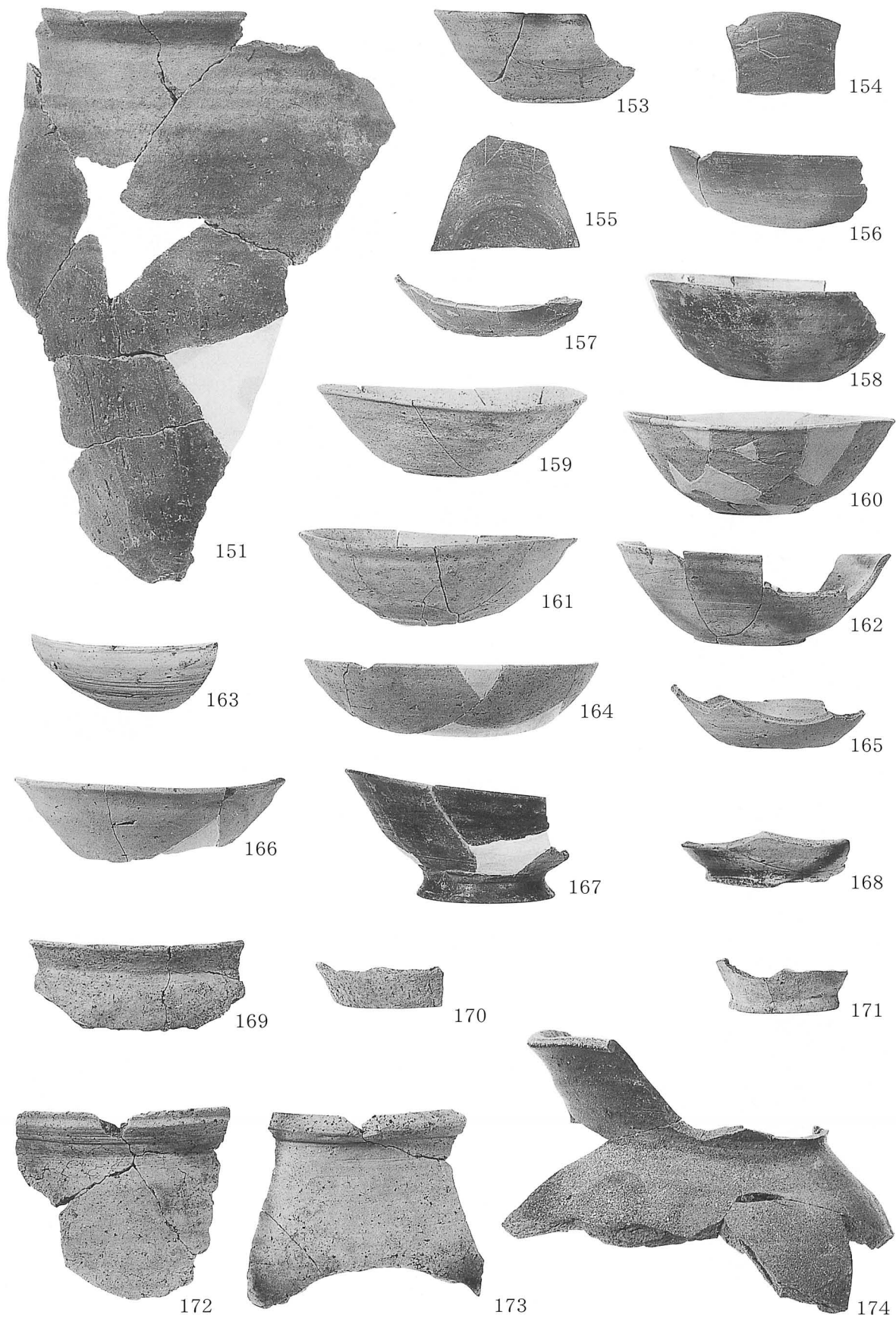
写真図版79 出土遺物(13)



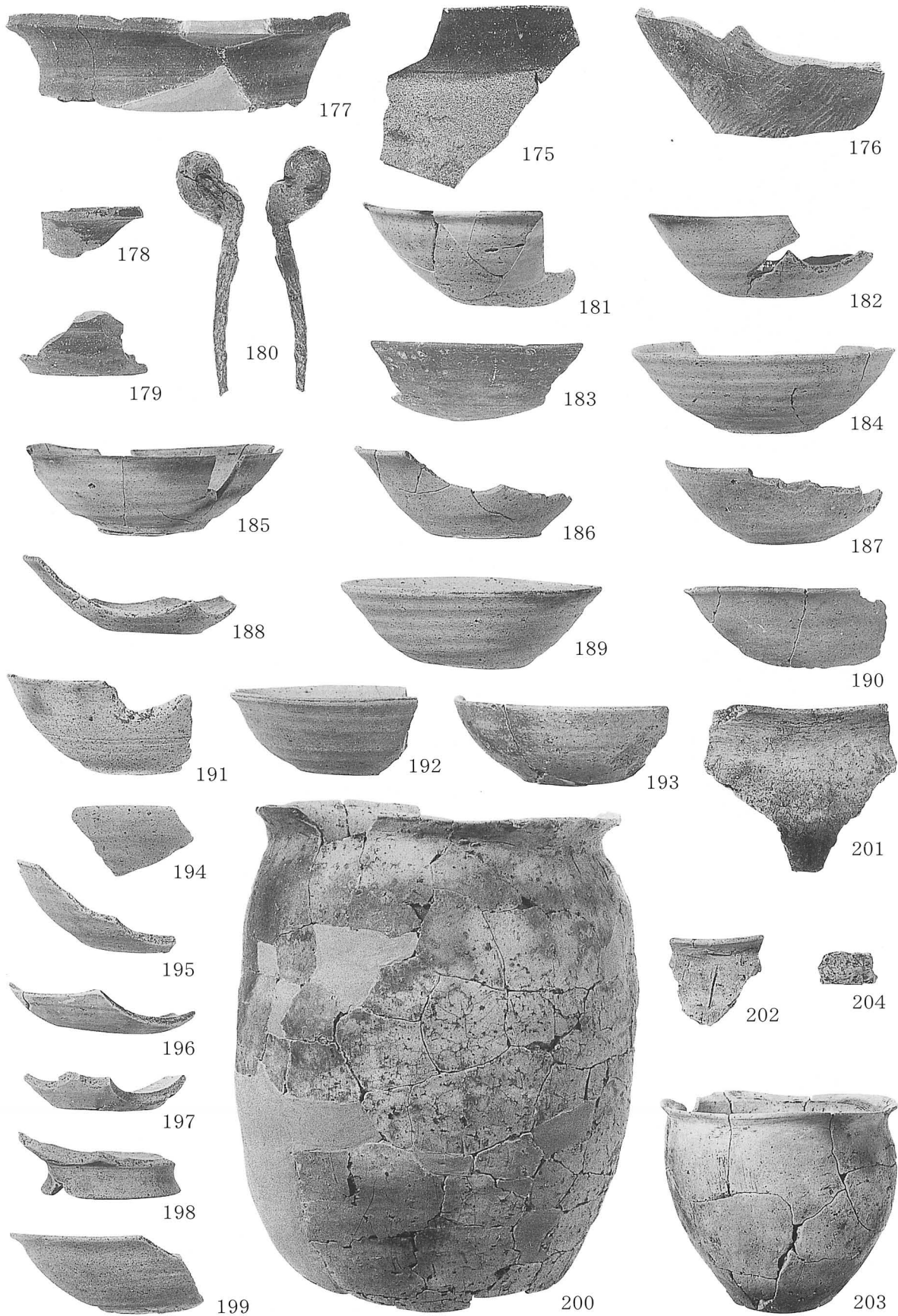
写真図版80 出土遺物(14)



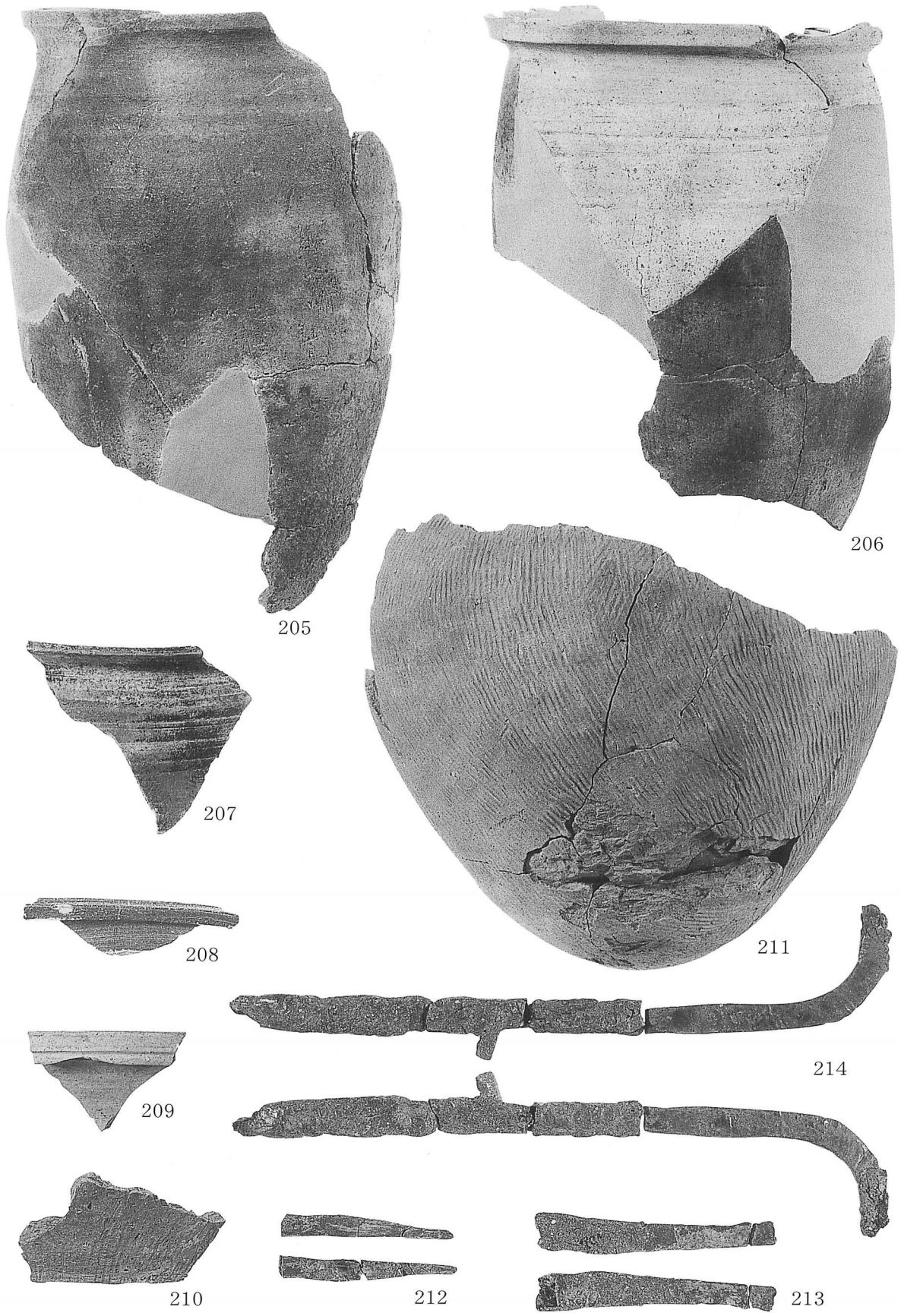
写真図版81 出土遺物(15)



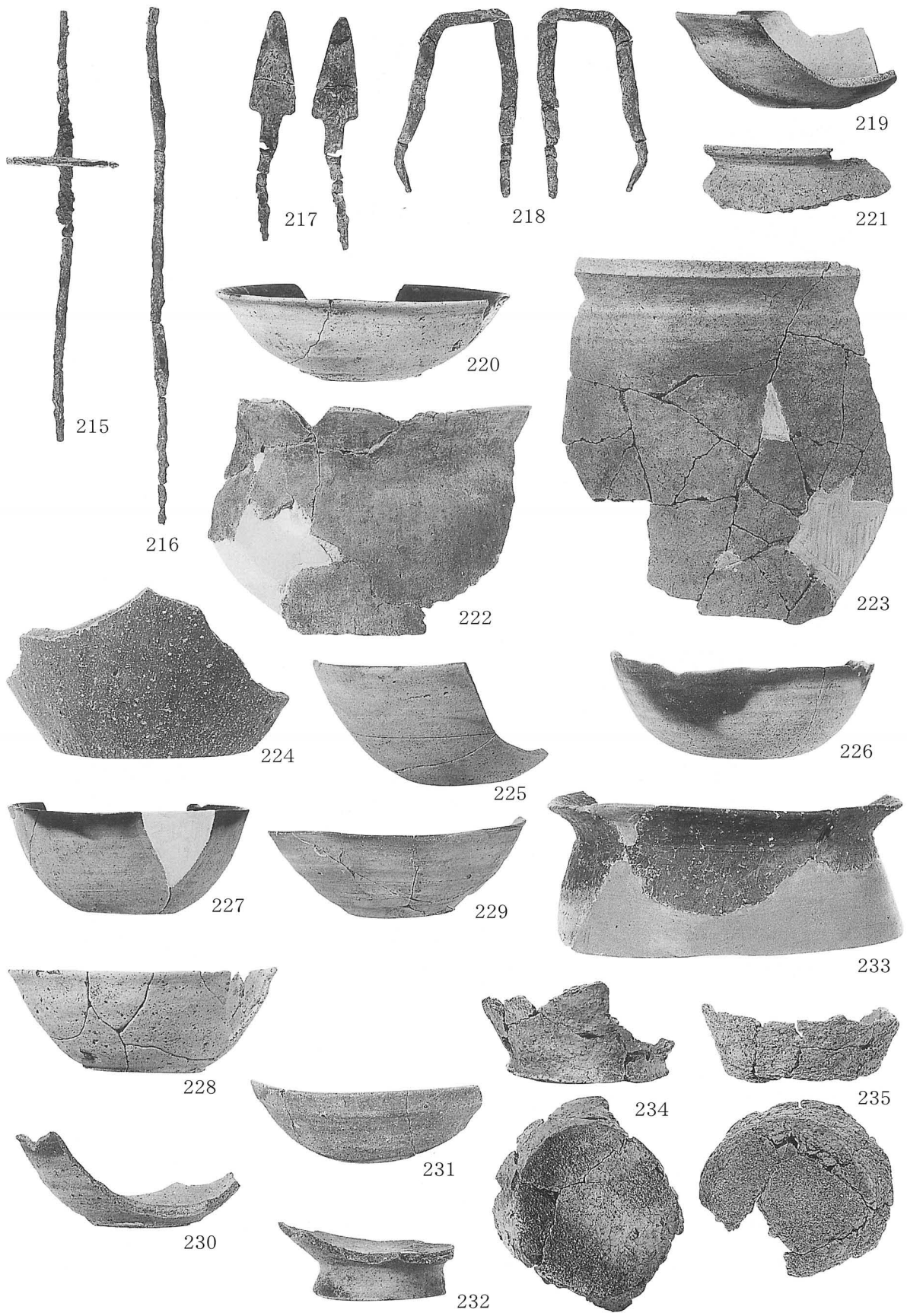
写真図版82 出土遺物(16)



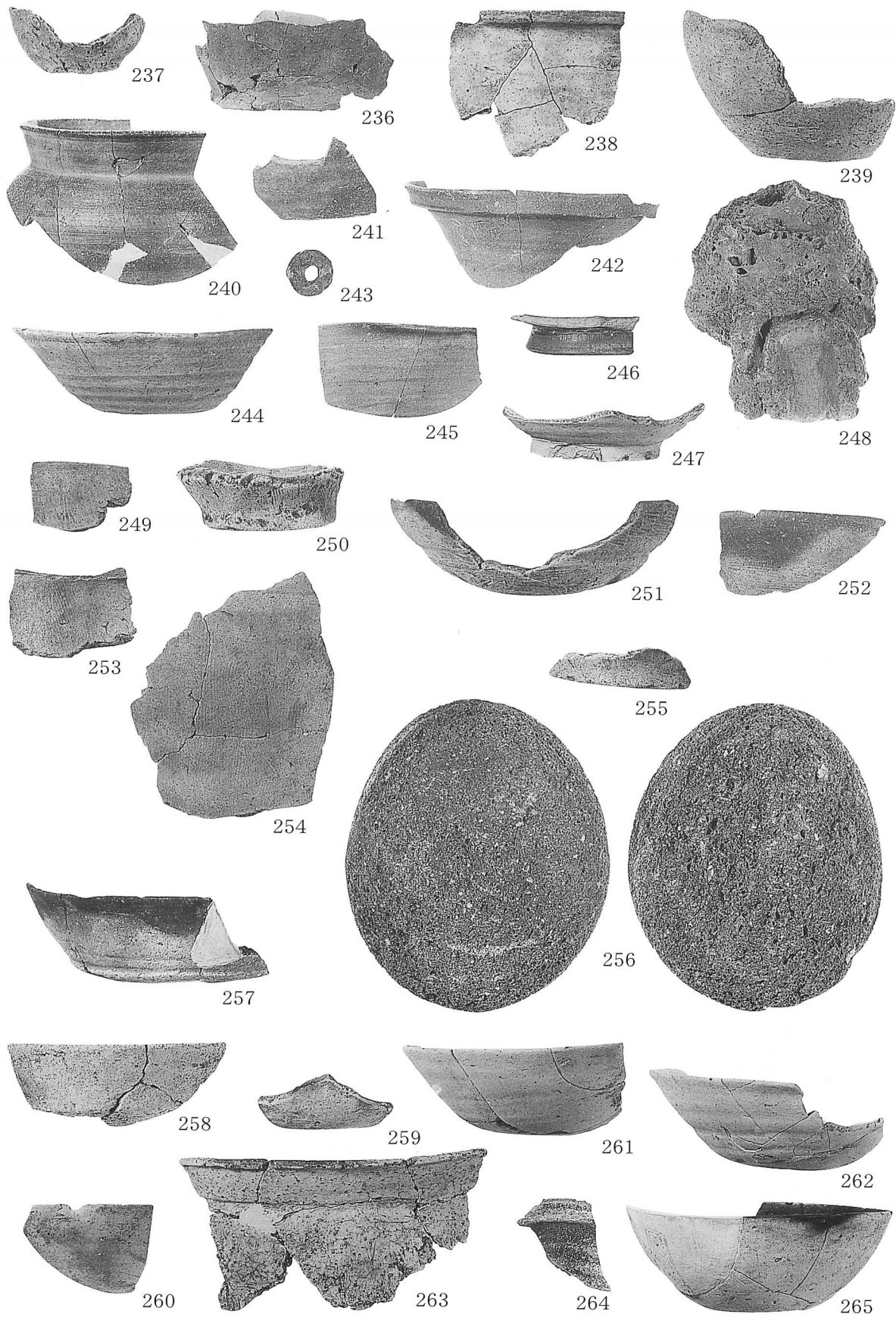
写真図版83 出土遺物(17)



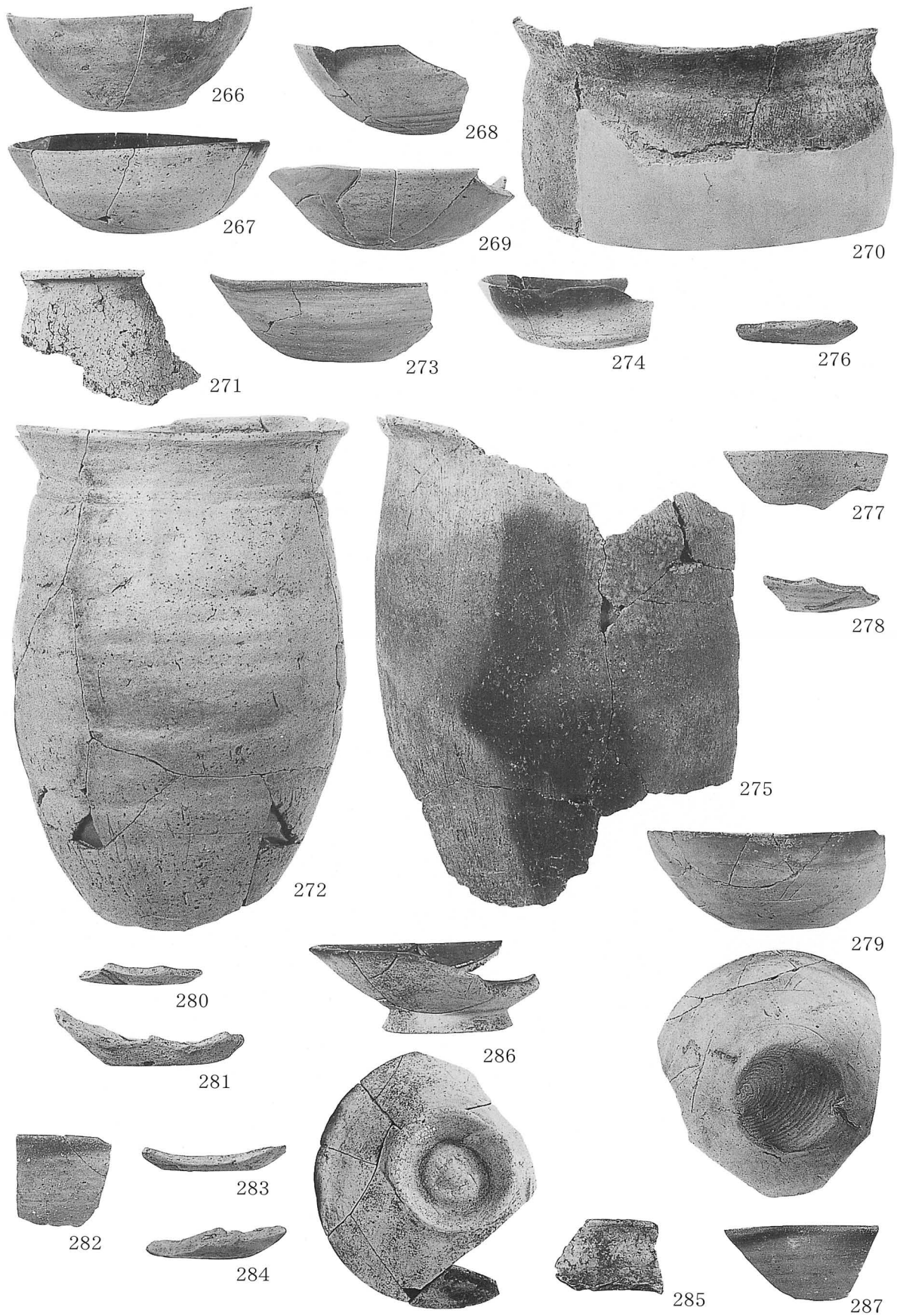
写真図版84 出土遺物(18)



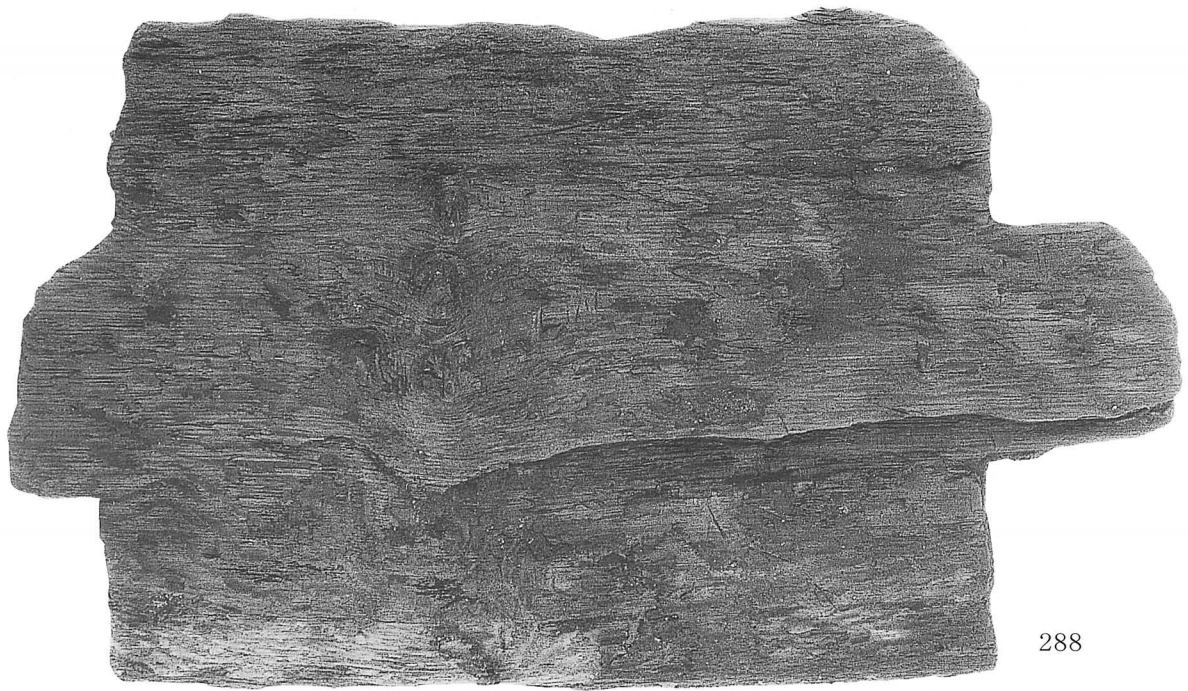
写真図版85 出土遺物(19)



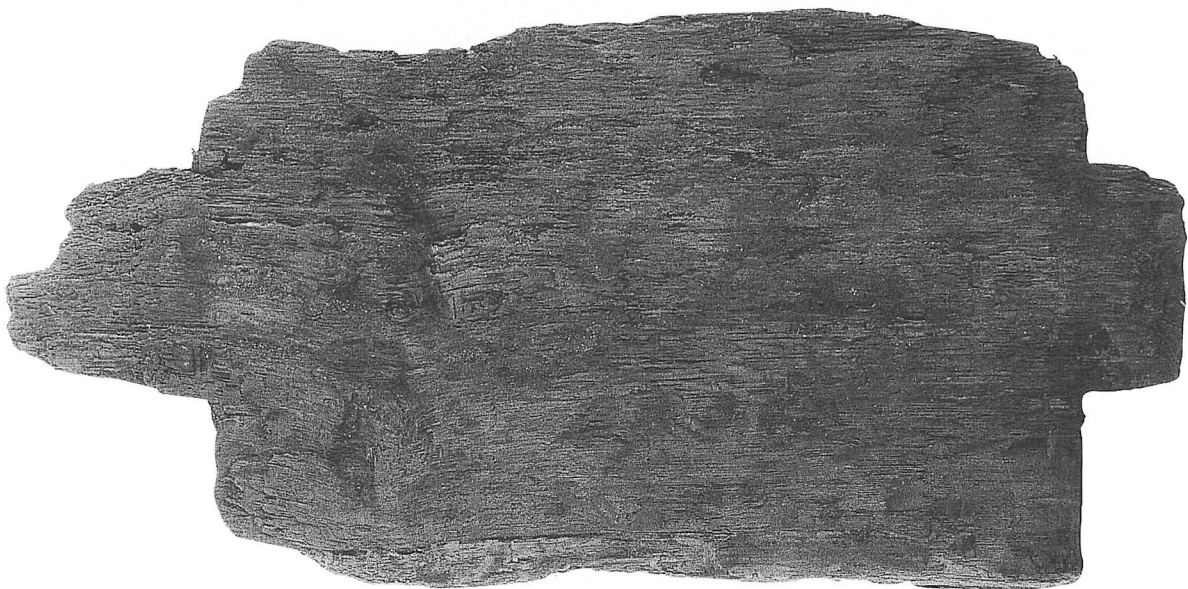
写真図版86 出土遺物(20)



写真图版87 出土遺物(21)



288

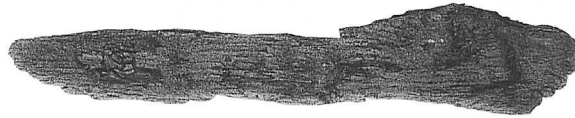


289

写真図版88 出土遺物(22)

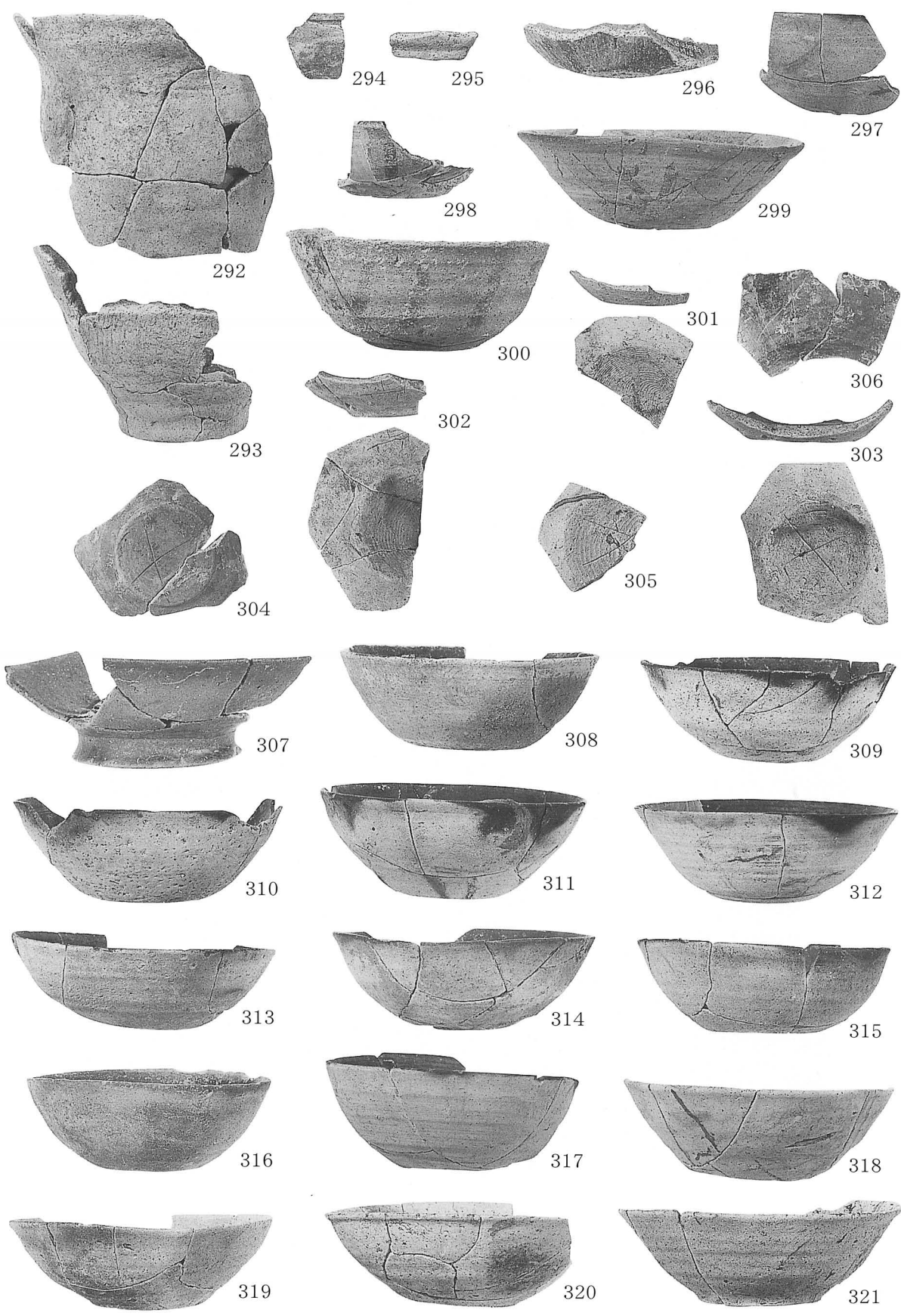


290

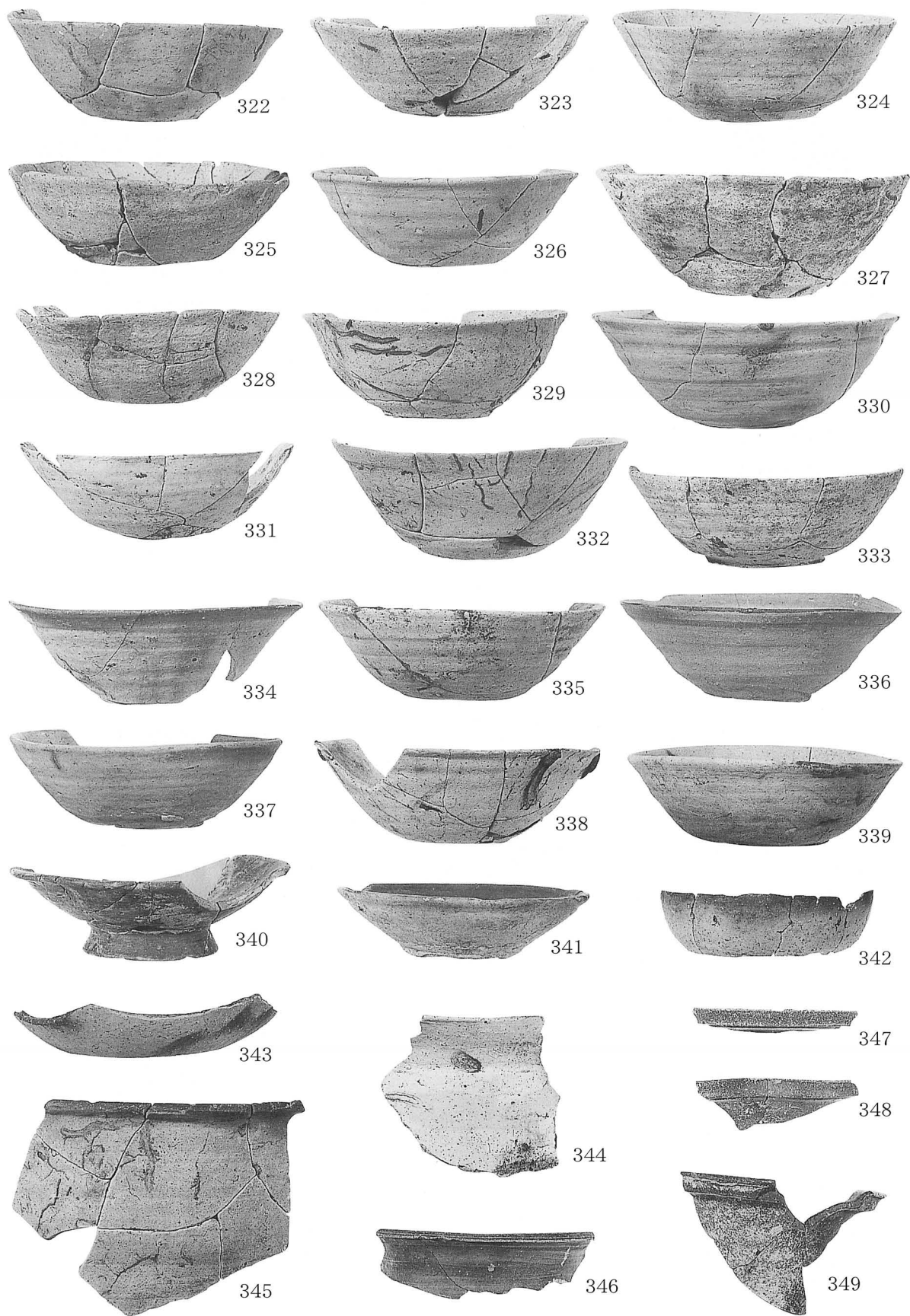


291

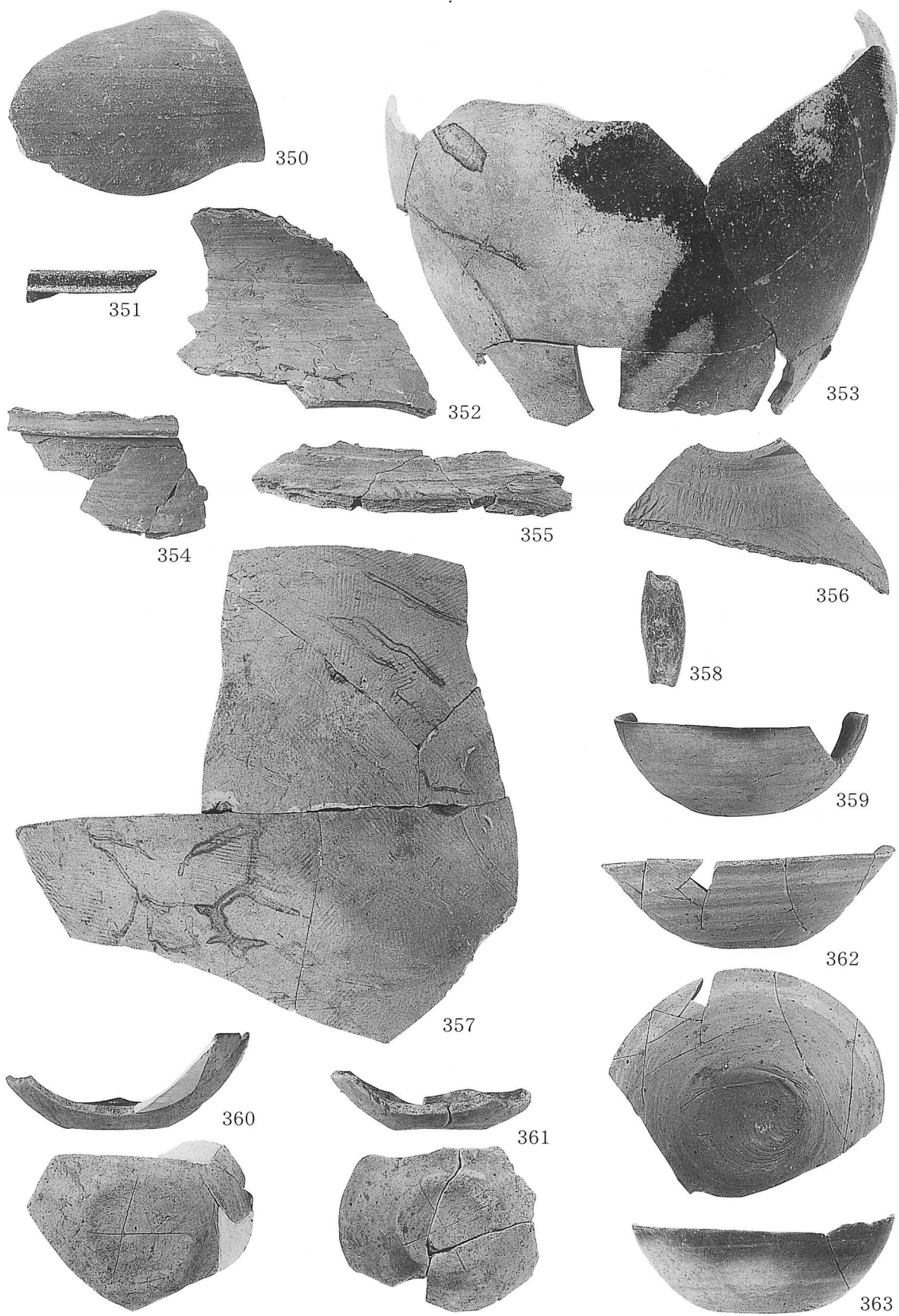
写真図版89 出土遺物(23)



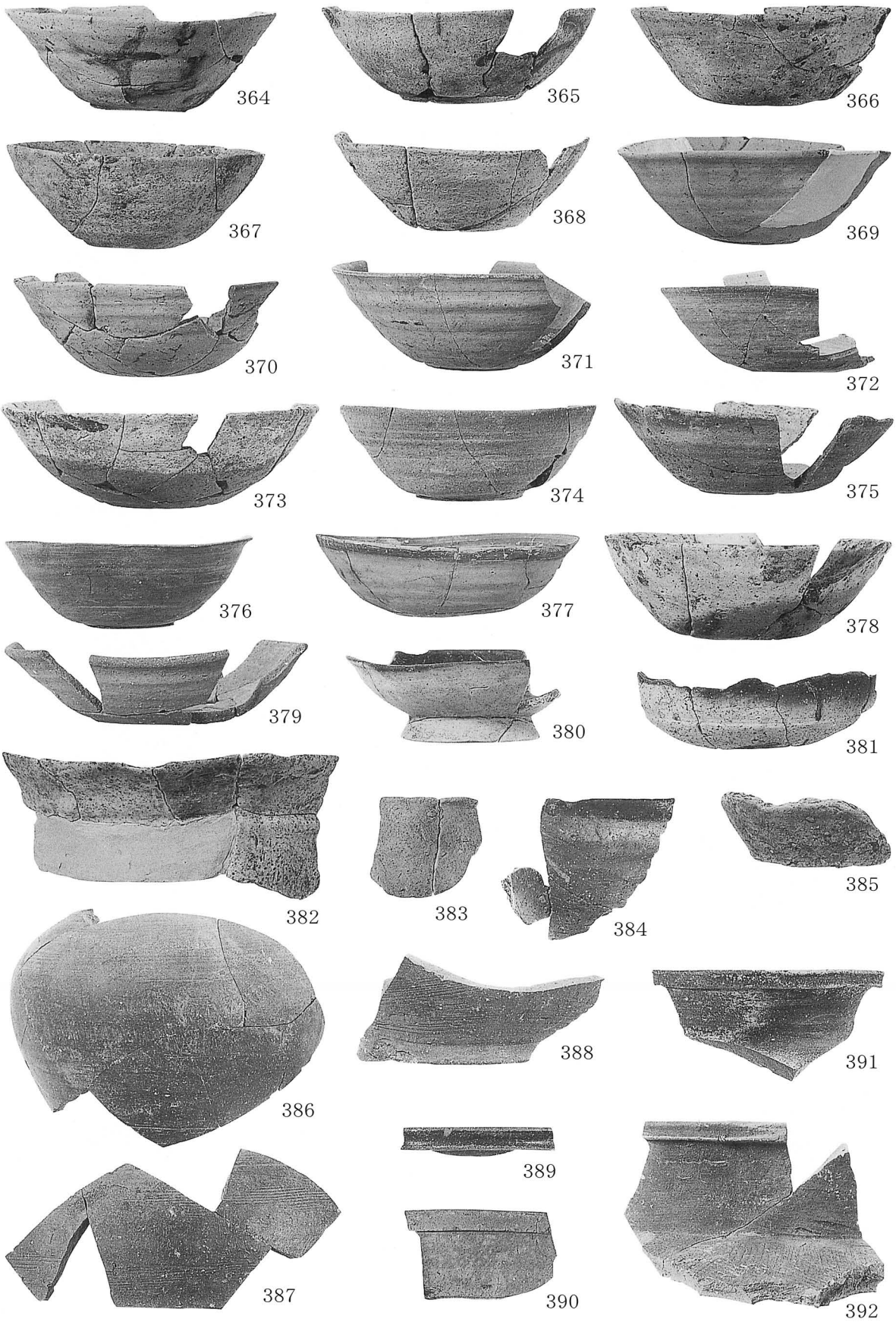
写真図版90 出土遺物(24)



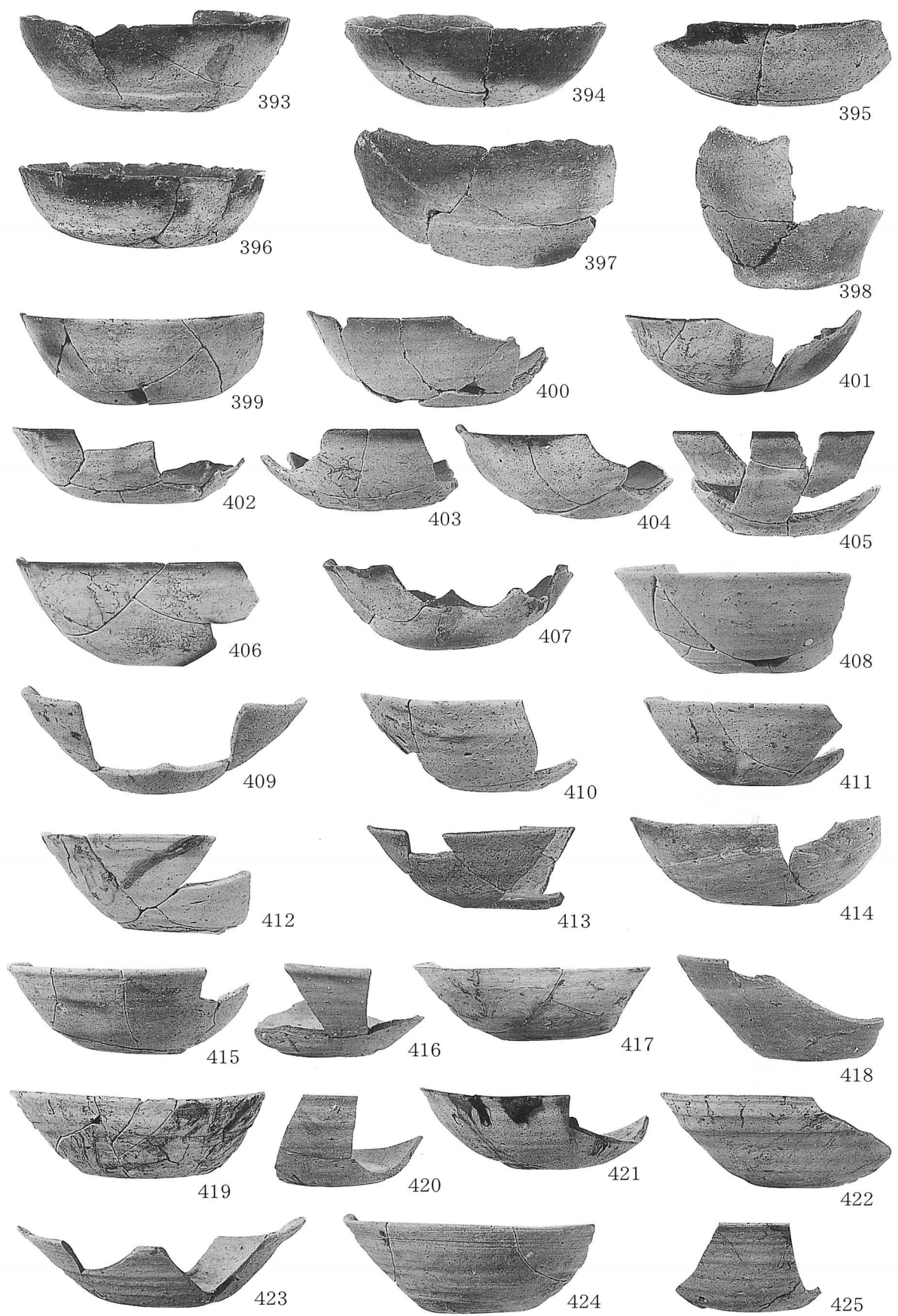
写真図版91 出土遺物(25)



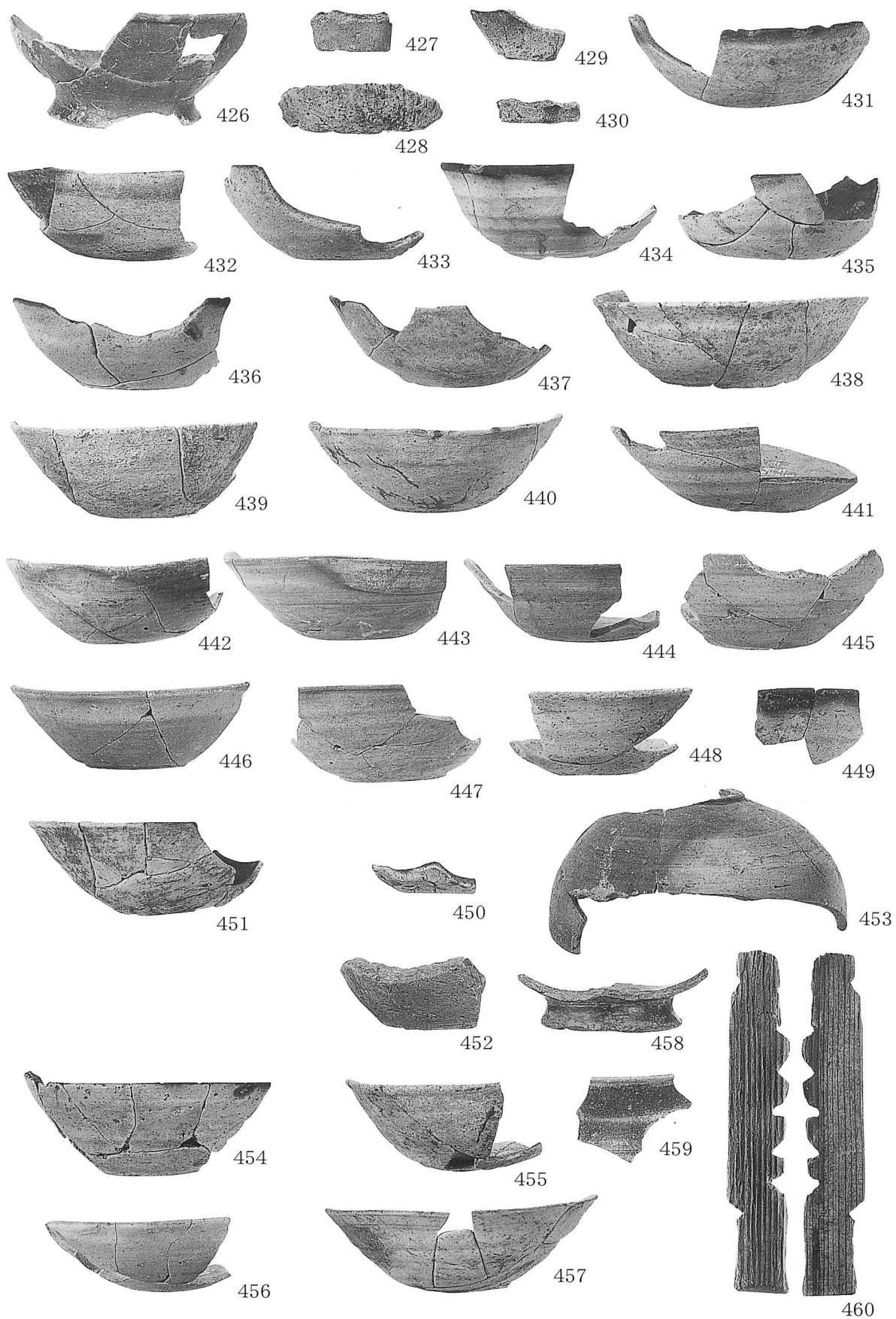
写真図版92 出土遺物(26)



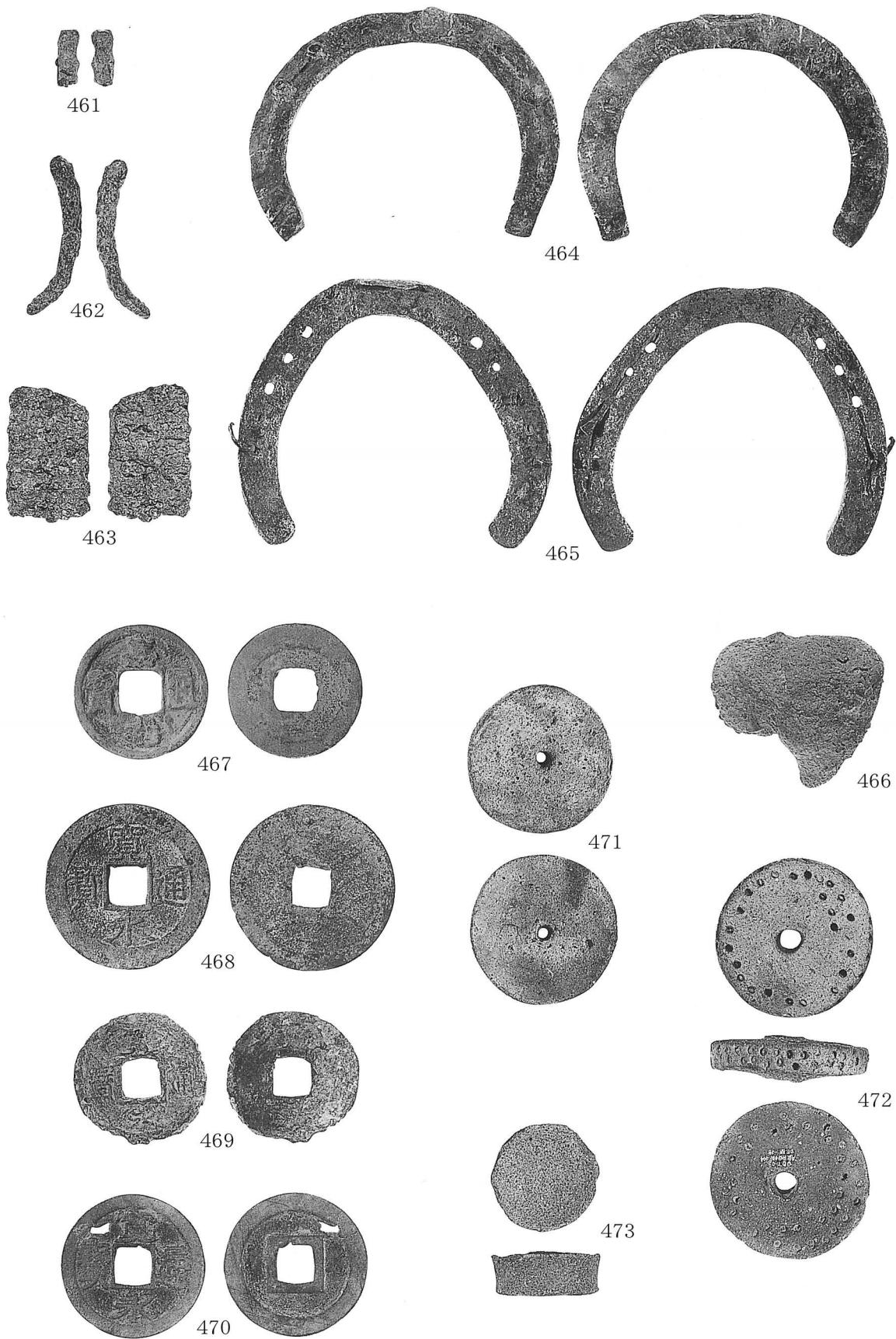
写真図版93 出土遺物(27)



写真図版94 出土遺物(28)



写真図版95 出土遺物(29)



写真図版96 出土遺物(30)



474



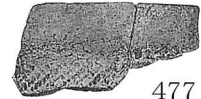
476



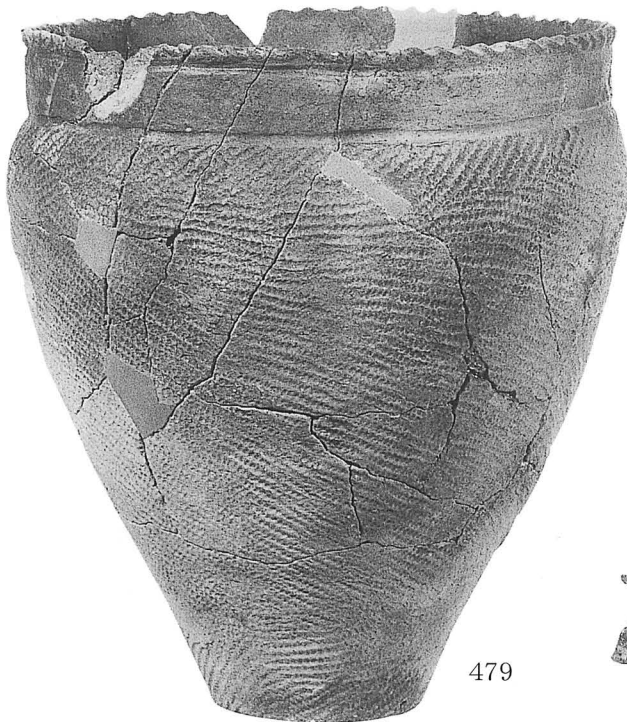
478



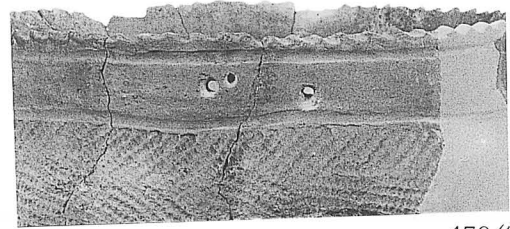
475



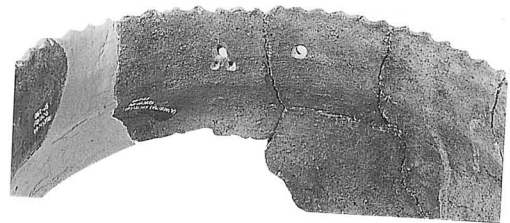
477



479



479(穿孔・表)



479(穿孔・裏)

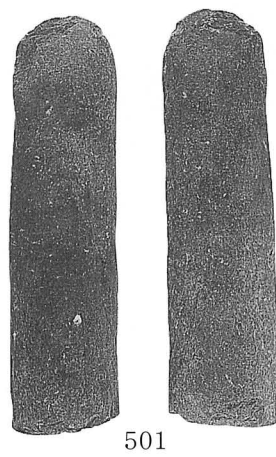
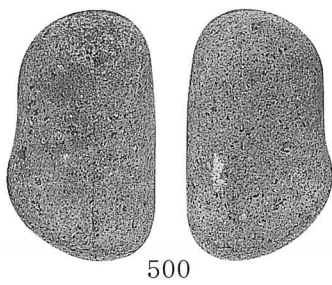
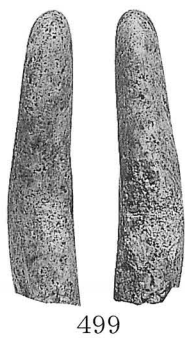
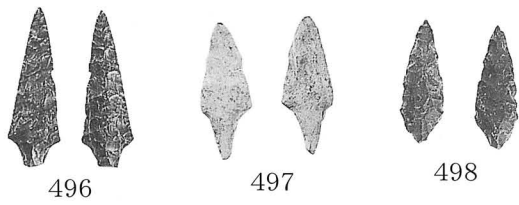
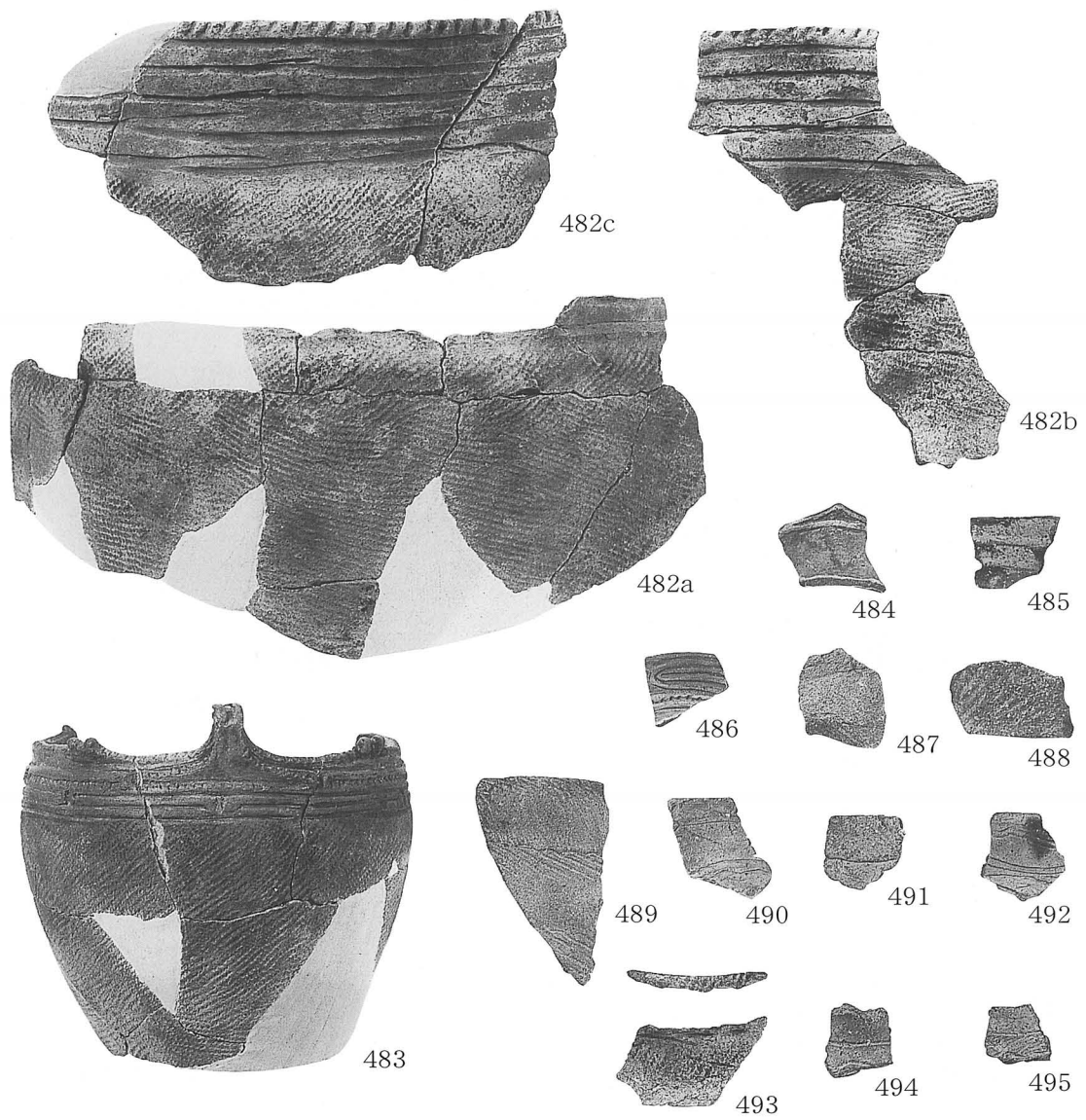


481

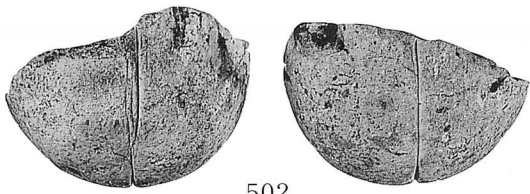


480

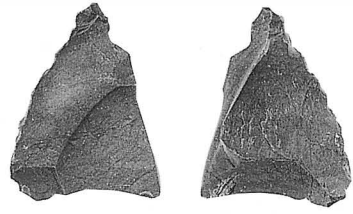
写真図版97 出土遺物(31)



写真図版98 出土遺物(32)



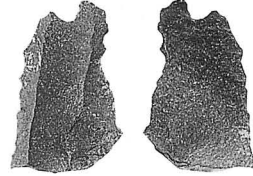
502



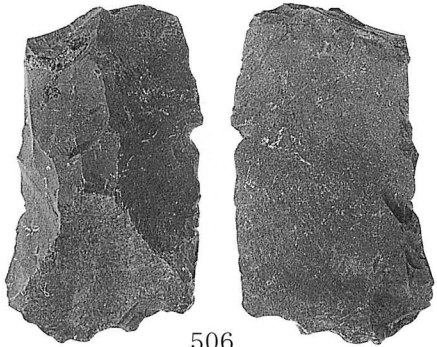
504



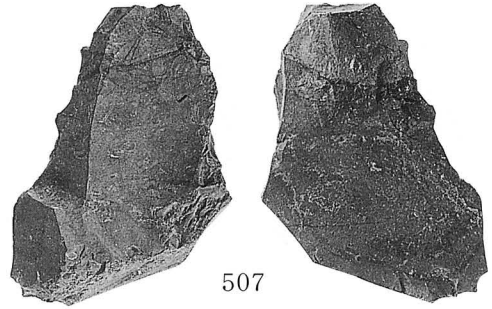
503



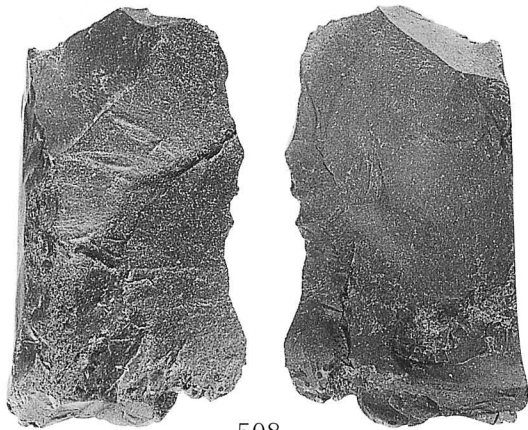
505



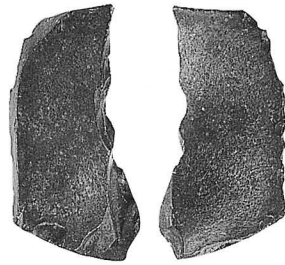
506



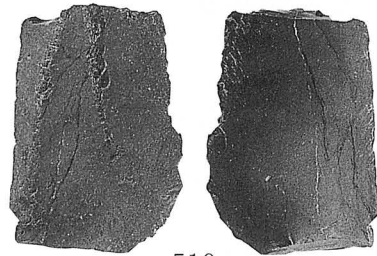
507



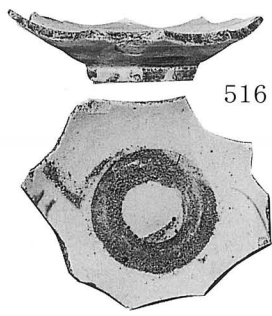
508



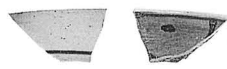
509



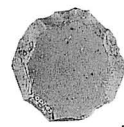
510



516



517



521



522



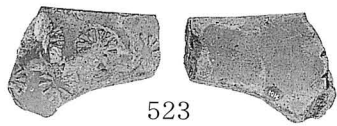
518



520



519



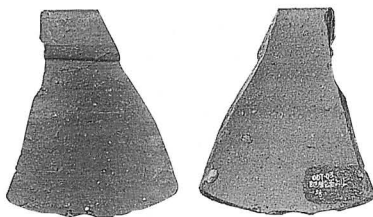
523



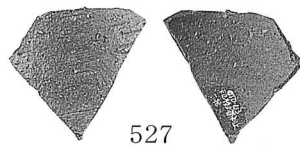
524



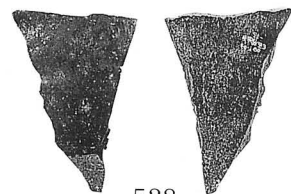
525



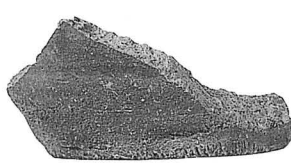
526



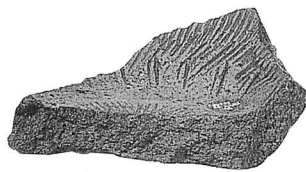
527



528



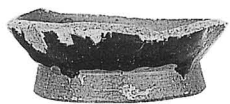
529



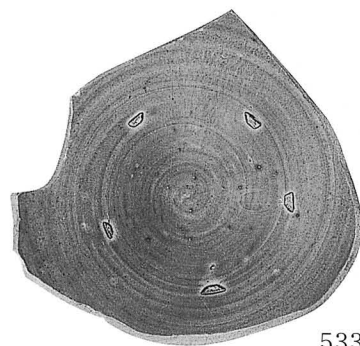
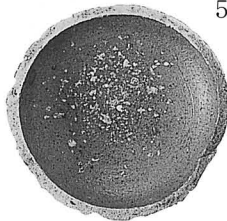
530



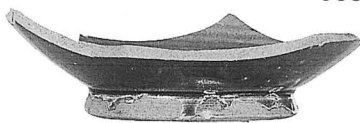
531



532



533



534



写真図版100 出土遺物(34)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	だいたろういせきだいごじゅういちじはっくつちょうさほうこくしょ							
書 名	台太郎遺跡第51次発掘調査報告書							
副 書 名	盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第468集							
編 著 者 名	中村絵美・石崎高臣							
編 集 機 関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL 019-638-9001							
発 行 年 月 日	西暦2005年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
だいたろういせき 台太郎遺跡	いわてけん もりあかしむかい 岩手県盛岡市向 なかの あざ ようかいちば 中野字八日市場 8-4ほか	03201	LE16 -2269	39度 40分 56秒	141度 08分 28秒	2003.04.11 ～ 2003.11.10	6,616m ²	盛岡南新 都市土地 区画事業 に伴う緊 急発掘調 査
				世界測地系				
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
台太郎遺跡	集落跡	奈良～ 平安時代 古代以降	竪穴住居跡 22棟 住居状遺構 3棟 土坑 65基 溝 29条 井戸跡 1基 焼土遺構 1基	土師器・須恵器 鉄製品・土製品		R A580より 関東系土師器、 R A586より 朱塗りの壺 出土		
		縄文時代 晩期	住居跡 4棟 住居状遺構 2棟	土器・石器 石製品				

平成16年度 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所 長	相 原 康 二	副 所 長	平 野 允 苗
〔管理課〕			
課 長	葦 澤 正 吾	嘱 託	高 橋 清 助
課長補佐	小田島 宏 道	〃	常 泉 治 美
主任主査	中 嶋 賢 一	〃	伊 藤 滋 子
主 事	猿 橋 幸 子		
〔調査第一課〕			
課 長	三 浦 謙 一	〔調査第二課〕	課 長
課長補佐	高 橋 義 介	主幹兼課長補佐	佐々木 清 文
文化財専門員	金 子 昭 彦	文化財専門員	中 川 重 紀
文化財調査員	水 上 明 博		小山内 透
〃	阿 部 勝 則		(県教委研修派遣)
〃	杉 沢 昭太郎		金 子 佐知子
	(柳之御所支援派遣)		濱 田 宏
〃	溜 浩二郎		羽 柴 直 人
〃	村 上 拓	文化財調査員	吉 田 充
〃	戸 根 貴 之		阿 部 徳 幸
〃	八 木 勝 枝		早 坂 淳
〃	丸 山 浩 治		小 松 則 也
〃	米 田 寛		窓 岩 伸 吾
〃	北 田 勲		亀 澤 盛 行
〃	島 原 弘 征		鈴 木 裕 明
〃	村 田 淳		新 妻 伸 也
期限付調査員	石 崎 高 臣		林 勲
〃	立 花 裕		星 雅 之
〃	菅 野 梢		西 澤 正 晴
〃	新井田 えり子		丸 山 直 美
			村 木 敬
			福 島 正 和
			北 村 忠 昭
			須 原 拓
			川 又 晋
			中 村 絵 美
		期限付職員	小 針 大 志
			(6月退職)

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第468集

台太郎遺跡第51次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成17年 2月22日

発 行 平成17年 2月28日

発 行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
TEL 019(638)9001
FAX 019(638)8563

印 刷 株式会社 富士屋印刷所
〒020-0841 盛岡市羽場13-30-10
電話 (019)637-6391

© (財)岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター 2005

